

礼文島幌泊段丘の遺跡群

東上泊・上泊3・上泊4遺跡

—道々礼文島線特改1理工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

昭和59年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



上泊3遺跡 廃棄場跡出土の縄文時代中期の土器

礼文島幌泊段丘の遺跡群

東上泊・上泊3・上泊4遺跡

—道々礼文島線特改1種工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書一

昭和59年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

例 言

- 1 この報告書は、道々礼文島線特改工事用地内埋蔵文化財包蔵地の発掘調査に関するものである。
- 2 本書の作成は、種市幸生、佐藤和雄、三浦正人、森岡健治があたり、編集は種市幸生が担当した。執筆の分担は、文章の終わりに明記することにした。図の作成は、主として三國谷雅子、谷島由貴、木下昭仁、波川静枝、菅恵利子、新庄素子があたった。
- 3 動物遺存体の鑑定は、金子浩昌、石質の鑑定は、赤松守雄に依頼した。
- 4 発掘調査および報告書の作成にあたっては下記の諸氏、諸機関の御協力をいただいた。
赤田時雄、キエ御夫婦、末吉敏章、大山明、柳谷ハル、宮本律子、佐藤善作、西谷栄治、文化庁、礼文町教育委員会、礼文高校、礼文空港事務所、宗谷支庁教育局、赤岩自治会、船泊漁協、上泊小学校、北野建設、上野秀一、氏家敏文、大沼忠春、内山真澄、久保泰、齊藤邦典、齊藤傑、鈴木邦輝、瀬川拓郎、其田良雄、高橋豊彦、田原良信、千代塙、藤島一巳、松崎水穂、森広樹（順不同）
- 5 本文・図表中では以下の略号を使用した。

▷ 遺構図の略号等について

H：住居跡	H P：住居跡内小ピット	H F：住居跡内の焼土（炉）	F：焼土	
S：屋外石組み炉	P：土壤	Z：集疊	T.P.：テストピット	K：攪乱
●：土器片	☰：一括土器	△：石器	▲：フレイク	○：骨片
— — — — — : H F の範囲		— — — — — : 炭化物範囲		

▷ 遺構平面図にある遺物番号と遺物の実測図・拓本・写真的番号は統一されており、一つの遺構の同一番号は同じ個体である。

▷ 掲載土器一覧表中のO→Iは、貫通孔・突瘤の外から内へ突いたもの、I→Oは、内から外へ突いたものの略号である。

6 図版について

図版は、原則として下記の縮尺で作成してある。

- 遺構図： $\frac{1}{4}$ (ただし、住居跡、廐窓跡、礎・石縫集中区は $\frac{1}{10}$) 土器実測図： $\frac{1}{4}$
- 土器拓影図： $\frac{1}{4}$ 石器実測図： $\frac{1}{4}$ (ただし大型の石器は $\frac{1}{4}$) 骨製品： $\frac{1}{4}$ 土製品： $\frac{1}{4}$
- 土器実測図の中心線は、遺物を回転させず実測したものは実線、90度・180度回転させたものは1点鎖線、任意に回転させたものは点線にして区別した。
- 平面図・土層図に使われている高さの単位はメートルで、標高を示している。

7 写真図版について

写真図版中の遺物写真的縮尺は不統一である。

8 岩石名の略号について

Aga. : メノウ	Amb. : 琥珀	And. : 安山岩
Che. : チャート	Cong. : 磺岩	Dia. Mud. : 珪藻質泥岩
Gr. Mud. : 緑色泥岩	Gr. Sch. : 緑色片岩	
Obs. : 黒曜石	Pum. : 軽石	Sa. : 砂岩
Ser. : 鈍紋岩	Sha. : 貝岩	Ta. : 滑岩

目 次

例 言	
I 調査の概要	
1 調査要項	5
2 調査体制	5
3 調査のあらまし	5
II 遺跡の位置と環境	
1 島の概況	7
2 島民の生活	10
写真図版	15
III 発掘調査の方法と遺物の分類	
1 発掘調査の方法	17
2 遺物の分類	18
IV 東上泊遺跡	
1 まえがき	23
2 A地区出土の造構と遺物	25
3 B地区出土の造構と遺物	41
4 小括	57
写真図版	65
V 上泊 3 遺跡	
1 まえがき	75
2 造構	75
3 包含層出土の遺物	210
4 小括	250
写真図版	255
VI 上泊 4 遺跡	
1 まえがき	361
2 造構	361
3 包含層出土の遺物	377
4 小括	384
写真図版	389
VII 成果と問題点	
1 まえがき	401

2	上泊3遺跡の縄文時代の土器について	402
3	上泊3遺跡出土の石錐について	404
4	上泊3遺跡出土の石刃状剝片について	408
5	道北地方の統縄文時代初頭の土器について	413

引用・参考文献

- I 調査の概要
- II 遺跡の位置と環境
- III 発掘調査の方法と遺物の整理

I 調査の概要

1 調査要項

事業名：礼文島線特改1種工事用地内埋蔵文化財発掘調査
事業委託者：稚内土木現業所
事業受託者：㈱北海道埋蔵文化財センター
遺跡名および所在地：東上泊遺跡 礼文郡礼文町船泊村ウェントマリ258番地
上泊3遺跡 礼文郡礼文町船泊村ヲチカフナイ107-1, 107-2他
上泊4遺跡 礼文郡礼文町船泊村ヲチカフナイ596, 599-1他
調査面積：東上泊遺跡 312m² 上泊3遺跡 2,610m² 上泊4遺跡 333m²
合計 3,255m²
調査期間：昭和59年5月12日～昭和60年3月30日

2 調査体制

㈱北海道埋蔵文化財センター 理事長	中村龍一
専務理事	山本慎一
常務理事	藤本英夫
業務部長	横田直成
調査部長	竹田輝雄
調査第三班長	種市幸生（発掘担当者）
文化財保護主事	高橋和樹（調査第三班）
同	佐藤和雄（同）
同	三浦正人（同）
同	佐川俊一（同）
嘱託	森岡健治（同）
同	寺崎康史（同）
同	和泉田毅（調査第四班）

3 調査のあらまし

この調査は、北海道稚内土木現業所（以下土現と呼称する）による道々礼文島線特改1種工事に伴って実施されたものである。昭和58年4月に実施した北海道教育委員会（以下道教委と呼称する）による範囲確認調査の結果、工事用地内に3,255m²の埋蔵文化財包蔵地が確認された。その調査結果にもとづき、土現と道教委が協議を行なったが工事計画の変更が困難なことから、事前に発掘調査が行なわれることになった。

東上泊、上泊3、上泊4遺跡は、後述するように幌泊段丘の平坦部に広がるが工事によって、遺跡に影響を及ぼす範囲すなわち発掘調査の範囲は段丘の先端部にあたるところである(図II-2)。3つの遺跡は、縄文時代中期と統縄文時代前半の時期に形成されたものであるが、各遺跡で遺構、遺物の濃淡は異なる。各遺跡の概要は次の通りである。

東上泊遺跡：浅い沢によって2つの地点にわけられるが圧倒的に統縄文時代前半の遺物が出土する。縄文時代中期の遺物はわずか3点である。遺構は、A地区で土壙が1基、焼土が4か所、B地区では土壙が2基、集落、焼土が各1か所検出された。焼土は、すべて石組みあるいは掘り込みをもっていない。住居跡は、今回の調査区域では検出されなかった。

上泊3遺跡：3つの遺跡のうちで平坦部の奥行きと幅が広いため、調査面積がもっとも大きかった遺跡である。調査区は、台地の先端部よりやや山側に寄っている。住居跡は、台地の縁辺部に沿って分布するようである。調査区の中央部では住居跡は検出されなかった。

遺構の内訳は、住居跡5軒、土壙14基、石組み炉1基、焼土57カ所、廐棄場跡1か所、礫・石錐集中区1か所である。これらの遺構は、いずれも伴出土器から縄文時代中期に属する。出土遺物は、縄文時代中期の土器が大半を占める。ただし、H-1(縄文時代中期の竪穴)のくぼみを利用した統縄文時代前半の住居跡が1軒検出され、その時代の完形土器等が出土しており、住居跡の周辺からも土器が出土している。さらに廐棄場跡の周辺でも統縄文土器片が分布する。しかしこれらの遺物点数は縄文時代中期のそれと比較するときわめて少ない。なお、廐棄場跡周辺で出土した統縄文式土器に伴う遺構は検出されなかった。

本遺跡を特徴づけるものとしては、H-5の東壁に接して検出された廐棄場跡がある。この廐棄場跡から多量の土器・石器・フレイク・動物遺存体等が出土した。特に土器は、復元できたものの80%は廐棄場跡から出土したものである。復元された土器は、約80個体で円筒土器上層式土器・天神山式土器に相当する土器がほぼ半々の割合である。石器は、石鋸先・石錐など他の器種に比較して多く見られる。ただ、円筒上層式土器に伴う特徴的な石器(擦石・石皿など)が極端に少ない。動物遺存体は、キツネ・海獣類・カラ・ニシン・サケなどが出土している。骨は火を受け白変しているのがほとんどである。

竪穴住居跡内からの出土遺物が少ないと、さらに調査区中央部の空間でも遺物は極端に少ないと、廐棄場跡の出土遺物は、本遺跡出土の遺物总数の約90%を占める。この事実は、竪穴住居跡と廐棄場跡との関連性を強く示唆するものである。

上泊4遺跡：当遺跡の調査面積は、東上泊遺跡とはほとんど変わらないにもかかわらず、住居跡1軒、石組み炉1基が検出されている。住居跡・石組み炉は、いずれも統縄文時代前半に属するものである。住居跡は1軒しか検出されなかつたが台地の先端部には住居跡がまだ分布するのかもしれない。遺物は、主に住居跡から出土した土器、石器である。骨角器・動物遺存体・植物遺存体は出土していない。土器は、復元できた資料はわずかS-1出土の深鉢のみである。石器は、剝片石器が砾石器に較べて相対的に多い。前者は、特にナイフが多く出土する。後者に関していえば、石錐が1点も出土していない。

(種市 幸生)

II 遺跡の位置と環境

1 島の概況

礼文島は、日本最北端に位置した周囲72kmの孤島で樽太に最も近く、四面海に囲まれた“花の島”として知られている。この島は、新生代第三紀あるいはそれ以前に海底が隆起して出来たものといわれている。島内の至るところに安山岩、玄武岩の柱状・板状の節理がみられるとともに、岩に高山植物が生い茂り、独特の景観を与えている。島の中央部に礼文岳(490m)があり、その北方15kmのところに島内最大の船泊湾がある。湾の中央部には、標高10m前後の砂丘が二列海岸線に平行して走る。さらに、湾の東寄りに島内唯一の湖、久種湖がある。この湖は、大備川が砂丘によってせきとめられて形成されたという(瀬川 1962)。

西海岸の海岸線には、断崖、絶壁がつらなり、その上を小河川が海となって海に流れ落ちているところが多い。東海岸で見られるような河川は、鉄府付近を除いては発達していない。そのような立地条件のためか、西海岸では遺跡の分布はきわめて薄い(図II-3)。それに対して、東海岸は10~20m前後の低位段丘と、入江、ならびに小河川が発達し、当時の人々が生活するうえで好適な条件を備えている。ただ、冬に流氷が押し寄せてきた場合には、東海岸には流氷が接岸する。西海岸には、接岸せず、北岸の船泊湾にはまれにしか流氷は接近しないとのことがある。

礼文島の天候は、島が日本海側に位置するため、対馬海流の影響を強く受け、夏冬とも極端な暑さや寒さになることはない。そして「島の春は、比較的好天の日が多い。降水量も少なく、気温は急上昇する。しかし、五月中旬からオホーツク海高気圧の影響で天候は不順となり、曇天や霧雨の日が多くなる。六月は霧の発生が年間通じて最も多い。こうした影響で、夏の日照時間は春、秋よりいくらか少なく、そのまま秋になる」(乳井 1984)といわれている。しかし、このような気象状況は、香深井以南にはあてはまるが、上泊地域に限っていうならば必ずしもそのようにはいえない。というのは、礼文岳を境にして、春から夏にかけて風向で気象の変化が認められるからである。ナンセイノカゼが吹くと、香深井地域で空が曇っていたり、霧雨が降っていたとしても内路から上泊にかけては晴れているケースが多い。実際、調査期間の5月中旬から6月初旬にかけては、ヤマセ(海から山に向って吹く風)によって悩まされたが6月中旬からは8月初旬にかけては、ナンセイノカゼによって晴天日が続いた。ただ、7月20日から8月8日頃にかけては、礼文島は異常な暑さに見舞われた。今年の夏は、湿度が高く、寝苦しい夜に襲われたため、この期間だけは札幌の夏ときほど変わらないと感じたものである。

ところで、礼文島は、貞享2年(1685年)松前藩主の直領地として、宗谷場所の開設に伴なってその付属場所となる。明治2年(1869年)蝦夷地を北海道と改め、11国36郡に分けられ、北見国礼文郡の名称が確立した。明治21年(1888年)市町村制施行に伴い、内路川を境にして南側が香深村、北側が船泊村となる。そして、昭和34年(1959年)9月1日、両村が合併して

礼文町になり、一島一町となる。稚内から礼文島までの距離は、50kmで、稚内～船泊間のフェリに乗ると船泊港に2時間40分で到着する。船泊港から久種湖岸沿いの道路を車で行くと10分、徒歩ならば40分かかる上泊漁港に着くことができる。私達が調査した3か所の遺跡は、この漁港の前の道路より10mほど高い平坦な海岸段丘（標高13m前後）上にある。この段丘は、幌泊段丘と呼ばれる最下位の海岸段丘（瀬川 1962）で、その分布地は主に金田岬から内路にかけての地域にある。幌泊段丘の堆積物は、「金田岬では、基盤高度16m前後でその上に礫層があり、その厚さは約50cm、最大礫は約10m、礫種はスレートが多く、頁岩が少ない。これに対して、「上泊部落の堆積物は基盤高度8mの上に約2mの厚さに礫層をのせており、スレートが多く、最大10cm大で水平堆積層を」示すことである（瀬川 1962）。

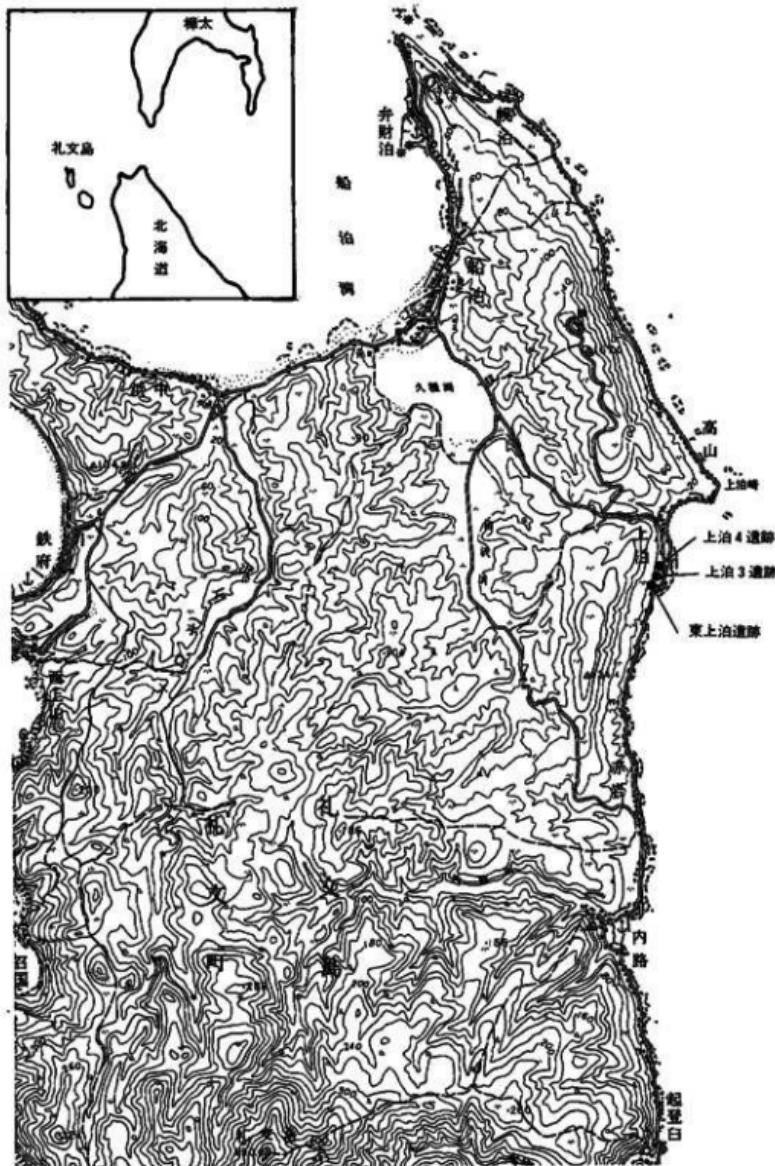
ところで、金田岬から内路にかけて平坦な段丘面が連続してみられるのは、基盤岩高度が低い所では礫層が厚く、その高い所では礫層が薄いことにあり、その段丘は侵食をうけた海食台であると推定される。

遺跡のある上泊地区は、幌泊段丘のなかでも平坦部の奥行きと幅の広いところである。この段丘面には、後方（西側）の小高い山から流れる小沢によって開析された舌状台地が発達する。そのなかで、上泊3遺跡は、南北90m東西100m規模の平坦面をもち、東西方向はゆるやかなスロープをなす。その両端にはV状の深い沢が入りこむ。この遺跡のように広い平坦部をもつ例は礼文島ではまれである。その南隣りに先端部が二股状にわかれた東西細長い舌状台地（横幅40m前後）上にある東上泊遺跡が、北隣りに2本の沢をはさんで斧状の平坦部の先端に上泊4遺跡がある。上泊4遺跡の北側は山の裾野にあたる。これらの遺跡の前方（東方）には、オホーツク海が広がり、南東方向には利尻富士が見える。比高10m前後の段丘崖面を降りていくとゴロタ石の発達した前浜に出る。段丘の崖下と汀線の間は30～40mで、崖面から20mほどの距離は二次堆積物と思われる茶褐色土がほぼ平らに堆積する。この空間は、現在道路（幅6m）ないし畑、宅地として利用されている。この低平地の端から汀線の間はゴロタ石等が分布する。

ところで、この地帯から北へ数10m程行くと上泊漁港に突きあたる。ここまで海岸線は直線的であるが、これより燈台のある上泊崎へぐだると小規模な入江が広がる。湾奥部に低平地が発達し、その後方の段丘上には上泊1、上泊2遺跡が分布する（図II-3参照）。時期は、前者が繩文（中期、後期）、統繩文（鈴谷式）、オホーツク、擦文時代で、後者は統繩文時代（鈴谷式）のものである。

一方、東上泊遺跡から南へ向うと弧状をなした海岸線が続くが、赤岩付近になるとまたやや直線的な海岸線をなし、内路漁港につらなる。内路漁港は、U字状に奥まった天然の湾入り部を利用してつくられた港で、湾には内路川が注ぐ。その左岸の段丘には、統繩文、オホーツク時代の内路遺跡がある。赤岩付近の海岸段丘には、赤岩1（統繩文・鈴谷式）、赤岩2（繩文後期・船泊上層式、統繩文・鈴谷式）、赤岩3遺跡（オホーツク）が沢をはさんで分布する（図II-3）。

ところで、今まで述べた遺跡のある幌泊段丘上には、赤土とよばれるボドゾル土が広く分布する。この土は、針葉樹林地帯で長い間かかって出来上がった土で、粘りが強く、しまってい



この図は国土地理院発行5万分の1地形図「礼文島北部」を複製したものである。

図II-1 遺跡位置図

て水や空気の通りが悪い。そのため、表面近くは粗い腐植土が薄く広がり、その下は酸度の強い漂白土をなし、さらにその下は漂白層から溶けた褐色の鉄サビ色をした細かい粒がつまつた固い層となっている。このような土壤条件のため、黒ボクの発達が弱く、クマイザサが段丘上の植生分布の大半を占めている。私達が、遺跡の調査を開始した5月中は、台地上にクマイザサとイタドリが生い茂っていた。特に、クマイザサは地中に根がはっているため、剣先スコップがはじかれて、掘る作業に難行を強いられ、腹立々しい思いをさせられた。後方の小高い山には、背丈の低いクマイザサが一面に広がり、全体としてのっばらっとした印象を与えていたが、明治44年の船泊地区の山火事で全滅するまではタケカンバ、エゾ松、トド松の原生林があったとのことである。ただ、沢沿いのところどころには若木が育ちはじめている。

上泊3遺跡の両隣に流れる沢には、チシマフウロウ、キンポウゲ(6月)、ハマハコベ、コウリンタンボポ、チシママンテマ、センゲイハギ、シラネニンジン、ハマボウフウ(7月)、が咲いていた。高山植物では、エゾカンゾウ、ハタザオソウなどを見かけることができた。

以上のように、遺跡は、平坦で奥行きの広い空間をもち、小沢が発達し、さらにその前方に岩礁性の前浜があり、気象条件が他の地域より安定しているなどの良好な立地条件と環境に恵まれている。もちろん、気象条件等が今日のそれと全く同じではないが、当地域は古代人が生活するうえでも良好の場所であったと思われる。

2 島民の生活

礼文町の歴史は、漁業の発展とともに歩んできたといってよい。礼文町の産業のなかで漁業の占める割合は、きわめて大きいものがある。第一次産業(就業者1,910人)のうち、1,905人が水産業、残り5人が農林業である。漁港は、第1種が10港、第4種が2港、計12港をもち漁家戸数726、漁船保有状況は無動力371.5トン未満1,558、10トン未満22、20トン未満19、計1,970隻である。

57年度の水揚げ高をみてみると、タラ、ホッケ、カレイ、イカ、タコ、ウニ、コンブが2億円以上の水揚げで、そのうちウニが8億5千万円と飛び抜けて高い。それに対して、ニシンはたった5百万円程度の水揚げしかしない(礼文町町勢要覧、1984)。このように、現在の魚種別構成のなかではニシンの占める割合はきわめて低いが、ニシンが豊富にとれていた時代(安政6年から昭和4年、昭和19年から同22年まで)には、タラ、ホッケ、ウニ、アワビなどには見向きもしなかったらしい。それが、昭和23年のニシン漁獲皆無以降、ニシン漁は衰退の一途をたどるなかで、漁師達はタラ、ホッケ、ウニ、アワビなどに目を向けざるをえなくなっていたのである。こうしてみると、ニシンに対する愛着と執着心をふり切るかたちで、はじめて現在の基礎を打ち固めたものといえる。

礼文島近海の魚は、ニシン、ホッケ、タラ、ソイなどが生息している。ニシンは、過去においては礼文島近海が主要な回遊コースと同時に産卵場のひとつでもあった。ホッケは、主に北海道周辺の海域に分布するが、特に日本海側に多い。礼文島近海は、ホッケの産卵場の主要なものひとつで、その産卵期は10月初旬から11月初旬までという。秋から冬の産卵期には、浅

至幌泊

N

至船泊

上泊崎



上泊

上泊4遺跡

上泊3遺跡

東上泊遺跡

上泊

至香深

0

500M

この図は国土地理院発行2万5千分の1地形図「船泊」「礼文岳」を2倍複製し、加筆したものである。

図II-2 遺跡周辺地形図

場に寄って産卵するがそれ以外の時期は水深150m～200mの深場に棲息する。産卵床は、普通岸から70～450mほどの距離で水深6～30mの岩礁地帯あるいはゴロク石地帯である。マダラは、寒流系の底性魚で、北海道近海での産卵期は冬期の11月から3月でこの時期に都をなして浅場に寄り、夏期は深場に移るという。ソイ類は、根付きの魚で、ホッケ、マダラと異なって大きな移動は行なわない。カレイ類は、砂泥性の底性魚で沿岸に生息する。コンブは、岩礁地帯に分布する。一年生コンブの葉に胞子ができると成長は一時おとろえ、岩にしがみついていた根がゆるみ、波に流されたりし、そのなかで生き残ったものは冬から翌春にかけ大いに伸び、2、3年生コンブになる。漁の対象となるのは、この2年生や3年生である。ウニは、礼文島沿岸ではエゾバフンウニとキタムラサキウニが生息する。

では、漁師の生活が、どういうものかを上泊在住の漁師の生活を例にとって簡単に述べてみたい。まず、1月から3月にかけては赤カレイ、4月になると春ボッケ、5、6月はマスソイ、7月一杯はウニ、7月下旬から8月上旬にかけてコンブ、9月はサケ、ホッケ、10月から12月にかけてはタラ、10月から翌年1月はタコというように一年を通じて漁がある。ただ、今年は1月中旬に流水が上泊漁港に接岸したためカレイ漁は出来なかったとのことである。

漁師達は、ホッケ、タラ、カレイなどの魚は3トン前後の木船で沖に出て刺網によってとる。ウニ、コンブは、イソ舟を操って海辺で採捕する。ウニは海メガネとヤスを用い、コンブはネジリあるいはマッカという道具でとる。タコは、空釣延縄で釣上げる。木船は、今は機械などの発達で1人で操業できるようになっているが、過去においては船頭1、機関長1、漁撈長1^{註1}計3人を必要としたらしい。

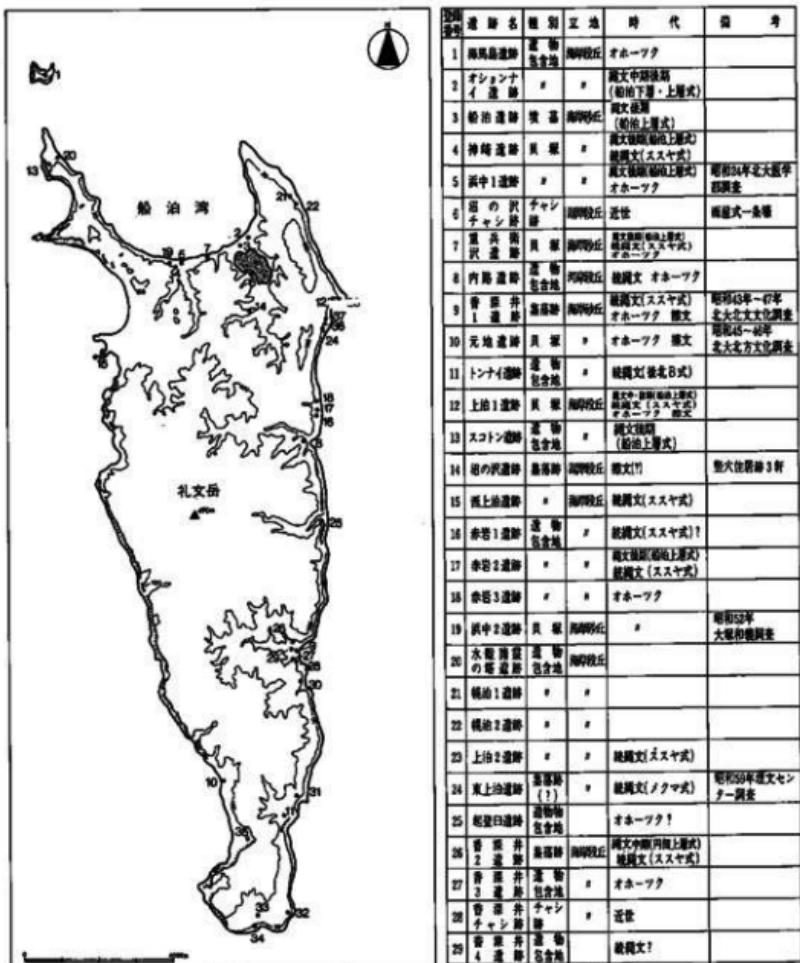
最後に、島民の生活を考えるうえでは、流水は無視できない。流水が昨年に引き続き、東海岸に接近したことによって、香深港が流水に覆われたためフェリーが入港できず、生活物資が供給されなくなったこと、さらに流水が離岸する際にコンブだけではなく、ウニやアワビの浅海資源を根こそぎ破壊させてしまうなどの被害を生みだしている。^{註2}このように、流水が接岸すると現在においても島民の冬の生活に大きな影響を与えていていることから考えると、繩文時代あるいは続繩文時代において礼文島、利尻島周辺が流水の着岸・離岸地帯に含まれていたかどうかは大きな問題となろう。^{註3}

(種市 幸生)

註1 上泊在住の赤田崎雄氏の教示による。

註2 過去においては、昭和14年に大流水が着岸し、島の海産物に大被害を与えていた。昭和45年、昭和53年、昭和59年に東海岸一帯に流水が接岸している。

註3 例えば、オホーツク文化の成立と、地域性を考える場合に、礼文島、利尻島周辺が當時流水の着岸・離岸地帯に含まれていたのかどうかが論議になっている。



(北海道教育委員会埋蔵文化財包蔵地分布図)
(を元に作図したものである。)

図II-3 礼文島遺跡分布図



1. 遺跡遠景



2. 遺跡遠景（調査前）



3. 遺跡遠景（調査後）



1. 調査前風景（北西山上より）



2. 調査後風景（北西山上より）



3. 北西山上より船泊・海馬島方面を眺む

III 発掘調査の方法と遺物の分類

1 発掘調査の方法と基本層序

東上泊・上泊3・上泊4遺跡の3つの遺跡は、各々異なる小台地上にあるが、発掘調査にあたっては、道路工事範囲をもとに、一連のグリッドを設定した。東上泊・上泊3遺跡を直線で通る道路建設の際の中心線を上泊4遺跡まで延長し、これから東西に10m間隔で基本線を引いた。これに直交する基本線は、上泊3遺跡にある中心線上の基準点から一点をとり出し、南北に10m間隔で設定した。こうしてできる10mごとの基本線に、西（山側）からA～D、南からアラビア数字を付し、10m×10mの区画（グリッド）の呼称を、南西杭で、A-1・A-2…のように示した。さらに各グリッドを、a～dの5m×5mのグリッドに4分割し、これを単位として調査を行った。図III-2で示した例の小グリッド名は、C-8-aということになる。

発掘を行ううえで、表土にある根が著しく発達している部分は、これを重機で剥離した。上泊3遺跡の7-8ラインの中央を通る道路は、包含層をほとんど削りとっているように見られたが、これも地山面まで土を除去し、遺構・遺物の確認を行った。また、上泊4遺跡にかぶせられていた碎石の盛土も、重機で除去した。

遺構の番号は、3つの遺跡ごとに、確認された順に付した。

炉・焼土・廐棄場跡・住居床面等からは、土壤サンプルを採取し、水洗。フローティング等を行い、動物遺存体・遺物を取り上げた。

3つの遺跡を通しての基本層序は次のとくである（図III-1）

I層：表土である。クマイザサ、イタドリ、草の根を含む黒色土の層をさす。その厚さは5cm前後である。東上泊遺跡では、2～3cm。上泊3遺跡では5～6cmと厚く、上泊4遺跡では1～2cmとうすい。ただ、上泊3遺跡では、12ライン以北で削平されている部分があり、分布しないところもある。この層からすでに遺物が出土する。

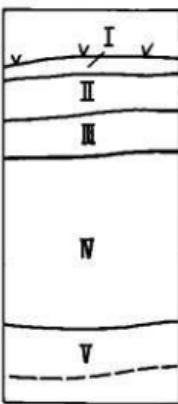
II層：やや黒味を帯びた褐色土である。遺物包含層で、その厚さは、10～15cmである。この層は、各遺跡で均質に分布する。

III層：暗黄褐色土。層厚は10cm前後で、各遺跡に平均して分布する。いわゆる漸移層で、東上泊遺跡B地区、上泊3遺跡の9ライン以南では、若干遺物を含んでいる。

IV層：地山で、黄褐色土である。無遺物層である。

V層：赤褐色土または明黄褐色・白色粘土混りの層である。褐色の鉄錆色をした細かい粒がつまり、固くしまっている。無遺物層である。「山石」といわれる角礫を含んでいるところもある。

以上が基本層序だが、地山までわずか30cm前後の厚さであり、耕



図III-1
基本層序模式図

作やニシン・コンブ乾場等後世の使用で、地山やその直前まで搅乱が及んでいる部分が处处にみられる。

遺構はすべて、III・IV層にあり、この層を整形・削出・掘り込みなどして營まれている。各遺構断面図の層序は、各図に付したが、その中のI～V層はすべてこの基本層序の層を示す。遺物一覧表中の層名も同様に、基本層序と、遺構ごとの層名を使用している。

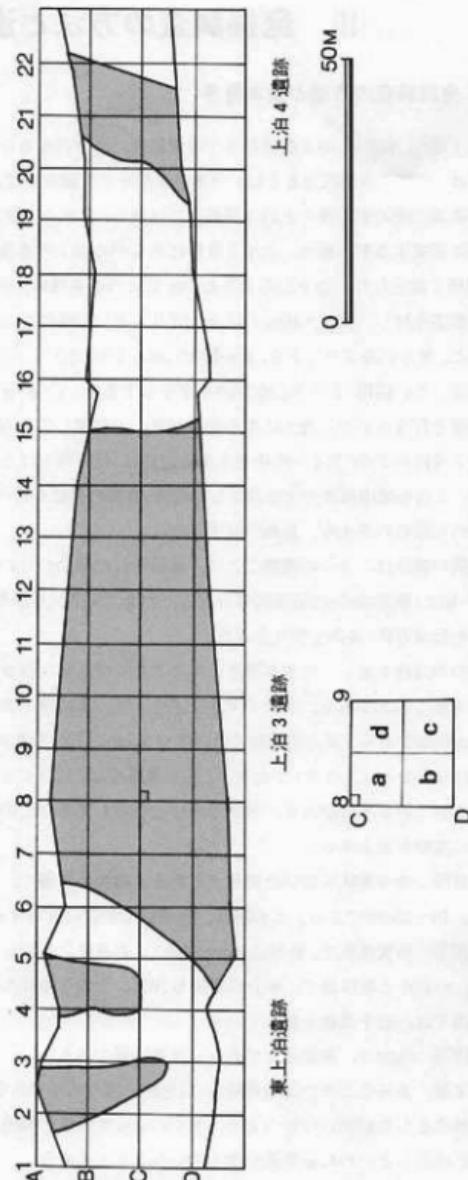
(三浦 正人)

2 遺物の分類

今回調査した各遺跡から出土した遺物には、縄文時代中期に属する土器、石器等、骨角器、動物遺存体、統縄文時代の土器、石器等、石製品などが出土している。ここでは、土器と石器のみを取りあげて分類を行なった。

土器の分類について

調査の結果、得られた土器は、縄文時代中期、統縄文時代初頭の土器というよう時代別ごとにわけることが可能だったので、それらの土器を古い時代順にI群、II群とわけることにした。



図III-2 グリッド設定図

I群

縄文時代に属する土器を本群とする。出土した土器の大部分は中期の土器である。文様・器形から A～C 類に分類できる。

A 類 押型文土器を中心としたもの。文様から 2 つに分けられる。

1：押型文が施されるもの。器形は深鉢を呈す。

2：撚糸文が施されるもの。器形は深鉢を呈す。

B 類 多くは口縁部に 4 コの突起をもち、口縁部・胴上半部に貼付文が施される。器形は円筒形の深鉢を呈す。文様から 3 つに分けられる。

1：口縁部肥厚帯に撚糸文・格条体压痕文が施されるもの。

2：胴部には繩文がなく、多くは刺突文・撚糸文が施されるもの。

3：地文に繩文をもち、貼付文が施されるもの。

C 類 口縁部に肥厚帯をもち、半截竹管を施文具とするもの。刺突文・押引き文・沈線文・繩文だけのものとがある。器形は深鉢形と円筒形がある。文様から 3 つに分けられる。

1：半截竹管による刺突文・押引き文が施されるもの。貼付文が施されるもの。

2：口縁部・胴部に沈線が施されるもの。

3：繩文のみが施されるもの。口縁部の形態から 2 つに細分される。

① 口縁に 4 コの突起をもち、口縁部肥厚帯の断面が三角形をなすもの。

② 口縁は平縁で、口縁部肥厚帯の幅が広く偏平なもの。

(佐藤 和雄)

II群

統繩文時代に属する土器を本群とする。本群は、口唇直下に等間隔にめぐる突瘤あるいは貫通孔をもつものが圧倒的に多い。この突瘤あるいは貫通孔をもつ土器群が、東上泊・上泊 3・上泊 4 跡出土土器の主体をなすものである。この土器群を他式の土器との共伴関係、器形、突瘤の内と外などによって 3 つのグループに大別することができる。土器群の大別の基準については VII 章を参照してほしい。

A 類 メクマ式土器に相当する土器群である。東北地方北部の二枚構式土器の影響を少なからず受けている。

B 類 香深井式土器と呼ばれている土器群である。斜里・網走地方では宇津内 IIa 式、道東では下田ノ沢 1 式土器の古いグループに相当するものである。

C 類 南川 III 式土器の影響を強く受けたと思われる土器群である。道東の下田ノ沢 1 式土器の新しいグループに相当する。

これらの土器群の他に、宇津内 IIb 式土器ならびに後北 A 式土器などが稀に出土する。

(種市 幸生)

石器等の分類について

今回の発掘調査によって得られた石器群は、東上泊・上泊4遺跡において縄文時代。上泊3遺跡では縄文時代中期を主体とする土器と伴出したものである。また、石器のほかにも多量の剥片と礫・石核・装身具類・骨角器・自然遺物が出土した。分類は、本来層位的に出土遺物をとらえることが適切であるが、発掘にあたって、坑の根を掘り出す際に包含層が損壊して遺物を層位的に検出することは出来なかった。したがって、形態を基本とした分類に依った。しかし、その中でも、造形など層序別に時期が区分できるものについては、それを優先したのち、器種別に分類した。石器等の遺物は、I. 剥片石器、II. 磕石器、III. 石核、IV. 装身具類の4項目に分けてから形態分類した。

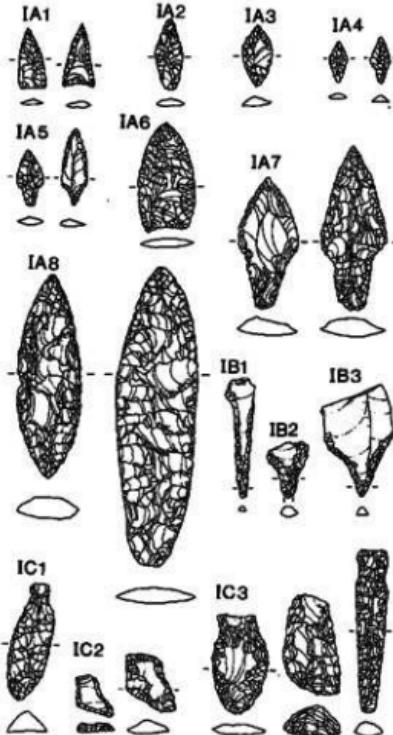
なお、器種名については、必ずしも機能を表現しているものではないが、適切な名称も見つけられず慣例に従った。また、実測図掲載遺物については、出土地点・層序・規格および石質を一覧表にまとめた。

(森岡 健治)

I 剥片石器

A ポイント

- 1 三角形を呈する石鉈
- 2 五角形を呈する石鉈
- 3 柳葉形を呈する石鉈
- 4 麻形を呈する石鉈
- 5 有茎鉈
- 6 無茎の石鉈先
- 7 有茎の石鉈先
- 8 石槍



B 石錐

- 1 棒状石錐
- 2 つまみ部を有した石錐
- 3 周辺加工を施した石錐

C ナイフ

- 1 石匙
- 2 切出刃状ナイフ
- 3 柄部を有するものか、先端部付近が緩くカーブして、刃部調整がされているもの

図III-3 石器分類図(1)

D スクレイパー

- 1 円形擦器
- 2 線長の擦器
- 3 削器

E 石刀状剥片⁸¹

- 1 使用痕のあるもの
- 2 無加工のもの

II 磨石器

A 石斧

- 1 打ち欠きの整形が見られるもの
- 2 姫刃状の石斧
- 3 片刃石斧
- 4 偏平な石斧
- 5 石のみ

B 敲石

- 1 円礫の周辺に敲打痕のあるもの
- 2 円礫の一端に敲打痕のあるもの

C 擦石

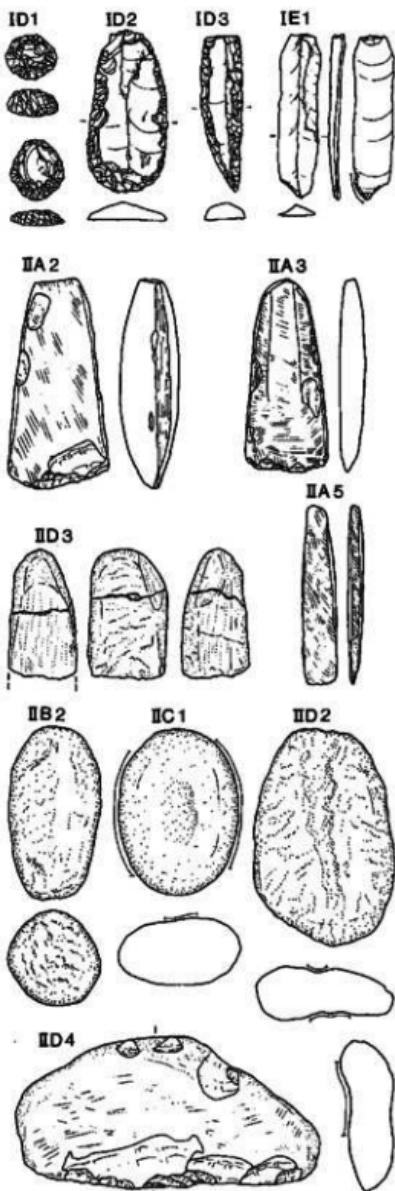
- 1 円礫の周辺および礫面に擦痕の見られるもの

D 砥石・石鏝

- 1 板状のもの
- 2 有溝の砥石
- 3 柱状の砥石
- 4 板状の石鏝
(一辺が鈍い刃状になる)
- 5 貫通孔を有した箇状の形態を呈するもの

E 石皿

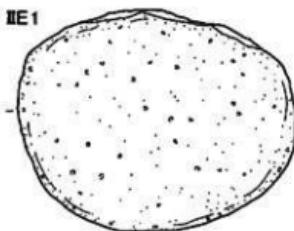
- 1 石皿



図III-4 石器分類図(2)

F 石錐・浮子

- 1 10~810g 未満の石錐
- 2 1000~4500g 未満の石錐
- 3 靴石製の浮子(?)



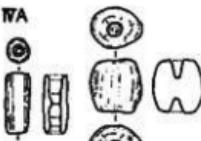
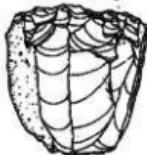
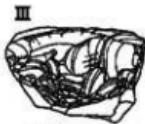
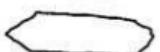
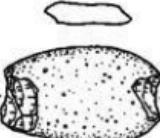
III 石核

IV 装身具類

A 玉類

B 棒状原石

C サメの歯製の垂飾



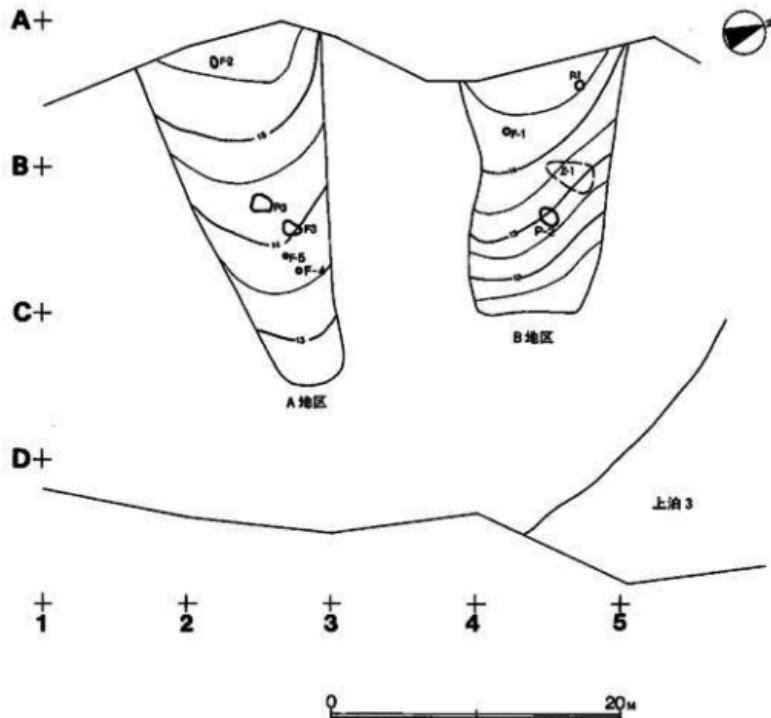
図II-5 石器等分類図(3)

IV 東上泊遺跡

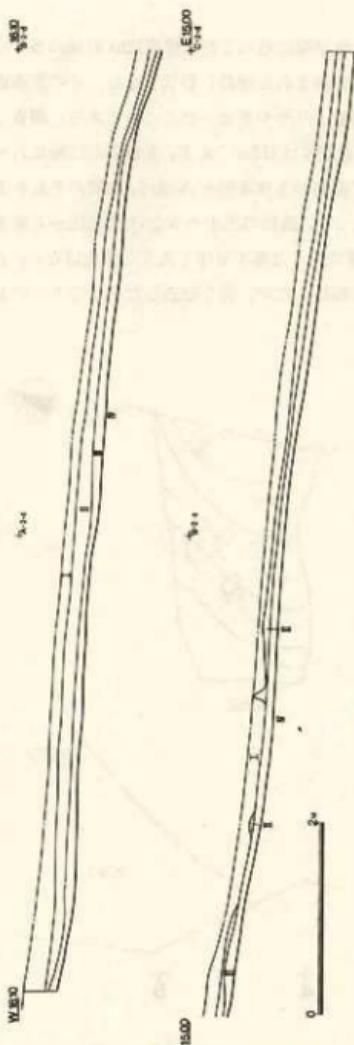
IV 東上泊遺跡

1 まえがき

東上泊遺跡は、第II章で述べたように、東海岸の海岸線に沿って走る標高12m前後の海岸段丘上にある。ただ、遺跡のある台地は深い2つの沢に囲まれた細長い形状をなし、その先端部は浅い沢が入りこみ二股にわかれる。台地は、海岸線よりやや奥まったところにある。調査した地区は、先端部のやや傾斜のきついところで、調査面積は312m²である。先端部が二股にわかれてるので遺物の取り上げ等の繁雑さを考慮して南側の舌状端部をA地区、北側のそれをB地区とした。調査は、道教委のB調査の結果にもとづき、遺物の出土の少ないB地区から着手し、次にA地区に移行した。本遺跡の層序は第III章で述べた基本層序と大きな変化はない。A地区、B地区にはクマイザサが生い茂り発掘作業は難行したが、笹を除去した時点ですでに土



図IV-1 遺構位置図



2 A 地区

i 造構

出土している遺物は、すべて統繩文時代前半のものであり、造構も当該期のものと推定できる。

P-3 (IV-3・4, 図版IV-4, 表IV-1)

位 置 B-2-a・d

規 模 $1.45 \times 1.10 \times 0.18m$

特 徴 III層に埋り込まれた浅いピットで、平面形は隅丸長方形を呈す。遺物の出土状態は、大きめの礫が擴底付近にある他は、土器、石器とも土壤外から流れ込んだものであることが窺える。

遺 物 同心円人手と水平連結の貼付のある、字津内 IIb式の深鉢が全体分出土しており、復元された。器高38cm・口径28cm、地文として全面に繩文が施されている。口縁部の平面形は、突起を頂点とする六角形を呈する。底部は上げ底になっており、やや張り出しをもつ。石器は、ジャスパー製と思われる淡緑色の石鏃や、メノウ製の石鏃、ナイフ柄部、貝岩の使用痕をもつ剝片が出土している。墓の可能性を考慮する必要がある。
（三浦 正人）

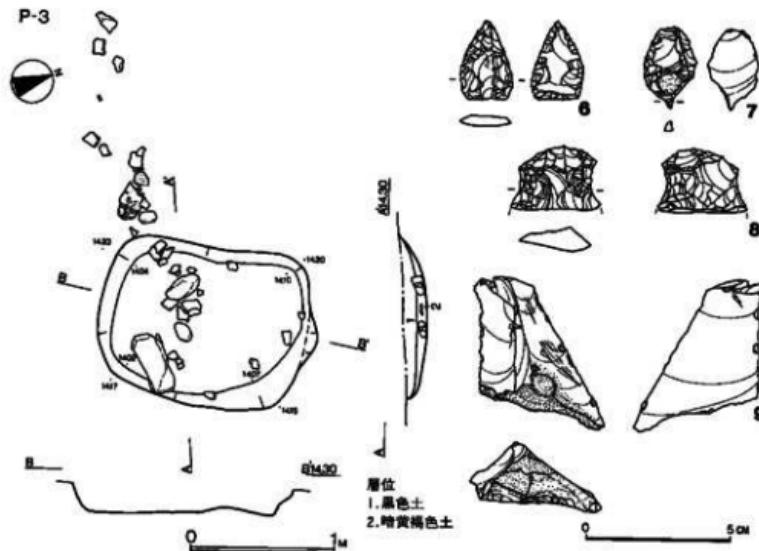
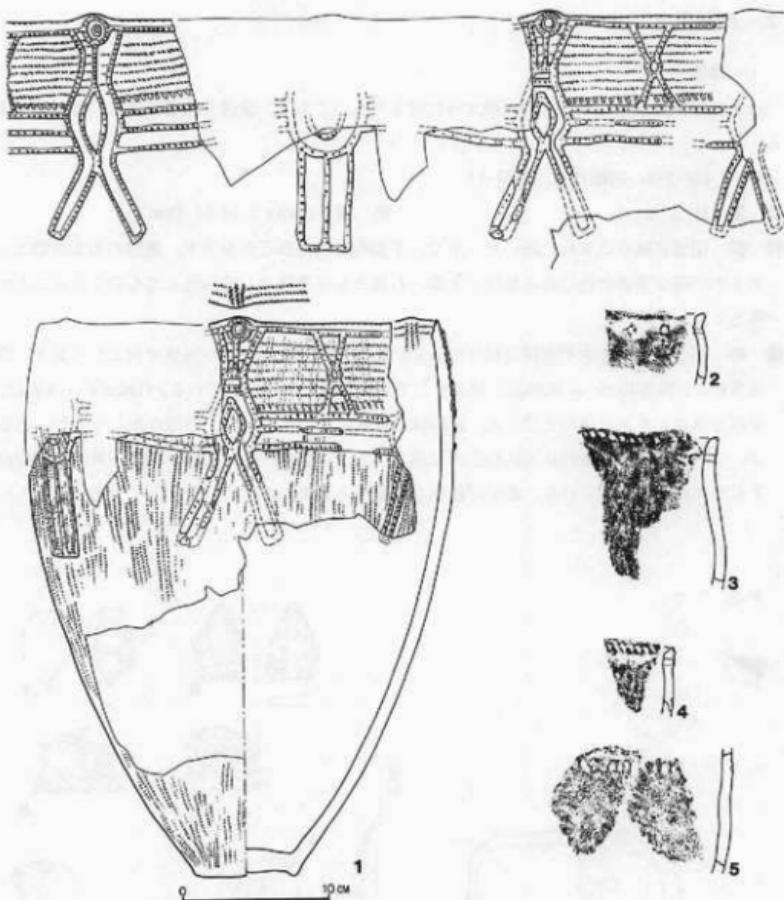


図 IV-3 P-3, 出土の石器



図IV-4 P-3出土の土器

F-2 (図IV-5, 表IV-1)

位 置 A-2-a

規 模 $0.60 \times 0.42 \times 0.09m$

特 徴 掘り込みはないが、III・IV層に及ぶ厚めの焼土で、平面形は、長円形を呈する。

遺 物 焼土面から、頁岩製の搔器が出土している。

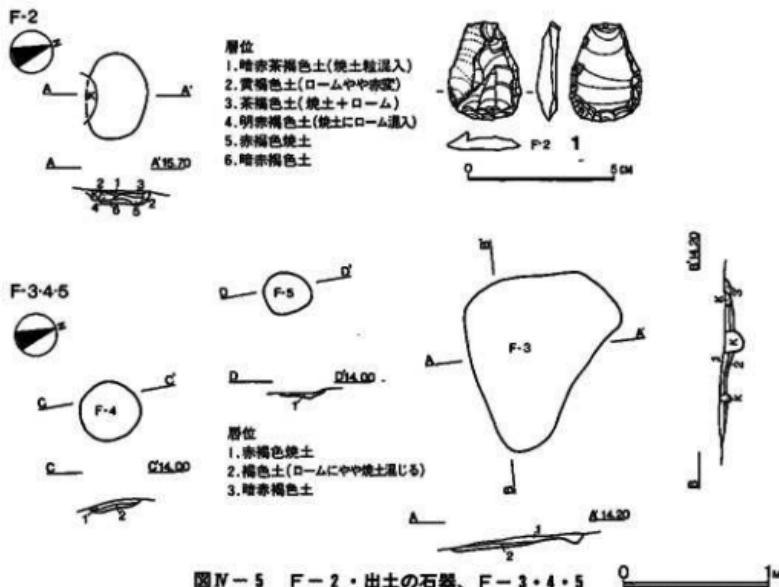
F-3+4+5 (図IV-5)

位 置 F-3 : B-2-d F-4 + 5 : B-2-c

規 模 F-3 : $1.32 \times 0.90 \times 0.06m$ F-4 : $0.40 \times 0.40 \times 0.04m$

F-5 : $0.34 \times 0.28 \times 0.05m$

特 徴 ともにIII層にあるうすい焼土で、埋り込みはない。F-3は平面形が不整な三角形で他二者は円形である。遺物はない。
(三浦 正人)



ii 遺物

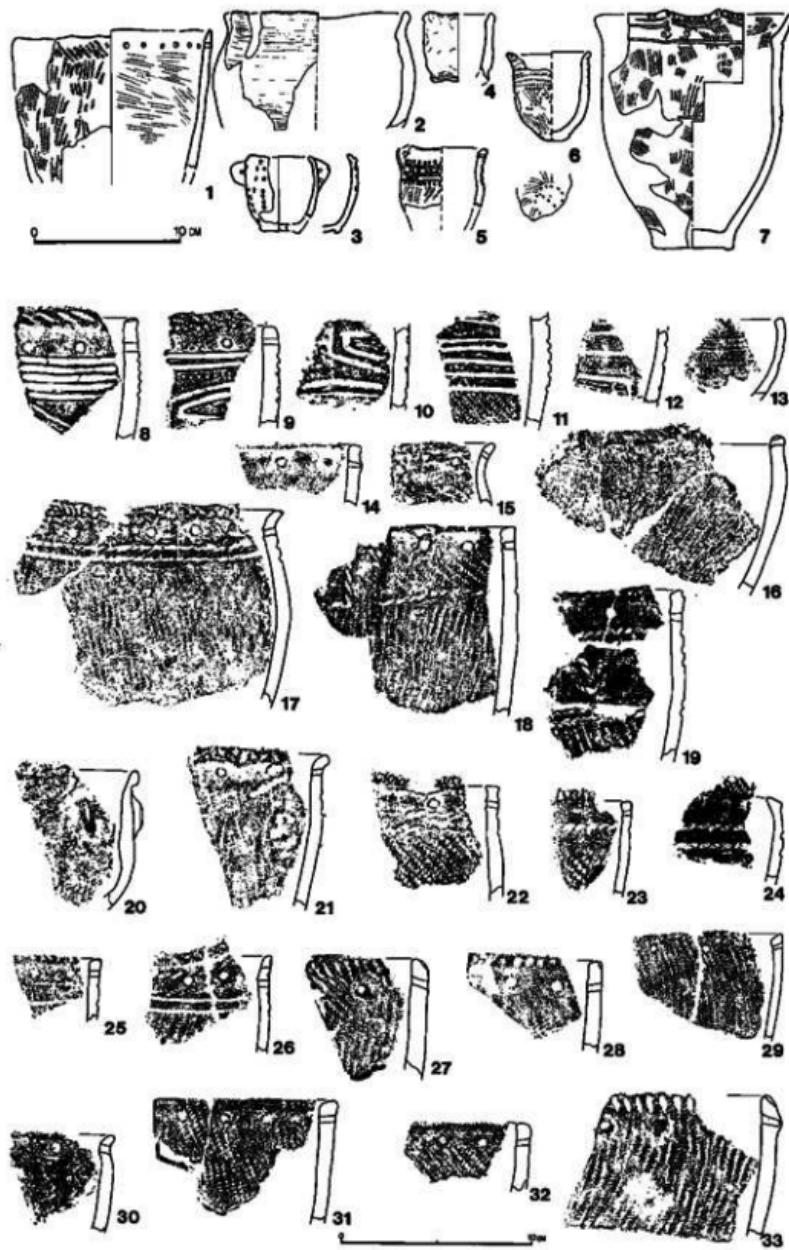
a 土器 (図IV-6・7, 図版IV-5・6)

II群 A 類土器・B 類土器・C 類土器・惠山式土器・宇津内II式土器・後北A式土器などが出土しているが、B 類土器がもっとも多い。

B 類土器 (図IV-6: 8~19)

15のように壺に近い器形をもつ例、14・16・20・21の鉢以外はすべて深鉢と思われる。

深鉢は、変形工字文(8~12)と縦線文(17~19)などの文様が施文される。前者は、5例とも共通して口縁部がやや内反し、文様帯の部分が無文地をなす。文様帯の上・下端は2条ないし5条の横走沈線で区画されるものと思われる。いずれも口頸部に貫通孔があげられる、8は口頸部がやくびれ、口唇上に斜めの短い沈線を施している。9は、口頸部にくびれをもたず、口唇上にRL縞文が施文される。9は、上泊3遺跡H-I上面の住居跡出土の土器(図V-8)と同様の文様構成をもつが工文字の沈線区画の上線に沿って充填される文様が、前者



図IV-6 A 地区出土の土器(1)

が列点文なのに対して後者は弧線という違いがある。工字文あるいは平行線を描く沈線は、溝底の断面がU字状をなし、溝が深い、胴部の地文は、11のようにRL斜行縄文になる。

後者は、器形にやや変化がある。大部分、胴部上半から口縁部にかけてやや内反気味となり、口頭部に浅いくびれをもち、その縫部には貫通孔がめぐるのが多い。17のように胴部が口径より張り出し、頭部が大きくくびれる例がある。17を除き、口縁部に無文地を設け、そこに縄線が施文される。いずれも、2段巻りの縄文原体による側面圧痕で1条ないし2条が普通で多条のものはない。18はΩ状の一本の線縄を境にして上方がRL斜行縄文、下方がRL縦走縄文を施文している。19は、幅の広い無文地を口縁部に設け、まず口唇直下に1条、頭部に1条と胴部に2条の縄線による区画を設け、その空間に2本1単位として波状の縄線を挿入している。なお、14のように無文で口縁部がほぼ直立するものもある。

鉢は、13・16・24のように頭部がゆるやかに内反するもの、20・21・24のように外反する例22・23・26のようにほぼ直立するものがある。13は、地文は無文で口唇はやや丸味をもちその外縁に短い刻線が連続してめぐる。胴部上半に3条1単位の横走する刻線とやや間隔をおいてその下に1条の刻線がめぐる。その溝は浅い。16は、口頭部が心持ちくびれ、口縁には小突起が貼付けられる。突起の頂部には刻みがある。口唇の形態は内切し、口唇上に地文の縄文と同じRL縦文が施文される。口縁部に縄文が施文される鉢は、20、21のように丈の短い口縁部が外反し、頭部と肩部の分化が明瞭ではない。いずれも胴部に突瘤をもつてゐる。

II群B類土器 (図IV-6:27~33・図IV 7:43~44)

短頭壺に近い例(5)、鉢(3・4・30・39~41・44)、それ以外は深鉢である。

2は、肩部から頭部にかけて内反しつつ、頭部では直立せずにそのまま口縁部がやや強く外に開く。頭部には横走する整形痕が見られる。

鉢は、頭部と肩部の分化がはっきりせず肩部がゆるやかに内反し、丈の短い口縁部は、外に開くもの(30・36・39~40)、口縁部がやや内反する例(3)とに分れる。前者のうち36以外、いずれも頭部に貫通孔および突瘤をもつ。36~41は胴部に綾縞文が施文される。後者には、次のようなものがある。3はミニチュア土器で吊耳をもち、肩部から底部にかけて列点文を縦走させている。頭部の内側から突いた突瘤がめぐる。42は、やや内反する例で幅の広い無文地を設け文様帶を1条の沈線で、上段に3条の沈線、下段に3条の縄線をめぐらせその上から2本の短い縦の沈線で区画を設けている。口唇は内切し外縁に刻みがある。内側から突いた突瘤がある。43は、4条の縄線がめぐり、下段の縄線間に端縦圧痕を充填している。

深鉢の大部分は、口縁部が内反気味で、地文はRL縦走縄文を施す例が多い、そして内側から突いた突瘤をもつ例も多い。34・35・37のように肩部から口縁にかけてゆるやかに外反するものもある。前者では、内側から突いた突瘤をもつ例(25・31)以外は、すべて外側から突いたものである。口唇はやや丸味をもつものが多いが、25・31のように口唇が外切に近い



図IV-7 A地区出土の土器(2)

形態をもち口唇面に刻みをもつものもある。

後者の35は、肩部と頸部の屈折は明瞭であるが口縁と頸部は未分離である。肩部には端縄圧痕を連続してめぐらしている。37と38は同一の個体で、口縁、頸部と肩部の屈折が他よりやや明瞭なもので、丈の長い頸部の上端に内側から突いた突瘤を、下端に端縄圧痕を2列横列させている。地文はRL斜行縄文である。

II群C類土器 (図IV-6:5~7, 図IV-7:45~53・63)

長頸の深鉢土器が大半である。7は、口縁部と頸部の屈折は明瞭であるが、頸部と肩部は分離せず肩部下半から底部にかけて強くすぼまる。底部はやや上底気味である。口縁部は、外に開くがやや内反気味である。口縁部の内側にRL横走縄文が施される。地文の縄文はRLである。48は、外反する口縁部と、ほぼ直立した頸部、やや斜下がりの肩部というように三つの部位が明瞭に分化する器形をもっている。それと口唇の断面観が尖がる傾向をもつていて、48と49は同一個体である。この土器には突瘤あるいは貫通孔がめぐるものはない。文様帯は口縁から頸部にかけて設けられる。口縁は平坦であるが、51のように突起をもつものがある。文様は横走沈線を数条めぐらせるもの、横走沈線と鋸歯文との組み合わせるもの(53・54)とがある。地文の縄文は縱走縄文である。48のように、7条の縄線をほぼ等間隔にめぐらせ、中段と下段に端縄圧痕を横列に連続させて施文させた例もある。

5と6はミニチュア土器である。5は、丈の長い頸部に3条の平行線を施したうえに、短い沈線を縦に垂下させ、その上・下端に端縄圧痕を平行線に沿ってめぐらしている。6は、口縁部と頸部の境はやや明瞭であるが、頸部から肩部にかけては屈曲をもたず、そのまま内反しつつ底部に至る。底部の付近では大きくすぼまり、やや丸底に近い形になる。

後北A式土器 (図IV-7:58~60)

三例とも小形の鉢と思われる。口唇は、いずれも外切する。56は口縁にそって微隆起線上に刻み、59・60は太い隆起線と半月状の刺突文を組み合せたものである。

不明 (図IV-7:56・57・61・62)

61と62は同一個体で深鉢である。口縁は、ほぼ直立し、口唇直下に内側から突いた突瘤がめぐる。肩部上半に隆起線が1条走り、その縫に八の字に刻線が連続する。一見すると十和田式土器に似た資料である。56・57も無文である。

(種市 幸生)

b 石器等

A 地区より出土した石器群は、170点であった。このうち、5点は造構に伴うもので、ほかは全て造構外で検出されている。また、これらの石器群は、全て統繩文時代の土器群とともに出土している。しかし、発掘範囲が舌状台地の先端部であることや、近接した上泊3遺跡が、繩文時代中期を主体とする遺跡であることより、若干統繩文時代以外の石器も含まれていると思われる。出土した石器の器種は、石鉄・石鋸先・石錐・石匙・ナイフ・搔器・削器・前述以外の両面調整石器・石斧・敲石・砥石・石鍬である。また、このほかに装身具として、管玉・棒状原石が検出された。

本報告では、これらの石器群のうち、造構の遺物を含む82点と装身具類3点を図示した。以下、分類に沿って記述する。

ポイント（図IV-8：1～13、図版IV-7）

I A 1：1～4に該当する。1は、両面とも入念に加工された小型の石錐である。2～4は、片面ないし両面に素材面を残した石錐である。形態は、いずれも不整三角形で、基底部は内湾する。石質は、1・4が頁岩、2・3が黒曜石である。

I A 2：5～7の3点のみである。5は、両面加工の石錐で、基部両側縁は、若干抉れる。基底部は、平坦である。6・7は、基部を欠損しており、形態が明確ではないが、残存する形状よりI A 2とした。石質は全例、黒曜石である。

I A 3：8の1点のみである。形態は柳葉形となるが、上・下端部は欠損している。両面加工の石錐である。

I A 5：9の1点のみである。背面中央に稜を有し、周辺だけを二次加工した石錐である。基部は、尖頭状となり短い。石質は、頁岩である。

I A 7：茎を有した石鋸先である。11は、尖頭部周辺と基部を比較的入念に加工した以外は、大きな剥離面を残している。12・13は、尖頭部を欠損する。

石錐（図IV-8：14～17、図版IV-7）

I B 2：14・15の2点のみである。14は、背面および腹面の刺突部とつまみ部周辺を加工した石錐で、先端部は欠損する。15は、刺片から刺突部のみを作出した石錐である。刺突部の磨滅は著しい。石質は、2点とも頁岩である。

I B 3：16・17が該当する。16は、黒曜石製のもので、背面全体と腹面の刺突部から両側縁にかけて調整剥離されている。先端部の断面は、比較的薄い。17は、両面とも加工されており、先端部は片寄っている。

ナイフ（図IV-8～10：18～45、図版IV-7）

I C 1：石匙と称されているもので、18～20が該当する。全例、縦形の片面加工である。

I C 2 : 繩縄文時代に特徴的なナイフで、「靴形石箋」をはじめ、「石製ナイフ」・「靴形石器」・「ナイフ状石器」などと呼ばれているものである。しかもその中で、刃部が斜めに鋸く出でされた、形態が「靴形」のものを基本とし、その以外を I C 3 とした。すなわち、図示した 22~27 がそれに該当する。22・24・25 はメノウ製のナイフで、断面は厚く、刃角も高い。26・27 は、典型的な「靴形」の形態を示すもので、背面の周辺にのみ加工が施されている。

I C 3 : 21・28~45 が該当する。これらは形態上、柄部を有するもの (21・31~39・42~44) と、無柄で刃部付近が緩くカーブするもの (28~30・40・41・45) に分けられる。柄部を有するものの中には、31~33・36・37 のように石槍に類似したものがあるが、どれも片側縁が張り出しており、刃部の調整剝離も施されている。また、42・43・44 のように、両側縁の刃部が次第に狭長になり、先端部が尖頭状か平坦になるものもある。

スクレイパー (図 IV-10・11 : 48~62, 図版 IV-7)

I D 2 : 縦長剝片の一端に、刃角の高い刃部が施されたものである。52~54 が該当する。52 は黒曜石製の搔器である。刃部および基部は、入念に二次加工が施されている。53 は、基部を欠損しているが、刃部の形状より搔器である。54 は、背面の周辺に二次加工が施された、石箋状の搔器である。腹面には、バルブを取り除くための加工が施されている。また、側面観は 3 点とも内湾する。

I D 3 : 剥片の側縁部、あるいは先端部に刃角の低い刃部が施されたもので、46~51・55~62 が該当する。形態は、様々なものが認められるが、いずれも刃部以外は粗い調整剝離が施されている。また、58・59 のように比較的大型で、断面に厚みを有する石器も、側縁部にわずか刃部が認められることから削器とした。

石斧 (図 IV-12 : 66~68, 図版 IV-8)

II A 3 : A 地区より出土した石斧は 4 点で、そのうち 3 点を図示した。いずれも、片刃となる石斧である。66 は、整形のためベッキングをしたのち、研磨された石斧である。刃部は、円刃で、若干齒こぼれが認められる。刃縁は、銳利である。67 は、断面の厚さが 2.65cm の石斧である。刃部は、欠損しているが、さほど長くなることはなく、傾斜は強い。68 は、基部を欠損した石斧で、刃部の形状は偏刃である。研磨は、刃部周辺だけ入念に施されている。石質は、礼文島で得られない滑石であることより、製品として持ち込まれた可能性がある。

敲石 (図 IV-12・13 : 69~74, 図版 IV-8)

II B 1 : 69・70・72 が該当する。いずれも円礫を素材として、周辺に数ヶ所の敲打痕を残している。使用痕はどれも浅く、十分には使いこまれていないようである。

II B 2 : 円礫の中でも、棒状に近い形態のものを素材とし、その一端に敲打痕が認められる。71・73・74 が該当する。使用痕は、II B 1 と比較して十分に使いこまれ、平坦になるもの

(71・73) がある。石質は、71が礫岩、73がチャート、74が安山岩である。

砥石・石鋸（図IV-13：75・76・78・79、図版IV-8）

II D 1：板状の形態を呈するもので、破片も多く出土しているため、砥石と石鋸を区分することができないものも含めた。しかし、A地区において出土した、75・76・78はどれも砥面を有したものである。75は、泥岩質の砥石で、規則的に剥がれた破片の一面を砥面として利用している。76・78は、砂岩質の砥石である。一般的に、砥石・石鋸となるものは、この石質が多い。

II D 3：柱状の砥石で、図示した79の1点のみ出土した。大きさは、長さ10.8cm、幅3.3cm、厚さ2.2cmである。重量も134gと比較的手頃の砥石を4面使用している。

石鎌（図IV-13：72・80、図版IV-8）

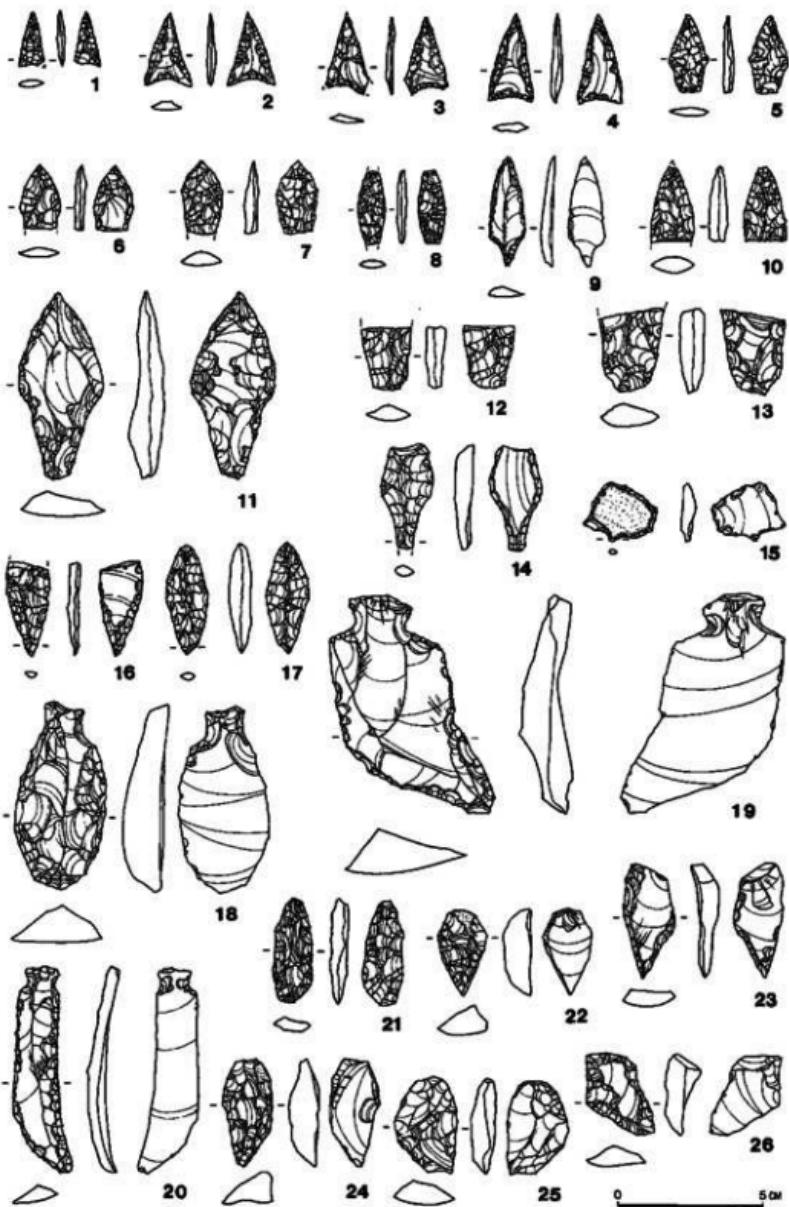
II F 1：3点出土したうちの2点を図示した。形態は、いずれも円錐の両側縁に打ち欠きが施されたものである。重量は、77が66.0g、80が220.0g、図示しなかった1点が128.0gである。これらの重量差については、上泊3遺跡より多量の石鎌が出土しているため、VII章で述べる。石質は、どちらも安山岩である。

装身具類（図IV-10：63～65、図版IV-7）

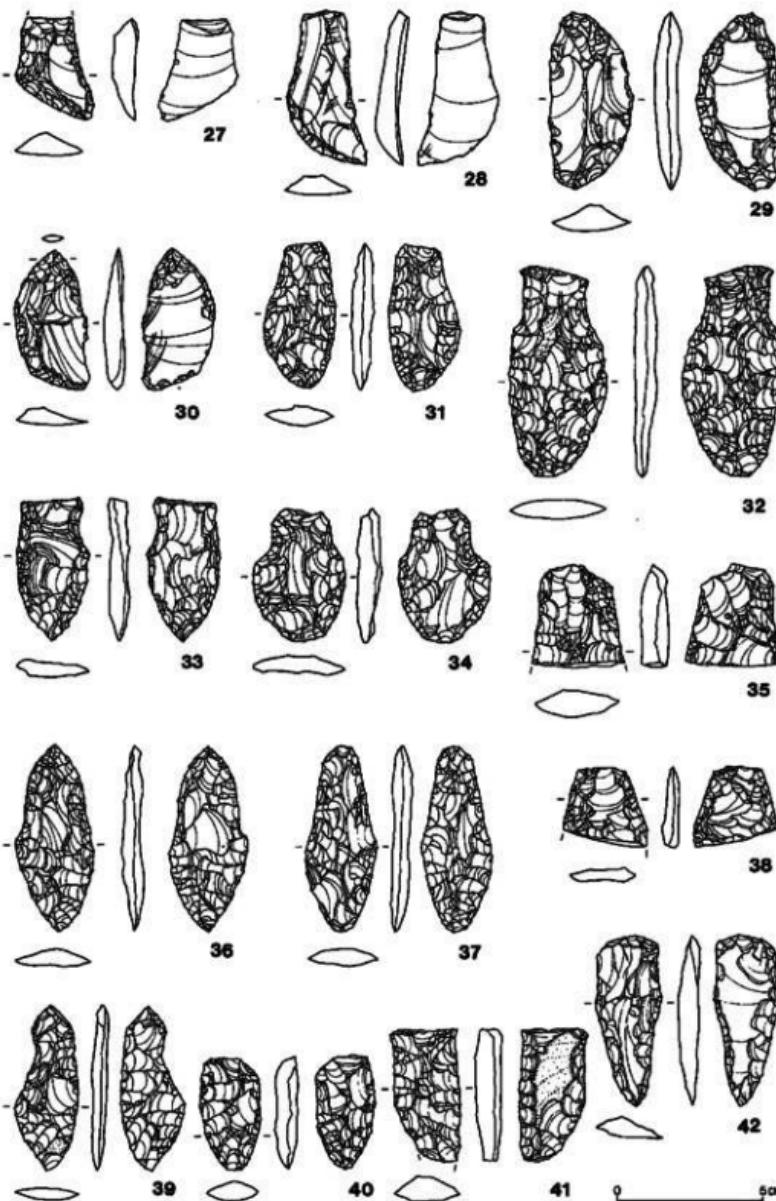
IV A：65の1点のみ出土している。出土地点は、B-2-a区のP-3付近である。出土状態から同遺構より検出された、字津内Ⅱb式土器に伴う可能性がある。石質は、滑石である。

IV B：A-2-b区とB-2-d区の表土より、それぞれ1点づつ出土している。63は、五角柱状のもので、長さは9.25cmある。64は、六角柱状の砲弾形となる。石質は、どちらも黒曜石製で、表面は風化している。

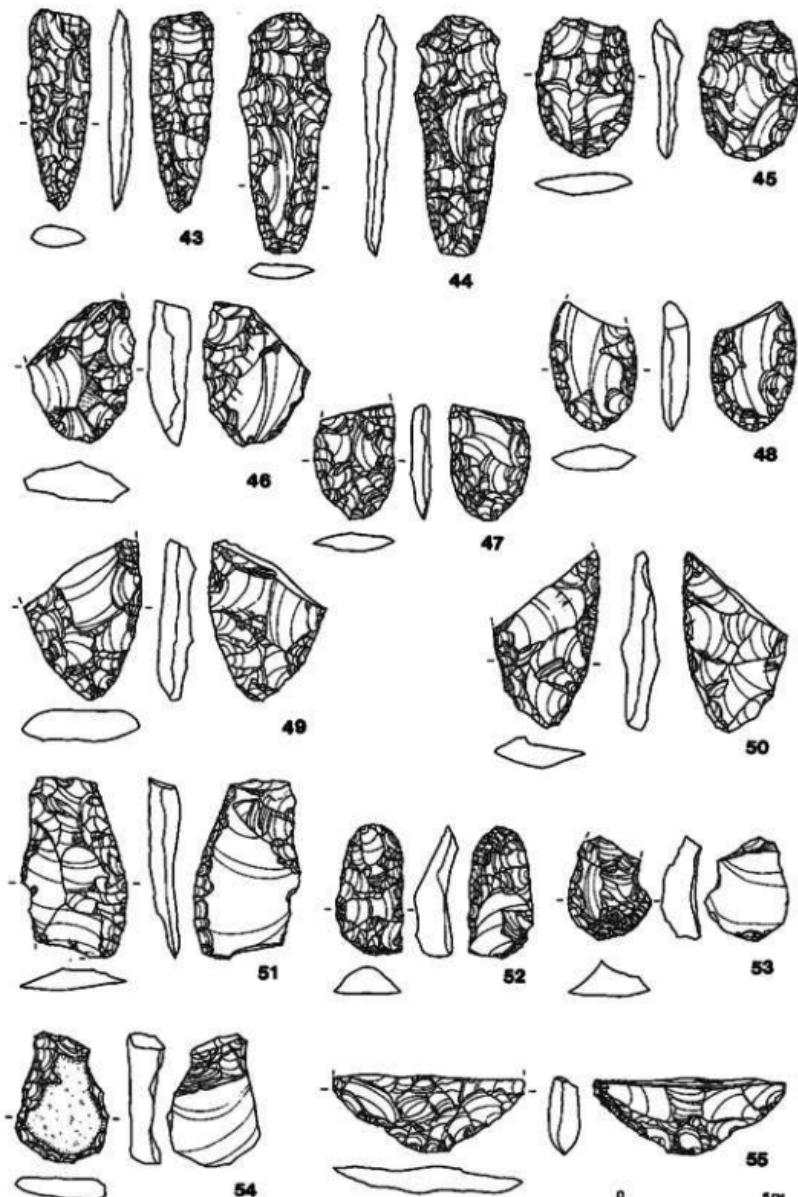
（森岡 健治）



図IV-8 A 地区出土の石器(1)

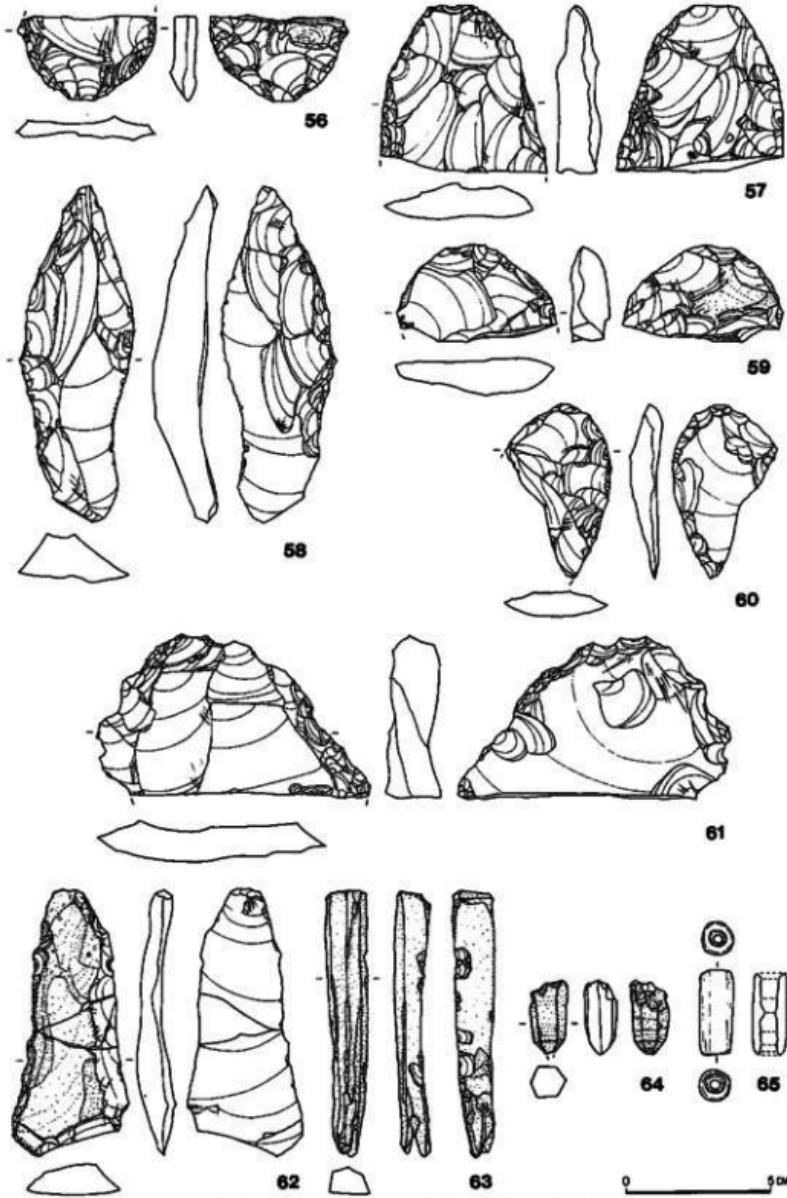


図IV-9 A地区出土の石器(2)

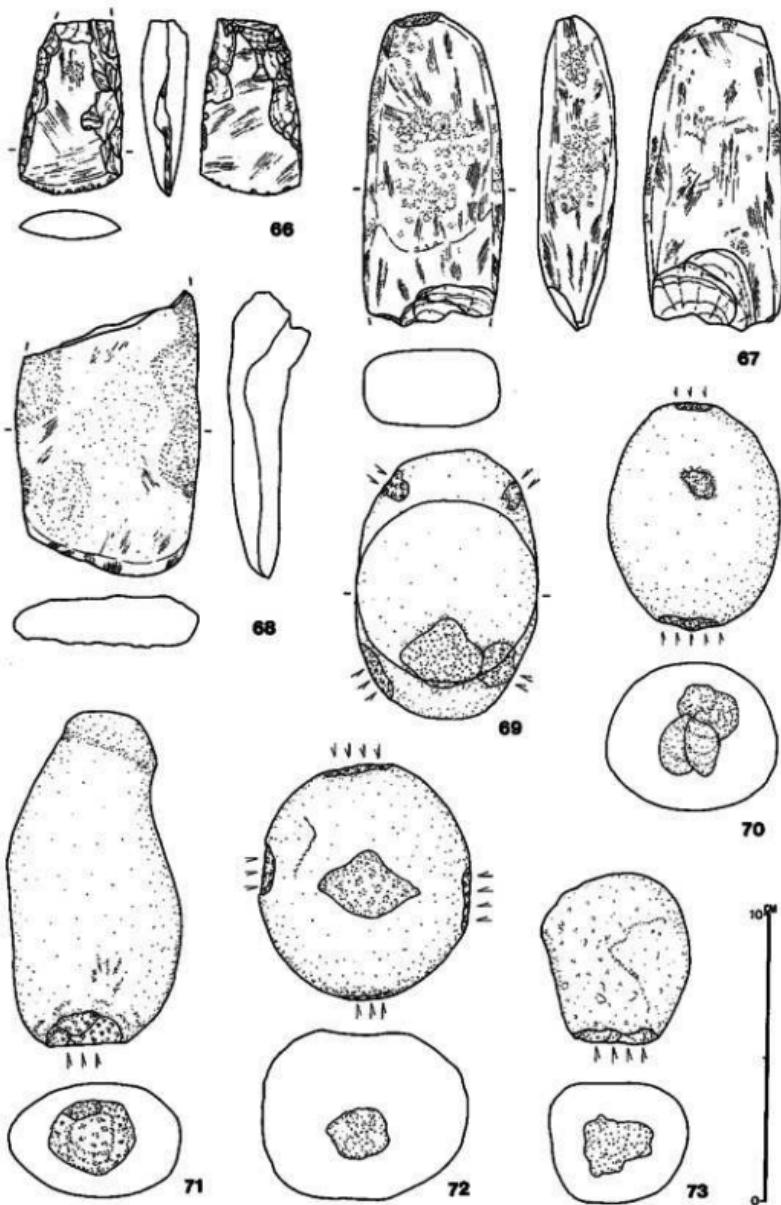


図IV-18 A 地区出土の石器(3)

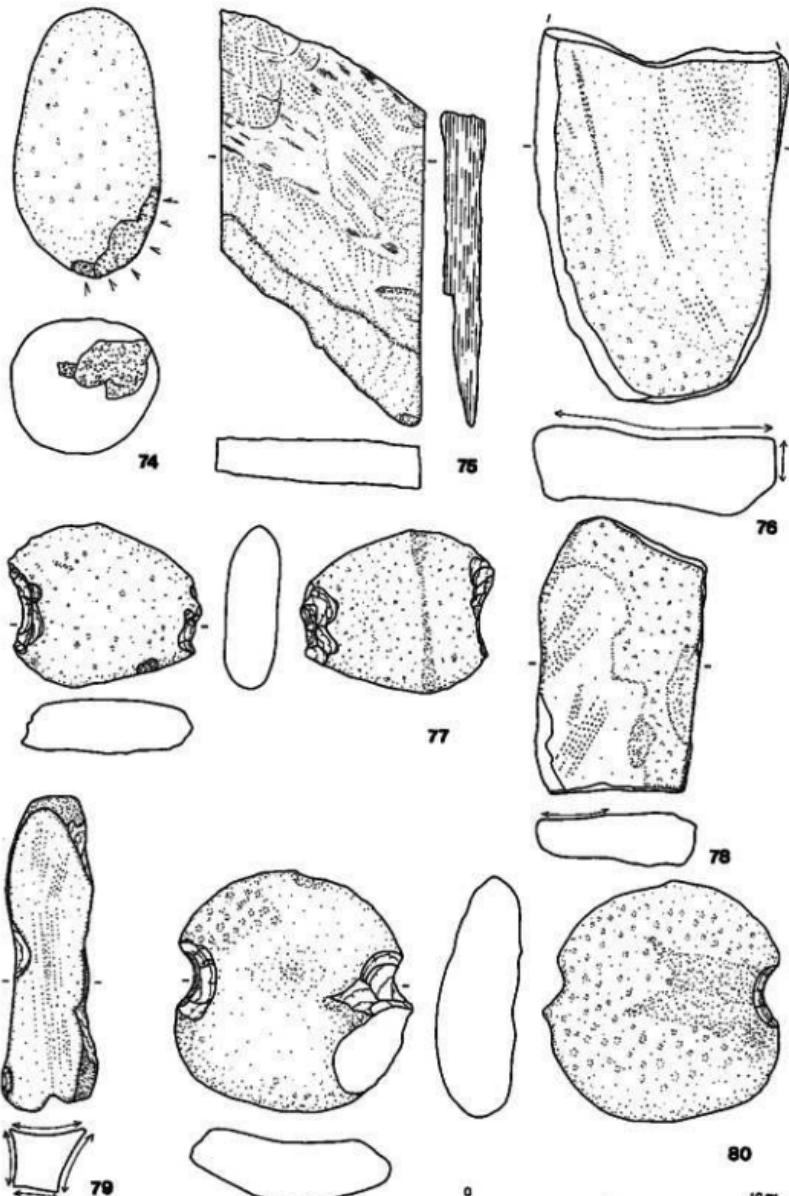
0 5cm



図IV-11 A地区出土の石器(4)・装身具類



図IV-12 A地区出土の石器(5)



図IV-13 A 地区出土の石器(6)

3 B 地区

EAST

I 遺構

出土している遺物は、すべて縄文時代前半のものであり、遺構やその周辺の遺物もこれと同様である。このことから、遺構はすべて当該期のものと推定できる。

P-1 (図版IV-15, 図版IV-2, 表IV-2)

位 置 A-4-d

規 模 $0.55 \times 0.50 \times 0.18m$

特 徴 III・IV層に掘り込まれた、平面形円形の小ピットで、中央がさらに円形にくぼんでいる。この中央部分の土層には炭化物が入っており、土器が埋設されたような状態で、口縁を上にして入っている。ただ少しが程度の破片であり、底部もないので、埋設土器であるとの確証はない。

遺 物 上記の土器は、推定器高29cm・口径23cmである。平縁で、口唇に刻みをもち、直下に刺突文があげぐる。頸部がやや湾曲し、胴部最大径が口径を上回る。縄文時代初頭の土器であろう。他に、土壙脇で、石錐1点が出士している。

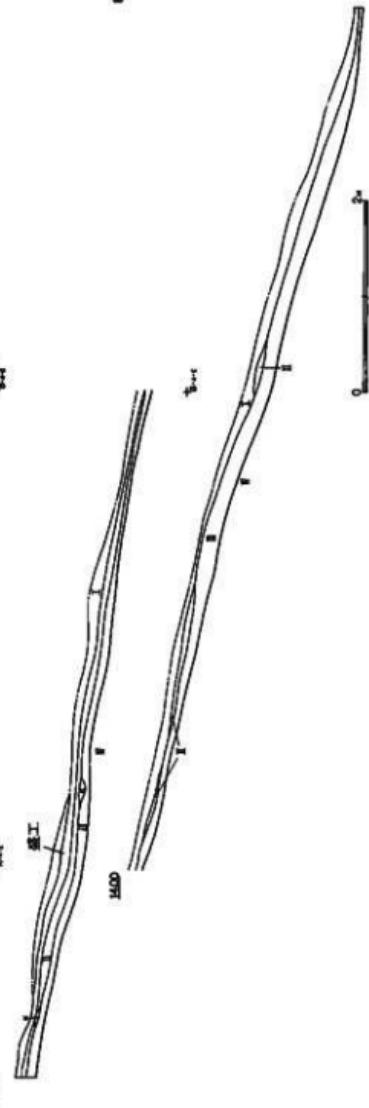
P-2 (図版IV-15, 図版IV-3, 表IV-2)

位 置 B-4-a-b

規 模 $1.10 \times 0.85 \times 0.11m$

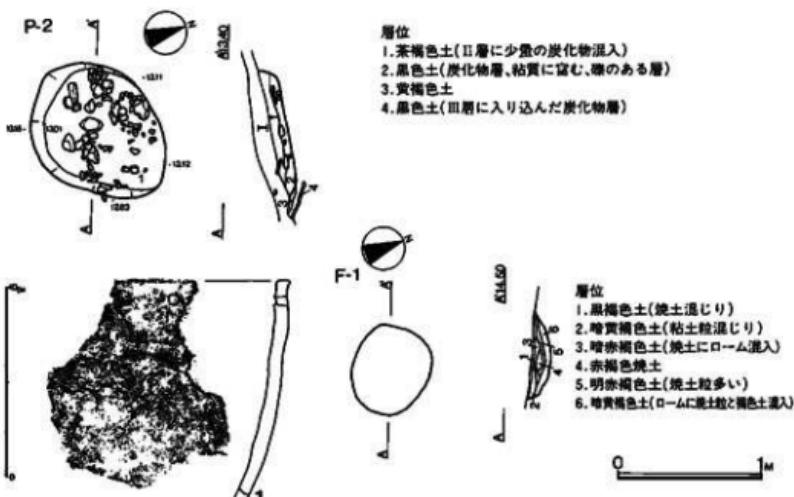
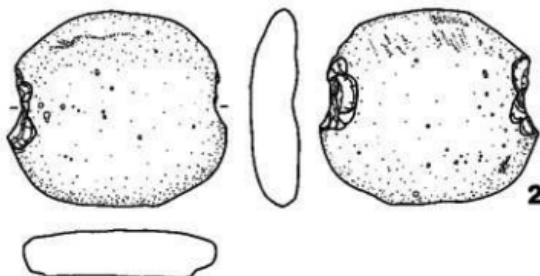
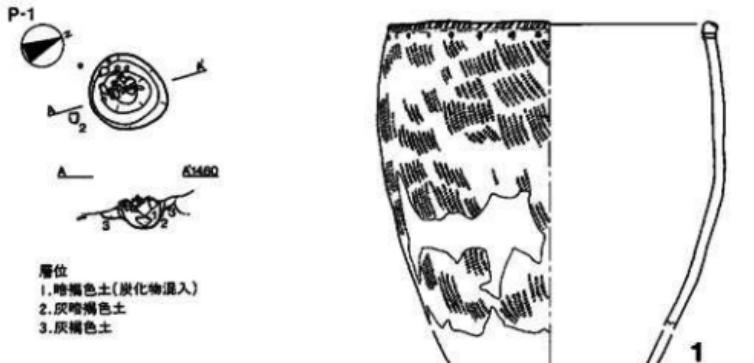
特 徴 III層に掘り込まれた、平面卵形のピットである。斜面上方は壁が立ち上がるが、下方に向かって壠底がゆるく傾斜し、そのまま壁面へと、皿状になっている。壠底部分の土は、炭化物を多量に含む黒色粘性土で、ここに熱で破碎した約50個の礫がつまっている。

遺 物 埋り込み面のレベルで、縄文時代初頭の土器片が出土している。



(三浦 正人)

図IV-14 B地区土層断面図



図IV-15 P 1・2, 出土の遺物, F-1

F-1 (図IV-15)

位 置 A-4-6

規 模 0・62×0.55×0.14m

特 徴 III・IV層におよぶ厚い焼土。掘り込みは認められない。平面形は円形である。屋外炉であろうか。遺物はない。

Z-1 (図IV-16, 図版IV-5, 表IV-2)

位 置 A-4-C・B-4-d他

規 模 4.20×2.20m (aグループ: 1.80×1.10m)

特 徴 III層面に礫が散布した状態で存在する。斜面上方にあるaグループが中心であり、他はそこから流れ落ちたものと思われる。礫の重なりはほとんどない。aグループで100個、他で100個、計200個の礫は大小さまざまだが、角礫はそのうち3割程度である。熱をうけた様子はなく、炭化物・焼土等も検出されなかった。

遺 物 aグループより下の斜面で、統繩文時代初頭の土器片がみられる。礫間にメノウ等のフレイクも散らばっている。
(三浦 正人)

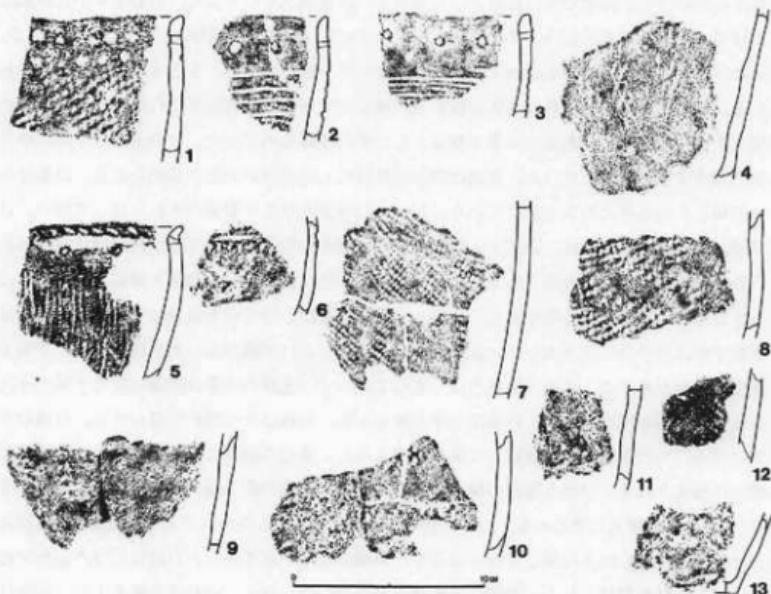
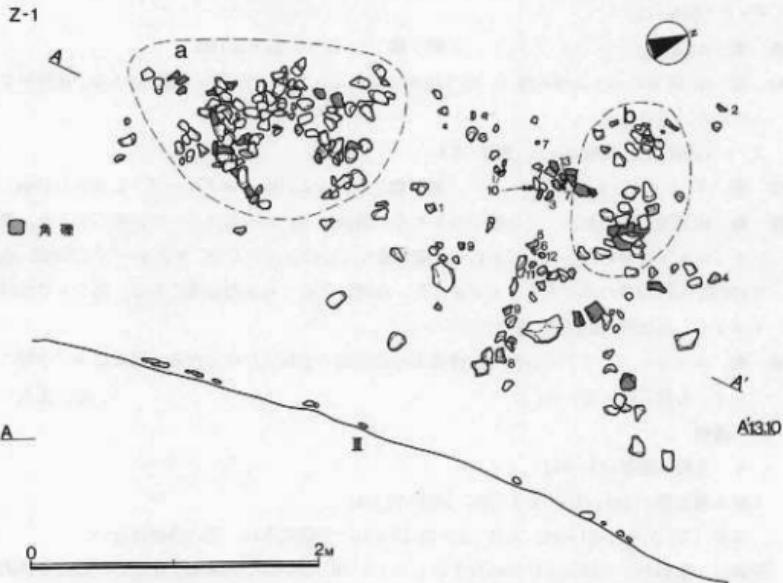
ii 遺物

a 土器 (図IV-17~18)

I群A類土器 (図IV-17: 1・3~20, 図IV-18: 34)

深鉢 (1・3~11・14~16) と鉢 (12・13・17~20) で構成され、壺、浅鉢はない。

深鉢は、頸部から口縁にかけて外反するもの (3・16) は少なく、胴部上半から口縁にかけ内反する例が多い。両者とも口唇直下に突瘤あるいは貫通孔をめぐらせ、胴部上半から頸部にかけて、変形工字文あるいは平行沈線を施している。文様帶の部分は、無文地である。5・6は、二条1単位の沈線で変形工字文風のモチーフを描いている。5と6は同一個体と思われる。14と15は、同一個体で波状口縁をもつ稀な例である。口唇直下に口縁に沿って1条の横走する沈線を施し、頸部に3条1単位とした平行沈線をめぐらせ、その上端と下端に半月状の列点文を連続させている。波頭は頂部に棒状のもので突いた痕が認められる。口唇はやや内切しその外縁に刻みを設けている。16は、口縁部の厚さが肩部のそれに比して厚い。口縁部には磨きが加えられ、頸部から頸部にかけて数条の沈線によって描かれた波状文が描かれる。1は深鉢の復元土器である。丈の短い口縁が外に張り出し、頸部と肩部との屈折ははっきりせず、肩部は強く張り出し、胴部上半から底部にかけてやや鋭角にすぼまる。底部は平底で角はやや外に突き出している。頸部から肩部にかけて幅の広い無文地を設け、2条1単位の沈線がめぐる。沈線の引き方は一定しておらず、上段の2条は間隔が狭く下段のそれは広い。沈線の溝底は浅い。口唇はやや丸味をもち、口縁はやや凹凸が見られる。口縁の片側にのみ二つの山形突起が連続して貼り付けられる。突起の頂部には刻みがある。口唇面に繩文が施される。口縁と頸部の境目に外から突いた突瘤が最上端に沈線上にめぐる。地文は、RLの斜行繩文と思われる。これにやや近い器形をもつものが34である。頸部から肩部にかけての張り出しあは1に比して強くなく、口縁はほぼ平坦である。口縁に二つの山形突起が連続して貼り付けられる。頂部には模状の刻みがつけられる。口唇は丸味をもち、両縁は



図IV-16 Z-1・出土の土器

外に突き出る。

鉢は、肩部と頸部の分化ははっきりせず、胴部上半から頸部にかけてやや内反し、丈の短い口縁部が外に張り出す器形をもっている。20と21は同一個体で、頸部から肩部にかけて5条の平行線が、胴部上半に1条の沈線がめぐり、肩部に貼瘤がつけられている無文の土器である。平らな口縁で、口唇面はやや平坦で1条の沈線と列点がそれに平行して連続してめぐる。さらに口縁と頸部の境目に最上段の沈線と重なった外から突いた貫通孔がある。14は、2条の平行線の間に横列に円形状の列点文を充填させたものである。これらの土器は、東北地方北部の弥生式土器に共通した特徴をもっている。25~28は、頸部に繩線を1条ないし2条もつもので二段撚りの原体による側面压痕である。26·27は口唇面に繩文が施文される。27には突瘤はない。63は波状口縁で口唇の外縁に太い刻みを施している。地文は太い原体によるRL斜行繩文が施文される。

I群B類土器 (図IV-17:2·21~23, 図IV-18:35~53, 図IV-19:54~71)

深鉢と鉢によって構成され、壺、浅鉢などはない。

深鉢は、36~38·43·53~54·58~63で、他は鉢と思われる。深鉢は、胴部上半から肩部にかけてやや内反し頸部から口縁部にかけてほぼ直立するもの(52·56~58)、と外反するもの(34~36)、胴部上半から口縁部にかけて内反するもの(41·59~61)、胴部上半から頸部にかけてゆるやかに内反しつつ口縁部から外に強く張り出すもの(45·51)とがある。これらの深鉢は口頸部に突瘤あるいは貫通孔がめぐる。口縁は、平らなものが多く突起をもつ例は少ない。口唇は平坦なものや内切するものなどが見られるが、口唇の外縁に刻みをもつ例はない。中には56·58·41のように口唇面に繩文が施文される例がある。これらの土器の地文は、大半がRL斜行繩文であるが、41·51のようにほぼ縱走するもの、36のようにLR横走繩文も見られる。52は、頸部に横走する撚糸文に、肩部から胴部にかけて縱走させた撚糸文を組み合せた珍しい例である。52と53は同一個体である。

鉢は、大きくとらえると胴部上半から頸部にかけて内反しつつ丈の短い口縁が外に強く張り出すもの(21·22·30·37~40·47~48)と、胴部上半から口縁部にかけてゆるやかに内反する例(2·23·24·27~29·42·43·50·67·78)とに分けることができる。

前者には、22のように地文が撚糸文で口唇の平坦面にも撚糸文が施される例、30のように無文地の頸部に2条の繩線をめぐらせるものなどがある。21を除きいずれも口頸部に突瘤あるいは貫通孔がめぐる。この器形をもつものには21·30·40·42のように口唇外縁に刻みをもつ例が多く見られる。2は、口縁部がやや幅の広い無文地になり、その上段に横走する3条の繩線と下段に1条の沈線を組み合せて文様帶を形成している。口縁部に突瘤は施されていない。口縁には頂部の尖がった背の高い突起が5個貼付けられる。底部は角が丸味をもち、丸底に近いものである。胴部の地文は、RL斜行繩文が施される。

後者の一群は、口唇の先端がやや外側に張り出し気味である。37·39は、指頭の押圧によっ

て頸部にくびれを作出させている。42は、口唇は平坦でその面に縄文が施され、頸部には浅いくびれをもつ。地文は、肩部に左下り斜行縄文と胴部に右下りの斜行縄文を施し、矢羽状の文様を作り出している。原体はいずれも LR である。胴部上半には撚糸文が施文される特異な例である。

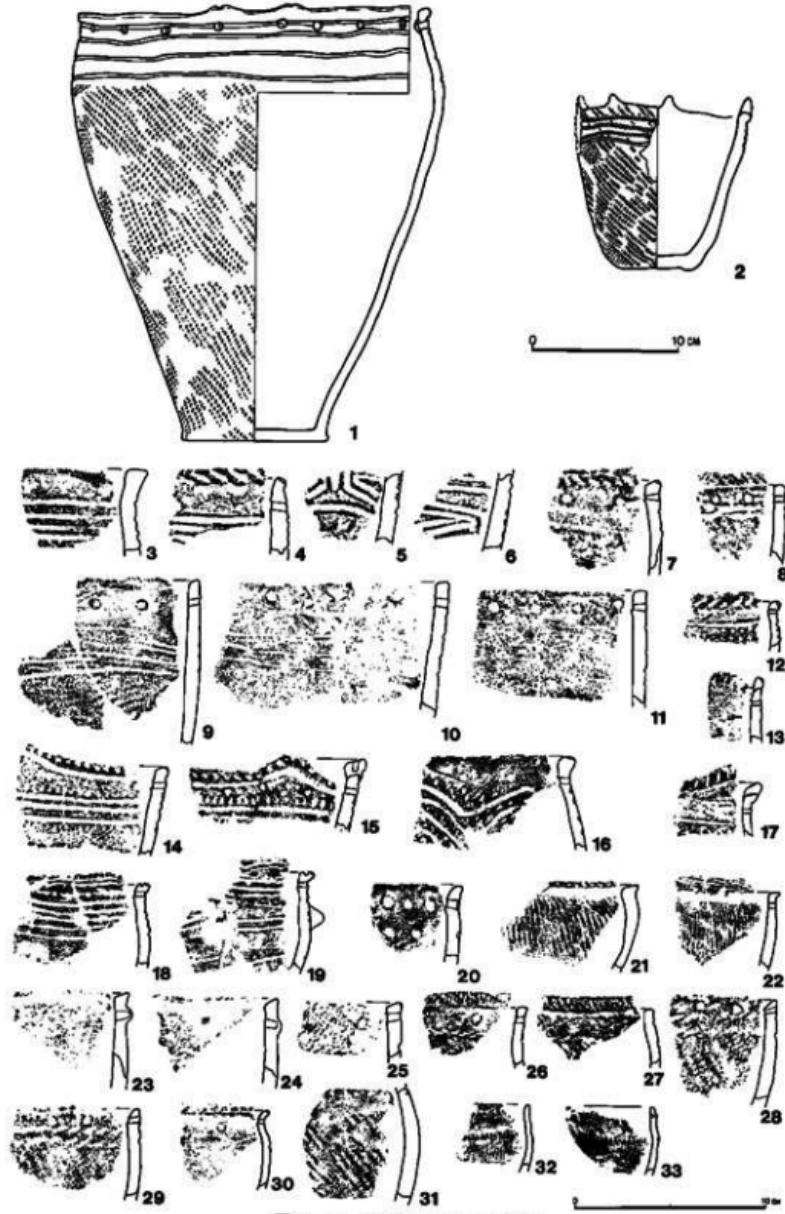
71はミニチュア土器である。口縁部が内反する例で、肩部と胴部上半にかけて3条の平行沈線がめぐり、口縁部から胴部上半に吊耳状の突起が貼付けられる。底部の角は外側に張り出す口縁部に貫通孔がめぐる様である。32と33もミニチュア土器である。同一個体で肩部と頸部に段を設けている。肩部に列点文が描かれ、口唇直下に内側から突いた突瘤がめぐる。

II群C類土器（図IV-19：72～77）

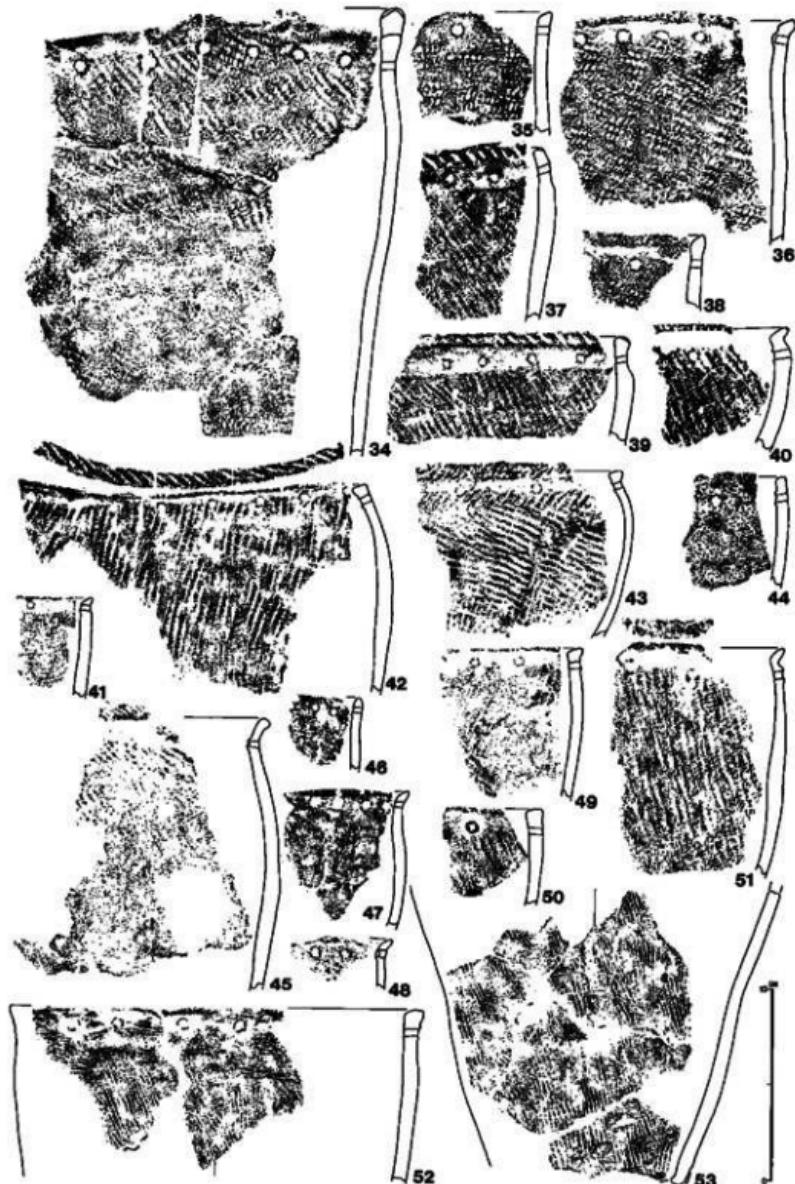
76を除いた他は、深鉢である。出土量は、II群B類土器に較べると少ない。72は、胴部から頸部にかけてやや内反し、頸部から口縁部にかけて強く外反する。口縁部は、丈が短く、口唇の断面観は尖がる。口唇面には、斜めの刻みが連続して施される。頸部には、二段燃りの縄文原体による側面圧痕が3条平行して施される。また、頸部には内側から突いた突瘤がめぐる。地文は、RL 斜行縄文を施文している。

73と74は、同一個体である。口縁部と頸部と肩部の屈折が明瞭で、頸部に6条の近接した横走沈線をめぐらせ、その下段には2条1単位の沈線による速弧文風モチーフが描かれている。口唇の形態は丸味をもち、口唇の外縁には縦の刻みが連続する。口縁は平坦をなし、その一端に突起が貼り付けられる。突起の頂部には抉痕が認められる。口縁部には突瘤はない。地文は、RL 斜行縄文である。77は、胴部に2条1単位の横走沈線が施されている。多分、器形は73のようになるものと思われる。これらの土器の底部は、77のようにやや上底気味の底部になるようである。78は、口縁は波状をなす。口縁部には、刻線と列点を組み合せた文様が描される。

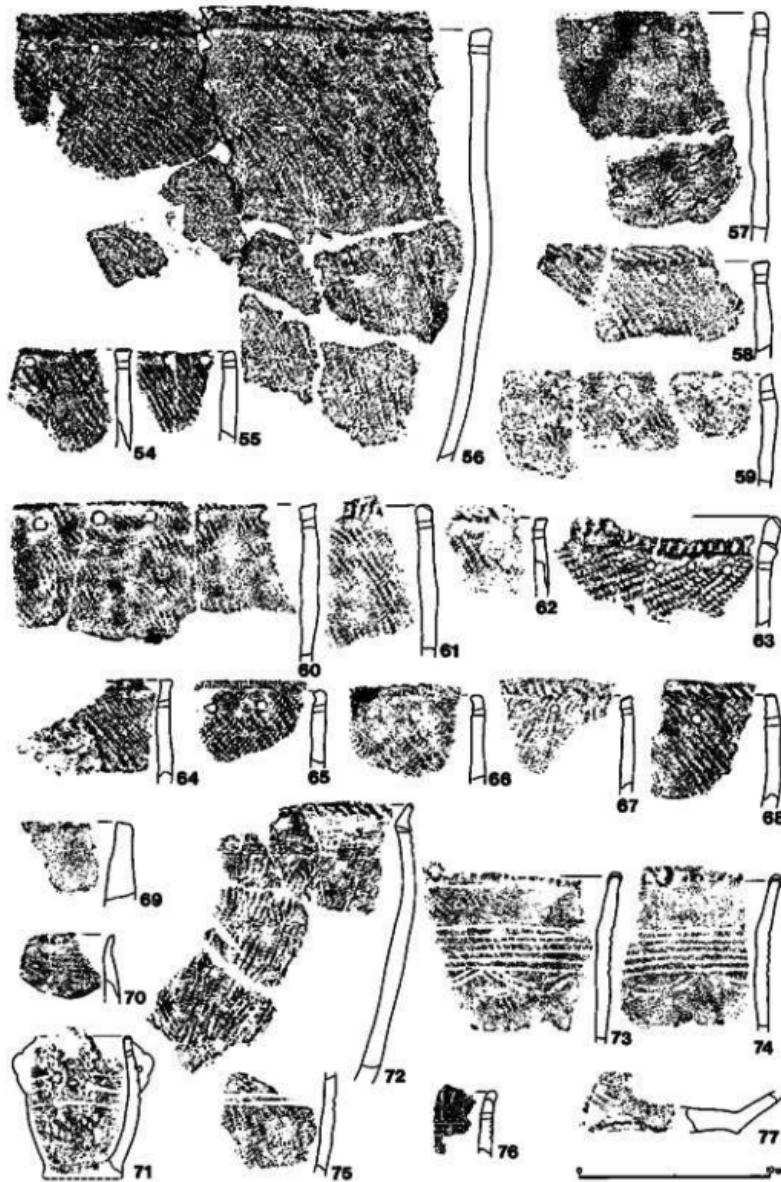
(種市 幸生)



図IV-17 B地区出土の土器(1)



図IV-16 B地区出土の土器(2)



図IV-19 B地区出土の土器(3)

b 石器等

B 地区からは、剥片石器46点、礫石器40点、石核2点および多量の剥片と礫が出土した。これらの石器群は、A 地区と同様に統繩文時代の土器群とともに出土したものである。しかし、地形を考慮した場合、上泊3遺跡で主体となる繩文時代中期の遺物が、含まれていないとはいえない。出土した石器の器種は、石鎌・石鉈先・石匙・ナイフ・搔器・削器・石斧・敲石・砥石・石鑿である。器種組成については、石鎌が当地區では1点も出土していないことと、石鎌の量が若干多いということだけで、A 地区との差異は顕著に認められない。なお、当地區も舌状台地の先端部だけを調査しただけなので、東上泊遺跡の性格を十分には、つかむことができなかった。

ポイント（図IV-20：1～4、図版IV-9）

I A 1：8点出土し、全て図示した。1～4は、黒曜石製の三角形鎌で、どれも狭長な形態である。基底部は、4点とも内湾している。素材面は、1と2が片面に、4が両面に残されている。6は、やや幅広の三角形鎌で、両面とも入念に調整されている。基底部は、内湾する。石質は、黒曜石である。5・7・8は、三角形鎌の中でも両側縁が若干張り出すタイプである。基底部は、8のみ平坦である。

I A 5：9・10の2点のみ出土している。どちらも両面加工の有茎鎌である。

I A 7：5点出土しているうちの4点を図示した。12は逆刺が不明瞭で、基部を欠損する。14は、尖頭部の大きさのわりに、基部が短く小さい。石質は全例、黒曜石である。

ナイフ（図IV-20・21：15～38、図版IV-9）

I C 1：15・16の2点のみ出土している。どちらも片面加工で、先端部が尖頭状になる石匙である。腹面は、つまみ部だけ加工されており、ほかは素材面を残している。

I C 2：17・18・20・22の4点が該当する。17は、背面中央に稜を有し、周辺のみを二次加工したものである。20は、若干刃部が張り出すタイプであるが、側面観は18と同様に内湾する。22は縦長になるナイフで、刃部および片側縁が鋭角的になる。石質は、17・18・20がメノウ、22が頁岩である。

I C 3：19・21・23～28が該当する。このうち柄を有するものは、24・26～34・37・38である。27は黒曜石製のナイフで、腹面はバルブ部分と柄部の片側縁にノッチ状の加工が施されている。28は、周辺部に入念な二次加工が施された両面加工ナイフである。30は、背面の両側縁を細かく調整したナイフである。刃角は高い。32は、両面とも両側縁から先端部にかけて、二次加工が施される。柄部は、ノッチ状に若干抉れる。38は、両面加工の偏平なナイフで、先端部は尖頭状になる。柄部は背面の左側縁部が若干抉れる。

スクレイバー（図IV-21：39～42、図版IV-9）

I D 1 : 39の1点のみ出土している。二次加工は、両面とも左側縁部に施されている。刃角は高い。

I D 3 : 削器としたものは、40~42の3点だけである。40は、黒曜石製の削器である。形態は、上部を欠損しているため、不明である。41は、断面が三角形となる片面加工の削器である。二次加工は、両側縁から稜に向かって加工が施されており、上・下端部は狭長となる。腹面は、偏平な素材面を残し、上端部にはバルブが認められる。42は、擬形をした削器である。二次加工は、背面の両側縁部に細かく施され、ほかは粗く剥離されている。腹面は、無加工である。

石斧（図IV-22：43~45、図版IV-10）

II A 3 : 43~45の3点が出土している。43は、刃部が欠損しているため形態が不明瞭であるが、断面の形状より本型式とした。基部先端部は、無加工のまま片寄っている。44は、刃部がやや幅広となる石斧である。両側縁部には、ペッキングによる整形痕が認められるが、ほかは研磨によって剥離面を消している。基部断面は、薄くなる。45は、長さ5.8cmの小型石斧である。刃部は、44と同様にやや幅広く、断面は偏平に近い。基部は、ほぼ平坦で、ペッキングのあとに両面を研磨している。石質は全例、緑色泥岩である。

敲石（図IV-22：46、図版IV-10）

II B 2 : 3点出土したうち、1点を図示した。46は、安山岩の円礫を素材とした敲石である。敲打痕は、円礫の一端にだけ認められる。

砥石（図IV-22・23：47~52、図版IV-10）

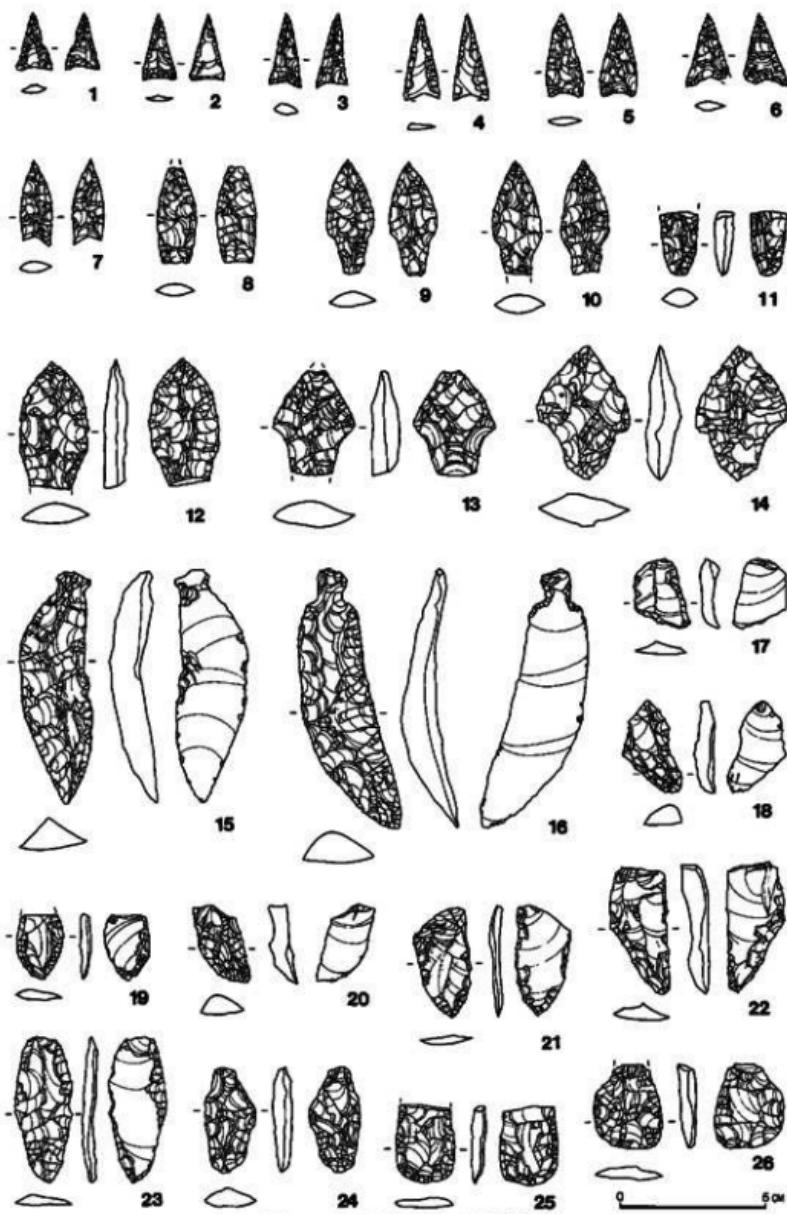
II D 1 : 48~50・52の4点を図示した。48は、砥面を両面に有する。規格は、長さ15.5cm、幅11.6cm、厚さ4.9cmと大型のもので、重量も1016gと重いことから、据え置き用の砥石と考えられる。49も両面に砥面を有するものである。正面中央には、不明瞭な溝状の研磨痕が認められる。50は、砥面を両面とも2分割して使用している。52も同様に、砥面を3ヵ所に有する砥石である。石質は全例、砂岩である。

II D 3 : 47・51の2点が該当する。47は、砥面を円礫の縦方向に4面と下部に1面有する。研磨方向は、それぞれ違っていることより、手持ち用の砥石であろう。石質は、珪藻質の泥岩である。51は、砥面を3面に有する砂岩質の砥石である。

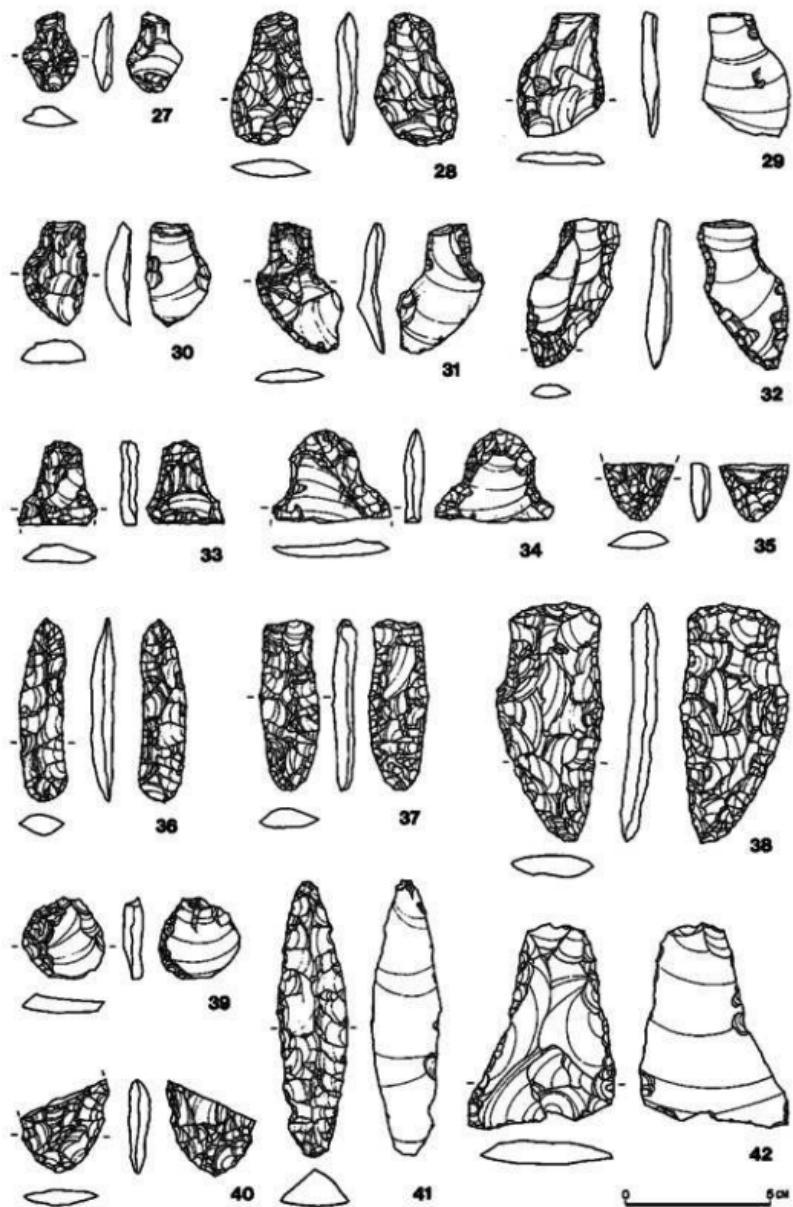
石錐（図IV-23・24・53~69、図版IV-10）

II F 1 : 損壊品を含め、17点が出土した。53~69が該当する。形態は、円礫あるいは椭円礫の長軸方向を打ち欠いたものばかりである。重量は、完形品で最小95.9g、最大472.0gである。石材は、安山岩・礫岩・泥岩・が使用されている。

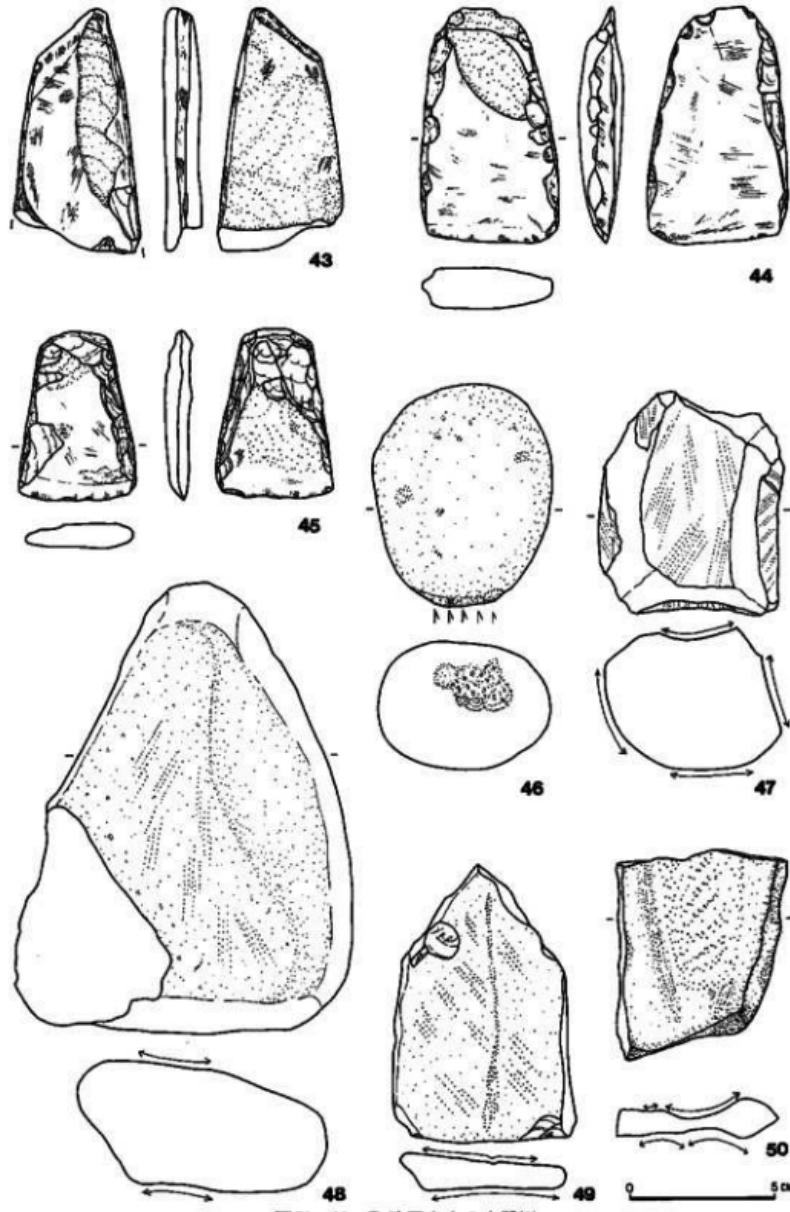
(森岡 健治)



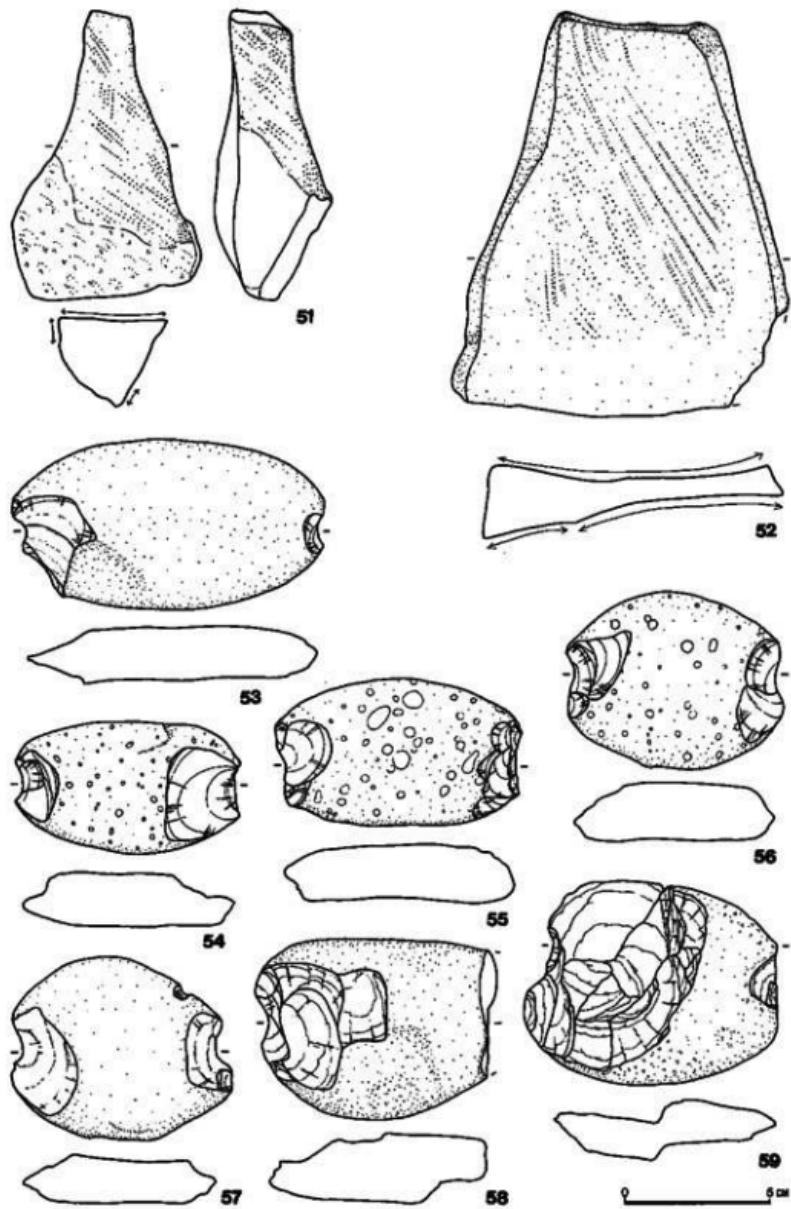
図IV-20 B地区出土の石器(1)



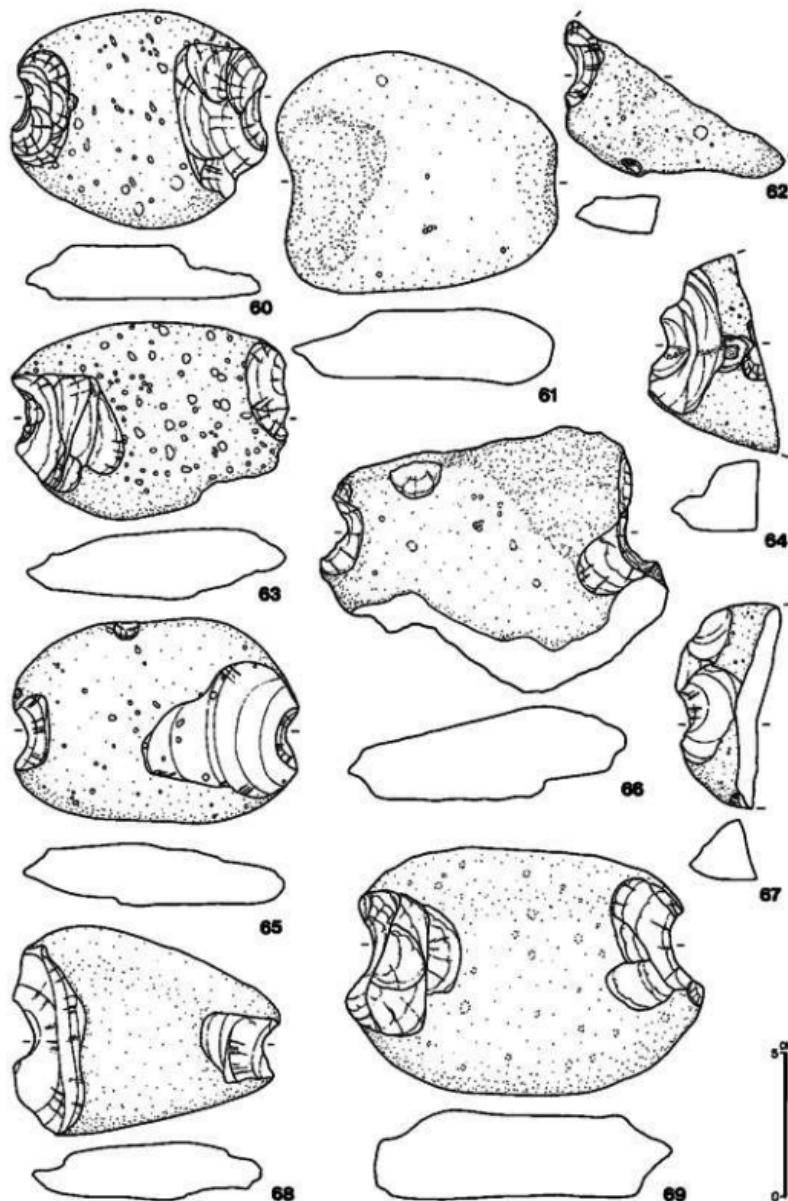
図IV-21 B地区出土の石器(2)



図IV-22 B地区出土の土器(3)



図IV-23 B地区出土の石器(4)



図IV-24 B地区出土の石器(5)

4 小 括

まえがきで述べた通り、今回調査した範囲は台地の先端部に当る部分で、遺跡はさらに山側に広がる可能性をもっている。その意味で、遺跡の一部を調査したにすぎない。

調査の結果、縄文時代中期の土器片3点、オホーツク時代初頭の土器と思われるものが2点あるが、圧倒的に統縄文時代前半の遺物が出土する。遺構は、焼土・土壙・礫群1か所検出された。後二者は、縄繩文式土器を伴なっているが、焼土については明確な伴出例はない。しかし焼土についても、遺物の分布から考えると統縄文時代のものと考えてよさそうである。墓と断定できるものは検出されていないが、B地区でP-3は、ほぼ定形に近い宇津内II式土器が壁の外近辺で横転した状態で出土したこと、その東側に焼土がかたまって分布することさらに管玉、ジャスパー製の石器がピットの傍から発見されていることなどを考え合わせると墓の可能性も考えられる。なお、宇津内IIb式土器は、P-3出土の1例しか出土していない。今回調査した範囲内では統縄文時代の住居跡は検出されなかった。しかし、復元土器10個体、5,000点を超える土器破片・石器、土壙・礫群・焼土の検出を考えると台地の奥の方に、住居跡の存在を暗示させたが、今回の調査では当遺跡の性格を浮き彫りにさせるまでにはいたらなかった。ただB地区では調査範囲がややきつい斜面で沢にすぐ降りれる場所であること、焼土あるいはP-2のように横底に焼けた礫が詰まっている例、さらに円礫、角礫などが広範囲にわたって散布するZ-1が分布することを考え合わせると野外の作業場としての意味をもっていたのかもしれない。

A地区・B地区から出土した統縄文式土器は、II群A類土器、II群B類土器、II群C類土器、宇津内IIb式土器、後北A式土器などである。これらのなかでは、II群B類土器が量的に最も多く出土している。他の2つの遺跡と比較しても本遺跡のII群B類土器の量が最も多い。器種は、深鉢・鉢で占められ、壺はきわめて稀で、台付鉢・浅鉢はない。深鉢は、P-1出土の復元土器のように胴部上半から口縁部にかけ強く内反する器形をもつものが典型である。文様は、口唇直下に突瘤あるいは貫通孔を横に一列にめぐらす例が圧倒的に多い。ただ、本遺跡出土のII群B類土器の突瘤は、必ずしも内側から突く例に極端に偏っているわけではない。道北地方で、このような土器がまとめて出土した調査例は今回がはじめてかと思われる。この種の土器は、道東地方の下田ノ沢遺跡出土の土器に類似が求められる。斜里地方の統縄文時代前半に位置づけられる宇津内IIa式土器は本遺跡では出土していない。

II群A類土器は、東北地方の二枚構式土器の影響を受けたものと思われる資料である。変形工字文風の文様と突瘤文が組み合わさった例と、突瘤文のみをもった例がある。

II群C類土器は、口縁部に突瘤あるいは貫通孔をもち器形において口縁部・頭部・肩部との屈折を明瞭にしているもので、いわゆる恵山式土器の影響を受けたものと思われる。

宇津内IIb式土器はP-3から出土した資料しかない。これに伴出する在地系の土器は今のところ不明である。後北A式土器も数点ではあるが見られる。鈴谷式土器は、発見されなかった。

本遺跡の出土の石器は、次のような特徴をもっている。まず、剝片石器においては、石錐は三角形錐が主体となり、石鉈先は有茎の例のみである。さらにナイフは各種の形態があるが、とりわけIC2とした観い切出刃状のものと、有柄のものが多い。このうち、槍先形の形態をしたものは道東地方で多く見られる。なお、遼南地方で主体となる幅広の刃部を有したもののは出土していない。

礫石器については、出土数が限られているためはっきりしたことは述べられないが、気がついたことは次の点である。石斧は、中型のものばかりで断面は偏平なものが多い。恵山式土器に多く伴なう、身部と刃部との間に明瞭なリッジがあるものはない。石錐は円錐あるいは橢円錐の長軸を打ち欠いた資料で、短軸を打ち欠いた例はない。恵山式土器に伴なう「魚形石器」は出土していない。本遺跡出土の石器群は、そのほとんどが道東地方における縄文時代晩期の石器に類似する。

(種市 幸生)

表IV-1

遺構別出土・掲載遺物一覧

A 地区

P-3

名 称	分 類	數 量		名 称	分 類	數 量	
		覆 土	床 面			覆 土	床 面
土 器	絆 縄 文	41		ナ イ フ	IC	1	
石 錐	IA	1		使用痕のある剝片		1	
石 锤	IB	1					

辨認番号	分 類	層 位	特 色				
			覆 土	口唇に刻み。外面と内面に縦縞文。口縁の上面觀は六角形を呈す。			
1	宇津内IIb	覆 土		0→I			
2	II-B	#		I→O。口唇に刻み。胎土に砂粒混入。			
3	#	#		I→O (突瘤)、口唇に刻み。縦縞文。			
4	#	#		脚部。楕圓压痕。			
5	#	#					

辨認番号	器種名	層 序	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石 質	分 類	備 考	
N-3 6	石 錐	覆 土	2.7	1.8	0.35	1.5	Ag.	IA 1		
7	石 锤	#	2.85	0.8	0.6	3.0	Ag.	IB 3		
8	ナ イ フ	#	2.2	3.1	1.76	5.3	"	IC 3		
9	削 器	#	6.6	3.4	1.76	27.8	Sha.	ID 3		

F - 2

名 称	分 類	數 量	
		ID	1

辨認番号	器種名	層 序	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石 質	分 類	備 考	
N-5 1	刮 器	上 面	3.4	2.5	0.165	5.4	Sha.	ID 2		

B 地区

P-1

名 称	分 類	數 量		名 称	分 類	數 量	
		覆 土	床 面			石 錐	H F
土 器 縱 繩 文		1				1	

持 団 号	分 類	層 位	特 色				
1	H - B	覆 土	O → I.	地文は R L の縦文。口唇に割み。外面の一部に炭化物付着。胎土は粗い砂粒を含む。			

持 団 号	分 類	層 位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石 質	分 類	備 考
IV-15 2	石 錐	境 口 部	6.8	7.5	1.6	128.1	And.	H F 1	

P-2

名 称	分 類	數 量	
		覆 土	床 面
土 器 縱 繩 文		31	

持 団 号	分 類	層 位	特 色				
1	H - B	覆 土	O → I.	無文。胎土に粗い砂粒を含む。内面炭化物付着。			

Z-1

名 器	分 類	數 量
土 器	統 繩 文	18

持 団 号	分 類	層 位	特 色				
1	H - B		O → I.	地文は複数 L R L。竹管状工具による刺突。胎土に粗い砂粒含む。			
2	"		I → O.	地文は L R. 横走沈線。内面に炭化物付着。			
3	"		I → O.	横走沈線。内面に炭化物付着。			
4	"		胴部。	地文は R L の縦文。胎土に砂粒を含む。			
5	"		I → O.	口唇にきざみ。			
6	"		I → O.	胴部。刺突。沈線。			
7	"		胴部。	地文は R L の縦文。胎土に砂粒を多く含む。			
8	"		胴部。	地文は複数 L R L. 竹管状工具による刺突。胎土に粗い砂粒含む。			
9	"		胴部。				
10	"		胴部。				
11	"		胴部。	胎土は小砂利を多く含む。			
12	"		胴部。	胎土は粗い砂粒を多く含む。			
13	"		底部。	胎土は粗い砂粒をやや多く含む。			

包含層掲載遺物一覧

A 地区

土 器

持 団 号	グリッド	分 類	特 色
1	B-2-d	H - B	I → O. 胎土に粗い砂粒混入。
2	A-2-b	"	無文。胎土に粗い砂粒を多く含む。
3	A-1-c	"	點痕と縦の刺突列。
4	"	"	小型。手づくね。
5	A-2-d	H - C	O → I. 沈線、両端の刺突。

持 団 号	グリッド	分 類	特 色
6	B-2-d	H - C	縦條文。縦條の刺突。
7	"	"	口唇に割み。内面に施文。
8	B-2-b	H - A	O → I. 口唇に割み。
9	B-2-c	"	O → I. 口唇に縫の圧痕と炭化物付着。
10	B-2-a	"	胴部。9と同一個体。

表IV-3

博団番号	グリッド	分類	特 色		博団番号	グリッド	分類	特 色	
			II-A	III-B				I-O(突痕)	III-C
11	A-1-d	"	断部。		37	B-2-c	II-B	I-O(突痕)	III-C
12	B-2-c	"	断部。		38	"	"	37と同一個体。	
13	"	"	口唇に刻み。横走沈線。		39	A-2-b	"	O-I。	
14	A-2-b	"	I→O。内面に炭化物付着。		40	B-2-a	"	I-O(突痕) 口唇に刻み。	
15	C-2-d	"	O-I。粘土に粗い砂粒を含む。		41	A-2-b	"	40と同一個体	
16	B-2-d	"	口唇に溝の圧痕。内面に炭化物付着。		42	A-2-a	"	I-O。口唇に刻み。沈線と縦線文。	
17	A-1-d	"	O-I。口唇部に刻み。口唇部に縦線文。		43	B-2-c	"	I-O。口唇に縦線文。	
18	A-2-d	"	O-I(突痕) 口唇部に縦線文。		44	B-2-d	"	縦線圧痕と縦線文。	
19	A-2-b	"	O-I。口唇部に縦線文。		45	"	"	断部。縫合刺突。	
20	A-2-d	"	口唇部に縦線文と粘着。		46	B-2-c	"	I-O。口唇に刻み。沈線。	
21	A-2-a	"	O-I。		47	"	"	口唇に刻み。沈線。	
22	B-2-c	"	O-I。口唇上端に縦線部に縦線文。		48	"	"	O-I。口唇に刻み。沈線と短刻線。	
23	B-2-b	"	O-I。口唇部に縦線文。		49	B-2-a	"	48と同一個体。	
24	B-2-a	"	口唇上に地文を施す。口唇部に縦線文。		50	B-2-d	"	口唇に施文。縦線文と縦線圧痕。	
25	A-1-c	"	O-I。口唇部に刻み。口唇部に縦線文。		51	B-2-c	"	突起。横走沈線。	
26	A-2-b	"	O-I。		52	B-2-d	"	口唇に刻み。口唇部に施文。53-54と同一個体。	
27	B-2-a	II-B	O-I。口唇角に縫合の圧痕。		53	B-2-a	"	52-54と同一個体。	
28	B-2-b	"	O-I。口唇角に縫合の圧痕。		54	B-2-c	"	53-54と同一個体。	
29	A-1-d	"	O-I。		55	B-2-d	"	調部。列点文と横走沈線。	
30	A-1-a	"	O-I。無文。内面に炭化物付着。		56	B-2-	不明	I-O。粘土に粗い砂粒を含む。	
31	A-1-d	"	O-I。外面に炭化物付着。		57	B-2-d	"	無文。炭化物付着。	
32	A-2-d	"	O-I。		58	B-2-d	後北A	口唇部に横走刻線。補修孔2個。	
33	C-2-d	"	I→O(突痕) 口唇に縫合の圧痕。		59	笄 土	"	縫合の點付帶上にRL施文。列点文。	
34	B-2-d	"	I→O。口唇部に縫合の圧痕。炭化物付着。		60	B-2-d	"	口唇と口唇部に列点文。裏の點付帶剥離。	
35	"	"	O-I。口唇部に縫合の圧痕。炭化物付着。		61	A-2-d	III	I-O。點付帶に斜めの刻み。61と同一個体。	
36	"	"	無文。粘土に粗い砂粒混入。		62	"	"	61と同一個体。	
					63	A-1-d	不 明	底部。粘土に小沙利混入。	

石 器

博団番号	器種名	出土地点	層序	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重 量(g)	石 質	分 類	備 考
N-8 1	石 簸	B-2-c	II	(1.9)	(0.9)	0.3	(0.2)	Sha.	I A 1	基部右側縫欠損
2	"	"	I	2.5	1.5	0.3	0.6	Obs.	"	
3	"	A-2-b	II	(2.6)	(1.5)	0.3	(0.6)	"	"	基部両側縫欠損
4	"	A-2-a	"	3.0	1.5	0.4	1.2	Sha.	"	
5	"	B-2-d	"	2.6	1.4	0.3	1.0	Obs	I A 2	
6	"	A-2-d	I	(2.2)	1.4	0.4	(0.9)	"	"	基部欠損
7	"	A-2-a	II	(2.5)	1.4	0.4	(1.4)	"	"	"
8	"	B-3-a	"	(2.5)	1.0	0.3	(0.7)	"	I A 3	上・下堆部欠損
9	"	A-2-a	"	3.7	1.3	0.4	1.4	Sha.	I A 5	
10	"	A-2-b	"	(2.6)	1.5	0.6	(2.0)	Obs.	I A	先端部・基部欠損
11	石 簸 先	"	I	6.4	3.0	0.9	14.8	Sha.	I A 7	
12	"	A-1-d	II	(2.2)	(1.7)	(0.6)	(2.2)	Obs.	"	尖頭部欠損
13	"	B-2-d	"	(2.9)	(2.2)	(0.8)	(5.2)	Sha.	"	"
14	石 簸	B-2-c	"	(3.6)	1.8	0.4	(2.8)	"	I B 2	先端部欠損
15	"	A-2-c	"	2.0	2.5	0.2	2.0	"	"	
16	"	A-2-a	"	(3.2)	1.5	0.2	(1.5)	Obs.	I B 3	上部欠損
17	"	A-2-c	"	3.8	1.5	0.3	3.3	Sha.	"	
18	石 起	A-2-b	I	6.5	3.3	1.3	39.0	"	I C 1	
19	"	"	II	7.5	5.7	1.6	25.7	"	"	
20	"	A-1-e	I	7.2	2.0	0.6	6.8	"	"	

標図番号	器種名	出土地点	層序	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
W-8 21	ナイフ	A-2-a	II	3.6	1.4	0.6	3.1	"	I C 3	
22	"	A-1-d	"	3.0	1.7	1.1	4.3	Aga.	I C 2	
23	"	A-2-a	"	4.0	1.8	0.6	4.3	Sha.	"	
24	"	A-2-c	I	3.8	1.9	1.1	6.5	Aga.	"	
25	"	B-3-a	II	3.4	2.2	0.8	5.7	"	"	
26	"	A-2-c	I	2.8	2.4	0.7	4.9	Sha.	"	
W-9 27	"	A-2-a	II	(3.5)	2.6	0.8	(6.5)	"	"	上端部欠損
28	"	C-2-d	"	5.3	2.7	0.7	9.1	"	I C 3	
29	"	A-2-d	I	6.1	3.0	0.9	16.3	"	"	
30	"	A-2-c	"	4.8	2.5	0.6	5.9	Oba.	"	
31	"	B-2-a	"	5.0	2.5	0.7	8.6	Sha.	"	
32	"	A-2-b	"	7.3	3.4	0.7	17.6	"	"	
33	"	A-1-c	"	4.9	2.5	0.7	9.1	"	"	
34	"	A-2-b	"	4.6	3.3	0.7	10.8	Oba.	"	
35	"	"	"	(3.6)	(3.2)	(0.9)	(12.1)	"	"	身部欠損
36	"	A-2-c	"	6.4	2.7	0.6	11.0	Sha.	"	
37	"	A-1-c	"	6.4	2.5	0.6	9.6	"	"	
38	"	A-2-d	"	(2.7)	(2.9)	(0.5)	(3.7)	Oba.	"	身部欠損
39	"	B-2-d	"	5.7	2.2	0.4	5.4	Sha.	"	
40	"	B-2-b	"	3.9	2.1	0.7	5.8	"	"	
41	"	B-2-a	II	(4.6)	2.3	0.9	(11.4)	"	"	先端部欠損
42	"	A-2-b	"	5.9	2.3	0.7	7.9	"	"	
W-10 43	"	B-2-d	"	6.9	2.2	0.7	11.9	"	"	
44	"	A-2-a	"	8.3	3.2	0.5	24.5	"	"	
45	"	"	"	4.8	3.4	0.8	13.1	"	"	
46	削器	B-2-a	"	(5.0)	(3.7)	(1.4)	(20.5)	Oba.	I D 3	上部欠損
47	"	A-2-b	I	(4.0)	(2.8)	(0.7)	(7.2)	Sha.	"	"
48	"	"	II	(4.4)	(3.0)	(0.9)	(12.2)	"	"	
49	"	"	"	(5.5)	(4.2)	(1.1)	(22.4)	"	"	
50	"	A-1-d	"	(6.3)	(3.7)	(1.1)	(18.6)	"	"	
51	"	A-1-d	I	(6.3)	3.6	0.7	(22.3)	"	"	下端部欠損
52	搔器	A-2-b	II	4.5	2.4	0.9	12.5	Oba.	I D 2	
53	"	A-2-d	"	(3.6)	2.8	1.2	(11.0)	Aga.	"	上部欠損
54	"	B-2-d	I	4.5	3.2	0.8	17.4	"	"	
55	削器	A-1-d	II	(2.7)	(6.7)	(1.0)	(15.2)	Sha.	I D 3	上部欠損
W-11 56	"	A-2-b	I	(3.0)	(4.8)	(0.8)	(9.4)	"	"	
57	"	"	"	(5.8)	(5.8)	(1.3)	(46.0)	"	"	下部欠損
58	"	A-1-d	II	11.5	4.0	1.7	54.4	"	"	
59	"	A-2-d	"	(3.4)	(5.6)	(1.3)	(25.1)	"	"	下部欠損
60	"	A-1-c	I	(6.0)	(3.6)	(0.9)	(15.2)	"	"	"
61	"	A-1-d	"	(5.5)	(9.5)	(1.4)	(77.5)	"	"	"
62	"	B-2-b	"	9.3	4.1	1.1	37.2	"	"	
63	棒状原石	A-2-b	"	9.3	1.4	0.9	18.5	Oba.	WB	
64	"	B-2-d	"	2.6	1.3	1.1	4.6	"	"	
65	管五	B-2-a	II	2.9	1.2	1.1	5.7	Ta.	WA	
W-12 66	石斧	A-2-d	"	(6.0)	3.6	1.0	(42.0)	Gr. Mud.	II A 3	基部欠損
67	"	A-2-a	"	(10.7)	4.9	2.7	(253.0)	"	"	刃部欠損
68	"	B-2-d	"	(9.8)	6.4	1.8	(220.0)	Ta.	"	基部欠損
69	敲石	A-2-a	"	9.3	6.3	5.2	545.0	Cong.	II B 1	
70	"	B-2-d	I	7.8	5.9	5.1	287.0	And.	"	

表IV-5

博団番号	器種名	出土地点	層序	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
IV-12	71	麻 石	B-2-b	I	11.6	6.0	3.9	Cong.	II B 2	
	72	"	A-2-b	II	8.1	7.3	5.9	"	II B 1	
	73	"	"	I	5.9	5.1	4.2	Che.	II B 2	
IV-13	74	"	A-2-a	II	9.3	5.1	4.6	300.0	And.	"
	75	砾 石	"	I	(14.1)	6.9	1.5	(183.1)	Gr. Mud.	II D 1
	76	"	B-2-d	"	(12.7)	8.8	2.8	(374.0)	Sa.	"
77	石 無	C-2-d	"	5.6	6.7	1.9	66.0	And.	II F 1	
78	砾 石	A-2-c	"	9.5	5.8	1.8	120.0	Sa.	II D 1	
79	"	A-2-a	"	10.8	3.3	2.2	134.0	"	II D 3	
80	石 無	A-2-b	"	8.3	8.3	2.5	220.0	And.	II F 1	

B地区 土器

博団番号	グリッド	分類	特 色	博団番号	グリッド	分類	特 色
1	A-3-c	II-C	O→I (突瘤)。	38	A-4-c	II-B	O-I。口縁部に隆起部を持つ。
2	A-3-d	II-B	3条の縦線文と1条の沈線。	39	A-3-d	"	O→I。口唇に割れ。
3	B-3-c	II-A	沈線。炭化物付着。	40	A-3-c	"	O→I。口唇角に割れ。
4	B-3-d	"	O→I。口唇に割れ。沈線。5-6と同一個体。	41	B-4-a	"	O→I。
5	A-3-d	"	割れ。4-6と同一個体。	42	A-3-c	"	O→I。口唇に施文。推定口径19.8cm
6	"	"	割れ。4-5と同一個体。	43	"	"	O→I。口唇に施文。
7	A-4-c	"	O→I (突瘤)。口唇に直み。沈線。	44	B-4-d	"	O→I。器底に低い砂粒を含む。炭化物付着。
8	A-4-d	"	O→I。口唇に直みの圧痕。沈線。	45	A-3-c	"	O→I (突瘤)。口唇に施文。炭化物付着。
9	"	"	1→O。胎土に低い砂粒を多く含む。沈線。	46	A-4-c	"	O→I。無文。
10	B-4-a	"	O→I。胎土に小砂粒を多く含む。沈線。	47	"	"	O→I (突瘤)。無文。推定口径10.5cm
11	B-4-d	"	10と同一個体。	48	A-4-b	"	47と同一個体。
12	B-4-a	"	O→I。圓線文。	49	B-4-d	"	I→O。胎土に砂粒を多く含む。
13	"	"	O→I。口唇に施文。胎土面間に列点文。	50	"	"	I→O。
14	A-4-d	"	O→I。口唇に割れ。突起に剥痕。列点文。	51	"	"	I→O。
15	A-4-c	"	14と同一個体。	52	"	"	I→O。胎土に低い砂粒を含む。
16	A-4-d	"	O→I。口唇擦り消し。	53	"	"	S2と同一個体。
17	A-4-c	"	I→O。口唇に割れ。	54	A-3-c	"	O→I。
18	A-4-a	"	O→I。口唇に沈線と掲線文。	55	B-4-b	"	O→I。
19	"	"	18と同一個体。	56	A-4-c	"	O→I。口唇に施文。内面に炭化物付着。
20	A-4-c	"	O→I。竹管文。	57	A-3-d	"	O→I。内面に炭化物付着。
21	B-4-d	II-B	口唇に割れ。	58	"	"	O→I。口唇に施文。胎土に砂を多く含む。
22	A-4-c	"	小型。口唇に施文。	59	"	"	O→I。
23	A-3-c	"	I→O (突瘤)。	60	"	"	O→I。内面に炭化物付着。
24	"	"	I→O (突瘤)。	61	A-4-c	"	O→I。口唇に割れ。
25	"	"	O→I。圓線文。	62	A-3-c	"	O→I。口唇に割れ。
26	B-4-d	"	O→I。圓線文。	63	A-4-c	"	O→I。口唇に割れ。
27	A-4-d	"	圓線文。	64	A-3-d	"	O→I。内面に炭化物付着。
28	B-4-a	"	O→I。圓線文。29と同一個体。	65	A-4-c	"	O→I。口唇に施文。
29	"	"	28と同一個体。	66	"	"	O→I。口唇に施文。内面に炭化物付着。
30	B-4-d	"	O→I。口唇に直みの圧痕。圓線文。	67	A-4-b	"	O→I。口唇に直みの圧痕。炭化物付着。
31	A-4-d	"	割れ。沈線。横に剥痕突起。	68	B-4-a	"	O→I。口唇に割れ。炭化物付着。
32	B-4-a	"	I→O (突瘤)。横に剥痕突起。33と同一個体。	69	拂 土	"	無文。
33	B-4-d	"	32と同一個体。	70	B-4-d	"	胎土に砂粒を多く含む。
34	A-3-c	"	0→I。内面に炭化物付着。	71	A-4-d	"	小型。貼帯。沈線。
35	A-4-e	"	O→I。胎土に細かい砂粒を含む。	72	B-4-d	II-C	I→O (突瘤)。口唇に直みの圧痕。圓線文。
36	"	"	35と同一個体。	73	B-3-a	"	口唇に割れ。貼付突起。沈線。
37	A-3-c	"	O→I。口唇に割れ。	74	B-4-d	"	73と同一個体。

表IV-6

標題番号	グリッド	分類	特 色	標題番号	グリッド	分類	特 色
75	A-4-a	II-C	頭部。沈縫。	76	A-3-d	II-C	0→I。縦と横の沈縫と斜突列。
				77	A-4	"	底部。

石 器

標題番号	器種名	出土地点	層序	長さ回	幅 回	厚さ回	重 量 (g)	石 質	分 類	備 考
N-20 1	石 砥	B-4-c	II	2.0	1.2	0.3	0.4	Obs.	I A 1	
2	"	"	"	2.3	1.2	0.2	0.3	"	"	
3	"	B-4-b	I	2.5	1.1	0.4	0.6	"	"	
4	"	B-4-c	II	2.9	1.2	0.2	0.4	"	"	
5	"	B-4-d	"	2.8	1.3	0.3	0.8	"	"	
6	"	A-4-d	I	(2.5)	(1.5)	0.3	(0.7)	"	"	基部右側縫欠損
7	"	B-4-c	"	2.9	1.2	0.4	1.1	Aga.	"	
8	"	A-4-c	"	(3.3)	1.4	0.4	(1.8)	Sha.	"	先端部欠損
9	"	B-4-d	II	3.9	1.7	0.5	2.6	Obs.	I A 5	
10	"	"	"	(3.9)	1.7	0.6	(3.2)	"	"	下端部欠損
11	石 銛 先	A-4-a	I	(2.1)	(1.3)	(0.6)	(1.6)	"	I A 7	尖頭部欠損
12	"	A-4-b	II	(4.4)	2.5	0.7	(7.5)	"	"	基部欠損
13	"	A-4-c	I	(3.6)	2.8	0.9	(8.0)	"	"	上・下端部欠損
14	"	B-4-a	"	4.6	3.2	1.1	9.8	"	"	
15	石 起	A-4-b	II	7.9	2.5	1.1	18.7	Sha.	I C 1	
16	"	"	"	8.9	3.5	1.1	23.6	"	"	
17	ナ イ フ	A-5-b	I	2.4	1.9	0.4	2.1	Aga.	I C 2	
18	"	B-4-d	"	3.2	2.1	0.7	3.7	"	"	
19	"	A-4-d	"	(2.2)	1.6	0.4	(1.3)	"	I C 3	上端部欠損
20	"	B-4-a	II	2.7	2.0	0.7	3.8	"	I C 2	
21	"	A-4-c	"	3.8	2.0	0.3	2.3	Obs.	I C 3	
22	"	A-4-a	"	4.4	2.0	0.6	6.0	Sha.	I C 2	
23	"	"	"	5.0	2.0	0.4	3.9	"	I C 3	
24	"	A-3-d	"	3.6	1.8	0.6	3.9	Aga.	"	
25	"	A-4-c	"	(2.7)	2.0	0.3	(3.0)	"	"	上部欠損
26	"	"	"	(2.9)	2.4	0.5	(3.8)	"	"	"
N-21 27	"	A-4-d	I	2.7	1.9	0.7	2.4	Obs.	"	
28	"	A-4-b	II	4.5	2.7	0.6	7.7	Sha.	"	
29	"	A-4-c	"	4.2	3.0	0.4	6.8	Aga.	"	
30	"	B-4-b	"	3.5	2.2	0.8	6.6	"	"	
31	"	B-4-c	"	4.4	3.0	0.5	6.0	Obs.	"	
32	"	"	"	5.1	3.1	0.5	9.4	Sha.	"	
33	"	A-4-a	"	(2.8)	2.7	0.7	(4.0)	Obs.	"	身部欠損
34	"	B-4-d	"	(3.2)	4.1	0.6	(5.9)	"	"	"
35	"	A-4-d	I	(2.0)	2.4	0.6	(2.5)	"	"	上部欠損
36	"	B-4-c	II	6.3	1.6	0.7	7.2	Aga.	"	
37	"	A-4-a	I	5.9	2.1	0.7	9.1	Sha.	"	
38	"	"	"	8.2	3.7	0.8	25.9	"	"	
39	搔 器	"	"	2.8	2.8	0.7	5.0	Obs.	I D 1	
40	"	A-4-d	"	(3.2)	(3.0)	0.6	(5.4)	"	I D 3	上部欠損
41	"	A-4-a	"	9.5	2.5	1.2	20.9	Sha.	"	
42	"	"	"	7.1	5.1	0.8	31.8	"	"	
N-22 43	石 斧	A-5-a	"	(8.3)	4.3	1.2	(62.5)	Gr. Mud.	II A 3	刃部欠損
44	"	A-4-a	"	8.0	4.8	1.4	89.5	"	"	
45	"	A-4-b	II	5.8	4.1	0.9	33.4	"	"	

表IV-7

博物番号	器種名	出土地点	層序	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
IV-22 46	敲 石	A-4-b	I	7.6	6.2	4.4	298.0	And.	II B 2	
47	砧 石	"	"	7.7	6.4	4.9	274.0	Dia. Mud.	II D 3	
48	"	A-4-c	"	15.5	11.6	4.9	1016.0	Sa	II D 1	
49	"	B-4-d	II	9.6	6.4	1.3	101.5	"	"	
50	"	A-4-d	"	7.2	5.9	1.4	134.0	"	"	
IV-23 51	"	A-4-c	I	9.9	6.5	3.0	120.0	"	II D 3	
52	"	B-4-d	"	13.9	(11.5)	2.5	(366.0)	"	II D 1	
53	石 錐	A-4-d	"	10.8	5.8	2.0	170.7	Mud.	II F 1	
54	"	A-4-b	"	7.8	4.6	1.9	95.9	And.	"	
55	"	A-4-d	II	8.5	5.0	2.0	119.2	"	"	
56	"	"	I	7.5	6.0	2.0	130.2	"	"	
57	"	A-5-a	"	7.7	6.3	1.7	119.3	Cong.	"	
58	"	B-4-b	"	(8.3)	6.2	2.4	(173.9)	"	"	右側打欠部欠損
59	"	A-4-d	II	8.8	7.0	2.0	127.5	And.	"	
IV-24 60	"	"	"	8.7	7.4	1.9	164.2	"	"	
61	"	A-5-a	I	9.6	8.3	2.6	300.4	Cong.	"	
62	"	A-4-c	"	(7.6)	(5.3)	1.3	(48.9)	And.	"	半分欠損
63	"	A-4-d	II	9.5	6.8	2.4	198.3	"	"	
64	"	A-4-c	I	(4.5)	(6.9)	2.4	(67.3)	"	"	%欠損
65	"	A-4-d	"	9.8	7.2	2.1	200.0	"	"	
66	"	"	"	12.0	9.2	3.2	409.0	"	"	
67	"	A-4-c	"	(3.6)	(7.0)	2.1	(58.0)	"	"	%欠損
68	"	A-5-a	"	9.2	7.2	2.0	156.2	"	"	
69	"	A-4-c	II	12.3	8.5	3.1	472.0	"	"	



1. 調査前風景



2. 調査後風景



1. P-1 遺物出土狀況



2. P-1 土器



3. P-1 石錘



1. 調查風景

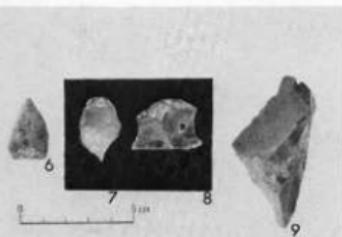


2. P-2 碑出土狀況

図版 IV-4



1. P-3 遺物出土状況



2. P-3 石器



3. P-3 土器



4. 同左 別面



1. Z-1 遺物出土状況



2. A 地区出土の土器(2)



3. B 地区出土の土器(1)



4. B 地区出土の土器(4)

- 69 -



5. 同左 底部



1. A地区出土の土器(1)



2. A地区出土の土器(3)



3. A地器出土の土器(4)



4. B地区出土の土器(3)



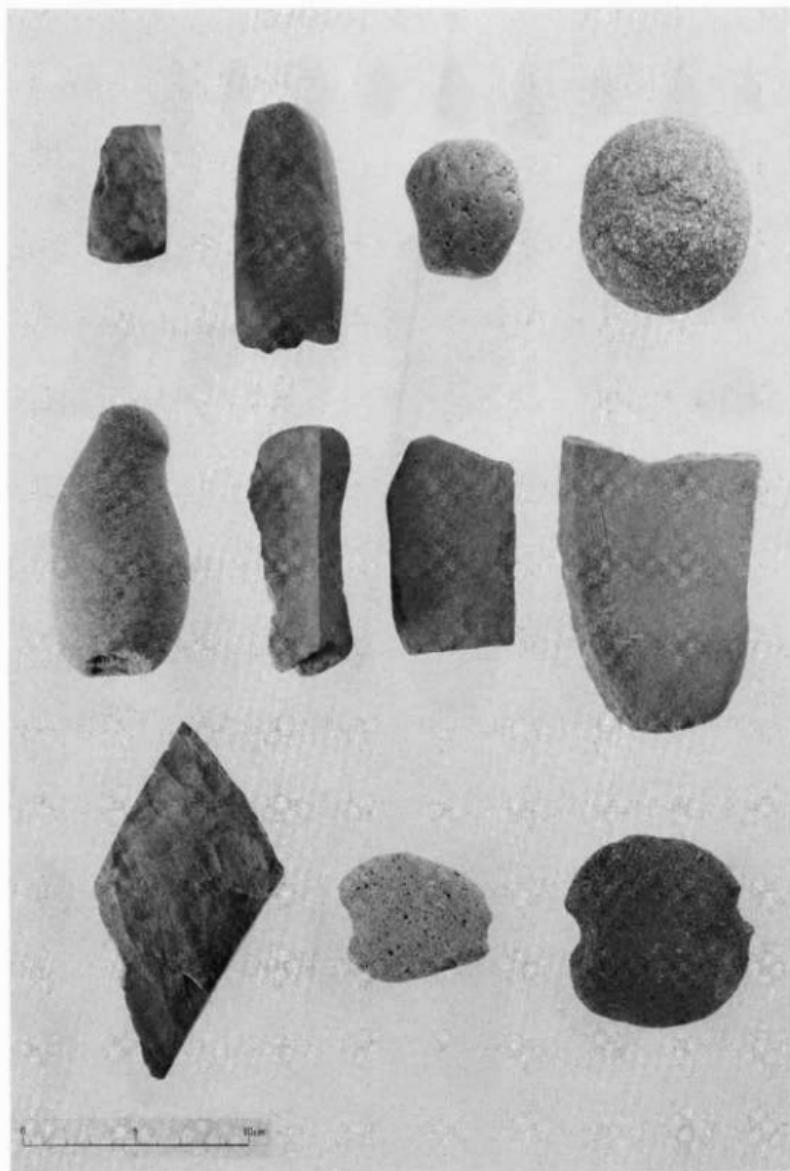
5. A地区出土の土器(5)



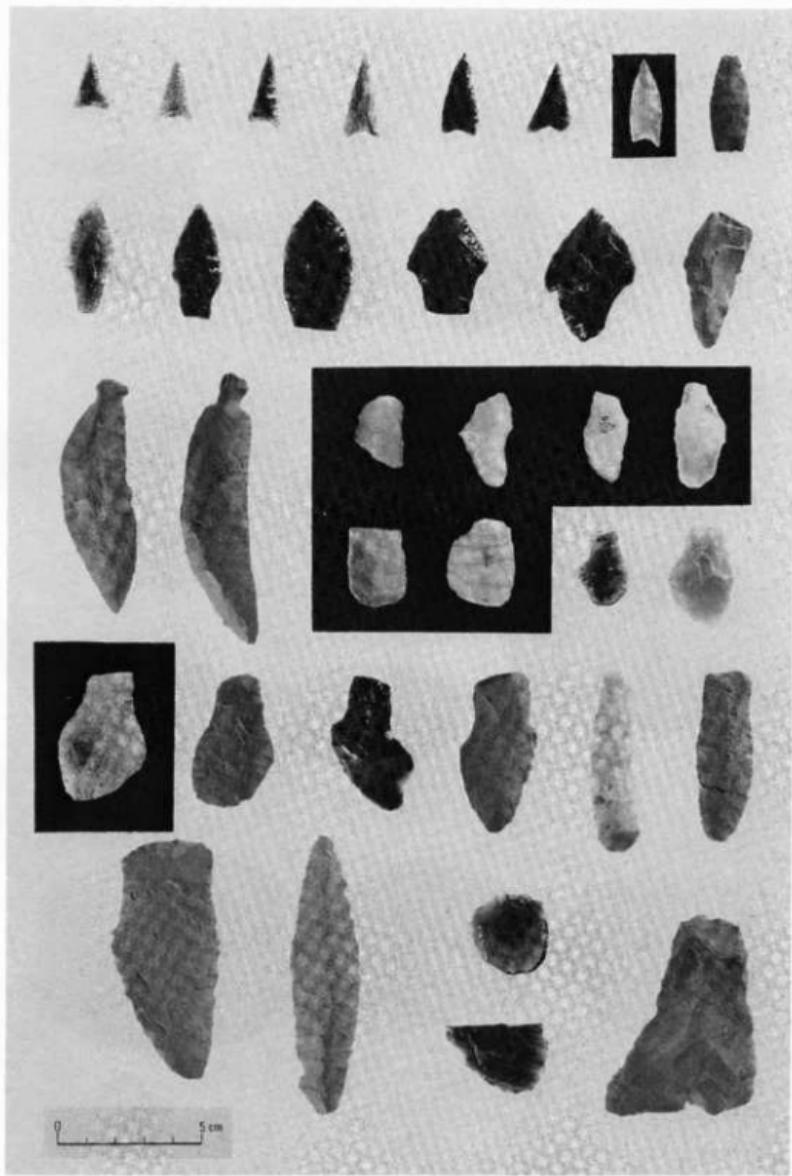
6. B地区出土の土器(2)



A 地区出土の剥片石器等



A 地区出土の砾石器



B地区出土の剥片石器



B 地区出土の砾石器

V 上泊 3 遺跡

V 上泊3遺跡

1 まえがき

遺跡の位置する台地は、標高10~30mの平坦な段丘で、海に東面し、北海道本島や南東に利尻島を眺むことができる。南北を小谷によって、東上泊・上泊4遺跡のある段丘面と切り放されており、先端で幅約120mの、南北に長い台地になっている。調査面積は、先端から約5m内に入った幅25~30m、長さが台地の端から端まで約100mをはかる、細長い範囲の2,610m²である。

層序は、基本層序で述べた通りであるが、籠根や耕作でI・II層が、かなり擾乱をうけている。縄文時代中期と統縄文時代初頭の重複した遺跡で、台地の両端と先端に、遺構・遺物の集中する傾向がある。確認された遺構は、住居跡(H)6軒(うち1軒が統縄文時代)、土壙(P)14基、集落(Z)10基、石組み炉跡(S)1基、焼土(F)57基の他。遺物が大量に出土した廃棄場跡、礫・石錐集中区である。いずれも、III・IV層に営まれている。遺物点数は、土器19,878点(うち統縄文時代260点)、石器等3,200点で、礫やフレイクを加えると総計8万点を超える。

縄文時代中期の集落の調査とともに、廃棄場跡や礫・石錐集中区、H-1上面揚土から大量の土器や石錐等が出土することが、その出土状態とともに重要である。また各処からの土樣サンプルより得られた、魚骨・海獣骨等やその加工品の資料も注目される。

(三浦 正人)

2 遺構

i 住居跡

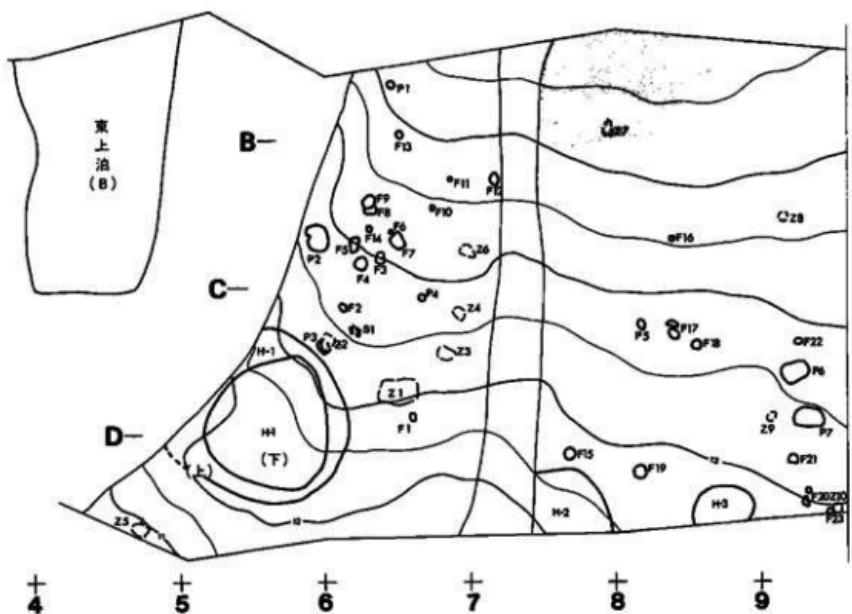
H-1(上・下面)(図V-6~20、図版V-3~17、表V-1・11~15)

調査前にすでに、周囲に高まりをもった円形の窪みが観察できた、C-5、C-6-b、D-5-a・d、D-6-aには、東上泊遺跡側の沢にかけて、時期の異なる二面の住居跡が確認された。

調査は、窪みの中心を通るように、沢と平行のベルト(A-A')と、それと直交するベルト(B-B')を残して、4区に分けて開始。上面床を確認した時点で、ベルトに沿ったトレーニングを入れ、上面住居の周堤を形成する揚土と、下面床の確認を行った。その後、上面・揚土・下面の順に調査を進めていった。ここではまず、ベルトによる断面観察からみた、上面・揚土・下面の層序を説明し、次に上面・下面の住居について述べて行く。

(1) 層序より見たH-1上面・揚土・下面の形成とその関係

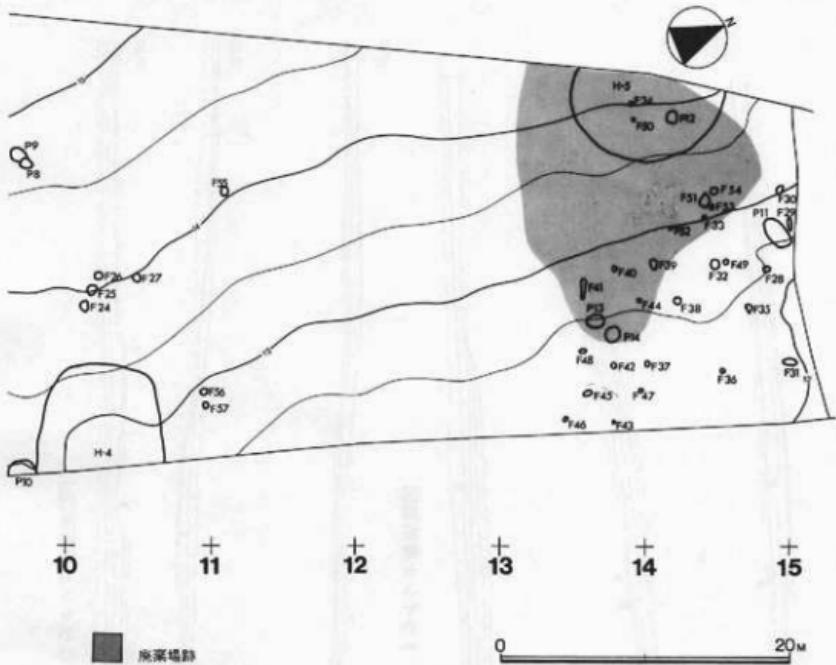
全体の層位は、地山・整形された地山・盛土(以上生活面)・揚土(排土)・自然堆積からなる。この層序の形成順を住居構築の観点で言えば、まず下面住居形成の際に、廃棄場であった斜面を、一隙片付けて、さらに下方(D-4・5・6あたり)へ土ごと捨てている。その名残りが、17・13・14層である。そのため斜面に、焼土粒・炭化物まじりの、土器・石器・骨等のたまつた場が形成される(二次的廃棄場)。そして、III・IV層を掘り北側に床壁面をつくり、この土を斜



面側へ盛る(19層)。ここで15層の焼土がつくられる。さらに、周辺の斜面に20・17・14・13・11層を順に盛って、平坦面を作り出し、住居とした。13・14層は、削り出したⅢ・Ⅳ層と廃棄場跡土の混合土と思われる。従って、下面床・壁を面として形成する層は、11～15・17・19・Ⅲ・Ⅳ層であり、そのために盛られた層が、11・13・14・17～20層である。9・16・21層は下面住居の覆土である。

下面住居が廃絶し、約3,000年が経過した後、上面住居の形成がはじまる。残っている窓みと斜面を利用して、ある程度その場を整理し、平坦面を用意した。土や遺物は、D-4～6の斜面へ廃棄したり、再度盛土として利用したと思われる(6層)。下面住居の床と、棄てられた土から出土した土器片が接合するのは、このためである。そして、10・8～5層を順に盛り、浅皿状の上面住居を形成した。10層は下面住居の中央のピットを埋めたものであろう。従って、上面床・壁・周堤を面として形成する層は、5～8・Ⅴ層である。1～3層は、上面住居の覆土である。

また、本節で使用する「揚土」という用語は、この斜面に最初に形成された、I群C類土器の時期の廃棄場の、遺物を含んだ土が、D-4・5・6のグリッドにあたる斜面に再廃棄されたものである。なお、周堤等の盛土に利用された6・13・14層もこの範疇に含まれるし、住居構築



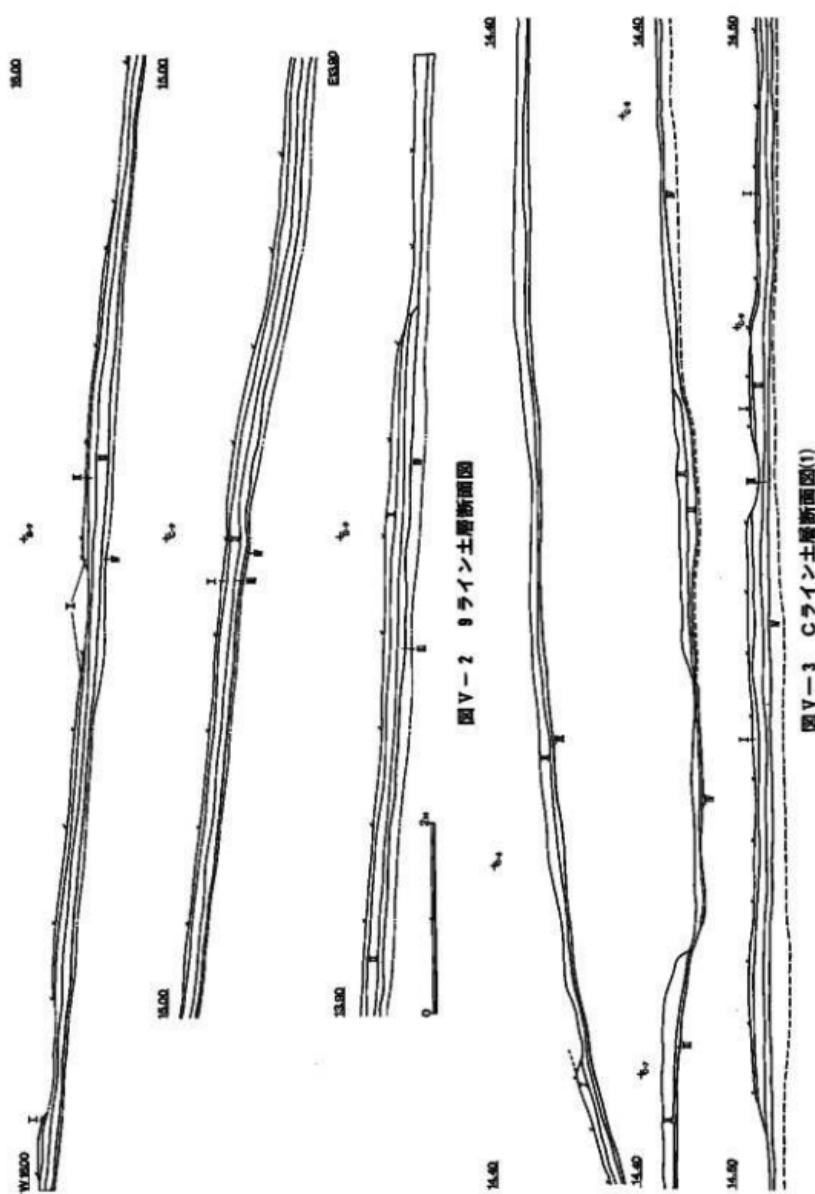
図V-1 造構位置図

の際の握り出した土も、混入している。

(2) H-1上面(図V-6~9、図版V-3~7、表V-1・11・12)

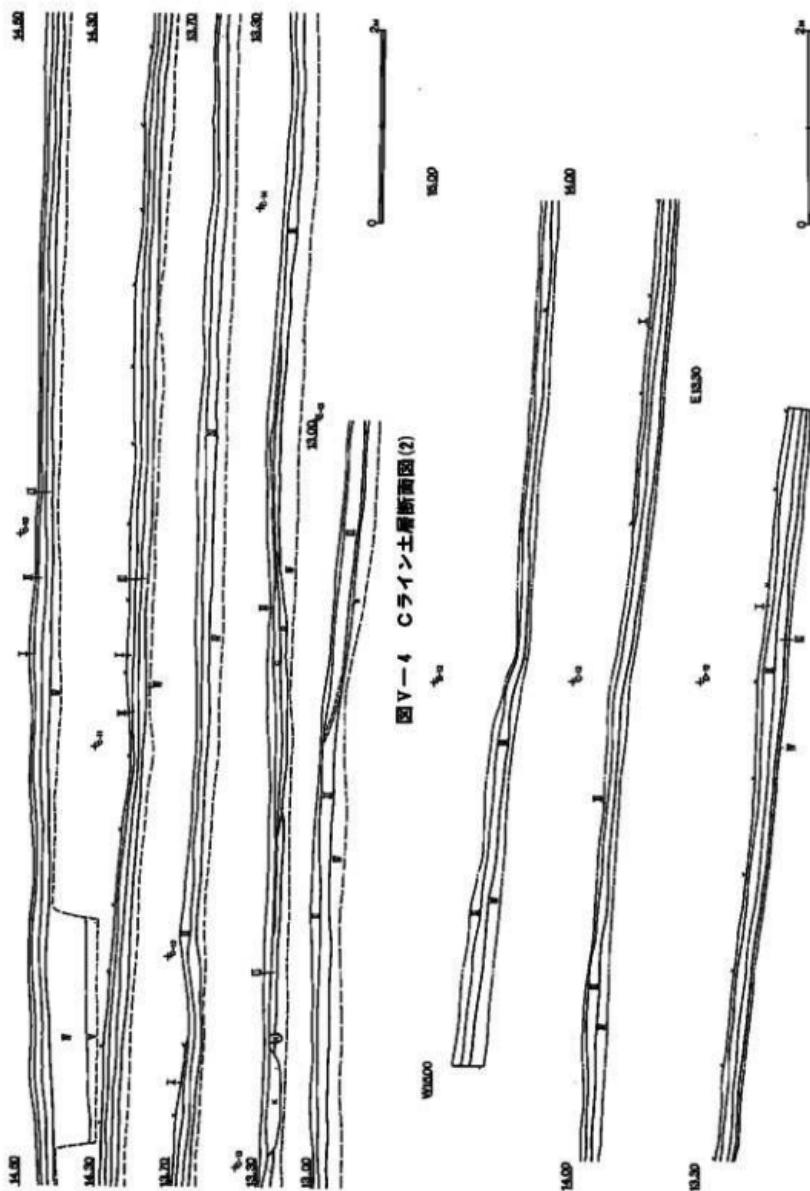
沢に面した部分で、平面卵形の先端が欠けた形になっている。規模は卵形を想定すると、南北一東北の長軸推定14m(実際は10m)、短径11.46m、周堤からの深さ0.16~0.4mをはかる。浅皿状の周堤・壁・床面は、盛土であるが、比較的しまっている。北壁際に狭長のビットをもつ。HP-1~4の4本の柱穴様の小ビットが確認されている。焼土は7ヶ所検出されたが、中央にあるHF-1・2が、炉であろう。HF-1~3からは、魚骨片・海獣骨片が発見されている。

遺物は、床面・覆土から土器・石器・骨角器・コハクが出土した。1は、床面から出土した、変形工字文をもつ深鉢である。胴下半部は欠損している。口唇部は、起伏のゆるい山形突起が4つ、対称の位置に作出され、へりに刻みが入っている。直下には、内から外への突瘤文がある。その下部は、地文の縄文をへらなでした上に、2本1単位の沈線で施文された変形工字文がある。工字文中に刻線の充填文や、列点文が入る。4~7は同一個体で、口唇に刻み、直下に内→外の突瘤文がある。その下の数条の平行沈線間に、弧線が充填されている。最下段の沈線下端に刻点文(端縄压痕ではない)を施す。1・4~7の特徴をもつ土器は、二枚橋式併行



図V-2 9ライン土壠断面図

図V-3 Cライン土壠断面図(1)



図V-4 Cライン土層断面図(2)

図V-5 12ライン土層断面図

土器に求められそうである。道北では、メクマ式に相当するものと考えられる。2・3は床面直上、11~14は覆土から出土。2は口唇部に端縄压痕を施し、直下が屈曲し頸部を形づくる。3は、口縁に列点文、その下、肩部まで3本の平行刻線文を施す、ミニチュア土器である。石器は床面・覆土から、剝片石器11点、礫石器4点が出土している。礫石器に縄文中期との相異は見られないが、剝片石器では、床面出土のナイフ(23)が、縄繩文時代に特有の形態をみせている。21~22~24は、覆土出土のナイフ、15~20は石錐・石鉈先である(17~19は床面出土)。覆土からは、未加工のコハクや、海獸骨の扁平棒状製品(シャフト?)が出土している。

床面・覆土出土の遺物の比較からすると、この上面住居は、縄繩文時代初頭、道北でいうところのメクマ式に相当する時期に営まれたものと思われる。

(3) 墓土の遺物(図V-6・10~16、図版V-3・7~13・18~17、表V-11・13~15)

すでに説明したとおり、土ごと再発見された状態であり、一括土器にしても、多少程度のまとまりである。礫や焼土・炭化物・骨片が、ブロック状のロームに混り、その中から土器・石器が出土する。土器は総点数2,983点で、復元個体9個のうち1~4がI群C類-1、5~9がC類-3である。破片もC類-1と3がほぼ同量であるが、10のようなI群B類土器も少数入っている。1は15とともに、垂下する貼付帶が2本組になっている。14は通常横走する口縁への竹管押し引きが、縦位置となるもの。16~18~19は数少ないI群C類-2で、18~19は同一個体である。

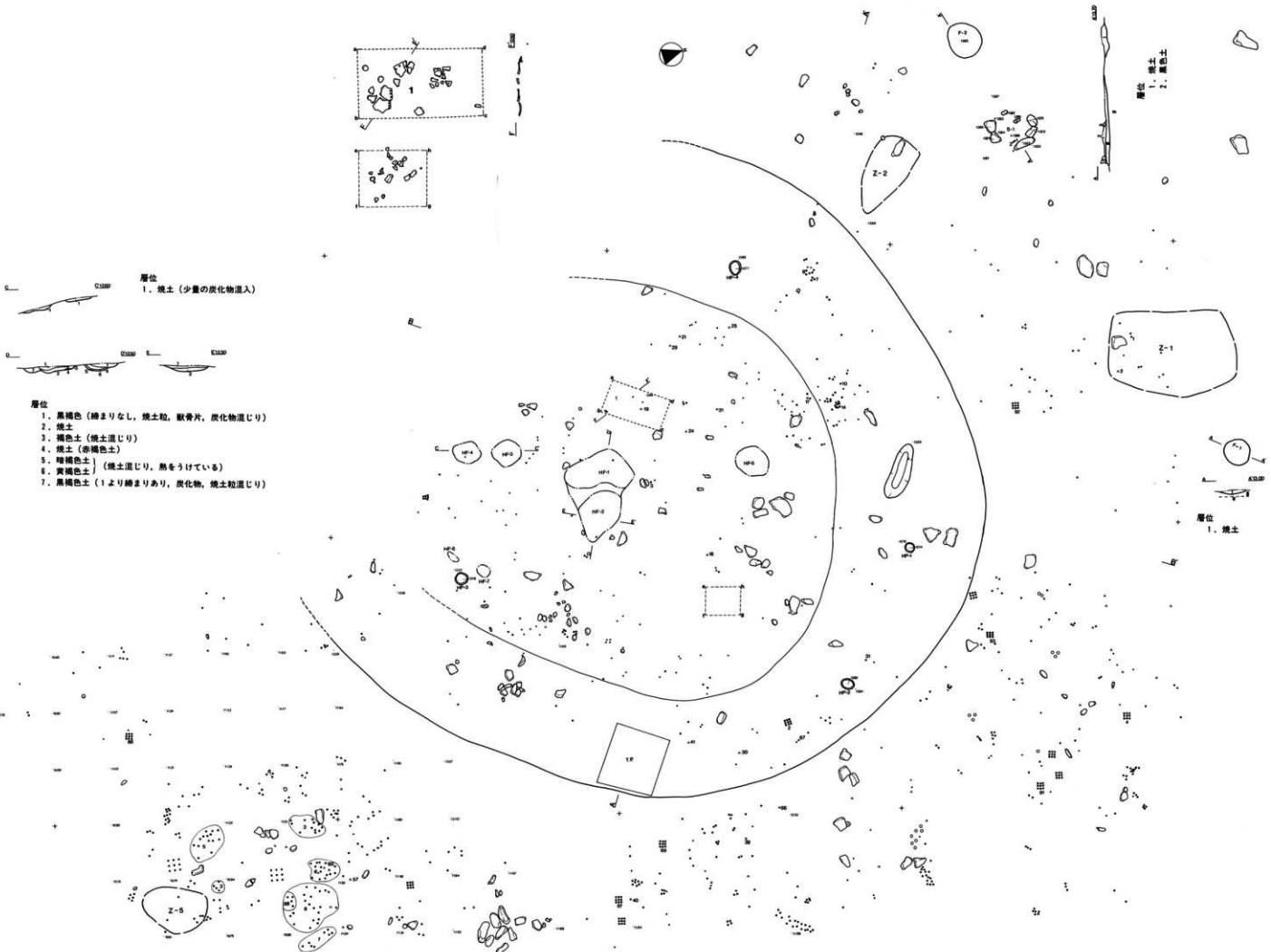
剝片石器は、石錐16点(23~38)、石鉈先8点(39~46)、石錐(47)、ナイフ(48~49)、削器4点(50~53)である。53は石刀状剝片を素材としたもので、この剝片自体も出土している(詳細は図V-109~111、図版V-100~102、表V-40と第VII章4節を参照)。礫石器は、石のみ(54~55)、石斧4点(56~59)、擦石(60)、敲石1点、砥石8点(61~68)、石皿2点(69)の他、石錐が24点と多量に出土している。60の擦石は、断面が半円形になるまで凹縫の一面を使用しているもので、当遺跡では唯一の形態である。67は扁平円礫を使用した、有溝砥石で、溝内にも瘤みをもっている。石錐の中には、76のような珪藻質泥岩製のものや、81のごとき火山彈製のものなど、浮子としての用途をもつたものもある。84のような頁岩の石核も、大型のものまで含めて10点出土している。

85は海獸骨を扁平棒状に加工したもので、鉈先のシャフトの役を果たしたものと考えられる。海獸骨の指趾骨片等の遺存体も確認している。

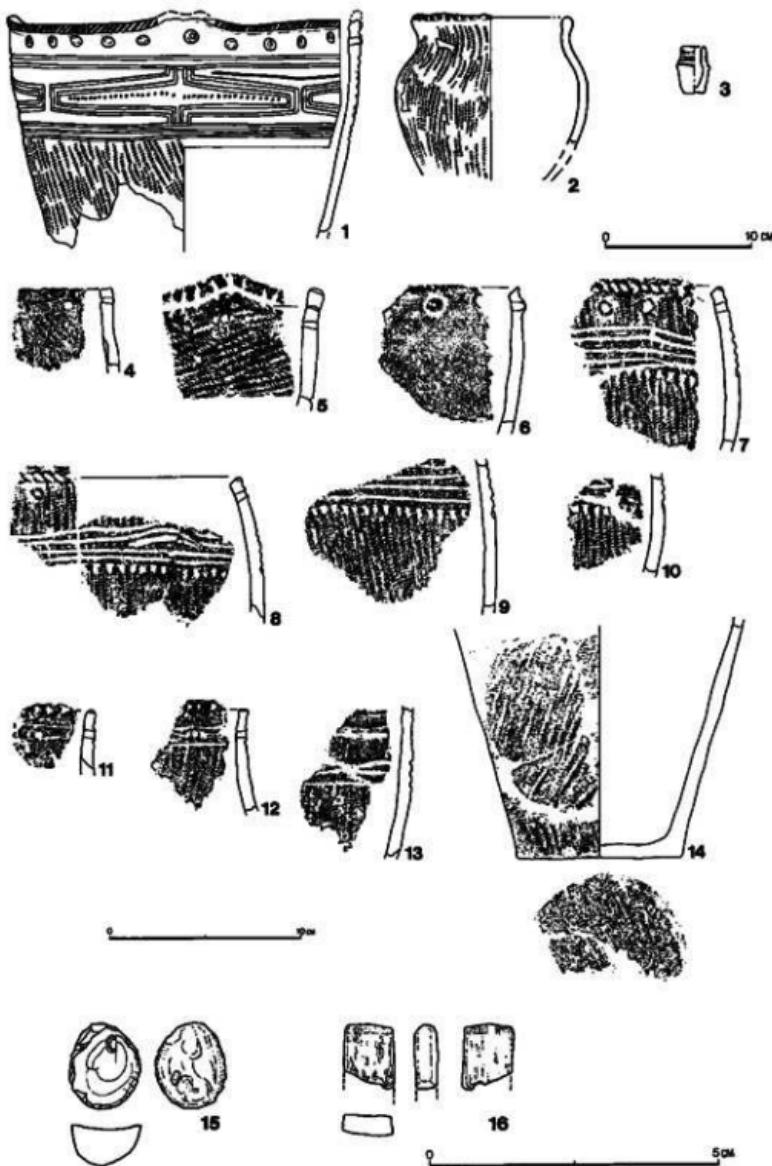
なおこの斜面下方にZ-5があるが、この上に墓土がかぶっていることから、H-1下面構築以前の集落であったと考えられる。

(4) H-1下面(図V-7・8~20、図版V-14~17、表V-1~11・15~16)

規模は、長径9.34m、短径8.60m、掘り込みの深さ0.40mである。平面形は、主軸を北西に向いた、寸ばかりの卵形である。前述のごとく、北側のみ壁が掘り出され、他は斜面への盛土によって、平坦面あるいは微高周堤がつくられている。床面はよくしまっている。中央に浅皿状のビットがあり、遺物が入り込んでいる。道南の縄文中期の住居跡にみられる「中央ビット」



図V-6 H-1上面・出土遺物出土状況図



図V-8 H-1上面出土の土器等

のような意味があるのだろうか。柱穴と思われる7個の小ピット（深さ8~29cm）は、不規則に配列されている。中では、HP-5~7が集中しており、いずれも内傾斜している。焼土は9ヶ所確認されたが、炉と思われるのは、HF-1・9の2枚である。HF-1からは、魚骨・海獣骨片が確認された。

上面構築の際、ある程度片づけられているため、遺物は大きなものが多い。1~5は、覆土の土器で、2を除いてI群C類-3である。2はC類-1で、貼付帯が竹管の押し引きに変化し、C類-2に近い様相をみせる。床面の土器は、6~8がI群C類-3、9~10はC類-1で、同一個体である。11も床面出土で、苔葉痕のある底部である。石器は、床面から8~22~25・30~32が出土、他は覆土出土である。12~20・23は石鐵、21~22は石銛先である。24は槍先としたが、茎部が狭長で、その機能を果たせたか疑問が残る。25はメノウ製のナイフ。30~31は石のみで、特に31は刃先が偏平で鋭利である。32は偏平石を使った有溝砥石で、溝内に窓をもつ。33は軽石製の浮子である。動物遺存体では、床面から、サケ科椎体・ニシン椎骨・カサゴ科前上顎骨等の魚骨や、鳥骨片、海獣骨（鎧脚類の指骨等）がみつかっている。

既述のごとく、I群C類土器の時期の廃棄場を整理して構築した住居であるが、住居からの遺物も、I群C類土器とそれに対応する石器である。揚土からは、I群B類土器も出土していることから、廃棄場形成の開始は、I群C類期の初頭からであろう。そしてその形成が終了するのは、I群C類期の中~後半の下面住居構築という事実で、意識的になされたものと考えられる。

(三浦 正人)

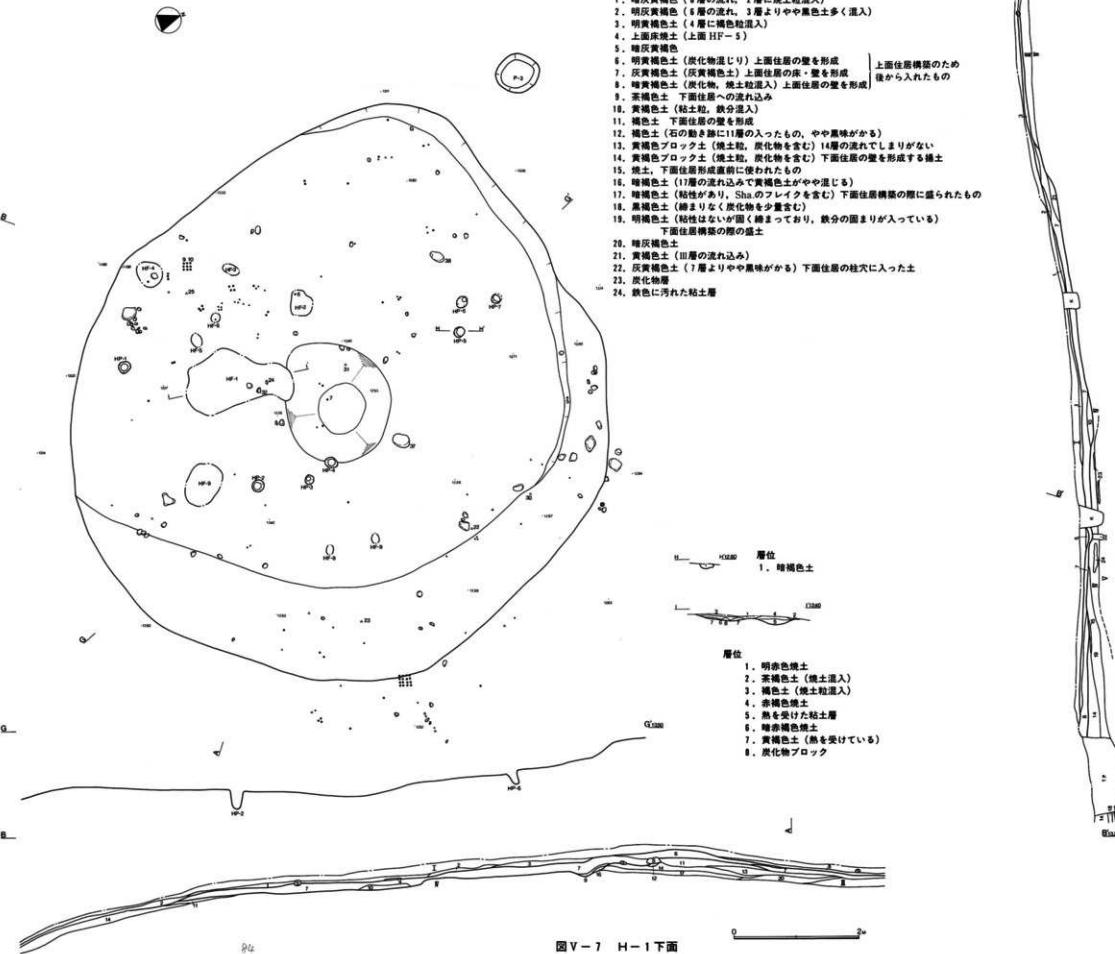
H-1上面

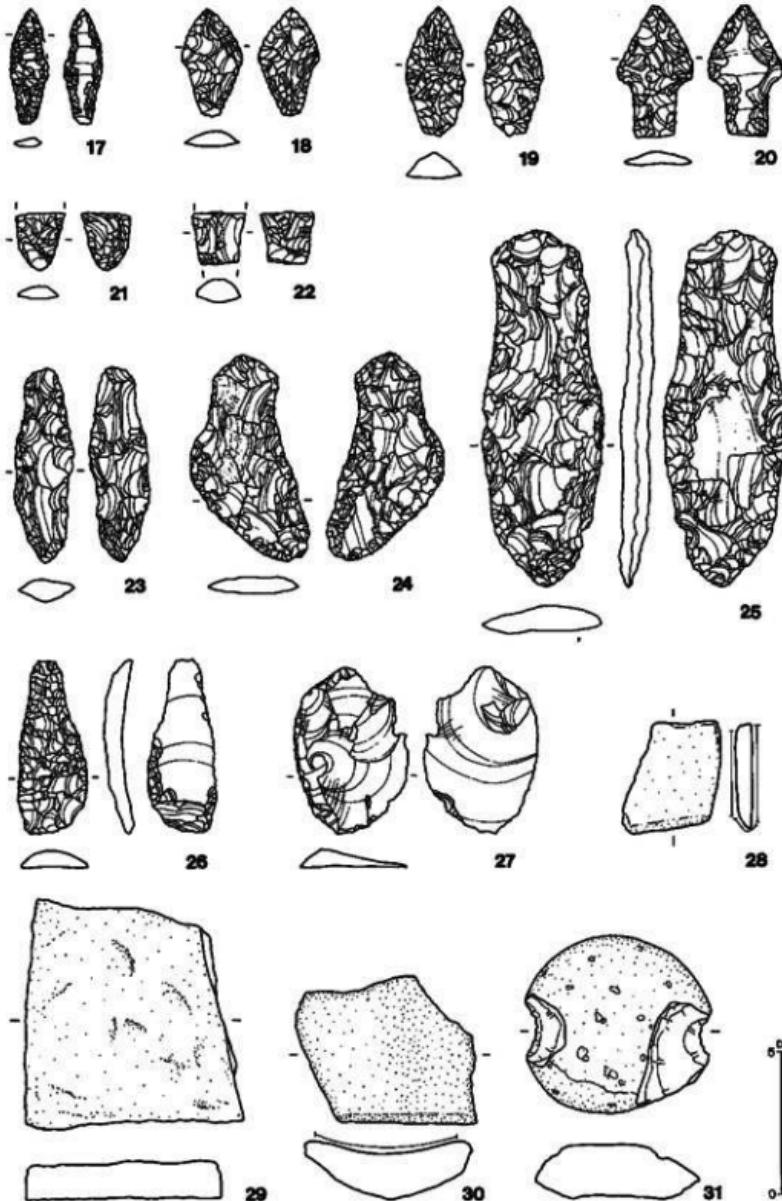
No.	直径 cm	長・幅・深さ cm	形 状	備 考
ピット	120	34 × 13	長 円 形	
HP-1	18	18 × 3	円 形	
2	23	18 × 4	長 円 形	
3	21	21 × 4	円 形	
4	25	20 × 8	長 円 形	
HF-1	125	55 × 11	不整円形	魚骨・海獣骨片、炉
2	55	65 × 8	#	# # #
3	55	50 × 4	長 円 形	# #
4	50	40 × 9	#	
5	60	50 × 3	#	
6	24	12 × 2	#	
7	25	25 × 2	円 形	

H-1下面

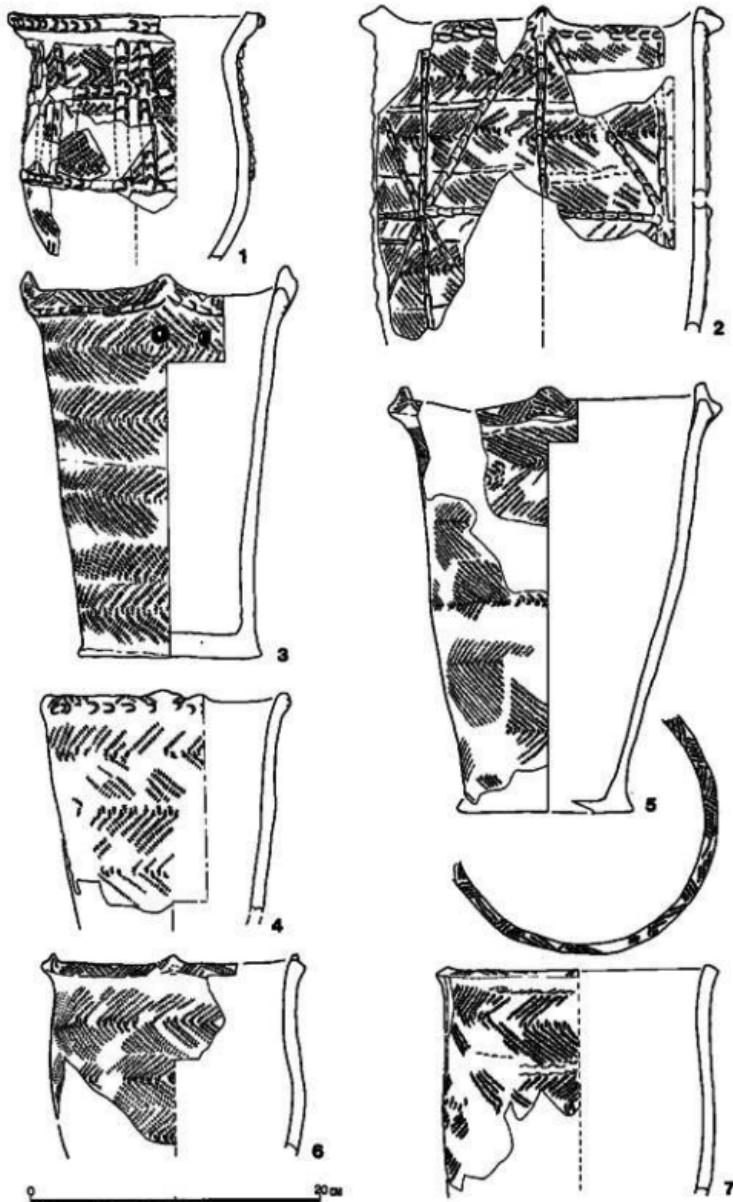
No.	直径 cm	長・幅・深さ cm	形 状	備 考
中央のピット	250	175 × 15	梯形・盤状	
HP-1	18	18 × 14	円 形	
2	20	20 × 29	#	
3	14	14 × 10	#	
4	17	17 × 20	#	中央のピットにかかっている
5	18	18 × 8	# - 内傾	
6	18	18 × 21	# - #	
7	14	14 × 8	# - #	
HF-1	172	95 × 9	不 整 形	壁2・魚骨片・海獣骨片、炉
2	45	45 × 3	不整円形	
3	28	15 × 2	長 円 形	
4	40	40 × 4	円 形	
5	24	18 × 2	長 円 形	
6	15	15 × 2	円 形	
7	16	12 × 2	長 円 形	
8	16	12 × 2	#	
9	73	53 × 4	#	炉?

表V-1 H-1上面・下面付属施設表

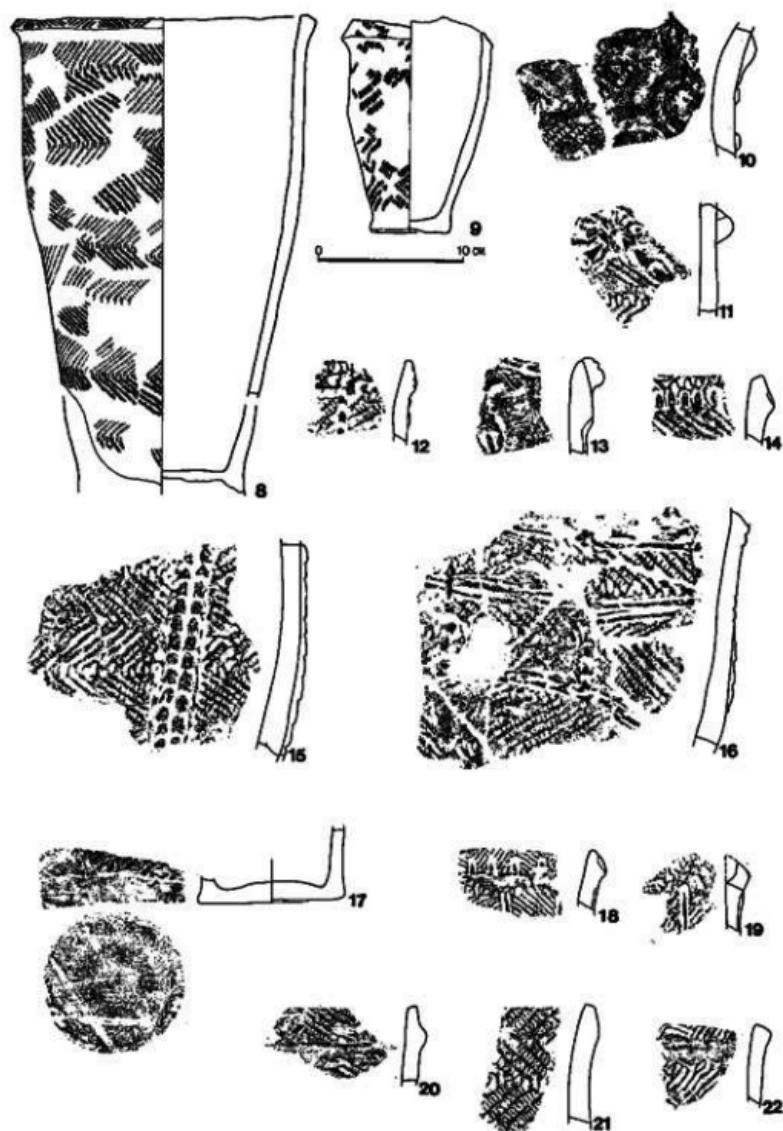




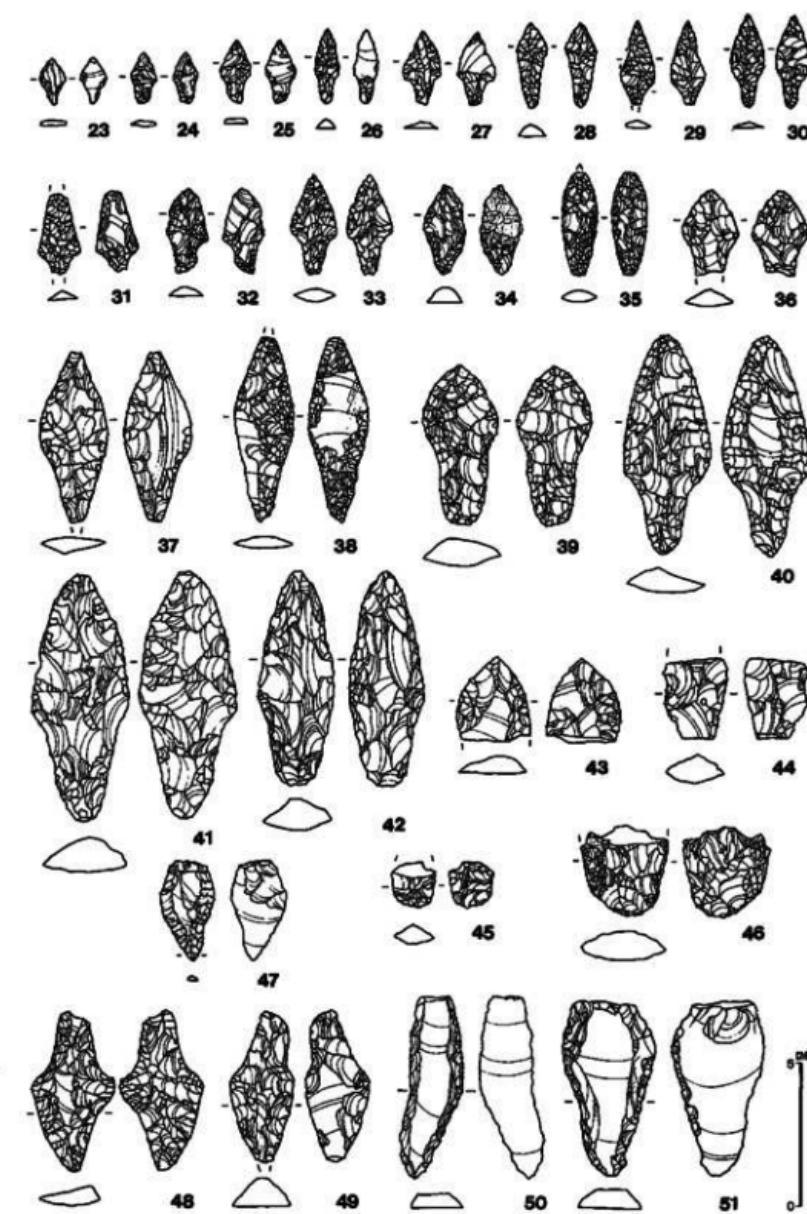
図V-9 H-1上面出土の石器



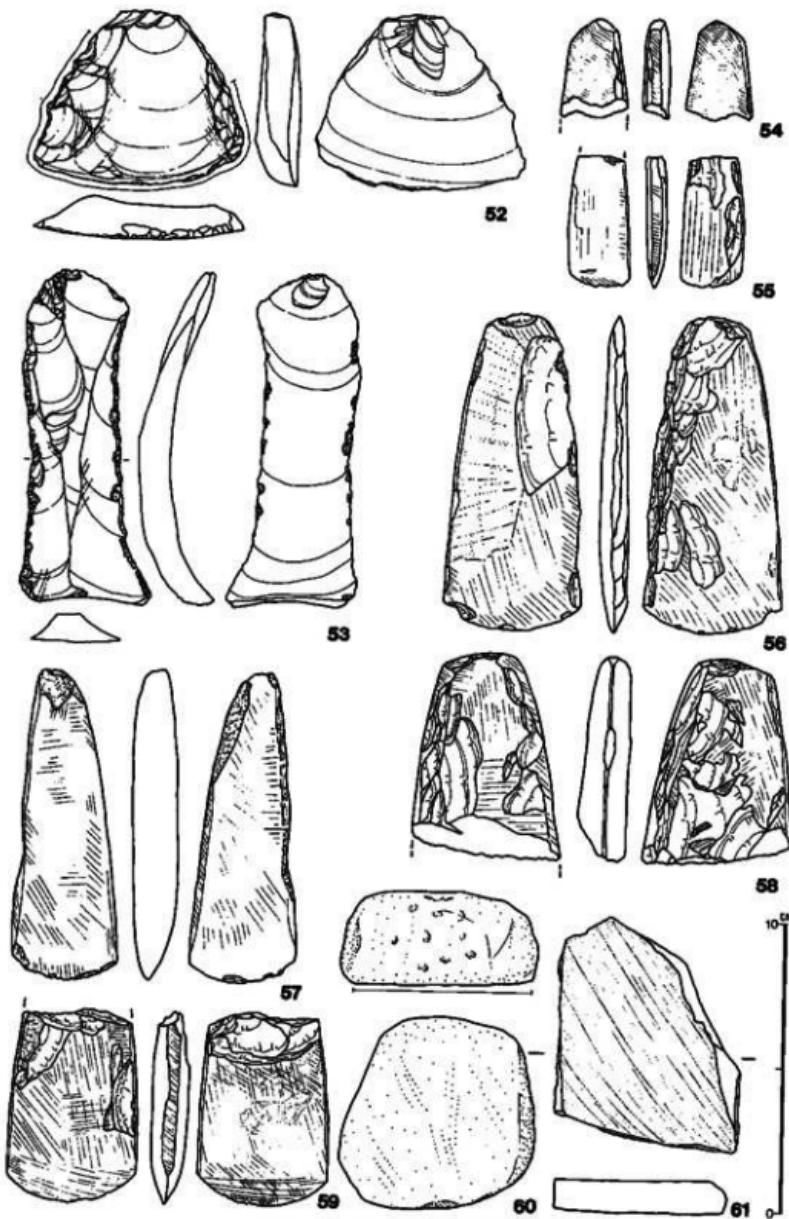
図V-10 H-1 墓出土の土器(1)



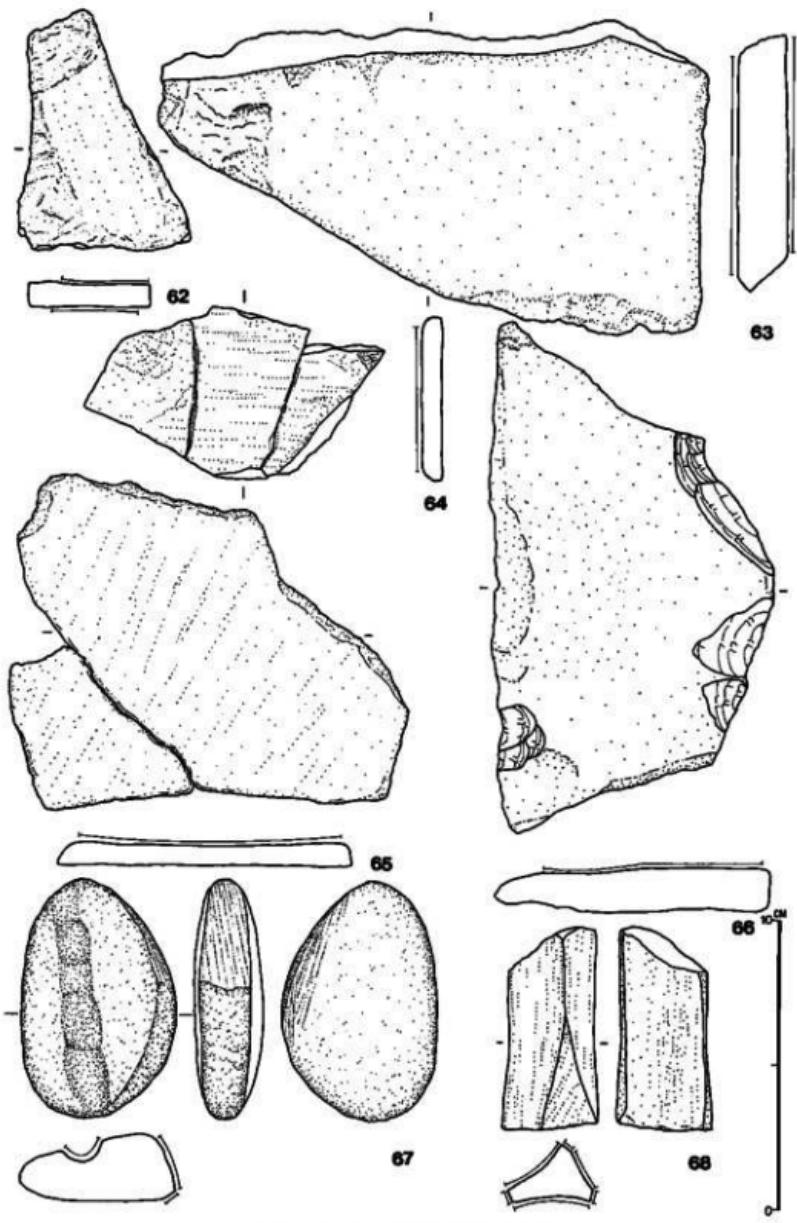
図V-11 H-1 掘土出土の土器(2)



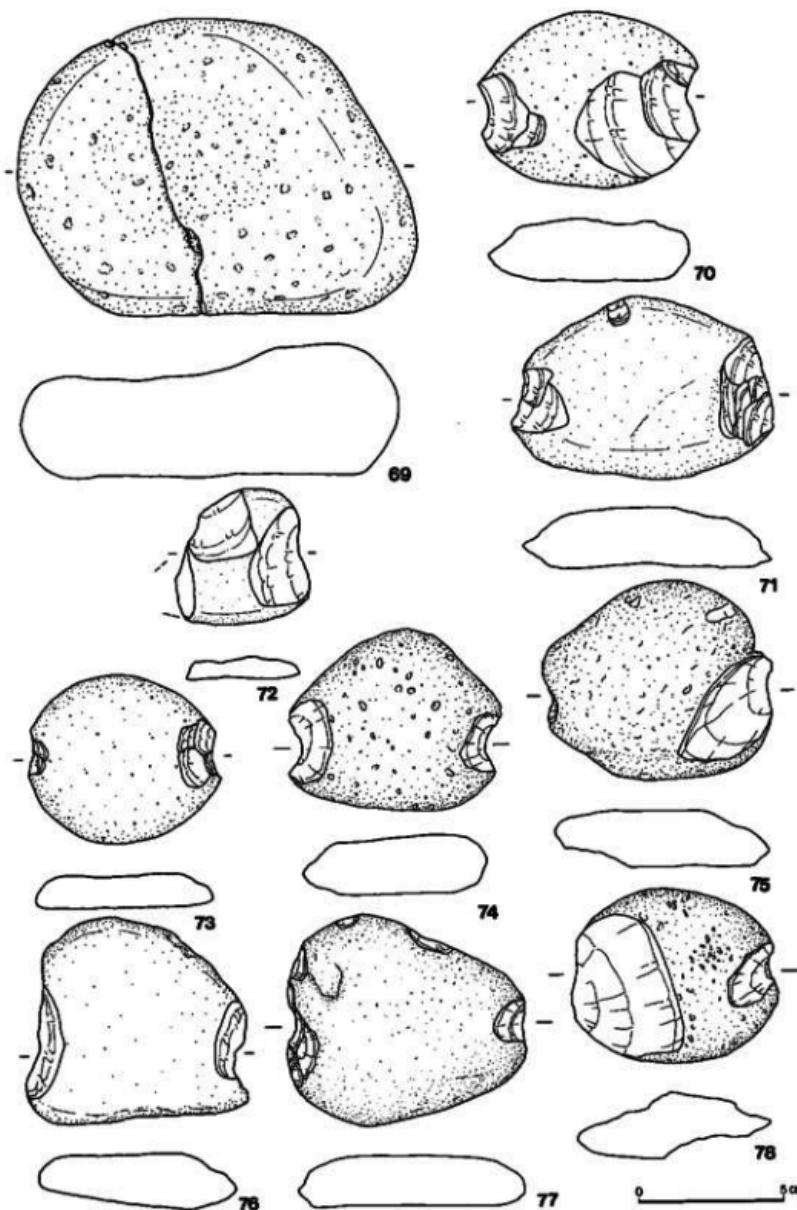
図V-12 H-1 墓出土の石器(1)



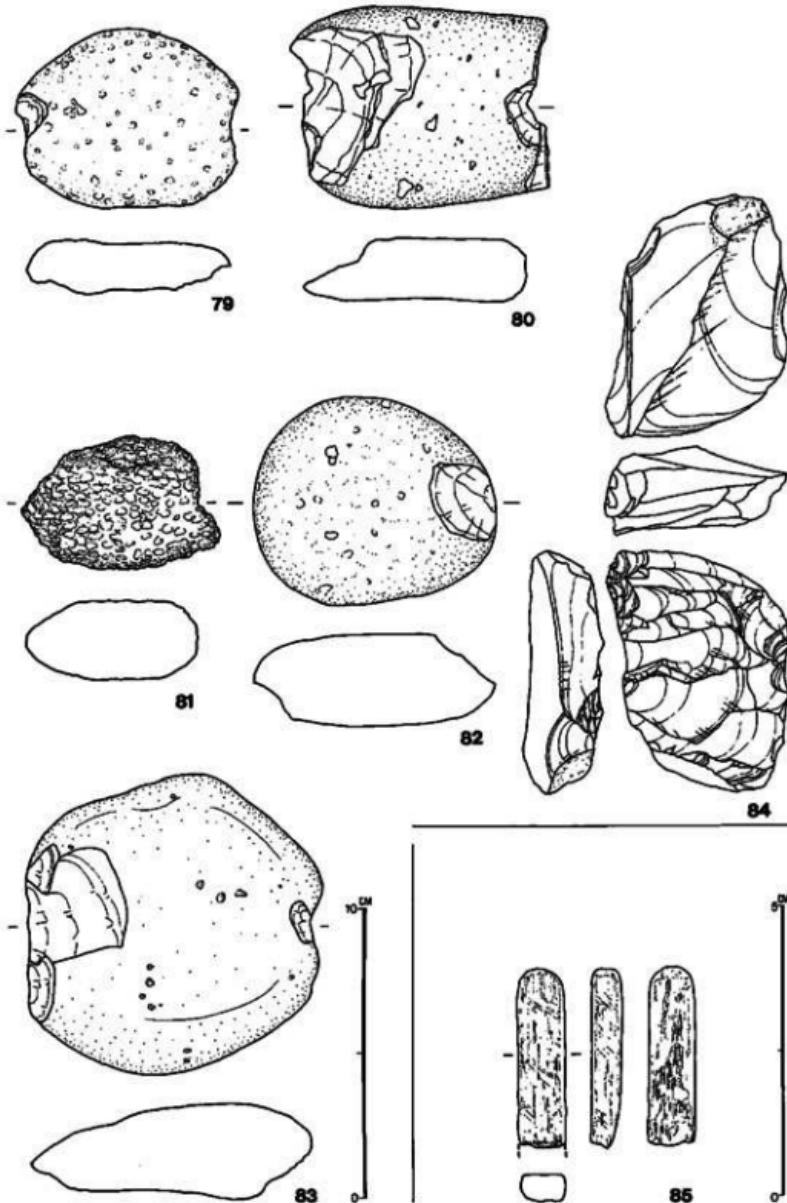
図V-13 H-1 掘土出土の石器(2)



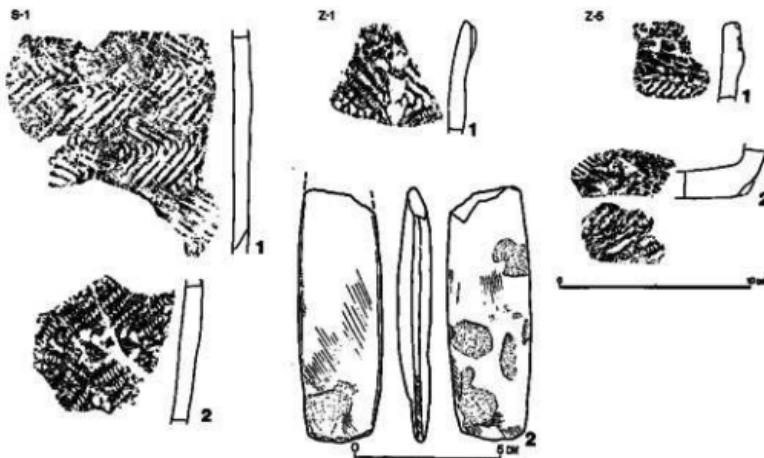
図V-14 H-1 掘土出土の石器(3)



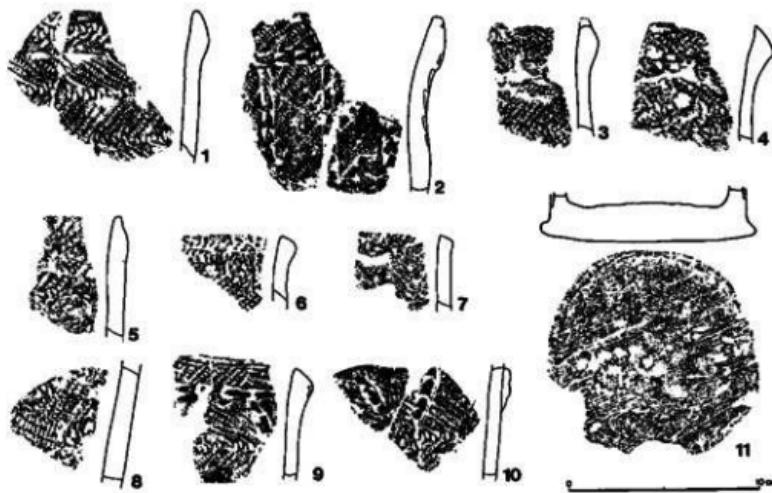
図V-15 H-1 掘土出土の石器(4)



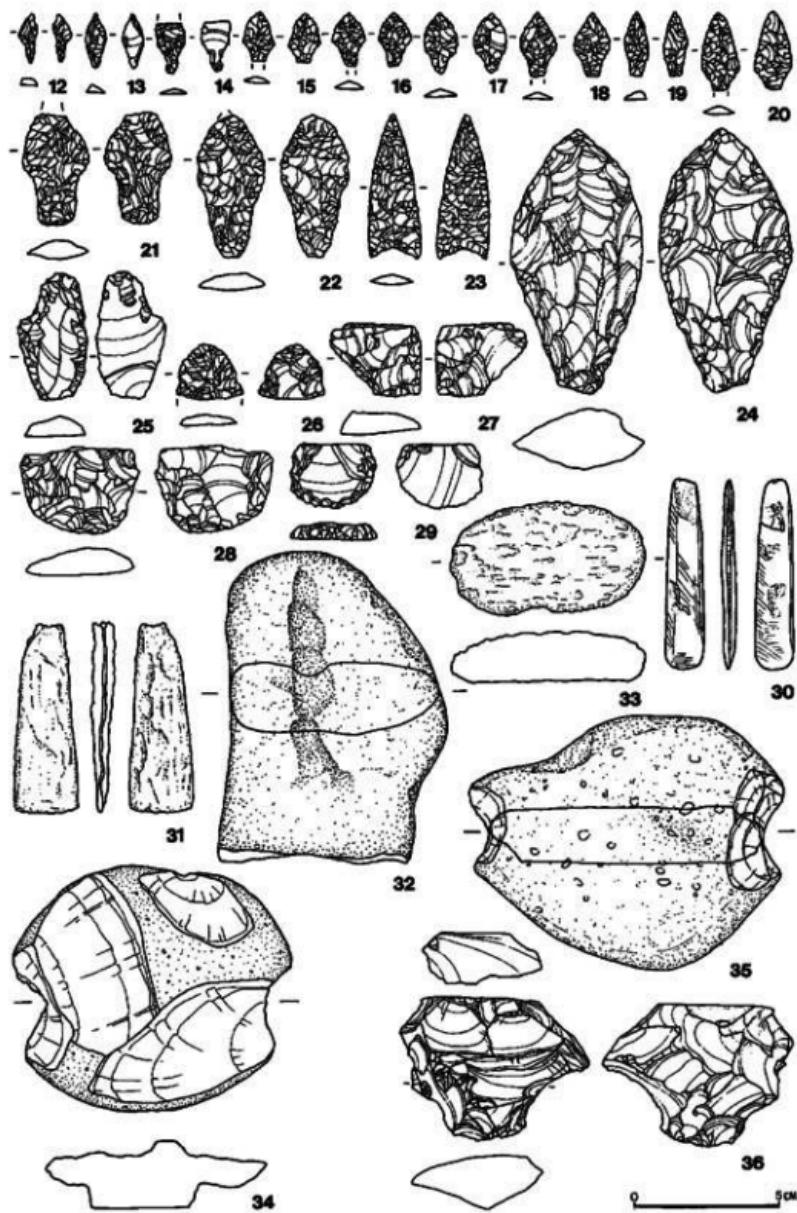
図V-16 H-1 墓出土の石器(5)・石核・骨製品



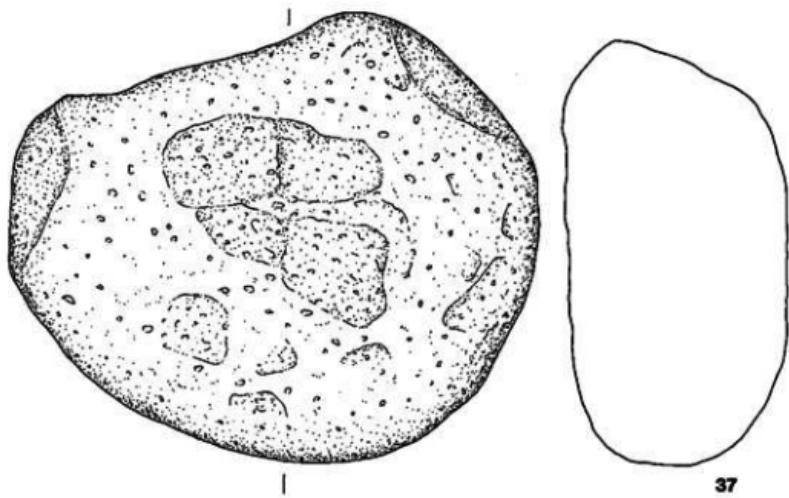
図V-17 H-1周辺造構出土の遺物 (S-1, Z-1, Z-5)



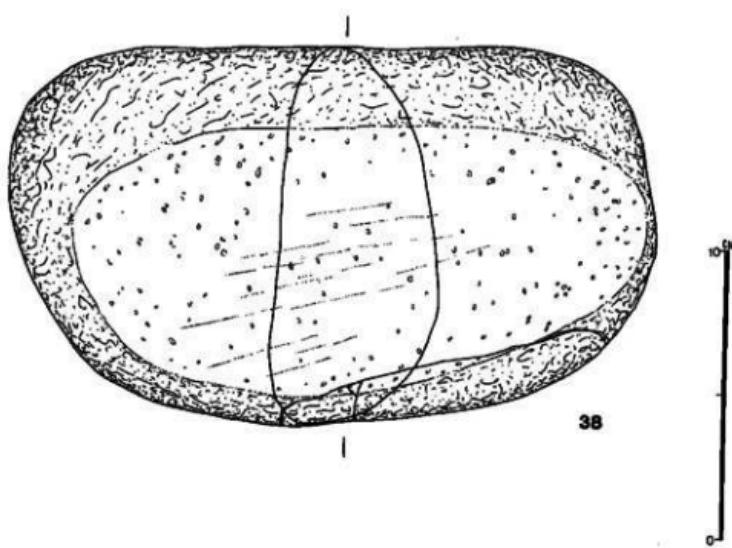
図V-18 H-1下面出土の土器



図V-19 H-1下面出土の石器(1)・石核



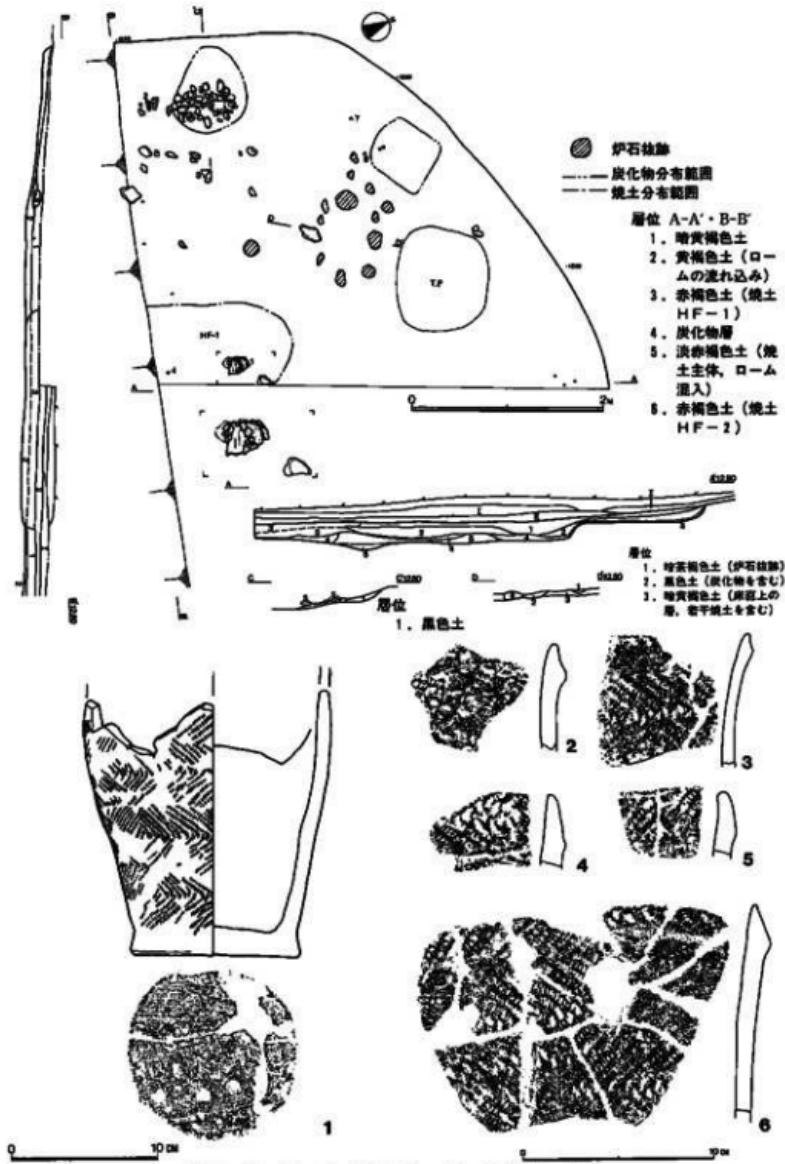
37

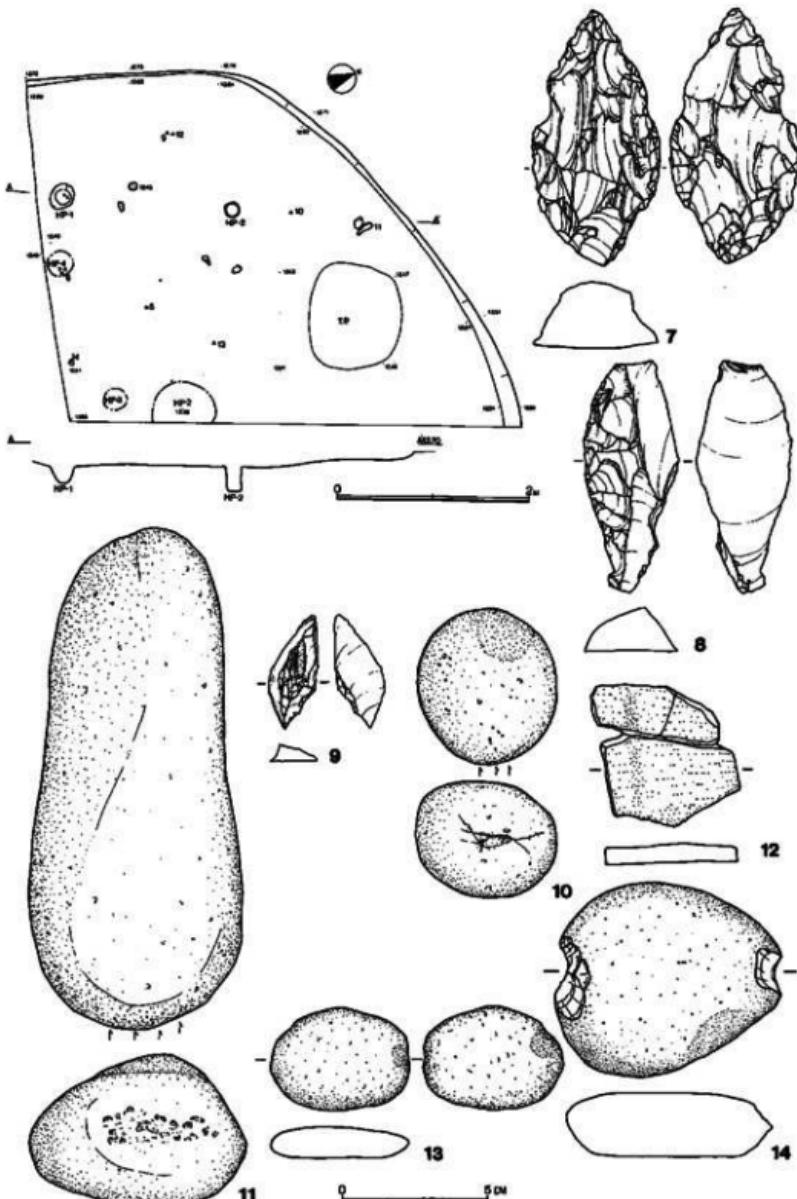


38

図V-20 H-1 下面出土の石器(2)

H-2 (図V-21・22, 図版V-18~20-3, 表V-2・11・18)





図V-22 H-2 (下層面), H-2 出土の石器

D-7区に位置する。約半分が調査区外で、調査範囲内の約半分も後世の道路によって削り取られている。道路で削られた面のセクション等から推定すると、規模は長軸(東一西)8m前後、短軸7m前後である。平面形は円に近い六角形と推定できる。二面の床を確認したが、遺物等から、ほとんど時間差のないものと思われる。

上層面の床面は、下層面に5cm前後ロームを入れてつくられている。壁もなだらかなものになっている。この面における柱穴は、確認できなかった。炉は13個の石(うち9個分痕跡)による、径1mほどの石圓い炉が、住居の北側にある。壁脇に炭化物の広がりがみられる。また、下層面まで達する厚さをもつ、広範囲の焼土HF-1が、住居中央部にある。大型だが炉の可能性もある。鳥類・海獣類の骨片が発見されている。西壁際には、炭化物上に70×50cmの範囲で、約40個の礫が集められている。

20cm前後、III・IV層を掘り込んだ下層面の床面では、柱穴2本、焼土3ヶ所が確認された。HF-2は、掘り込みがあり、下層面での中心の炉であろう。壁の立ち上がりが明確である。

遺物は、上半部のない、再利用のI群C類土器が、上層面HF-1に入り込むような状態で出土している。その他土器破片も、上下面ともにI群C類のものである。2~4・6は上層面、5は下層面のI群C類-3の口縁部である。石器は、7・8が上層面床の削器。9~14は下層面の出土である。10~11は敲石、13~14は石錐で、特に13は打ち欠きのない小型のもの。未製品かもしだれない。

両面はほとんど時間差のないもので、土器等から、I群C類土器の時期の遺構と判断した。

H-2上層面
集積()内は推定
(三浦 正人)

No	量積 cm	長・幅・深	形 状	備 考
HF-1	(150)・(85)・11	広範囲	再使用のI群C類土器・セクションの3箇	
炉	径1mの石圓い炉	長 円 形	石底底9・底石4基に炭化物	
集 積	70~40・下に炭化物層	"	円窓約40個	

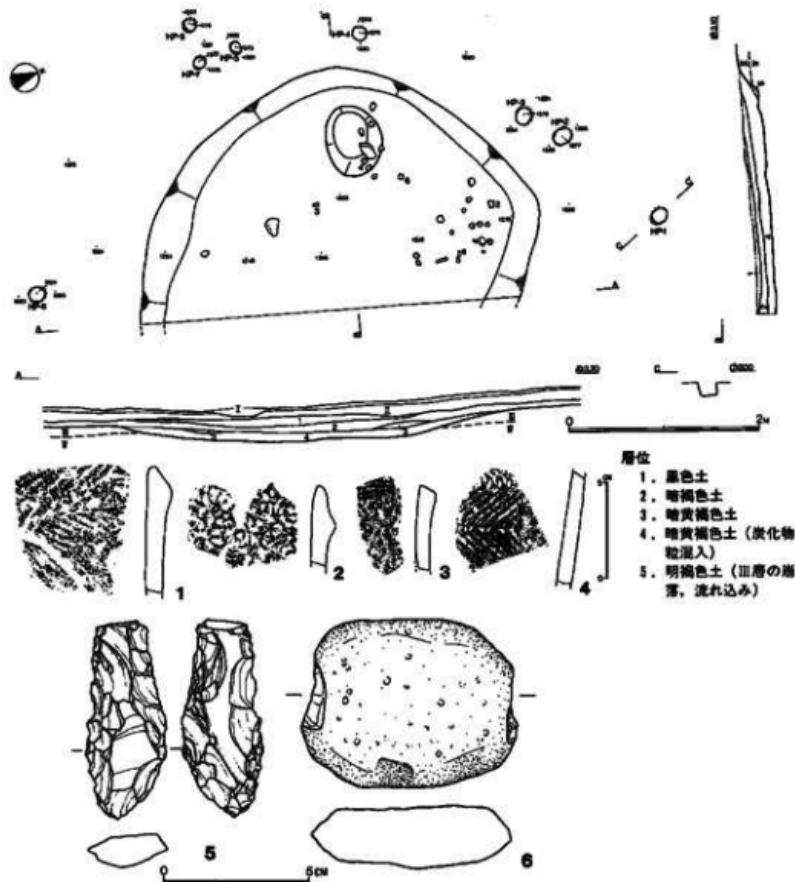
H-2下層面

No	量積 cm	長・幅・深	形 状	備 考
HP-1	25・25・20	円・斜面U字		
2	15・15・25	*・斜面角		
HF-2	68・68・6	円	形	掘り込みあり、セクションの6箇
3	24・24・3	"		
4	27・27・3	"		

表V-2 H-2付属施設表

H-3 (図V-23, 図版V-20, 表V-3・16)

D-8-c・dに竪穴・柱穴があり、柱穴はD-8-bとD-9-aにも存在する。南東部が調査範囲外のため、平面形は、長軸を北北西に向かた卵形との推定にとどめる。規模は、約半分の調査範囲で測ると、最大径が南北方向で、上端4.37m、下端3.83mである。III層を掘り込み、IV層に至る床面は、さほどしまっておらず、壁面と境が明確でないまま、浅皿状に立ち上がる。北西壁際にあるピットは、浅皿状で、礫・土器片等が入っている。炉は確認されていない。柱穴は、竪穴外の40~130cmの範囲に外周して、8穴確認された。深さ10cm前後と浅いが、HP-1・4・7は内傾し、HP-2・3・8は底が広がっている。一定の間隔で並んでおり、特にHP-7と8の間が広く、入口等の施設のあったことが想像できる。外柱穴という、他の住居跡と異なる形態をなし、焼土も確認されていないことから、起居生活をしていた遺構ではなく、倉庫



等の役割をになった竪穴と考えられる。

遺物は、覆土・床面からI群C類の土器片が出土。1は覆土、2・3は床面のI群C類-3土器の口縁部である。石器は床面から、ナイフ(5)・石錐(6)が出土している。

土器や周辺の状況から、I群C類土器の時期の遺構と考えられる。
(三浦 正人)

No.	直径 cm	長・幅・深幅	形 狀	備 考
ピット	74	59・4	長円形-浅腹狀	
HP-1	20	15・12	長円・内傾	以下柱穴はすべて柱穴外周にある
	20	15・10	長円・底大	
2	18	18・10	円・底大	
3	15	15・10	円・内傾	
4	14	11・9	長円・内傾	
5	14	14・9	円・内傾	
6	12	12・9	円・内傾	
	18	18・9	円・底大	7との間隔やや広い 人口か?

表V-3 H-3付属施設表

H-4 (図V-26~28, 図V-20~24, 表V-4・11・17)

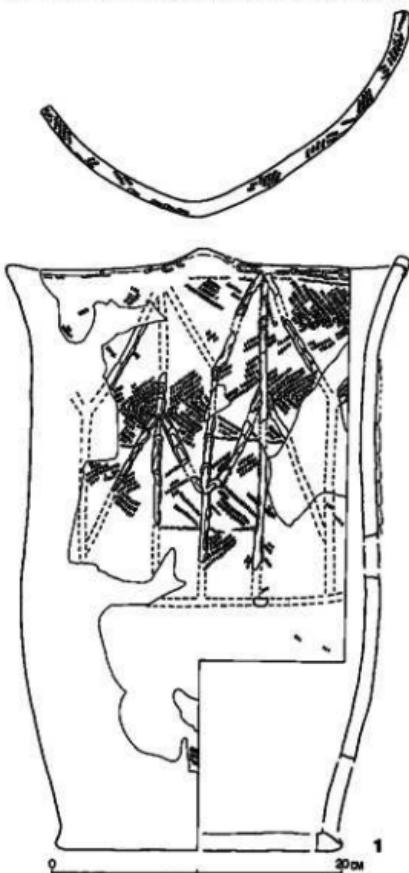
C-9-c, C-10-b・c, D-9-c・d, D-10-a・dと調査範囲外にわたって位置する、大型住居跡。約半分が調査区外である。主軸は、西北西一東南東で、推定長12~13m、短径は範囲境界線で9.22mである。Ⅲ層に皿状に浅く25cmほど掘りくぼめられており、さらに外周堤として盛土をもつ(西~北西にはない)。盛土は厚い南側で45cm前後、北側でも10cmほどある。周堤頂からの実質的深さは、約40cmである。床面自体はなだらかに東側に傾斜し、盛土による壁面も明瞭ではない。

中央部が径2mほど床より一段低くなり、その中に狭長のピットがある。ピット外周の一部にはHF-7があり、周囲の焼土や炉と関連して、このピットの用途を考えねばならない。道南の縄文中期の住居にみられる、「中央ピット」のような意味や、火種置場・灰置場のような性格を考慮する必要があろう。

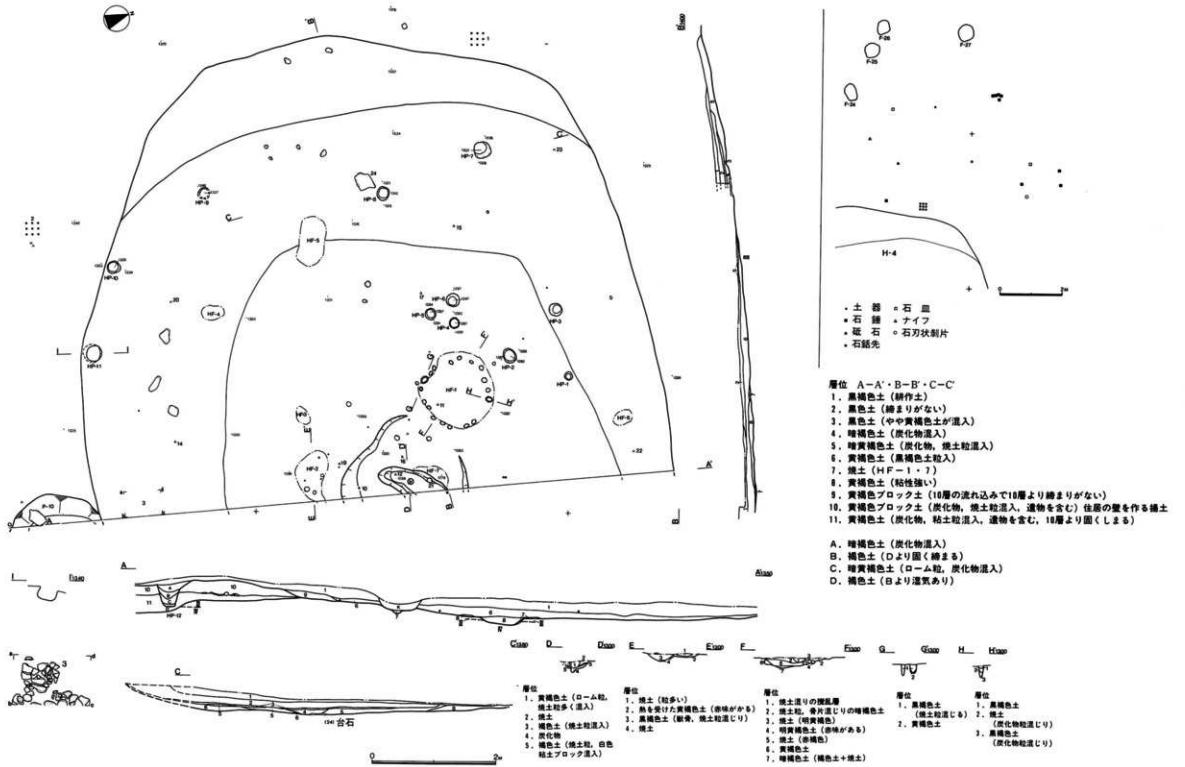
柱穴は、上端近くをめぐるHP-3・7-11や、周堤盛土上にあるHP-12(P-10上、セクションに見える)の7本が確実である。特にHP-3・7・11は内傾斜している。他のHP-1・2・4~6は位置・深さ等で柱穴とするには疑問が残る。

炉は、中央北寄りに、円形の石囲いの炉跡がある。石は残存しないが、小型の抜痕が19か所、杭底3か所で径1.2mの炉を形成する。焼土は厚さ17cmあり、海獣骨片(鎧脚類中手 or 中足骨等)が入っていた。2本対1本で対称の位置にある3本の杭痕は、深さ15~20cmある。環状の石列にあるこの杭痕は、炉の使用方法や、石囲いの炉について考える上で、注目される。HF-2は、焼土とその脇に深さ12cmのピットがある。その中には、炭化物混りの黒色土が入り、海獣骨やサメ歯が発見されている。他にHF-3~6のうすい焼土や、前述のHF-7がある。

住居の北西~北の外周、C-10のグリッド内にはF-24~27の4つの焼土と、9個の石錐の他、石皿・砥石・石鋸先・



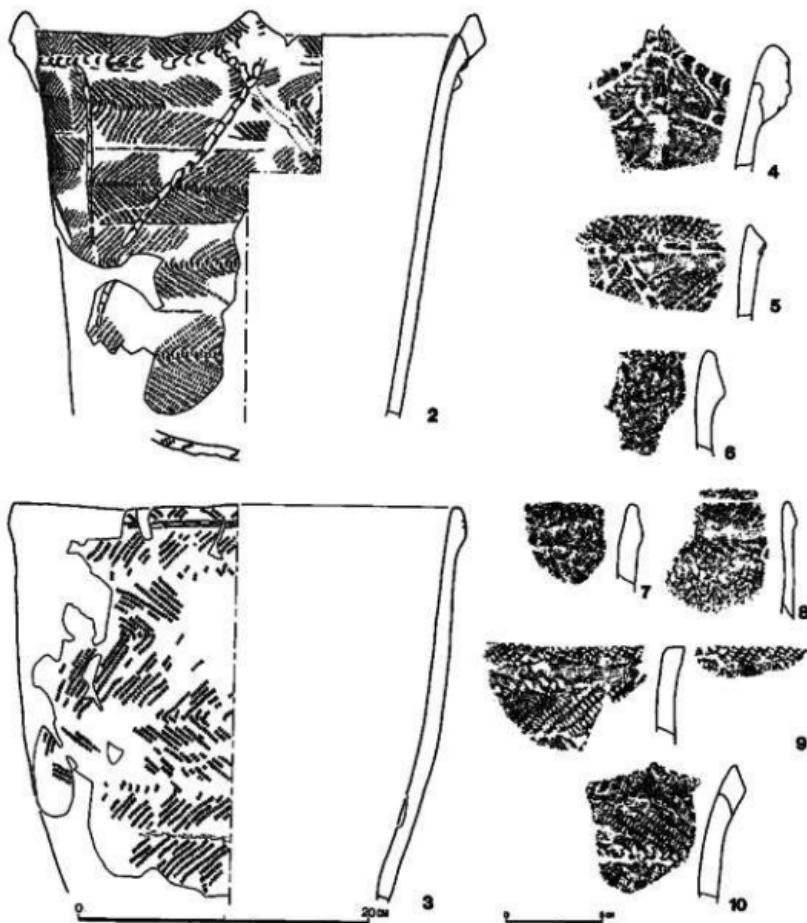
図V-24 H-4 出土の土器(1)



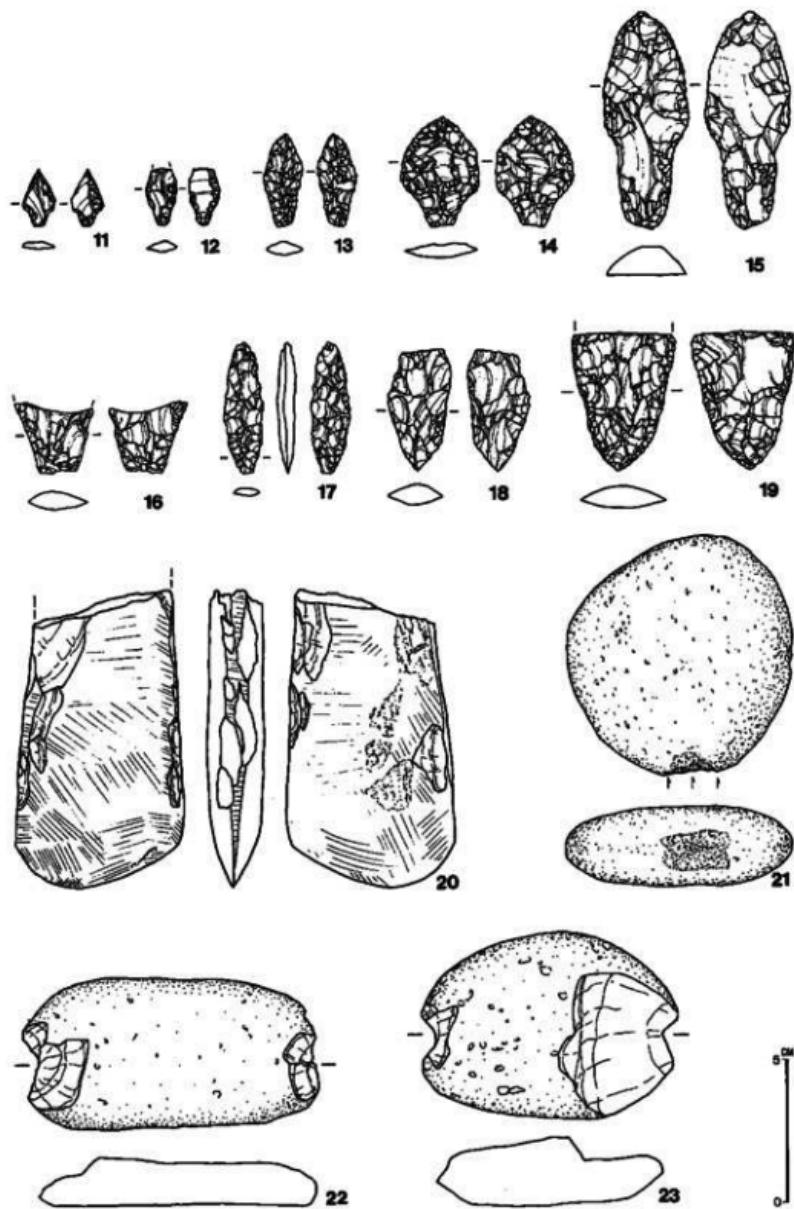
ナイフ・石刀状剝片等が出土している(図V-27)。生活に係わる作業場の存在を示唆するものであろう。

住居跡の遺物としては、I群C類土器が、床面・覆土・盛土・周堤上と全般的に出土する。1・2は、外周堤上から出土した、半裁竹管の押き引きと、貼付のあるI群C類-1の土器。10は床面からのI群C類-3土器片である。覆土からは、4・5のようなC類-1や、9のようなC類-3がみられる。盛土には、復元された3のようなC類-1や、6~8のようなC類-3の土器がある。他にI群B類土器も1点みられた。

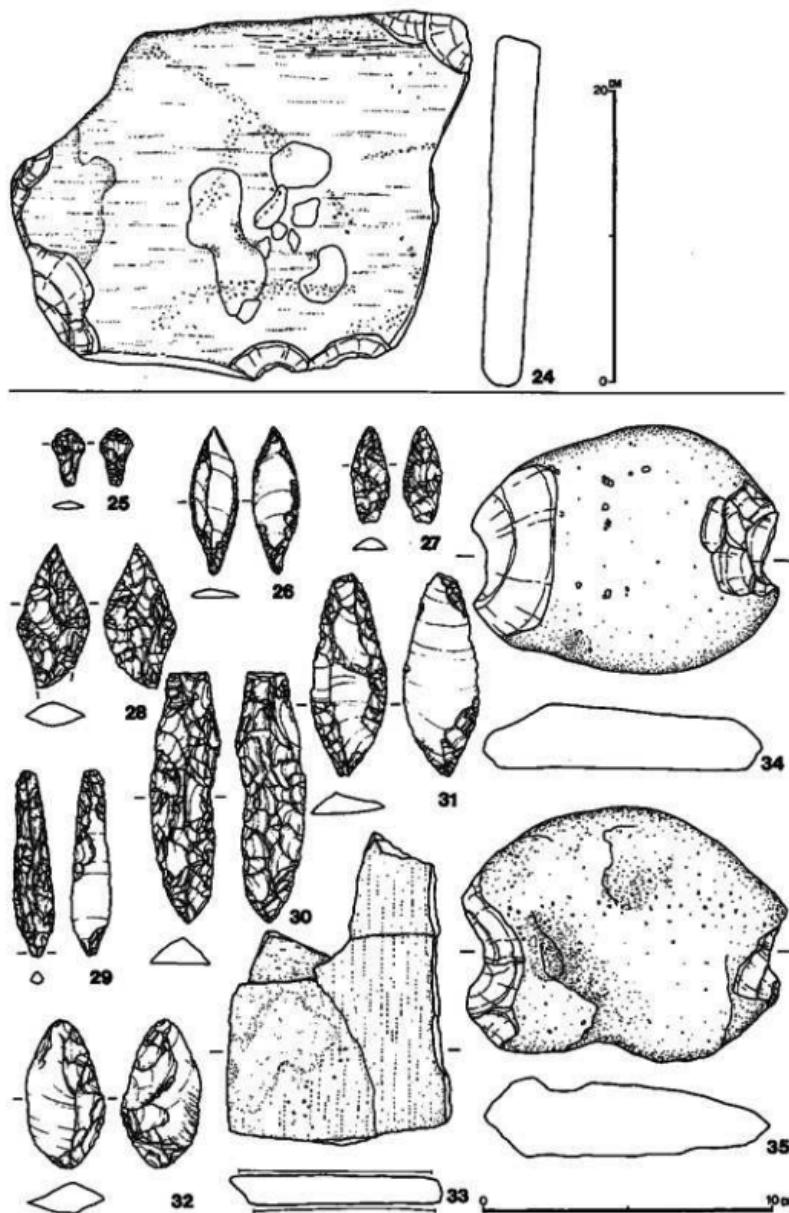
石器は、床面から石鎌(11・12)、石鋸先(14~16)、先端部が未作出の石錐未製品(17)、削



図V-26 H-4 出土の土器(2)



図V-27 H-4出土の石器(1)



図V-28 H-4出土の石器(2)

器 (19), 側刃の石斧 (20), 敵石 (21), 石錐 (22・23), 石皿 (24) が発見された。14の石鋸先は、頭部の大きさのわりに基部が貧弱で、シャフトを使用した可能性もある。覆土からは、13の石錐、18のナイフが、盛土からは、石錐・石鋸先・ナイフ・削器・砥石・石錐が出土している。

遺物出土状況や、作業場の存在、炉の構造、柱穴、周堤等を総合すると、起居を目的とした定住（半定住）の豊穴住居と考えられよう。盛土、床、外周堤の土器等から、I群C類土器の時期の後半期の所産と思われる。

（三浦 正人）

No.	直積 cm	長・幅・深幅 cm	形 状	備 考
中央ビット	(120)	(45)・21	長 円 形	中央に小穴・外周邊にHF-7
HF-1	13	13・5	円 形	
2	24	20・8	長 円 形	
3	20	20・12	円形・内傾	
4	18	17・5	#	
5	18	18・4	#	
6	22	22・9	#	
7	22	22・13	#・内傾	
8	20	20・8	#	
9	20	20・8	#	
10	21	21・20	#	
11	25	25・20	#・内傾	
12	30	(30)・35	(円形)	外周盛土(P-10層土)にあり

No.	直積 cm	長・幅・深幅 cm	形 状	備 考
HF-1	120	120・17	円形石錐	石錐群15・初跡3・煮骨片・馬歯骨片
2	(90)	50・7	不整長円形	馬歯骨片・サメ歯
3	32	20・3	長 円 形	
4	36	24・4	#	
5	80	40・4	#	
6	32	22・3	#	
7	62	22・3	不整長円形	中央のビットの外周邊にある

表V-4 H-4付属施設表

H-5 (図V-29, 図版V-25, 表V-5・18)

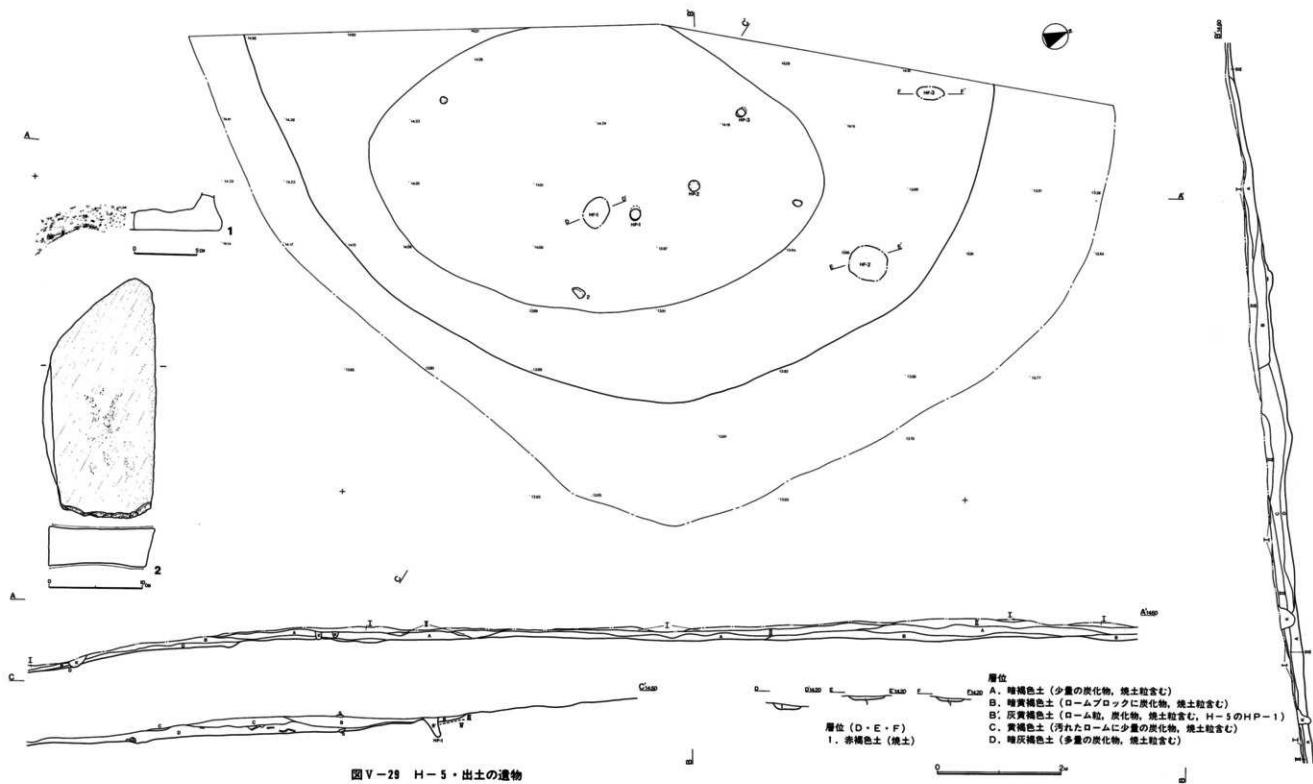
A-13-b・c, A-14-b, B-13-a・d, B-14-aと、調査区外にわたって位置する。廃棄場跡のB・C層・Ⅲ層を平坦にならして床面をつくっており、掘り込みや、周堤は確認できない。平面形は、卵形をなすものと推定される。調査した平坦面の規模は、長軸12mで、向きは東北東一西南西である。柱穴と思われるHF-1~4が、床面から検出された。HF-1は、深さが32cmあり、やや斜めに入るが、中央柱であろう。床面焼土は3か所検出されたが、メインの炉はHF-1であろう。おそらく、定住起居の場ではなく、仮屋程度の遺構であろう。

掘り込みがないため、覆土層の確認ができず、床面の検出も炉・柱穴によるものであった。そのためこの住居跡の遺物としては、HF-3から出土したI群C類土器の底部と、床面の石皿のみである。

I群C類土器底部と、廃棄場をならして構築されたことからみて、廃棄場途絶後の一時期に使用された場であろう。（三浦 正人）

No.	直積 cm	長・幅・深幅 cm	形 状	備 考
HF-1	18	18・32	円形・斜	
2	18	18・10	#	
3	15	15・16	#・内傾	中からI群C類土器底部出土
4	12	12・10	#	
HF-1	50	37・8	長 円 形	?
2	58	58・6	円 形	
3	44	22・4	長 円 形	

表V-5 H-5付属施設表



図V-29 H-5・出土の遺物

ii 土 墓

P-1 (図V-30)

位 置 A-6-b 規 模 $0.47 \times 0.38 \times 0.07^m$
特 徴 平面形は長円形を呈する。III層に掘り込まれた浅い皿状のビットで、覆土1層に炭化物が混じっている。遺物は出土していない。

時 期 周辺の状況から、I群C類の土器の時期と推定される。

P-2 (図V-30, 図版V-25・29, 表V-18)

位 置 B-5-c, B-6-b 規 模 $1.60 \times 1.50 \times 0.12^m$
特 徴 平面形は円形で、III層に浅皿状に掘られている。確認面では、全面に10~15cm大の角礫が広がっており、ほとんどが熱をうけたような状態であった。礫の重なり合う間層には、炭化物主体の黒色土がつまっている。蒸し焼き作業のビットの可能性があるが、その性格は周囲の造構（焼土群・集穀群等）と相まって考えねばならない。

遺 物 407個の角礫（円礫は2個）に混ざって石錐が1個出土した。

時 期 土器はないが、周囲の状況からI群C類の土器の時期と思われる。

P-3 (図V-6・30, 図版V-26)

位 置 C-5-d 規 模 $0.72 \times 0.64 \times 0.08^m$
特 徴 平面形が円形の、III層に掘り込まれた小ビットである。Z-2が上にあり、これより時期的に若干古いものと思われる。位置関係から、H-1下面に伴うものと考えられる。底付近の覆土に炭化物層がみられる。

時 期 H-1下面に伴うものとすれば、I群C類の土器の時期であろう。

P-4 (図V-30, 表V-18)

位 置 C-6-d 規 模 $0.45 \times 0.45 \times 0.05^m$
特 徴 平面形は円形で、III層に浅皿状に掘り込まれている。覆土に焼土粒や炭化物が混在している。周囲の造構との相關関係で、性格を判断すべき小ビットである。

時 期 周囲の状況から、I群C類の土器の時期と推定する。

P-5 (図V-30, 図版V-26・28・29, 表V-18)

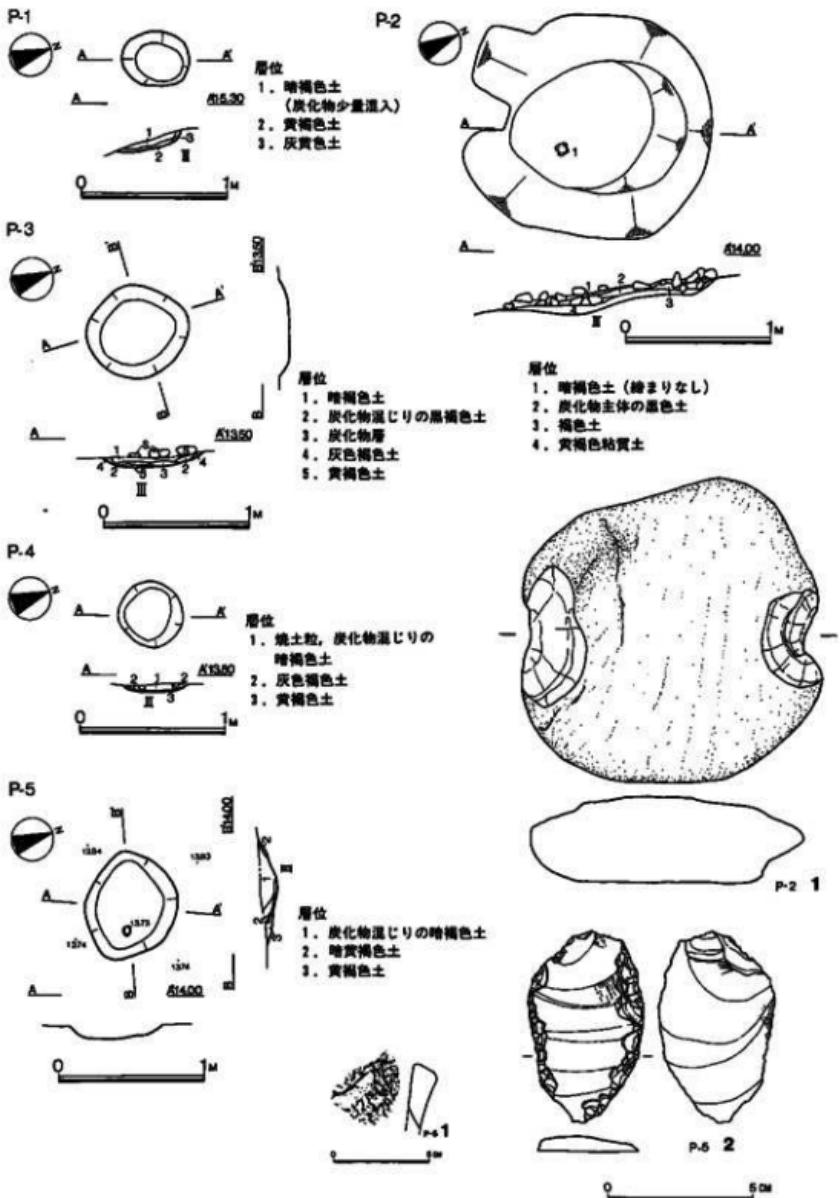
位 置 C-8-a 規 模 $0.74 \times 0.61 \times 0.12^m$
特 徴 平面形は不整な長円形を呈する。III層に皿状に掘り込まれている。覆土に炭化物が混入している。機能は不明。

遺 物 覆土からI群C類-3の口縁部山形突起の土器片、頁岩製の削器、壙底付近から砾石とメノウのフレイクが出土している。

時 期 I群C類土器の時期。

P-6 (図V-31, 図版V-26・28・29, 表V-18)

位 置 C-9-b 規 模 $1.93 \times 1.35 \times 0.17^m$
特 徴 平面形は長円形で、III・IV層に皿状に掘り込まれている。壁際に炭化物を含む層があり、



図V-38 P-1・2・3・4・5、P-2・5出土の遺物

壇底付近の層には、礫が遺物とともにまばらに入っている。

遺 物 壇底付近に I 群 C 類 - 3 土器や砾石片があり、覆土からは削器が出土している。

時 期 I 群 C 類 - 3 土器の時期。

P - 7 (図 V - 31, 図版 V - 26・28, 表 V - 11・19)

位 置 C - 9 - b 規 模 $1.88 \times 1.30 \times 0.37^m$

特 徴 平面形は長円形を呈する。III・IV層に2段に掘り込まれている。2段目の中央小ビットは不整円形で、深さ14cmをはかる。覆土には、焼土や炭化物がみられ、特に中央小ビットの覆土は、焼土・炭化物混じりの土である。海獣骨片も少量確認された。壇口よりやや下には、まばらに礫が入り、一部は熱をうけているような状態である。中央に炉をもった土壙で、屋外炉と推定される。

遺 物 壇口付近の礫間や、中央小ビット内から、I 群 C 類 - 3 の土器が出土している。

時 期 土器や近辺の状況から、I 群 C 類 - 3 の土器の時期であろう。

P - 8・9 (図 V - 32, 図版 V - 27～28, 表 V - 19)

位 置 B - 9 - d

規 模 P - 8 : $1.00 \times 0.64 \times 0.09^m$ P - 9 : $1.22 \times 1.04 \times 0.12^m$

特 徴 重複しているが、各々個別のビットである。ともに平面形は長円形で、III層に掘り込まれた皿状のビットである。両者とも焼土粒や炭化物を、覆土に含んでいる。

遺 物 P - 8 は壇底から I 群 C 類 - 1 土器・石錐が出土している。P - 9 からは、壇底部で I 群 C 類 - 1・3 土器が出土した。

時 期 両者とも I 群 C 類土器の時期だが、層序から、P - 9 の方が古い土壙である。

P - 10 (図 V - 25・33, 図版 V - 28・29, 表 V - 19)

位 置 D - 9 - c · d 規 模 $1.50 \times (1.50) \times 0.30^m$

特 徴 約半分が調査区外だが、平面形はほぼ円形と思われる。III・IV層に掘り込まれた擂鉢状の土壙である。間に F - 23・Z - 10がある。

遺 物 壇底付近から I 群 C 類 - 3 土器のほか、削器や石錐が出土している。

時 期 覆土はほとんどが、H - 4 の盛土で、そこに柱穴もつくられている。H - 4 よりは古い土壙であるが、I 群 C 類土器の時期よりは遅らないだろう。

P - 11 (図 V - 33)

位 置 B - 14 - c 規 模 $2.40 \times 1.25 \times 0.14^m$

特 徴 平面形は長方形を呈す。III層に掘り込まれた浅皿状のビット。覆土に少量炭化物を含んでいる。廃棄場跡の北東、台地端に位置し、すぐ北に F - 29がある。これらと関係するものであろうか。遺物はない。

時 期 周辺の状況から I 群 B・C 類土器の時期であろう。

P - 12 (図 V - 33, 図版 V - 27・29, 表 V - 19)

位 置 B - 14 - a 規 模 $0.78 \times 0.68 \times 0.18^m$

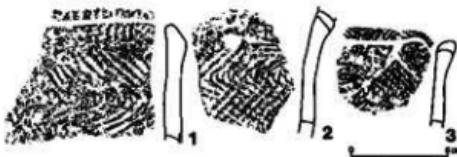
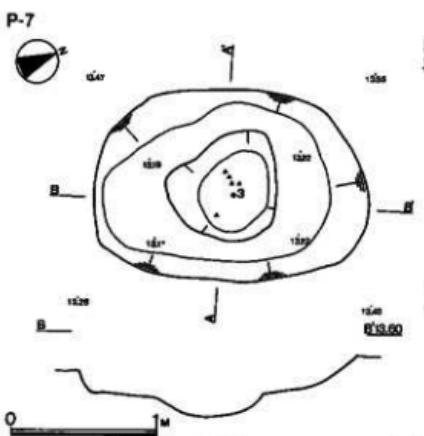
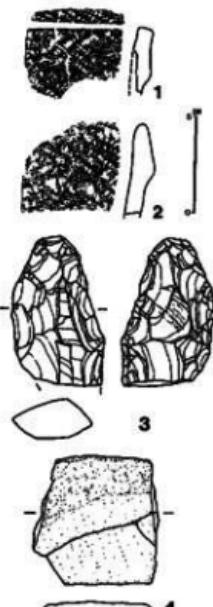
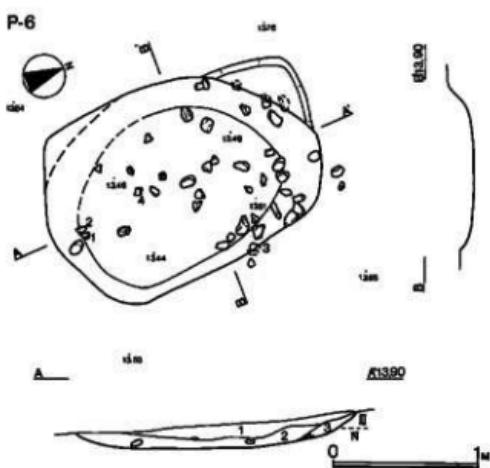
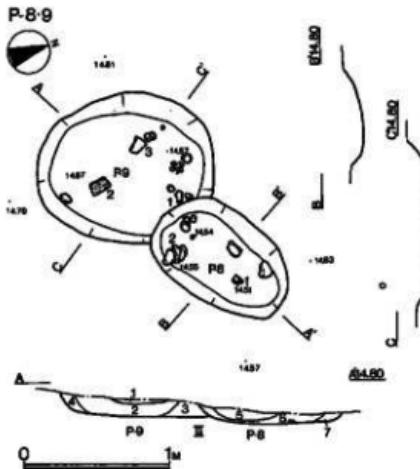
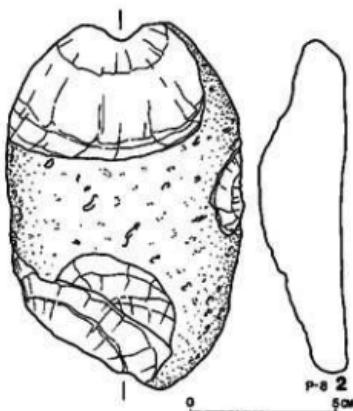
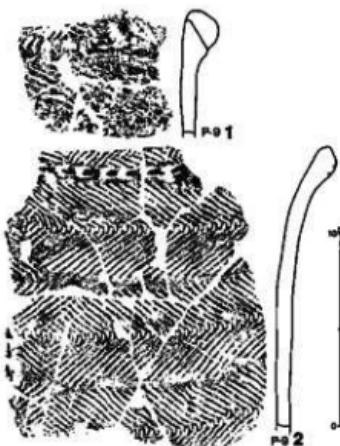


図 V-31 P-6・7, 出土の遺物



- 層位
1. 黒色土
 2. 暗褐色土（焼土粒、炭化物含む）
 3. 茶褐色土（少量の炭化物含む）
 4. 黄茶褐色土
 5. 褐色土
 6. 單褐色土（少量の焼土粒、炭化物を含む）
 7. 黄褐色土（少量の炭化物含む）



図V-32 P-8-9, 出土の遺物

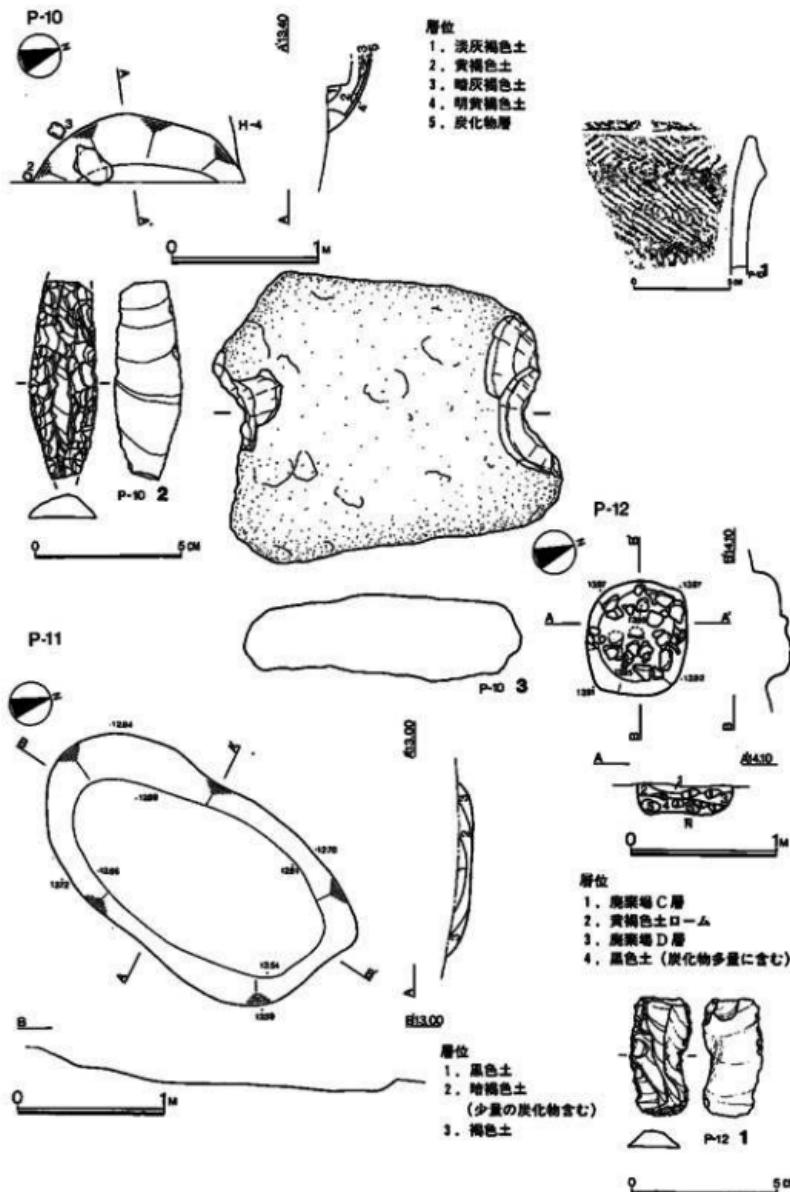
特徴 平面形は隅丸方形で、掘り込みは、直層が剥がされた廃棄場基底面からなされている。

焼底には厚く炭化物の入った黒色土が入り、全体に約50個の熱をつけた角礫がつまっている。

覆土には廃棄場跡のD層土が入る。廃棄場と何らかの関わりをもつ土壌であろう。

遺物 前述の礫の他、覆土に黒曜石の削器がみられた。

時期 廃棄場形成のはじめと同時期。I群B・C類土器の時期であろう。



P-13 (図V-34, 図版V-28-28, 表V-11-20)

位置 C-13-d

規模 $1.16 \times 0.80 \times 0.07^m$

特徴 平面形は長円形を呈す。Ⅲ層に掘られた浅皿状ピットで、覆土に焼土粒や炭化物・海獣骨を含む。廃棄場跡D層の範囲内にあり、P-14とともに、これと関係するものであろう。

遺物 覆土からI群B類・C類-3土器や、砥石・敲石が出土しているが、覆土ともども廃棄場の流れ込みと考えられる。

時期 廃棄場との関わりから、I群B・C類土器の時期であろう。

P-14 (図V-35, 図版V-28-28, 表V-20)

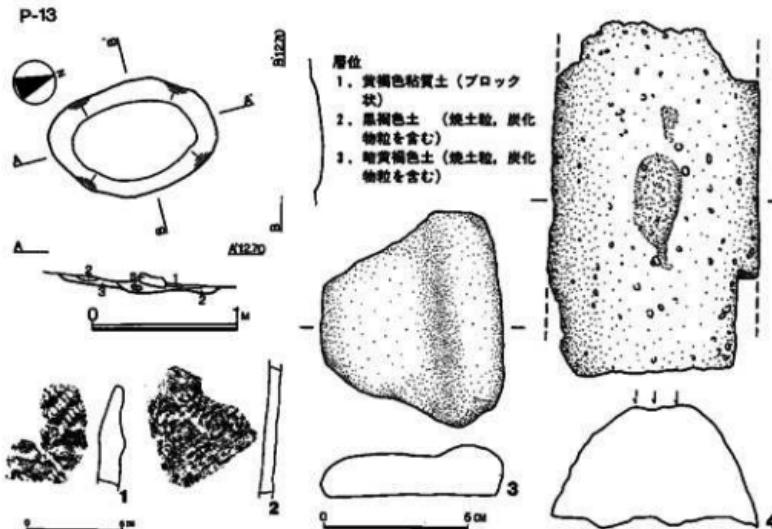
位置 C-13-c

規模 $1.03 \times 0.98 \times 0.15^m$

特徴 Ⅲ層に掘られた平面円形の、浅皿状ピット。覆土は廃棄場跡D層の流れ込みである。

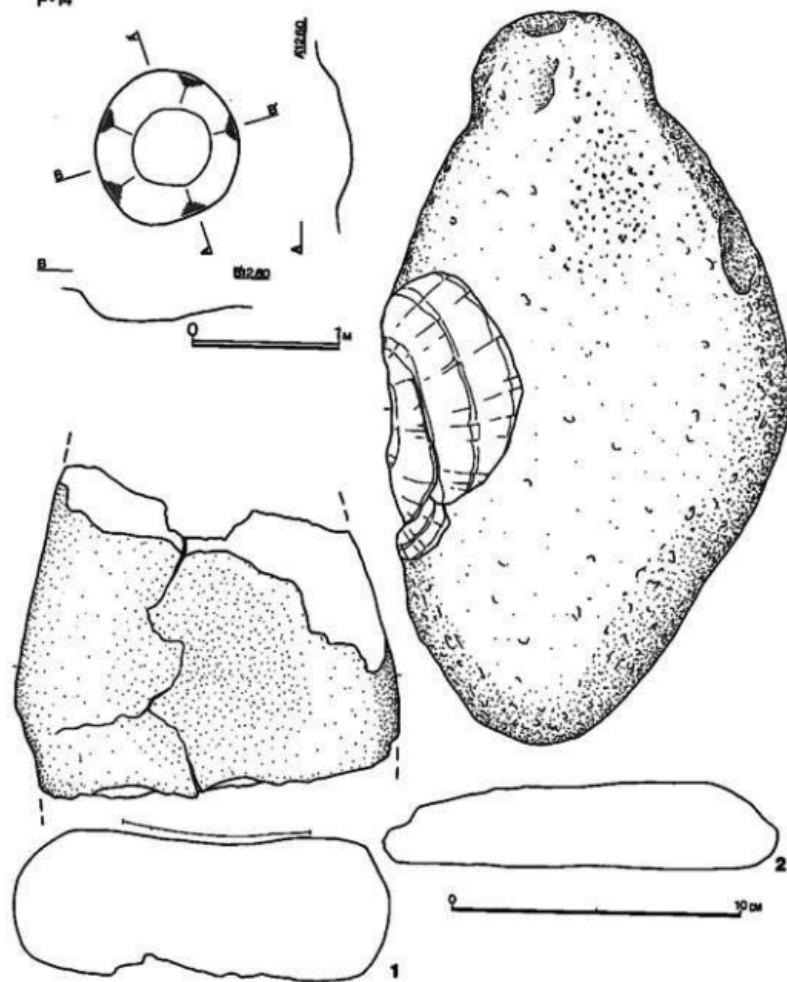
遺物 流れ込みであるが、石皿片やノッチのつくられた砥石が出土している。

時期 P-13同様、I群B・C類土器の時期と推定される。 (三浦 正人)



図V-34 P-13, 出土の遺物

P-14



図V-35 P-14, 出土の遺物

iii 集疊 (Z-1~10)・石組み炉 (S-1)

(図V-6・36・38, 図版V-7・30~32, 表V-6・11・20・21)

漸移層(Ⅲ層)にある集疊(Z)をひとまとめにしてとらえたが、疊の形状やそのあり方が異なる面もある。しかし、少ない伴出遺物や、周辺の遺構・遺物等から、石組み炉(S-1)とともに、縄文時代中期に属する遺構と判断した。7ラインより南、Dラインより西には、5基(Z-1~4・6)が、S-1・P-2や焼土群(F-1~14)と円環状に位置することが、その性格と関連して興味深い。以下諸データを表V-6に掲載する。

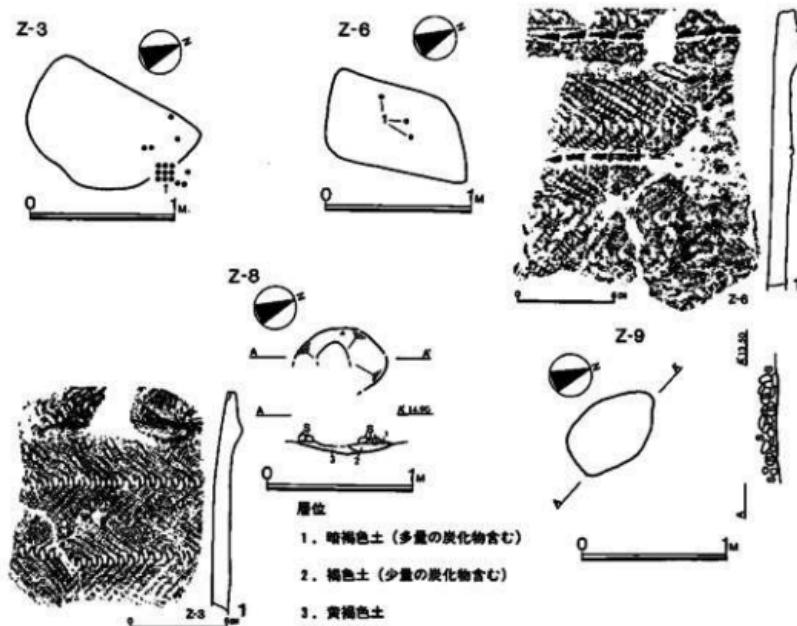
(三浦 正人)

iv 焼土 (F-1~57)

(図V-6・25・37~38, 図版V-30~32, 表V-7~8・11・21・22)

ほとんどが漸移層面にみられるもので、周辺の遺構・遺物から、縄文時代中期の所産と考えられる。集中して存在する傾向が強く、特に前述したZとの関係や、13ライン以北の集中、住居との関係が重要である。焼土中に小穴のあるもの(F-8・9)や、掘り込みのあるもの(F-5・18・19)の他は、焼土層の厚いものとういものに大別できよう。F-23と43からは、海獣骨片が検出されている。以下データを表V-7~9に掲載する。

(三浦 正人)



図V-36 Z-3・8・8・9、Z-3・6出土の遺物

No	グリッド 中央レベルm	規模cm	細数	礫の特徴	遺物(図番)	備考
Z-1	C-6-c 13.09	230×150	262	長径8~15cm短径6~8cm 厚5~8cmの円礫。4割が 破損。	I群C類土器片 (図V-17) 石斧・フレイク	東1mにF-1
2	C-5-d C-6-a 13.44	150×75	26	長径10~15cm短径7~8cm 厚3~7cmの円礫主体。		P-3と重複(P-3が古い) 北1mにS-1 北西2mにF-2
3	C-6-d 13.26	115×75	75	長径12cm前後の円礫主体。	I群C-3類土器片 (図V-36)・フレイク	北東脇に頁岩のフレイク集中あり
4	C-6-d 13.75	110×70	51	破損した円・角礫が多い。	I群C類土器・ フレイク	以上1~4と6はF-1~14・ P-2等と円環状に並んでいる。
5	D-4-c 10.75	120×80	66	長径12cm前後の円礫主体。	I群C類土器片 (図V-17)	H-1掃土下
6	B-6-c	110×60	43	角礫主体、焼けたもの多い。	I群C類-1土器片 (図V-36)	
7	A-7-c 15.39	80×50	98	10cm前後の角・円礫が密集。		炭化物を含む。
8	B-9-a,b 14.75	65×50	24	角のやや落ちた角礫。		礫の重なりがない。中央円形に 無礫部あり。炭火物層をもつ。
9	C-9-b 13.41	70×45	87	全て長径12cm前後の円礫が 密集。		礫と礫の間間に炭化物状の黒色 土がつまる。
10	D-9-abcd 13.04	60×50	30	角・円礫混り。		F-23と重複、F-23が下(古 い)。炭化物層をもつ。
S-1	C-6-a	90×65	7	大型の礫5個で炉が組まれ ている。	I群C類土器片 海螺骨片	焼土はみられない。 西1mにF-2。

表V-6 集礫(Z)・石組み炉(S)一覧表

No	グリッド・層位	表面中央 レベルm	最大計測値cm 長径・短径・厚	遺物(図番)	備考
F-1	C-6-c・III	12.82	46・45・6		
2	C-6-a・III	13.53	66・57・11		以下14まで、Z-1~4・6と円環 状に並んでる。東1mにS-1。
3a	B-6-b・III	13.98	98・57・10		a・b並列。
b	" " III	13.99	82・44・11		
4	" " III	13.98	82・80・12		
5	" " III	14.07	106・82・13		掘り込みあり。
6	" " III		31・27・4		
7	B-6-b-c・III		129・110・8		
8	B-6-a・III	14.35	151・84・12	I群C類-3土 器片(図V-39) 石錐2・敲石・礫	中央に46個の焼礫の入ったピット (径43cm深8.5cm)あり。
9					

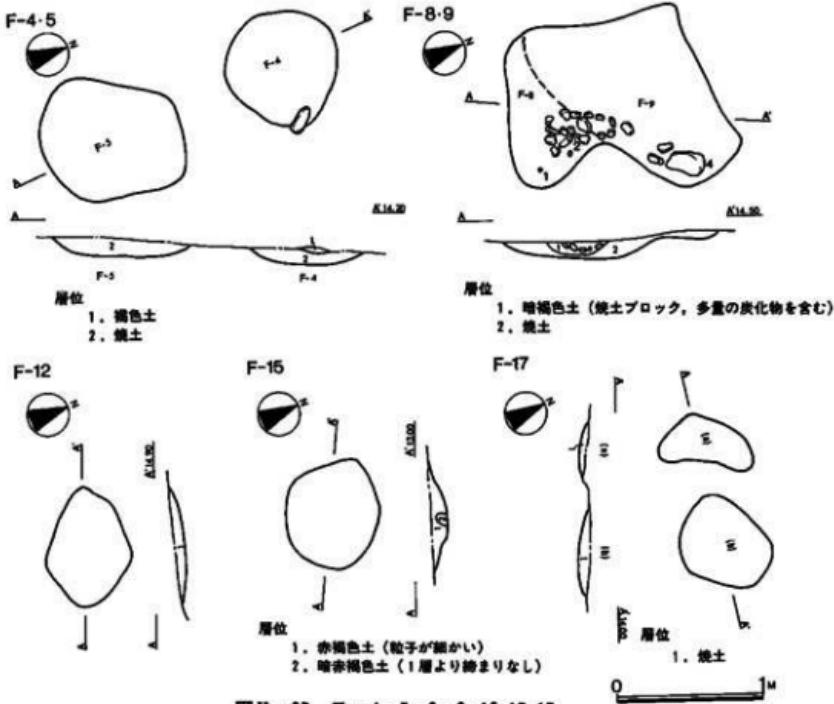
表V-7 焼土(F)一覧表(1)

No.	グリッド・層位	表面中央 レベルm	最大計測値cm 長径・短径・厚	遺物(図番)	備 考
F-10	B-6-d-III	14.43	28 · 28 · 35		
11	" · III	14.69	28 · 28 · 4		
12	B-7-a-III	14.75	83 · 60 · 6		
13	A-6-b-c-III	14.94	52 · 52 · 9		
14	B-6-b-III	14.21	48 · 41 · 3		
15	D-7-d-III	12.89	77 · 66 · 11		
16	B-8-b-III	14.52	46 · 40 · 4		
17a	C-8-a-III	13.78	65 · 29 · 5		aが下(古い)。
b	" · III	13.80	71 · 52 · 8	石斧(図V-36)	
18	C-8-d-III	13.78	71 · 62 · 19		振り込みあり。
19	D-8-a-III	12.77	74 · 60 · 12	削器(図V-36)・礫	振り込みあり。
20a	D-9-a-III	13.02	45 · 32 · 10		aが下(古い)。
b	" · III	13.10	80 · 44 · 11	I群C類土器片 (図V-36)	
21	" · III	13.21	66 · 61 · 11		
22	C-9-a-III	13.84	40 · 31 · 6		
23	D-9-abcd-III	13.04	(85) · (45) · 6	魚鱗骨片	Z-10と重複。F-23が下(古い)。
24	C-10-a-III	13.95	58 · 37 · 3		H-4の周辺に位置する。
25	" · III	14.03	53 · 46 · 3		"
26	" · III	14.04	52 · 42 · 3		"
27	" · III	13.98	55 · 51 · 4		"
28	C-14-d-N	12.56	(61) · 40 · 6		以下54まで発掘場跡とその周辺に位置する。
29	B-15-b-N	12.80	90 · 36 · 6		
30	B-14-c-N	13.10	73 · 50 · 11		
31	C-14-b-III	12.05	92 · 49 · 6		
32	C-14-a-b-III	12.73	(50) · 45 · 5		
33	B-14-c-III	13.00	31 · 30 · 3		
34	A-13-c-III	14.10	33 · 30 · 3		
35	C-14-d-III	12.45	60 · 45 · 5		
36	C-14-c-III	12.26	39 · 33 · 4		
37	C-14-b-N	12.26	44 · 39 · 4		
38	C-14-a-III	12.65	33 · 30 · 3		
39	" · III	12.72	61 · 38 · 5		
40	C-13-d-III	12.88	29 · 26 · 3		
41	" · N	12.76	149 · 33 · 4	海獣骨片	
42	C-13-c-N	12.26	43 · 40 · 5		
43	D-13-d-III	11.98	27 · 29 · 3		
44	C-13-d-N	12.56	29 · 23 · 3		
45	C-13-c-III	12.21	35 · 26 · 3		

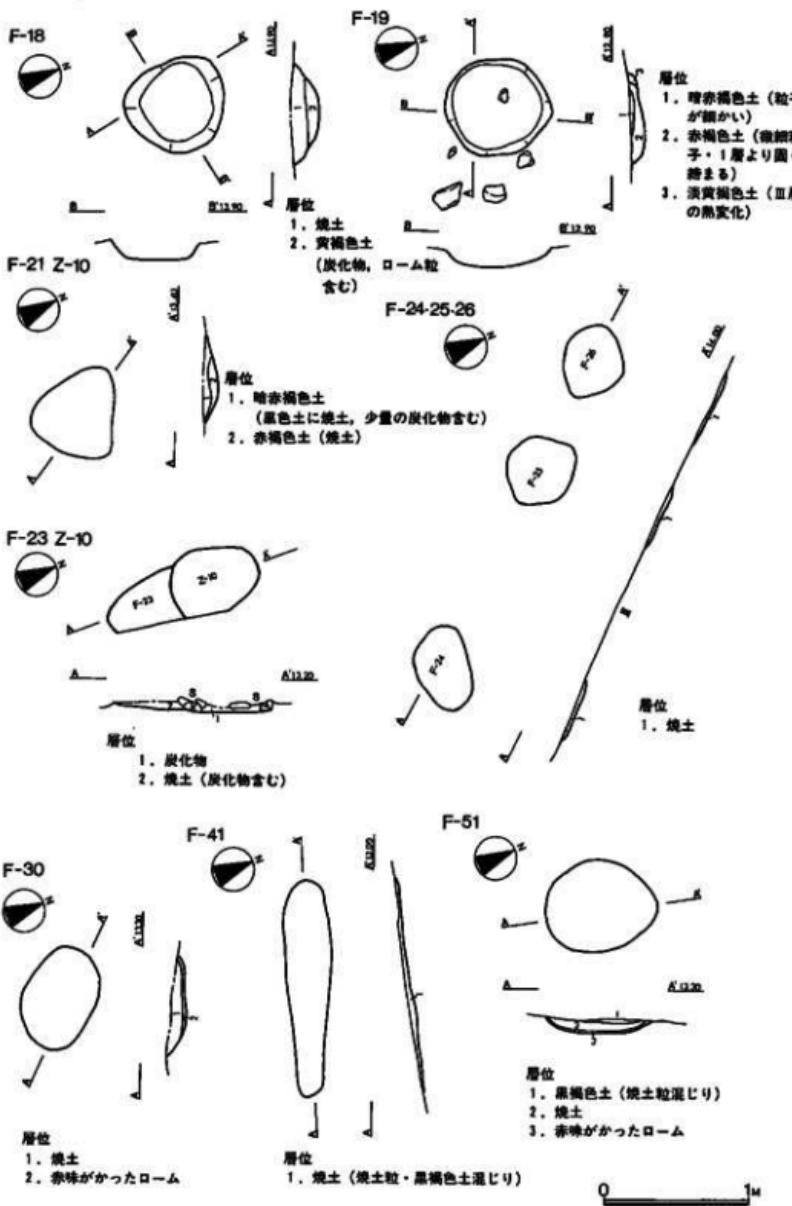
表V-8 烧土(F)一覧表(2)

No.	グリッド・層位	表面中央 レベルm	最大計測値cm 長径・短径・厚	遺物(図番)	備 考
F-46	D-12-a・III	12.14	36・32・3		
47	C-13-c・IV	12.12	34・33・3		
48	#・III	12.36	42・25・4		
49	C-14-d・IV	12.71	39・37・4		
50	B-13-d・III	13.87	13・12・2		
51	B-14-b,c・IV	13.19	76・63・10		付近のものと違う厚い炉のような焼土。
52	B-14-b・III	12.97	14・10・2		
53	B-14-c・III	13.04	35・33・3		
54	#・IV	13.23	54・51・5		
55	B-11-b・IV	14.03	51・42・4		
56	C-10-c・III	12.85	33・30・4		H-4 燃土下
57	C-10-d・III	12.64	37・31・4		"

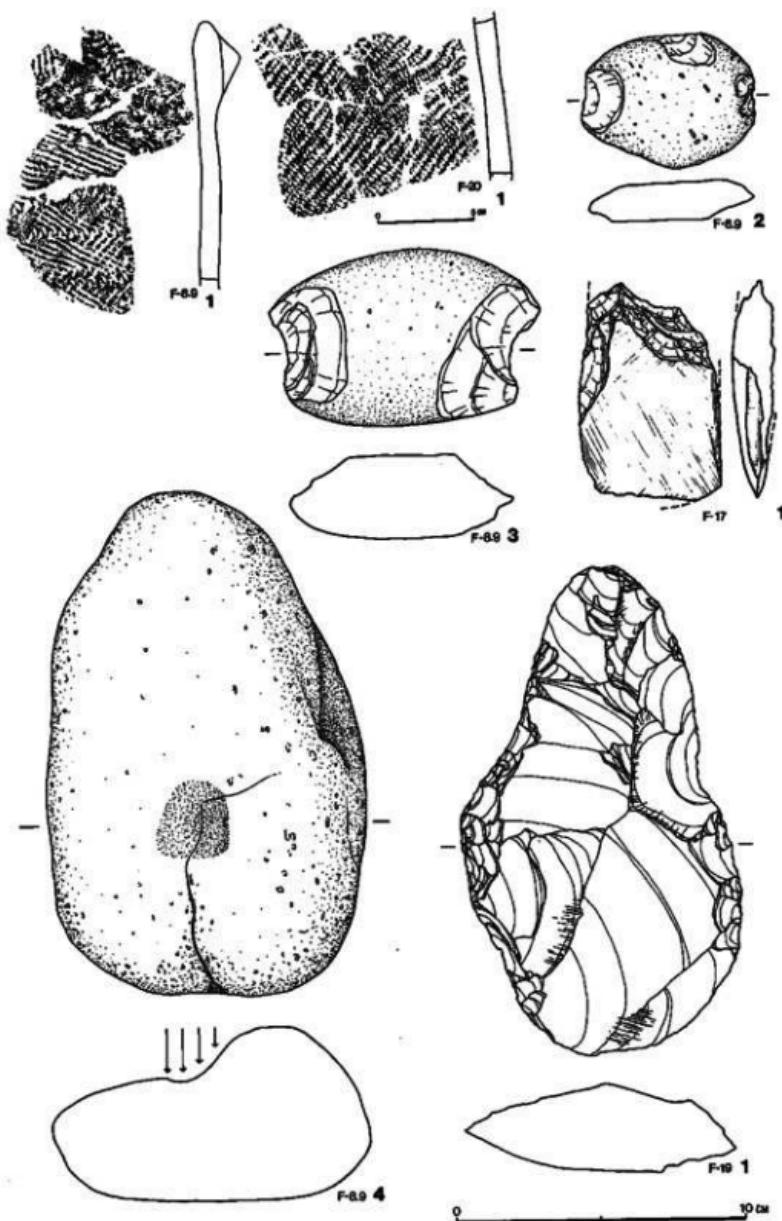
表V-9 焼土(F)一覧表(3)



図V-37 F-4.5・8.9・12・15・17



図V-38 F-18+19+21+23+24+25+26+30+41+51+Z-10



図V-39 F-8・9・17・19・20出土の遺物

v 廃棄場跡（図V-29・40～78、図版V-33～77、表V-11・22～33）

a 造構について

A B C-13・14のグリッドと、調査範囲外に及ぶ、広い範囲には、夥しい量の土器・石器・骨（魚骨・海獣骨等）・礫等の遺物が、焼土・炭化物・フレイク混じりのロームブロック土とともに、人為的な廃棄状態で、検出された。骨のほとんどと、石器・土砂の一部は、熱をうけた状態で廃棄されている。この廃棄場の調査範囲外を含む推定規模は、最大長が西北西-東南東で25m、南-北で17m、総面積約265m²である。廃棄平均厚を20cmとし、土量に換算すると、推定約53m³が廃棄されていたことになる。実際の数は、土器5,694点、石器1,091点である。廃棄の平面形は、上治4遺跡側の沢方向（北東）に一部張り出しをもつ、長円形を呈する。

A・Bグリッドにおける基底面は、Ⅲ・Ⅳ層を削り出しているが、整形しているわけではなく、激しい凹凸が、くり返し続いている。基底面のくぼみには、フレイクの集中が數ヵ所みられた。C-13・14のグリッドでは、幅狭で浅くⅢ・Ⅳ層が盛んでいるが、自然の營力によるものかもしれない。なお廃棄開始前に、P-12・13・14やF-33・34・39・40・41・44・50・51・52・53・54がつくられ使用されている。

調査では、縦横に4本のトレンチを入れ、層序の確認につとめた。しかし、長く連続する層が少なく、遺物が各層にわたって出土するため、層位的調査は、土器を中心に行った。ここでの観察と、土器の型式別組成から、廃棄場形成を層序によって順にみていくと、D→C→B→A層の人為堆積である。このセクション図は図V-29のH-5の図に掲載してある。

D層は、最も広範囲にある廃棄層で、C-13-Cのグリッドまで達し、P-14の覆土となる。B-13・14グリッドでの厚みのあるところでは約20cmを計る。ただ、A-13・14グリッドではうすく、確認できない面もある。土器は、I群B類が主体で64%を占め、I群C類は36%である。I群A類の撚糸文の復元土器が一個体ある。

C層は、B・Cのグリッドに確認でき、D層にかぶった状態を観察できる。流れ出しを含めると、Dラインまで及ぶ。B-13・14のグリッドの最厚部で20cmある。土器はI群B類とC類が6:4の割合で出土する。

B層は、A-13・14グリッドを中心に、C層の上にのっているが、C-13グリッドまでは及んでいない。最厚部で20cmを計る。土器はI群C類が主体(84%)で、B類は少なくなる。

A層は、B層の上にうすく入る部分と、D-B層のない基底面に直接、厚目に入る場所がある。厚いところでは20cmほどある。土器はI群C類が主体で7割を占める。

A～D層は前述のように、焼土粒・炭化物・フレイク・骨片まじりのロームブロック土であるが、この4つの層の廃棄された上に、角礫層がある。ここには、I群C類土器を中心に、石器等も、礫の間隙から発見されている。礫とともに入っている層はⅡ層である。この上にI層表土にも、I群C類土器や石器が多い。擾乱・根根・流出などで、廃棄場の遺物が、浮いてきたものと考えられる。

遺物についての詳細は、以下に述べるが、上記の通り、土器は層別の説明が可能である。

しかし石器は、各層から多数出土し、層による差で土器と同じように把えることは難しい。したがって、ここでは、器種別に説明を行う。骨角器・装飾品・骨齒についても後で触れる。この動物遺存体については、上泊3遺跡全体を一覧表（表V-10・11）にして掲載した。

（三浦 正人）

b 土器について

出土したものはすべてI群土器である。D層からA層まで計5,694点が出土した。このうちB類の土器が62%を占める。復元個体は79個を数える。以下各層ごとに述べる。

D層出土の土器

A類が1個体、B類が2,436点、C類が1,373点出土した。

〈A類〉

A類-2（図V-41：66）：撚糸文の土器である。この復元個体のみが出土した。口縁部が肥厚し、器形は深鉢形を呈す。撚糸文は口唇部から胴下半部まで施され、底部近くから無文になる。また裏面の胴上半部にも撚糸文が施される。

〈B類〉 地文は単節の結束羽状繩文が多い。また補修孔があけられているものが、ほぼ半数を占める。胎土は砂粒を含むものが多い。

B類-1（写真図版V-58：108）：口縁部肥厚帯上に縦の撚糸圧痕文が施される。肥厚帯下縁には棒状工具による刺突がつく。

B類-2（図V-41：1・2、V-46：13・22、V-49：30・44、V-54：67～70、写真図版V-58：109～111、V-59：112～119）：胴部に繩文が施されないものである。口縁部肥厚帯上の貼付文から以下のように区分することができる。イ：縫齒状を呈する（図2-13-22、写111～113・116）、ロ：横円状をなす（図1-30・44写115）、ハ：肥厚帯を沈線で上下に二分する（写119）、粘土紐を横位にめぐらす（写109）。胴部文様は以下のように区分することができる。イ：撚糸圧痕文（写110・111）、ロ：組紐圧痕文（写109）、ハ：円形竹管文（図13・写112・113）、ニ：ヘラ状工具・半截竹管による刺突文（図1-2-22-30、写109-114-116）。貼付文上の施文は、イ：結条体圧痕文（図2-22）、ロ：組紐圧痕文（図30）、ハ：縫文（図13-69写117）、ニ：ヘラ状工具による刻目（写111）とに分かれれる。突起の形態は、イ：山形あるいは棒状をなす（図67写110・115～117）、ロ：頂部が二分し両端が小突起をなす（図13-30-68-69）とに分かれれる。平縁のものは（図1-2）だけである。他の形態では、横状把手をもつもの（写110）、はり瘤をもつもの（写111）がある。

B類-3（図V-42～V-55：15・19・20・23～28・31・37～40・42・43・45・47～50・52～54・58・60～64・70～76、写真図版V-59：119～122、V-60：123～136）：繩文を地文とした上に貼付文が施されたもの。貼付文は2本単位が多い。胴部文様から次の5つに分けられる。横位の貼付文の間に縦位の貼付文が施されたもの、横位の貼付文の間に斜位・円形または半円形の貼

付文が施されたもの、横位の貼付文のみが施されたもの、文様が口縁のみに施されたもの、縄文のみが施されたもの。

横位の貼付文の間に縦の貼付文が施されたもの（図5・7・10・11・20・24・70・71）には口縁部の貼付文から、イ：鋸歯状のもの（図5・7・20・24・70）、ロ：椿円状のもの（図10・11・71）に分けられる。腹部の貼付文間の文様は、イ：刺突・刻目のあるもの（図5・7・11・24・28）、ロ：刺突等が施されないもの（図10・20・71）に区分できる。突起の形態は、イ：頂部が二分し両端が小突起をなすもの（図10・11・71）、ロ：山形のもの（図20・24・28）、ハ：棒状をなすもの（図15）に分けることができる。図5・11は橋状把手をもつものである。補修孔があけられている例が多く、図7は13コ、図10は26コを数える。

横位の貼付文の間に斜位・円形または半円形の貼付文が施されたもの（図8・9・15・19・23・25・31・75）。この中には文様、器形等において①道南地方の円筒土器（サイベ沢遺跡出土等）と共通するもの、②礼文島の特色の強いものとがある。①（図9・15・19・74・75、写127・130）：口縁部把厚帯上の貼付文は次のように分けられる。イ：斜位のもの（図75）、ロ：鋸歯状のもの（図15、写127）、ハ：椿円状のもの（図9・19・74、写130）。突起の形態では、イ：山形のもの（図9・19・74、写130）、ロ：棒状をなすもの（図15・75）に分けられる。このうち図15は頂部が二分し両端が小突起をなすものがつき非対称の器形を呈す。他には貼付文上に組紐压痕文が施されたもの（図9・15・19）、橋状把手をもつもの（図15）がある。図19は突起に三角形の貫通孔があり、その下にY字状の把手をもつ。

②（図8・23・25・31）：口縁部肥厚帯の貼付文は、イ：椿円状を呈す（図25）、ロ：横位に2段の粘土縁をめぐらす（図23・31）に分けられる。図8・25・31は肥厚帯に刺突が施されたもの。突起の形態では、イ：山形（図31）、ロ：頂部が二分し両端が小突起をなすもの（図8・25）に区分できる。貼付文の施文は、イ：縞条体圧痕文（図25・31）、ロ：縄文（図8・23）に分けられる。図31は補修孔が17コあけられている。

横位の貼付文のみが施されたもの（図6・62）：口縁部肥厚帯上の貼付文は共に椿円状である。図6は貼付文間に4コの円形状の貼付文がつく。突起は棒状をなすものと頂部が二分し両端が小突起をなすものが各2コつき非対称形をなす。図62は横位の貼付文間に棒状工具による刺突文がつく。突起は山形で、下縁にはり瘤がつく。

文様が口縁部のみに施されたもの（図3・12・26・27・37・38・47・49・60・72・73・75・76）：このうち37・38は同一個体である。肥厚帯に貼付文が施されるものは次のように分けられる。イ：鋸歯状（図27・37・38・47）、ロ：椿円状（図3）、ハ：方形状（図26・60）、ニ：横位にめぐらす（図72）。図12は肥厚帯を沈線で上下に二分される。図76は肥厚帯下縁に刺突が施される。図73はY字状の把手をもち、肥厚帯・把手に縞条体圧痕文が施される。

縄文のみが施されるもの（図4・14・45・48）：地文は結束羽状縄文が多く、口縁部が肥厚する。図14はゆるやかな山形突起をもつ。地文は結束羽状縄文で無節の縄と、単節の縄とが結合されたものである。補修孔は5コみられる。

〈C類〉地文は単節の結束羽状繩文が多い。胎土は細かな砂粒を含む。突起をもつものと平縁のものとがある。

C類-1 (図V-47:16・17, V-50:32, V-51:35, V-52:51, V-55・56:77~81, 写真図版V-64:192) : 貼付文をもつものは次のように区分される。イ: 垂下する(図16・79), ロ: 横位にめぐる(図78), ハ: 斜位(図51)。図32・77はイ-ロ-ハ、図35・80はイ-ロ、図17はロ-ハとの組合せである。突起の形態では、山形(図17・77・78)、小突起(図32)に分けられる。図79・80は横に張り出す突起をもつ。

刺突文・押引き文だけのものは(図81)のみである。口縁部肥厚帯上を2列に施される。

C類-3

①(図V-50:33, V51:34) 口縁部は4コの突起がつき、その断面の中央は凹む。
②(図V-47:18, V-51:36-41, V-53:57-59, V-56:82~84, 写真図版V-64:193~196) : 口唇上に地文が施されるもの(図36・82・83)。図82は4コの突起をもつ。

〈底部〉(図V-52:55, V-53:56) : 図55はC類、図56はB類に含まれる。

C層出土の土器

B類が962点、C類が583点出土した。

B類-3 (図V-57:85~87, 写真図版V-61:137~154) : 口縁部の貼付文は、イ: 縦位・斜位(写137・141・142)、ロ: 鋸歯状(写140・148)、ハ: 構円状(図85、写143・145)に分かれる。図85写144・145・147は刺突文をもつ。写148は突起の頂部が二分し両端は小突起をなす。下縁にははり瘤がつく。図86、写153は肥厚帯直下に円形刺突文がつく。このうち図86は肥厚帯が繩文で上下に二分される。写153は口縁部が切り出しナイフ状の断面を呈し、胎土に纖維を含む。図85の地文は、胴上半部に結条体、胴下半部に結束羽状繩文が施される。図87はミニチュアの完形土器である。

C類-1 (図V-57:88・89、写真図版V-64:197~202) : この種には、イ: 貼付文のあるもの(図88・89、写197~199)、ロ: 貼付文がなく刺突文・押引き文が施されるもの(図90、写200~202)に分けられる。このうち図90は口縁部肥厚帯が無文になり半截竹管による押引き文が施される。

C類-2 (図V-57:91) : 肥厚帯の上下に半截竹管による刺突列がつく。下縁から垂下する沈線が施される。

C類-3

①(写真図版V-64:203・204・212~214) : このうち写203は棒状をなす突起をもつ。
②(図V-57:92, V-58:93~96・98、写真図版V-64:205~211・215・216) : 図92、写203は突起をもつ。このうち図92は突起下に把手をもつ。図93は横に張り出す突起をもつ。図94は大型の土器で、地文は結束斜行繩文が施される。

B層出土の土器

B類が57点、C類が11点出土した。

B類-3（写真図版V-62：162）：口縁部肥厚帯に鋸歯状の貼付文がつく。

C類-1（写真図版V-65：217～223）：写221と写222は同一個体である。写220は押引きにより肥厚帯中央部が無文になる。写223は下縁に貼付文の一部が残る。

C類-3

①（写真図版V-65：224）：小突起をもつ。

②（図V-58：98、写真図版V-65：225～227）：図98は横に張り出す突起をもつ。胴部はふくらみをもつ。地文は結束斜行繩文で、単節の繩と無節の繩が結束されたもの。

A層出土の土器

B類が77点、C類が176点出土した。図示したものはすべてB類の土器である。

B類-2（写真図版V-62：155～157）：写155は胴部の貼付文間に刺突をもつ。写156は胴部破片。

円形刺突文をもつ。写157は貼付文のみが施される。

B類-3（写真図版V-62：158～161）：写158は胴部破片。写161は把手の刺離の痕跡がある。

II層出土の土器

II層とI層出土の土器は、包含層に含まれるが廃棄場跡の範囲に限りここで述べる。

B類が781点、C類が891点出土した。

B類-1（写真図版V-63：163）：口縁部肥厚帯に縦の格条体圧痕文が施される。

B類-2（写真図版V-62：164～169）：165・166は胴部破片である。口縁部の貼付文は、イ：鋸歯状（写167・168）、ロ：楕円状（写169）に分けられる。写164・165・167～169は頸部から胴部にかけて刺突のつくもの。このうち写165は竹管による刺突と、爪形の刺突が施される。

B類-3（写真図版V-62：170、V-63：171～181）：写172・181は胴部破片。口縁部の貼付文は次の3つに分かれる。イ：鋸歯状（写173・174）、ロ：楕円状（写170・178）、ハ：縦位（写175・176）。写170・174・179は山形突起をもつもの。写174・179は口縁部下縁にはり瘤がつく。

C類-1（写真図版V-65：228～237）：写228は垂下する貼付文をもつ。写229・234は頸部が無文になる。写237は幅広の肥厚帯をもつ。

C類-3

①（写真図版V-65：283～240）：口縁部肥厚帯の幅がせまく、断面は三角形を呈す。

②（図V-59：99～103、写真図版V-65：241～243、V-66：244～258）：復元できたものはすべて平縁で、胴部はふくらみをもつものが多い。図99・100・103、写251～255・258は口唇上に繩文が施される。口縁部肥厚帯の断面は、イ：中央部が凹むもの（写243・245～247・249～251）、ロ：切り出しナイフ状のもの（図101、写244・254）、ハ：肥厚帯がうすいもの（写245・246・249・250・252・254・255・258）に区分できる。

I層出土の土器

B類が1,286点、C類が843点出土した。

B類-1 (写真図版V-63:182)：口縁部に縦、頸部に横の格条体圧痕文が施される。

B類-2 (写真図版V-63:183)：胴部破片である。貼付文の間に半円形の撚糸圧痕文が施される。

B類-3 (写真図版V-63:184~191)：写186は胴部破片。口縁部肥厚帯の貼付文は、イ：鋸歯状 (写184・189)、ロ：椿円状 (写185) に分けられる。写190・191は口縁部に刺突が施される。写184は口縁部に把手の刺離の痕がある。

C類-1 (図V-59:104、写真図版V-67:259~267)：図104は口縁部肥厚帯に3列の半裁竹管による押引きがつく。胴部には5本の垂下する貼付文が底部直上まで施される。写259~261・267は垂下する貼付文をもつ。写262~266は貼付文がなく、口縁部肥厚帯に半裁竹管による刺突文・押引き文が施される。

C類-2 (図V-59:105・106)：突起は4コでその断面は中央部が凹む。地文は結束羽状縄文である。図105は口縁部に2条の沈線が施される。頸部から胴部にかけては突起をはさむように縦の沈線が施される、図106は口唇部と口縁部下縁に沈線が施される。突起には半裁竹管による刺突がつく。

底部破片 (図107)：木葉痕あり。

C類-3

① (写真図版V-67:268・279~284)：口縁部の断面は三角形のものが多い。

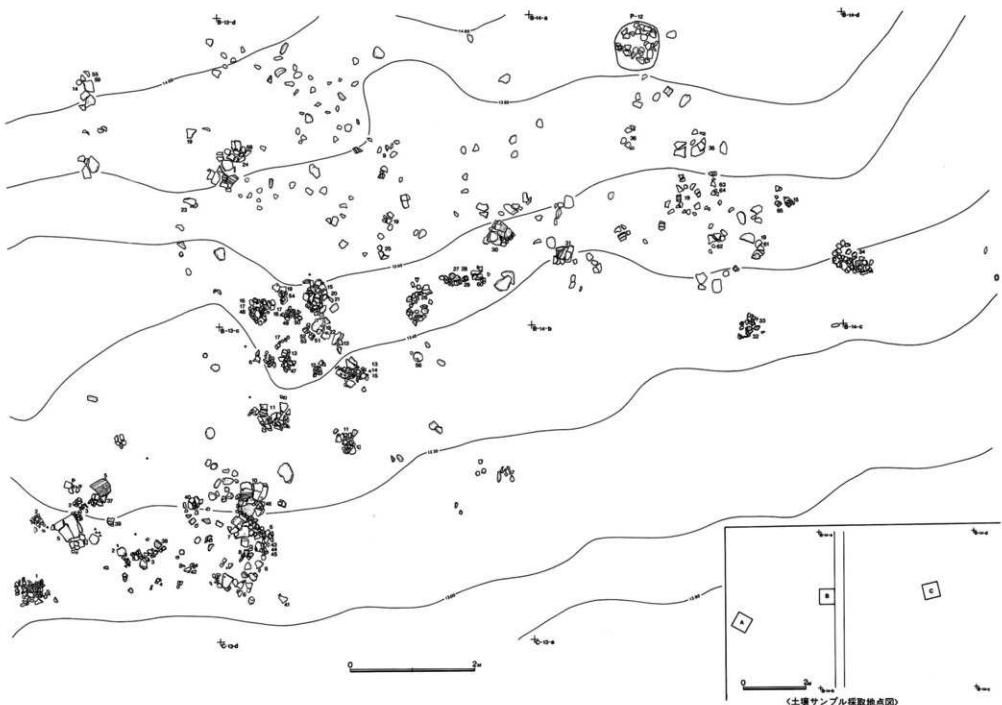
② (写真図版V-67:269~278・285・286)：口縁部肥厚帯の断面は、イ：中央部が凹むもの (写271・273・274・285)、ロ：切り出しナイフ状のもの (写269・270・272) に分けられる。写269・271~273・275・285は口唇上に縄文が施されたもの。

底部破片 (写真図版V-68:287~316)：図示したもの以外一括して掲載した。いずれの類も底が張り出しが多い。

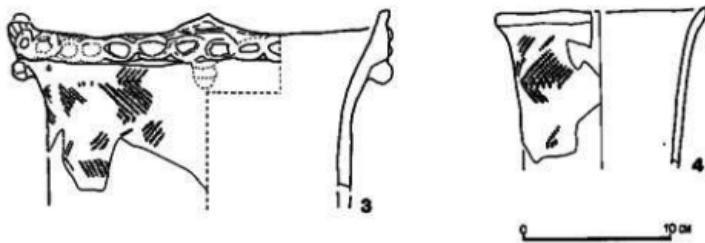
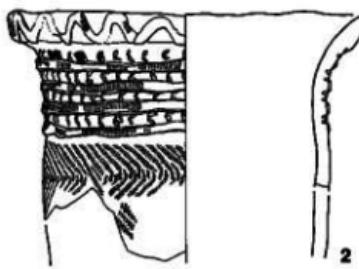
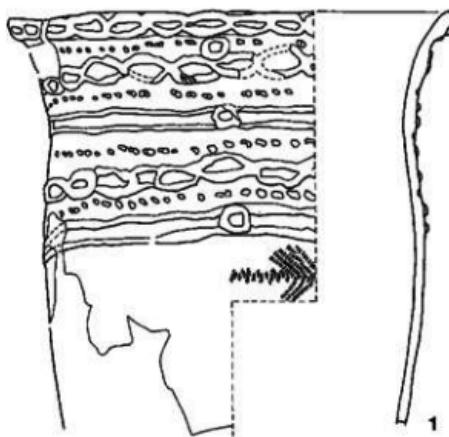
B類 (写287~299)：写297は木葉痕がある。

C類 (写300~316)：写304は笹葉痕、写310~313は木葉痕がある。写316は結束羽状縄文が施されたものである。

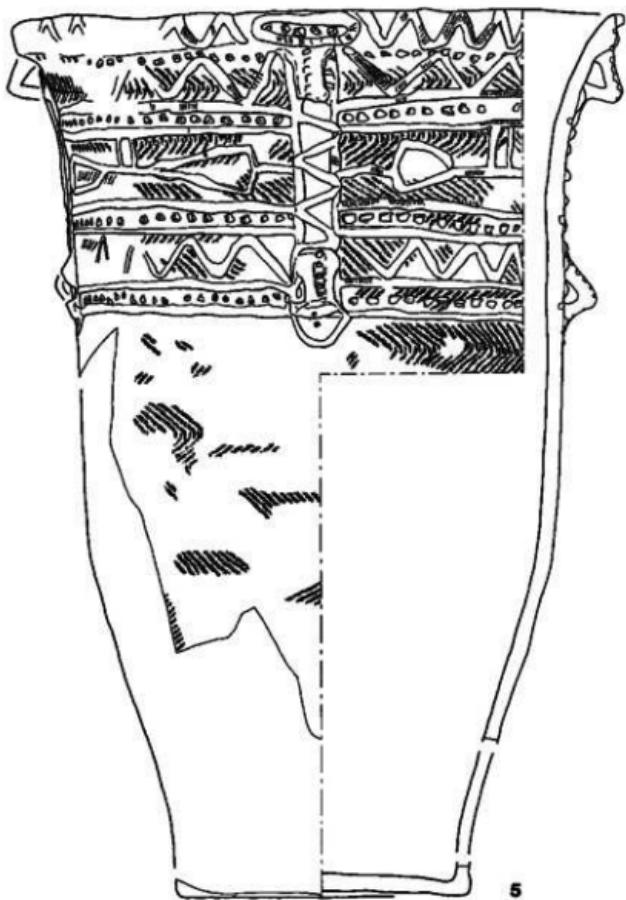
(佐藤 和雄)



図V-40 廃棄場跡土器出土状況図

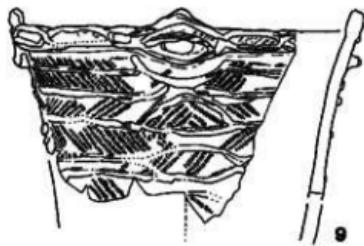
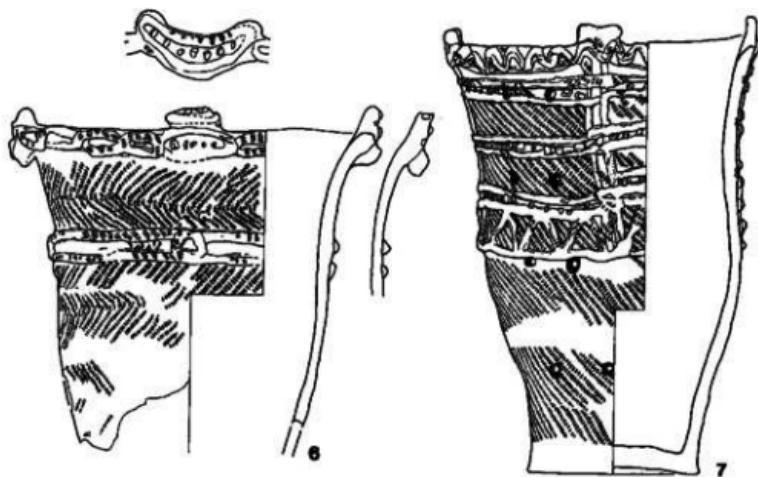


図V-41 廃棄場跡出土の土器(1)



0 20 cm

図 V-42 廃棄場跡出土の土器(2)



0 10 CM

図 V-43 廃窯跡出土の土器(3)

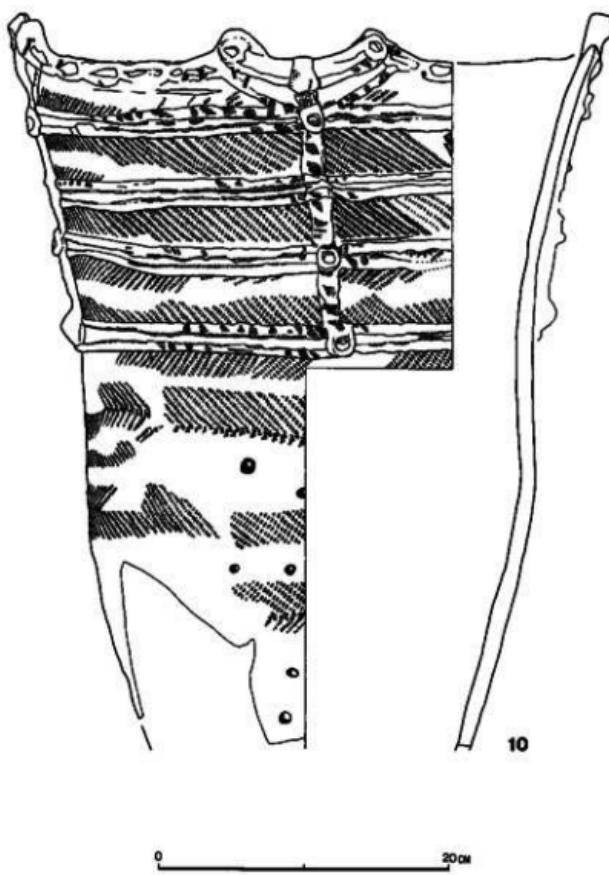
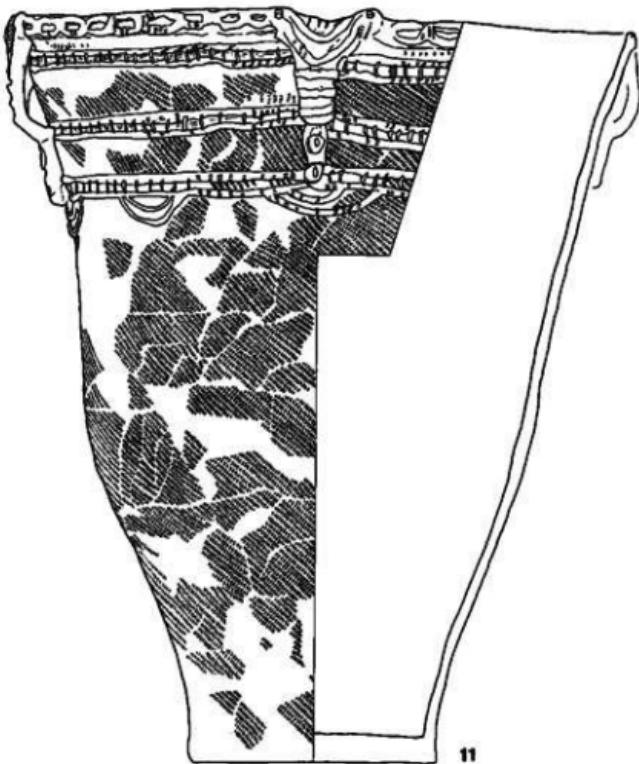
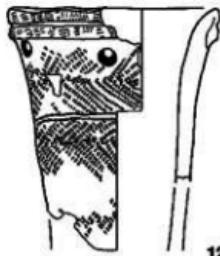


図 V-44 廃棄場跡出土の土器(4)



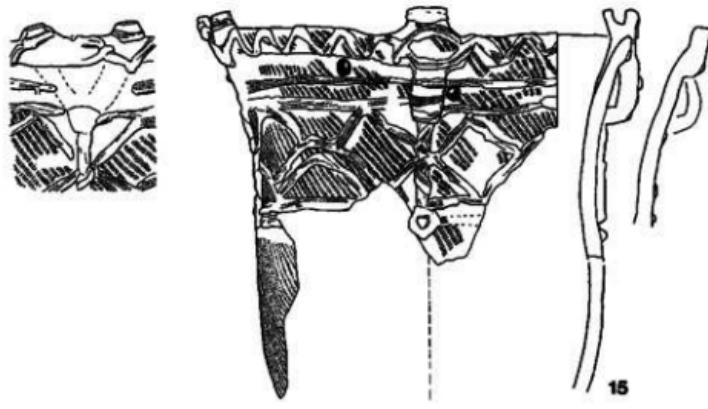
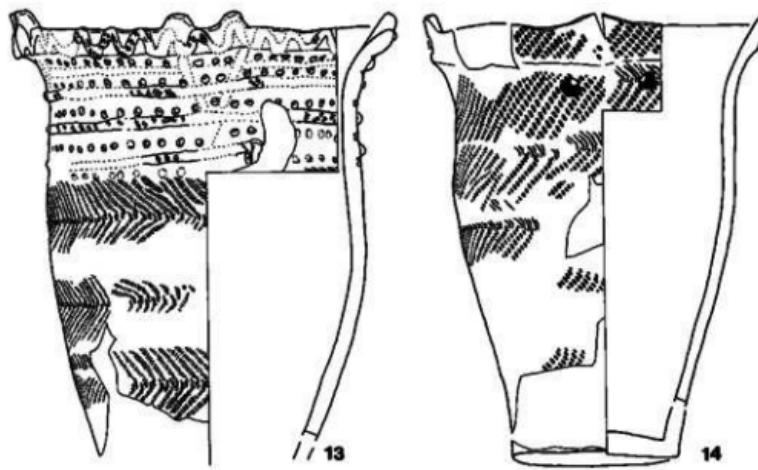
11



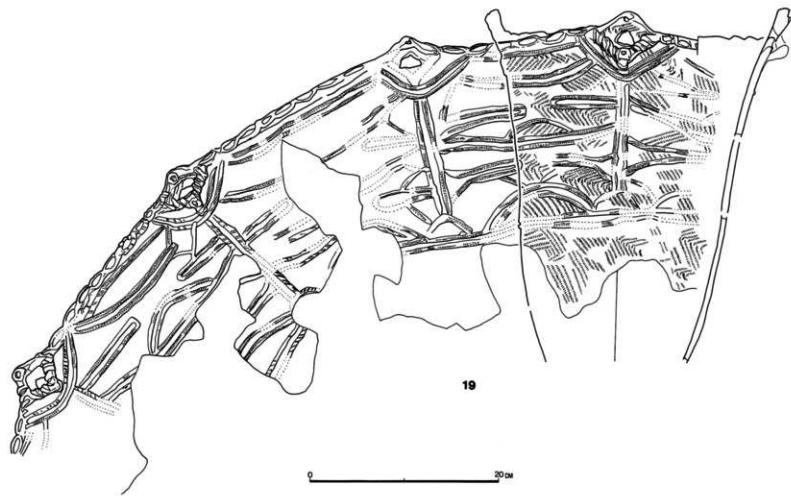
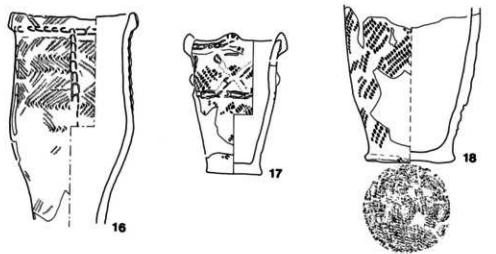
12

0 20 cm

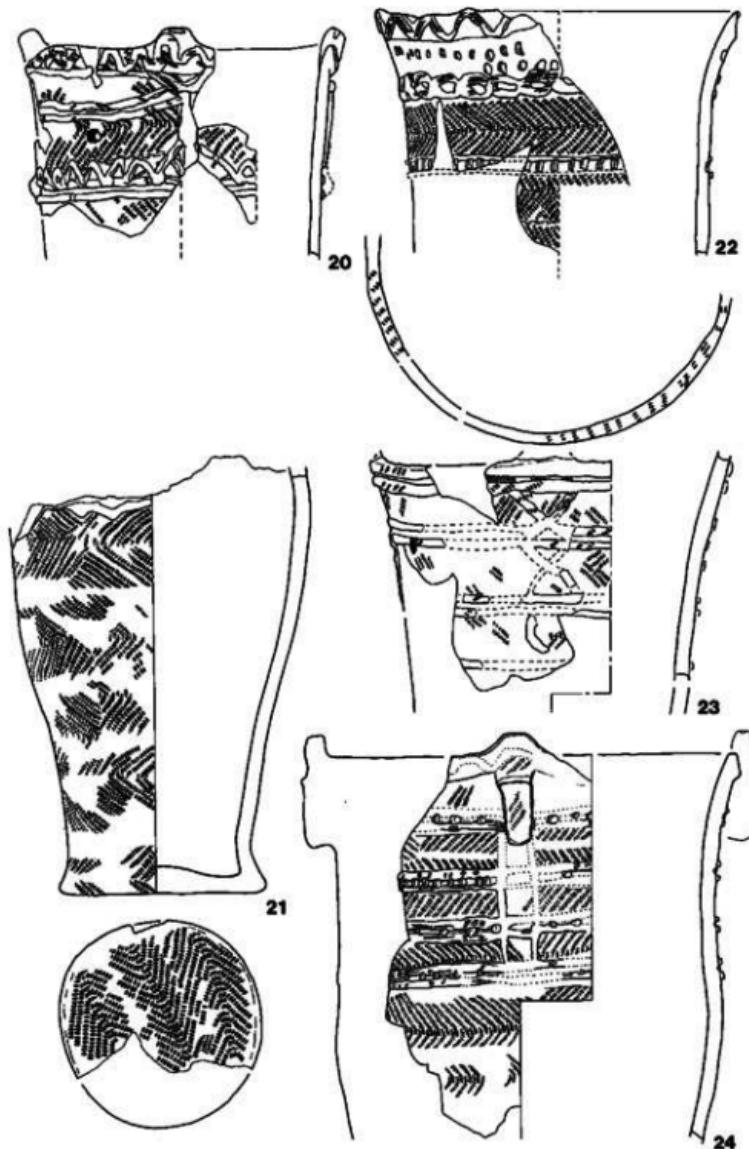
図 V-45 廃棄場跡出土の土器(5)



図V—46 廃棄場跡出土の土器(6)



図V-47 廃棄場跡出土の土器(7)



図V-48 廃棄場跡出土の土器(4)

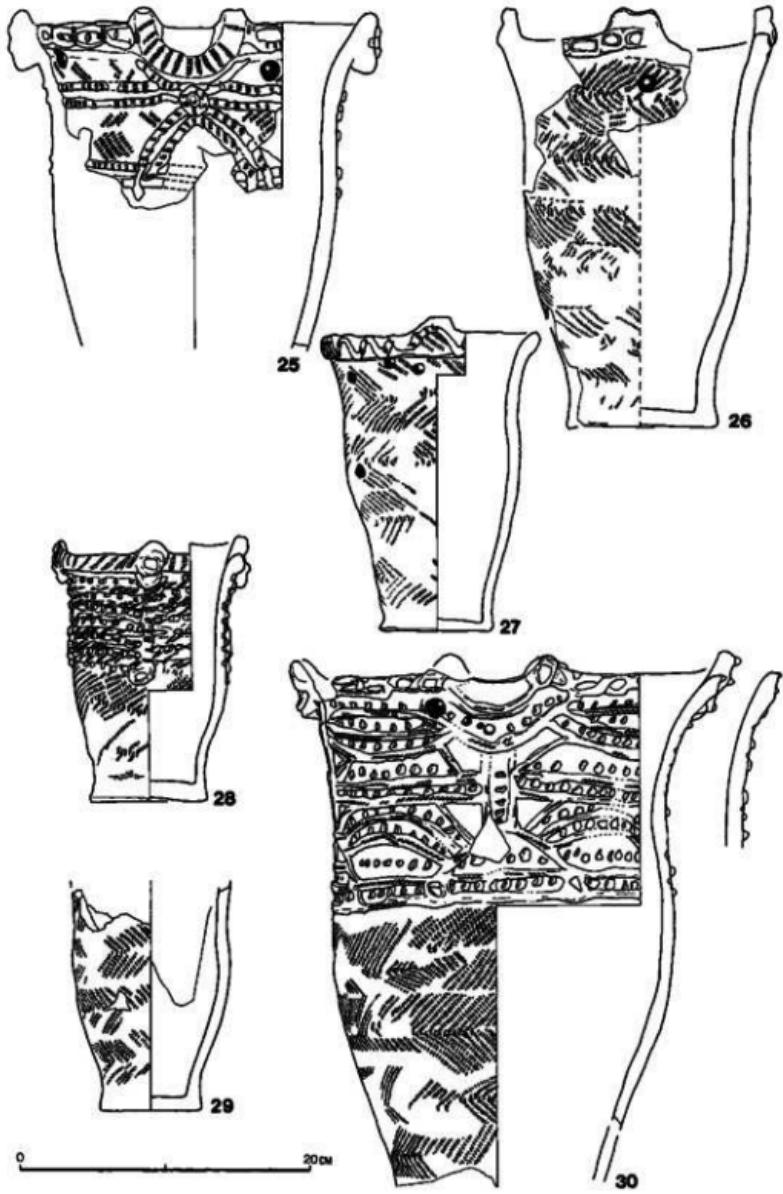
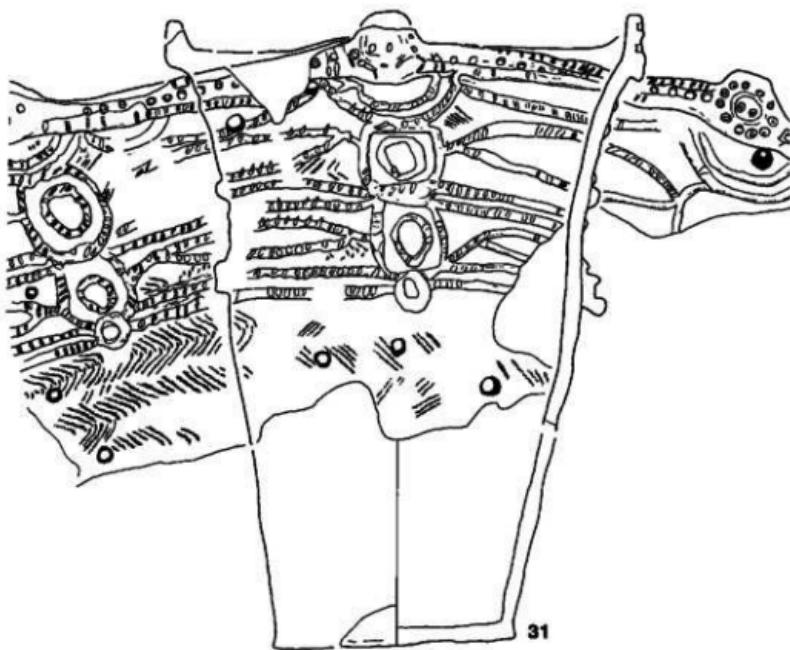


図 V-49 廃棄場跡出土の土器(3)



31



32



33

0 20cm
図V-50 鹿森場跡出土の土器(8)

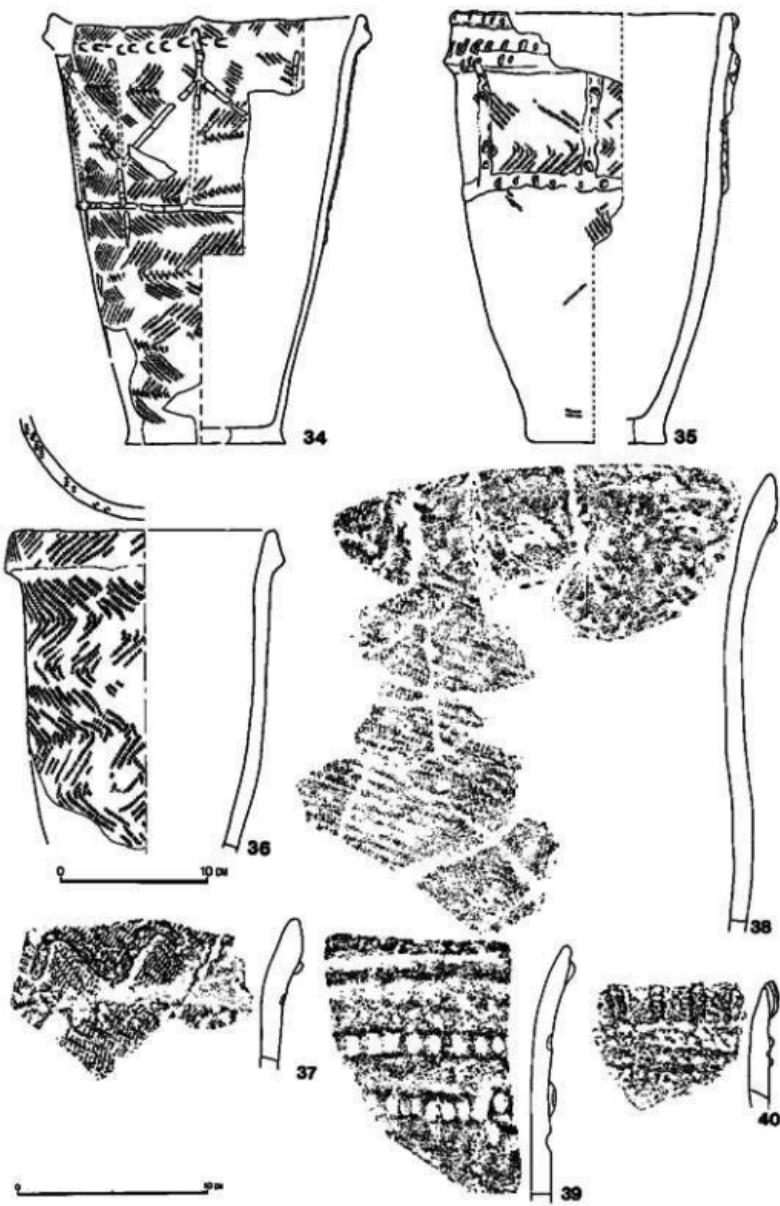
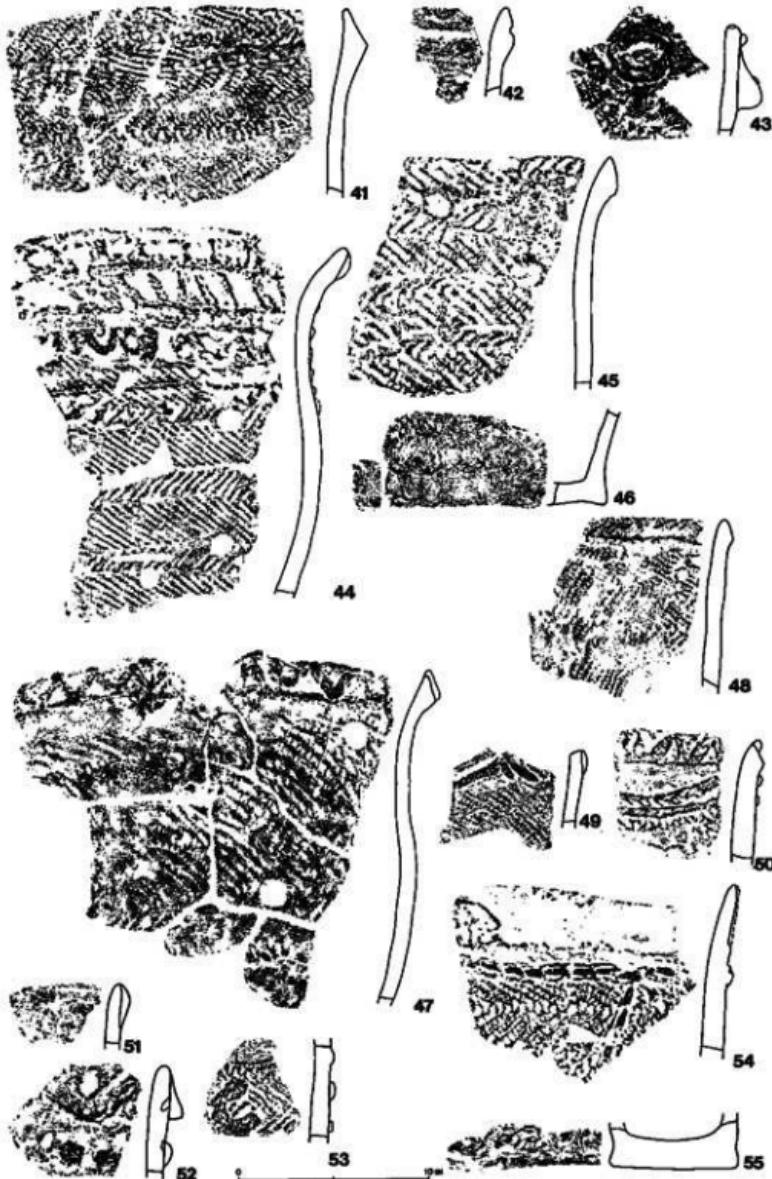
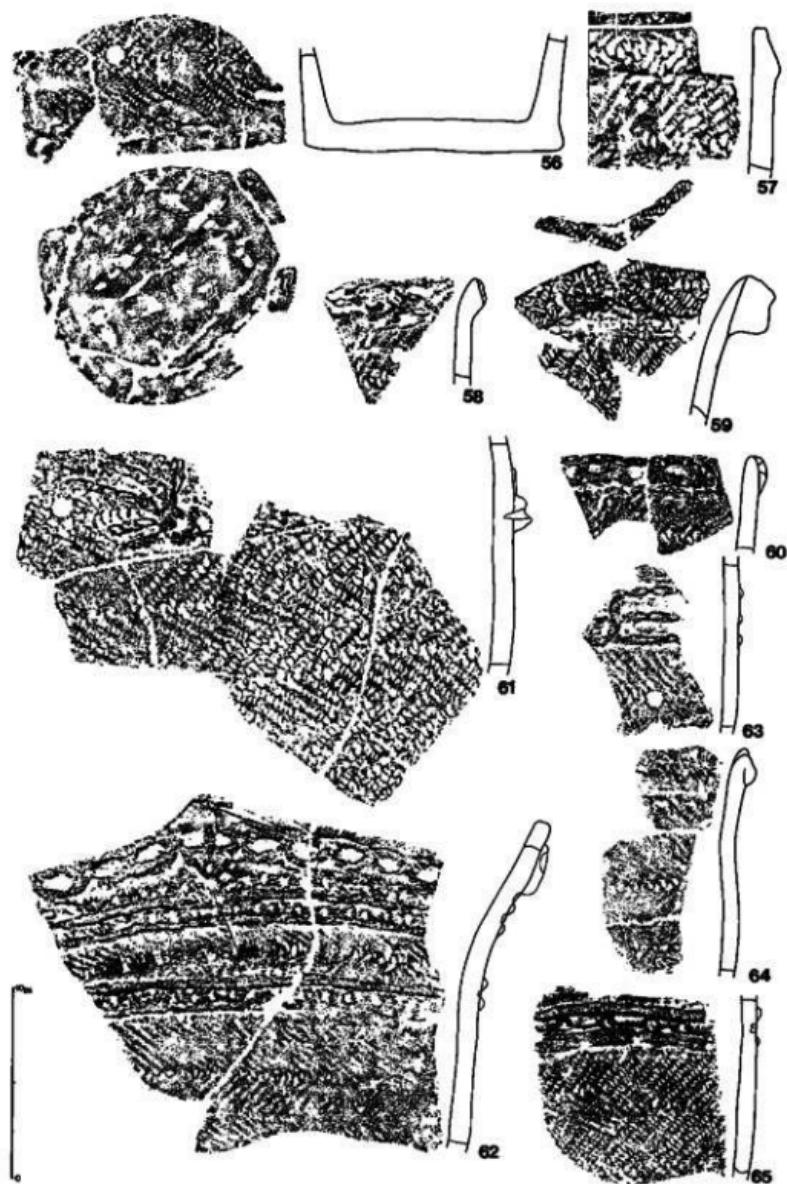


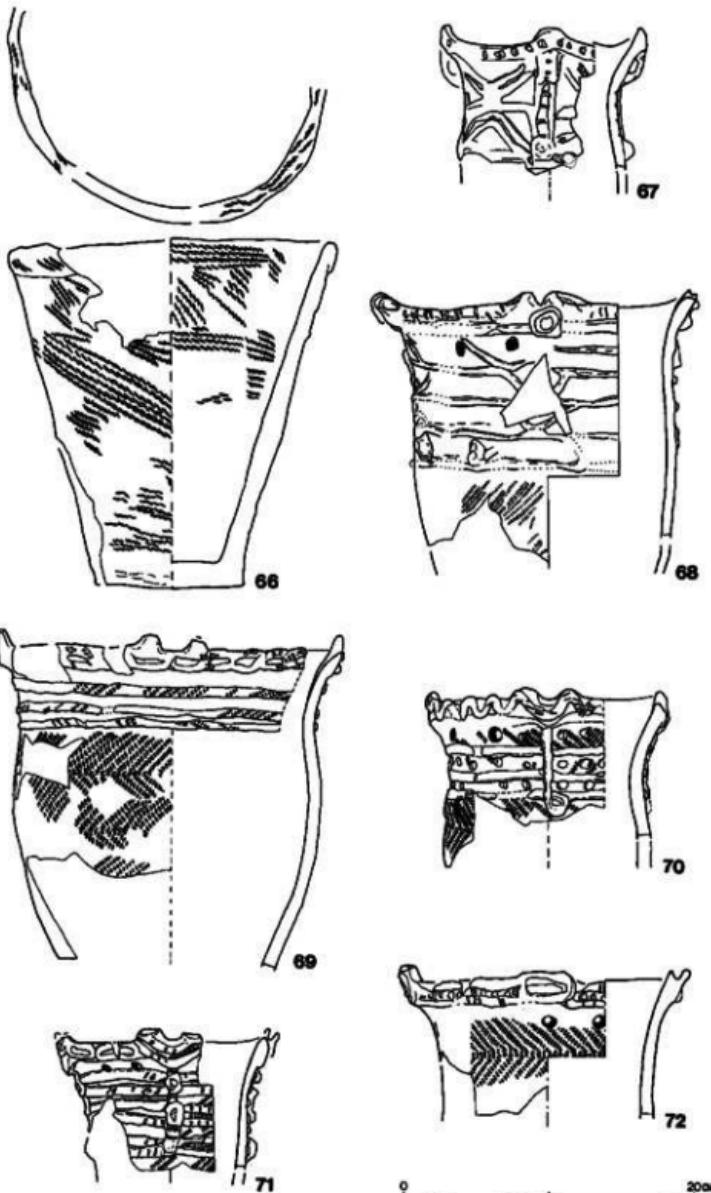
図 V-51 廃棄場跡出土の土器(1)



図V-52 廃棄場跡出土の土器等



図V-53 墓場出土の土器①



図V-54 墓葬場跡出土の土器(1)

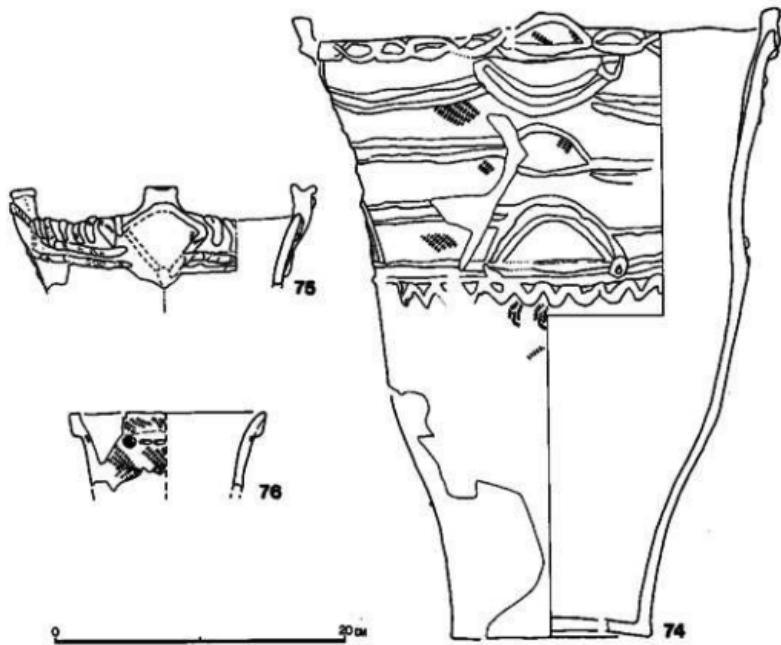
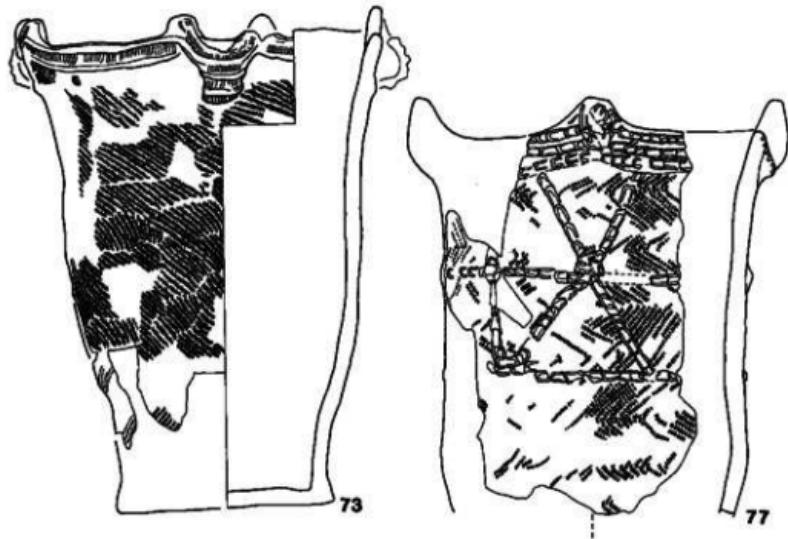
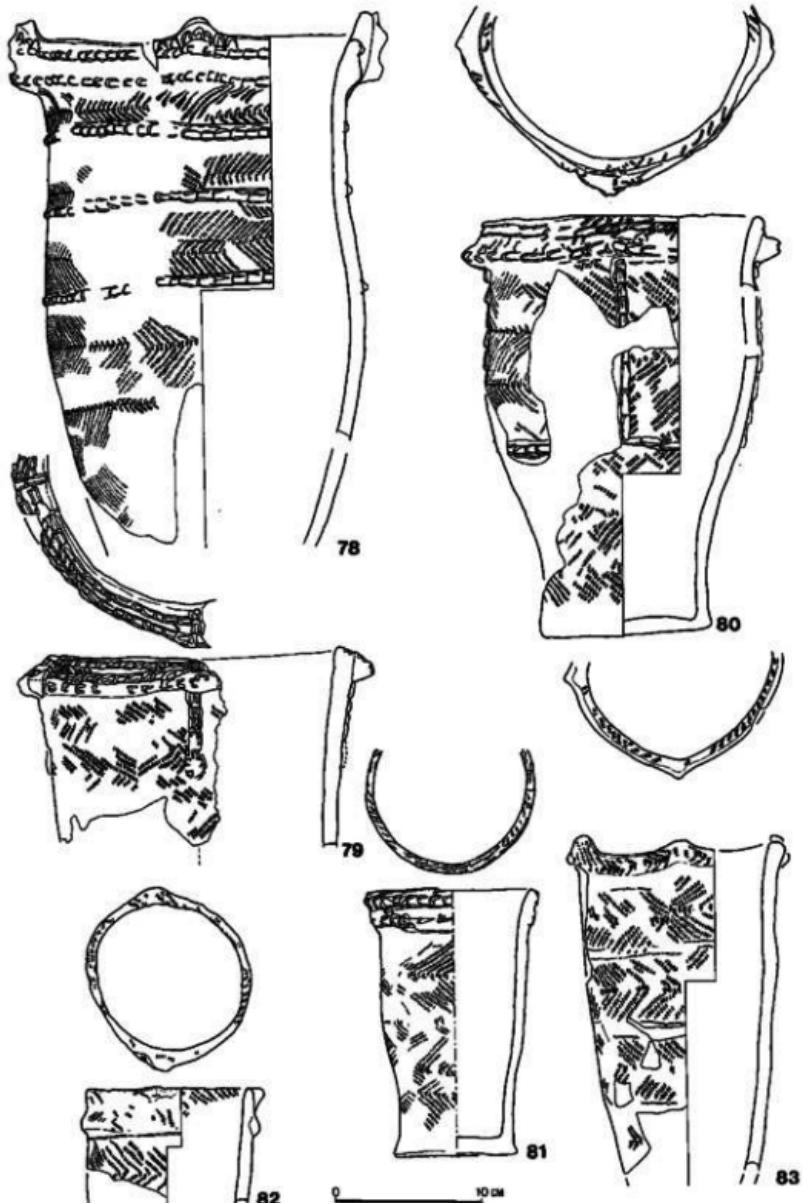
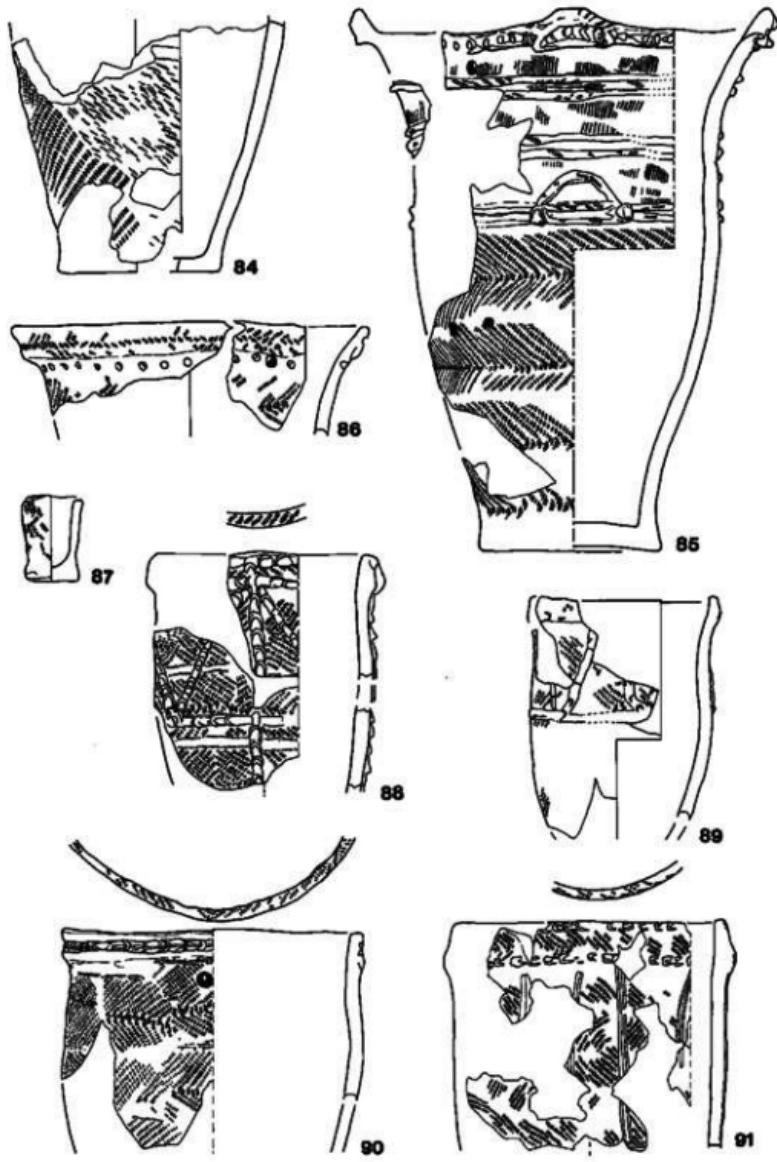


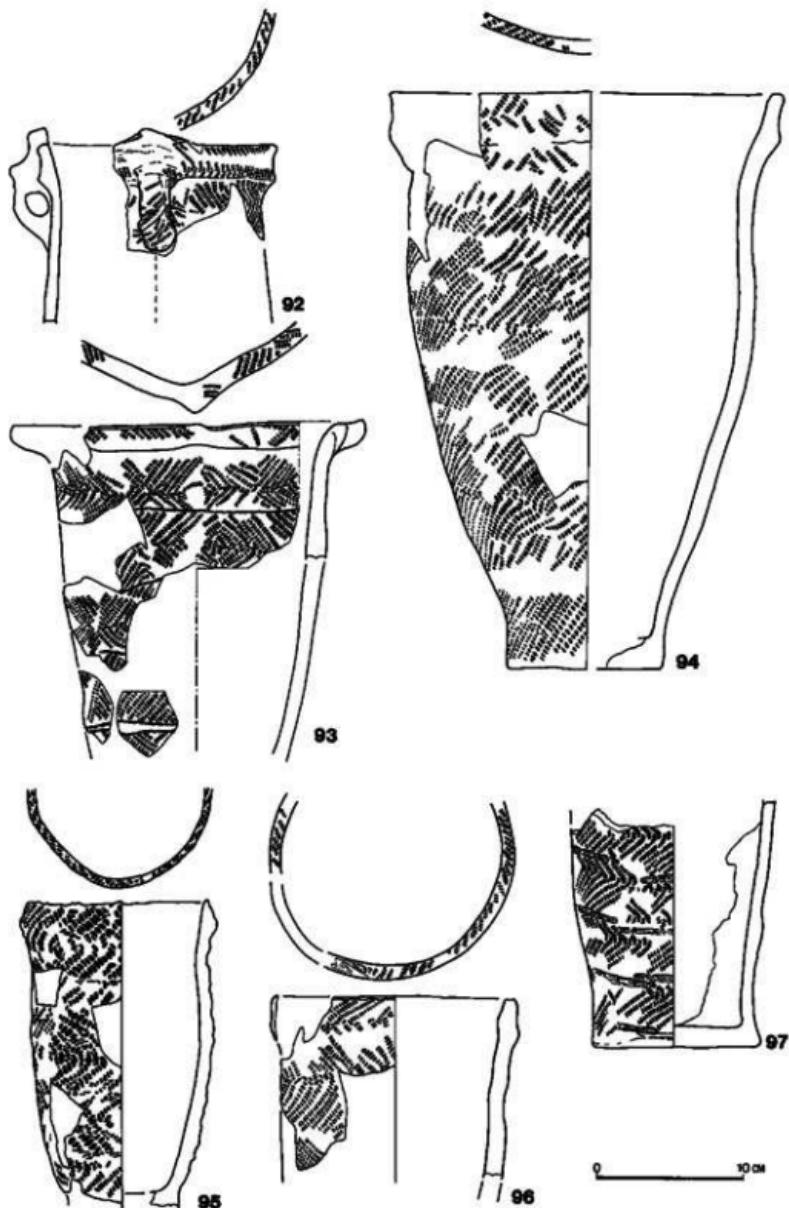
図 V-55 廃棄場跡出土の土器09



図V-56 墓葬場跡出土の土器(6)



図V-57 廃業場跡出土の土器(1)



図V-58 烧夷場跡出土の土器⑩



図 V-59 墓葬場跡出土の土器 (15)

c 石器等について

本遺構からは、1,091点の石器のほか、多量の剥片と礫・自然遺物および骨製品等が検出された。石器の器種は、石鎌・石鉈先・石槍・石錐・石匙・ナイフ・搔器・削器・石斧・敲石・砾石・石皿・石鏃である。また、石器以外に石核も出土している。

これらの石器群が廃棄された時期は、伴出した土器群がI群BおよびC類であることより、縄文時代中期中葉から末葉にかけてと考えられる。ただし、本遺構からは、統縄文時代のナイフも若干混在して検出されている。なお、層位別によるそれぞれの器種形態には、大きな変化がなく、しかも時期がある程度明瞭であるため、ここでは分類基準に沿って記述する。また、本遺構より検出された石刀状剥片は、便宜上、第V章3節図項のものと一括して図示した（図V-109～111）。

ポイント（図V-60～62：1～57、図版V-69）

I A 3：小型のもの（1・2・12）と、大型のもの（23・24）がある。1は、背面の周辺を細かく二次加工されており、腹面にはバルブを残す。23は、尖頭部の周辺にのみ二次加工が施され、腹面は素材面のままである。24も同様に、縦長剥片を素材とし、背面周辺と腹面の先端部のみを加工している。なお、基部にはバルブを残している。

I A 4：3は、両面とも入念に加工されており、断面はレンズ状となる。

I A 5：石鎌の中では、一番多く出土しているタイプである。4～11・13～22が該当する。形態は、微妙な違いこそ認められるが、基本的には同じタイプのものと考えられるため、細分はしない。17は、基部が焼けている。

I A 7：破片を含め、175点出土した。そのうち、図示したものは、25～51の27点である。これらは、基部が平坦かそれに近くなるもの（25～27・29～31・33～42）と、逆刺が明瞭ではなく、基部が尖頭状になるもの（28・32・43～51）に分けられる。規格的には、どちらのタイプも小型のものから大型のものまで、連続して認められる。したがって、基部の装着方法か、あるいは機能的な違いによるものと考えられる。石質は全例、黒曜石である。

I A 8：I A 7と比較して、その出土数は少ない。21点出土したうち、6点を図示した。52は柳葉形になるもので、長さは8.25cmである。側面観は直線的で、偏平な石槍である。53・57は基部がすばまるタイプであるが、側縁部の張り出しある。53が中央よりやや下に、57はほぼ中央部に認められる。また、先端部は57の方が鋭利である。56は、基底部が平坦となる。

石錐（図V-62・63：58～78、図版V-70）

I B 1：遺構外出土の点数に比べると、比較的多く出土した。58～74が該当する。規格上、長さは、3.70～9.15cmまで連続的に続くので、細分はしない。59は、両面加工の石錐で、上・下端部とも摩滅痕を残している。67は、背面と腹面の先端部にのみ二次加工が施されており、断面は三角形を呈する。72は、長さ9.15cmの石錐で、両面とも細かな二次加工が施されている。

先端部は、摩滅が顕著である。74は、背面と腹面の周辺に加工が施されている。側面観は、カーブする。おそらく、このようなタイプのものは、断面の厚いドリルとは機能を異にし、突き刺したり、切り開くためのものであろう。石質は、68がチャート、ほかは全て頁岩である。

I B 3 : 75~78が該当する。75・67は、石刃状剥片を素材とし先端部およびその両側縁部に二次加工を施している。側面観はどちらもカーブする。77・78も同様の加工によって、刺突部を作出しており、石刃状剥片を素材としている可能性もある。

ナイフ (図V-63~67: 79~135, 図版V-70・71)

I C 1 : 87点出土したうち、45点を図示した。形態は、全て錐形の石匙である。ただし、86だけは、若干幅広となる。二次加工は、全て片面加工かそれに近い状態である。つまみ部の作出方法によって分類すると、腹面において無加工のもの (79~100), 片側だけ加工されるもの (101~110), 両側とも加工されるもの (111~123) に分けることができる。85は、背面が入念に加工されており、断面が正三角に近い、95は、背面に稜を有し、周辺部を細かく加工している。腹面は、頂部にバルブを残しており、石刃状剥片を素材としている。99も同様の素材を使用しており、二次加工はつまみ部以外には見られない。114は、下部が尖頭状になり刺突具としての機能も有すると考えられる。

I C 3 : 124~135が該当する。このうち、有柄のものは127・129・130・133・134の6点である。127は、背面の周辺部と腹面の柄部に二次加工が施されている。刀部は、切出刃状になっているが、刃縁は曲線的になる。130は、頂部に打面を有し、形態上 I C 1 に類似する。134は、両面とも入念に二次加工が施されており、上・下端部とも平坦になる。側面観は直線的である。柄を持たないもののうち、124~126は同じ形態を有する。124は、背面の周辺に入念な二次加工が施され、先端部は左寄りとなる。126は、同様の加工で、先端部は右に寄る。

スクレイパー (図V-67~69: 136~176, 図版V-71)

I D 1 : 円形かそれに近い形態の周辺部に、刃角の高い二次加工が施されているもので、136~152が該当する。最小のものは、直径1.93cmで、最大のものは5.27cmである。石質は、144と152が頁岩、それ以外は黒曜石である。

I D 2 : 縦長剥片の一端に、刃角の高い刃部が施されたもので、153~158が該当する。刃部の形状は、I D 1 と変わらない。また、これらとは別に、175・176も本型式に含めた。これらは、剥片の頭部中央から下部に向けて、裾広がりに剥出されたものである。形態は、範状になる。側面観は、細かく加工された、刃角の高い刃部を有する搔器と変わらない。なお、これと同タイプのものは、本遺跡で7点出土した。また、鷹栖町嵐山遺跡^{注1}から出土した石器群の中にも、同じ形態のものが確認できる。

I D 3 : 159~174が該当する。162は、背面の周辺部に二次加工が施されたもので、形態上 I C 1 に類似する。169は、柳葉形を呈した片面加工の削器で、上端部には打面が残されている。

171は、刃部が尖頭状になるもので、腹面は無加工である。173も同様に刃部が尖頭状になり、その先端部にはバルブが残されている。174は、175・176と形態が類似する。しかし、側面観においては、下部が高くならない。また、背面右側縁には刃角の低い刃部が入念に作出されている。

石斧 (図V-70・71: 177~189, 図版V-72)

II A 1 : 177の1点のみである。両側縁は、ペッキングにより整形したのち、部分的に研磨されている。刃部は、欠損している。

II A 2 : 178が該当する。全面を研磨された石斧で、刃部の形状は円刃となる。

II A 3 : 179・181~186が該当する。中型のもの (179・181・182・186) と小型のもの (183~185) に分けられる。179は、基部から刃部まで、ほぼ同じ幅となる。直刃の石斧である。断面は、若干肉厚となる。181は、緑色泥岩質製のものだが、全面焼けで変色している。また、刃部の破損も熱破碎による。182は、接合資料であるが、そのうち1片 (基部片) は、約80m離れた台地南部のD-6-a区より検出された。また、本遺構より検出された2片 (刃部片・側縁部片) は、焼けで変色している。

II A 4 : 180の1点のみである。正面は、全面研磨されているが、裏面は周辺のみである。刃部は、円刃となる、断面の厚みは、刃縁においても若干肉厚である。

II A 5 : 187は、長さ8.7cm、幅1.7cmの全面研磨された石のみである。側面観は、直線的となる。188は、片岩製の石のみで、側面観は若干カーブする。

敲石 (図V-71: 190, 図版V-72)

II B 2 : 楊円礫の一端を敲打したもので、本遺構からは3点出土している。図示したものは190のみで、敲打面は細かな凹凸が見られる。

砥石・石鋸 (図V-71~74: 191~198・200, 図版V-72・77)

II D 1 : 板状の形態となるもので、砥石であるのか石鋸であるのか不明の破片が、多数出土している。図示したものは、193と196である。どちらも、側面には擦痕が認められず、砥面を有している。砥面は、193は両面に、196は片面にだけ持つ。ただし、196は片面が板状に剥れていったため、砥面を有する可能性もある。また、大型の板状砥石として、198・200がある。198は、礫の平坦面を長軸方向に沿って使用し、さらに側面部も使用している。200は、礫面を一定の幅で研磨した砥面を有する。どちらも、重量を考慮すると、据え置き用として使われた可能性が強い。

II D 4 : 194・195・197が該当する。195は、両面に砥面を有し、さらに側縁部には擦痕が認められる。197は、溝状の研磨痕を片面に持ち、側縁部には、V字状の擦痕が認められる。

II D 5 : 191・192の2点のみである。遺構外からも、完形のものが1点出土しており、同じ範

状のものと考えられる。191は、頭部に孔を2つ有するもので、周辺部は研磨によって整形されている。また、断面は正面が平坦か若干凹んだ状態となり、裏面に膨らみを持つ。192も同様の製作によるもので、孔は頭部中央に穿たれている。形態は、191よりひとまわり大きくなるが、断面の形状は変わらない。

石皿（図V-73:199, 図版V-77）

ⅡE 1: 199は、大型の偏平円碟の一面を使用しているものだが、使用痕は頗著ではない。

石鍬（図V-74~76: 201~217・219, 図版V-73~76）

ⅡF 1: 63点出土しており、17点を図示した。形態は、全て楕円碟の長軸に打ち欠きが施されたものである。重量は、205の11.2gを最低とし、610gまで連続的にある。

ⅡF 2: 本遺構からは3点出土しており、そのうち1点(219)を図示した。形態は、円碟かそれに近い碟を素材とし、長軸と短軸の4ヵ所に打ち欠きを入れたもの(219・ほか1点)と、長軸の2ヵ所に打ち欠きを入れ、短軸の凹みを利用したものがある。219は、安山岩製のもので、重量は2,370gをはかる。また、最大重量を有したものは、4,360gであった。(図版V-76)。

石核（図V-75・76: 218・220・221, 図版V-76）

Ⅲ: 30点の石核が出土している。図示した3点の(218・220・221)は、いずれも打面を平坦に調整しており、縦長に剥片を剥ぎ取ったものである。石質は、頁岩が圧倒的に多く、ほかはメノウ、黒曜石の順になる。なお、黒曜石の石核は、極小のものばかりである。

装身具類（図V-76: 222~224, 図版V-105）

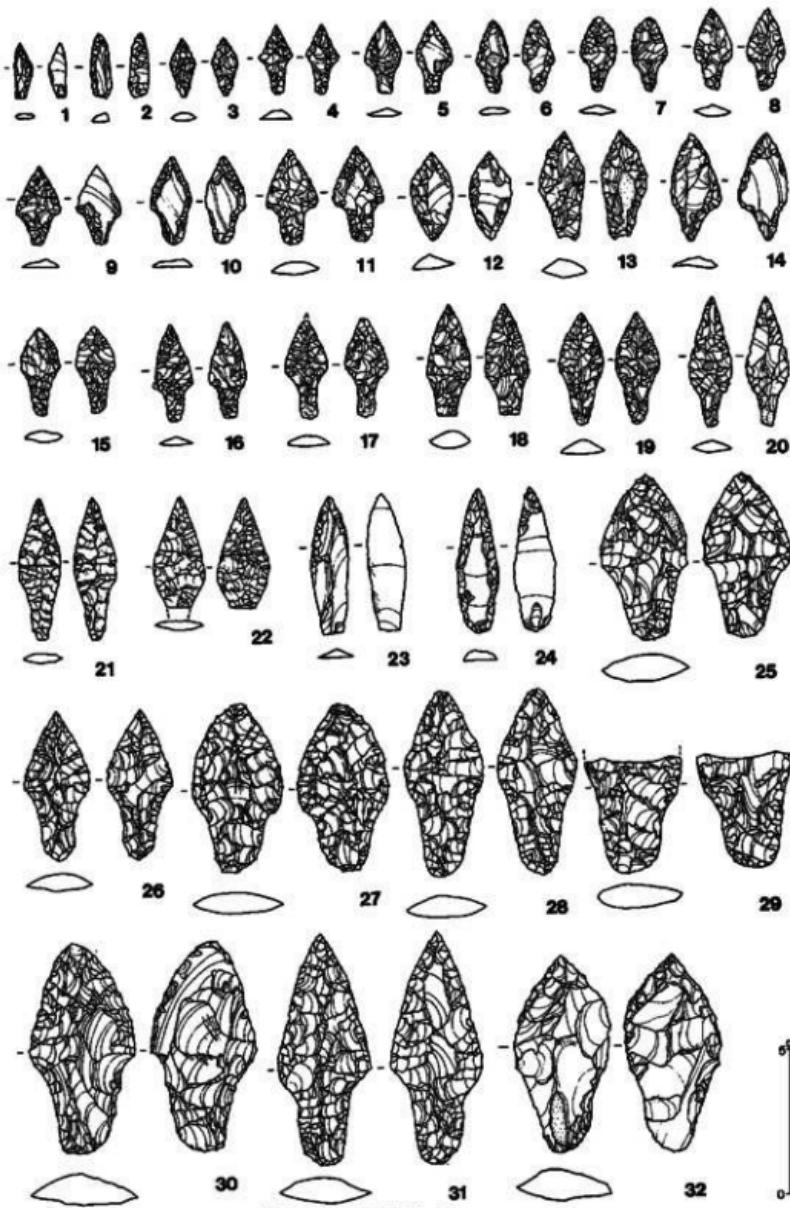
IV C: 224は、ホホジロザメの上顎第一歯か二歯の歯根部付近に穿孔が施されたもので、D層中より検出された。歯根部は焼けて欠損しているが、おそらく垂飾品であろう。

骨製品（図V-76: 222・223, 図版V-105）

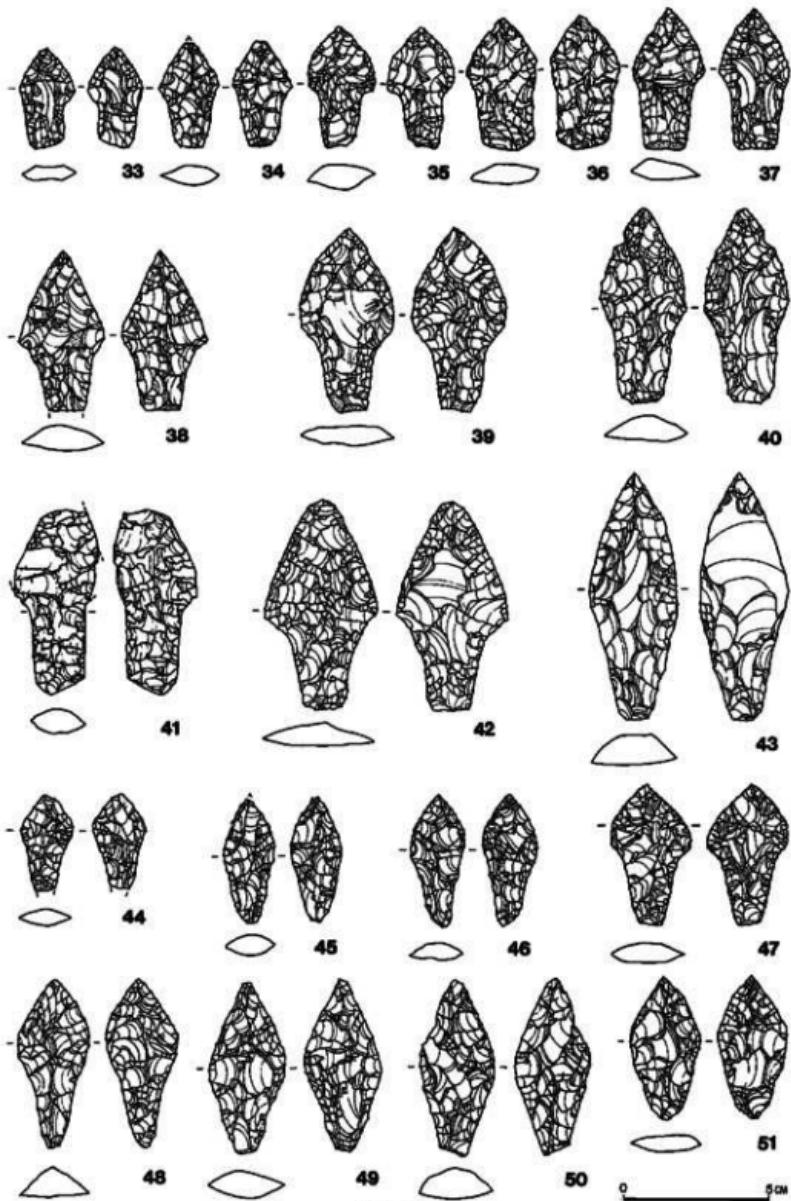
222・223が該当する。222、海獣骨に装飾文が施された骨製品である。形態は、「く」の字状に近いが、その上・下部と裏面は欠損している。また、下部には柄を挿入するためのソケット部を有している。類似した形態のものとして、鰐頭の可能性もあるが、ソケット部の断面が円形とはならないため、断定はできない。ほかに、栄浦第二遺跡の7号竪穴から、いわゆる樂器として2例報告されているもの中に類似したものが見られる。しかし、これについても図で見る限り、ソケット部の形状・体部の溝など、部分的に類似した所が認められるが、断定するまではいかない。223は、海獣骨を研磨によって加工された棒状の骨製品である。断面は円形に近い。

(森岡 健治)

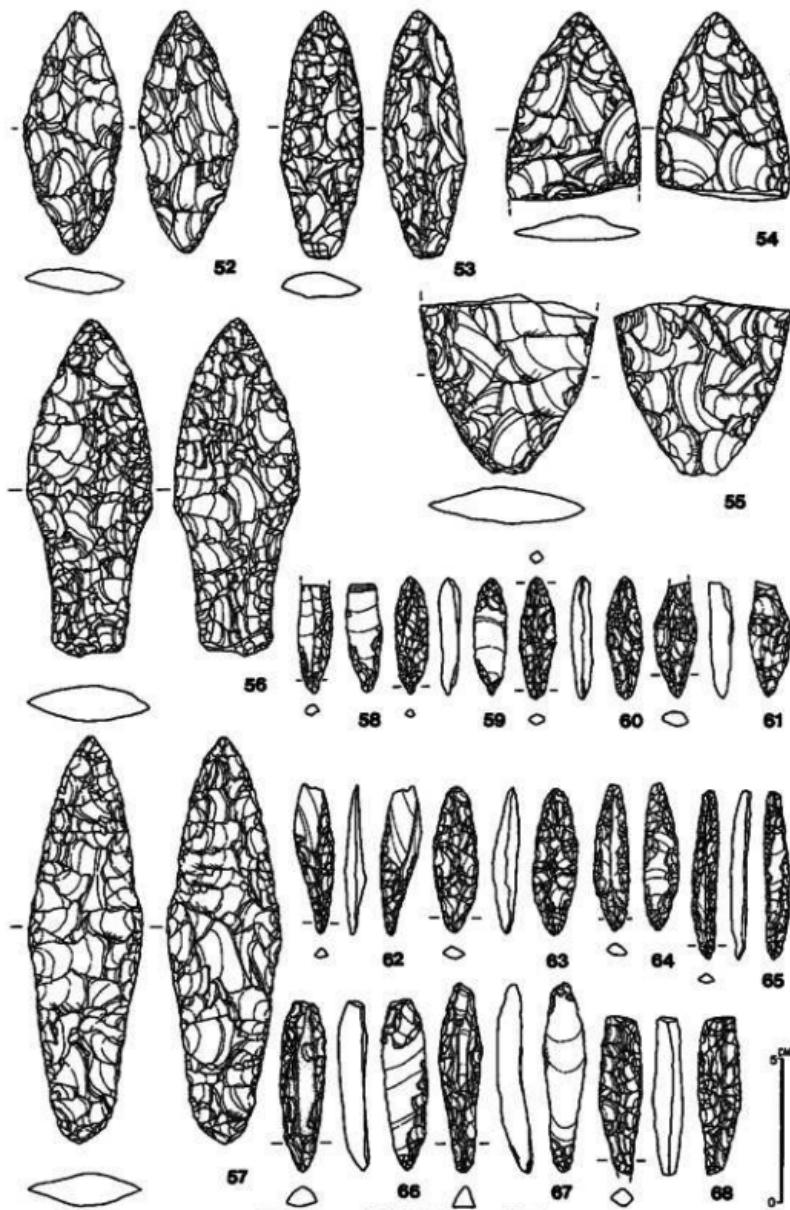
註1 斎藤傑 1968『嵐山遺跡』嵐山遺跡調査会編の第17図19にみられる。



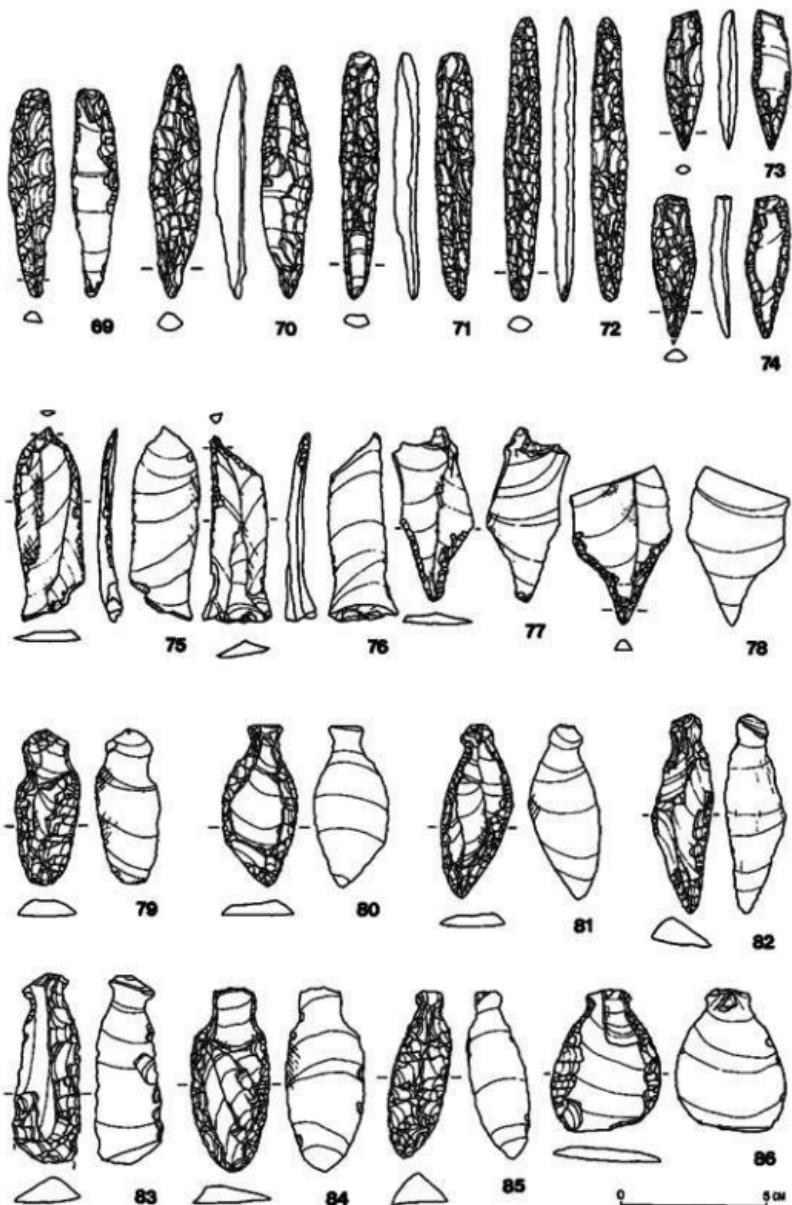
図V-80 廃棄場跡出土の石器(1)



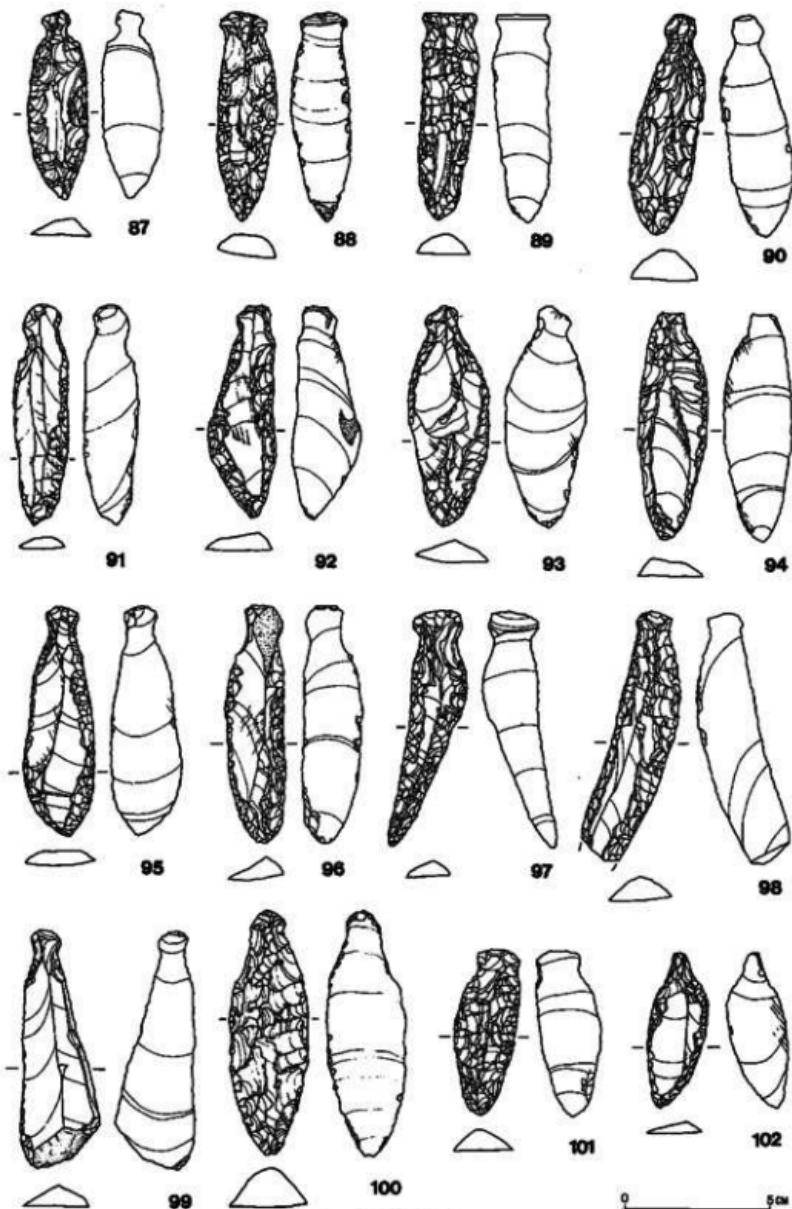
図V-61 廃棄場跡出土の石器(2)



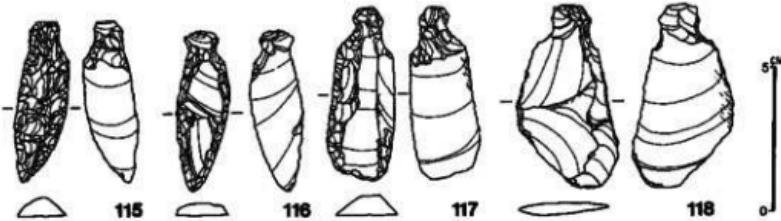
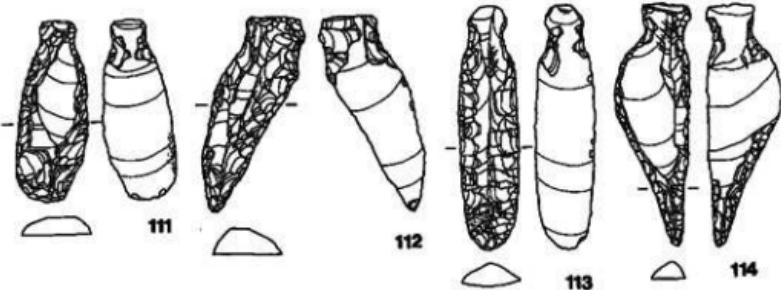
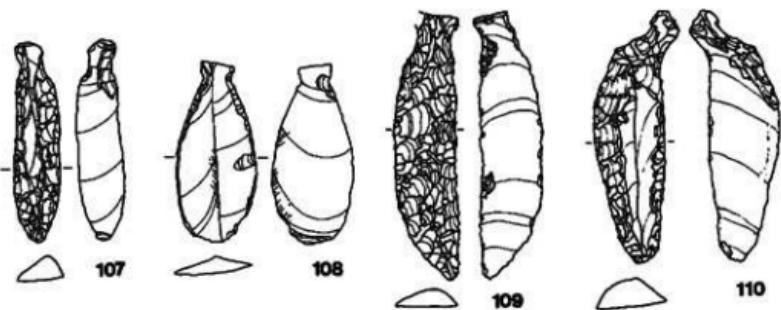
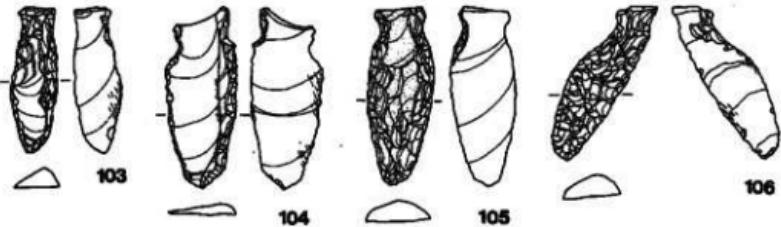
図V-62 廃棄場跡出土の石器(3)



図V-63 廃棄場跡出土の石器(4)



図V-64 廃棄場跡出土の石器(5)



図V-85 廃棄場跡出土の石器(8)

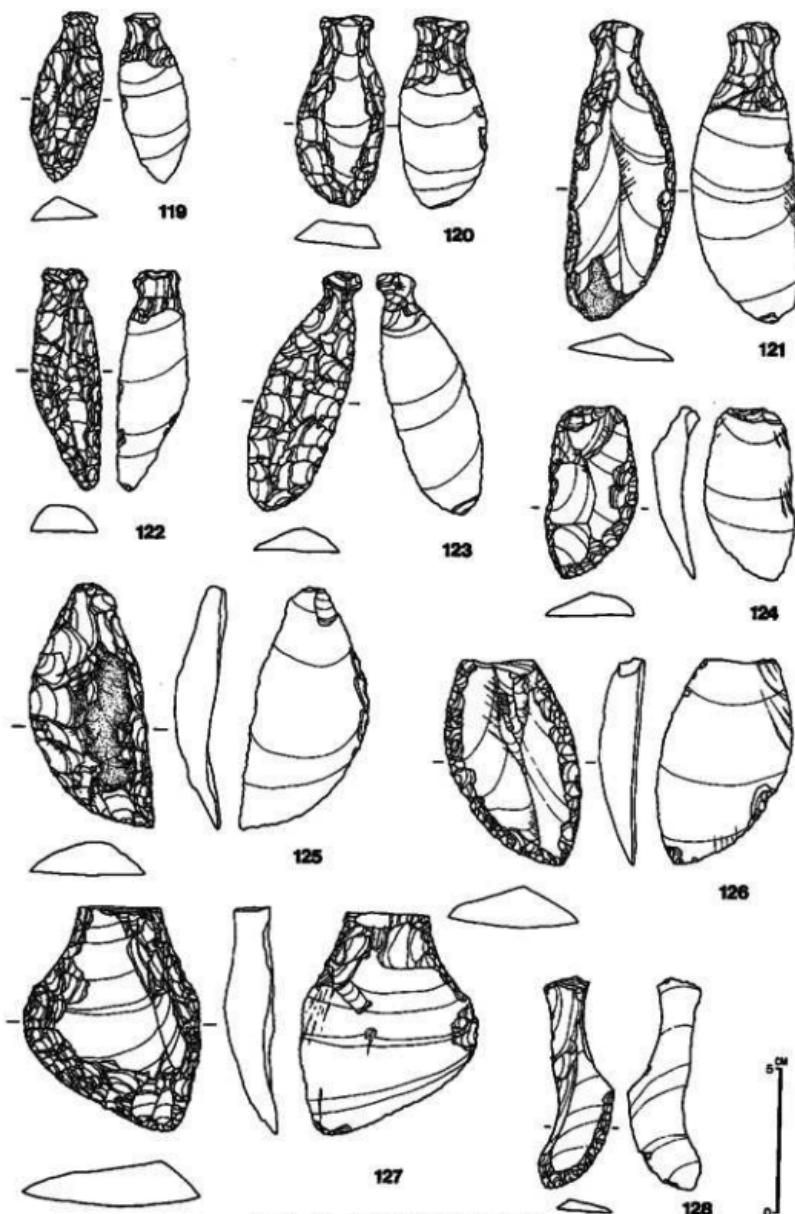
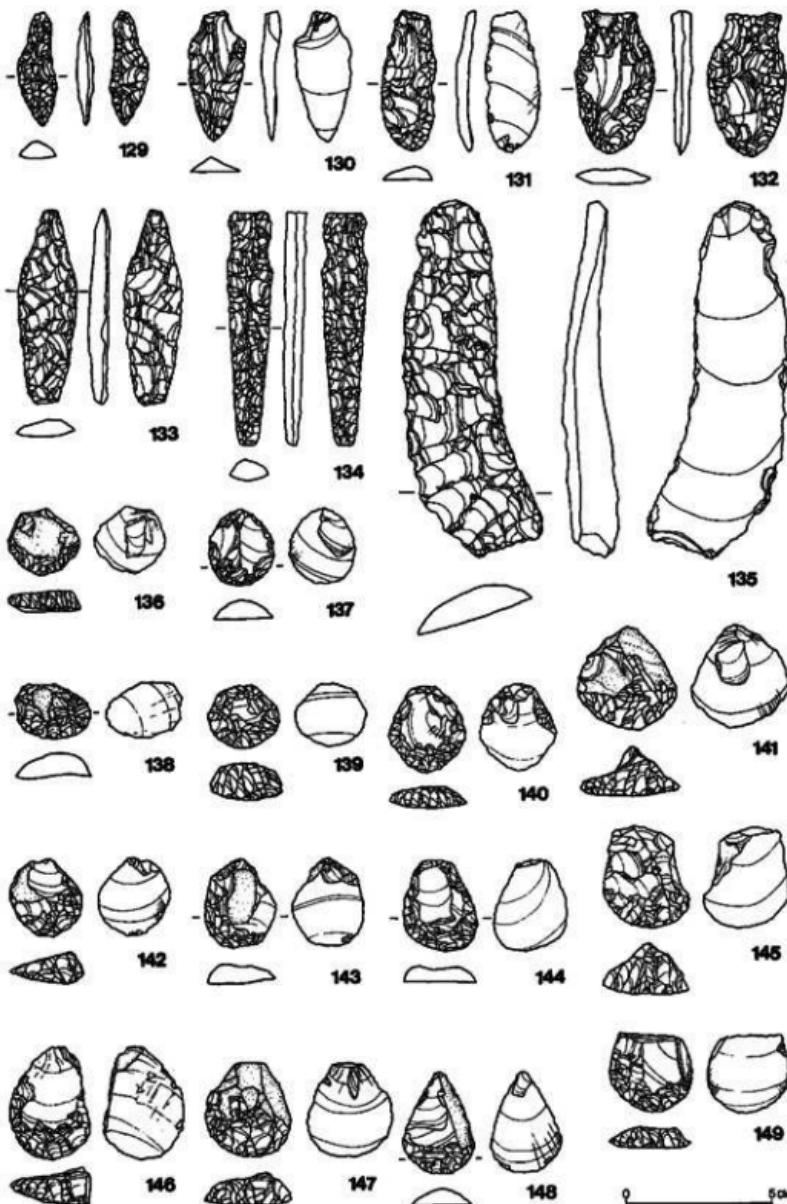
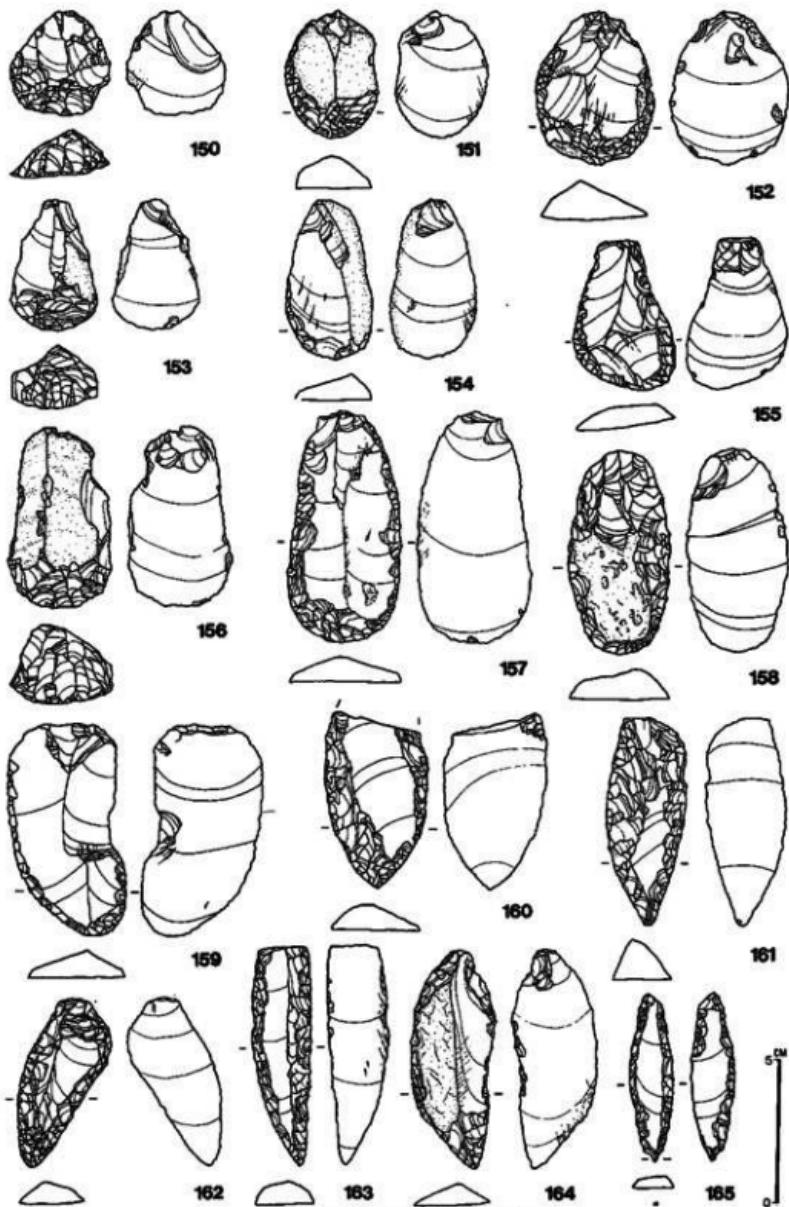


図 V-66 廃棄場跡出土の石器(7)



図V-67 廃棄場跡出土の石器(Ⅱ)



図V-68 廃棄場跡出土の石器(8)

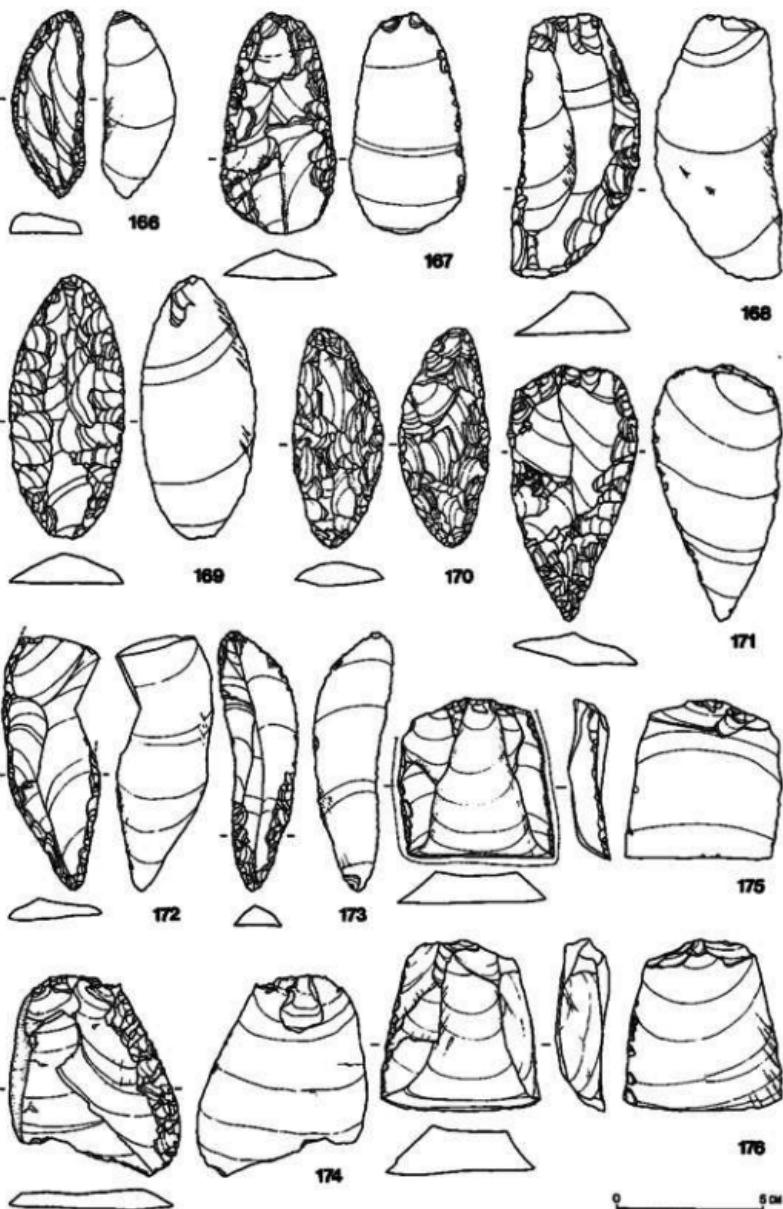
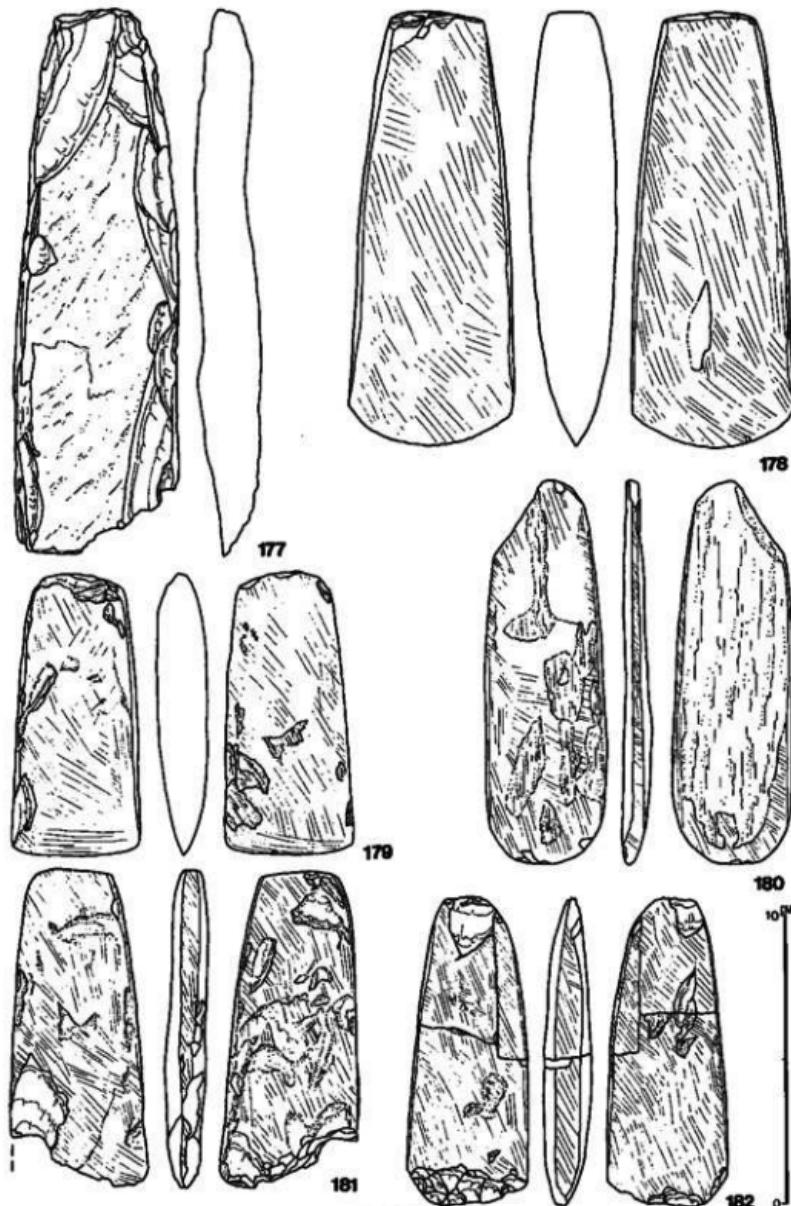
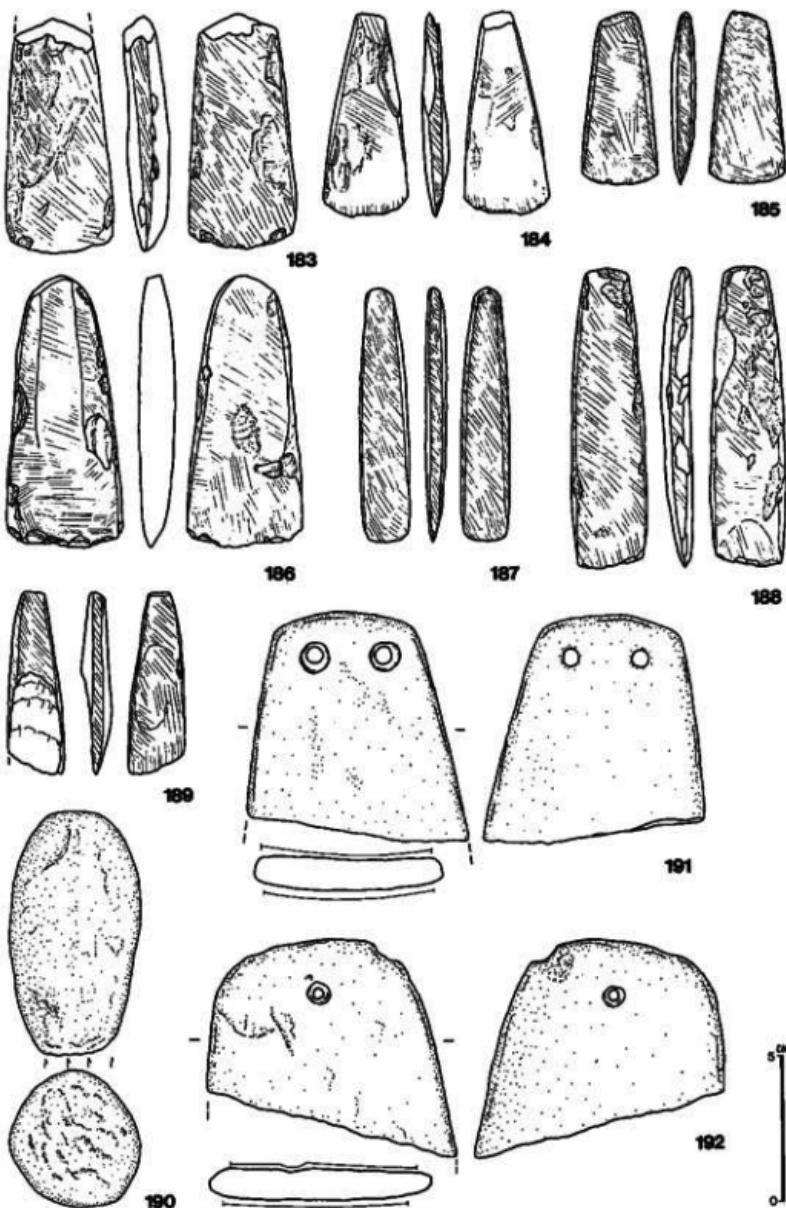


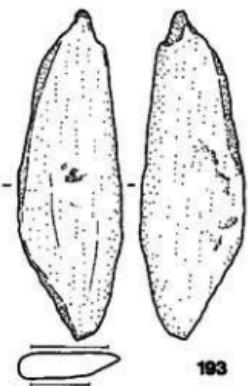
図 V-68 廃棄場跡出土の石器(1)



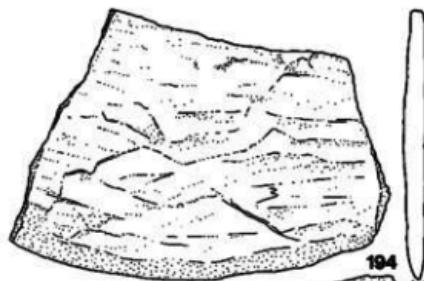
図V-70 廃棄場跡出土の石器(1)



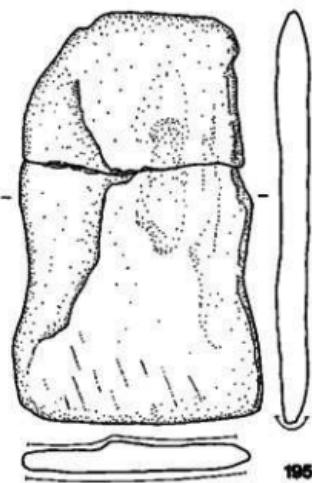
図V-71 施塗場跡出土の石器(II)



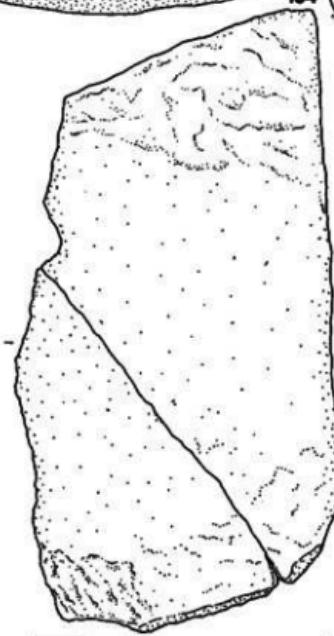
193



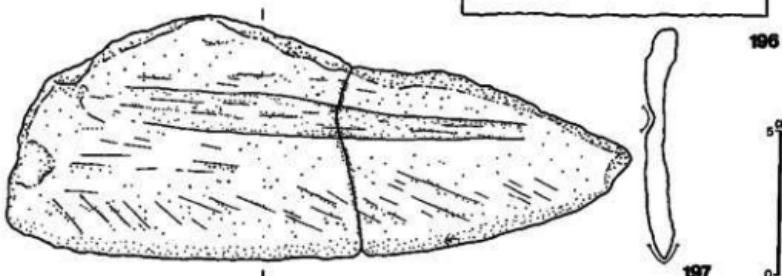
194



195

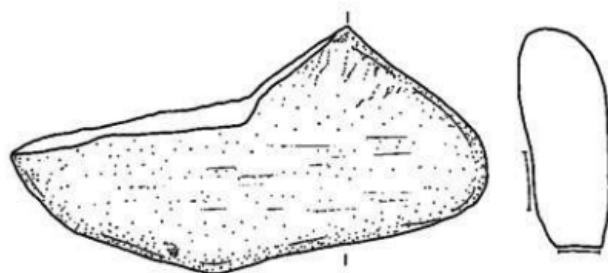


196

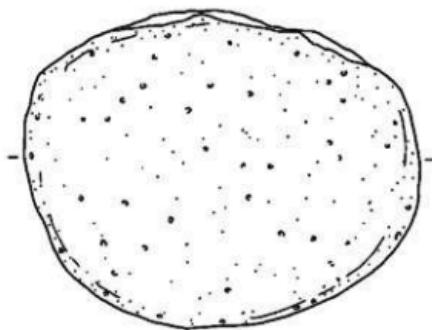


197

図V-72 廃棄場跡出土の石器①



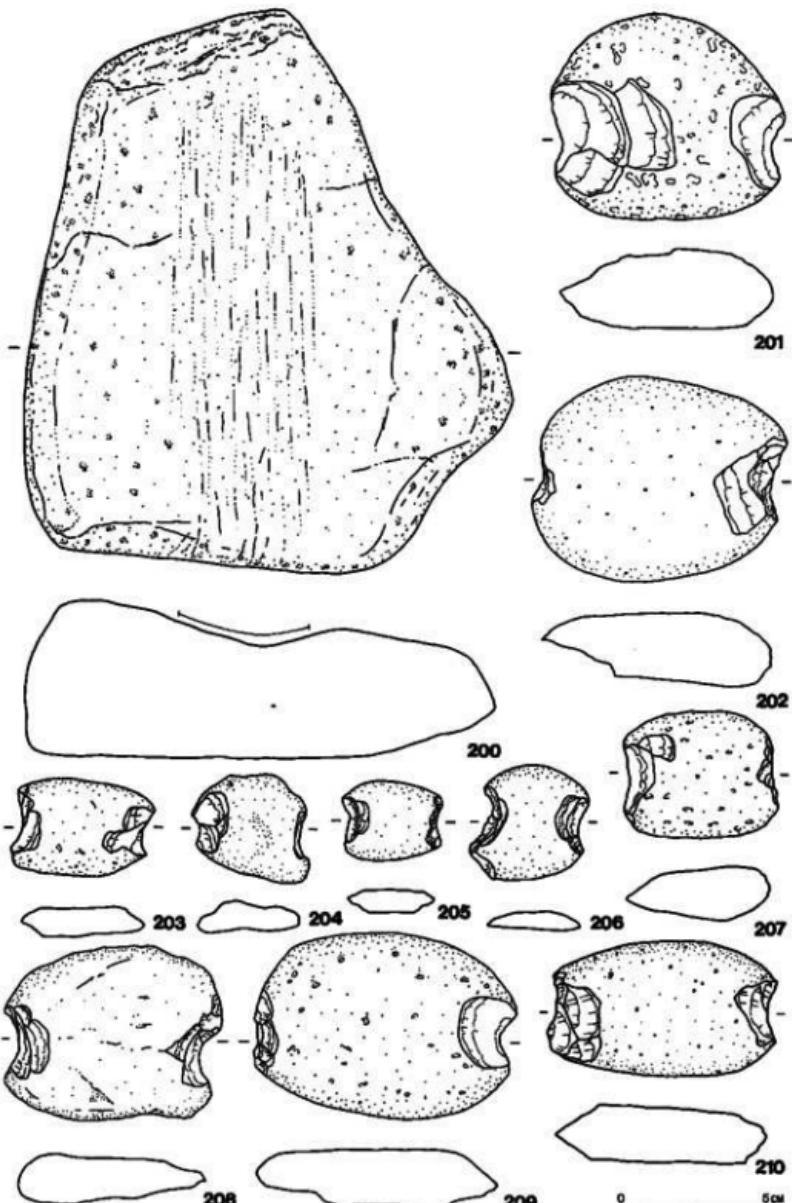
198



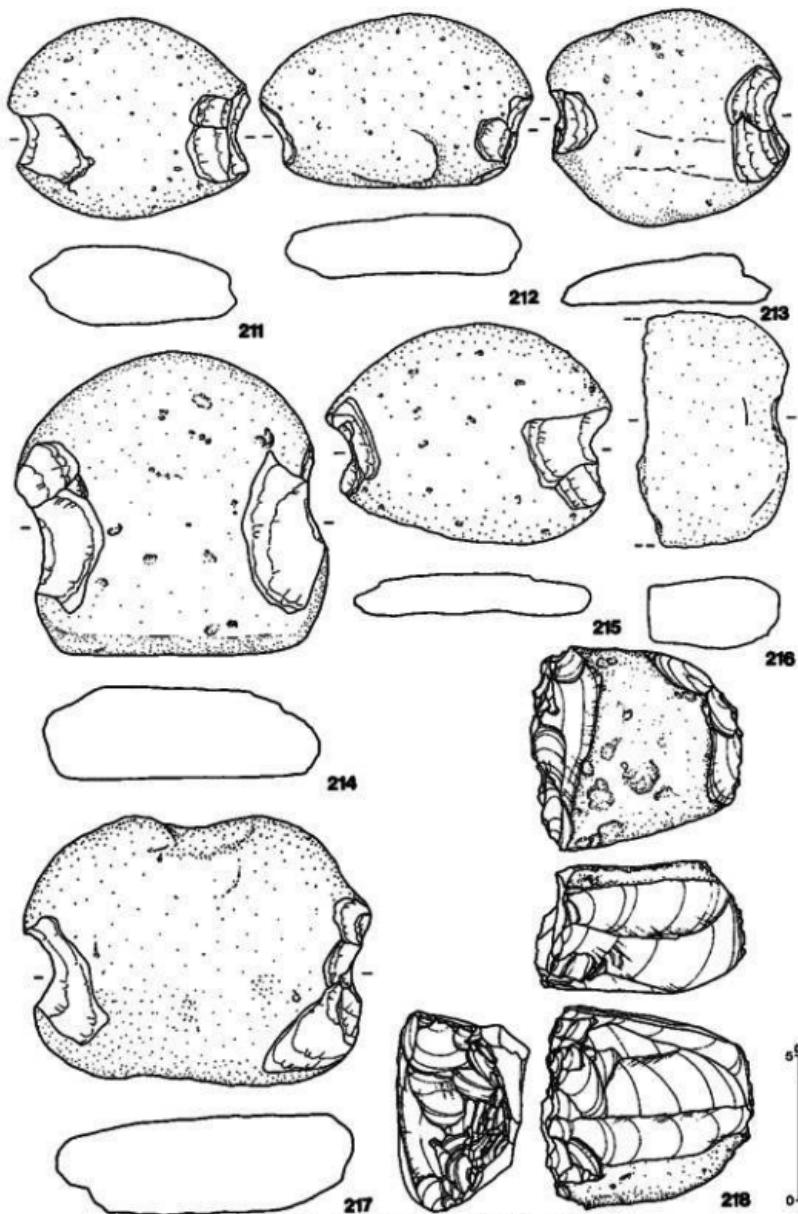
199

10cm
0

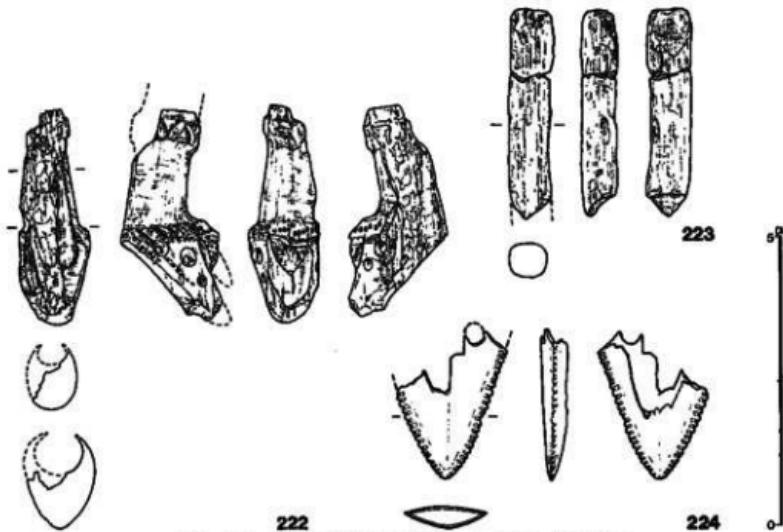
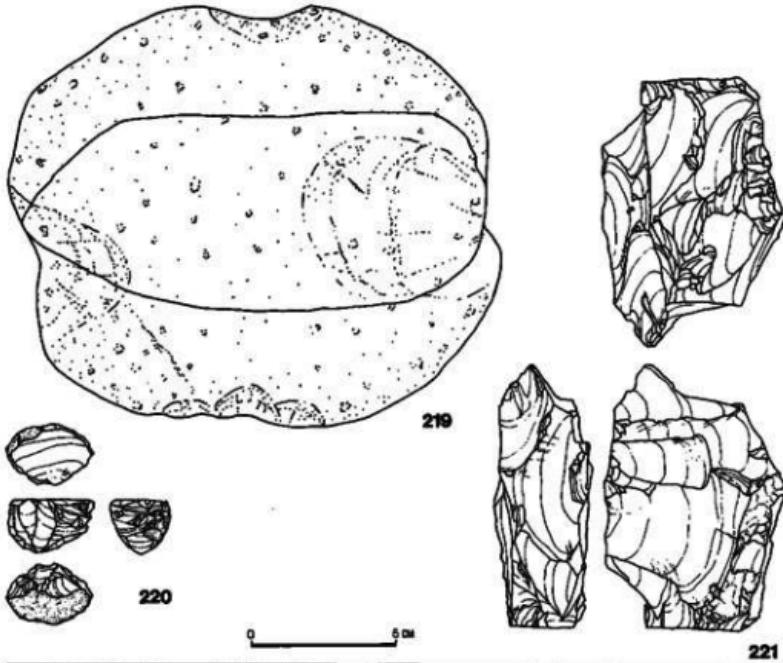
図V-73 廃棄場跡出土の石器(6)



図V-74 廃棄場跡出土の石器(6)



図V-75 廃棄場跡出土の石器(1)・石核(1)



図V-76 廃棄場跡出土の石器(1)・石核(2)・骨製品等

d 動物遺存体について

本資料は、図V-40に示した地点で採取した柱状サンプル(50cm×50cm×80cm)をまずフローテーション作業を経たのち、0.4mmメッシュの篩を利用して抽出されたものである。したがって、廃棄場跡に堆積していた土壤のすべてをもってきたわけではないので、本資料で廃棄場跡出土の動物遺存体の全体的傾向を述べることは慎重を要すると思われる。

表土から採集されたものを除けば、抽出された動物遺存体は、ほとんどが白変しており、微細に砕けたものが大部分である(このような遺物の出方は、二次的に火を受けた結果によるものと思われる)。骨片が細く砕けているため、種や部位の判別が困難なものが多かった。同定結果は、表V-10に示すとおりである。微小な破片が多いため、数量的な集計には重量を用いた。合算しても、0.05gに達しない資料については、表に「+」で示した。

特徴的なことは、動物遺存体は主として魚類と海棲哺乳類によって構成されており、貝類、ウニ類および鳥類は出土していない。陸獣は、きわめて稀で、B-14区D層からキツネの大脛骨が唯一の検出例である。

海棲哺乳類は、鰐脚類とりわけアシカとオットセイとが過半数を占めるものと思われる。クジラやイルカ類は検出されていない。海獣類の骨では、中手または中足以下の指趾骨の破片が多い。

魚類としては、カサゴ類、サメ類、サケ類、タラなどが確認されたほか、アイナメやニシンのものと推定される椎体が検出されている。なお、魚骨の破片は鱗などが主体をなしている。

サメ類では、ホホジロザメの歯がB-13区のローム直上から出土していることが注目される。

なお、表V-11には、廃棄場跡以外から出土した動物遺存体を掲載してある。(種市 幸生)

vi 磚・石錠集中区(図V-77~84、図版V-78~81、表V-33~34)

a 遺構について

A-7-c・dからA-8にかけて、III層面よりややういて磚が散布されたような状態が、確認された。特にA-7-c・dとA-8-a・bの南半部では、その磚が集中傾向にあり、重複する部分もあった。このような状態は、後世の道路で破壊されたA-7-a・bや、調査範囲外の北西部に連続するものと思われる。磚は大小・円角(7:3)・破碎と様々である。熱をうけた様子はなく、炭化物・焼土等はみられない。遺物も磚と同じレベルで出土し、特に石錠が50個ほど磚と混在している。土器は、I群C類-1土器が主体である。

円磚には、石錠と同程度の重さをもつものも多く、石錠の製作場・網への取りつけの場かとも考えられるが、他に磚が広がっていたり、製作具・焼土等が確認されていない。また土器・石器の廃棄場の可能性もあるが、B-13周辺の廃棄場とは、土器の出土状態や、石器の器種が違う(ここでは石錠以外ほとんどない)。調査範囲外である、台地上方部との関わりで考えたい。

(三浦 正人)

本籍圖版									
道 線 名	区 名	場 位	魚		類		鳥		類
			種・形態など	量	巣片	巣	巣・樹洞など	量も	
鹿	A-13	I 山							
		II 山							
	D 山								
	B-13	I 山	オットセイ上部骨、右側 ¹	10.4	1	1	(筋骨など)	4.25	*1頭骨 Y-104-12
		II 山	オットセイ左側骨 ¹	2.0	1	1	(筋骨など)	19.1	*2頭骨 Y-104-13
			鰓骨類、中手または中足骨 ¹	2.2	1	1	(筋骨など)	15.25	*1頭骨 Y-104-2
	B 山	サノ属、鳥 ¹	骨	+	1	1	(筋骨など)	0.4	
		サケ科、鰓骨 Tr. ¹	骨	+	1	1	(筋骨など)	0.4	
	C 山	アライナノ鰓骨 ¹	骨	+	1	1	(筋骨など)	1.0	アシカ科、鰓骨 ¹
		アシカ科、鰓骨 ¹	骨	+	1	1	(筋骨など)	40.35	
熊	D 山	サノ属、魚、脊椎 ¹	骨	+	1	1	(筋骨など)	0.4	熊科類、中手または中足骨 ¹
		サノ属、骨 ¹	骨	+	1	1	(筋骨など)	0.7	熊科類、中手または中足骨 ¹
		サノ属、骨 ¹	骨	+	1	1	(筋骨など)	2.2	熊科類、中手または中足骨 ¹
		サノ属、骨 ¹	骨	+	1	1	(筋骨など)	4.0	熊科類、中手または中足骨 ¹
		サノ属、骨、頭骨 ¹	骨	+	1	1	(筋骨など)	1.95	熊科類、中手または中足骨 ¹
		タラ、魚、頭骨 ¹	骨	0.1	1	1	(筋骨など)	1.2	熊科類、中手または中足骨 ¹
		アライナノ頭骨 ¹	骨	+	1	1	(筋骨など)	0.3	熊科類、中手または中足骨 ¹
		カサゴ科、頭骨片 ¹	骨	+	1	1	(筋骨など)	2.2	熊科類、中手または中足骨 ¹
		サケ科、骨 ¹	骨	+	1	1	(筋骨など)	0.4	熊科類、中手または中足骨 ¹
		サケ科、鰓骨 ¹	骨	0.15	1	1	(筋骨など)	0.15	熊科類、中手または中足骨 ¹
猪	C-13	I 山	ニホンジロガラフ、頭骨 ¹	骨	1.0	1	(筋骨など)	3.3	
		II 山							
	A 山								
	B 山								
	C 山								
	D 山								
	B-14	I 山	鰓骨類、中手または中足骨 ¹	骨	4.9	1	(筋骨など)	21.95	*1頭骨 Y-104-16
		II 山	鰓骨類、中手または中足骨 ¹	骨	2.3	1	(筋骨など)	13.1	
	A 山		鰓骨類、中手または中足骨 ¹	骨	0.9	1	(筋骨など)	1.8	
	C 山		鰓骨類、中手または中足骨 ¹	骨	11.5	1	(筋骨など)	24.2	
鳥	D 山		鰓骨類、中手または中足骨 ¹	骨	1.8	1	(筋骨など)	7.9	*1頭骨 Y-104-17
	C-14	I 山	鰓骨類、頭骨、舌 ¹	骨	0.7	1	(筋骨など)	2.3	*2頭骨 Y-104-18

表V-10 動物遺存体一覽表(1)施聚場跡(件)：破片，近；透位標，遠；邊緣

地名	層位	貝類	魚類	鳥類	哺乳類	兩生類	爬虫類	昆蟲類	蝶類	甲殼類	浮游生物
H-1	上層 HF-1										
	上層 HF-2										
	上層 HF-3										
	下層 土	軟体(小)									
	下層 砂	サケ科、鰐科伝 エシソ?									
		カサゴ科、鰐上鱗骨 tr2	+								
	下層 HF-1										
H-2	層										
H-4	底土の塊土										
	底面HF-1上面										
	底面HF-2	サメ目、骨1:	+								
	底面HF-2 3層										
P-7	砂 土										
P-13	泥 土										
F-23											
F-41											
S-1											

上泊3遺跡 動物遺存体一覧表 包含層

区名	層位	貝類	魚類	鳥類	哺乳類	兩生類	爬虫類	昆蟲類	蝶類	甲殼類	浮游生物
C-4	Ⅱ 層										
D-5	H-1層土										
B-6	骨 壴	アラビダルサウルス +									
D-6	底 土(1層)										
	Ⅲ 層										
	H-1層土										
C-10	I 層										
D-11	I 層										

表 V-11 動物遺存体一覧表(2)遺跡・食包層

b 土器について

I 群の土器が計1,484点出土した。このうちC類土器が87%を占める。

B類-3 (図V-78:3, 写真図版V-79:3) : 口縁部にはり瘤がつく。2本単位の貼付文が横・縱・半円形に施され、その間に竹管による円形刺突文が施される。

C類-1 : ①(図V-77:2, 写真図版V-79:3~7.9) : 平縁なものと、突起をもつものがある。図5、写4~5は、口唇上に撻糸の圧痕、口縁部に棒状工具による刺突が施されたもの。図1、写1~6は、貼付文が施されたものである。

C類-1 : ② (図V-78:8, 写真図版V-79:8) : やや幅のある肥厚帯をもち、地文は結束羽状調文が施されたもの。

底部破片 (写真図版V-79:10~11) : いずれもC類のものと思われる。

(佐藤 和雄)

C 石器について (図V-80~84: 1~50, 図版V-80~81)

この地区より集中して得られた石錐および浮子は、50点をかぞえる。そのうち、ⅡF1が48点、ⅡF2・ⅡF3は、それぞれ1点づつであった。以下、分類別に述べる。

ⅡF1 : 1~48が該当する。形態は、偏平な円盤あるいは楕円盤を素材とし、長軸の2か所に打ち欠きが見られるもの (1~7・9~20・22~24・26~29・31~35・37~40・43~48)、長軸の2か所および短軸の1か所に打ち欠きが見られるもの (36・41・42)、長軸・短軸の4か所に打ち欠きが見られるもの (21・30)、長軸の1か所にだけ打ち欠きが認められる未製品 (25) に分けられる。1は、本集中区において、重量が最小の17.8g をはかる。17は、珪藻質泥岩製の石錐で、重量は比較的軽く64.7g をはかる。色調は、乳白色である。21は、4か所に打ち欠きを有するが、短軸のそれは長軸と比して剝離が小さい。

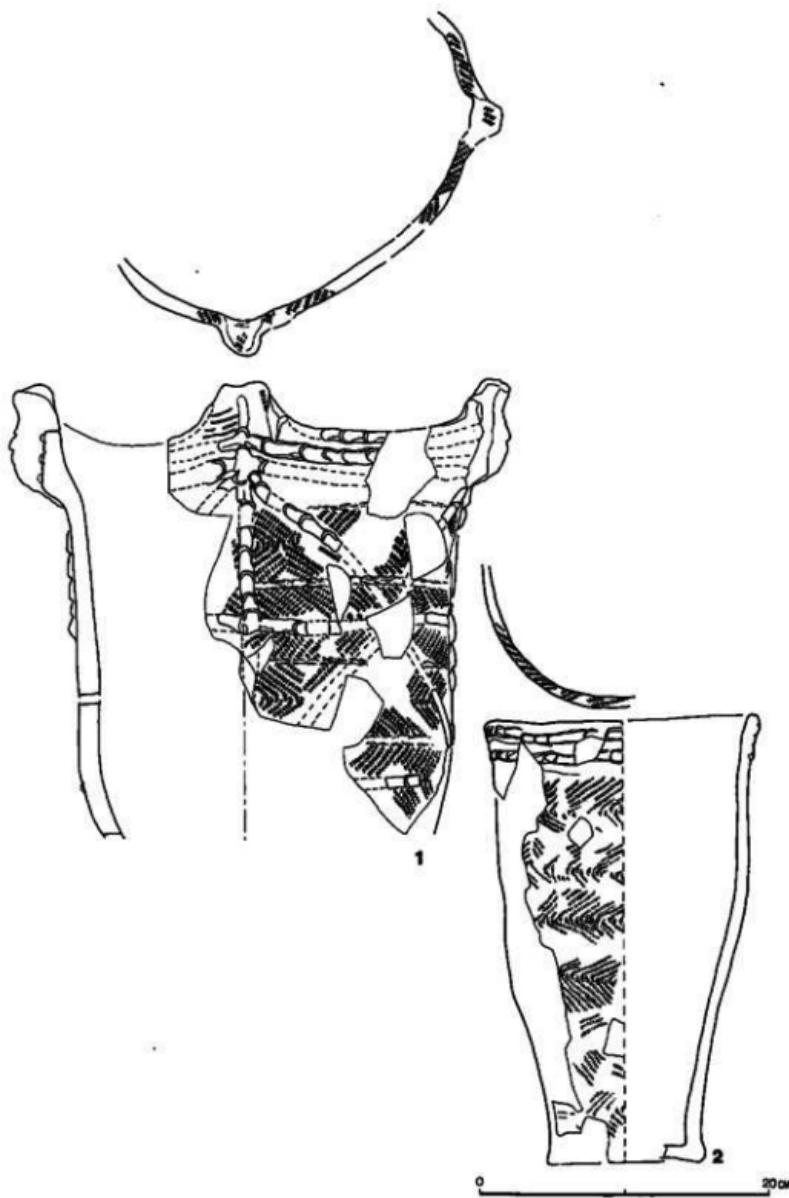
ⅡF2 : 49の1点のみである。形態は、偏平な楕円盤の長軸両端に大きな打ち欠きが施されており、短軸にはそれより小さな打ち欠きとなる。重量は1,081g をはかる。

ⅡF3 : 本集中区より検出されたのは、1点のみである (50)。形態は、偏平な瓢箪形をした輕石製のもので、規格は長さ8.0cm、幅4.8cm、厚さ1.9cmとなる。重量は、28.2g である。小型の石錐の中には、これよりも軽いものが数点検出されているが、浮子としての機能は果たせない。

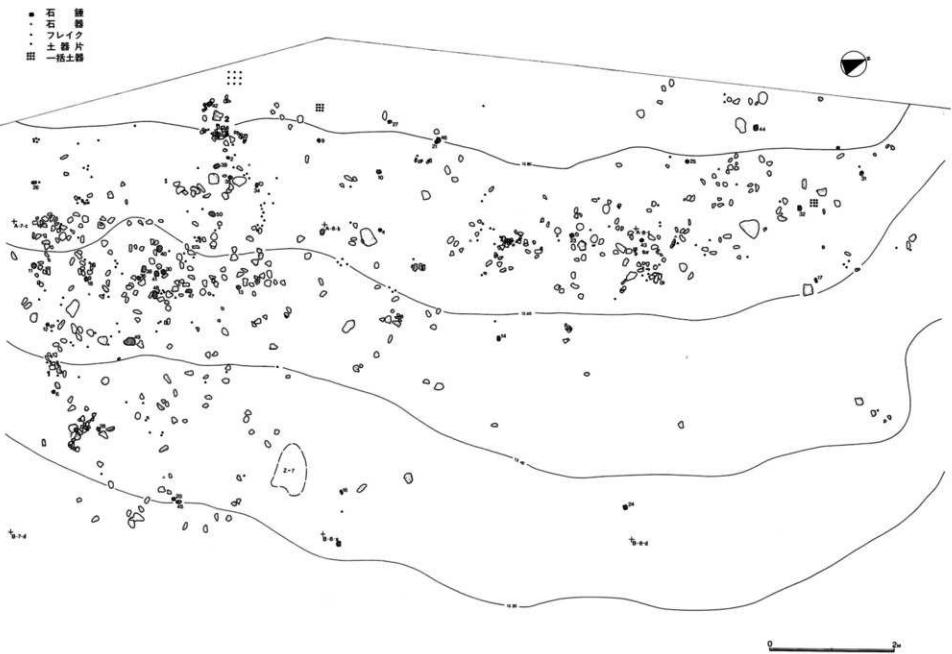
以上、本集中区より得られた石錐は、形態的にも、重量的にも遺構外で検出されているものと大きく変わるもののがなく、I群BおよびC類の土器に伴うものといえよう。

なお、上泊3遺跡より出土した石錐については、第VII章で考察を加えているので、重量別グラフ (図VII-3) とともに参照して頂きたい。

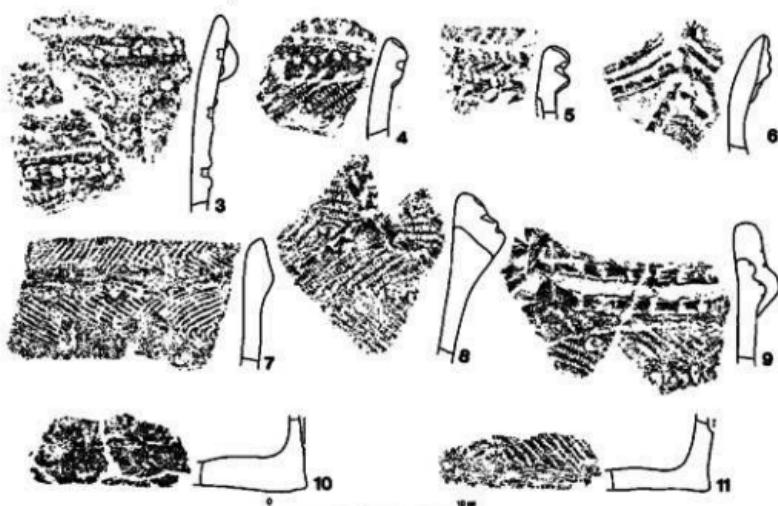
(森岡 健治)



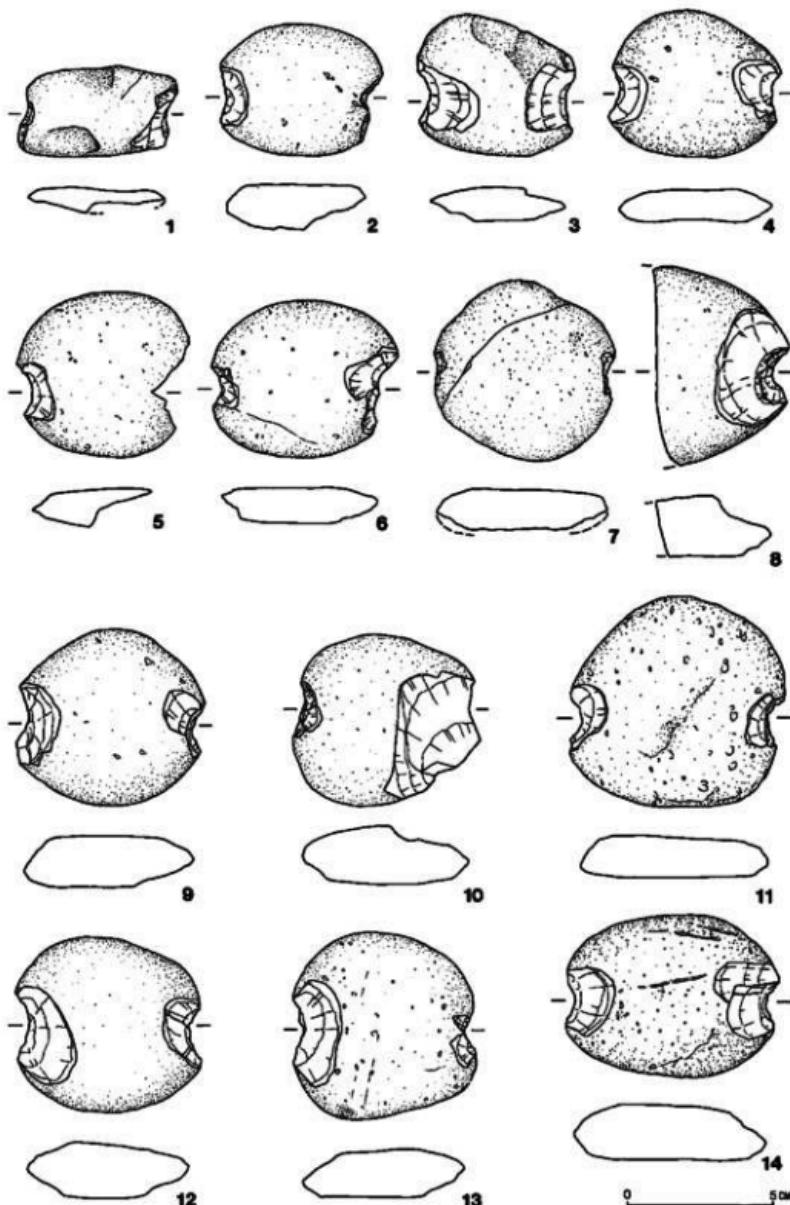
図V-77 玉・石錠集中区出土の土器(1)



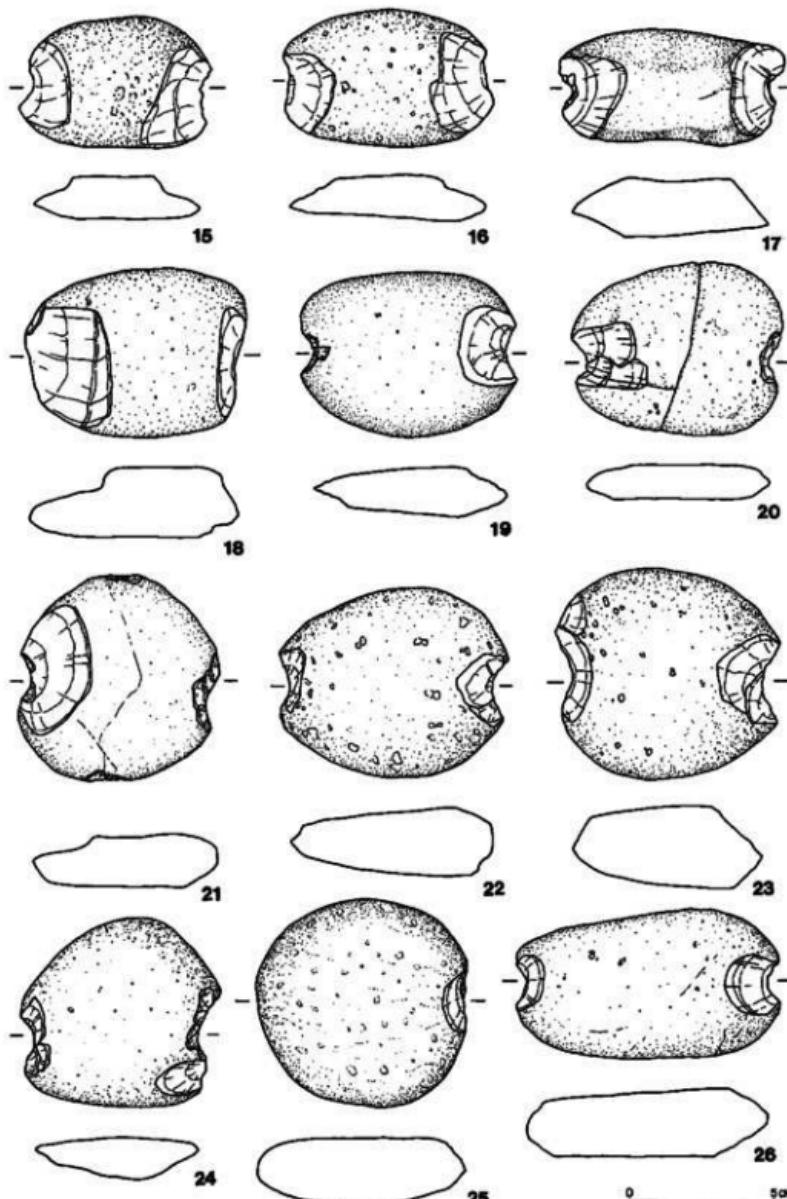
図V-78 磨・石錘集中区遺物出土状況図



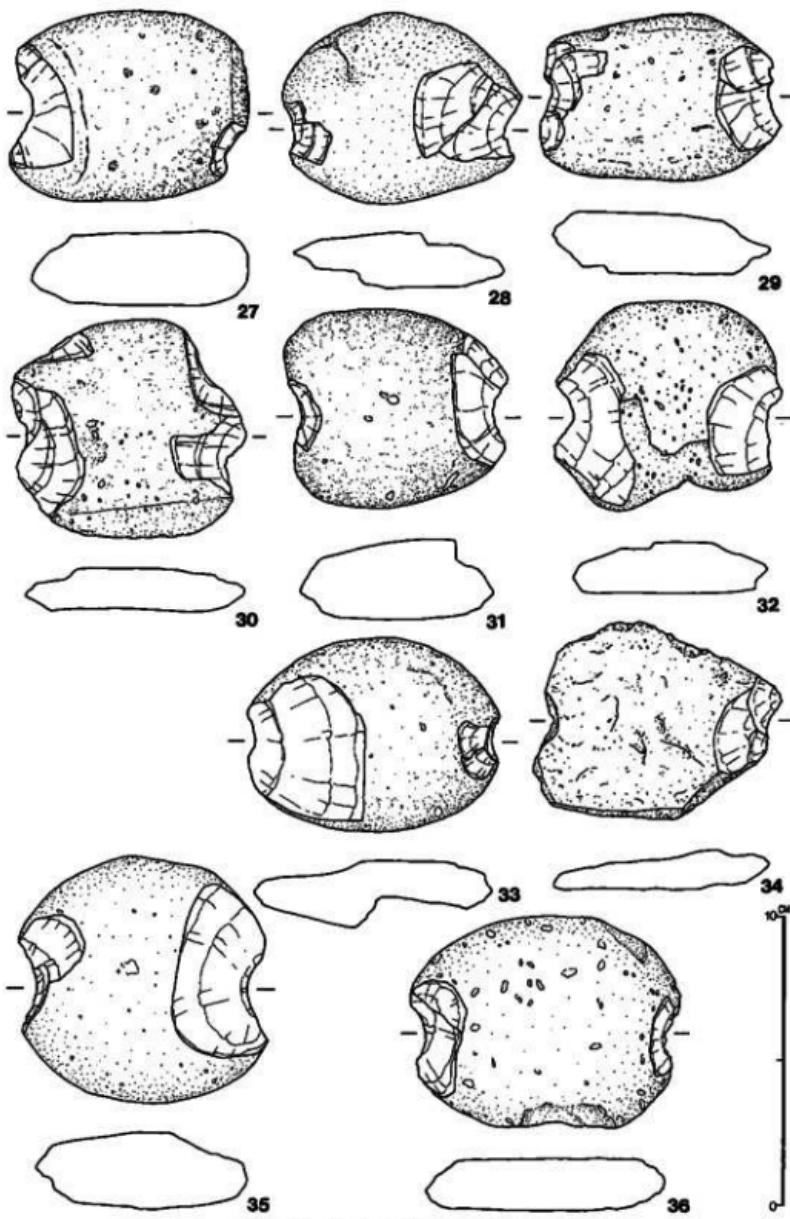
図V-79 磨・石錐集中区出土の土器(2)



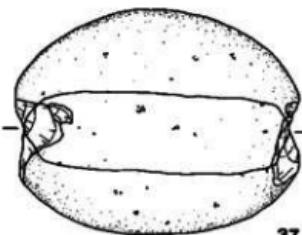
図V-80 磁・石錠集中区出土の石錠(1)



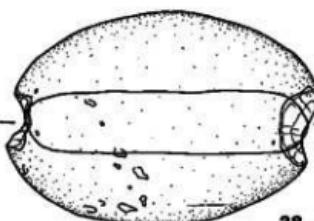
図V-81 砥・石鎚集中区出土の石鎚(2)



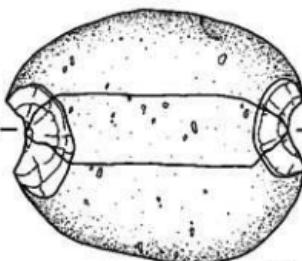
図V-82 球・石錐集中区出土の石錐(3)



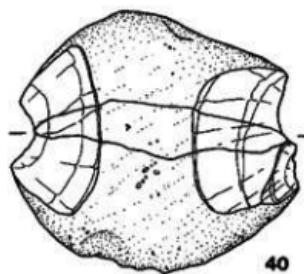
37



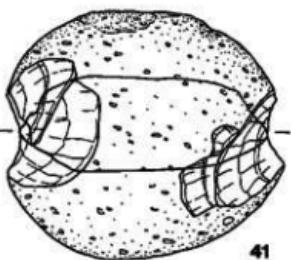
38



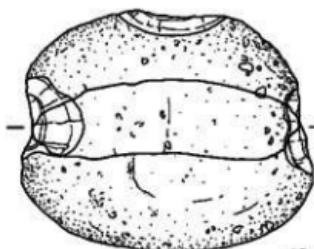
39



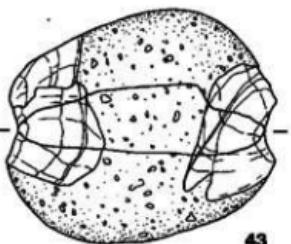
40



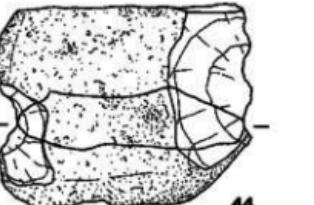
41



42

10^{cm}

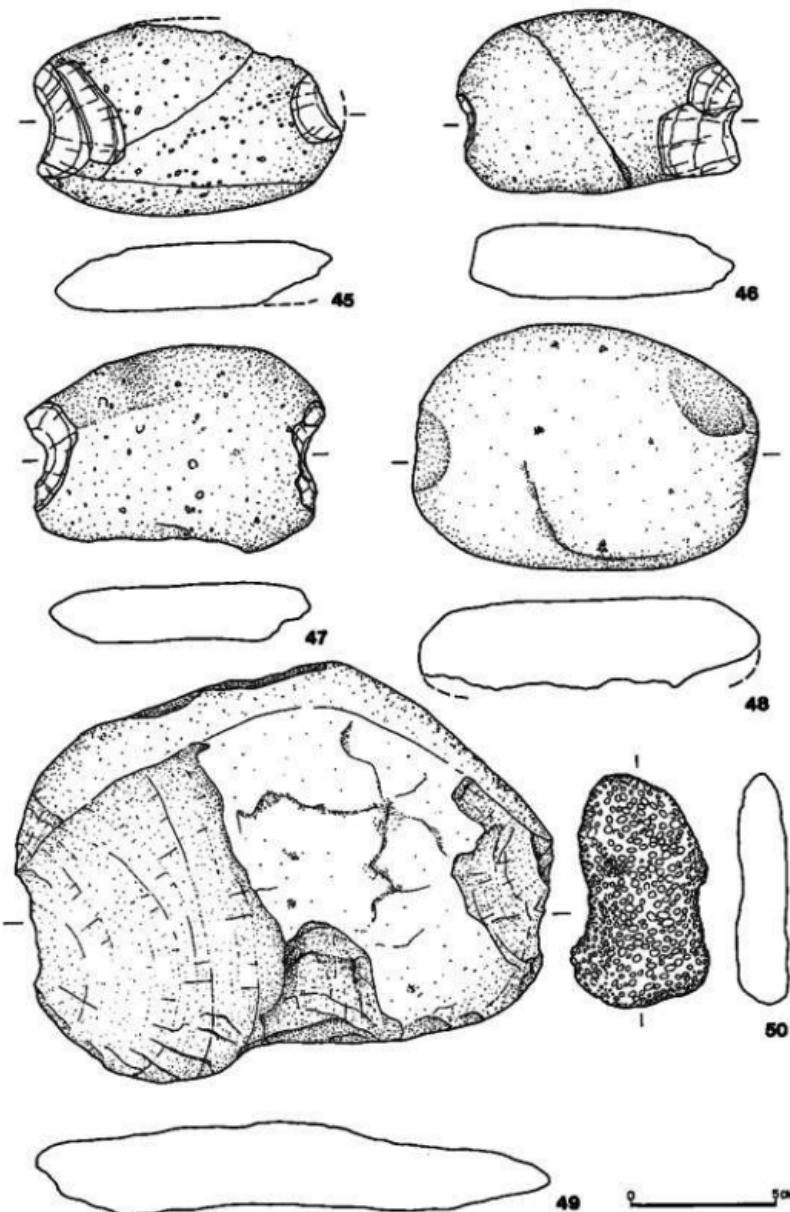
43



44

0

図V-83 球・石錠集中区出土の石錠(4)



図V-84 珠・石錐集中区出土の石錐(5)

遺構別出土・掲載遺物一覧

H-1 上面

名 称	分 類	数 量	
		覆 土	床 面
土 器	統 繩 文	56	11
石 錠	I A	7	
石 銛 先	I A	1	4
ナ イ フ	I C	1	1
削 器	I D		1

名 称	分 類	数 量	
		覆 土	床 面
搔 器	I D	1	
砾 石	II D		1
石 錠	II F	1	1
骨 角 器		1	
コ ハ ク		1	

探査番号	分 類	層 位	特 色
1	II - A	床	I → O (突痕)。地文は R L の繩文。変型工字文。口唇角に刻文。
2	#	覆 土	地文は R L の繩文。口唇に楕円の压痕あり。かめ型。
3	#	"	小型。手づくね。刺突。横走沈線。
4	#	"	O → I。地文は R L の繩文。胎土に砂粒を多く含む。
5	#	"	O → I。突起あり。口唇に割み。原体を上方から斜め下方へ回転押捺している。
6	#	"	I → O (突痕)。口唇外上り。無文。砂粒を多く含む。
7	#	"	I → O。口唇に割み、縫通明突。横走沈線で地文は R L の繩文。8~10と同一個体。
8	#	"	7・9・10と同一個体。
9	#	"	7・8・10 "
10	#	"	7・8・9 "
11	II - C	"	I - O。口唇に割み。横走沈線。小砂利を含む。
12	#	"	図11と同一個体地文は R L の繩文。
13	#	"	頭部。横走沈線。地文は R L の繩文。
14	#	"	底部。地文は R L の繩文。胎土に粗い砂粒を含む。

探査番号	器種名	層序	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	分類	備考
V-8	コ ハ ク	覆 土	1.5	1.2	(0.8)	(0.9)			
	骨 製 品	燒土上	(1.2)	0.9	0.3	(0.3)			
V-9	石 錠	覆 土	4.0	1.3	0.4	1.7	Obs.	I A 3	
	石 銛 先	"	3.7	2.1	0.9	5.5	#	I A 7	
19	#	床	4.4	2.1	0.9	7.4	#	#	
20	#	"	4.5	2.7	0.6	6.0	Sha.	#	
21	#	"	(2.0)	(1.7)	0.5	(1.6)	Obs.	#	
22	#	"	(1.8)	(1.8)	0.8	(3.0)	#	#	尖頭部欠損
23	ナ イ フ	覆 土	6.7	2.0	1.1	14.2	Ohs.	I C 3	
24	#	床	7.1	3.5	0.6	16.0	#	#	
25	#	覆 土	12.2	4.1	0.9	47.6	#	#	
26	#	"	6.0	2.3	0.6	10.4	#	#	
27	磨 器	床	5.7	4.9	0.9	15.6	Ohs.	I D 3	
28	砾 石	覆 土	3.9	3.5	0.6	9.5	Sa.	II D 4	
29	#	"	8.0	7.6	1.3	106.8	#	II D 1	
30	#	床	6.3	5.1	2.0	49.7	#	#	
31	石 錠	"	6.4	6.2	1.9	98.5	And.	II F 1	

表V-13

H-1 掘土

名 称	分 類	数 量	名 称	分 類	数 量
土 器	I-B	278	石 斧	II A	6
"	I-C	2,705	石 破	II B	1
石 鋸	I A	16	石 擾	II C	1
石 銛	I A	8	石 砕	II D	8
石 錐	I B	1	石 錐	II E	1
ナ イ フ	I C	2	石 核	II F	24
削 器	I D	4	石 角	III	10
石 刀 状 制 片	I E	7	骨 器		1

辨認番号	写真番号	グリッド	分 類	層位	特 色
1	1	D-5-b	I-C	掘土	平縁。銀状の貼付文がつく。地文は結束第一種羽状繩文。
2	2	"	"	粘土は緻密。地文は結束第一種羽状繩文。	
3	3	D-4-c	"	粘土は緻密。地文は結東第一種羽状繩文。補修孔3コ。	
4	4	D-6-a	"	地文は結東第一種羽状繩文。内面炭化物付着。	
5	5	D-4-c	"	地文は結東第一種羽状繩文。張底で後成良好。	
6	6	C-4-d	"	地文は結東第一種羽状繩文。口唇にヘラ状工具による調整痕つく。	
7	7	D-4-c	"	粘土に細かい砂粒が多い。平縁。地文は結東第一種羽状繩文。	
8	8	D-4-c	"	平縁。地文は結東第一種羽状繩文でRの無底とL Rの単節を結合。	
9	9	C-6-c	"	粘土に砂粒が多い。平縁。地文は結東第一種羽状繩文。網造文。	
10	10	"	"	粘土に1~4mmの小石混じる。地文は結東第一種羽状繩文。内面に炭化物付着し黒色。	
11	11	"	"	10と同一個体。	
12	12	"	"	粘土に1mmの小石混じる。平縁。地文は單節斜行繩文。内面に炭化物付着。	
13	13	"	"	地文は單節斜行繩文。	
14	14	"	"	粘土は緻密。地文は結東第一種羽状繩文。黒色。	
15	15	"	"	頭部。地文は結東第一種羽状繩文。炭化物付着。	
16	16	"	"	頭部。粘土に1~2mmの小石を多量に含む。表面の一部に炭化物付着。	
17	17	"	"	底部。禿端が付く。	
18	18	"	"	粘土に1~2mmの小石を多く含む。地文は結東第一種羽状繩文。輪模あとが見られる。	
19	19	"	"	18と同一個体。	
20	20	"	"	内面に炭化物付着。	
21	21	"	"	粘土に砂粒が多く含む。地文は結東第一種羽状繩文。表面の一部に炭化物付着。	
22	22	"	"	粘土に細かい砂粒を含む。	
	86	D-4-d	"	口縁に炭化物付着。地文は結東第一種羽状繩文。	
	87	D-5-c	"	頭部。粘土は砂粒を多く含む。	
	88	D-4-c	"	地文は結東第一種羽状繩文。内面と口縁部に炭化物付着。	
	89	D-5-c	"	粘土に細かい砂粒を多く含む。地文は結東第一種羽状繩文。	
	90	D-4-c	"	地文は結東第一種羽状繩文。	
	91	D-6-a	"	口縁と内面に炭化物付着。地文は結東第一種羽状繩文。表面の一部に炭化物付着。	
	92	C-6-b	"	粘土に細かい砂粒を多く含む。地文は結東第一種羽状繩文。	
	93	D-6-a	"	口縁に炭化物付着。地文は結東第一種羽状繩文。	

辨認番号	器種名	層序	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	分類	備考
V-12 23	石 鋸	場 土	1.6	0.9	0.2	0.4	Obs.	I A 5	
24	"	"	1.75	0.9	0.2	0.5	"	"	
25	"	"	2.2	1.1	0.2	0.4	"	"	
26	"	"	2.6	0.9	0.35	0.6	"	"	
27	"	"	2.55	1.35	0.25	1.0	"	"	
28	"	"	2.9	1.1	0.5	1.0	"	"	

特徴番号	器種名	層序	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
V-12 29	石 鋸	掲土	(2.85)	1.2	0.3	(1.1)	Obs.	I A 5	基部欠損
30	"	"	3.15	1.2	0.35	0.9	"	"	
31	"	"	(2.8)	1.9	0.3	(0.6)	"	"	上・下端部欠損
32	"	"	2.9	1.4	0.4	1.1	"	"	
33	"	"	3.4	1.6	0.5	1.8	"	"	
34	"	"	3.1	1.5	0.6	2.3	"	"	
35	"	"	(3.5)	1.2	0.4	2.2	Sha.	I A 3	先端部欠損
36	"	"	(2.9)	2.0	0.5	(2.8)	Obs.	I A 5	基部欠損
37	"	"	5.8	2.3	0.9	9.0	Sha.	"	"
38	"	"	(6.3)	2.0	0.5	(4.5)	Obs.	"	先端部欠損
39	石 鋸 先	"	5.5	2.7	1.0	11.7	Sha.	I A 7	
40	"	"	7.5	3.0	1.05	17.2	"	"	
41	"	"	8.5	3.4	1.2	27.0	"	"	
42	"	"	7.4	2.6	1.4	26.1	"	"	
43	"	"	(2.9)	2.6	0.6	(5.0)	Obs.	"	下半部欠損
44	"	"	(2.8)	2.2	1.0	5.9	"	"	尖頭部欠損
45	"	"	(1.6)	1.5	0.7	1.6	"	"	"
46	"	"	(3.1)	3.0	1.1	(9.0)	"	"	"
47	石 鋸	"	3.4	1.9	0.5	3.0	Sha.	I B 3	
48	ナ イ フ	"	5.5	2.9	0.7	8.8	"	I C 3	
49	"	"	(5.2)	2.2	1.1	(10.2)	"	"	先端部欠損
50	削 器	"	6.3	2.3	0.5	8.9	"	I D 3	
51	"	"	6.0	3.2	0.7	15.7	Che.	"	
V-13 52	搔 簡	"	5.8	7.2	1.4	62.5	Sha.	I D 2	
53	石刃状剝片	"	5.6	4.9	1.8	47.6	"	I E 1	
54	石 刃	"	(3.3)	2.4	0.9	11.0	Gr. Sch.	II A	下半部欠損
55	"	"	(4.5)	2.1	0.7	11.0	Sch.	II A 5	基部欠損
56	"	"	10.9	4.8	1.0	79.5	"	II A 3	
57	"	"	10.6	3.6	1.4	94.5	"	"	
58	"	"	(7.1)	5.2	1.5	87.4	"	II A	下半部欠損
59	"	"	(6.7)	4.5	1.2	(67.6)	"	II A 3	上半部欠損
60	擦 石	"	5.8	5.7	3.6	127.3	Pum.	II C 1	
61	砥 石	"	(8.1)	(6.4)	1.2	(83.4)	Sa.	II D 1	
V-14 62	"	"	8.3	6.0	0.9	54.1	"	"	
63	"	"	(20.2)	(10.7)	1.9	(450.0)	"	"	
64	"	"	(10.3)	(5.8)	0.8	61.7	"	"	
65	"	"	13.9	11.5	0.8	157.2	"	"	
66	"	"	(17.4)	(9.8)	1.5	300.0	"	"	
67	"	"	8.2	5.3	2.4	94.4	Pum.	II D 2	
68	"	"	7.0	3.3	2.0	46.8	Sa.	II D 3	
V-15 69	石 盆	"	13.9	10.3	4.9	825.0	And.	II E 1	
70	石 鋸	"	7.4	6.0	2.2	140.1	Cong.	II F-1	
71	"	"	8.9	6.2	2.1	175.9	Mud.	"	
72	"	"	(4.8)	4.7	1.2	(27.0)	Dia. Mud.	"	
73	"	"	6.6	5.8	1.1	62.7	And.	"	
74	"	"	7.3	6.3	2.0	129.8	"	"	
75	"	"	8.0	6.8	2.0	146.0	Cong.	"	
76	"	"	7.7	7.3	2.0	69.5	Dia. Mud.	"	
77	"	"	8.3	7.2	1.8	150.7	Mud.	"	
78	"	"	7.2	6.1	2.3	110.0	Cong.	"	

表V-15

辨認番号	器種名	層序	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
V-15 79	石錐	覆土	7.7	6.1	1.7	134.7	And.	II F 1	
80	"	"	8.9	6.9	2.2	203.0	"	"	
81	浮子	"	6.8	4.5	2.6	31.2	Pum.	II F 3	
82	石錐	"	8.3	7.2	3.2	267.0	Cong.	II F 1	
83	"	"	10.3	10.3	3.5	480.0	And.	"	
84	石核	"	7.2	6.3	2.9	144.7	Sha.	III	
85	骨製品	"	2.9	0.55	0.25	1.7			全面研磨

H-1 下面

名 称	分類	數量		名 称	分類	數量	
		覆土	床面			覆土	床面
土器	I-C	256	57	削	I D	2	
石鐵	I A	7	3	石斧	II A		2
石錐	I A	1	1	石	II D		1
石槍	I A		1	石	II E		2
ナイフ	I C	2	1	石錐	II F	3	
搔	I D	2		石核	III	1	

辨認番号	写真番号	グリッド	分類	層位	特 色				
1	1		I-C	覆土	粘土は細かい。地文は結束第一種羽状縞文。焼成良好。				
2	2		"	"	頭部。砂粒を多く含む。内面に炭化物付着。				
3	3		"	"	粘土に砂粒を多く含む。地文は結束第一種羽状縞文。				
4	4		"	"	地文は結束第一種羽状縞文。				
5	5		"	"	粘土に砂粒を多く含む。地文はL R單節鉛行縞文。				
6	6		"	床	粘土に細かい砂粒を含む。				
7	7		"	"	粘土に砂粒を多く含む。				
8	8		"	"	頭部。地文は結束第一種羽状縞文。内面に炭化物付着。				
9	9		"	"	口唇に半截竹管状工具による沈線が見られる。				
10	10		"	"	頭部。粘土に砂粒を多く含む。地文は結束第一種羽状縞文。				
11	11		"	覆土	底部。張出しが大きい。				

辨認番号	器種名	層序	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
V-19 12	石錐	覆土	1.7	0.6	0.2	0.1	Obs.	I A 5	
13	"	"	1.9	0.7	0.3	0.1	"	"	
14	"	"	(1.7)	1.0	0.2	(0.4)	"	"	尖頭部欠損
15	"	"	1.7	1.1	0.2	0.3	"	"	基部欠損
16	"	"	1.8	1.2	0.3	0.5	"	"	
17	"	"	2.1	1.2	0.3	0.5	"	"	
18	"	床	2.0	1.3	0.3	0.5	"	"	基部欠損
19	"	"	2.2	0.9	0.4	0.3	"	"	
20	"	覆土	2.7	1.3	0.4	1.0	"	"	基部欠損
21	石錐先	"	3.8	2.3	0.7	5.2	"	I A 7	先端部欠損
22	"	床	(4.9)	2.3	0.6	(6.9)	"	"	"
23	石錐	"	4.9	1.8	0.3	2.8	"	I A 1	
24	石槍	"	9.0	4.6	2.1	64.7	Sha.	I A 8	H F - 1
25	ナイフ	"	4.4	2.4	0.7	7.8	Aga.	I C 3	
26	"	覆土	(1.9)	(2.3)	(0.5)	(0.8)	Obs.	"	下半部欠損
27	"	"	(2.5)	3.1	0.9	(7.2)	"	"	
28	搔 器	"	3.0	4.5	0.9	11.6	"	I D 2	
29	"	"	2.2	2.9	0.5	4.8	"	"	

表V-15

押図番号	種類名	層序	長さ回	幅回	厚さ回	重量(g)	石質	分類	備考
30	石のみ	床	6.5	1.3	0.5	6.7	Gr. Sch.	II A 5	
31	"	"	6.5	2.2	0.7	12.3	Gr. Mud.	"	
32	砾石	"	10.7	8.0	2.7	240.0	Sa.	II D 2	HF-1
33	浮子	覆土	6.7	3.9	1.8	12.1	Pum.	II F 3	
34	石錐	"	9.5	8.4	2.3	184.0	And.	II F 1	
35	"	"	10.9	8.6	2.2	290.0	Cong.	"	
V-20	36	石核	4.9	6.5	1.9	47.6	Ods.	III	
37	石墨	床	15.5	18.4	8.0	3250.0	Cong.	II E 1	
38	"	"	22.3	13.1	6.0	3500.0	"	"	

H-2

名 称	分類	数 量		名 称	分類	数 量	
		上層面	下層面			上層面	下層面
土番	I-C	27	25	砾	II D	1	
削器	I D	2	1	石	II F	1	2
歯	II B		2				

押図番号	写真番号	グリッド	分類	層位	特 色			
1	1		I-C	3(焼土)	胎土に細かい火山灰を含む。底部に張出し有り。地文は結束第一種羽状構文。			
2	2		"	1	地文はLRの斜行構文。焼成良好。			
3	3		"	"	胎土に砂粒を多く含む。地文は結束第一種羽状構文。			
4	4		"	"	地文は太い結束第一種羽状構文。			
5	5		"	下層床	胎土に細かい砂粒を多く含む。地文は太いLRの斜行構文。内面に炭化物付着。			
6	6		"	1	小型。地文は結束第一種羽状構文。内面に炭化物付着し補修孔1コ。			

押図番号	器種名	層序	長さ回	幅回	厚さ回	重量(g)	石質	分類	備考
V-22	7 削器	1	8.7	4.35	2.25	34.0	Sha.	I D 3	上層面床
8	"	"	8.0	3.2	1.5	66.7	"	"	"
9	"	2	4.0	1.6	0.6	3.3	"	"	破損品
10	敲石	下層床	5.5	4.8	3.9	170.0	Cong.	II B 2	
11	"	2	17.0	7.4	4.8	850.0	And.	"	
12	砾石	"	5.0	4.9	0.7	20.0	Sa.	II D 1	
13	石錐	下層床	4.7	3.6	1.1	27.3	And.	II F 1	未整品?
14	"	2	7.7	6.8	2.2	152.8	Cong.	"	

H-3

名 称	分類	数 量		名 称	分類	数 量	
		覆 土	床 面			覆 土	床 面
土番	I-C	20	9	ナイフ	I C		1
				石錐	II F		1

押図番号	写真番号	グリッド	分類	層位	特 色			
1	1		I-C	覆土	胎土は砂粒を多く含む。地文はLR斜行構文。焼成良好。			
2	2		"	床直	脚部。2~4mmの小石を多く含む。			
3	3		"	"	口唇に施文。細かな砂粒を含む。			
4	4		"	"	脚部。細かな砂粒を多く含む。地文は結束第一種羽状構文。			

押図番号	器種名	層序	長さ回	幅回	厚さ回	重量(g)	石質	分類	備考
V-23	5 ナイフ	床	6.75	2.7	1.7	25.3	Sha.	I C 3	
6	石錐	"	7.3	5.7	2.2	128.2	Cong.	II F 1	

表V-17

H-4

名 称	分 類	數 量			名 称	分 類	數 量		
		覆 土	床 面	盛 土			覆 土	床 面	盛 土
土 器	I-B			1	削	器	I D		1
"	I-C	39	8	58	石 砂	片	II A		1
石 鋸	I A	1	2	3	敲 石	石	II B		1
石 紙	I A		3	1	砾 石	石	II D		1
石 線	I B		1	1	石 瓦	瓦	II E		1
ナ イ フ	I C	1		2	石 磨	瓦	II F		2

特 因 号	写 真 号	グ リ ッ ド	分 類	層 位	特 色
1	1	C-10-b	I-C	外層(床)	地土に砂粒を多く含む。地文は結束第一種羽状綱文。内面に炭化物付着。
2	2	C-9-c	"	"	地土は緻密。地文は結束第一種羽状綱文。
3	3	D-9-b-c	"	盛 土	地土に砂粒を多く含む。地文は結束第一種羽状綱文。
4	4	"	"	"	地土に細かい砂粒を多く含む。焼成良好。
5	5	"	"	"	地文は羽状綱文。焼成良好。
6	6	"	"	"	H-3の2と類似する。
7	7	"	"	"	地土に砂粒を多く含む。地文は結束第一種羽状綱文。施文は浅い。
8	8	"	"	"	内面に炭化物付着。
9	9	"	"	覆 土	炭化物付着。
10	10	"	"	床 直	地文は結束第一種羽状綱文。

特 因 号	器 様 名	層 序	長 さ (m)	幅 (m)	厚 さ (m)	重 量 (g)	石 質	分 類	備 考
V-27	11 石 鋸	HFI 上面	1.95	1.05	0.25	0.4	Obs.	I A 5	
	12 "	Pit 床	0.95	1.15	0.3	0.7	"	"	
	13 "	覆 土	3.15	1.75	0.55	2.3	"	"	
	14 石 鋸 先	床	3.75	2.65	0.65	4.9	Sh.	I A 7	
	15 "	"	7.4	2.8	1.0	8.5	Sh.	"	
	16 "	"	(2.35)	(2.7)	(0.7)	(4.3)	Obs.	"	
	17 石 鋸	"	4.4	1.35	1.55	3.2	"	I B 1	
	18 ナ イ フ	覆 土	4.15	2.0	0.7	5.6	"	I C 3	
	19 削 器	床	(4.65)	(3.55)	(1.0)	13.4	"	I D 3	
	20 石 砂	"	(9.9)	(5.7)	1.8	(187.7)	Gr. Sch.	II A	上部欠損 蓋部欠損
	21 敲 石	Pit 床	8.0	7.6	2.6	235.0	And.	II B 1	
	22 石 磨	床	10.1	5.3	1.7	120.3	"	II F 1	
	23 "	"	8.8	6.4	2.5	160.5	"	"	
V-28	24 石 瓦	Pit 床	31.5	25.6	3.0	3500.0	Sa.	II E 1	
	25 石 鋸	覆 土	1.95	1.15	0.3	0.5	Obs.	I A 5	
	26 "	"	5.0	1.7	0.4	3.2	Sh.	I A 3	
	27 "	"	3.3	1.35	0.5	1.8	Obs.	"	
	28 石 鋸 先	"	(4.85)	2.95	1.2	(7.0)	"	I A 7	
	29 石 鋸	"	6.35	1.3	0.8	7.9	Sh.	I B 1	
	30 ナ イ フ	"	8.55	2.3	1.2	21.8	"	I C 3	
	31 "	"	6.85	2.6	0.8	12.4	"	"	
	32 削 器	"	5.05	2.65	1.05	12.6	"	I D 3	
	33 砕 石	"	(10.8)	(7.7)	1.0	(62.3)	Sa.	II D 1	
	34 石 鋸	"	10.5	8.5	2.2	275.0	And.	II F 1	
	35 "	"	11.0	8.7	2.7	340.0	"	"	

H-5

名 称	分 類	數 量		名 称	分 類	數 量	
		覆 土	床 面			石	皿
土 器	I-C	1			II E		1
持図番号	写真番号	グリッド	分 類	層位	特	色	
1			I-C	B'	底部。		
持図番号	器種名	層序	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量(g)	石質 分類 備考
V-29 2	石 皿	床	25.6	12.0	4.1	1700.0	Sa. II E 1

P-2

名 称	分 類	數 量		名 称	分 類	數 量	
		覆 土	壊 底	石 錐	II F	1	
持図番号	器種名	層序	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量(g)	石質 分類 備考
V-30 1	石 錐	覆 土	10.4	10.1	3.0	482.0	Mod. II F 1

P-4

名 称	分 類	數 量	
		覆 土	壊 底
土 器	I-C	1	

P-5

名 称	分 類	數 量		名 称	分 類	數 量	
		覆 土	壊 底	削 器	ID	1	
土 器	I-C	39		研 石	II D	1	
持図番号	写真番号	グリッド	分 類	層位	特	色	
1 1		I-C	覆 土	口唇の突起部のみ。			
持図番号	器種名	層序	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量(g)	石質 分類 備考
V-30 2	削 器	覆 土	6.6	4.0	1.2	21.1	Sha. ID 3

P-6

名 称	分 類	數 量		名 称	分 類	數 量	
		覆 土	壊 底	削 器	ID	1	
土 器	I-C	40	17	研 石	II D	1	
持図番号	写真番号	グリッド	分 類	層位	特	色	
1 1		I-C	覆 土	胎土は緻密。口唇に施文。			
2 2		" "	" "	胎土に砂粒を多く含む。			
持図番号	器種名	層序	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量(g)	石質 分類 備考
V-31 3	削 器	覆 土	(5.25)	3.1	1.3	21.9	Sha. ID 3
4	研 石	"	4.4	4.3	0.6	13.4	Sa. II D 1

表V-19

P-7

名 称	分 類	數 量	
		覆 土	横 底
土 器	I-C	11	5

辨図番号	写真番号	グリッド	分 類	層 位	特 色	
					覆 土	横 底
1	1		I-C	床	口唇に割み有り。地文は結束第一種羽状縞文。	
2	2		"	覆 土	胎土に3~5mmの小石を含む。口唇に施文。	
3	3		"	炉胎土	胎土に1~2mmの小石を含む。地文は結束第一種羽状縞文。	

P-8

名 称	分 類	數 量		名 称	分 類	數 量	
		覆 土	横 底			覆 土	横 底
土 器	I-C	5	15	石 錐	II F	1	

辨図番号	写真番号	グリッド	分 類	層 位	特 色	
					覆 土	横 底
1	1		I-C	床直上	胎土は緻密。地文は細い無筋の結束第一種羽状縞文。	

辨図番号	器種名	層序	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	分類	備考
V-32	石 錐	覆 土	12.5	8.0	3.0	389.0	And.	II F 1	

P-9

名 称	分 類	數 量	
		覆 土	横 底
土 器	I-C	11	36

辨図番号	写真番号	グリッド	分 類	層 位	特 色	
					覆 土	横 底
1	1		I-C	床	胎土に砂粒を多く含む。地文はR Lの単節斜行縞文。	
2	2		"	"	胎土は緻密地文は無筋の結束羽状縞文。	
3	3		"	"	P-8の1と類似する。	

P-10

名 称	分 類	數 量		名 称	分 類	數 量	
		覆 土	横 底			覆 土	横 底
土 器	I-C	9		陶 器	ID	1	
				石 錐	II F	1	

辨図番号	写真番号	グリッド	分 類	層 位	特 色	
					覆 土	横 底
1	1		I-C	覆 土	胎土に砂粒を多く含む。地文は羽状縞文。	

辨図番号	器種名	層序	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	分類	備考
V-33	削 器	覆 土	(6.8)	2.3	0.6	(14.6)	Sha.	ID 3	
3	石 錐	"	11.4	9.9	3.0	427.0	Cong.	II F 1	

P-12

名 称	分 類	數 量		名 称	分 類	數 量	
		覆 土	横 底			覆 土	横 底
土 器	I-B	3		削 器	ID	1	

辨図番号	器種名	層序	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	分類	備考
V-33	削 器	覆 土	4.1	2.0	0.6	5.1	Obs.	ID 3	

表V-20

P-13

名 称	分 類	数 量		名 称	分 類	数 量	
		覆 土	壤 底			覆 土	壤 底
土 器	I-B	5		敲 石	II B		1
"	I-C	8		砾 石	II D		1
特 色							
1	1	I-C	覆 土	地文は細かい火山灰を多く含む。地文は太いLRの単節斜行縞文。			
2	2	I-B	"	底部。地文は結束第一種羽状縞文。			
博団番号	写真番号	グリッド	分 類	層 位			
V-34	3						
4	敲 石	床	7.4	6.3	1.5	92.8	Sa.
	"	(11.9)		(7.3)	4.3	(450.0)	And.
							II D 1
							II B 2
							周辺欠損

P-14

名 称	分 類	数 量		名 称	分 類	数 量	
		覆 土	壤 底			石 面	壤 底
砾 石	II D	1		石 面	II E	1	
砾 石	II D	1		石 面	II E	1	
博団番号	器 种 名	層 序	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石 質
V-35	1 石 盆	覆 土	(11.4)	13.3	5.0	(700.0)	And.
2 砂 石	"	25.1	14.2	3.2	1300.0	Sa.	II D
							II E 1

Z-1

名 称	分 類	数 量		名 称	分 類	数 量	
		覆 土	壤 底			石 斧	壤 底
土 器	I-B	2		石 斧	II A	1	
"	I-C	6		石 斧	II A	1	
博団番号	写真番号	グリッド	分 類	層 位	特 色		
1	1	I-C	"	断面。	地文は結束第一種羽状縞文。内面に炭化物付着。		
博団番号	器 种 名	層 序	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石 質
V-17	2 石 斧		(8.7)	2.9	1.1	44.6	Sch.
							II A 3

Z-3

名 称	分 類	数 量		名 称	分 類	数 量	
		覆 土	壤 底			石 斧	壤 底
土 器	I-C	7		石 斧	II A	1	
"	I-C	7		石 斧	II A	1	
博団番号	写真番号	グリッド	分 類	層 位	特 色		
1	1	C-6-d	I-C	"	地文は結束第一種羽状縞文。口唇の一部に施文あり、発成良好。		

Z-4

名 称	分 類	数 量
土 器	I-C	4

Z-5

名 称	分 類	数 量
土 器	I-C	42

博団番号	写真番号	グリッド	分 類	層 位	特 色	
					覆 土	壤 底
1	1		I-C	"	地文はLRの単節斜行縞文。口唇に地文あり。補修孔1つ。	
2	2		I-C	"	地文はLRの単節斜行縞文。底部に地文あり。	

表V-21

Z-8

名 称	分 類	数 量
土 器	I-C	11

辨図番号	写真番号	グリッド	分 類	層 位	特 色
1	1		I-C		粘土に2~5mmの小石を多く含む。地文は結束第一種羽状圖文。

S-1

名 称	分 類	数 量
土 器	I-C	15

辨図番号	写真番号	グリッド	分 類	層 位	特 色
1	1		I-C	II	胸部。粘土に粗い砂粒を多く含む。地文は結束第一種羽状圖文。
2	2		"	"	胸部。地文は結束第一種羽状圖文。

F-4

名 称	分 類	数 量
土 器	I-C	2

F-8+9

名 称	分 類	数 量	名 称	分 類	数 量
土 器	I-C	34	砾 石	II B	1

辨図番号	写真番号	グリッド	分 類	層 位	特 色
1	1		I-C		粘土に砂粒を多く含む。地文はRの無菌とLRの半菌の結束第一種羽状圖文。

辨図番号	器種名	層序	長さ [cm]	幅 [cm]	厚さ [cm]	重量 (g)	石質	分類	備考
V-39 2	石 破	1	5.0	4.6	1.3	40.6	And.	II F 1	
3	"	2	9.4	5.9	2.9	199.8	"	"	
4	敲 石	3	17.4	11.0	6.1	1400.0	Cong.	II B 2	

F-17

名 称	分 類	数 量
石 斧	II A	1

辨図番号	器種名	層序	長さ [cm]	幅 [cm]	厚さ [cm]	重量 (g)	石質	分類	備考
V-39 1	石 斧	1	(7.4)	(4.9)	(1.5)	(69.9)	Sch.	II A 3	基部・刃部欠損

F-19

名 称	分 類	数 量
削 器	ID	1

辨図番号	器種名	層序	長さ [cm]	幅 [cm]	厚さ [cm]	重量 (g)	石質	分類	備考
V-39 1	削 器	3	16.8	9.6	3.2	350.0	Sha.	ID 3	

F-20

名 称	分 類	数 量
土 器	I-C	5

辨認番号	写真番号	グリッド	分 類	層位	特 色
1	1		I-C	覆 土	網部。地文はLRの単節斜行縞文。

焼棄場跡

名 称	分 類	数 量
土 器	I-A	19
"	I-B	3532
"	I-C	2143
石 鋸	I A	61
石 鋸	I A	175
石 槍	I A	21
石 鋸	I B	60
石 点	I C	87
ナ イ フ	I C	15
器	I D	67

名 称	分 類	数 量
削	I D	78
石 刀 状 刺	I E	50
石 刃 片	II A	38
敲 石	II B	3
砥 石	II D	372
石 直	II E	1
石 錐	II F	63
石 槍	III	30
骨 製 品		2
裝 飾 品	IV C	1

辨認番号	写真番号	グリッド	分 類	層位	特 色
1	1	B-13-b	I-B	D	平鋸。小石を多く含む。表面磨滅している。結束第一種羽状縞文。
2	2	"	"	"	平鋸。結束第一種羽状縞文。補修孔9コ。
3	3	"	"	"	地文は結束第一種羽状縞文。
4	4	"	"	"	胎土に1mm程度の小石を含む。内面に炭化物付着。結束第一種羽状縞文。
5	5	"	"	"	大型。胎土に1~4mmの小石を多く含む。結束第一種羽状縞文。下表面が赤茶色で擦痕多い。
6	6	B-13-d	"	"	胎土は緻密。LRの単節とRの無筋の結束第一種羽状縞文。
7	7	B-13-b	"	"	RLの単節斜行縞文。口唇と内面に炭化物付着。補修孔13コ。
8	8	"	"	"	結束第一種羽状縞文。
9	9	B-13	"	"	結束第一種羽状縞文。
10	10	B-13-b	"	"	大型。胎土に1~5mmの小石を多く含む。結束第一種羽状縞文で全体が太い。補修孔25コ。
11	11	B-13-e	"	"	大型。2~5mmの小石を多く含む。RLの単節斜行縞文。補修孔4コ。
12	12	"	"	"	平鋸。結束第一種羽状縞文で小型。補修孔8コ有り、焼成は良い。
13	13	"	"	"	結束第一種羽状縞文で全体が太い。粘付文の剥離が多い。補修孔5コ。
14	14	"	"	"	結束第一種羽状縞文。細いRの無筋2本と太いLRの結束。補修孔5コ。
15	15	"	"	"	地文はRLの結束第一種羽状縞文。補修孔3コ。
16	16	B-13-c	I-C	D	胎土に粗い砂粒を多く含む。結束第一種羽状縞文。内面炭化物付着し補修孔1コ。
17	17	"	"	"	胎土は緻密。結束第一種羽状縞文。粘付文剥離が多い。補修孔1コ。
18	18	"	"	"	底部突出。LR直前段多条。
19	19	"	I-B	D	結束第一種羽状縞文。O段多条(6条以上)である。
20	20	B-13	"	"	結束第一種羽状縞文。口唇に炭化物付着。補修孔3コ。
21	21	B-13-c	I-C	D	胎土緻密。底部は大きく張り出す。結束第一種羽状縞文。焼成は良い。
22	22	B-13-c	I-B	D	胎土緻密。結束第一種羽状縞文。補修孔1コ。
23	23	B-13-a	"	"	胎土に粗い砂粒を多く含む。結束第一種羽状縞文。粘付文の剥離が多い。補修孔4コ。
24	24	B-13-d	"	"	結束第一種羽状縞文。補修孔3コ。

表V-23

持団番号	写真番号	グリッド	分類	層位	特	色
25	25	B-13-d	I-B	D	地文は結束第一種羽状縦文。補修孔2コ。	
26	26	B-13-c	"	"	粘土緻密。地文は結束第一種羽状縦文。口縁部に炭化物付着。補修孔4コ。	
27	27	B-13-d	"	"	地文は結束第一種羽状縦文。内面炭化物付着。補修孔12コ。	
28	28	"	"	"	地文は結束第一種LR斜行縦文で0段多条と2条の縄が結束。補修孔5コ。	
29	29	"	"	"	地文は結束第一種羽状縦文。底部は張り出している。焼成良好。	
30	30	"	"	"	粘土に2~4mmの小石を多く含む。地文は結束第一種羽状縦文。補修孔2コ。	
31	31	B-14-d	"	"	地文は無筋の結束第一種羽状縦文。内面炭化物付着と補修孔17コ。	
32	32	B-14-a	I-C	D	地文は結束第一種羽状縦文。表面に炭化物付着。補修孔1コ。	
33	33	"	"	"	粘土に細かい砂粒を多く含む。地文は細い結束第一種羽状縦文。	
34	34	B-14-b	"	"	地文は結束第一種羽状縦文。内面に炭化物付着。	
35	35	B-13-c	"	"	地文は結束第一種羽状縦文。内面に炭化物付着。	
36	36	B-14-a	"	"	粘土は細かい砂粒を多く含む。地文は結束第一種羽状縦文。補修孔1コ。	
37	37	B-13-b	I-B	D	地文はLR斜行縦文。補修孔1コ。38と同一個体。	
38	38	"	"	"	37と同一個体。	
39	39	"	"	"	粘土は粗い砂粒を多く含む。表面磨耗。	
40	40	"	"	"	粘土は細かい砂粒を多く含む。	
41	41	"	I-C	D	粘土は粗い砂粒を多く含む。	
42	42	B-13	I-B	D	補修孔1コ。	
43	43	B-13-b	"	"	地文はLR斜行縦文。	
44	44	"	"	"	地文は結束第一種羽状縦文。補修孔3コ。	
45	45	"	"	"	地文は結束第一種羽状縦文。表面に炭化物付着。補修孔1コ。	
46	46	"	"	"	底部。内面に炭化物付着。	
47	47	B-13-c	"	"	地文は結束第一種羽状縦文。補修孔2コ。	
48	48	"	I-C	D	1~2mmの小石を多く含む。地文は結束第一種羽状縦文。貫通しない補修孔あり。	
49	49	"	I-B	D	口唇に压痕有り。地文LR斜行縦文。焼成良好。	
50	50	"	"	"	口唇に炭化物付着。	
51	51	"	I-C	D	粘土緻密。地文は結束第一種羽状縦文。焼成良好。	
52	52	"	I-B	D		
53	53	"	"	"		
54	54	"	"	"	底部。粗い砂粒を多く含む。地文は結束第一種羽状縦文。	
55	55	"	I-C	D	底部。補修孔1コ。	
56	56	"	I-B	D	底部。地文は結束第一種羽状縦文。補修孔1コ。	
57	57	"	I-C	D	地文は結束第一種羽状縦文。内面に炭化物付着。焼成良好。	
58	58	B-13-d	I-B	D	地文は結束第一種羽状縦文。補修孔1コ。	
59	59	B-13-a	I-C	D	地文は太い第一種羽状縦文。口唇に施文有り。焼成良好。	
60	60	B-13-d	I-B	D	地文は結束第一種羽状縦文。	
61	61	B-14-a	"	"	底部。地文は太い結束第一種羽状縦文。表面に炭化物付着。補修孔1コ。	
62	62	"	"	"	粘土に2~4mmの小石を多く含む。地文は結束第一種羽状縦文。	
63	63	"	"	"	底部。粘土に砂粒を多く含む。地文は結束第一種羽状縦文。補修孔2コ。	
64	64	"	"	"	粘土に細かい砂粒を多く含む。地文は結束第一種羽状縦文。	
65	65	"	"	"	底部。地文は結束第一種羽状縦文。表面に炭化物付着。	
66	66	B-14-d	I-A	D	口唇部厚。平底。地文を内面にも施す。補修孔1コ有り。粘土に小砂利を含む。	
67	67	B-13-b	I-B	D	補修孔1コ。	
68	68	B-13-c	"	"	粘土に1~3mmの小石を多く含む。地文はLRの斜行縦文。補修孔2コ。	
69	69	B-14-a	"	"	粘土に4~7mmの小石を多く含む。地文は結束第一種羽状縦文。	
70	70	"	"	"	粘土に砂粒を多く含む。地文は結束第一種羽状縦文。補修孔6コ。	
71	71	B-13	"	"	地文はLR斜行縦文。補修孔4コ。	
72	72	"	"	"	地文は太い結束第一種羽状縦文。内面、表面の一部に炭化物付着。補修孔6コ。	
73	73	B-13-d	"	"	地文は上弓がLRの無筋で下弓がLRの単筋斜行縦文。補修孔15コ。	

地図番号	写真番号	グリッド	分類	層位	特 色
74	74	B-13-a	I-B	D	地文は結束第一種羽状縦文。胎土に2~4mmの小石を多く含む。表面炭化物付着。
75	75	C-13-d	#	#	胎土に1~2mmの小石を多く含む。内面に炭化物付着。
76	76	"	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。小型で平緩。焼成良好。補修孔2コ。
77	77	B-13-a	I-C	D	地文は結束第一種羽状縦文。口縁部裏面に炭化物付着。
78	78	C-13-d	#	#	胎土に細かい砂粒を含む。地文は結束第一種羽状縦文。補修孔1コ。
79	79	B-13-b	#	#	胎土に粗い砂粒を多く含む。地文は結束第一種羽状縦文。
80	80	B-13-a	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。0段多条と2条のものが結束される。焼成良好。
81	81	B-13-a	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。平緩。内面炭化物付着。
82	82	A-13-c	#	#	口唇に地文有り。肥厚部底面に半形竹管による整形痕あり。貫通していない補修孔1対。
83	83	B-13-a	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。胴下半部裏面に炭化物付着。
84	84	B-13-c	#	#	地文はLR斜行縦文。R直前段反差が断面の左右半々に差される。焼成良好。
85	85	B-13-d	I-B	C	地文は結束第一種羽状縦文。上部文様部の断水は8~11本埠位で約2.5cm。補修孔5コ。
86	86	A-13-c	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。平緩。補修孔2コ。
87	87	B-13-a	#	#	胎土は砂粒多く含む。平緩。RLの単節斜行縦文。手すくねでミニチュア。
88	88	A-13-c	I-C	C	地文は結束第一種羽状縦文で繩造有り。平緩。内面炭化物付着。
89	89	B-13-d	#	#	平緩。地文は結束第一種羽状縦文。表面は磨耗し内面に炭化物付着。
90	90	B-13-d	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。繩造有り。焼成良い。補修孔2コ。
91	91	B-14-c	#	#	平緩。地文は結束第一種羽状縦文。口唇にも地文有り。全体が質灰色。
92	92	A-13-b	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。地文有り。全体が質灰色。
93	93	B-13-a	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。口唇にも地文有り。全体が質灰色。
94	94	B-14-b	#	#	胎土緻密。平緩。地文はLRの結束第一種斜行縦文。口唇に地文。内面炭化物付着。
95	95	A-13-d	#	#	胎土緻密。平緩。地文は太い環体の結束第一種羽状縦文。口唇にも地文。繩造有り。補修孔1コ。
96	96	B-13	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。平緩。口唇に地文有り。内面炭化物付着。
97	97	B-13-a	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。繩造有り。焼成良い。
98	98	"	I-C	B	地文はRL單節と正反の合による結束第一種斜行縦文。焼成良好。
99	99	B-14-d	I-C	II	地文は結束第一種羽状縦文。平緩。焼成良好。
100	100	A-13-b	#	II	胎土に砂粒多く含む。平緩。地文は結束第一種羽状縦文。補修孔1コ。
101	101	C-14-a	#	II	地文はLRの単節斜行縦文。内面にも地文あり。
102	102	C-13-d	#	#	平緩。地文は結束第一種羽状縦文。口唇にも地文有り。内面に炭化物付着。
103	103	B-13-a	#	#	胎土は緻密。平緩。地文は結束第一種羽状縦文。口唇外反。口唇にも地文あり。焼成良好。
104	104	B-13	I-C	I	平緩。地文は結束第一種羽状縦文。口唇にも地文あり。小型。
105	105	B-14-c	#	#	胎土に粗い砂粒を多く含む。地文は結束第一種羽状縦文。口唇にも地文あり。
106	106	B-14-b	#	#	胎土緻密。地文は結束第一種羽状縦文。
107	107	B-14-a	#	#	胎土緻密。地文は結束第一種羽状縦文。上半部を欠く。
108	108	B-13-d	I-B	D	内面に炭化物付着。焼成良好。
109	109	C-14-a	#	#	内面に炭化物付着。
110	110	B-13-d	#	#	胎土に1~3mmの小石を多く含む。地文はRの無筋斜行縦文。補修孔1コ。
111	111	"	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。貼付付。補修孔1コ。
112	112	"	#	#	胎土に2~3mmの小石を多く含む。地文は結束第一種羽状縦文。
113	113	B-14-a	#	#	円形竹管文がつく。補修孔1コ。
114	114	"	#	#	胴部。地文は結束第一種羽状縦文。
115	115	B-13-d	#	#	内面炭化物付着。補修孔1コ。145と類似する。
116	116	"	#	#	内面に炭化物付着。焼成良好。
117	117	B-14-a	#	#	地文はRLの単節斜行縦文。小型で補修孔2コ。
118	118	B-13-c	#	#	胎土に細かい砂粒を多く含む。
119	119	B-14-a	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。補修孔1コ有り。内面は特に赤色である。
120	120	B-13-d	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。口唇に炭化物付着。
121	121	B-13-b	#	#	胴部。地文は結束第一種羽状縦文。補修孔1コ。
122	122	B-14-a	#	#	胴部。地文はLRの単節斜行縦文。補修孔1コ。

表 V-25

標図番号	写真番号	グリット	分類	層位	特	色
	123	B-13-d	I-B	D	口唇に炭化物付着。内面黒ずむ。 補修孔1コ。	
	124	"	"	"	胎土に砂粒多い。平縁。補修孔1コ。	
	125	C-14-b	"	"	地文はL Rの草筋斜行縦文。補修孔1コ。	
	126	B-14-a	"	"	地文は結束第一種羽状縦文。内面炭化物付着。	
	127	B-13-c	"	"	底部。地文は結束第一種羽状縦文。	
	128	B-13-b	"	"	貼窓あり。内面に炭化物付着。補修孔1コ。	
	129	B-14-b	"	"	胎土に2~3mmの小石を多く含む。地文は結束第一種羽状縦文。補修孔2コ。	
	130	B-13-b	"	"	内面に炭化物付着し、補修孔1コ。	
	131	B-14-a	"	"	口唇と内面に炭化物付着。	
	132	A-13-b	"	"	地文はL Rの草筋斜行縦文。	
	133	B-13-b	"	"	胎土に粗い砂粒を含む。地文は結束第一種羽状縦文。補修孔2コ。	
	134	A-13-b	"	"	地文は結束第一種羽状縦文。焼成良好。	
	135	B-13-d	"	"	地文はL R斜行縦文。	
	136	B-14-a	"	"	地文は結束第一種羽状縦文。焼成良好。	
	137	B-13	I-B	C	地文はL R斜行縦文。焼成良好。	
	138	"	"	"	底部。焼成良好。	
	139	"	"	"	内面黒く、焼成良好。	
	140	B-13-d	"	"	胎土に砂粒多い。平縁。	
	141	"	"	"	地文は結束第一種羽状縦文。補修孔1コ。	
	142	B-13	"	"	口唇と内面に炭化物付着。	
	143	A-13-b	"	"	胎土は粗い砂粒を多く含む。地文は結束第一種羽状縦文。	
	144	B-13	"	"	内面に炭化物付着。	
	145	B-13-d	"	"	115と類似する。	
	146	B-13	"	"		
	147	"	"	"	内面に炭化物付着。	
	148	B-14-a	"	"	地文は結束第一種羽状縦文。貼窓あり。色調は赤色。	
	149	B-13	"	"		
	150	A-13-b	"	"	地文は結束第一種羽状縦文。	
	151	B-13	"	"	地文はL R斜行縦文。	
	152	"	"	"	地文はL R斜行縦文。	
	153	A-13-b	"	"	地文は結束第一種羽状縦文。全体が赤色で、焼成良好。	
	154	B-13	"	"	地文はR L斜行縦文。内面は黒色である。	
	155	C-13-c	I-B	A	補修孔1コあり、内面炭化物付着。	
	156	C-13-d	"	"	底部。胎土に粗い砂粒を多く含む。	
	157	"	"	"		
	158	C-13-c	"	"	底部。	
	159	"	"	"	地文は結束第一種羽状縦文。	
	160	A-14-c	"	"		
	161	B-14-c	"	"	地文はL R斜行縦文。補修孔1コ。	
	162	C-13-c	I-B	B	地文は草筋斜行縦文。	
	163	B-13	I-B	II		
	164	B-14-b	"	"	内面に炭化物付着。焼成良好。	
	165	C-14-d	"	"	底部。地文はR L斜行縦文。	
	166	C-13-d	"	"		
	167	B-12	"	"	波状口縁。	
	168	C-14-a	"	"		
	169	B-13	"	"		
	170	B-12	"	"	胎土に粗い砂粒を多く含む。表面の一部に炭化物付着。	
	171	C-14-b	"	"	内面に炭化物付着。	
	172	C-13-b	"	"	小型。	

番号	写真番号	グリット	分類	層位	特 色
	173	B-13	I-B	II	内面に炭化物付着。
	174	C-13-b	"	"	胎土に1~2mm程の砂粒を多く含み、薄い。
	175	C-13-a	"	"	口唇と内面の一部に炭化物付着。
	176	B-13-d	"	"	肥厚帯下縁無文。
	177	B-13	"	"	二対の貼付による小突起がつく。
	178	"	"	"	肥厚帯上に横円状の貼付文がつく。貼付文の中に深い刺突がつく。
	179	A-13-b	"	"	地文は結束第一種羽状綱文。
	180	C-14-b	"	"	細かい砂粒を多く含む。
	181	B-13	"	"	調部。地文はLR斜行綱文。焼成良好。
	182	"	I-B	I	口唇部。同下縁に結条体疣痕。
	183	"	"	"	調部。内面炭化物付着し、焼成良好。
	184	C-13	"	"	補修孔1個。
	185	D-13-a	"	"	地文はLR斜行綱文。胎土に小石を多く含む。
	186	C-13	"	"	調部。地文はRL斜行綱文。補修孔1個。
	187	B-13	"	"	地文は結束第一種羽状綱文。補修孔1個。
	188	C-13	"	"	地文は結束第一種羽状綱文。
	189	B-13	"	"	胎土に粗い砂粒を含む。補修孔1個。
	190	C-13	"	"	地文はRL斜行綱文。
	191	B-13	"	"	口唇に炭化物付着。
	192	B-14-a	I-C	D	地文は結束第一種羽状綱文。補修孔1個。
	193	B-13-a	"	"	地文は結束第一種羽状綱文。口唇部にも地文あり。
	194	"	"	"	地文は結束第一種羽状綱文。焼成良好。
	195	"	"	"	地文は結束第一種羽状綱文。口唇部にも地文あり。焼成良好。
	196	"	"	"	地文はLR斜行綱文。
	197	"	I-C	C	地文は結束第一種羽状綱文。焼成良好。198と同一個体。
	198	A-13-b	"	"	197と同一個体。補修孔1個。
	199	B-14	"	"	地文は結束第一種羽状綱文。内面炭化物付着。
	200	B-13	"	"	地文はLR斜行綱文。焼成良好。
	201	B-13-a	"	"	胎土に砂粒を多く含む。焼成良好。
	202	B-13	"	"	
	203	B-13-a	"	"	地文は結束第一種羽状綱文。内面に炭化物付着し、補修孔1個。
	204	B-13-d	"	"	地文は結束第一種羽状綱文。口唇部にも地文がつく。焼成良好。
	205	B-13-a	"	"	地文はLRの結束第一種斜行綱文。口唇部にも地文がつく。焼成良好。
	206	A-13-b	"	"	地文は新東第一種羽状綱文。口唇部にも地文がつく。207と同一個体。
	207	"	"	"	206と同一個体。
	208	B-13-d	"	"	胎土に2mm程の粗い砂粒を含む。地文は結束第一種羽状綱文。
	209	B-13	"	"	地文は結束第一種羽状綱文。
	210	"	"	"	地文は結束第一種羽状綱文。口唇部にも地文あり。補修孔1個。
	211	A-13-b	"	"	地文は結束第一種羽状綱文。
	212	B-13-a	"	"	地文は結束第一種羽状綱文。
	213	B-13-a	"	"	地文はRL斜行綱文。口唇部は羽状綱文。
	214	"	"	"	地文は結束第一種羽状綱文。内面にも地文がつく。
	215	"	"	"	地文は結束第一種羽状綱文。
	216	"	"	"	地文はRL斜行綱文。
	217	C-14-a	I-C	B	地文は結束第一種羽状綱文。
	218	C-13-d	"	"	地文はLR斜行綱文。
	219	C-13-c	"	"	口縁部、下縁が肥厚する。
	220	C-13-d	"	"	地文はRL斜行綱文。焼成良好。
	221	C-13-c	"	"	地文はRL斜行綱文。222と同一個体。
	222	"	"	"	221と同一個体。

表V-27

標識番号	写真番号	グリット	分類	層位	特	色
	223	C-13-c	I-C	B	内面に炭化物付着。	
	224	#	#	#	口唇部の一部に磨耗した例がある。	
	225	#	#	#	地文はL R斜行縦文。焼成良好。	
	226	#	#	#	地文はL R斜行縦文。	
	227	B-13-b	#	#		
	228	C-14-d	I-C	II	地文はR L斜行縦文。焼成良好。	
	229	C-14-a	#	#	地文はL R斜行縦文。	
	230	B-13	#	#	地文はR L斜行縦文。口唇部に押引きあり。	
	231	C-14-a	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。内面炭化物付着し、焼成良好。232-233と同一個体。	
	232	B-13	#	#	231-233と同一個体。	
	233	C-14-b	#	#	231-232と同一個体。	
	234	C-13-d	#	#	地文はR L斜行縦文。縫隙あり。	
	235	C-12	#	#	口唇の断面四角。	
	236	B-14-a	#	#	口唇、内面に炭化物付着。	
	237	C-13-a	#	#	地文はL R斜行縦文。	
	238	B-13	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。補修孔1コ。	
	239	A-13-b	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。	
	240	B-13	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。	
	241	C-13-d	#	#	地文はR L斜行縦文。胎土に細かい砂粒を多く含む。	
	242	B-13	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。補修孔1コ。	
	243	#	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。	
	244	B-14-a	#	#	胎土に多くの砂粒を含む。地文は結束第一種羽状縦文。	
	245	B-13	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。焼成良好。	
	246	#	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。	
	247	#	#	#	胎土に砂粒を多く含む。地文は結束第一種羽状縦文。	
	248	B-14-a	#	#	結束第一種羽状縦文。	
	249	B-13	#	#	胎土に砂粒を多く含む。地文は結束第一種羽状縦文。焼成良好。	
	250	#	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。	
	251	C-14-d	#	#	地文はL R斜行縦文。口唇部にも地文がつく。	
	252	A-13-b	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。	
	253	C-14-a	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。	
	254	B-13	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。焼成良好。	
	255	B-14-a	#	#	地文はR L斜行縦文。口唇部が外に張り出す。	
	256	C-14-a	#	#	地文はR L斜行縦文。口唇部が外に張り出す。	
	257	A-13-b	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。	
	258	C-13-d	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。	
	259	B-13	I-C	I	地文は結束第一種羽状縦文。	
	260	C-13	#	#		
	261	A-13-b	#	#	地文はR L斜行縦文。補修孔2コ。	
	262	B-13	#	#	口唇部の断面四角形。	
	263	#	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。内面炭化物付着。	
	264	#	#	#	地文はR L斜行縦文。	
	265	C-14-b	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。補修孔1コ。266と同一個体。	
	266	C-14-a	#	#	265と同一個体。	
	267	B-14-a	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。	
	268	B-13	#	#	胎土に砂粒を多く含み、焼成良好。	
	269	#	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。口唇部にも地文がつく。	
	270	#	#	#	胎土に1~2mmの粗い砂粒を含む。	
	271	B-14-b	#	#	地文は結束第一種羽状縦文。	
	272	B-13	#	#	胎土緻密。地文は結束第一種羽状縦文。焼成良好。	

標図番号	写真番号	グリッド	分類	層位	特 色
273	273	B-14-b	I-C	I	内面に炭化物付着。
274	274	B-13	#	#	地文は結束第一種羽状綱文。
275	275	*	#	#	地文は結束第一種羽状綱文。
276	276	B-14-c	#	#	地文は結束第一種羽状綱文。焼成良好。
277	277	B-14-b	#	#	内面に炭化物付着。
278	278	B-13	#	#	胎土に細かい砂粒を多く含む。
279	279	B-14-b	#	#	地文はR L斜行綱文。
280	280	C-13	#	#	地文は羽状綱文。補修孔1コ。
281	281	B-13	#	#	地文は結束第一種羽状綱文。色調は黒い。
282	282	*	#	#	同上。口縁に炭化物付着。
283	283	*	#	#	地文は結束第一種羽状綱文。
284	284	B-13	#	#	地文は結束第一種羽状綱文。口唇に炭化物付着。
285	285	C-14-a	#	#	口唇に地文あり。羽状綱文。
286	286	B-13	#	#	地文はL R単節斜行綱文。
287	287	C-13	I-B	I	底部。胎土に砂粒を多く含む。287~316までは底部。
288	288	A-13-b	#	II	地文はR Lの単節斜行綱文。
289	289	B-13	#	#	地文は結束第一種羽状綱文。
290	290	*	#	#	
291	291	*	#	#	胎土に2~4mmの小石を多く含む。
292	292	*	#	#	
293	293	B-13-c	I-B	D	
294	294	B-13-a	I-B	C	地文はL Rの斜行綱文。
295	295	B-13-b	I-B	D	胎土に1~3mmの小石を多く含む。
296	296	B-13-d	#	#	
297	297	B-13-a	#	#	地文はL Rの斜行綱文。
298	298	*	I-B	#	地文は結束第一種羽状綱文。
299	299	B-13-d	I-B	D	
300	300	B-13	I-C	I	羽状綱文。1~2mmの粗い砂粒を多く含む。
301	301	C-13	#	#	地文は結束第一種羽状綱文。底部少し凹む。
302	302	A-14-c	#	#	底部凹みあり。
303	303	B-13	#	#	地文は結束第一種羽状綱文。
304	304	B-14-b	#	#	地文はR Lの斜行綱文。
305	305	*	#	#	
306	306	B-14-a	I-C	Bレンガ	地文は結束第一種羽状綱文。
307	307	B-13	I-C	II	
308	308	B-14-a	#	#	地文はR Lの斜行綱文。
309	309	B-13	#	#	
310	310	B-14-a	#	#	地文はR Lの斜行綱文。底に木葉痕あり。
311	311	B-13	I-C	C	地文はL Rの斜行綱文。
312	312	B-13-a	#	#	胎土に1~3mmの小石を多く含む。地文はR Lの斜行綱文。焼成良好。
313	313	B-14-d	#	#	地文は結束第一種羽状綱文。底張出し、木葉痕あり。
314	314	B-14-b	#	D	地文はR Lの斜行綱文。
315	315	B-13-a	#	#	胎土にこまかく砂粒多く、焼成良好。
316	316	B-14-b	#	#	地文は結束第一種羽状綱文。底内面に凸みあり。底に地文ある。

表V-29

持因番号	器種名	層序	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
V-60 1	石 錄	D	1.9	0.6	0.2	0.1	Obs.	I A 3	
2	"	II	2.2	0.7	0.3	0.3	"	"	
3	"	D	2.2	0.9	0.3	0.7	"	I A 4	
4	"	I	2.35	1.15	0.3	0.5	"	I A 5	
5	"	"	2.5	1.2	0.25	0.7	"	"	
6	"	D	2.45	1.1	0.2	0.5	"	"	
7	"	I	2.5	1.25	0.35	1.0	"	"	
8	"	"	2.8	1.3	0.4	1.1	"	"	
9	"	"	2.7	1.55	0.3	0.9	"	"	
10	"	"	2.95	1.4	0.25	1.4	"	"	
11	"	D	3.2	1.8	0.5	2.1	"	"	
12	"	"	3.0	1.45	0.5	1.8	Sha.	I A 3	
13	"	C	3.65	1.55	0.7	3.3	Obs.	I A 5	
14	"	I	3.65	1.7	0.4	2.1	"	"	
15	"	D	2.95	1.35	0.4	1.5	"	"	
16	"	"	3.3	(1.3)	0.3	(1.1)	"	"	側縁部破損
17	"	"	(3.35)	1.5	0.35	(1.4)	"	"	基部が焼けている 先端部欠損
18	"	II	3.8	1.55	0.6	2.7	"	"	
19	"	D	3.85	1.6	0.5	2.6	"	"	
20	"	I	4.4	1.5	0.4	2.4	"	"	
21	"	"	4.9	1.5	0.35	2.4	"	"	
22	"	"	(3.8)	1.8	0.4	(2.0)	"	"	基部欠損
23	"	II	4.7	1.3	0.3	2.0	Sha.	I A 3	
24	"	D	4.9	1.4	0.4	3.3	"	"	
25	石 竖先	"	5.6	3.0	0.85	11.1	Obs.	I A 7	
26	"	II	5.15	2.3	0.6	5.1	"	"	
27	"	D	5.85	3.15	0.85	11.6	"	"	
28	"	"	6.4	2.8	0.75	11.3	"	"	
29	"	"	(4.0)	(3.4)	(0.8)	(9.6)	"	"	尖頭部欠損
30	"	I	7.3	3.65	1.1	25.1	"	"	
31	"	D	8.0	3.15	0.9	15.6	"	"	
32	"	"	6.9	3.4	0.2	20.9	"	"	
V-61 33	"	"	3.4	1.95	0.6	3.0	"	"	
34	"	"	(3.6)	2.1	0.7	(3.9)	"	"	先端部欠損
35	"	I	4.15	2.35	0.85	6.0	"	"	
36	"	D	4.5	2.4	0.7	6.9	"	"	
37	"	"	4.85	2.45	0.85	7.7	"	"	
38	"	"	(5.45)	2.9	0.95	(11.3)	"	"	基部欠損
39	"	"	6.35	3.35	0.75	12.6	"	"	
40	"	"	6.7	2.95	0.95	15.2	"	"	
41	"	"	(6.3)	(2.65)	1.05	(17.3)	"	"	尖頭部欠損
42	"	I	7.15	3.85	0.8	15.5	"	"	
43	"	D	8.45	3.05	1.15	25.5	"	"	
44	"	II	3.3	1.8	0.6	(3.5)	"	"	基部欠損
45	"	"	(4.25)	1.8	0.75	(4.1)	"	"	先端部欠損
46	"	D	4.5	1.95	0.7	3.6	"	"	
47	"	"	4.8	2.2	0.75	7.6	"	"	
48	"	C	5.8	2.45	1.1	9.1	"	"	
49	"	I	5.95	2.65	1.05	11.0	"	"	
50	"	D	6.05	2.65	1.05	12.6	"	"	

表 V-30

標本番号	器種名	層序	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
51	石鉗先	II	4.95	2.45	0.65	6.1	Obs.	I A 7	
V-62 52	石槍	D	8.25	3.4	0.95	26.3	Sha.	I A 8	
53	"	I	8.45	2.85	0.8	19.1	"	"	
54	"	D	(6.45)	(4.5)	0.85	(25.2)	"	"	基部欠損
55	"	"	(6.2)	(6.15)	(1.35)	(53.2)	"	"	尖頭部欠損
56	"	"	11.45	4.3	1.25	51.4	Obs.	"	
57	"	II	13.95	3.85	1.25	56.1	Sha.	"	
58	石錐	C	(3.7)	1.1	0.6	(2.9)	"	I B 1	上部欠損
59	"	D	4.0	1.15	0.7	3.5	"	"	
60	"	"	4.15	1.25	0.65	3.7	"	"	
61	"	"	(4.0)	1.43	0.8	(4.8)	"	"	上部欠損
62	"	I	5.1	1.3	0.65	3.7	"	"	
63	"	D	5.0	1.55	0.85	5.6	"	"	
64	"	I	4.95	1.5	0.5	3.3	"	"	
65	"	C	5.75	0.85	0.5	3.1	"	"	
66	"	D	5.85	1.45	0.7	9.8	"	"	
67	"	"	6.5	1.45	0.9	8.0	"	"	
68	"	"	(5.45)	1.5	1.05	(8.6)	Che.	"	先端部欠損
V-63 69	"	A	7.05	1.55	0.75	7.3	Sha.	"	
70	"	II	7.95	1.75	1.0	12.3	"	"	
71	"	A	8.45	1.25	0.7	9.5	"	"	
72	"	II	9.15	1.2	0.7	9.2	"	"	
73	"	D	4.75	1.3	0.65	3.9	"	"	
74	"	"	(4.85)	1.4	0.6	(4.7)	"	"	先端部欠損
75	"	II	6.15	2.25	0.4	8.4	"	I B 3	
76	"	"	6.35	2.35	1.1	8.7	"	"	
77	"	C	5.9	2.4	0.35	5.0	"	"	
78	"	II	5.45	3.5	0.3	7.3	"	"	
79	石匙	A	5.3	2.1	0.65	7.9	"	I C 1	
80	"	II	5.5	2.5	0.55	8.2	Che.	"	
81	"	D	5.9	2.45	0.45	7.4	Sha.	"	
82	"	C	6.75	1.9	0.9	9.4	"	"	
83	"	D	(6.45)	2.35	0.8	(14.1)	"	"	先端部欠損
84	"	II	6.3	2.4	0.75	12.8	"	"	
85	"	"	5.8	2.25	1.05	11.4	"	"	
86	"	C	4.9	3.75	0.45	9.2	"	"	
V-64 87	"	D	6.4	2.1	0.8	8.8	"	"	
88	"	C	7.1	2.05	0.85	13.5	"	"	
89	"	D	7.05	2.0	0.7	11.5	"	"	
90	"	"	7.55	2.2	0.85	15.2	"	"	
91	"	"	7.45	1.9	0.65	10.3	"	"	
92	"	II	7.25	2.35	0.65	9.8	"	"	
93	"	D	7.55	2.7	0.7	11.5	"	"	
94	"	C	7.75	2.35	0.7	12.7	"	"	
95	"	D	7.85	2.5	0.5	11.0	"	"	
96	"	II	8.15	2.1	0.7	13.4	"	"	
97	"	D	8.25	1.95	0.75	10.6	"	"	
98	"	"	(8.75)	2.1	0.85	(18.7)	"	"	先端部欠損
99	"	I	8.15	2.8	0.75	14.0	"	"	
100	"	C	8.35	2.75	1.35	28.7	"	"	

表 V-31

特固番号	器種名	層序	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
101	石匙	D	5.55	2.25	0.75	10.8	Sha.	I C 1	
102	"	"	5.4	2.1	0.5	5.3	"	"	
V-65 103	"	"	5.0	1.65	0.6	5.9	"	"	
104	"	"	6.3	2.45	0.4	7.3	"	"	
105	"	I	6.1	2.2	0.75	11.2	"	"	
106	"	II	5.2	1.95	0.75	8.8	Che.	"	
107	"	D	6.85	1.55	0.93	9.8	Sha.	"	
108	"	"	6.25	2.75	0.55	9.2	"	"	
109	"	V	(9.1)	2.0	0.95	(18.4)	"	"	
110	"	"	8.55	2.3	1.2	23.2	"	"	
111	"	D	6.15	2.3	0.75	12.8	"	"	
112	"	"	6.7	2.2	1.1	18.3	Che.	"	
113	"	I	8.35	1.8	0.85	16.2	Sha.	"	
114	"	D	8.35	2.4	0.65	11.4	"	"	
115	"	"	5.55	1.6	0.65	6.6	"	"	
116	"	"	5.6	1.8	0.7	6.7	"	"	
117	"	I	6.0	2.3	0.75	10.2	"	"	
118	"	D	6.4	3.2	0.35	9.1	"	"	
V-66 119	"	A	5.8	2.35	0.85	11.2	"	"	
120	"	D	6.45	2.85	1.05	24.0	Che.	"	
121	"	"	10.3	3.65	0.95	34.2	Sha.	"	
122	"	II	7.65	2.35	0.7	16.3	"	"	
123	"	I	8.5	2.75	0.9	21.3	"	"	
124	ナイフ	"	6.0	2.95	1.1	15.8	"	I C 3	
125	"	D	8.7	3.9	1.25	44.0	"	"	
126	"	"	7.0	4.35	1.35	41.6	"	"	
127	"	"	7.75	6.05	1.65	62.5	Obs.	"	
128	"	C	7.25	1.85	0.5	7.2	Sha.	"	
V-67 129	"	D	3.9	1.3	0.6	2.4	Obs.	"	
130	"	"	4.4	2.0	0.45	4.0	Sha.	"	
131	"	"	4.7	1.8	0.45	4.1	Obs.	"	
132	"	A	4.85	2.8	0.6	9.7	Che.	"	
133	"	D	6.7	2.0	0.7	9.8	Sha.	"	
134	"	"	8.05	1.5	0.65	8.0	Obs.	"	
135	"	"	11.9	3.6	1.05	55.4	Sha.	"	
136	搔器	"	2.3	2.45	0.7	4.5	Obs.	I D 1	
137	"	I	2.65	2.3	0.65	3.4	"	"	
138	"	II	1.95	2.65	1.05	4.6	"	"	
139	"	I	2.14	2.5	1.25	7.3	"	"	
140	"	II	3.0	2.65	0.7	5.4	"	"	
141	"	D	3.55	3.3	1.7	14.4	"	"	
142	"	"	2.6	2.55	1.05	6.0	"	"	
143	"	A	2.95	2.45	0.8	6.3	"	"	
144	"	II	3.25	2.5	0.55	5.0	Sha.	"	
145	"	D	3.6	2.9	1.6	14.7	Obs.	"	
146	"	II	3.9	2.6	1.2	11.1	"	"	
147	"	D	3.25	2.95	1.25	11.0	"	"	
148	"	C	3.5	2.5	0.55	3.8	"	"	
149	"	II	2.7	2.8	0.75	7.1	"	"	
V-68 150	"	D	3.65	3.4	1.7	16.4	"	"	

表 V-32

持回番号	器種名	層序	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
V-68 151	搔 器	A	4.4	3.15	1.15	14.9	Obs.	I D 1	
152	"	D	5.25	4.1	1.8	32.7	Sha.	"	
153	"	"	4.5	3.05	1.85	21.7	Obs.	I D 2	
154	"	"	5.5	3.1	1.0	15.6	Sha.	"	
155	"	C	5.15	3.4	0.7	14.0	"	"	
156	"	A	6.15	3.6	1.95	43.5	Obs.	"	
157	"	D	7.1	3.8	1.05	32.4	Sha.	"	
158	"	I	7.0	3.6	1.25	31.8	"	"	
159	削 器	D	7.35	3.65	0.95	28.5	"	I D 3	
160	"	I	(6.1)	3.55	1.05	(22.1)	"	"	上部欠損
161	"	II	7.1	2.8	1.3	24.4	"	"	
162	"	D	5.0	2.5	0.85	12.2	"	"	
163	"	"	7.6	2.05	0.75	13.6	"	"	
164	"	"	7.55	2.85	1.2	21.4	"	"	
165	"	"	5.75	1.5	0.55	5.3	"	"	
V-69 166	"	"	6.35	2.5	0.65	11.1	"	"	
167	"	"	7.9	3.75	0.9	28.8	"	"	
168	"	"	9.1	3.95	1.55	69.3	"	"	
169	"	C	8.85	3.95	1.2	37.2	"	"	
170	"	II	7.45	3.0	0.8	21.0	"	"	
171	"	C	8.65	4.35	1.15	38.2	"	"	
172	"	"	(8.65)	(3.05)	0.75	(21.0)	"	"	上部欠損
173	"	D	8.85	2.45	0.9	17.0	"	"	
174	"	I	5.45	4.95	1.0	41.8	"	"	
175	搔 器	C	6.85	5.7	0.6	27.5	"	I D 2	
176	"	"	5.7	5.45	1.65	65.8	"	"	
V-70 177	石 斧	I	(18.5)	5.6	1.9	(330.0)	Sch.	II A 1	
178	"	D	14.7	5.6	2.9	390.0	Gr. Mud.	II A 2	
179	"	"	9.6	4.4	1.7	128.8	"	II A 3	
180	"	"	13.0	4.1	1.0	91.5	Sch.	II A 4	
181	"	"	(10.8)	4.8	1.4	116.9	Gr. Mud.	II A 3	焼けている
182	"	VI	10.7	4.1	1.6	116.0	"	"	B-13Ⅱ層、B-14-aⅡ層、 D-6-dⅡ層の接合
V-71 183	"	"	(8.0)	3.7	1.2	(62.0)	"	"	基部欠損
184	"	"	6.9	2.9	0.8	24.6	"	"	
185	"	II	5.9	2.6	0.9	20.9	"	"	
186	"	"	9.2	4.0	1.2	73.8	"	"	
187	"	I	8.7	1.7	0.8	17.2	"	II A 5	
188	"	D	10.3	2.6	1.0	47.0	Sch.	"	
189	"	I	6.2	(1.9)	0.9	(13.8)	Gr. Mud.	"	刃部欠損
190	たたき石	C	8.3	4.5	4.3	210.0	And.	II B 2	
191	砥 石	D	(7.7)	(7.6)	1.2	(91.0)	Sa.	II D 5	下部欠損
192	"	"	(7.6)	(8.5)	1.1	(73.6)	"	"	
V-72 193	"	"	11.2	3.5	1.1	38.2	"	II D 1	
194	石 鋸	"	(12.5)	(8.9)	0.6	(105.2)	"	II D 4	
195	"	"	14.0	8.6	1.2	175.6	"	"	
196	砥 石	I	21.1	11.1	0.9	300.0	"	II D 1	
197	石 鋸	D	(21.3)	(8.3)	2.0	(230.0)	"	II D 4	
V-73 198	砥 石	"	32.0	(14.4)	7.3	(4000.0)	And.	II D 1	
199	石 盆	I	27.2	21.7	8.8	7000.0	"	II E 1	
V-74 200	砥 石	D	19.5	16.8	5.8	1540.0	Sa.	II D 1	

表V-33

持因番号	器種名	層序	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
V-74 201	石錐	D	8.1	7.1	2.8	224.0	And.	II F 1	
202	"	I	8.5	7.1	2.6	196.3	"	"	
203	"	"	4.9	3.3	1.1	27.6	"	"	
204	"	"	4.1	3.8	1.0	16.7	Mud.	"	
205	"	"	3.4	2.7	0.9	11.2	And.	"	
206	"	II	3.9	3.9	0.9	17.7	Mud.	"	
207	"	I	5.3	4.4	1.7	59.0	And.	"	
208	"	C	7.5	6.1	1.9	112.1	Cong.	"	
209	"	D	9.0	6.4	2.0	170.4	And.	"	
210	"	"	7.8	4.7	2.0	96.5	Che.	"	
V-75 211	"	"	8.3	6.8	2.8	211.0	Cong.	"	
212	"	"	9.4	5.9	2.2	182.0	And.	"	
213	"	"	8.2	7.4	1.7	129.8	"	"	
214	"	"	10.7	10.4	3.3	580.0	"	"	
215	"	"	9.8	7.4	1.6	130.6	"	"	
216	"	I	(5.3)	8.9	2.4	(156.5)	"	"	
217	"	D	11.9	9.3	3.7	485.0	Cong.	"	半分欠損
218	石核	"	7.15	6.95	3.85	270.0	Sha.	III	
V-76 219	石錐	"	17.0	14.6	6.7	2370.0	And.	II F 2	
220	石核	"	1.85	2.95	1.9	10.6	Obs.	III	
221	"	"	6.85	9.1	3.45	200.0	Sha.	"	
222	骨製品	II	3.6	1.95	1.3	4.5			弓答状骨製品?
223	"	D	3.6	0.75	0.65	1.6			
224	垂飾品	"	2.5	1.9	0.5	0.6		IV C	ホホジロザメ上顎骨一 歯か二歯、穿孔あり。

礫・石錐集中区

名 称	分 類	数 量	名 称	分 類	数 量
土 器	I-B	193	石 锥	II F	50
"	I-C	1291			

持因番号	写真番号	グリット	分 類	層位	特 色
1	1 A-7-c	I-C	II		側部と底部が張り出す。
2	2 A-7-d	"	"		大型の突起をもつ。
3	3 A-7-c	I-B	II		粘土に多量の砂粒を含む。貼付文間に円形刺文。
4	4 A-8	I-C	II		粘土に多量の砂粒を含む。地文は R L斜行縦文で口唇に炭化物付着し焼成は良い。
5	5 A-8	"	"		4と同一個体。
6	6 A-7-d	"	"		粘土にこまかに砂粒を多量に含む。地文は R L斜行縦文で口唇に炭化物付着し焼成は良い。
7	7 A-8	"	"		粘土に砂粒を多く含む。結束第一種羽状縦文で口縁に炭化物付着し焼成は良い。
8	8 A-8	"	"		粘土に多量の砂粒を含む。結束第一種羽状縦文で内面に炭化物付着している。焼成は良い。
9	9 A-7-d	"	"		地文は結束第一種羽状縦文で焼成は良好。
10	10 A-7-c	"	"		底部。粗い砂粒を多く含む。
11	11 A-7-c	"	"		底部。地文は R L斜行縦文。焼成良好。

表V-34

特因番号	器種名	形序	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
V-80	石錐	II	5.5	3.1	1.0	17.8	And.	II F 1	
	"	"	5.6	4.5	1.7	50.6	Ser.	"	
	"	"	5.4	4.6	1.2	37.6	And.	"	
	"	"	5.8	5.0	1.2	43.9	Cong.	"	
	"	I	6.0	5.7	1.4	55.6	"	"	
	"	II	6.4	5.4	1.4	67.6	And.	"	
	"	"	6.2	5.7	1.8	72.6	"	"	
	"	I	(4.6)	6.8	2.1	(78.5)	"	"	
	"	II	6.5	6.0	1.9	105.8	"	"	
	"	"	6.4	5.8	2.0	89.6	"	"	
	"	"	7.3	7.1	1.7	115.2	"	"	
	"	"	6.4	6.0	2.0	98.9	"	"	
	"	"	6.4	6.5	2.2	106.0	"	"	
	"	"	7.3	5.6	1.9	111.2	"	"	
V-81	"	I	6.6	4.4	1.5	57.4	"	"	
	"	II	7.2	4.7	1.5	73.7	"	"	
	"	"	7.8	3.8	2.1	64.7	Dia. Mud.	"	
	"	"	7.6	5.7	2.5	145.1	Cong.	"	
	"	"	7.4	5.7	1.8	109.8	Mud.	"	
	"	"	7.3	5.9	1.7	96.8	And.	"	
	"	"	6.8	7.0	1.8	119.5	Cong.	"	
	"	"	7.9	6.5	2.5	183.0	And.	"	
	"	"	7.7	7.0	2.8	208.0	"	"	
	"	"	6.8	6.6	1.7	92.6	"	"	
	"	"	7.3	7.2	2.4	188.2	Cong.	"	
	"	"	9.1	5.1	2.4	145.1	And.	"	
V-82	"	"	8.3	6.4	2.7	210.0	Cong.	"	
	"	"	8.2	6.5	2.1	125.7	And.	"	
	"	I	8.2	5.7	2.1	140.8	"	"	
	"	II	8.1	7.3	1.6	114.8	Cong.	"	
	"	"	7.6	6.8	2.8	201.0	And.	"	
	"	"	8.0	7.0	1.8	138.4	Cong.	"	
	"	I	8.6	6.5	2.4	138.8	And.	"	
	"	II	8.2	6.9	1.6	83.3	Cong.	"	
	"	"	8.6	8.5	2.8	252.0	And.	"	
	"	"	9.2	7.4	2.0	174.2	"	"	
V-83	"	"	9.8	7.7	3.1	352.0	"	"	
	"	"	10.7	7.2	2.3	261.0	"	"	
	"	"	10.4	8.6	2.5	318.0	Cong.	"	
	"	"	9.9	8.9	1.9	196.5	"	"	
	"	"	9.4	8.4	3.3	389.0	And.	"	
	"	"	10.0	8.3	2.5	325.0	"	"	
	"	"	9.3	8.0	2.5	258.0	"	"	
	"	"	8.9	6.9	2.2	156.4	Mud.	"	
V-84	"	"	(10.6)	(6.4)	2.4	(188.9)	And.	"	
	"	"	9.7	6.1	2.6	210.0	Cong.	"	
	"	"	10.3	7.1	2.2	195.6	"	"	
	"	"	11.7	8.3	(3.6)	(401.0)	"	"	
	"	"	18.5	14.3	3.9	1081.0	Mud.	II F 2	
	"	"	4.8	8.0	1.9	28.2	Pum.	II F 3	

3 包含層出土の遺物

1 土器・土製品

I群・II群の土器が計8,102点出土している。このうちI群土器はA類が122点、B類が2,128点、C類が5,737点出土した。II群土器は115点出土したのみである。他にI群土器に伴うと思われる土製品が1点出土した。

I群土器・土製品

A類-1(図V-85:1~5、写真図版V-84:1・V-86:9~15)：押型文土器である。胎土は砂粒を多く含み、器表がすべて文様が剥落しているものがほとんどである。口縁部はゆるやかな波状を呈するもの(図1~3)と平縁(図4)がある。図1は口縁部が肥厚し、胴部はややふくらむ。文様は矢羽根文が表・裏面ともに施される。図2は口縁部上下の貼付文をつなぐ縦の貼付文が施される。文様は器面の一部に矢羽根文が残る。図3は裏面に矢羽根文、図4は裏面に格子目文が施されるものである。図5は底部破片。平底である。

B類-2(写真図版V-87:16)：円筒土器上層C式土器に相当するものである。胴部は貼付文が平行に施され、その区画内には半截竹管による刺突文がつく。

B類-3(図V-85:6、写真図版V-84:2・V-87:17~20)：円筒土器上層C・D式に相当するものである。口縁部には楕円状・鋸歯状の貼付文がみられる。図6、写2は口縁下部に、はり瘤が施されたものである。

C類-1(図V-85:7、写真図版V-84:3・V-87:21~25)：いわゆる天神山式土器に相当するものである。地文は結束羽状繩文が多い。口縁部下位から垂下する貼付文をもつもの(図7、写3・21~23)と、貼付文をもたないもの(写24~25)がある。写3は一括出土したものである。このうち図7、写3の右は6コの小突起をもち、その下から胴部下半まで貼付文が垂下する。器形は円筒形を呈す。写22~33は同一個体と思われるもので、口縁部に把手をもつ。

C類-2(図V-85:8、写真図版V-85:4・V-87:25~27)：2本単位の沈線が多い。図8、写4・5は口縁部に沈線をもつもの。このうち図8、写4は口縁部下縁が肥厚するもので、口縁部・頸部が無文になる。写27の沈線は下縁から縦に施されている。

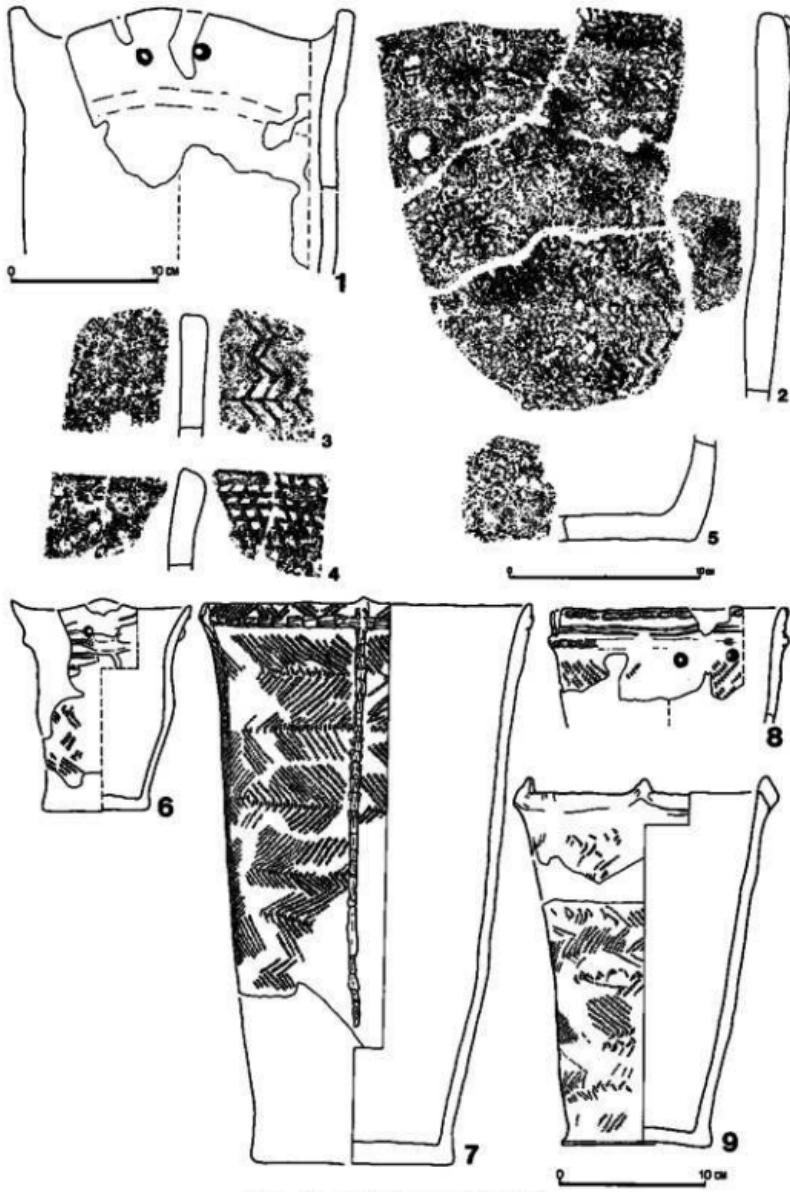
C類-3(図V-85:9・V-86:10~11、写真図版V-85:5~7・V-87:28~35)：鷹栖町嵐山遺跡のF類に相当する。地文は結束羽状繩文が多い。

イ(図V-85:9・V-86:10)：図9・10、写5・6は突起をもつものである。

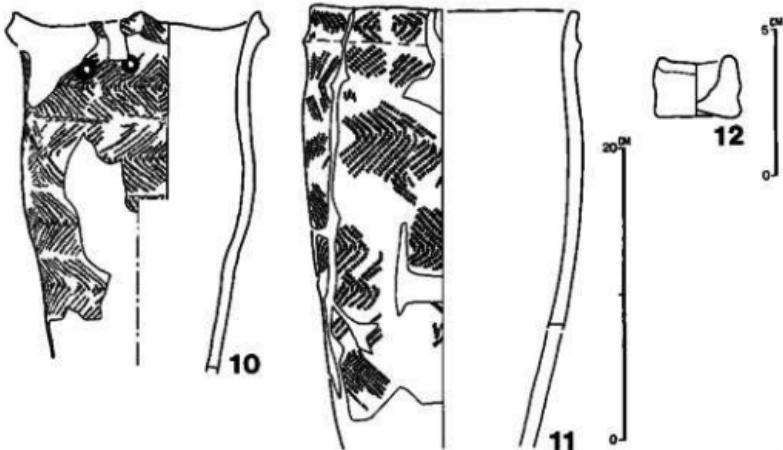
ロ(図V-85:11、写真図版V-85:7・V-87:29~31~35)：図11写7は口縁部下縁に貼付帶をもつもので、口縁の断面は中央部が凹む。写34~35は同一個体と思われるもので、口縁裏面に繩文が施されたものである。

底部破片(写真図版V-87:36~40)：写36は結束羽状繩文が施されたもの。写37~38は中央部に凸部をもつ。

土製品(図V-86:12、写真図版V-85:8)：手づくねと思われるコップ状のものである。



図V-85 包含層出土のI群土器(1)



図V-86 包含層出土のI群土器(2)

(佐藤 和雄)

用途は不明である。

II群土器

包含層出土のII群土器は、H-1と廐棄場跡の周辺から出土し、その他の区域ではほとんど見られない(図V-90)。出土土器のうちで復元できた土器は9個体で3つの遺跡のなかでは最も多い。このうち3は、H-1上面の壁外周で出土してきたものであること、さらにその施文方法等においてH-1の1と共に通していることから考えるとH-1上面出土の土器群ととらえた方がよいのかもしれない。廐棄場跡周辺の復元土器は2個体でいずれもII群C類土器である。

H-1上面住戸跡の周辺出土のII群土器 (図V-87: 1~16, 図版V-88-89)

II群A類土器 (3, 8~15)

3は、深鉢で底部は平底である。地文に複節の斜行縄文(原体はR $\{ \frac{1}{2} \}$)が施される稀有な例である。胴部上半から口縁部にかけてほぼ直立する口唇の形態は丸味をもち、その口唇上から口縁にかけて複節の縄文を施文した後にその口縁部の縄文を磨り消した後に7条の横走沈線を等間隔にめぐらせている。沈線の溝底はU字状をなし深い。口唇直下に内から突いた突瘤がめぐる。瘤の頂部は削落している。8は、内切した口唇をもち口縁部が内反する。口唇直下に外から突いた突瘤がめぐる。地文は、無文と思われる口縁部から胴部上半にかけて、3条1単位の横走沈線が間隔を置いて2段施文される。沈線は鋭い。16は、沈線によって工字状の文様を作り出そうとしたものと思われる。14は、平行沈線間に列点文を充填させている。なお、これらの土器は、H-1上面住戸跡出土の土器と関連があるので、参考のためH-1出土の土器(図V-87のH-1・1~3)の特徴について詳述する。

H-1・1は、深鉢形土器である。口縁は小波状口縁をなし、胴部上半から頸部にかけやや内反気味となり口頸部にきわめて浅いくびれをもち、ゆるく外反する丈の短い口縁部に達なる。

口縁部には斜めの短刻線が連続してめぐる。波状口縁は切り出し技法によって作り出されている。縁部に内から突いた突瘤がめぐる。胴部上半から頸部にかけて幅の広い無文地を設け、そこに変形工字文を描いている。なお、無文地の下端は、一部縄文を磨り消している。変形工字文は、文様帯の上、下端を2条の平行沈線で区画したうえで、斜線と反転部によっていわゆる工字文を描いている。更に工字文の中にその沈線区画の上線に沿って1条の弧線・下線に沿って列点文を充填する。なお、弧線は工字文を描いた沈線とは異なり、鋭い刻線である。工字文あるいは平行沈線文を描く沈線は溝底がU字状をなし深い。地文の縄文はRL縦走縄文が施される。

H-1・2は、短頸壺に近い器形をもつて底部は欠損している。3遺跡の中では唯一のものである。頸部は、くの字に屈曲し口縁は外側に開く、肩部は強く張り、胴部下半になるに従いすぼまる。口唇は、内切するが外縁は刺突文がめぐらされて丸味をなす。地文は、RL縦走縄文が施される。

H-1・3は、ミニチュア土器で、口縁と頸部の屈折はなくほぼ直立し、肩部は、くの字に張り出し、胴部上半から下半にかけて垂下し底部に至る。底部の角はやや張り出す。口唇直下に列点文、頸部下半に2条の刻線、肩部の屈曲部に1条の刻線が平行してめぐる。

Ⅱ群B類土器（1～2、4～7、9～15）

小形の鉢形土器がほとんどと思われる。1・6・7のように、頸部に明瞭な屈曲部をもつ例、浅いくびれをもつもの（8・9・10・11）さらに口縁部がやや外反するもの（4）、やや内反する（2）等がある。1は、肩部が張り出し胴部上半から口縁部にかけてゆるやかに内反し、底部は心持ち上底気味である。地文はLR横走縄文が施文される。口唇は、丸味をもち口唇上に縄文が施文される。突瘤文はない。6は、口頸の屈曲部に絡条体による圧痕文がそれより下半には捺条文が施文される特異なものである。口唇は平坦で外縁に細い刻みをもつ。底部はやや上底気味である。7は弧状のくびれをもち肩部は鋭く張り出す。頸部は無文地をなし、そこに3条、肩部に1条の一段燃りR原体による側面圧痕がめぐる。口唇はやや平坦でその上に縄文が施され、口唇外縁には刻みが連続してつけられる。貫通孔が左右対象面に一個づつ設けられる。器面の内外に黒光りする炭化物が付着する。土器の大きさに比べると器厚は厚い。4は、平坦な口縁をもち、口縁上4つの山形状の小突起が貼付けられる例と思われる。突起の頂部に刻みを設けている。口唇上にも縄文が施文される。口縁部の丈は短く外側に折れ曲がる。口唇直下に内側から突いた突瘤文がめぐる。地文は、RL斜行縄文が施される。2は、いびつな器形をなし、団左側では胴部がくぼみ右側ではふくらむ、器面は凹凸が著しい。口唇は、やや丸味をもつ。地文は無文である。

Ⅱ群C類土器（5、15）

いずれも鉢形土器と思われる。5は、胴部上半から頸部下端にかけては内反し頸部から口縁にかけては外反する。口縁部と頸部あるいは頸部と肩部の屈折は明瞭ではない。2条1単位とした縄線を頸部上端と下端に設け、その空間に短い斜縄線を充填させたうえで文様帯の中央に

1本の縄線を施文している。突瘤はない。口唇はやや尖がり気味で口唇上には2条の短い縄線が施文される。

廃棄場跡周辺出土の土器（図V-87：17~44、図版V-89）

Ⅱ群B類土器とC類土器が出土しているが、C類土器の方が多く出土する。Ⅰ群A組土器は出土していない。

Ⅱ群B類土器（19~22）

深鉢（19）と鉢（20~22）が出土する。いずれも口縁直下に貫通孔あるいは突瘤文がめぐる。

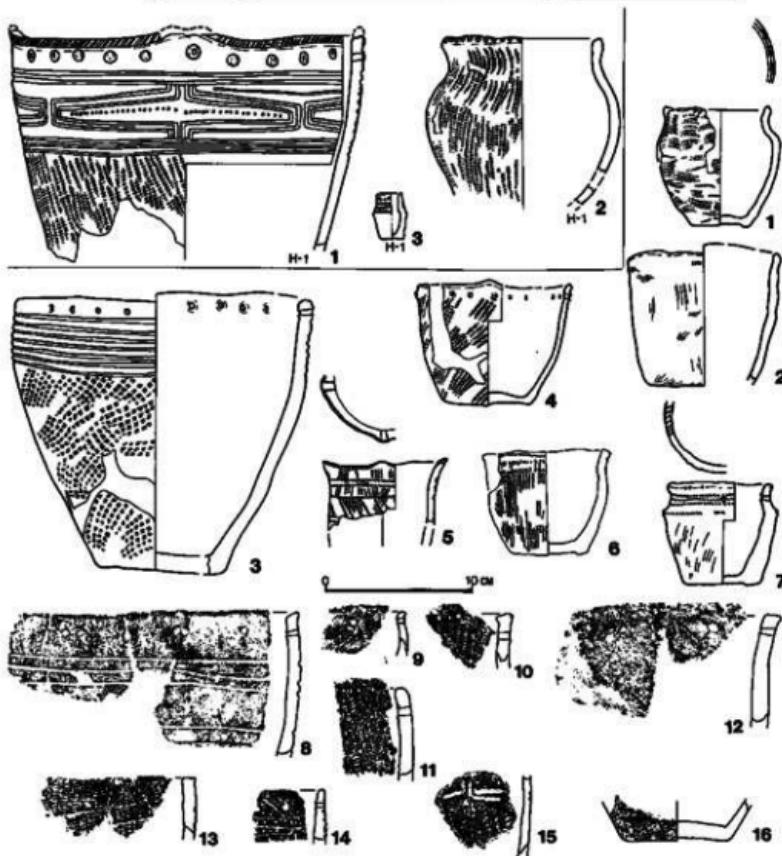
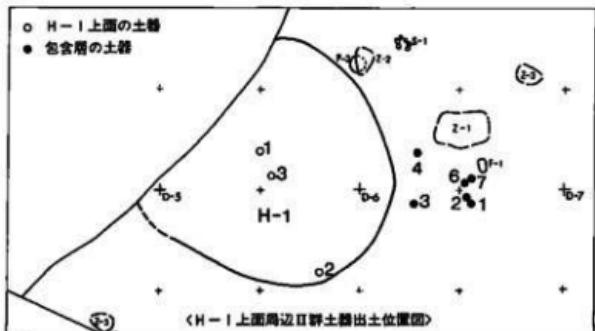
深鉢19は、胴部はふくらみをもち、頭部はほぼ直立するが口縁部では心持ち外反する。口唇はやや丸味をもち、その面にRLの縄文が施される。地文も、RL斜行縄文が施文される。20、21の口唇面は指頭によって磨きを加えられる。いずれもRL斜行縄文が施される。22は、口唇に縄文が施される。

Ⅱ群C類土器（17、18、23~44）

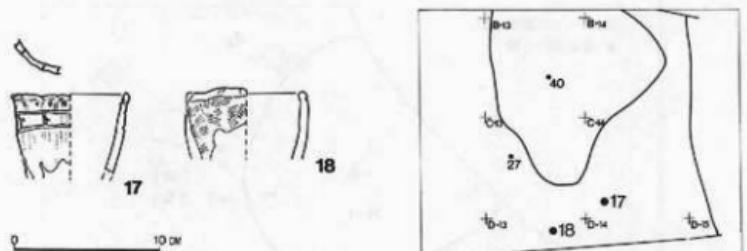
深鉢が大部分である。41を除き他はすべて突瘤あるいは貫通孔が口縁部にめぐる。これらは17以外すべて内側から突いて作られたものである。さらに口唇面には刻みをもつ例が多い。地文は、RL縱走縄文が施される例が大半を占める。口唇の形態は、断面観が尖がる傾向をもっている。これらには、突瘤あるいは貫通孔だけのものと平行沈線を組み合せる例がある。前者には、35のように口縁部と頭部と肩部が分化する例はない。口縁部がやや内反する例が多い。内反するものは鉢形に近い器形をもつかもしれない。27のように稀に頭部にくびれをもつものがある。後者には、31のように3本の横走沈線の間に2本単位の斜めの短沈線を上下段交互に施し、さらにそれに接する形で鋸歯状の文様を2本の沈線で描いている。17は、小形の鉢で頭部に2本の横走沈線の間に縦の短沈線を垂下させ、格子状の文様を作り出したものである。口縁部に外から突いた狭い貫通孔が見られる。色調は黒褐色をなし無文である。41は、2本の横走沈線に接するように波頭の鋭い波状沈線を描いている。34は、無文地に数条の横走沈線をめぐらせ、最上段の沈線に直交する形で端縄压痕がつくられる。37も、胴部には横に数段連続して端縄压痕を施文する。42と43は、頭部に沈線をもつ例で突瘤は施文されない。14の穴は補修孔と思われる。42と43はいずれも口唇に縄文原体による压痕と口縁の内面にLRの縄文が施される。両者は多分同一個体と思われる。15は、一段燃りの縄文原体による側面压痕が2条施文される。口唇は平坦でやや内反気味の口縁部をもつ地文は、RLの縱走縄文である。

縄線文をもつ例（18、39、40）は少ない。18は、小形の鉢で口縁部は内反し、口唇はやや丸味をもつ口縁部に1条の縄線がめぐる。地文は燃糸文と思われる。39は、無文地の頭部に3条の縄線が、40は口縁部が無文地で胴部上半からRL斜行縄文が施され、その縄文のあるところに2条の縄線がめぐる。前者は一段燃り、後者は二段燃りの縄文原体による側面压痕である。以上の土器の底部は、44のように丸底気味になるのかもしれない。

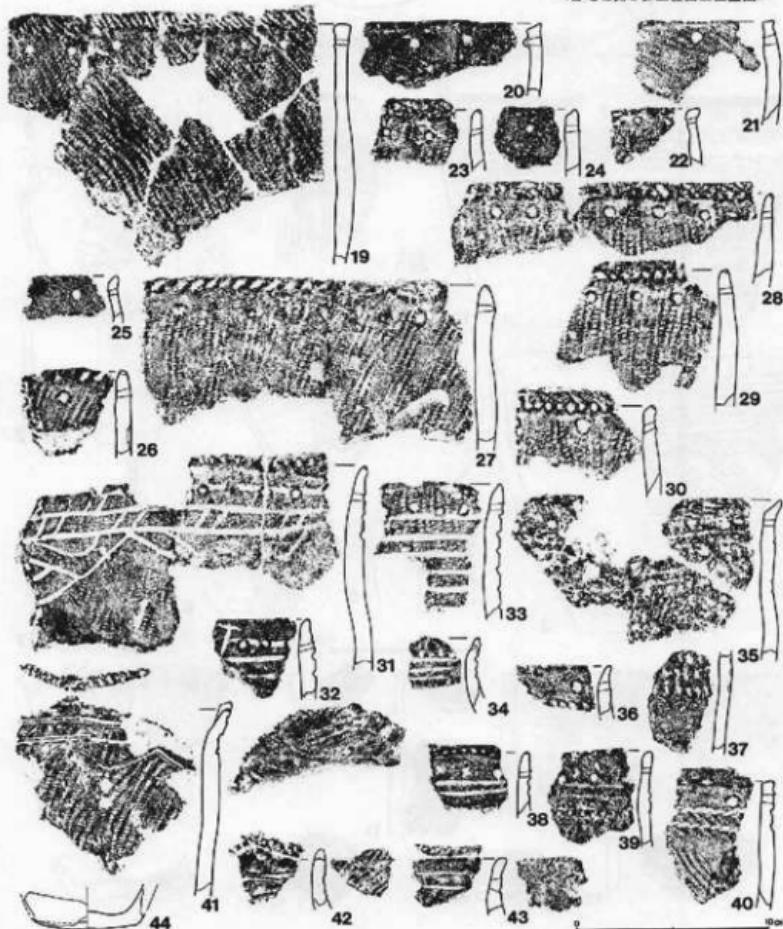
(種市 幸生)



図V-87 包含層出土のⅡ群土器(1)



〈台地北側Ⅱ群土器出土位置図〉

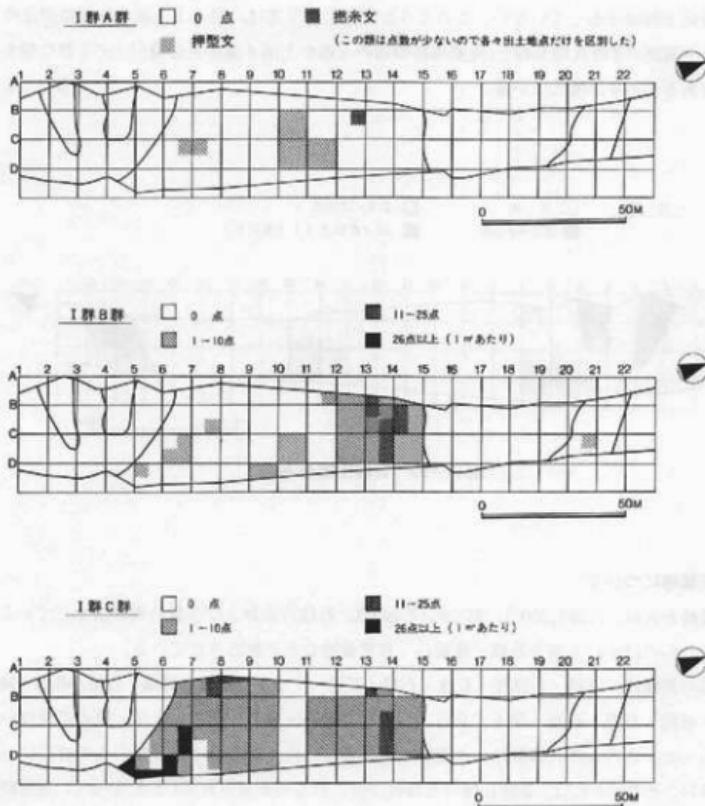


図V-88 包含層出土のⅡ群土器(2)

ii I・II群土器の分布について

a I群土器の分布

B類、C類の土器は遺構の分布と同様の傾向を示す。すなわち、B類の土器は廃棄場跡、C類の土器はH-1の揚土から多く出土した。例外的な傾向を示すのはA類の押型文土器である。台地の中央部でまとまった分布を示すが、遺構は検出されない。
(佐藤 和雄)

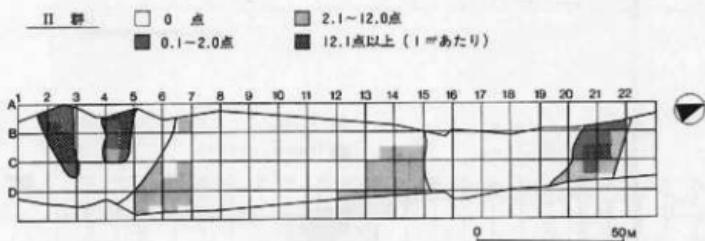


図V-89 I群土器分布図

b II群土器の分布

上泊3遺跡は、調査のあらまし、小括で述べているように縄文時代中期に主に形成されたものである。中期以降は、台地を利用した痕跡はなく、統縄文時代初頭になって再びH-1のくぼみあるいは廃棄場跡の周辺を生活の場に活用している。H-1の上面の住居跡からはII群A類土器(メクマ式土器に相当する)の深鉢等が、住居跡の周辺からはII群B類土器の鉢が出土する。後者にはII群C類土器も少量分布する。一方、その地点から約70m離れた廃棄場跡ではII群B類土器とC類土器が混在して分布するが、主体はII群C類土器である。復元できた個体は少なく、前者はひとつもなく、後者は小形の鉢が2個である。H-1と廃棄場跡の中間地帯には、全く統縄文式土器は分布していない。このような分布のあり方は、H-1上面の住居跡出土の土器が東上泊遺跡のII群A類土器と、廃棄場跡周辺の土器が上泊4遺跡包含層出土のII群C類土器と関連があることを示唆している。

(種市 幸生)



図V-90 II群土器分布図

III 石器等について

本遺跡からは、石器3,200点、剥片約47,000点、石核77点および多量の礫が出土している。また、これらの中にも装身具類・骨製品・自然遺物などが検出されている。

石器の器種は、石鎌・石鋸先・石槍・石錐・石匙・ナイフ・搔器・削器・石斧・敲石・擦石・砥石・石鋸・石皿・石錐・浮子である。しかし、敲石・擦石・石皿などは、極めて少ないと見られる。これらの石器群は、本遺跡で主体となったI群BおよびC類の土器群に伴ったものが多い。そのほかには、II群B類の土器群に伴ったものが見られる。したがって、本遺跡から出土した石器群は、縄文時代中期および統縄文時代前期のものといえよう。

なお、ここで図示する石器群の計測値等は、東上泊遺跡同様に一覧表としてまとめた。

以下、分類順に記述する。

ポイント（図V-91~94：1~85、図版V-92~93）

I A 1：破片を含め9点出土しており、そのうちの7点を図示した。1~6・13が該当する。これらの三角形鑿は、さらに基底部が平坦なもの（1~3）、内湾するもの（4~6・13）に分けることができる。石質は全例、黒曜石である。

I A 4：14・15の2点が該当する。14は、腹面に素材面を残した断面三角形の石鑿である。15は、両面加工の石鑿で、入念に二次加工が施されている。基部は、若干狭長になる。どちらも形態上、本型式に含まれるが、基部が抉れて狭長になるため、I A 5との差は明瞭ではない。

I A 5：破片を含め100点出土している。そのうち、図示したものは、40点である（7~12・16~49）。形態的には、尖頭部・基部・逆刺などの違いにより細分は可能であるが、基本的には、大きく変わることがない。また、この中で19・25・28・31・33・35・36・38・40~47・49は、B-10区およびC-10区で集中して検出されたものであるが、やはりこれらも前述のものと同一時期と考えられる。これらの石鑿は、規格上、長さ1.7~5.7cmまで続くが、標準的なものは2.0~4.0cmとなり、74%を占める。幅においては、1.0~2.0cm、厚さにおいても0.3~0.6cmまで、まとまった形で連続的に続く。また、重量も1.0~4.0gまで、減少しつつも連続的に続き、1.0~3.0gの間に集中する。石質は全例、黒曜石である。

I A 7：破片を含め、246点出土している。図示したものは、50~77の28点である。これらは基部の形態から、基底部が平坦かそれに近いもの（53~67）、狭長になるもの（50~52・68~77）に分けられる。55は、両面加工の石鑿先で、先端部は鋭利に調整されている。逆刺は、明瞭ではないが、背面の両側縁は刺離が一段低くなる。腹面は、細かな刺離がなく、細長い刺離が右側縁上部から左側縁下部に向けてつく。59は、背面全体に入念な二次加工が施され、腹面は先端部と基部周辺のみ加工され、素材面を残す。基部は、断面がカマボコ型となり、尖頭部の大きさのわりには細長くなる。62は、背面右側の逆刺を破損しており、再加工が施されている。腹面は、平坦である。64は、先端部のみを入念に加工した石鑿先で、かなり鋭利に調整されている。腹面は、平坦である。65は、背面中央の長軸方向に稜を持ち、断面が三角形となる石鑿先である。基部は、細身で基底に向け、次第に薄くなる。67は、両面加工の偏平な石鑿先である。先端部は欠損しているが、長さは8.7cmと一番長い。69は、腹面に素材面を残し、基部が尖頭状になる。基部断面は、尖頭部と比較して肉厚であるが、腹面は平坦になる。72は、両面とも基部および周辺を加工したもので、素材面を大きく残す。77は、両面に入念な加工を施したもので、逆刺は弱い。断面は、レンズ状になる。石質は、黒曜石と頁岩だけである。

I A 8：78~85が該当する。形態は、柳葉形のもの（78~79）、基部がすぼまり、基底部が平坦かそれに近くなるもの（80~84）に分けられる。83は、長さ5.3cm、幅2.2cm、厚さ0.8cm、重量8.4gの最小のものである。85は、B-9区より出土した石器片を接合したものである。現存する長さは16.0cmで、今回出土した黒曜石製の剥片石器の中では一番長い。出土状態は、Ⅲ層中より散布状態で検出されているため、明確ではない。しかし、これらの石器片は、全て熱破碎によるもので、フィッシャーは内部から外部に向けて広がる。ただし、石器表面を見る限りにおいて

ては、熱を受けた痕跡が明瞭ではない。石器片の形態は、全て長軸から両側縁に向けて、楔状に割れている。また、このほかにも同様の石器片が2・3個体分程出土しており、中には側縁部が棒状になったものや亀甲形の破片もある（図版V-93）。

石錐（図V-95:86~89、図版V-93）

I B 1 : 88・89の2点を図示した。88は、先端部に向けて狭長になる両面加工の棒状石錐である。89は、背面と腹面の左側縁部に二次加工が施され、断面は三角形となる。石質は、88が頁岩、89がメノウである。

I B 3 : 86・87が該当する。86は、刺片の刺突部周辺に入念な加工が施されたメノウ製の石錐である。87もメノウ製の石錐で、二次加工は腹面の両側縁から先端部にかけて施される。

ナイフ（図V-95・96:90~109、図版V-93・94）

I C 1 : 34点出土したうち、12点を図示した。このうち、両面加工の石匙は98の1点のみである。また、片面加工であっても、腹面つまみ部に加工が施されるもの（93・96・97・99）と施されないもの（90・92・95・100・101）がある。石質は、92のチャート以外、全て頁岩である。

I C 2 : 103が該当する。二次加工は、背面にのみ施されており、刃部は入念に加工されている。I C 3 に含まれる要素を有するが、刃部が直線的で鋭く加工されていることより、本型式に含めた。頁岩製のナイフで、統繩文時代に特有のものである。

I C 3 : 102・104~109が該当する。形態上、刃部が緩くカーブするもの（102・104）と柄部を有するもの（105~109）とに分けられる。104は、頂部に打面を残し、背面の刃部のみ入念に加工を施している。107は、背面の右側縁部に入念な刃部を有したもので、非常にI C 1と類似していることより、未製品とも考えられる。109は、背面の右側縁部から先端部にかけて刃部が作出されており、柄部はつまみ状になっている。また、腹面先端部にはバルブを取り除くための加工が施されている。

スクレイパー（図V-96・97:110~123、図版V-94-102）

I D 1 : 110~113が該当する。全例、黒曜石製の搔器で110~112は打面を残している。また、加工は全て片面加工で、刃部のみ入念に加工が施されている。

I D 2 : 114~115・120の3点が該当する。115は、両面加工の搔器で、刃部は入念な加工が施されている。120は、背面および腹面の基部と刃部に細かな加工が施される。

I D 3 : 16~119・121・123が該当する。116は、木葉形をした削器で刃角の低い刃部が両側縁に作られている。118は、120と類似した形態を有するが、刃部は右側縁部に作られている。122は、大型の刺片石器で、刃部は下端部の両面に加工が施されている。上部は柄部と思われ、両面とも左側縁部に調整痕がある。また、これと類似したものがF-19からも1点出土していることより、定形的な石器なのかもしれない。

石刃状剥片（図V-109～111：198～229、図版V-100～102）

Ⅰ E 1 : 198～217が該当する。出土点数129点のうち、本型式のものは65点である。そのうち、両側縁に使用痕があるもの38点（203～205・208・210・211・213～215・217）、左側縁にあるもの16点（212）、右側縁にあるもの11点（201・206・207・209）である。

また、本型式以外に從来、「削器」あるいは「ナイフ状石器」として分類されてきたものの中に、石刃状剥片を素材として二次加工が施されたものがある。ここでは、技術的な特徴を重視し、「石刃状剥片」として図示した。218～229が該当する。このうち、両側縁に二次加工を有するものは17点（2・5）、右側縁に有するものは8点（224・225）、左側縁に有するものは3点、先端部を尖頭状に加工するものは7点（218～221・226）である。226は、中央部に使用による磨耗とは考えられない磨かれた痕跡を残している。

石斧（図V-98～100：124～141、図版V-95）

Ⅱ A 2 : 124・126の2点のみである。124は、右側縁部に擦り切り痕を残したもので、刃部は一部欠損する。126は、基部が円柱状になった蛤刃状の石斧で、全面焼ている。

Ⅱ A 3 : 125・127～138が該当する。形態は、大型のもの（125・127～132）、中型のもの（133～136）、小型のもの（137・138）に分けられるが、その差は顕著ではない。

Ⅱ A 4 : 139の1点のみ出土している。厚さ1.0cmの偏平な石斧で、幅は一定である。

Ⅱ A 5 : 140・141が該当する。140は、片岩を研磨して製作しており、重量は8.1gと軽い。141も片岩製であるが、若干厚みを有し、円刃となる。重量は、16.6gをはかる。

敲石（図V-100：143・144、図版V-95）

Ⅱ B 1 : 5点出土しているうち、2点を図示した。143は、偏平円盤の周辺および盤面に敲打痕が認められるが、形態が変化するほどまでは使いこまれていない。144は、棒状に近い円盤の上・下端に敲打痕が認められる。

擦石（図V-100：142、図版V-95）

Ⅱ C 1 : 142の1点しか出土していない。楕円盤の周辺に擦痕が認められるほかは、盤面中央に若干凹みが見られる。

砥石・石鎌（図V-100～103：145～155、図版V-96・97）

Ⅱ D 1 : 146～148・153が該当する。146は1面、178・148は2面の砥面を有する砂岩質の砥石である。153は、上部両側縁に打ち欠きが施されたものである。Ⅱ D 5と同じ機能を有するものであろうか。

Ⅱ D 2 : 149・151・152が該当する。149は、砥面を両面に持ち、重量は1,320gもある。おそらく、据え置き用の砥石として使用されたものであろう。151は、楕円盤の長軸方向に幅1cm程の

溝を2条有している。擦痕より、矢柄研磨器的な機能が考えられるが、溝内部は部分的に凹みがあり、副次的な機能も予想される。また、裏面にも線状の溝が4.7cmの幅で認められる。152も同様に、1条の溝を有し、その内部には数ヶ所の凹みが見られる。

Ⅱ D 3 : 150が該当する。表裏に砥面を有する、手持ち用の砥石である。

Ⅱ D 4 : 145・155の2点である。145は、板状の一面を砥面として使い、片側縁部を石鋸として使用している。155も同様に、一面を砥面として使用している。形態は、「半円状偏平打製石器」に類似しており、擦石の機能も有しているのかもしれない。石質は、頁岩である。

Ⅱ D 5 : 154の1点のみである。鉈状の形態をし、上部には両面から孔が穿たれている。同じ形態を有すると思われる破片が、廃棄場跡からも出土している。どれも、砂岩製のもので、ほぼ全面を整形している。

石皿 (図 V-104 : 156, 図版 V-97)

Ⅱ F 1 : 破片を含めても、10点余りしか出土していない。また、使用痕も顕著なものはなく平坦な面を残すものばかりである。

石鑼 (図 V-104-107 : 157~188, 図版 97~99)

Ⅱ F 1 : 157~183が該当する。形態は、偏平な円盤あるいは精円盤の長軸方向に、打ち欠きを入れたものがほとんどである。重量においては、10~600gまで連続的に続き、さらに、800g前後のものもある。

Ⅱ F 3 : 184~188が該当する。全例、軽石製品である。重量は、30g前後のもの (184~186) と120g前後のもの (187~188) がある。185は溝状に、188は一辺に紐かけを作出している。

石核 (図 V-107-108 : 189~195, 図版 V-98)

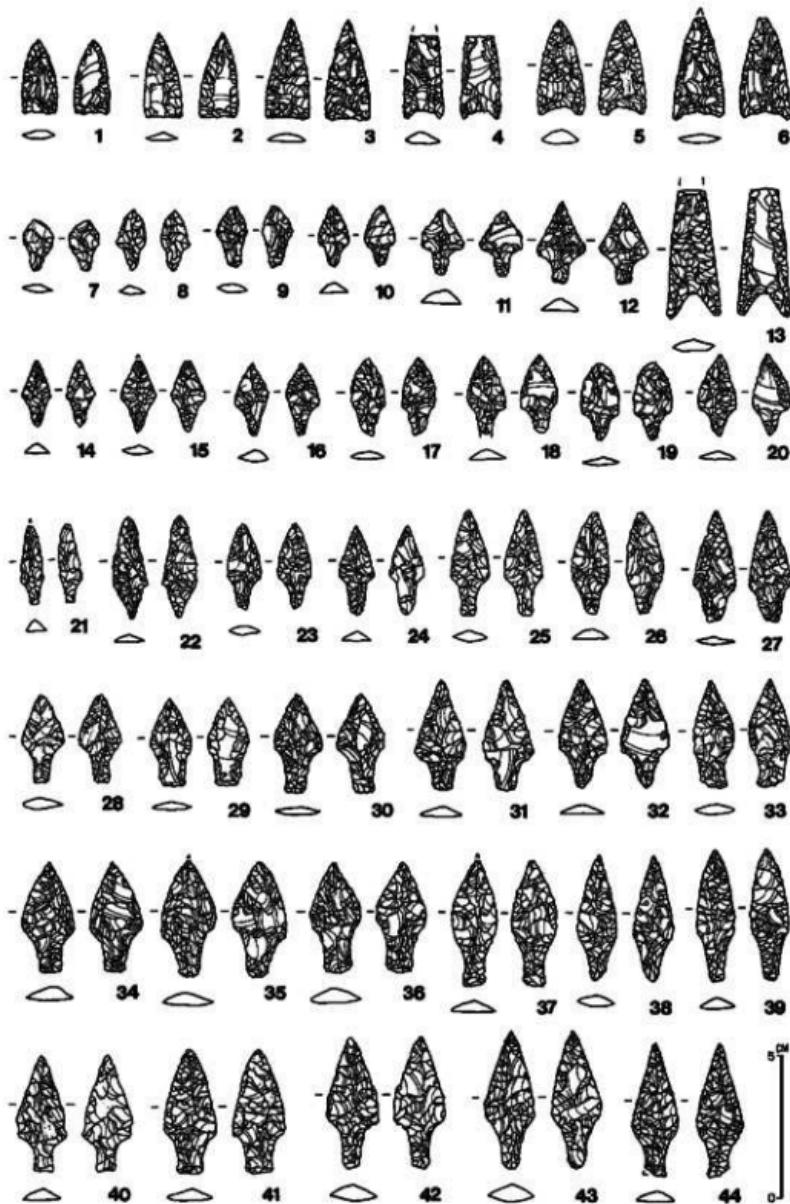
Ⅲ : 189~195の7点を図示した。石質は全例、頁岩である。190は、上面に平坦な打撃面を作出したのち、縦長剥片を剥出した石核で円錐形となる。194も同様の形態である。なお、図示したもの以外には、D-6-a区より出土した石核および剥片の接合資料を図版 V-103に掲げた。

装身具類 (図 V-108 : 196-197, 図版 V-102)

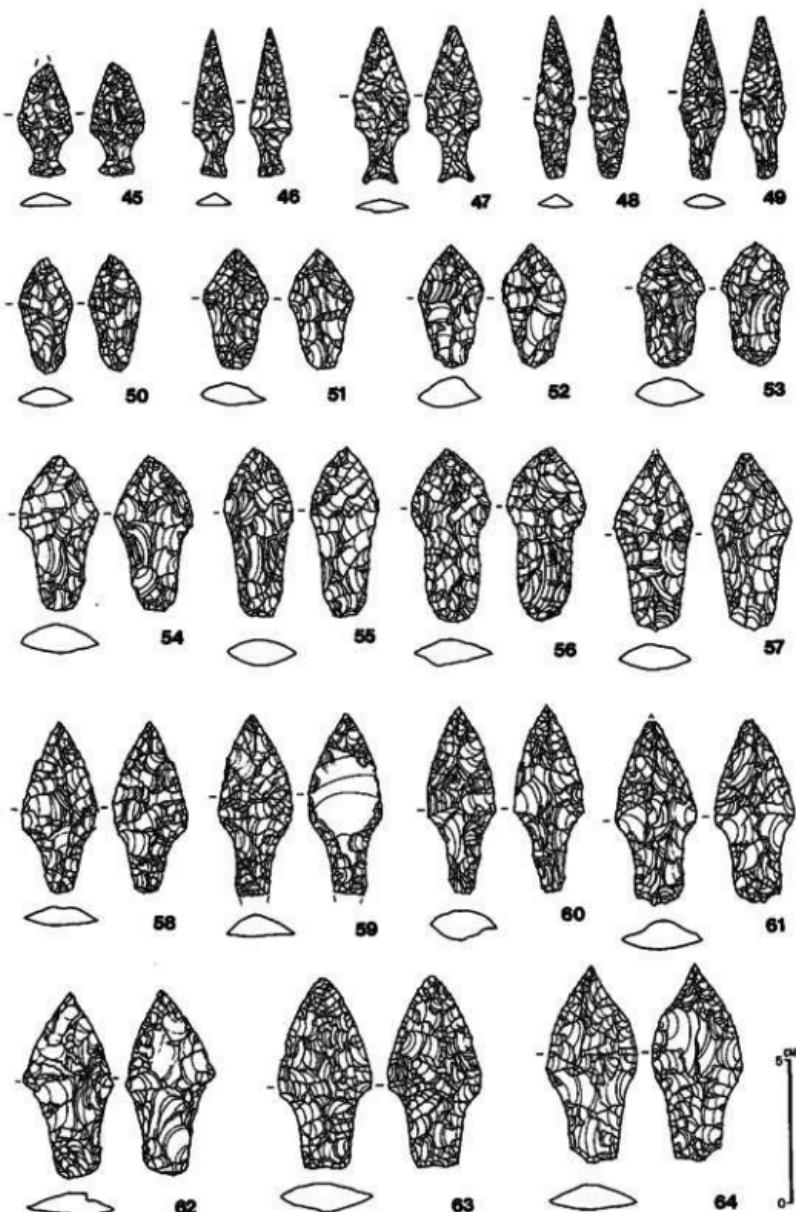
IV A : 197は、両端から孔が穿たれているが、貫通はしていない。未製品であろうか。

IV B : 196は、197と同じ発掘区で検出された。近接した東上泊遺跡でも出土していることから、統繩文時代のものと考えられる。

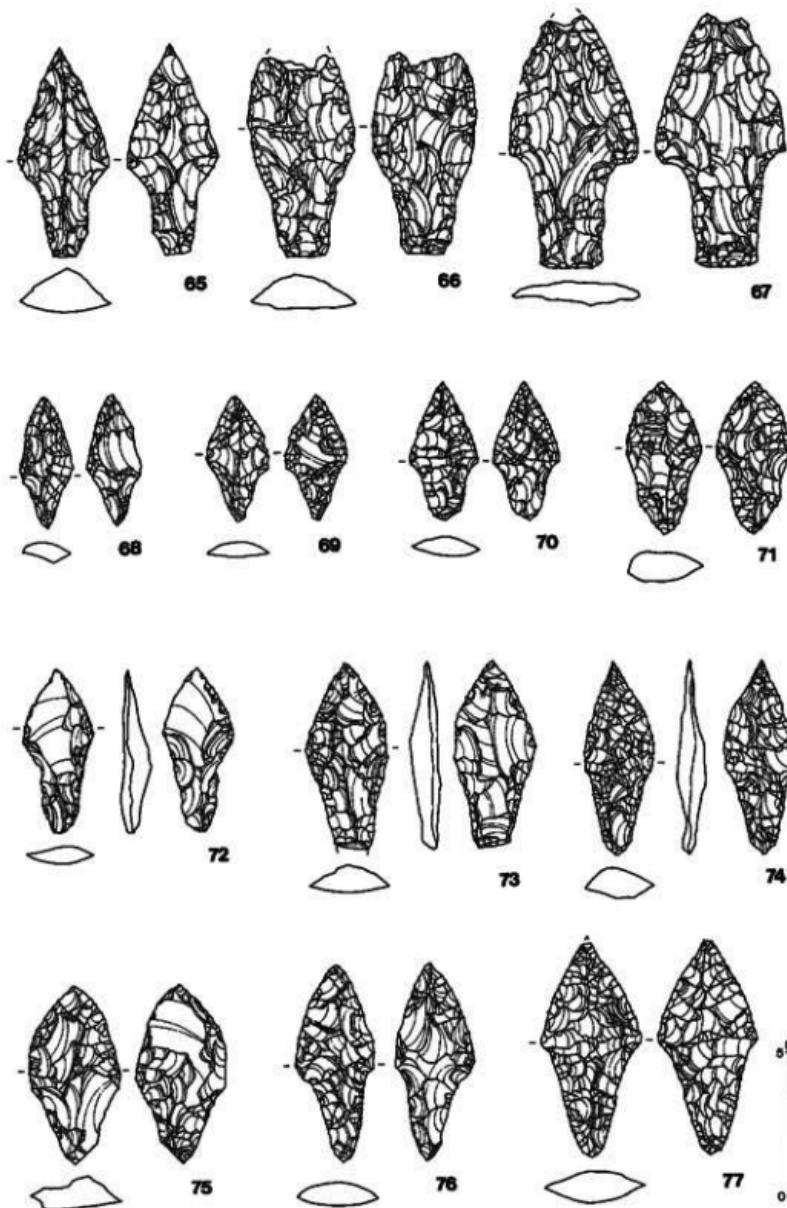
(森岡 健治)



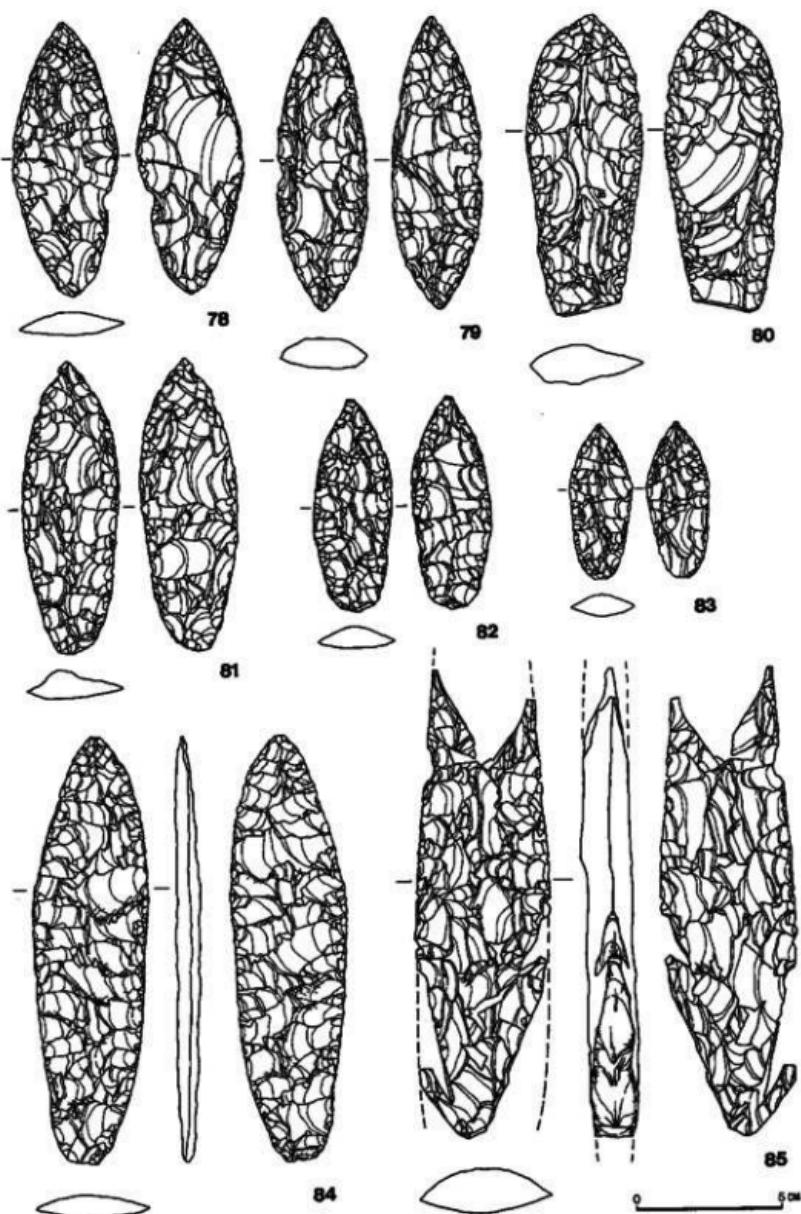
図V-31 包含層出土の石器(1)



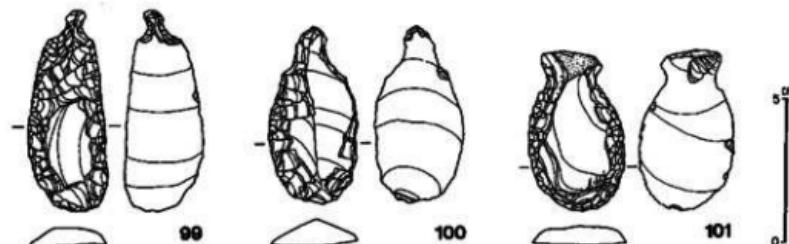
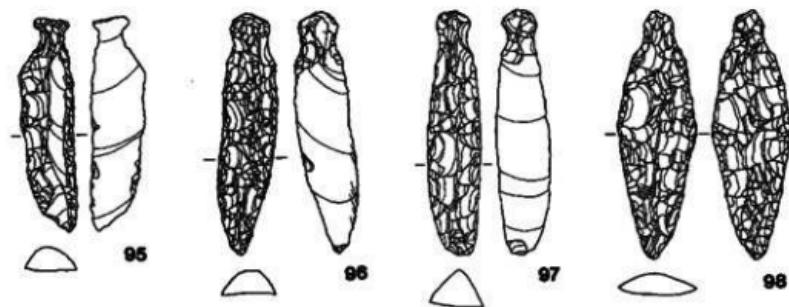
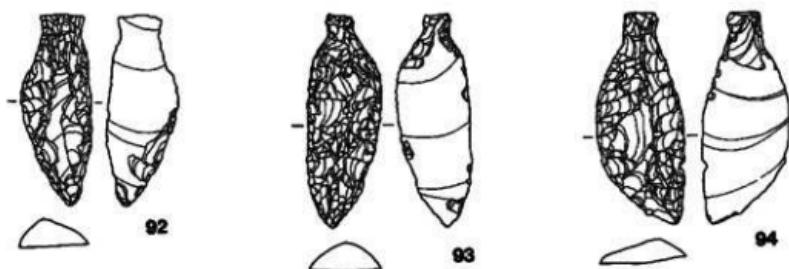
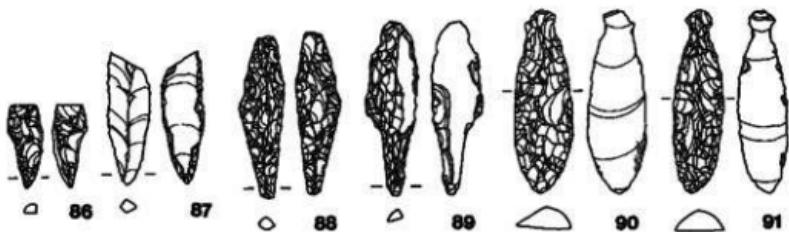
図V-92 包含層出土の石器(2)



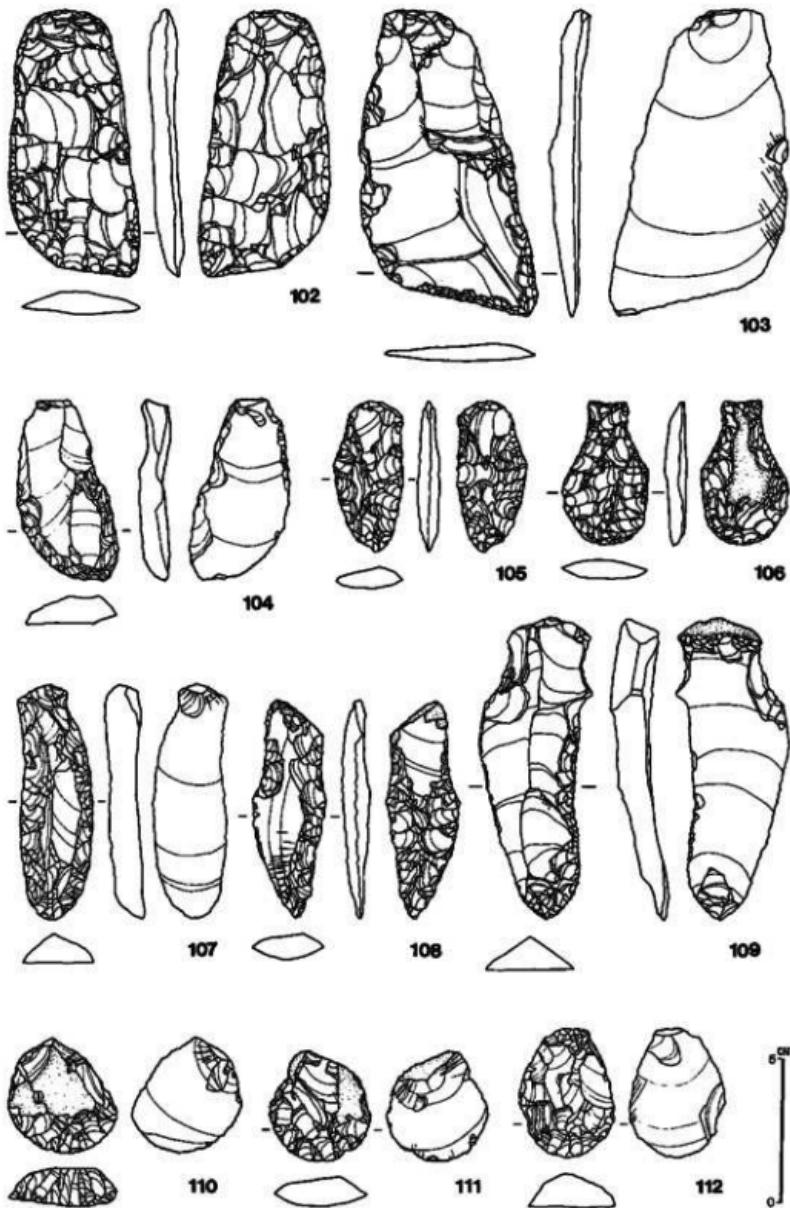
図V-53 包含層出土の石器(3)



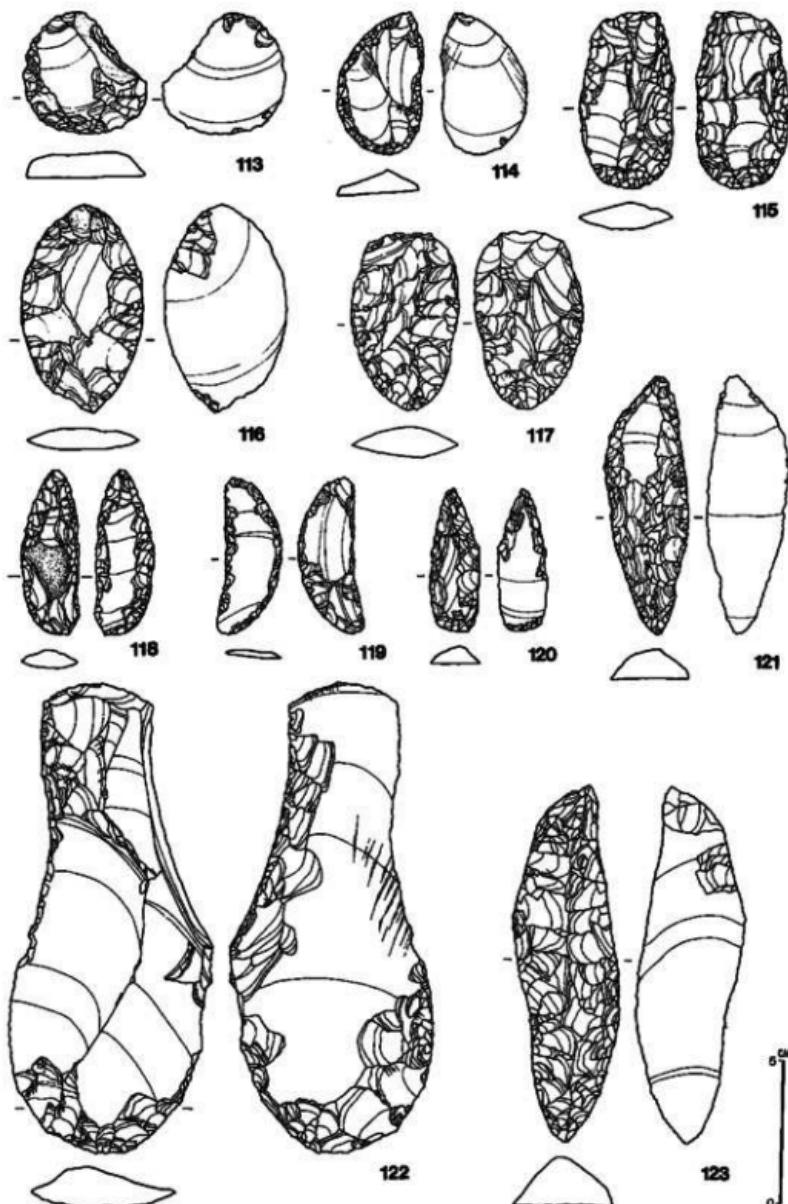
図V-84 包含層出土の石器(4)



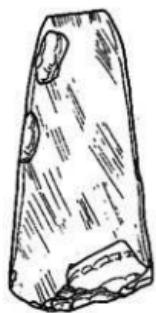
図V-85 包含層出土の石器(5)



図V-96 包含層出土の石器(6)



図V-97 包含層出土の石器(?)



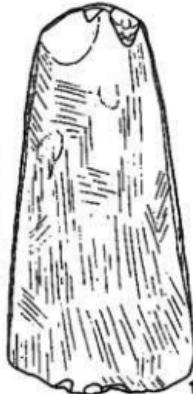
124

125



126

127

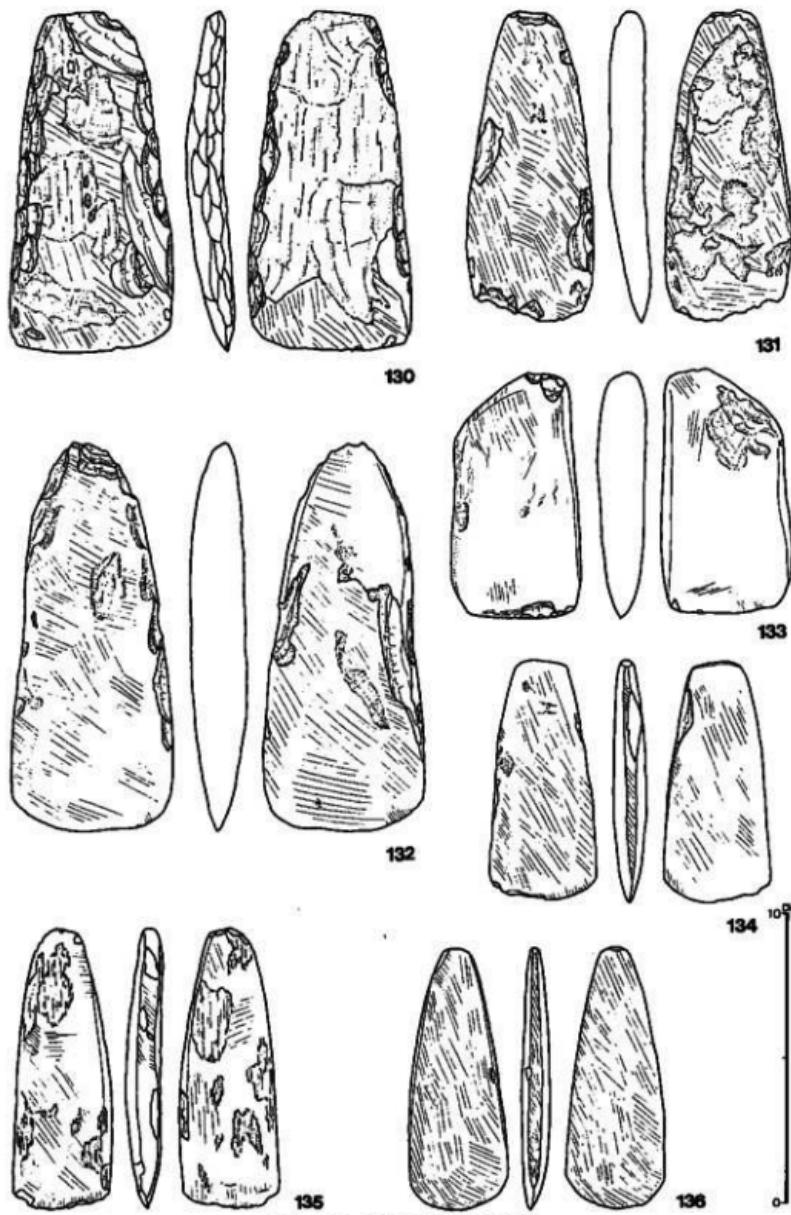


128

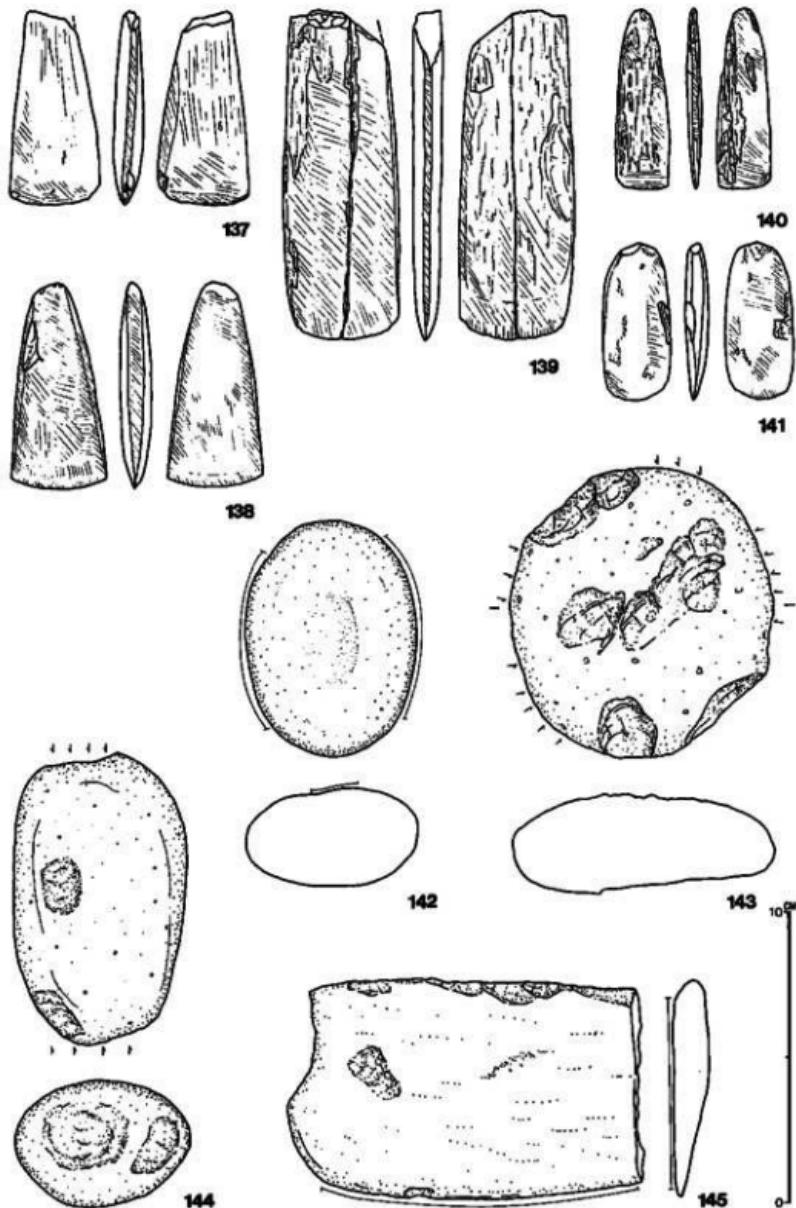
129

 10^2

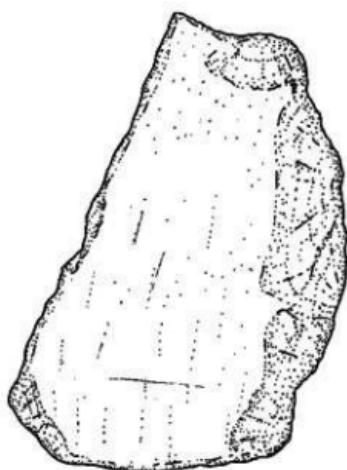
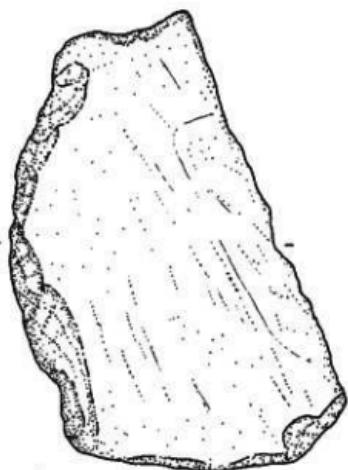
図V-88 包含層出土の石器(8)



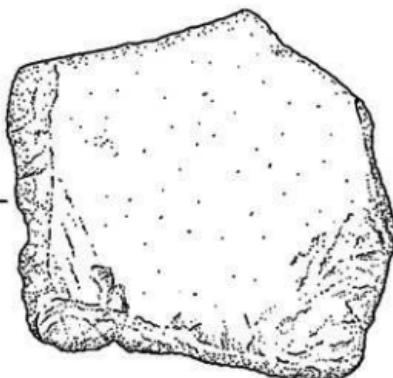
図V-55 包含層出土の石器(9)



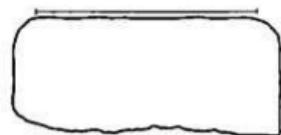
図V-100 包含層出土の石器⑩



147



148

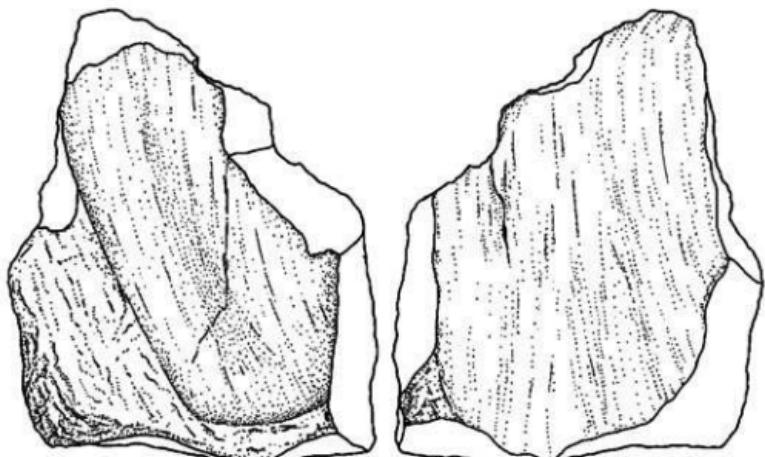


147

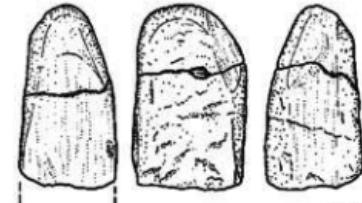
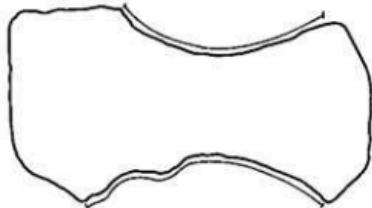
0

10 cm

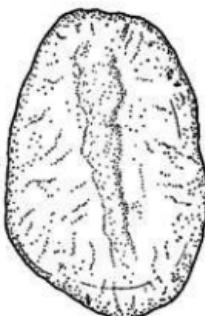
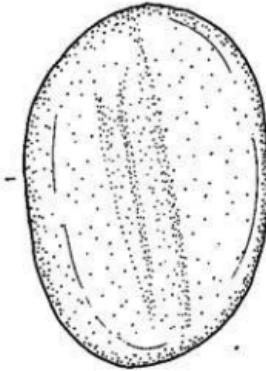
図V-101 包含層出土の石器(1)



149



150

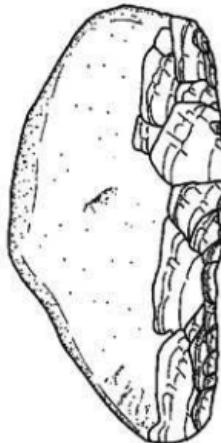
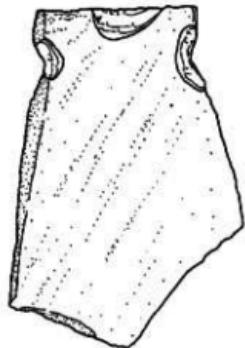
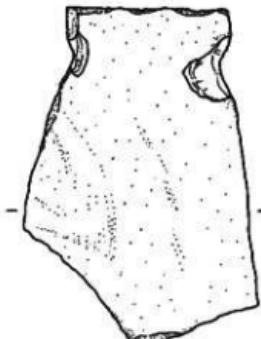


152

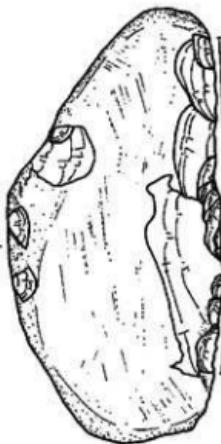
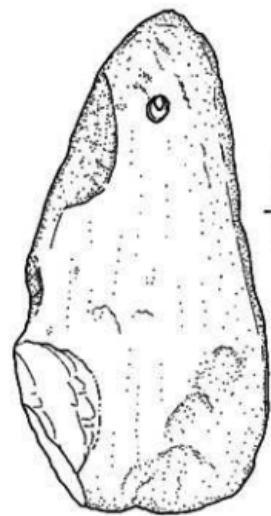
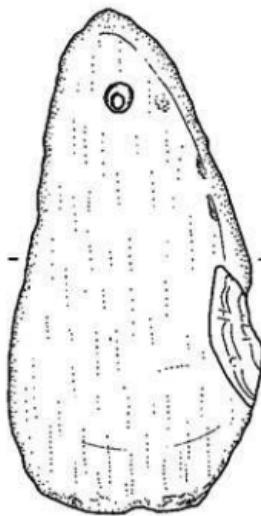
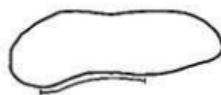
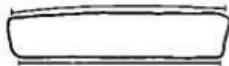


0 10 CM

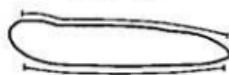
図 V-102 包含層出土の石器(2)



153



155

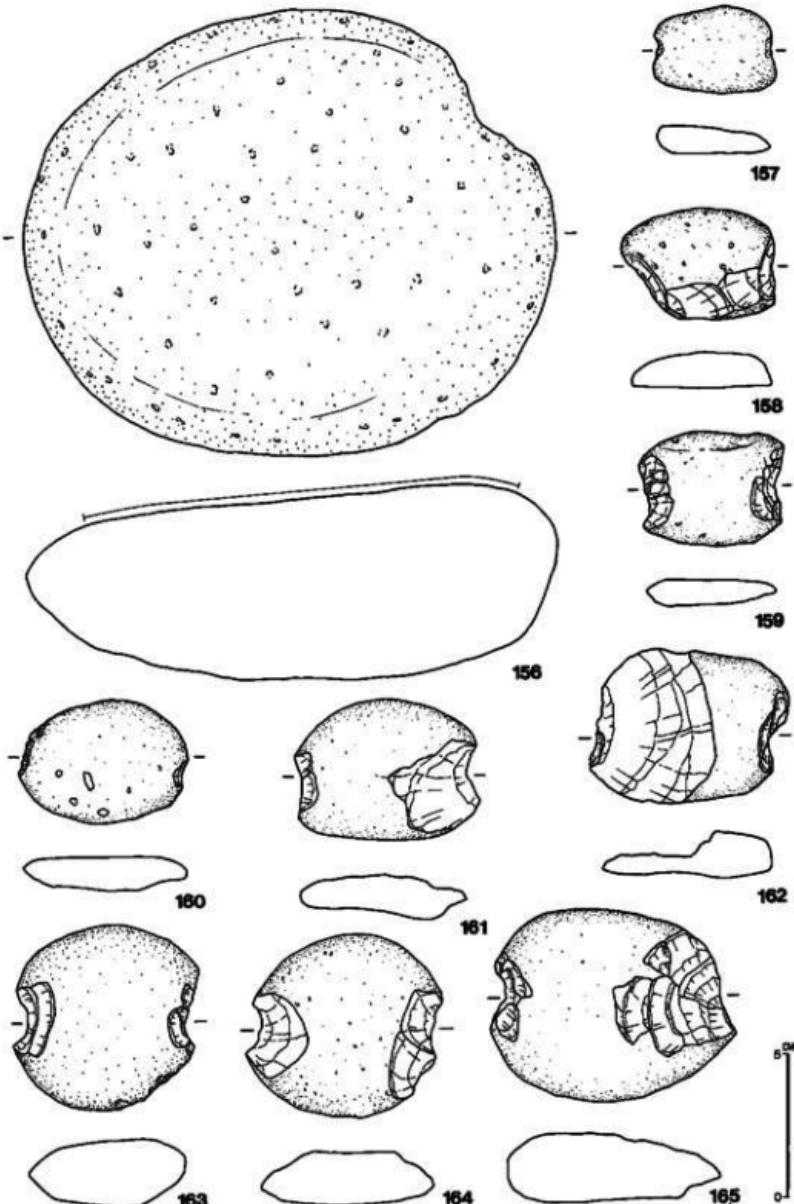


154

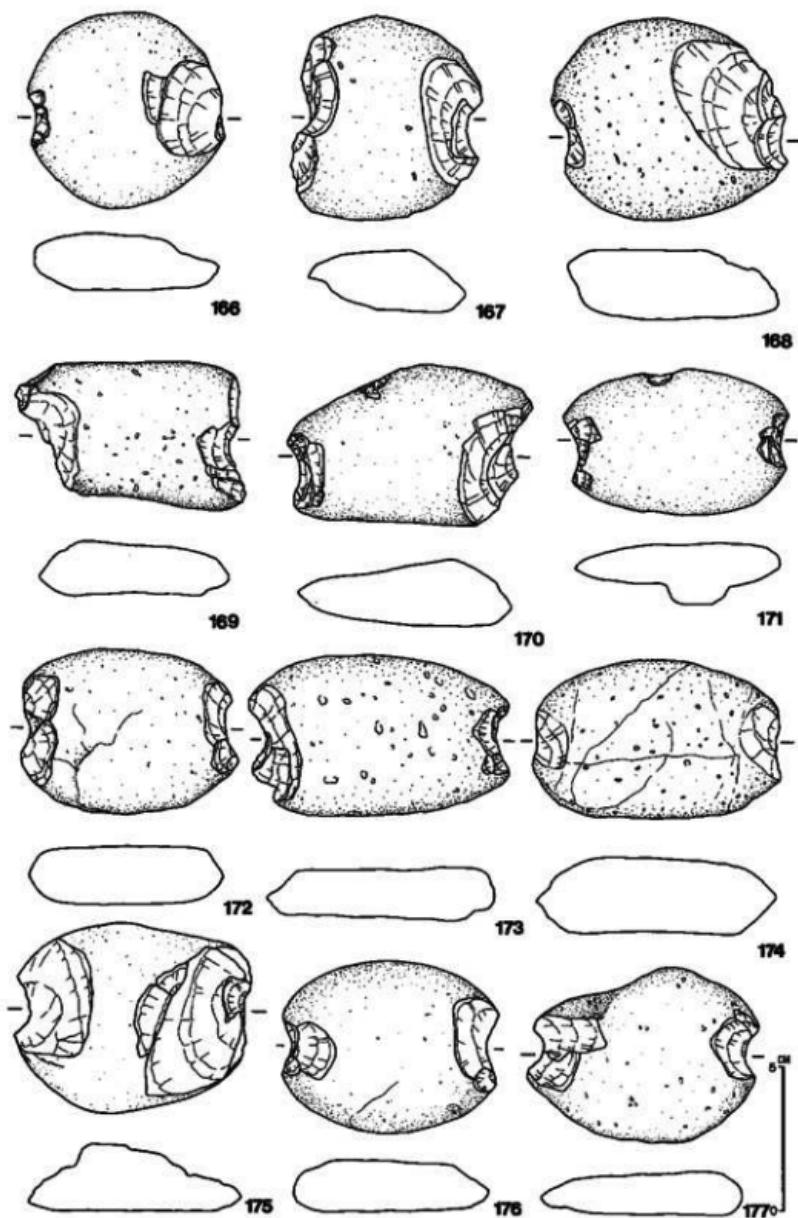
0

10 cm

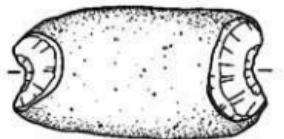
図V-153 包含層出土の石器①



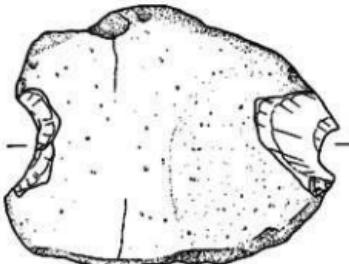
図V-104 包含層出土の石器④



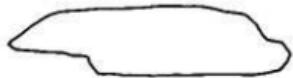
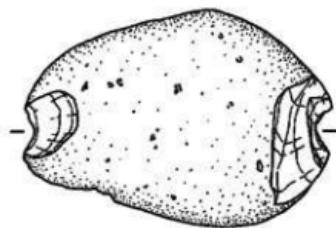
図V-105 包含層出土の石器09



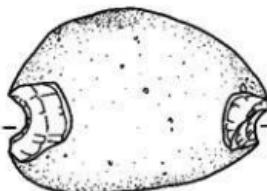
178



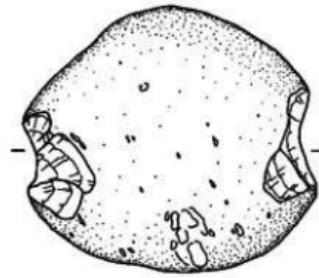
179



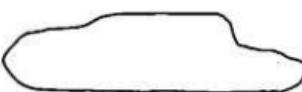
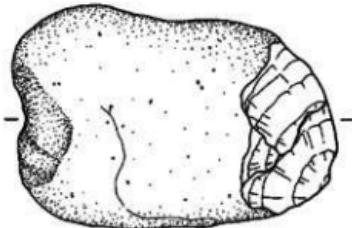
180



181



182

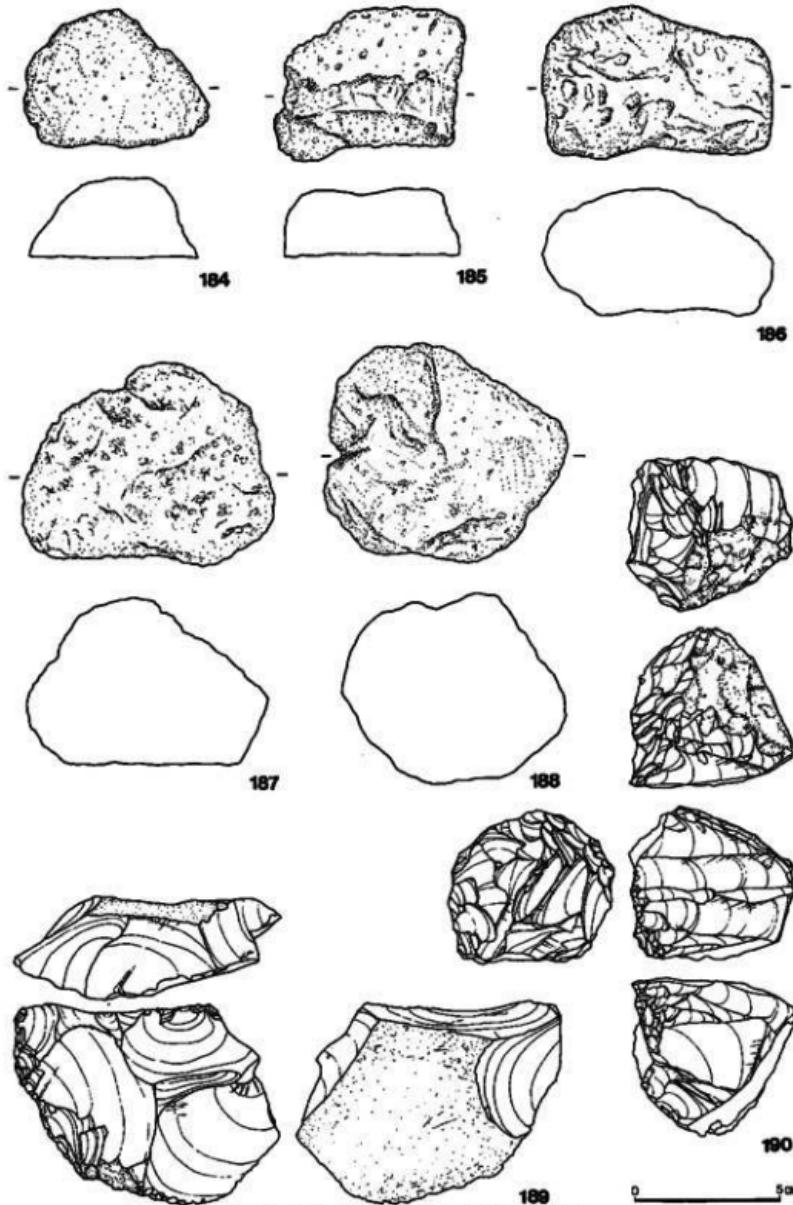


183

 10^2

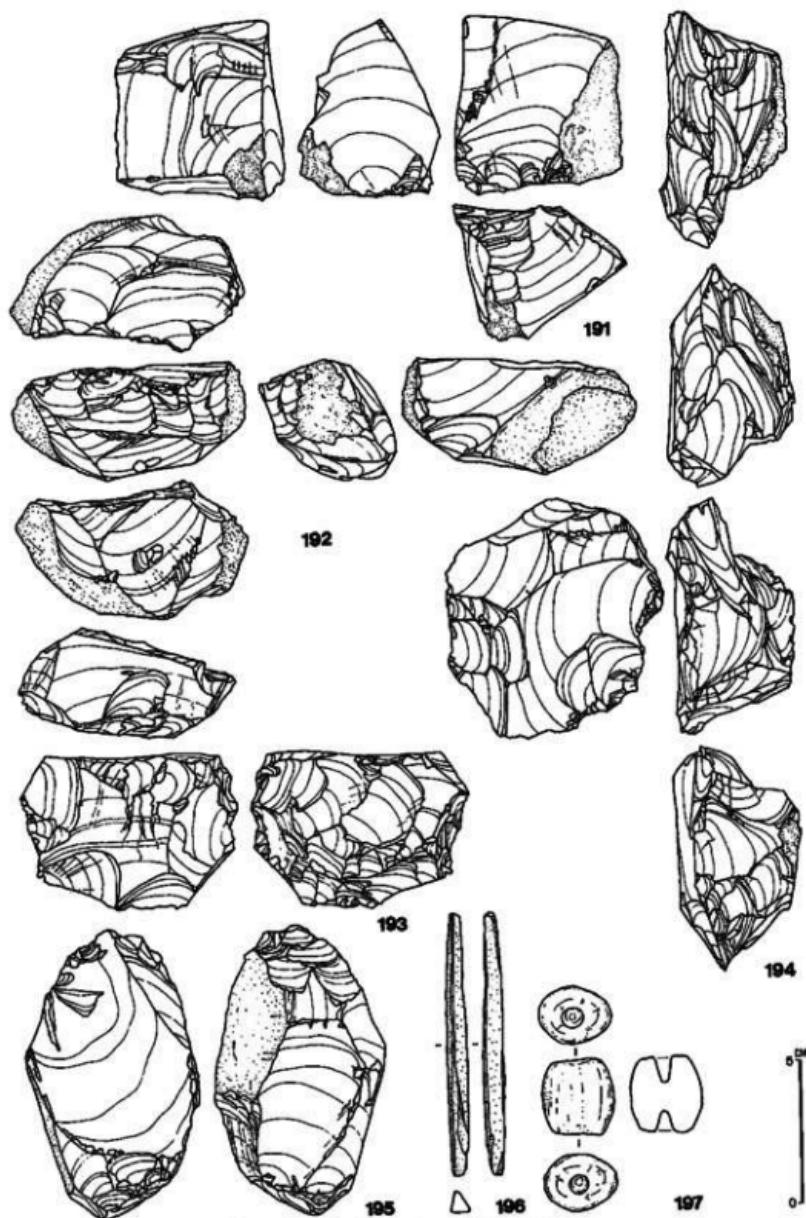
0

図V-186 包含層出土の石器(1)

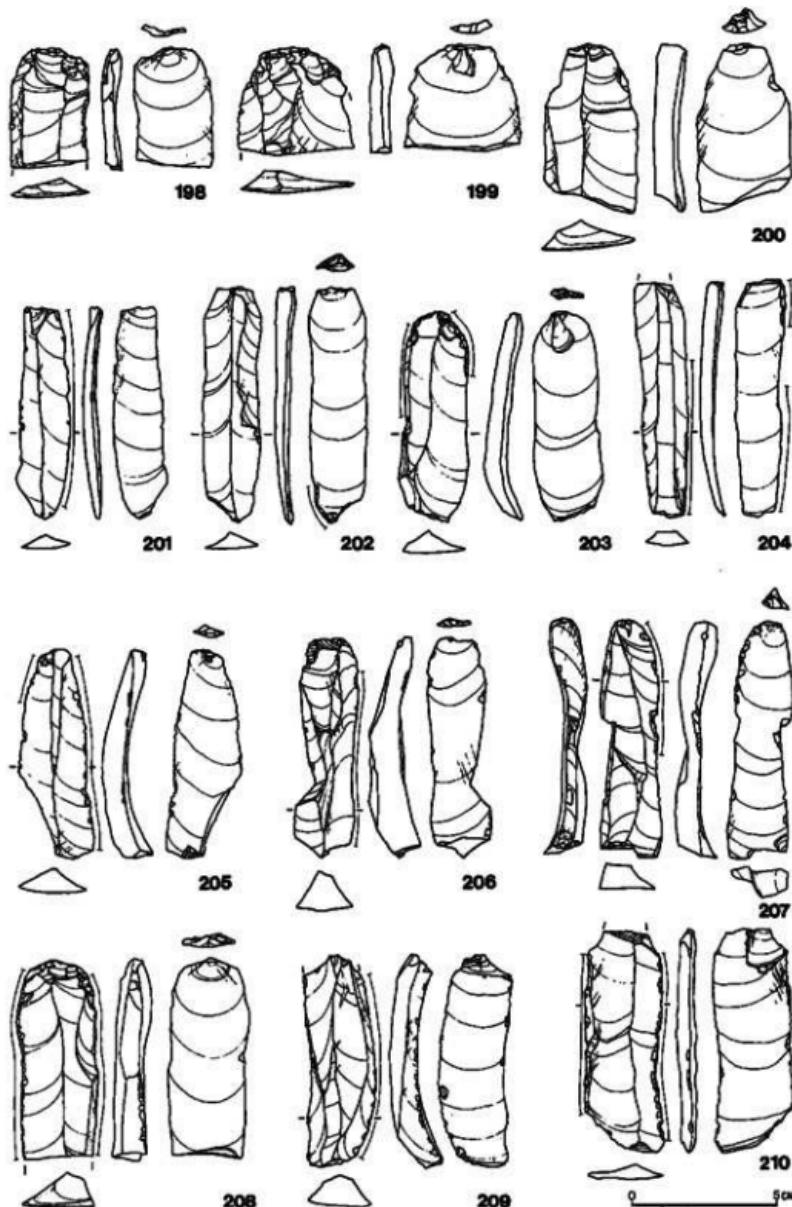


図V-187 包含層出土の石器(1)・石核(1)

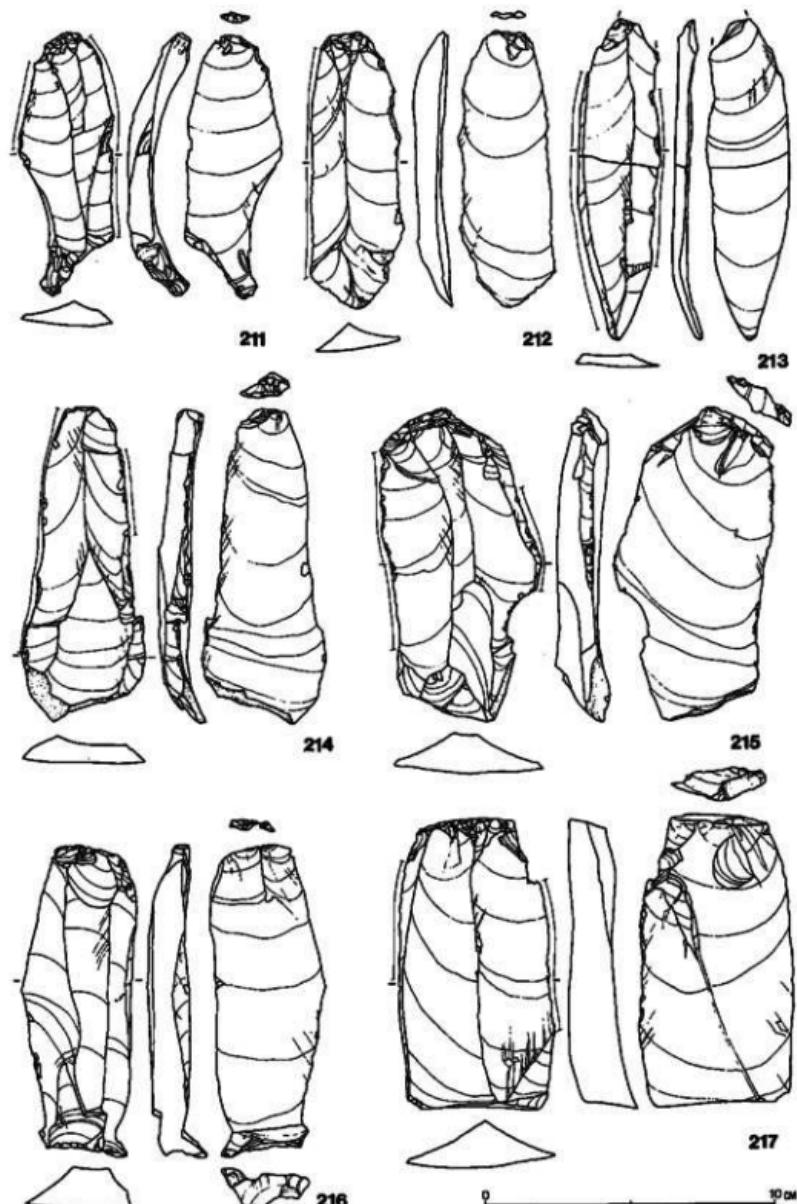
0 5cm



図V-198 包含層出土の石核(2)・装身具類



図V-109 石刃状剥片(1)



圖V-116 石刃狀剝片(2)

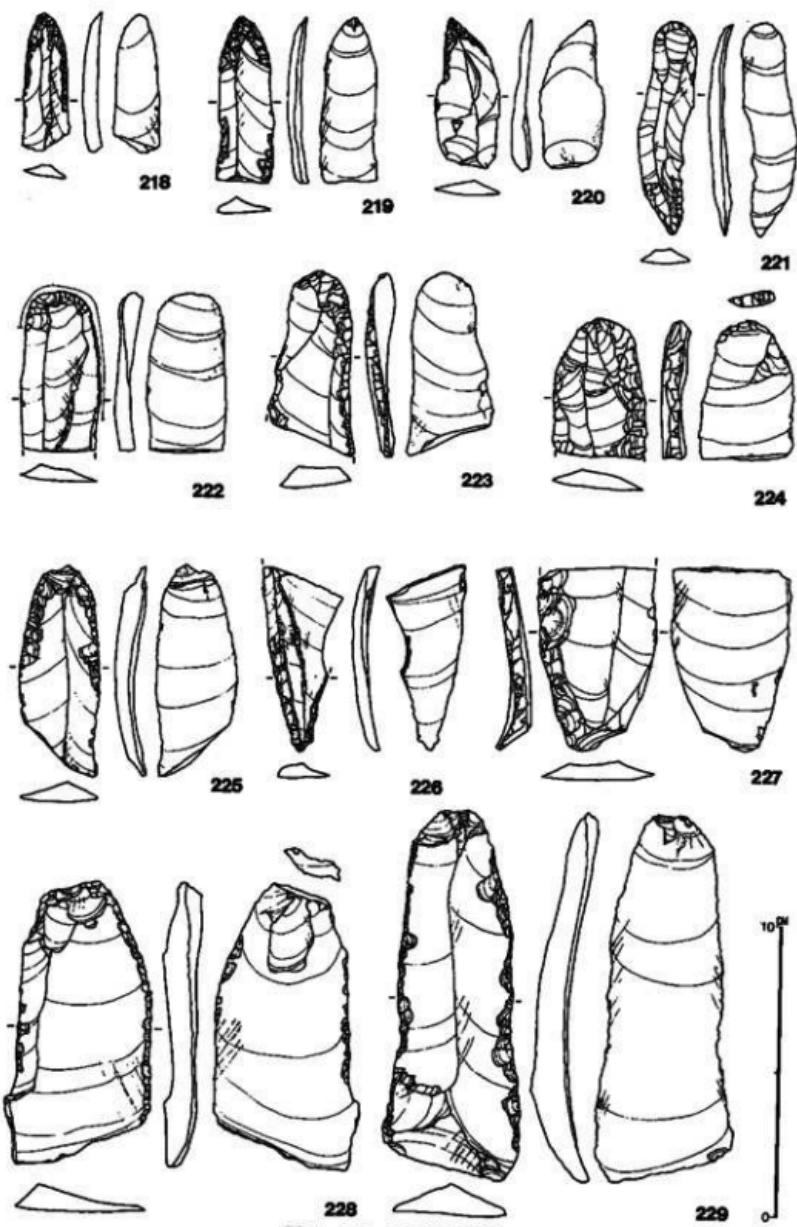


圖 V—111 石刀狀剝片(3)

表V-35

包含層掲載遺物一覧

I 群土器

検出番号	写真番号	グリッド	分類	層位	特 色
1	C-10	I-A	I	地土に2~10mm程の小石を多く含む。内面に炭化物付着。補修孔が2ヶ。	
2	C-6-d	#	II	地土は粗い砂粒。内面に炭化物付着し、全体が黒色である。	
3	C-10	#	I	内面に押型文。	
4	C-11	#	II	内面に押型文を施文。炭化物の付着が見られる。	
5	B-10	#	I	底部。	
6	B-10	I-B	I	地土に砂粒を含む。内面に炭化物付着。	
7	C-8	I-C	II	地土にこまかい砂粒が多い。地文は結束第一種羽状綱文。口唇部と内面に炭化物付着。	
8	C-9	#	II	地文は羽状綱文。内面に炭化物付着。焼成良好。	
9	D-9	#	I	地文は結束第一種羽状綱文。内面に炭化物付着。焼成良好。	
10	C-7-a	#	II	地文は結束第一種羽状綱文。内面の一部に炭化物付着。焼成良好。	
11	D-9	#	II	地土は緻密。地文は結束第一種羽状綱文。	
12	B-6-a	土製品	II	地土は粗い砂粒が多い。手づくね。	
	B-10	I-A	I	地土に粗い砂粒を含む。	
	#	#	II	底部。地土に粗い砂粒を含む。	
	#	#	#	12と同一個体。	
16	B-8	I-B	I	地土は緻密。焼成良好。補修孔が2ヶ所有する。	
17	C-6-a	#	II	砂粒の多い地土であり表面が磨耗している。	
18	B-12	#	II	地土に小石を含む。地文はLR斜行綱文。焼成不良。	
19	C-12	#	II	地土に小石を含む。地文はRL斜行綱文。	
20	#	#	II	底部。19と同一個体。	
21	B-7-c	I-C	I	地土は緻密。焼成良好。	
22	B-9	#	II	地土にこまかい砂粒が多い。口唇部と外側の一部に炭化物付着。	
23	#	#	II	23と同一個体。	
24	D-11	#	II	地文は結束第一種羽状綱文。	
25	B-11	I	I	地土は細かい砂粒を含む。地文は結束第一種羽状綱文。	
26	C-8	#	II	地土は砂粒を多く含む。地文は結束第一種羽状綱文。	
27	C-9	#	I	地文は細いLR斜行綱文。口唇部は羽状。	
28	B-10	#	II	地文は結束第一種羽状綱文。焼成はよくない。	
29	D-9	#	II	口唇と内面に炭化物付着。補修孔は貫通していない。	
30	#	#	II	地土に細かい砂粒を多く含む。地文は結束第一種羽状綱文。	
31	C-10	#	II	地土は粗い砂粒が多い。地文は太いRL斜行綱文。口唇上にも地文がつく。	
32	C-9	#	I	地土は粗い砂粒が多い。地文は単筋の太い羽状綱文。	
33	D-9	#	II	地土は細かい砂粒を多く含む。地文は結束第一種羽状綱文。口唇上にも地文。	
34	C-10	#	I	地文は結束第一種羽状綱文。口唇・内面上部に地文がつく。焼成良好。	
35	C-9	#	II	34と同一個体。	
36	C-10	#	II	地土は粗い砂粒を多く含む。底面に結束第一種羽状綱文。	
37	C-7-a	#	II	地土は粗い砂粒が多い。底部は中央部が凸部になる。	
38	C-7-b	#	II	地土は細かい砂粒が多い。底部は中央が凸部になる。地文はRL斜行綱文。	
39	C-10	#	II	地土は粗い砂粒を含む。地文はRL斜行綱文。	
40	C-8	#	II	底部。地文はLの無筋斜行綱文。	

II 群土器

検出番号	グリッド	分類	特 色	検出番号	グリッド	分類	特 色
1	D-6-d	I-B	地文はLR。地土に粗い砂粒多く含む。炭化物付着。	8	D-5-b	II-A	0→I。沈量。
2	#	#	無文。地土に粗い砂粒多く含む。	9	D-5-c	II-B	0→I。口唇に地文。
3	D-6-a	II-A	0→I(安突)。地文はRLR複層。口唇に地文。	10	C-4-b	*	I→0。地文はRL。口唇に地文。
4	D-6-b	II-B	I→0。内面に炭化物付着。全体が黒い。	11	D-5-b	*	0→I。
5	C-5-d	I-C	口唇に剥み。	12	D-5-b	*	0→I。地土は砂粒を多く含む。
6	C-5-c	II-B	器体外圧痕と同じ原形を使った模様。	13	C-5-c	II-C	地文はRLの複層。地土に粗い砂粒含む。
7	#	#	0→I。口唇部に周縁文。脚部地文。外側に炭化物。	14	A-6-c	*	0→I。周縁間に刺突孔。

辨認番号	グリッド	分類	特 色
15	C-5-c	II-A	底部、変形工字文。
16	#	II-C	底部。
17	C-14-b	II-C	O→I。口唇に刻み。沈線。
18	D-12-d	#	圓錐文。
19	C-14-c	II-B	O→I。口唇に地文。
20	C-13-d	#	O→I (突窓)。21と同一個体。
21	C-13	#	20と同一個体。
22	D-13-d	#	O→I。
23	C-14-c	II-C	O→I。口唇に地文。
24	C-14-a	#	I→O。無文。
25	C-14-c	#	O→I。
26	C-14-a	#	I→O。口唇に刻み。
27	#	#	I→O (突窓)。口唇に刻み。内面に炭化物。
28	C-13	#	I→O。口唇に刻み。28・29と同一個体。
29	#	#	28・30と同一個体。

辨認番号	グリッド	分類	特 色
30	C-13	II-C	28・29と同一個体。
31	#	#	I→O。口唇に翼の圧痕文。32・33と同一個体。
32	#	#	31・33と同一個体。
33	#	#	31・32と同一個体。
34	C-14-b	#	I→O (突窓)。圓錐圧痕文。沈線。
35	C-13	#	I→O。胎土に小砂利を含む。内面に炭化物。
36	C-14-b	#	I→O。胎土に小砂利を含む。
37	#	#	圓錐。圓錐圧痕文。
38	#	#	I→O。口唇に刻み。
39	#	#	I→O。圓錐文。胎土に小砂利を含む。
40	B-13-c	#	I→O。圓錐文。胎土に小砂利を含む。
41	B-13-c	#	口唇に刻み。内面に施文。
42	C-14-c	#	口唇に刻み。内面に施文。43と同一個体。
43	#	#	O→I。42と同一個体。
44	C-13-d	#	底部。

石 器

辨認番号	器種名	出土地点	層序	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考	
V-91 1	石 砺	C-5-b	II	2.5	1.3	0.3	1.2	Obs.	IA1		
2	#	D-4-d	I	2.9	1.4	0.3	1.2	#			
3	#	C-13-d	III	3.4	1.5	0.3	1.5	#			
4	#	C-13	II (2.8)	1.4	0.4	(1.8)	#	#			
5	#	A-7-c	I	3.2	1.6	0.5	2.1	#			
6	#	C-6-b	II (3.5)	1.7	0.3	(1.8)	#	#			
7	#	B-6-d	"	1.7	1.1	0.3	0.6	#			
8	#	B-6-a	"	2.1	1.1	0.3	0.6	#			
9	#	#	I	2.1	1.1	0.3	0.9	#			
10	#	D-6-a	II	2.1	1.1	0.4	0.7	#			
11	#	D-5-b	"	2.2	1.5	0.5	1.0	#			
12	#	C-14-b	III	2.8	1.7	0.5	1.3	#			
13	#	B-7-a	I (4.4)	1.9	0.4	(3.1)	#	IA1	先端部欠損		
14	#	C-6-c	II	2.3	1.0	0.4	0.6	#	IA4		
15	#	C-6-d	" (2.4)	1.3	0.3	(0.7)	#	#	先端部欠損		
16	#	#	"	2.5	1.2	0.4	0.7	#	IA5		
17	#	D-5-d	"	2.7	1.2	0.3	0.9	#			
18	#	C-9	I (2.7)	1.3	0.4	(1.1)	#	#		下端部欠損	
19	#	C-10	II	2.7	1.4	0.3	1.1	#			
20	#	B-7-a	I	2.8	1.3	0.3	0.8	#			
21	#	B-6-b	II (2.7)	0.8	0.4	(0.8)	#	#		先端部欠損	
22	#	D-6-a	"	3.5	1.2	0.3	1.0	#			
23	#	#	"	3.0	1.2	0.3	1.2	#			
24	#	C-6-b	"	3.1	1.2	0.4	1.0	#			
25	#	C-10	"	3.6	1.4	0.4	1.8	#			
26	#	B-6-b	"	3.5	1.3	0.4	1.4	#			
27	#	C-13-d	"	3.8	1.5	0.3	1.7	#			
28	#	B-10	"	3.0	1.5	0.4	1.4	#			
29	#	C-13-c	I	3.0	1.5	0.4	1.3	#			
30	#	D-9	II	3.3	1.6	0.3	1.6	#			
31	#	C-10	"	3.8	1.8	0.4	2.0	#			
32	#	C-14-a	"	3.7	1.7	0.4	2.1	#			
33	#	C-10	"	3.7	1.4	0.4	1.5	#			

表V-37

標因番号	器種名	出土地点	層序	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
V-91 34	石 鐵	D-6-d	I	3.8	1.8	0.5	2.8	Obs.	IA 5	
35	#	C-10	II	(4.0)	1.9	0.5	(2.6)	#	#	先端部欠損
36	#	#	#	3.8	1.8	0.5	2.6	#	#	
37	#	B-11	#	(4.4)	1.5	0.4	(2.3)	#	#	先端部欠損
38	#	C-10	#	4.3	1.4	0.4	2.2	#	#	
39	#	B-7-n	#	4.6	1.3	0.4	1.9	#	#	
40	#	B-10	#	4.0	1.8	0.4	2.3	#	#	
41	#	C-10	#	4.3	1.8	0.5	2.7	#	#	
42	#	B-10	I	4.6	1.8	0.5	3.4	#	#	
43	#	C-10	II	4.8	1.7	0.5	3.7	#	#	
44	#	#	#	(4.6)	1.6	0.4	(2.2)	#	#	基部左側縁欠損 先端部欠損
V-92 45	#	B-10	#	(3.9)	1.9	0.4	(2.5)	#	#	
46	#	C-10	#	5.1	1.5	0.4	2.2	#	#	
47	#	B-10	#	5.3	1.9	0.5	3.3	#	#	
48	#	C-6-d	#	5.5	1.4	0.5	2.7	#	#	
49	#	C-10	#	(5.5)	1.6	0.5	(3.6)	#	#	先端部欠損
50	石 銛 先	C-13-c	III	3.9	1.8	0.7	3.6	#	IA 7	
51	#	B-6-b	II	4.1	2.3	0.8	5.0	#	#	
52	#	D-6-d	#	4.1	2.2	0.9	5.7	#	#	
53	#	B-6-d	#	4.2	2.3	0.9	6.3	#	#	
54	#	C-7-d	#	5.3	2.7	1.0	11.2	Sha.	#	
55	#	A-7	#	5.8	2.4	1.0	11.7	#	#	
56	#	A-8	I	5.8	2.7	0.9	9.4	#	#	
57	#	B-6-d	II	(6.0)	2.7	1.0	(11.4)	Obs.	#	先端部欠損
58	#	B-12-c	III	5.9	2.6	0.6	7.7	#	#	
59	#	C-12	I	(6.2)	2.6	0.7	(8.1)	#	#	下端部欠損
60	#	C-10	II	6.3	2.4	1.0	9.3	Sha.	#	
61	#	B-7-d	I	(6.3)	2.8	1.1	(12.6)	#	#	先端部欠損
62	#	C-13-d	III	6.4	3.1	0.8	9.6	Obs.	IA 7	
63	#	B-6-d	#	6.6	3.2	1.0	13.6	#	#	
64	#	C-6-b	II	6.8	3.1	0.9	13.1	#	#	
V-93 65	#	C-6-d	#	7.2	3.1	1.5	22.6	Sha.	#	
66	#	C-11	I	(6.9)	3.7	1.3	(23.9)	Obs.	#	先端部欠損
67	#	C-14	II	(8.7)	4.5	0.9	(24.2)	#	#	"
68	#	C-9	I	4.5	1.9	0.7	3.3	#	#	
69	#	A-9	II	4.3	2.2	0.7	3.4	#	#	
70	#	A-7-d	#	4.8	2.3	0.7	4.9	#	#	
71	#	C-13-d	III	5.2	2.6	1.0	11.8	#	#	
72	#	D-8	I	5.6	2.5	1.0	8.0	Sha.	#	
73	#	C-6-b	II	(6.4)	2.8	0.9	(12.0)	Obs.	#	基底部欠損
74	#	A-9	#	6.6	2.4	1.0	8.6	#	#	
75	#	D-8	I	6.1	3.1	1.3	15.6	Sha.	#	
76	#	C-12	II	6.8	2.8	0.8	11.5	#	#	
77	#	C-8	#	(7.4)	3.4	1.1	(17.9)	Obs.	#	先端部欠損
V-94 78	石 棒	B-9	I	9.4	3.6	1.0	28.9	Sha.	IA 8	
79	#	B-10	II	10.0	3.1	1.1	33.5	#	#	
80	#	C-13	#	10.3	4.0	1.5	55.6	#	#	
81	#	C-14-n	#	10.0	3.3	1.0	29.2	#	#	
82	#	A-6-c	#	7.2	2.7	0.8	16.2	#	#	
83	#	B-6-d	#	5.3	2.2	0.8	8.4	#	#	

辨認番号	器種名	出土地点	層序	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
V-94	石 槌	B-5-d	II	14.7	4.0	0.8	48.0	Sha.	I A-8	熱液鉱石片の接合資料
	#	B-9	#	(16.0)	4.7	1.6	(125.7)	Obs.	#	
V-95	石 錐	B-5-d	I	2.9	1.3	0.6	2.0	Aga.	IB 3	
	#	C-7-b	II	4.5	1.4	0.7	4.7	#	#	
	#	C-13-d	III	5.5	1.6	0.8	6.4	Sha.	IB 1	
	#	C-14-b	#	5.9	1.8	1.0	9.3	Aga.	#	
V-96	石 砕	C-14-a	II	6.2	2.0	0.9	9.5	Sha.	IC 1	
	#	C-14-b	III	6.2	1.8	0.7	8.7	#	#	
	#	B-12	II	6.5	2.5	1.1	16.2	Che.	#	
	#	B-6-d	#	7.3	2.5	0.9	16.7	Sha.	#	
	#	A-8	#	7.2	3.0	0.9	17.1	#	#	
	#	C-13	I	7.3	1.9	0.9	11.0	#	#	
	#	B-7-d	#	8.2	2.2	0.8	15.7	#	#	
	#	C-14-a	II	8.3	1.8	1.3	21.6	#	#	
	#	B-12	#	8.4	2.7	0.8	15.7	#	#	
	#	B-6-c	#	6.9	2.7	0.7	14.1	#	#	
V-96	C-13-c	III	6.1	3.1	1.0	16.7	#	#	#	
	#	C-13-c	III	6.1	3.3	0.8	18.4	#	#	
	#	B-12	II	5.6	3.3	0.8	18.4	#	#	
	ナイフ	B-11	#	9.1	4.4	0.9	42.5	#	IC 3	
	#	A-8	#	10.4	5.6	1.1	49.1	#	IC 2	
	#	C-14-d	I	6.2	3.2	0.8	21.0	#	IC 3	
	#	C-13-c	III	5.1	2.4	0.8	10.0	#	#	
	#	A-9	II	4.9	3.0	0.7	9.7	Obs.	#	
	#	C-14-d	#	7.8	2.6	1.2	26.9	Che.	#	
	#	D-12	I	7.4	2.5	0.9	14.0	Sha.	#	
V-97	C-6-d	II	10.3	3.6	1.7	44.7	#	#	#	
	#	D-12	I	4.0	3.4	1.2	16.8	Obs.	ID 1	
	#	D-5-b	II	3.7	3.5	1.2	12.8	#	#	
	#	C-14-b	II	4.5	3.3	1.0	12.8	Obs.	ID 1	
	#	C-9	#	4.4	4.0	1.1	18.1	#	#	
	#	B-6-b	I	4.9	3.0	0.9	10.5	#	ID 2	
	#	D-13-a	#	6.0	3.2	1.0	19.8	Sha.	#	
	削器	C-14-a	II	7.1	4.1	1.1	27.8	#	ID 3	
	#	C-6-c	#	6.2	3.2	1.2	25.9	Obs.	#	
	#	C-6-d	#	5.6	2.0	0.7	8.1	Sha.	#	
V-98	B-6-d	#	5.4	2.0	0.4	4.3	#	#	#	
	#	C-13-d	III	4.9	1.8	1.0	7.0	#	ID 2	
	#	C-14-a	II	8.8	2.8	1.2	22.6	#	ID 3	
	#	D-9	#	16.1	7.0	2.9	260.0	#	#	
	#	C-14-b	III	12.3	3.6	2.6	60.0	Che.	#	
	石斧	D-6-a	II	10.2	4.9	2.6	177.1	Gr. Mud.	II A 2	
	#	C-13-d	III	10.9	6.6	1.8	178.3	#	II A 3	
	#	A-8	II	11.3	4.8	2.6	220.0	#	II A 2	
	#	D-14-d	#	(10.9)	5.1	2.1	(200.0)	#	II A 3	熱液鉱石片の接合資料 刀部欠損
	#	A-7-b	#	13.5	6.3	2.3	310.0	Ser.	#	
V-99	C-6-b	#	(11.3)	5.2	2.0	(190.4)	Gr. Sch.	#	#	刀部欠損
	#	C-13-d	III	11.5	5.6	1.4	144.2	Gr. Mud.	#	
	#	A-9	II	10.5	4.3	1.2	84.8	#	#	
	#	C-10	#	13.2	5.6	2.0	210.0	Ser.	#	
V-100	C-13	I	8.4	4.5	1.7	108.2	Gr. Mud.	#	#	

表V-39

特徴番号	種類名	出土地点	層序	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
V-99 134	石斧	C-6-b	II	8.2	3.6	1.1	49.3	Sch.	II A 3	
	"	C-14-a	I	9.6	3.3	1.1	66.2	"	"	
	"	C-6-c	II	9.0	3.3	1.0	42.0	Gr. Mud.	"	
	"	C-13-c	III	(6.6)	3.0	0.9	(32.7)	Gr. Mud.	"	基部欠損
V-100 137	"	C-13-d	"	7.0	3.2	1.1	37.9	"	"	
	"	A-10	II	(11.2)	3.9	1.0	(80.1)	Sch.	II A 4	
	石のみ	C-13-c	II	6.1	1.8	0.5	8.1	"	II A 5	
	"	D-10-d	II	5.3	2.3	0.7	16.6	"	"	
V-101 146	擦石	D-4-d	"	8.0	5.9	3.4	215.8	Sa.	II C 1	
	敲石	C-14-b	III	9.7	9.0	3.6	400.0	Cong.	II B 1	
	"	D-4-c	II	9.8	5.9	4.2	350.0	And.	"	
	砥石	C-11	I	12.1	7.5	1.3	136.0	Sa.	II D 4	
V-101 146	"	C-10	II	16.2	10.0	2.1	375.0	"	II D 1	
	"	C-7-a	"	14.7	9.3	4.9	912.0	"	"	
	"	C-5-d	"	13.0	12.8	2.0	350.0	"	"	
	"	C-14-d	K	(15.3)	(12.8)	7.1	(1320.0)	"	II D 2	
V-102 149	"	A-7-c	II	(6.4)	3.2	3.7	(111.5)	"	II D 3	
	"	C-10	I	12.3	8.5	2.8	330.0	"	II D 2	
	"	D-6-a	II	10.6	6.9	2.5	220.0	"	"	
	"	C-13	I	11.6	8.0	1.4	183.4	"	II D 1	
V-103 153	"	C-13-c	III	17.2	8.8	1.6	250.0	"	II D 5	
	"	C-14-b	II	14.4	8.1	2.8	350.0	Sha.	II D 4	
	石皿	C-10	"	18.2	15.2	6.5	2800.0	And.	II E 1	
	石鏟	A-14-c	I	4.1	3.0	1.0	19.1	Cong.	II F 1	
V-104 156	"	C-10	"	5.2	3.8	1.2	27.7	"	"	
	"	"	II	5.0	4.0	0.9	23.9	Dis. Mud.	"	
	"	C-6-c	"	5.8	4.2	1.2	37.3	And.	"	
	"	D-6-a	"	6.3	4.8	1.8	72.8	"	"	
V-105 166	"	B-6-b	II	6.8	5.3	1.7	63.0	And.	II F 1	
	"	B-6-d	I	6.3	6.4	2.3	133.0	Cong.	"	
	"	D-8	"	6.8	6.3	1.9	105.3	And.	"	
	"	D-6-d	"	8.5	6.7	2.4	75.5	Mud.	"	
V-106 178	"	D-9	"	6.7	6.6	1.9	123.7	Cong.	"	
	"	A-9	"	6.5	7.0	2.1	119.6	"	"	
	"	A-14-c	II	8.1	6.9	2.4	188.1	And.	"	
	"	D-7-d	"	7.9	5.1	1.9	95.5	"	"	
V-106 178	"	A-9	"	8.4	5.5	2.3	140.2	Cong.	"	
	"	"	I	7.8	5.0	2.1	90.0	"	"	
	"	C-9	"	7.5	5.6	2.0	104.8	And.	"	
	"	"	"	9.0	5.5	1.8	109.7	"	"	
V-106 178	"	D-9	II	8.5	5.4	2.7	170.2	Cong.	"	
	"	A-9	I	8.2	6.6	2.4	152.4	"	"	
	"	D-10	III	7.5	6.0	1.8	104.1	And.	"	
	"	D-6-d	II	8.0	6.1	1.5	94.0	Cong.	"	
V-106 178	"	D-6-a	"	8.7	4.6	2.1	117.0	And.	"	
	"	D-8	I	11.5	8.9	2.0	291.0	Mud.	"	
	"	B-6-c	II	10.6	7.4	2.4	211.0	Dis. Mud.	"	
	"	A-9	I	9.0	6.4	2.2	161.8	And.	"	
V-106 178	"	D-6-a	"	10.3	9.1	3.4	439.0	"	"	
	"	D-6-b	"	11.2	7.7	2.7	322.0	"	"	

標本番号	器種名	出土地点	層序	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
V-107 184	浮子	D-6-a	II	6.4	4.7	3.7	31.5	Pum.	II F 3	
185	#	B-7-a	#	6.6	5.2	2.3	26.8	#	#	
186	#	C-6-c	I	7.9	5.2	4.3	26.9	#	#	
187	#	A-7-c	II	8.7	6.9	5.7	109.4	#	#	
188	#	D-6-a	#	8.4	7.5	6.5	135.6	#	#	
189	石核	B-6-d	I	7.0	9.1	3.5	200.0	Sha.	III	
190	#	A-7-d	II	5.9	5.6	6.0	164.9	#	#	
V-108 91	#	C-9	#	6.1	5.7	4.8	152.7	#	#	
192	#	C-10	#	4.0	8.0	4.7	139.5	#	#	
193	#	C-11	#	5.3	7.5	3.8	142.4	#	#	
194	#	B-12	I	4.4	8.0	7.4	220.0	#	#	
195	#	C-7-b	II	9.9	5.9	3.5	209.0	#	#	
196	棒状原石	C-6-a	#	9.1	0.7	0.7	4.8	Obs.	IV B	
197	玉	C-6-a	#	2.6	2.5	1.9	17.2	#	VA	未製品?
V-109 198	石刀状剥片	C-14-a	D	4.0	2.6	0.6	7.8	Sha.	IE 2	頭部欠損 瓢箪場跡
199	#	C-6-b	II	3.6	4.0	0.7	11.7	#	#	
200	#	B-13-a	C	5.7	3.2	1.0	16.0	#	#	瓢箪場跡
201	#	B-13	II	7.2	1.7	0.5	5.5	#	IE 1	頭部欠損
202	#	A-8	I	8.0	1.9	0.6	8.6	#	#	完形
203	#	B-14-a	II	7.2	2.2	0.8	13.1	#	#	
204	#	D-4-c	掃土	8.6	1.6	0.5	7.6	#	#	頭部欠損 H-1掃土
205	#	B-12	II	7.3	2.4	0.8	14.2	#	#	完形
206	#	B-13	I	7.5	2.0	1.4	16.4	#	#	尾部欠損
207	#	#	#	8.0	2.1	0.9	16.4	#	#	完形
208	#	#	II	7.8	2.6	1.0	26.8	#	#	尾部欠損
209	#	#	I	7.3	2.2	1.1	21.0	#	#	頭部欠損
210	#	B-14-d	D	7.6	2.7	0.5	11.6	#	#	瓢箪場跡
V-110 211	#	B-13	II	9.0	3.2	0.8	23.5	#	#	完形
212	#	#	I	9.4	3.1	0.9	29.3	Sha.	IE 1	完形
213	#	B-14-a	II	11.1	2.8	0.4	15.5	#	#	頭部欠損
214	#	B-13-d	D	10.7	4.3	0.9	43.8	#	#	尾部欠損 瓢箪場跡
215	#	B-14-d	#	10.9	5.3	1.5	84.2	#	#	完形
216	#	B-13-a	#	10.9	4.0	1.4	62.6	#	IE 2	#
217	#	D-13-a	I	10.4	5.4	1.6	98.2	#	IE 1	#
V-111 218	#	B-13-a	D	4.7	1.5	0.4	3.8	#	ID 3	尾部欠損 瓢箪場跡
219	#	#	#	5.6	1.8	0.6	5.8	#	#	
220	#	B-13-b	B	5.1	2.2	0.5	5.4	#	#	
221	#	B-13-d	C	7.2	1.6	0.5	5.9	Che.	#	
222	#	B-13-b	D	5.4	2.7	0.5	9.7	Sha.	#	頭部片
223	#	C-13-a	II	6.4	2.8	0.7	11.7	#	#	尾部欠損
224	#	B-13-a	C	4.7	3.2	0.6	15.2	#	#	頭部片 瓢箪場跡
225	#	C-13-a	B	7.2	2.8	0.7	12.4	#	#	
226	#	C-14-b	III	6.3	2.9	0.5	7.6	#	#	頭部欠損 背面に摩耗痕あり
227	#	B-14-a	II	6.1	3.9	0.9	21.6	#	#	
228	#	C-6-b	II	10.0	4.9	1.0	45.2	#	#	完形
229	#	B-13-b	B	12.8	4.8	1.1	56.6	#	#	瓢箪場跡

4 小 括

調査前と終了後、写真撮影のため、遺跡北西の丘陵頂に登る折、調査区外の後方台地を歩いた。いつまでもゆるい傾斜のつづく笠原に、处处住居跡の存在を思わせる窪みのあるのが、目に付いた。上泊3遺跡は、調査区外の台地端と、この後方台地に広がる、広大な遺跡である。そして、幌泊段丘上に眠る遺跡、礼文島内外の遺跡と、関連性をもって語られねばならない遺跡である。今回調査した2,610m²は、広大な遺跡の一部であり、他遺跡との有機的関連を述べるには、不足する部分がかなりあることを、まずことわっておきたい。

当遺跡は、縄文時代中期と統縄文時代初頭の複合遺跡である。時期別遺構数は、縄文時代中期に属するものが、住居跡5軒、土壙14基、集落10基、石組み炉1基、炉跡(焼土)57基の他、礫・石錐集中区や廃棄場跡がある。またH-1揚土も、廃棄場の再廃棄と考えている。統縄文時代に属するものは、住居跡1軒だけであるが、沢をはさんだ両サイドの東上泊・上泊4遺跡との関連がみとめられる。

a 統縄文時代の上泊3遺跡

H-1上面の住居跡は、統縄文時代初頭、道北地方でいう所謂メクマ式土器が、床面から出土する。遺構自体は、H-1下面住居跡の窪みを利用した、浅皿状のものであるが、焼土や石器の器種からみても、仮屋・一時的な使用とは考えられない。一定期間の(季節的ではあっても)起居定住場所といえるであろう。当該期に属する遺物の分布は、上泊3遺跡では、このH-1周辺の台地南側と、12ラインより北の台地北側に限られている。住居面より上層にある遺物は、東上泊遺跡B地区のものと類似している。台地北側のものは、上泊4遺跡との関わりがあり、ある程度考慮されねばならない。時期的には、上泊3遺跡H-1上面の遺物が、東上泊・上泊3・上泊4遺跡を通しては、最も古い段階にあり、ここから東上泊B地区、さらに周辺へと広がっていったものと言えよう。

なお、遺物についての詳細は、各項や第VII章を参照されたい。

b 上泊3遺跡における、縄文時代中期土器の様相

当遺跡における、縄文時代中期とは、土器でいうと、I群A類：撚糸文・押型文のあるもの、I群B類：円筒上層式の範疇に含まれるもの、I群C類：いわゆる天神山式(嵐山F類を含む)と呼ばれるもの、の3つに大別できる。時間的にはA・B類間の差は不明だが、B・C類間は、連続的なものと考えられる。道内の遺跡でいえば、道南や日本海側の円筒土器文化の遺跡や、鷹栖町嵐山遺跡・名寄市智東B・D遺跡が、比較の対照となろう。

I群A類の土器は、きわめて少數である。撚糸文土器が、廃棄場中から1個体出土した他は、包含層に、押型文土器が4個体分破片で発見されたのみである。I群B・C類土器の分布が密の部分とはほとんど重ならない分布を示すことは興味深い。

I群B類土器は、主に廃棄場跡からの出土である。廃棄場形成がこの時期から開始されたことを物語る。少數ではあるが、H-1揚土(廃棄場の再廃棄)やH-4盛土からも出土する。

I群C類土器は、この遺跡の出土品中、主体をなすもので、包含層や廃棄場跡・住居跡から

多数の個体・破片が出土している。遺構から出土する土器は大半が当類のもので、遺構はこの時期に営まれたものといえる。各類土器の詳細は、各節やVII章に述べてある。

c 上泊3遺跡における縄文時代中期の石器の様相

石器は、統縄文時代のものが、その土器分布地点で混入する以外は、縄文時代中期のものと考えてよいだろう。全体の様相は、当該期の他の遺跡と、それほど差がない。しかし器種やその組成において相違する面が、いくつか指摘できる。1つには、生産に関わる点で、石鋸先・石錐・石刃状剥片が、他遺跡と比べて頭抜けて多いということである。海に依存した生活を、如実に物語る器種組成である。石刃状剥片は、名寄市智東B・D遺跡・常呂町朝日トコロ貝塚・標茶町茅沼遺跡等から出土している。I群類土器のある智東B・D遺跡との関係は看過できない。第2に、道南の円筒土器文化の遺跡に伴う、大型石皿や、半円状擦石が全く出土しないことが上げられる。擦石自体も、2点しか出土しておらず、これも生業と関わることかもしれない。円筒土器文化が、道南から日本海を北上してくる時点で、これらの器種に何らかの変化が生じるのであろうか。この2つの相違点は、さいはての地礼文島のこの遺跡から、逆に、円筒土器文化をえぐり直すヒントとなるかもしれない。また、礼文島では產しない、黒曜石製の石器・石核・剥片も數多くみられる。文化・人間の移動・展開に關係することであり、後に触れたい。

d 縄文時代中期の住居跡について

当遺跡で、完全な形で調査できた住居跡は、H-1下面のみであり、他は $\frac{1}{2}$ 前後が調査区外・破壊で未確認である。住居の平面形を、H-1下面や推定形でみると、多角的な様相をもち合せた、不整長円形としてえられるものと思う。遺内の縄文時代中期の住居跡については、過去多くの論述がなされている。特に平面プランについては、日ノ浜型・サイベ沢型の分類(高橋正勝 1974)や、乙部町元和遺跡の調査から、「明確に一つの形態を導くことは困難」(松田 1976)とした道南での論考。不整多角形・四角形・九角形をあげる藤本 強(1977)・「早・前期以来の多角形の系譜」とする宇田川(1977・1979)ら道東北地方の例。一般的には規制がなく、多角形・不整形であり、道央部以北では、定形的プラン・明確な炉跡・整然とした配列の柱穴を有する住居跡が、稀少の存在であることは、「住居構築上の文化的な特性として理解」すべきもので、定住を否定するものではないとする高橋和樹(1975・1977)の論考があげられよう。上泊3遺跡の当該期の住居も、例外でないことがわかるであろう。

次に住居に付属する施設はどうだろうか。H-1下面・H-4でみられる、住居中央にあるピットが、知内町森越遺跡等でみられるような、中央ピットとしての性格を有するものかは不明である。火種置場・灰置場などの用途を考えてみる必要があろう。柱穴も、整然と配列するものはない。H-3は、 $\frac{1}{2}$ が調査区外だが、柱が外周する。焼土のないこと等、居住よりも、倉庫等の用途を考えるべきであろう。H-4は、周堤上や壁付近に柱穴がみられ、この遺跡の中では比較的、配置に規則性がある。

炉では、H-4の石囲い炉跡が注目される。焼土は厚く、円形に並ぶ19個の小型の石抜痕(数個の小礫が、炉上層の覆土にみられる)があり、その抜痕の間に、3本の杭痕が2本対1本で

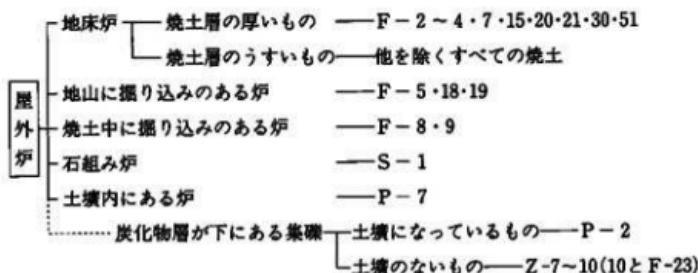
向かい合って存在する。晩見ではこのような例を知らず、炉の使用意図や使用方法を考える上で、今後検討を要する炉の構造であろう。この炉やHF-2からは、魚骨片・サメ類の歯・海獣骨片が検出されている。H-1下面のHF-1にも魚骨片・海獣骨片がみられた。海に生活を依存した証拠となるものである。

e 土壌・集礫・焼土の性格と住居跡の関係—上泊3遺跡における集落のあり方—

14基確認された土壌のうち、P-11~14は廃棄場跡と関連の深いものであろう。他の土壌にしても、P-2・7を除き、その性格はあいまいである。しかし、いずれも覆土に炭化物を含み、I群C類土器の時期と推定されている。P-2は円形浅皿状の遺構に炭化物層・角礫が間隙なくつまつたもので、蒸し焼き用の施設と推定した。Z-7~10・F-23のあり方とともに、名寄市智東B遺跡の炉跡のあり方と、類似している。なお、H-2の床面にも、炭化物層が下にある集礫が存在する。P-7は、炉が土壌内中央に掘り込まれた、特殊な屋外炉である。

集礫は、炭化物の有無や、集礫の状態によって分類できよう。すなわち、炭化物をもつ前述のZ-7~10と、礫の集合としてのZ-1~6である。Z-5はH-1揚土下にあり、調査範囲外の台地端の遺構?との関わりで覚えるべきであろう。Z-1~4は、H-1の北西に、F-1~14・S-1・P-1~4と、ほぼ環状に並んでおり、そこでの意味・性格を考える必要がある。Zの個々のあり方は、例えば、乙部町栄浜遺跡第2地点の集礫跡と類似している。

焼土については、たとえ使用が一度であっても、屋外炉として覚えるべきである。当遺跡の屋外炉を、その形態によって分類すると、次のとくくなる。



この分類による考察は、他の機会を期すことにし、ここでは、H-1北西にある、F・S・P・Zによって構成される環状の広場について、考えてみたい。

住居からみて一つの方向に焼土が集中して検出された、縄文中期ごろの遺跡としては、乙部町元和遺跡の、第2・第3地点が例として上げられる。ただ、元和遺跡の場合、1住居に複数の炉が対応するわけではなく、円環状のまとまりもみられない。しかし、上泊3遺跡の場合H-1に対してF-1~14・S-1・P-1~4・Z-1~4・6、H-2に対応するF-15~19・P-5、H-3に対するF-20~23・P-6・7・10・Z-9・10、H-4に対応するF-24~27・55~57という図式になる。H-3については、特殊用途と考えるため、対応するものは、H-

4対応か、独立したものと考えられなくもない。いずれにしても、住居の北西側に作業場等の機能を有する広場が存在したことは、想像できよう。特にH-1北西の環状に並ぶ状況と、H-4の外周F-24~27と石器の出土状況(図V-25)は、その想像をより具体的に示すものであろう。住居とその北西の火に関する施設という対応からみると、12・13ラインの台地端調査範囲外に一軒の住居跡の存在を想定できる。

では、なぜ住居の北西方向なのだろうか。中央平坦面にあえて、居住地を設定せず、広く面として残していることは、何らかの理由があるのだろう。火ということからして、風向きにその理由の一端を求められないだろうか。Ⅱ章で述べたごとく、礼文島の自然環境は、日本海を北上する対島暖流の影響で、冬も道東・内陸部よりも温暖で、流水の接岸も少なく、港も不凍である。霧も道東やオホーツク海沿岸と比較すると、回数・時間とも少ない。風は春から夏にかけて、南西風(シカグ)や、対する北東風(アイカゼ・アイシモカゼ)が、卓越する。夏はおだやかな日が多く、秋は徐々に強風が増し、雨が多くなる。冬になると北西風(タマカゼ)が吹きさす。このような環境にある上泊3遺跡で、屋外で火を使う作業をするには、雪に地面が覆われ北西風の吹く冬は不向きであるが、春~秋は、住居の北西方向は、きわめて都合のよい場所である。温暖な環境や火に関するところからみて、屋外作業を伴った住居が集まつた当遺跡は、定住地としての集落だったとするのは、短絡であろうか。

土器からみると、この場に集団としてのり込んだのは、円筒土器文化を持ち合わせた人々である。前述したとおり、対島暖流が北上する日本海を、南から北へ移動してくることは、当時としても、それほど困難なことではなかったであろう。人々はこの島にはじめて円筒土器文化を持ち込み、黒曜石をたずさえていたことは想像できる。留まるか、引き返すか、さらに北上するかの岐路に立たされた時、資源無尽蔵の海を眼前にし、しかも本道・利尻島を眺むことのできるこの地に、孤島としての悲愴感はただよわない。あるいは幾度かの渡米をくり返し、定住を決意したことだろう。集落が成立していくば、冬もさほど寒さの厳しくない環境で、豊富な食資源を背景として、上泊3遺跡の集落が、この時期の礼文島の中核として営まれていたことも考えられる。それは、器種豊富で数多い石器群という侧面からも見えられるだろう。特に、石鏸・石鋸先は、海とのつながりなしには考えられず、石刃状剝片やナイフ類も、狩猟(獵)物の解体という点で、見のがせない。資源の貯蔵・加工や交易という経済的な動きも、比較的頻繁に行われていたであろう。礼文島には産しない黒曜石の多さや、I群C類になってからの豊富な土器の量からも推測される。無限の可能性を抱かせる海と、屋外作業で火を焚く時、家屋ごしに見る利尻富士を、信仰にも似た気持ちで眺める、当時の人々の様子が思い浮かぶ。

f 廃棄場跡について

ここに人々が定住し、集落を営んだ結果、B-13・14グリッドを中心とする廃棄場が形成されることになる。以下この廃棄場の特徴を要約すると、①基底面が、Ⅲ・Ⅳ層をある程度削ってつくられていること、②層序において土器の変遷が明確によみとれること(I群B類からI群C類への変化)、③土器とともに1,091点の石器やフレークチップ、骨角製品、焼骨が混在して廃

棄されていること、④遺物とともにローム土が捨てられているが、これに焼土粒・炭化物が夥しく混入していること、⑤土器自体に補修孔が多く（特にI群B類）、出土状態は、1個体がつぶれた形のものと、破片が広範囲に散布されているものが混在しており、土器壊の様相を呈していること、⑥石器は、遺跡全体の器種割合からみると、石錐・石匙・円形搔器が特に多いこと、⑦サメの歯の垂飾のこわれたものや、弓筈状の骨製品の破損品が捨てられていること、⑧出土する動物遺存体は、魚類の骨齒や海獣骨であること、などである。

近年、遺物の廃棄という行為は、住居の廃絶等、その遺跡の時間の流れと対応して、パターンの認識がなされている。この廃棄場や、廃棄場形成後の再廃棄と理解しているH-1掃土は、まさに住居外に形成された廃棄行為の蓄積物である。しかし、今回の調査は、時間に追われ、B-13・14グリッド中心の廃棄場跡の、土器の層位的取り上げを行うにとどまった。従って、廃棄パターンとしての認定は避けた。ただ、この遺構が、青森県中の平遺跡にみられる、円筒土器の住居外廃棄「中の平バターン」（市川・鈴木他 1974）に類似することは、指摘しておかねばならない。

青森県中の平遺跡では、住居廃絶後の内部堆積土には土器廃棄はみられず、捨て場地点に伝統的に土器廃棄が継続されている。多量の土器片が敷きつめられた状態と、未だ使用に耐えうる完形土器や、それがつぶされた状態で出土する。調査者は、不用な土器として、あえて壊して捨てるというよりも、魚骨・鯨骨・炭化物などともに完形状態で廃棄されたように観察されている。当遺構でのあり方と酷似していることが、うかがえる。土器が使用できなくなったから廃棄するというよりも、使用者の意識や土器型式の変化が、この廃棄状態を為しめたのであろう。当遺跡の場合、I群B類（円筒上層式）土器に、補修孔がかなり多くみられるのは、ここに円筒土器文化をもたらした人々が、入手し難かった土器を、長年修理を重ねて使用していたと考えてよいだろう。型式が変化し、I群C類土器が入るようになると、徐々に始まっていた廃棄が、急速に進行し、その行為はI群C類土器の時期にも、伝統的に継続したものと考えられる。廃棄場は、土器に限らず、使用しなくなったものの「墓場」としての性格を有するのであろう。H-1掃土にみられる再廃棄以前の、廃棄場の状況も、I群B類のほとんど終焉期に、廃棄が開始されただけで、B-13・14グリッド中心の廃棄場と大勢に相違はないであろう。廃棄場最上層にみられる砾群は、この廃棄場の廃絶を物語るものであろうか。なお、砾・石錐集中区については、台地後方部の人間によるものと考えている。廃棄・作業場等の意味があるのである。

島の特殊性という考え方、あまり通用しない。限りない海の資源を経済的基盤とし、利尻富士の見事な眺望を眼前にして、人々の生活は、決して忍耐の日々ではなかったはずである。

（三浦 正人）



1. 調査前風景



2. 調査後風景



1. 調査前風景（北西山上より）



2. 調査後風景（北西山上より）



1. H-1 調査前



2. H-1 周辺遺物出土状況



1. H-1 上面 セクション



1. H-1 上面 実地風景





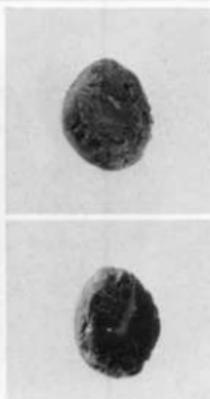
1. H-1上面
土器(1)出土状況



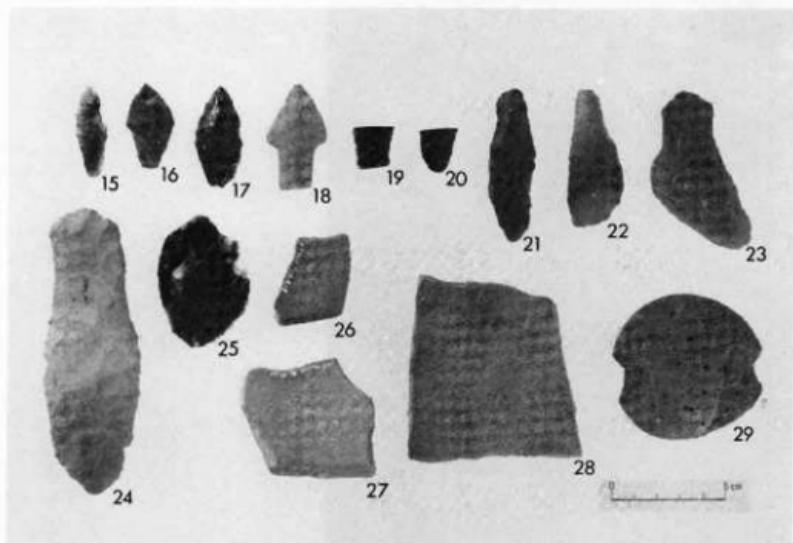
2. H-1上面 土器(1)



3. H-1上面 フレイク集中出土状況



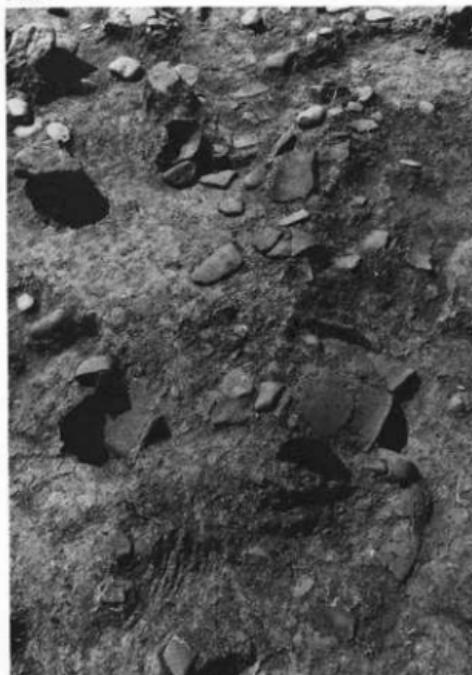
4. H-1上面 コハク
(表・裏)



1. H-1上面 石器



2. H-1 掘土 遺物出土状況
(手前は Z-5)



1. H-1 掘土 遺物出土狀況



2. H-1 掘土 遺物出土狀況



1. H-1 掘土 土器(1)



3. H-1 掘土 土器(3)



2. H-1 掘土 土器(2)



4. H-1 掘土 土器(5)



4. H-1 掘土 土器(4)



1. H-1 掘土 土器(6)



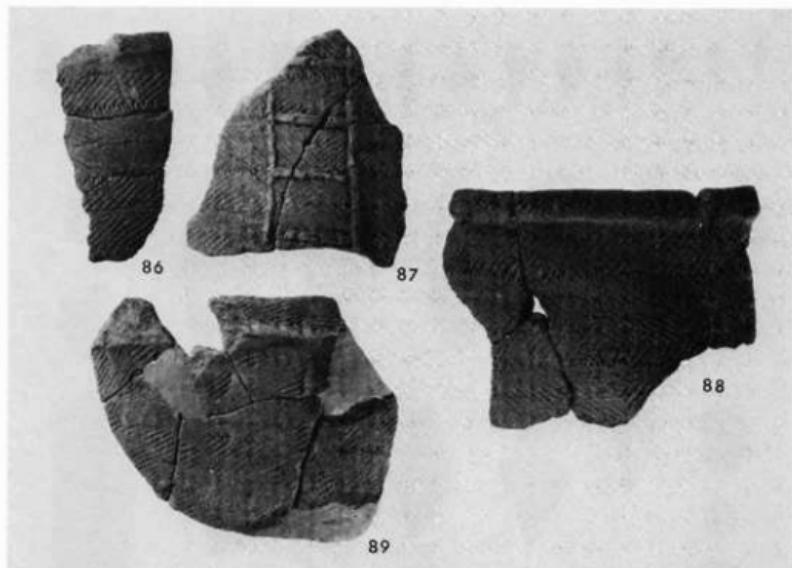
2. H-1 掘土 土器(7)



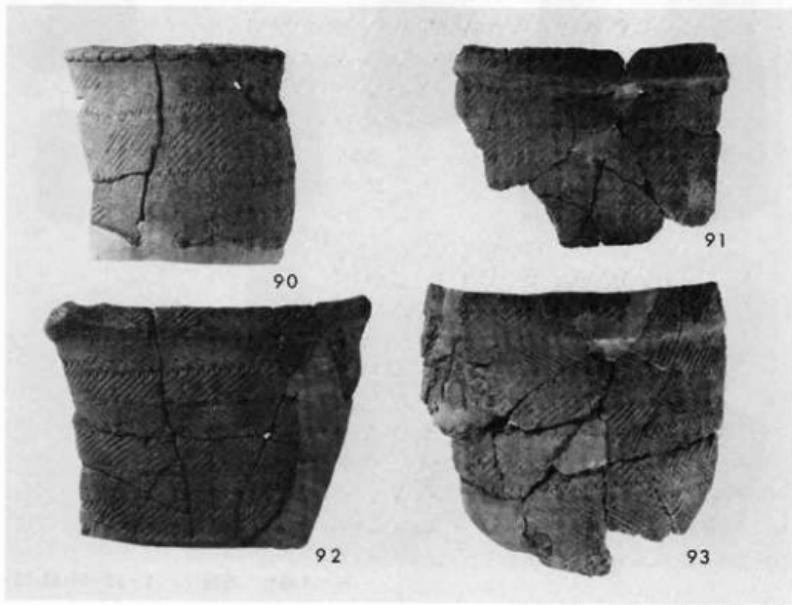
3. H-1 掘土 土器(8)



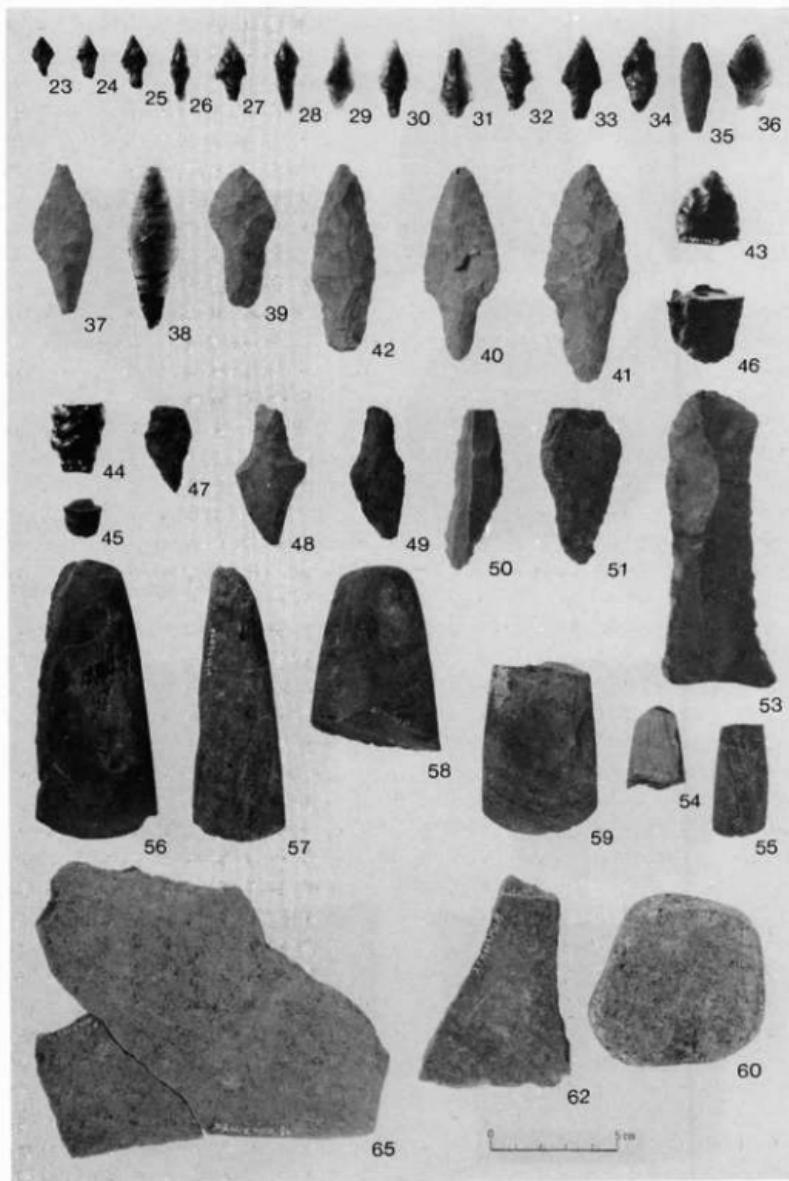
4. H-1 掘土 土器(9)



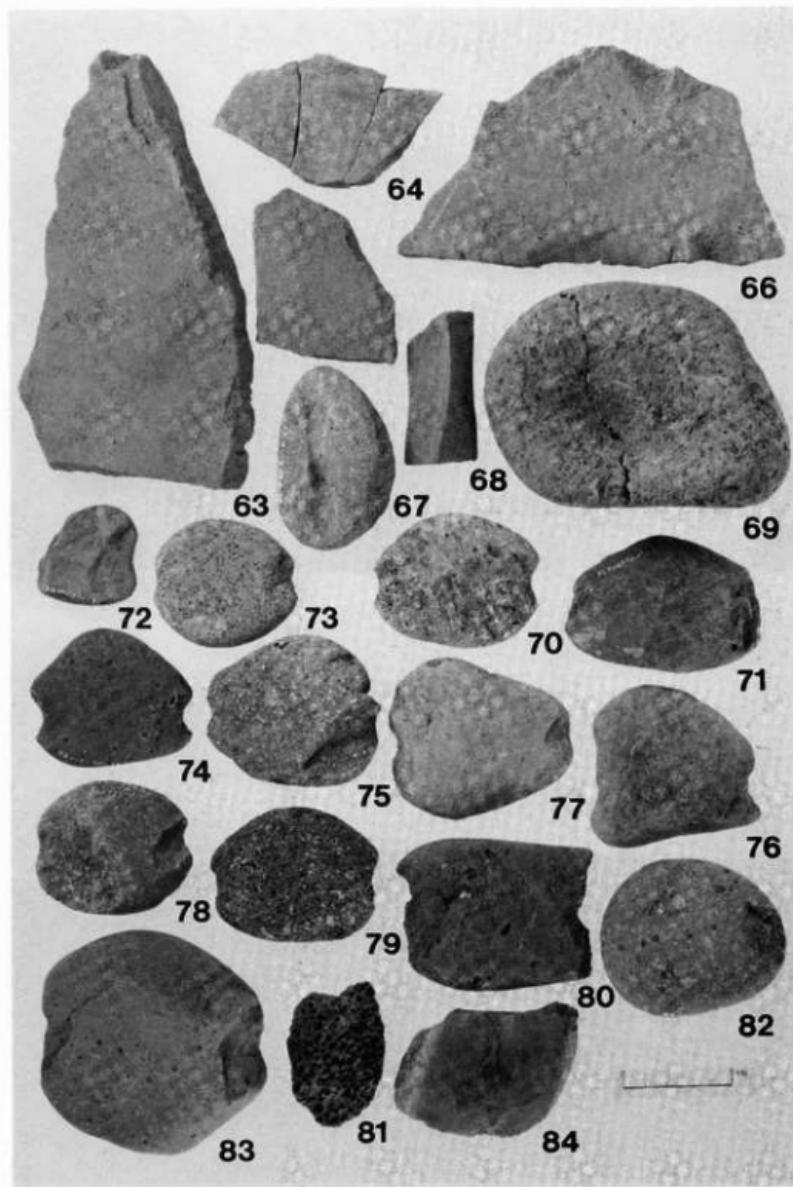
1. H-1 掘土 土器(86~89)



2. H-1 掘土 土器(90~93)



H-1 掘土 石器(23~5・53~60・62~65)



H-1 掘土 石器(63・64・66~84)



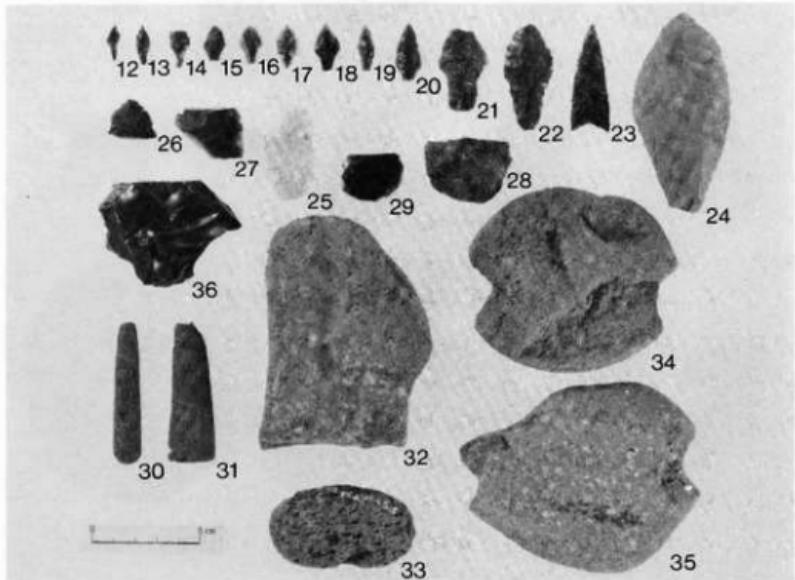
1. H-1 確認状況（南西より）



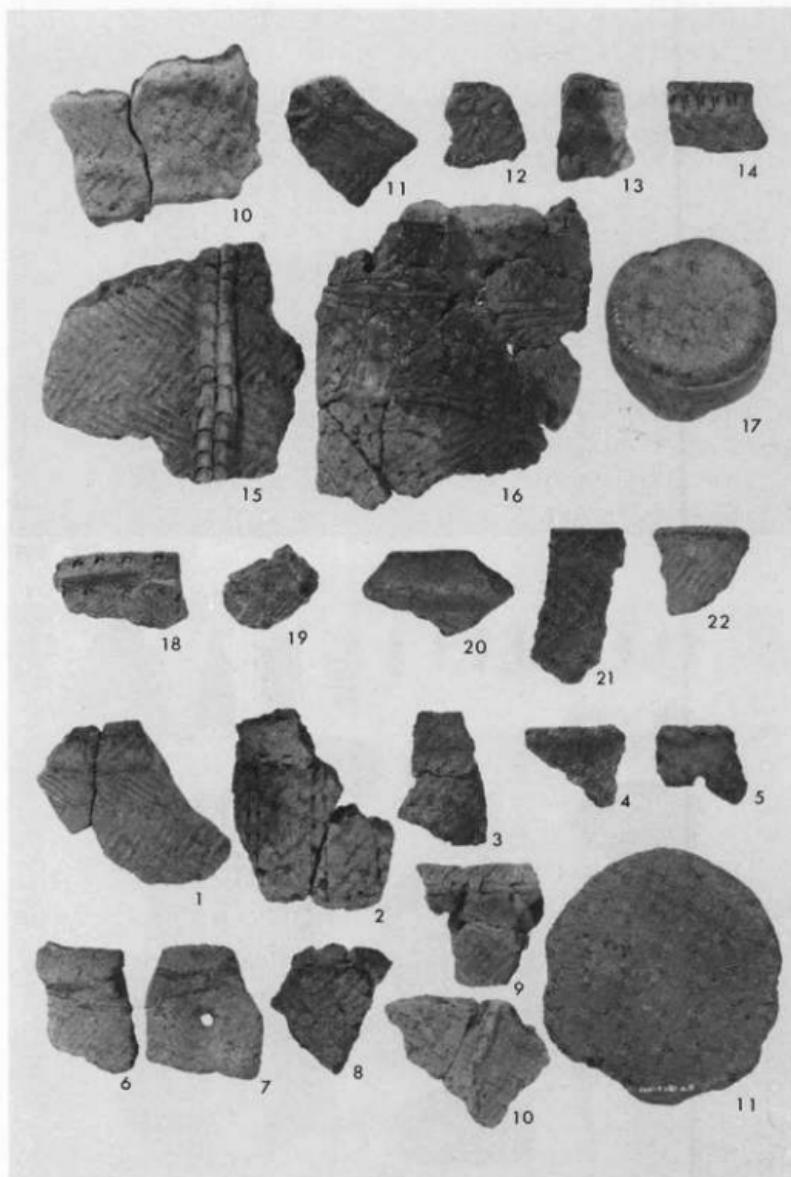
2. H-1 下面 完掘風景（南西より）



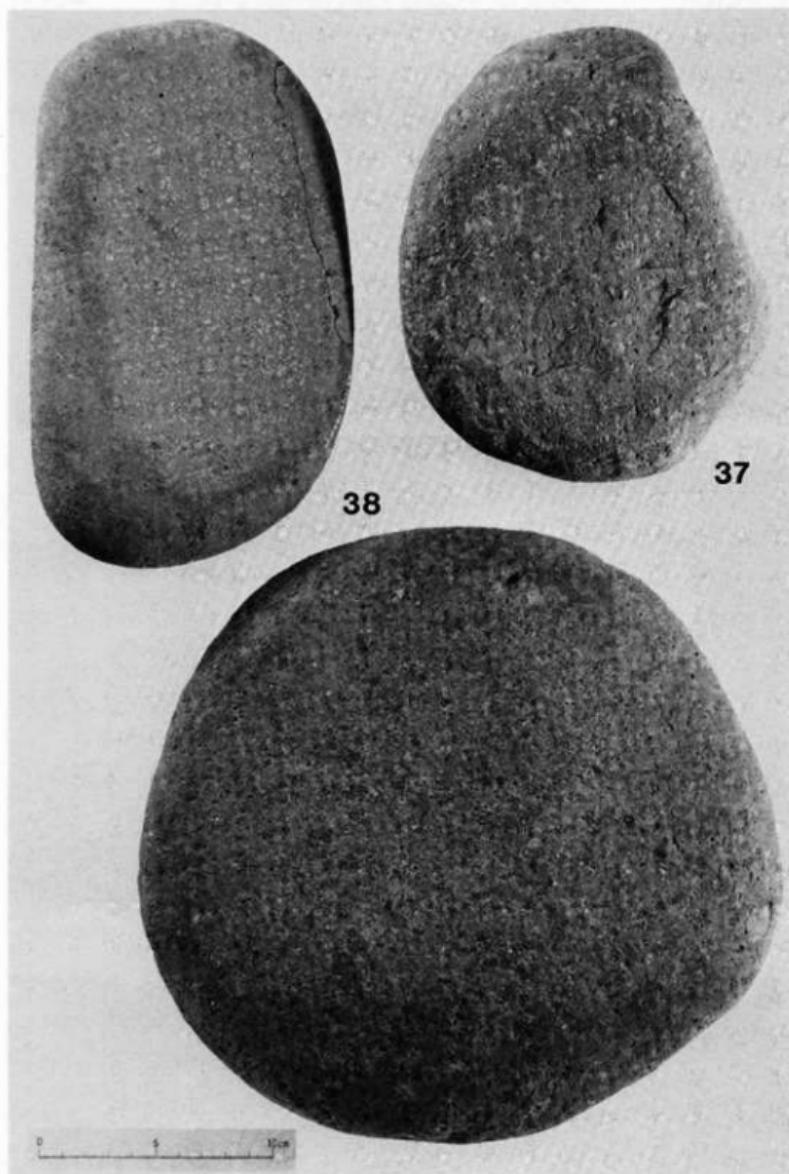
1. H-1下面 完掘



2. H-1下面 石器・石核(12~35)



H-1 掘土 土器(10~22)・下面 土器(1~9)



H-1 掘土(37-38)・下面 石皿



1. H-2 上層面



2. H-2 下層面



3. H-2 セクション



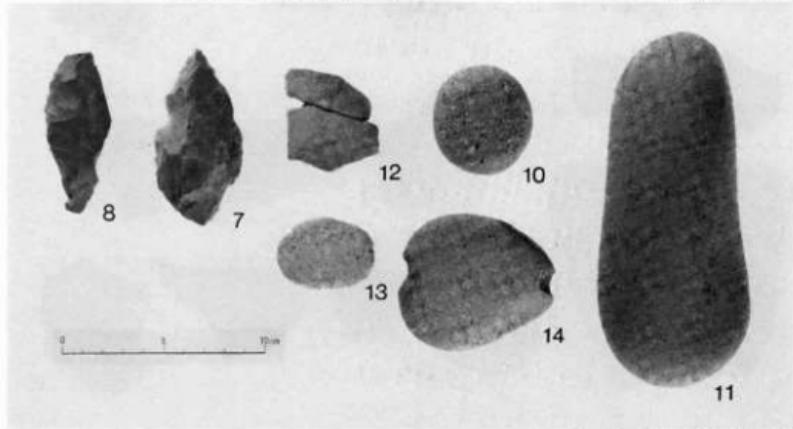
1. H-2 上層面の集疊



2. H-2 上層面土器出土状況



3. H-2 上層面土器(1)



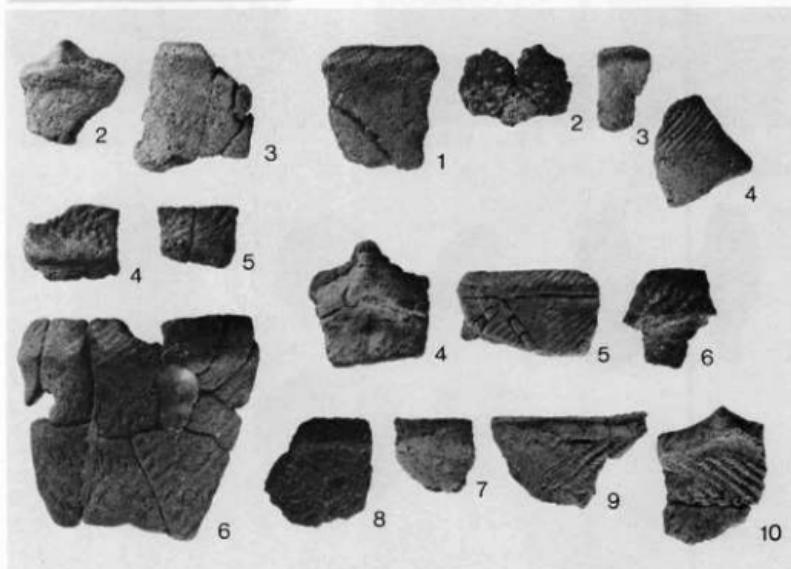
4. H-2 石器 (7・8・10~14)



1. H-3



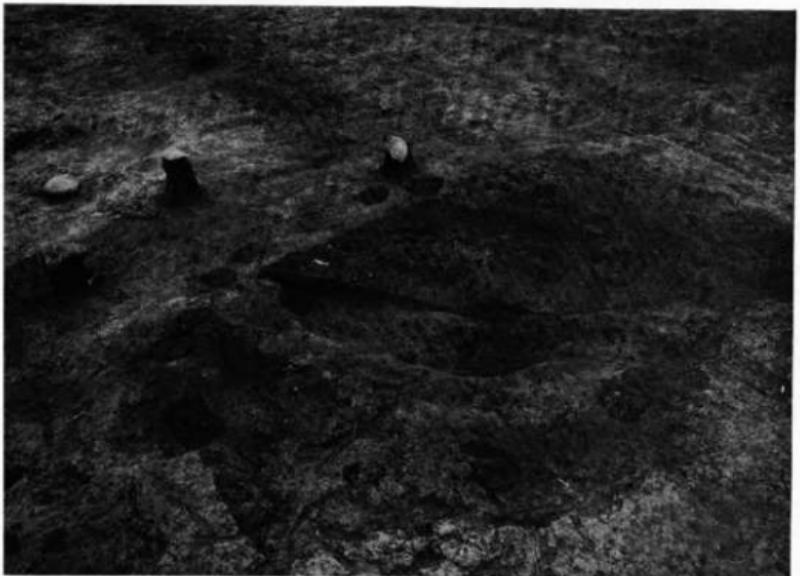
2. H-3 石器(5・6)



3. H-2(2~6, 左), H-3(1~4, 上), H-4(4~10,)土器



1. H-4



2. H-4 石囲い炉跡



1. H-4 盛土
土器(3)出土状况



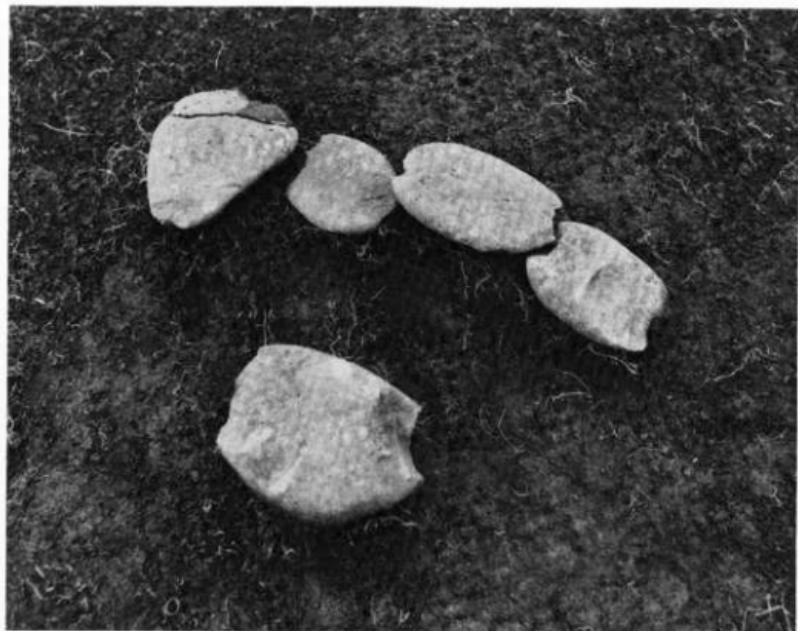
2. H-1 盛土 土器(3)



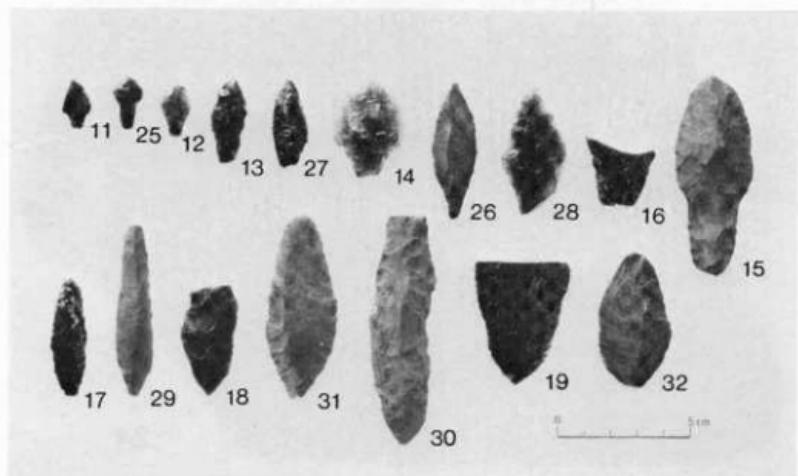
3. H-4 土器(2)



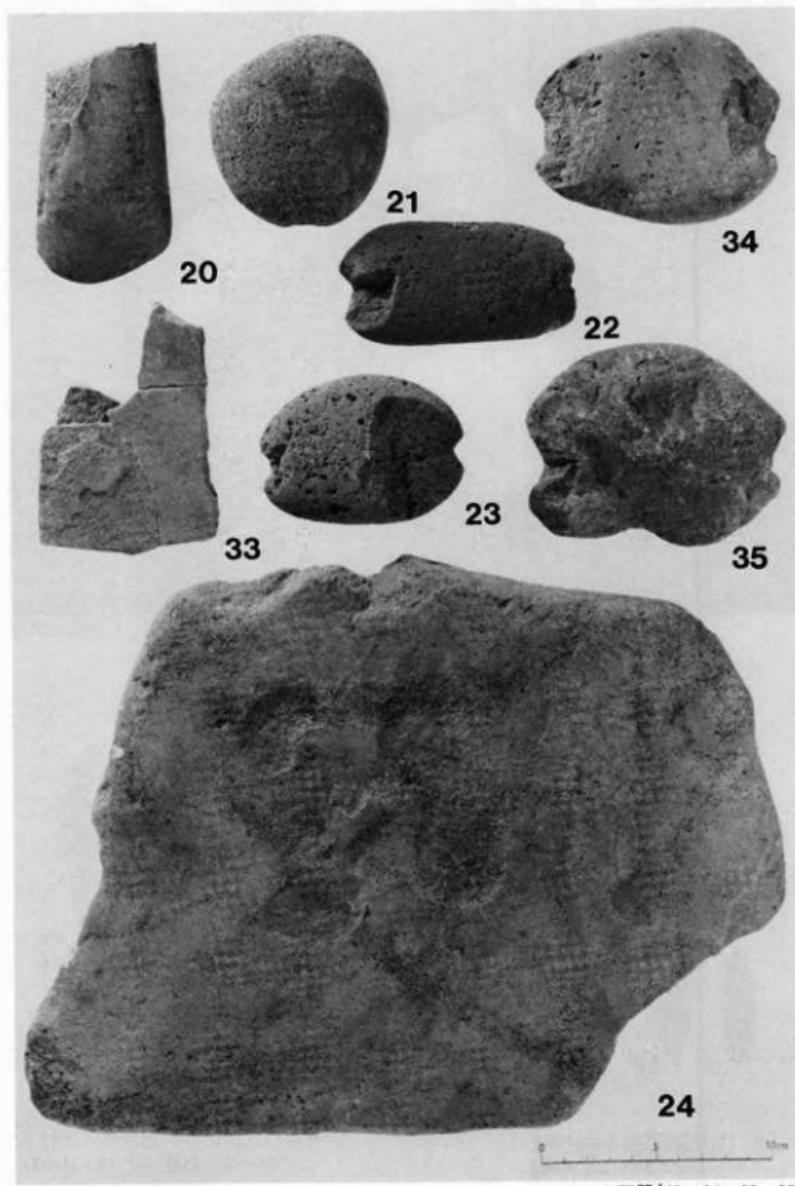
4. H-4 土器(1)



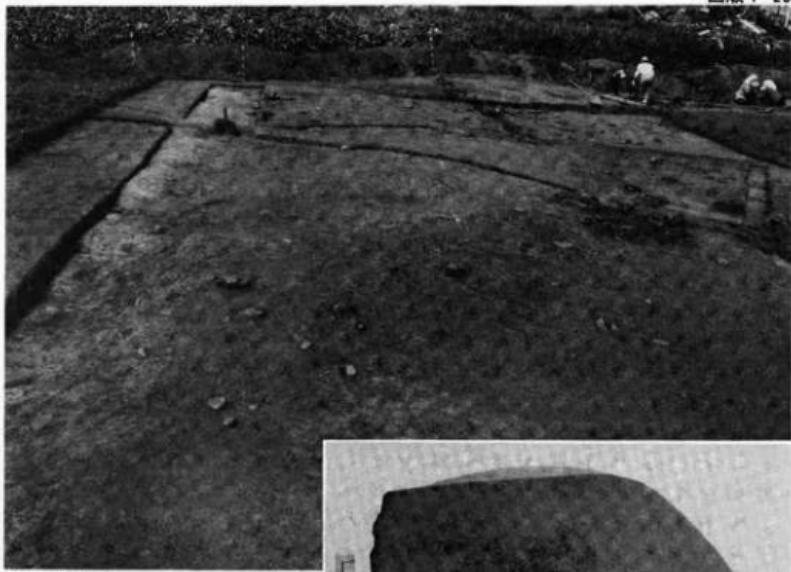
1. H-4 外周 石錐出土状況



2. H-4 石器(11~19・25~32)



H-4 石器(20~24・33~35)



1. H-5



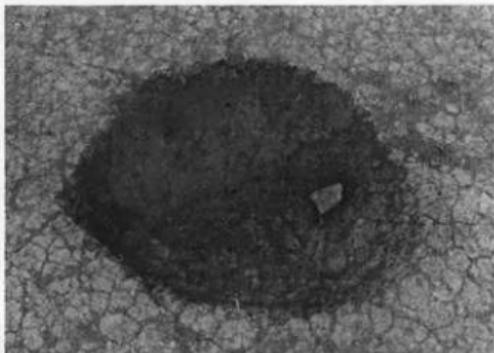
2. H-5 石皿



3. P-2



1. P-3



2. P-5



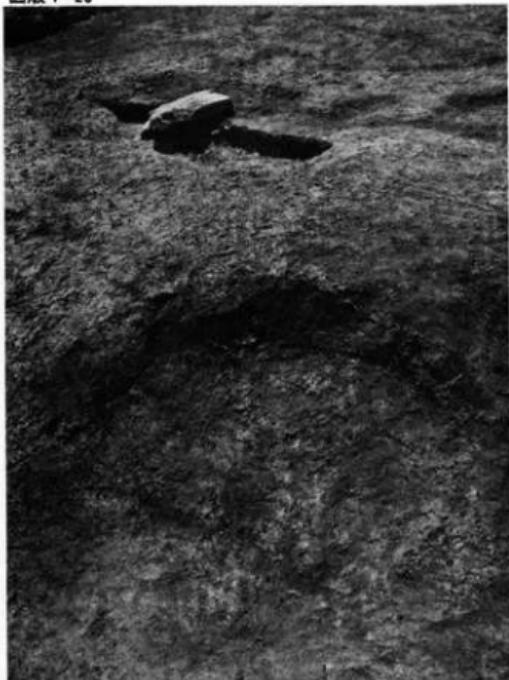
3. P-6(上)・7(下)



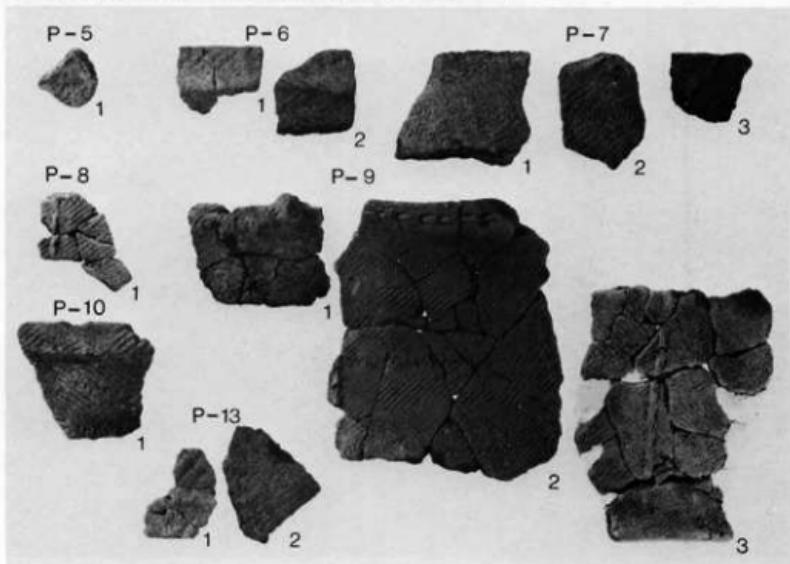
1. P-8(左)・9(右)



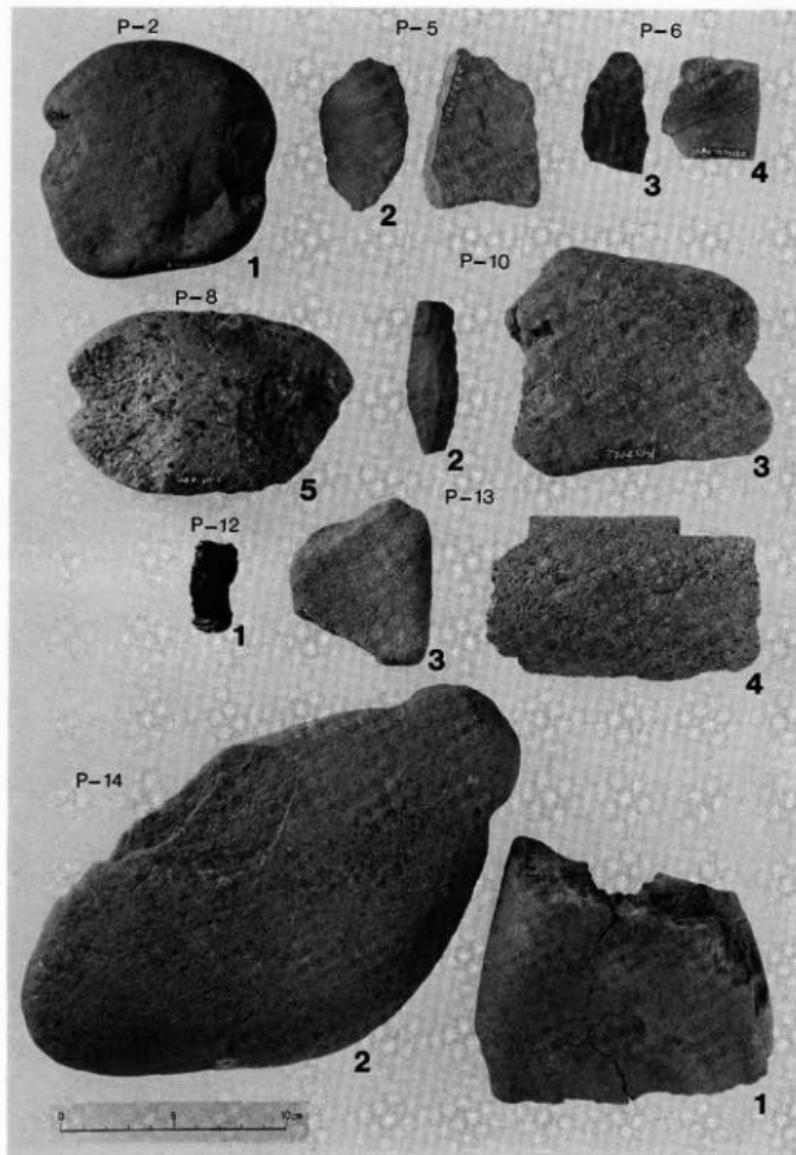
2. P-12



1. P-13(上)・14(下)



2. 土壌出土の土器



土壌出土の石器



1. H-1上層のZ・F群

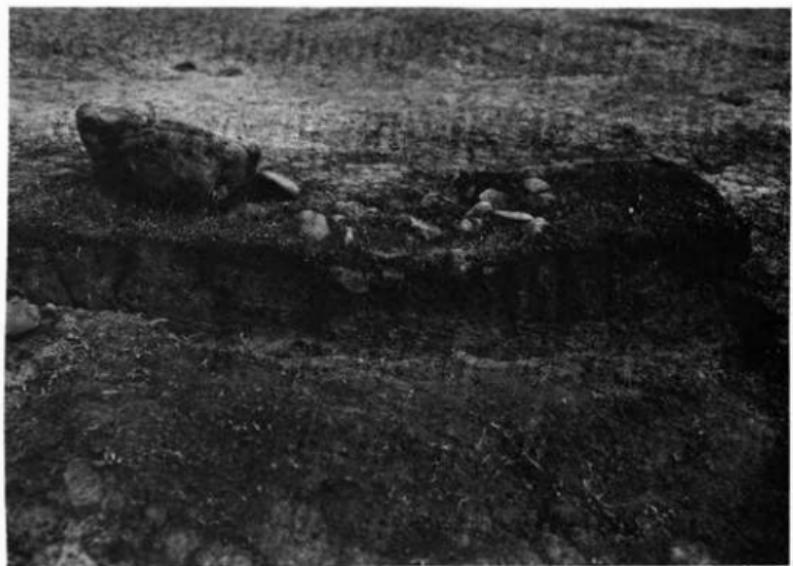


3. Z-1 石斧(2)

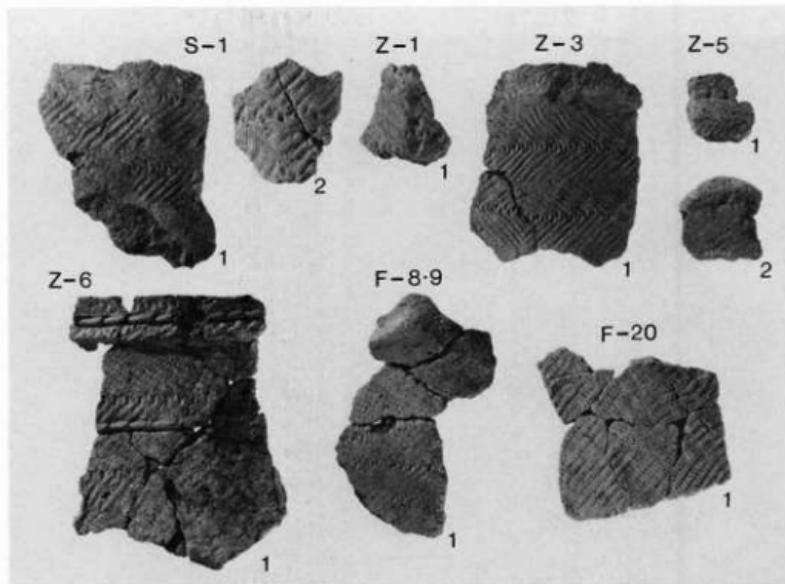
2・Z-1



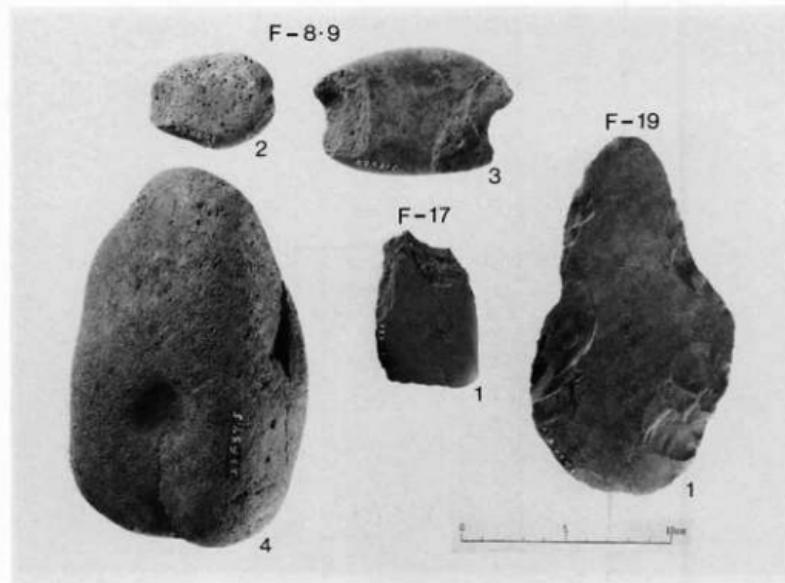
1. Z-10 • F-23



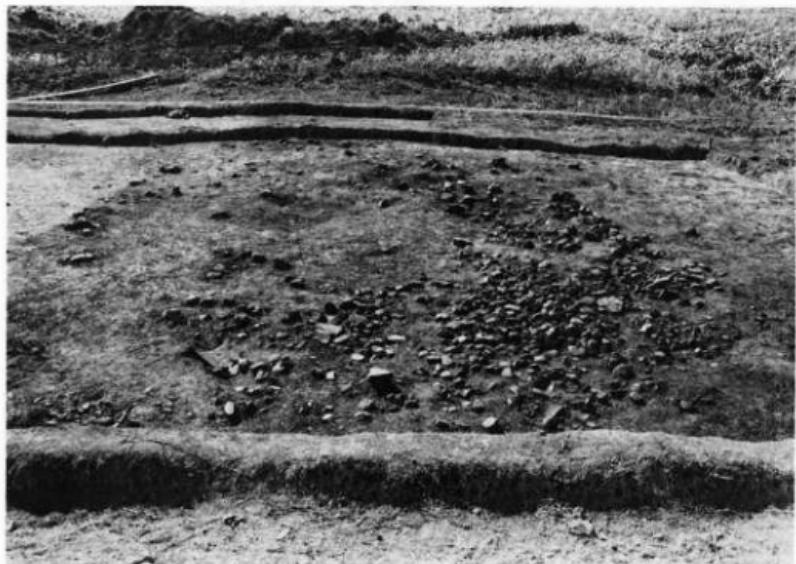
2. F-8 • 9



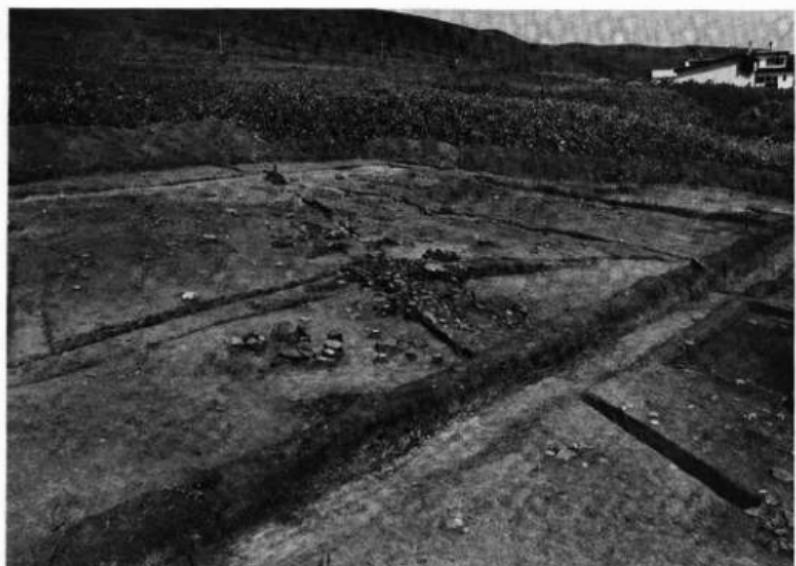
1. Z・S・Fの土器



1. Fの石器



1. 廃棄場跡 碑出土状況



2. 廃棄場跡 遺物出土状況



1. 廃棄場跡 土器出土状況



2. 廃棄場跡 土器出土状況



1. 廢棄場跡 土器出土狀況



2. 廢棄場跡 土器出土狀況



3. 廢棄場跡 土器出土狀況



1. 廃棄場跡 土器(1)



2. 廃棄場跡 土器(2)



3. 廃棄場跡 土器(3)



4. 廃棄場跡 土器(4)



廐塗場跡 土器(5)



1. 廃棄場跡 土器(6)



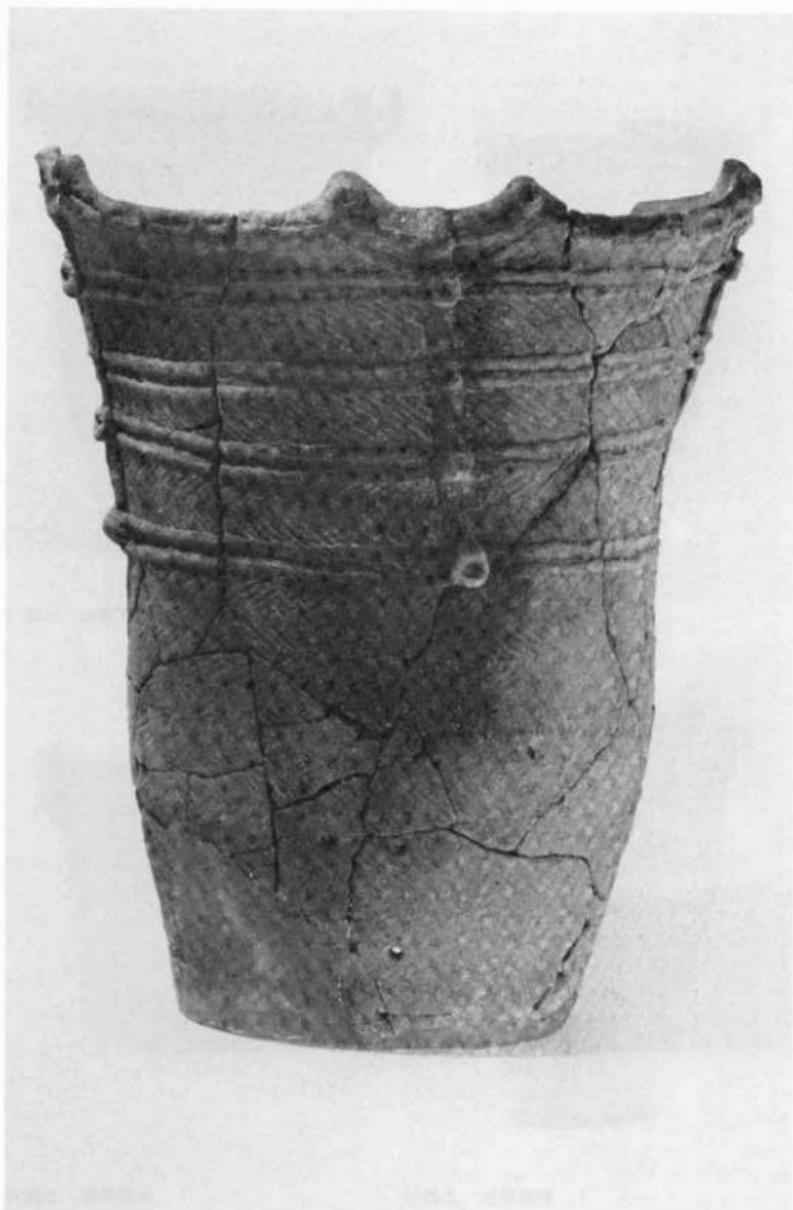
2. 廃棄場跡 土器(7)



3. 廃棄場跡 土器(8)



4. 廃棄場跡 土器(9)



虎表場跡 土器⑩



1. 廃棄場跡 土器(1)



2. 廃棄場跡 土器(2)



3. 廃棄場跡 土器(3)



4. 廃棄場跡 土器(4)



1. 廢棄場跡 土器⑯



2. 廃棄場跡 土器⑰



3. 廃棄場跡 土器⑱



4. 廃棄場跡 土器⑲



1. 廃棄場跡 土器(20)



3. 廃棄場跡 土器(22)



4. 廃棄場跡 土器(23)



2. 廃棄場跡 土器(21)底部(下)



5. 廃棄場跡 土器(24)



1. 廃棄場跡 土器(25)



2. 廃棄場跡 土器(26)



3. 廃棄場跡 土器(28・29・27)



1. 廃棄場跡 土器(30)



2. 廃棄場跡 土器(31)



3. 廃棄場跡 土器(32)



4. 廃棄場跡 土器(33)



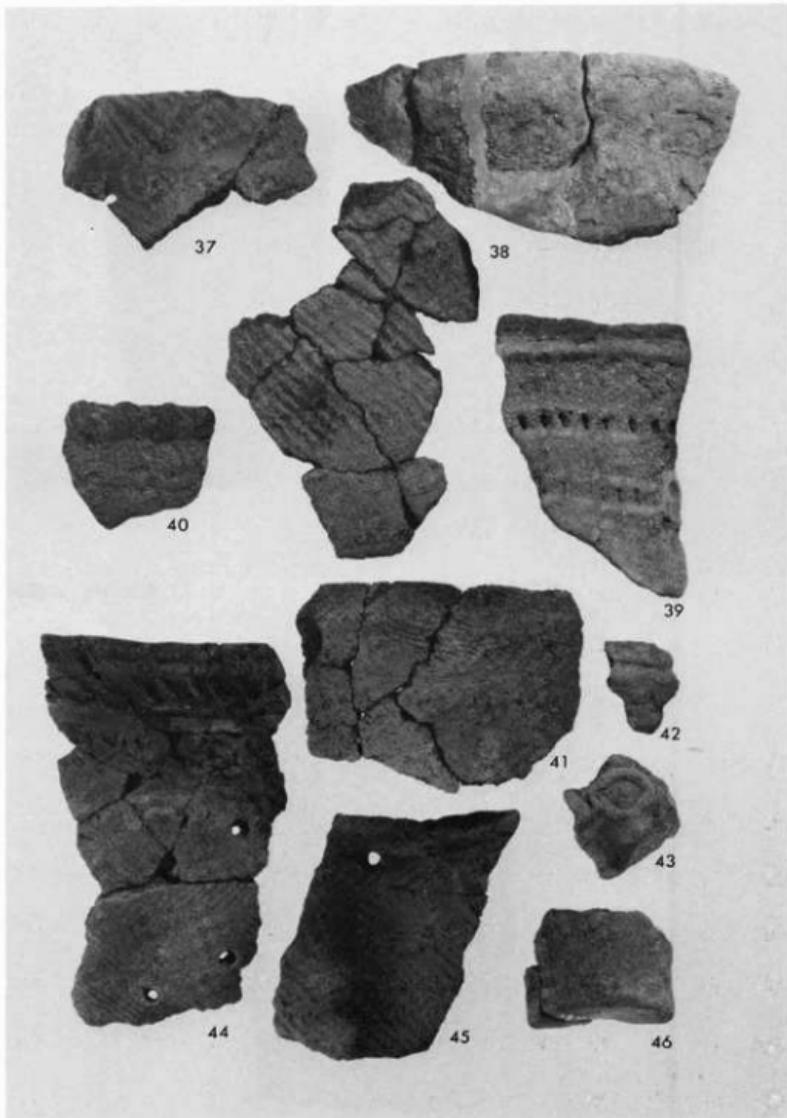
1. 廃棄場跡 土器04



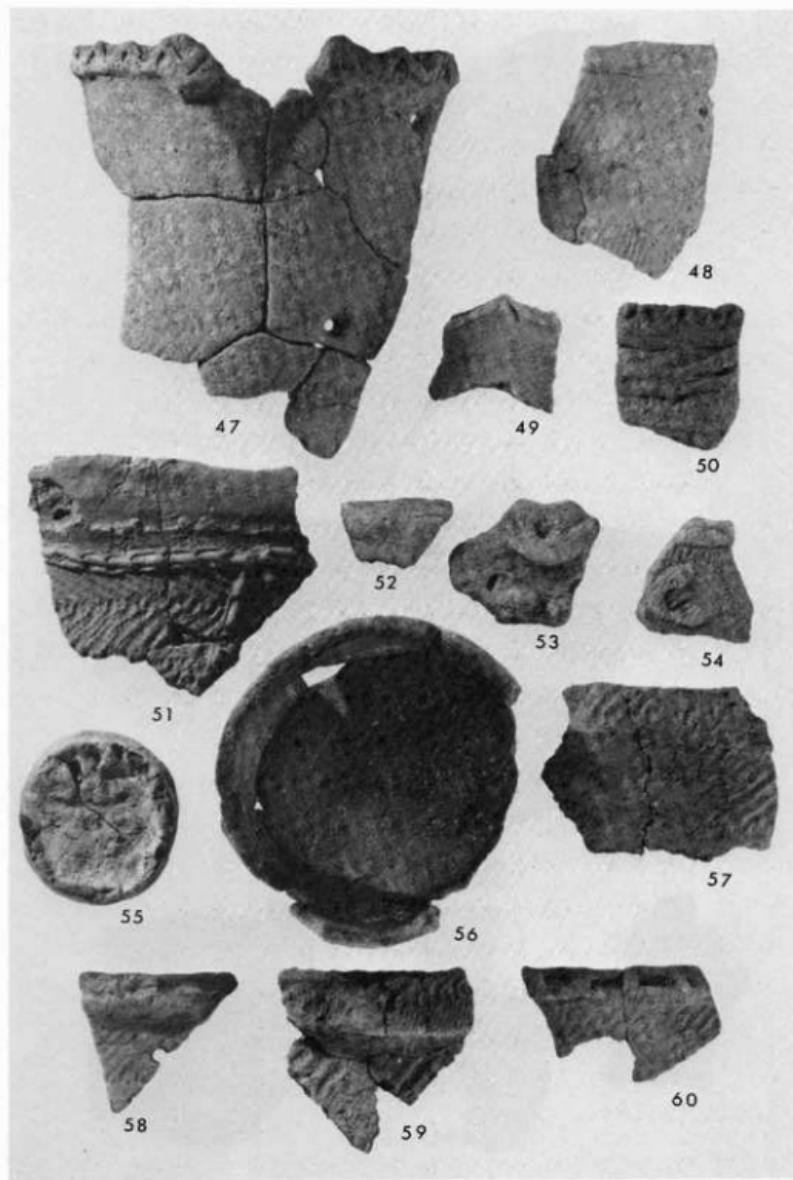
2. 廃棄場跡 土器05



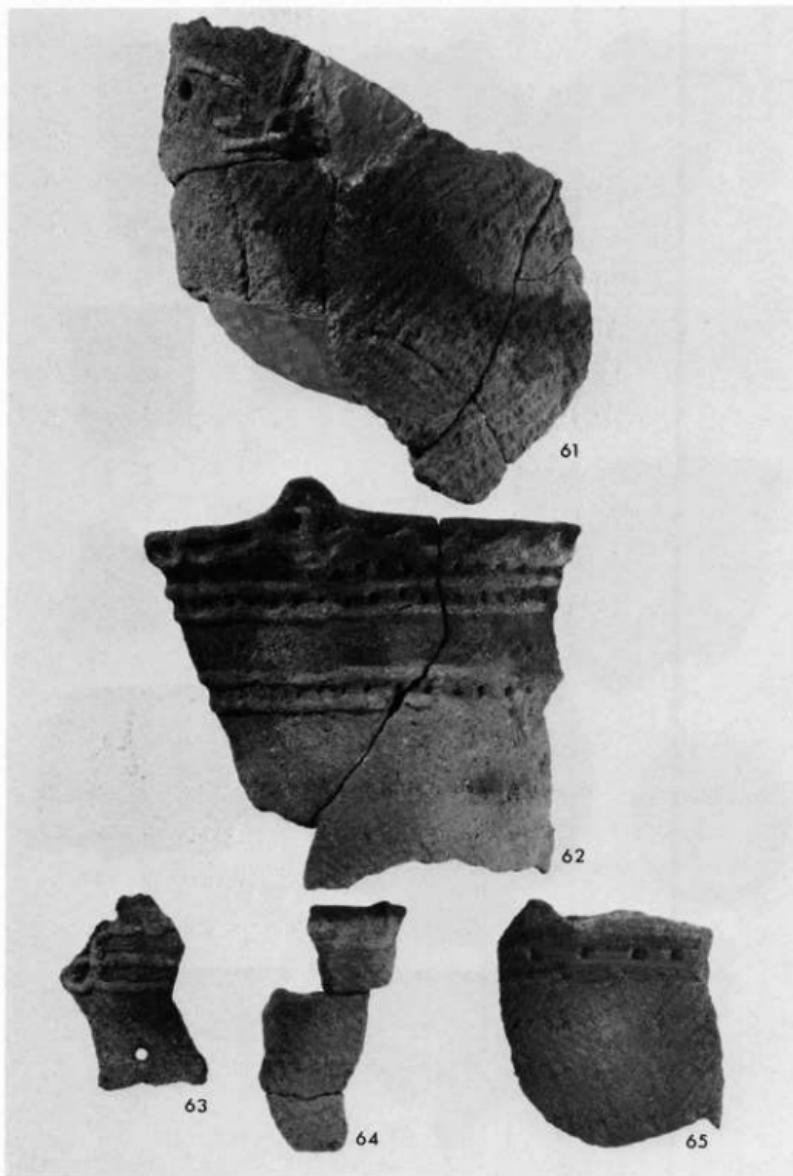
廃棄場跡 土器06



廃棄場跡 土器(37~46)



廢棄場跡 土器(47~60)



廃棄場跡 土器(61~65)



1. 廃棄場跡 土器00



4. 廃棄場跡 土器00



5. 廃棄場跡 土器00



2. 廃棄場跡 土器00



6. 廃棄場跡 土器00



3. 廃棄場跡 土器00



7. 廃棄場跡 土器00



1. 廃棄場跡 土器⑩



2. 廃棄場跡 土器⑪



3. 廃棄場跡 土器⑫



4. 廃棄場跡 土器⑬



5. 廃棄場跡 土器⑭



1. 廃棄場跡 土器(70)



2. 廃棄場跡 土器(70)



4. 廃棄場跡 土器(81)



3. 廃棄場跡 土器(80)



5. 廃棄場跡 土器(80)



1. 廃棄場跡 土器03



3. 廃棄場跡 土器05



4. 廃棄場跡 土器06



2. 廃棄場跡 土器04



5. 廃棄場跡 土器07



1. 廃棄場跡 土器⑩



3. 廃棄場跡 土器⑪



4. 廃棄場跡 土器⑫



2. 廃棄場跡 土器⑬



5. 廃棄場跡 土器⑭



1. 廃棄場跡 土器93



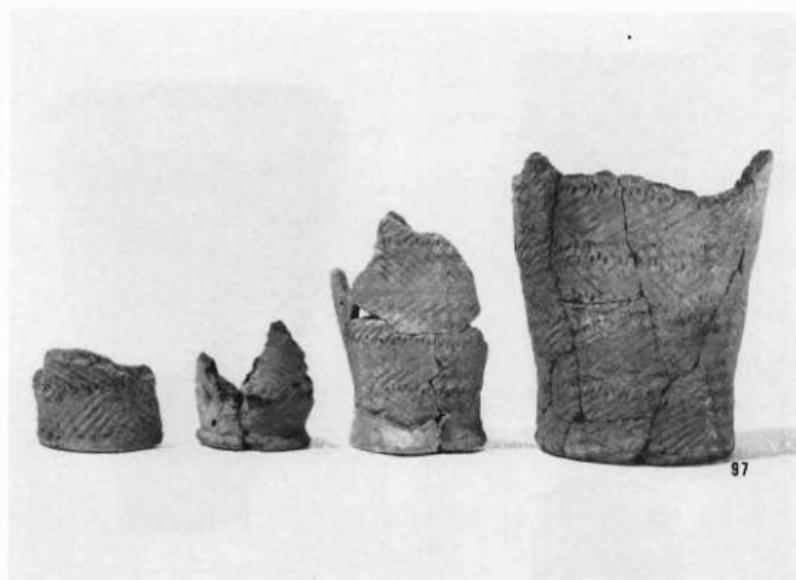
2. 廃棄場跡 土器94



3. 廃棄場跡 土器95



4. 廃棄場跡 土器96



1. 廃棄場跡 土器(97他)



2. 廃棄場跡 土器98



3. 廃棄場跡 土器99



1. 廃棄場跡 土器(100)



2. 廃棄場跡 土器(101)



3. 廃棄場跡 土器(102)



4. 廃棄場跡 土器(103)



5. 廃棄場跡 土器(104)



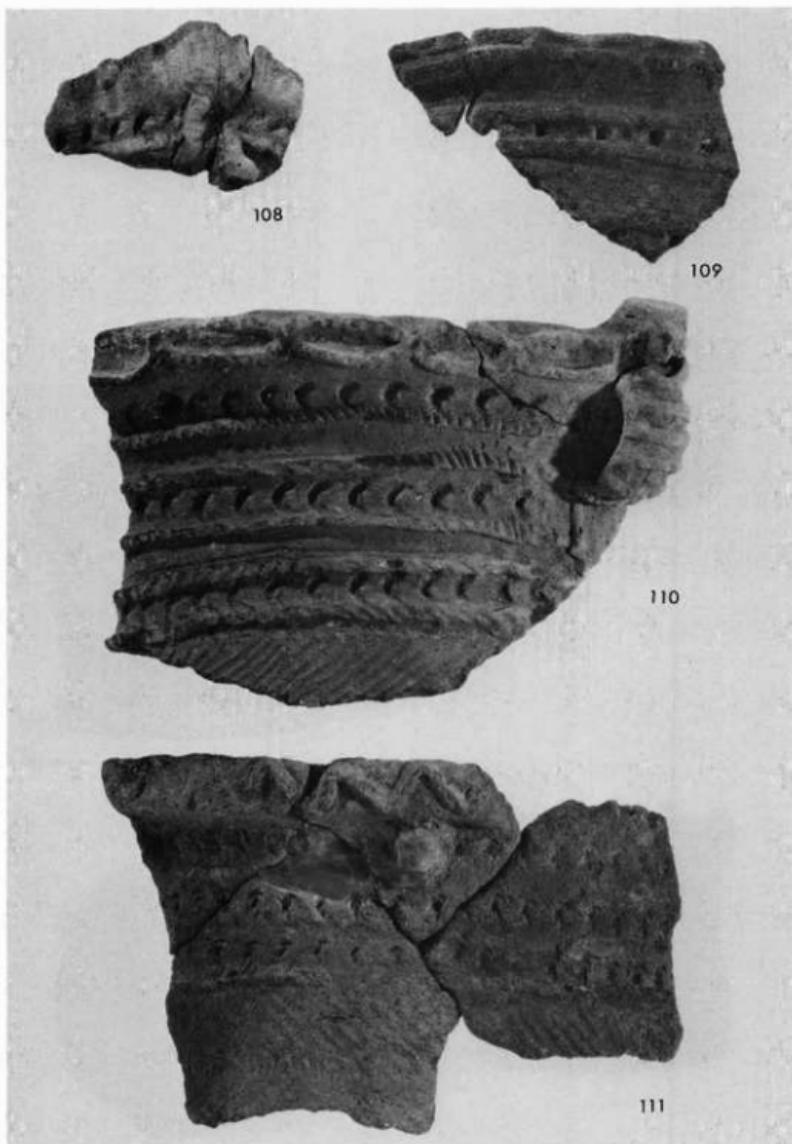
1. 廃棄場跡 土器(105)



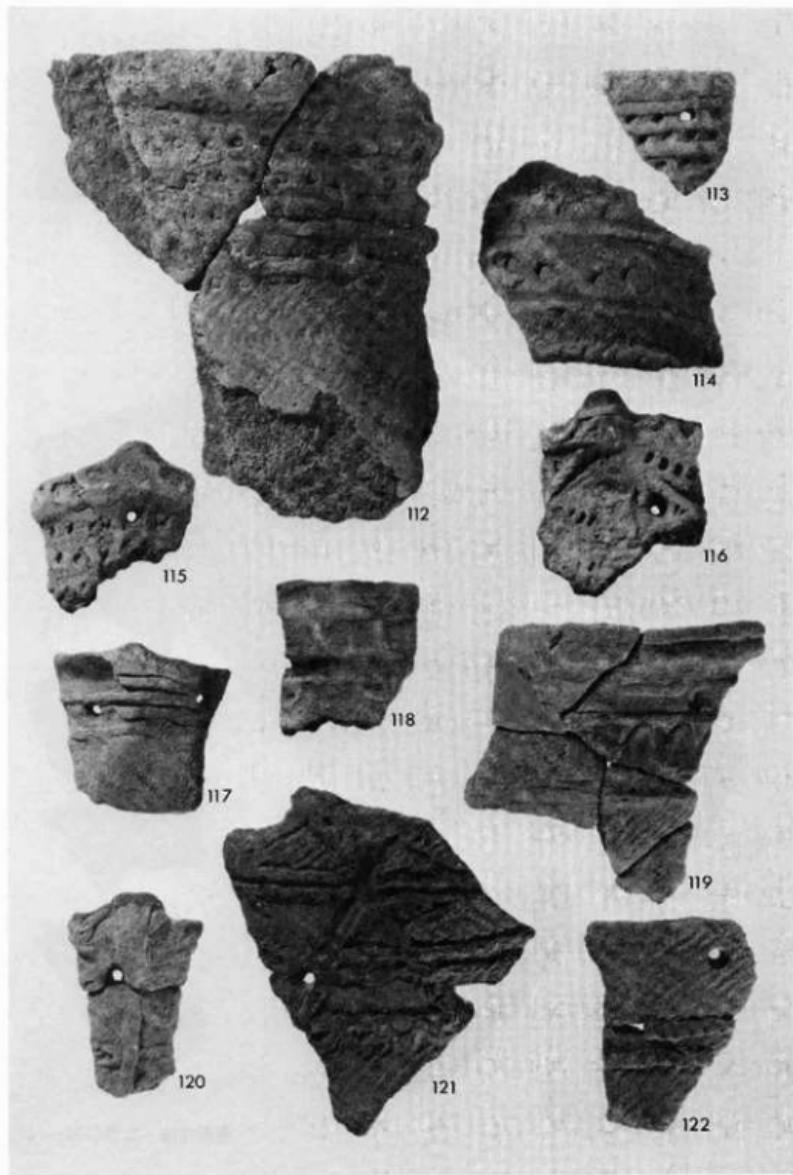
2. 廃棄場跡 土器(106)



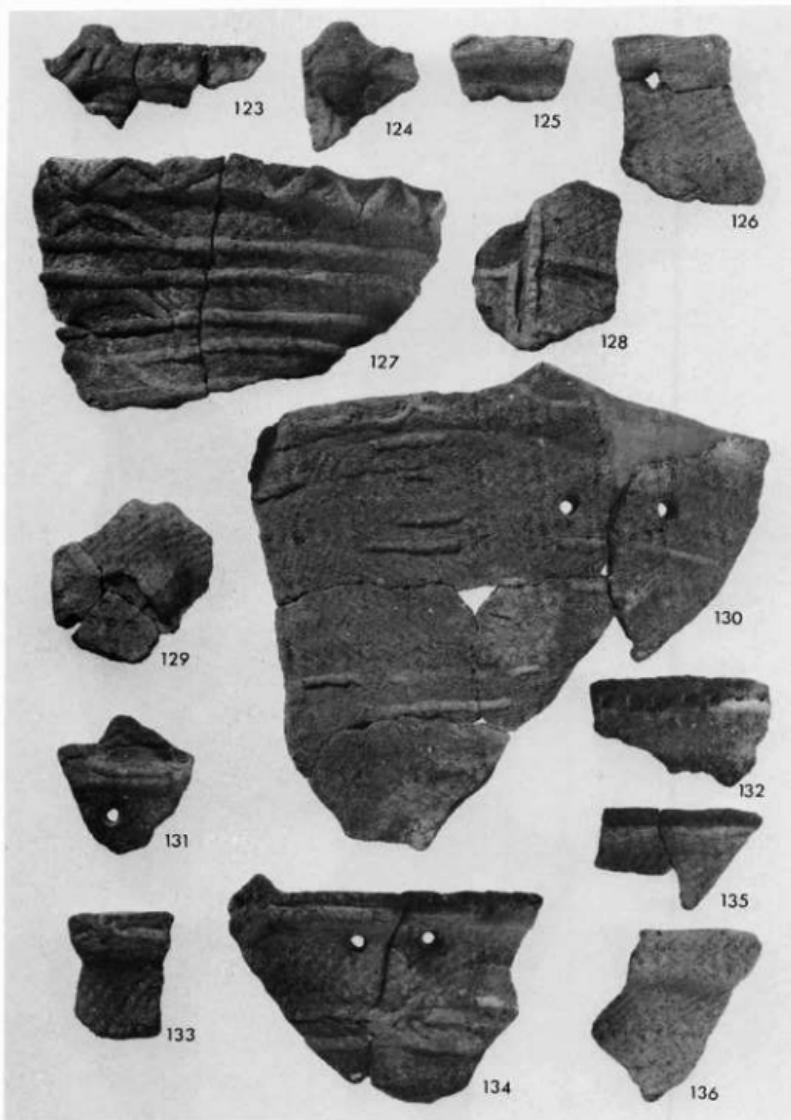
3. 廃棄場跡 土器(107)・底部(下)



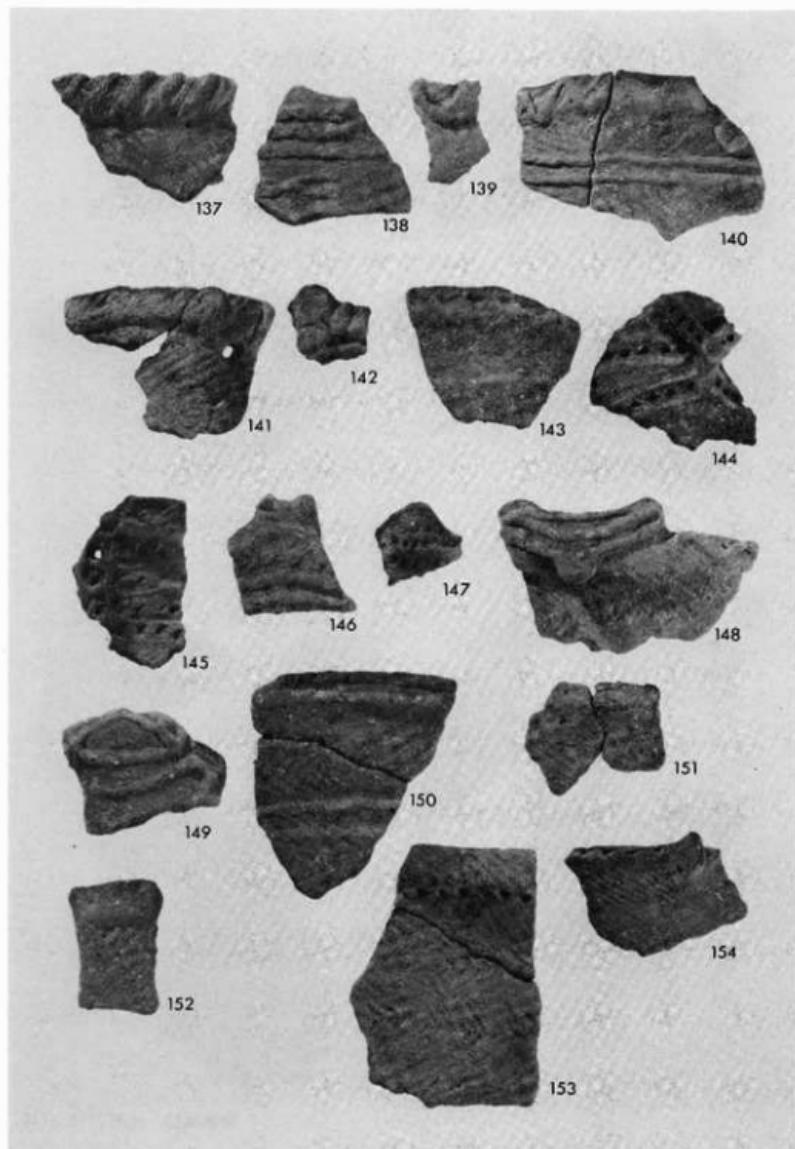
廃棄場跡 土器(108~111)



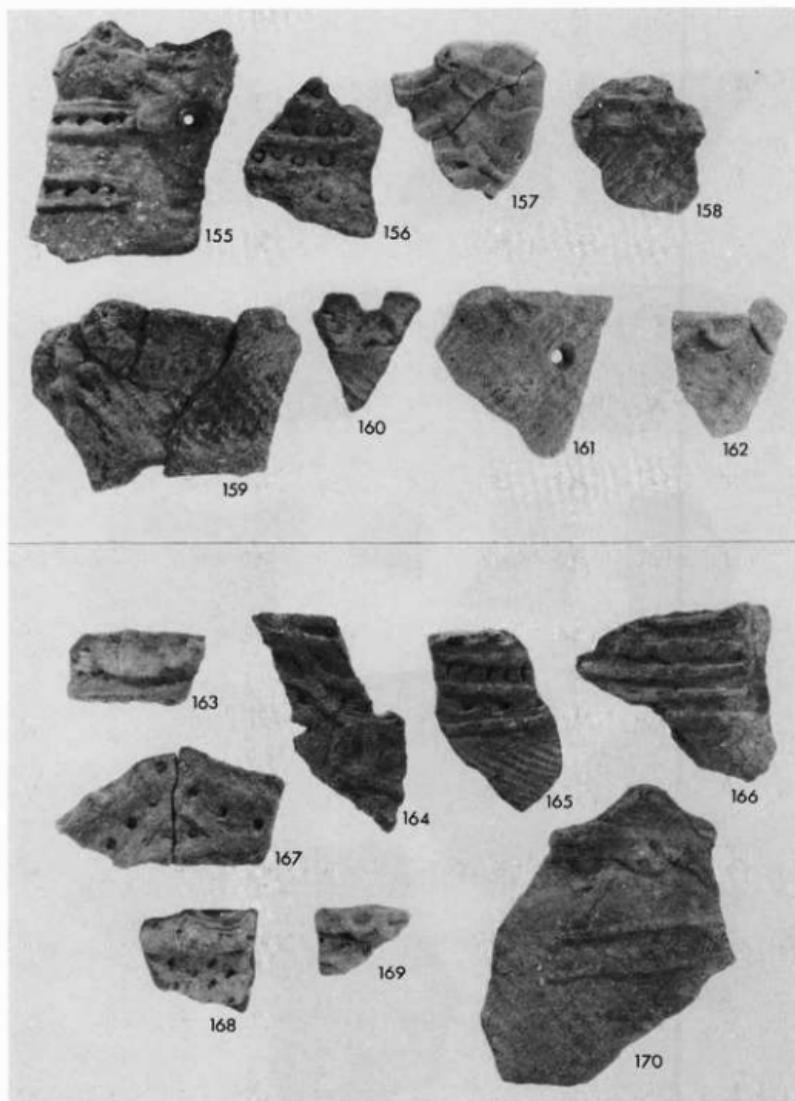
廃棄場跡 土器(112~122)



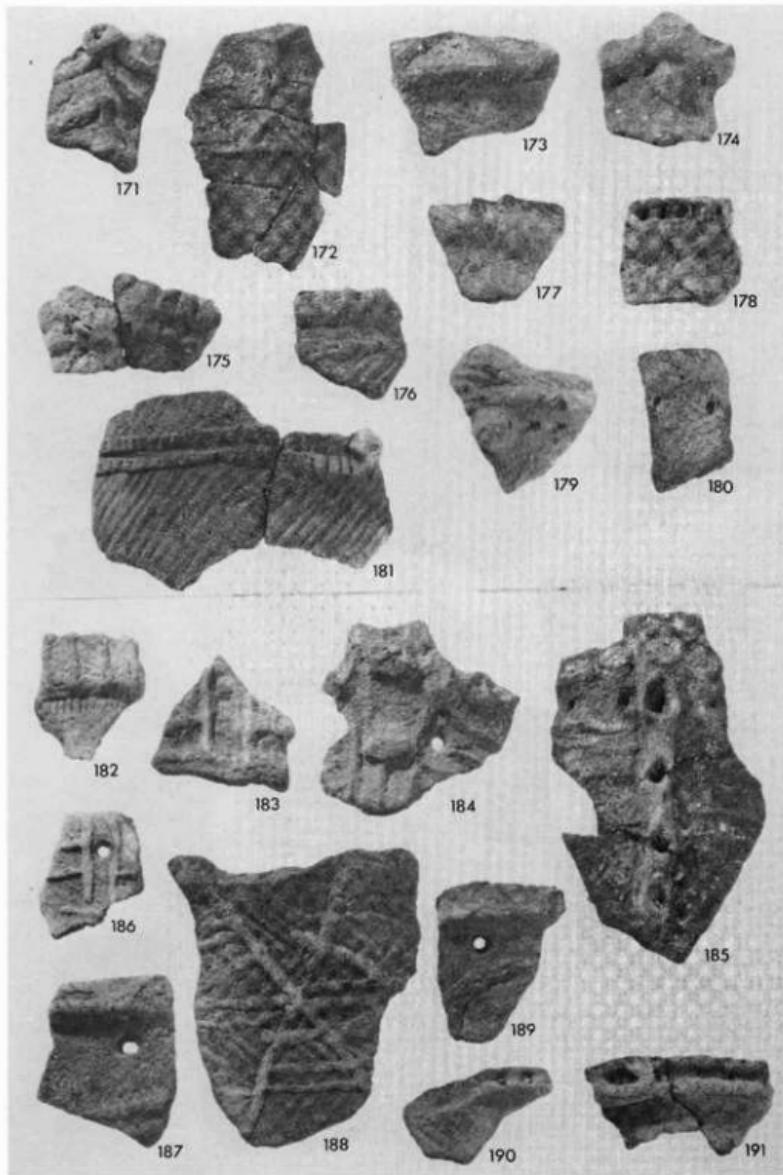
廃棄場跡 土器(123~136)



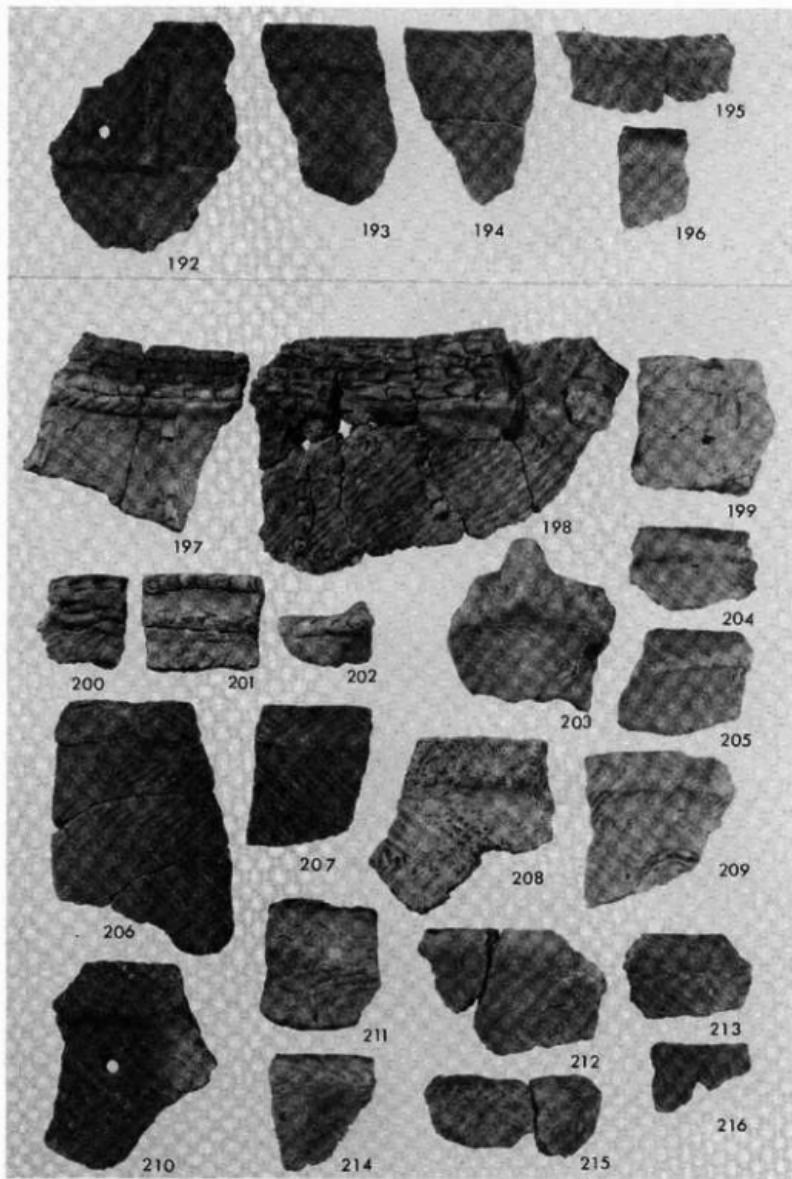
廃棄場跡 土器(137~154)



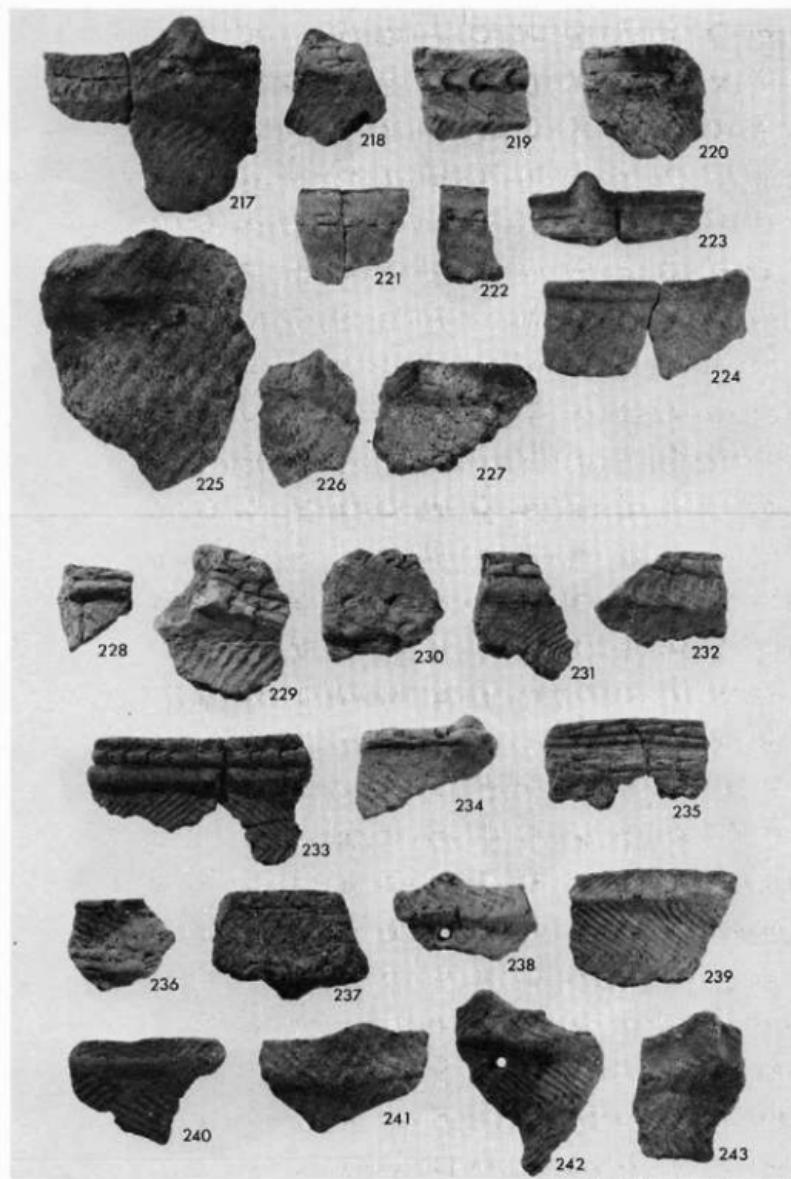
廃棄場跡 土器(155~170)



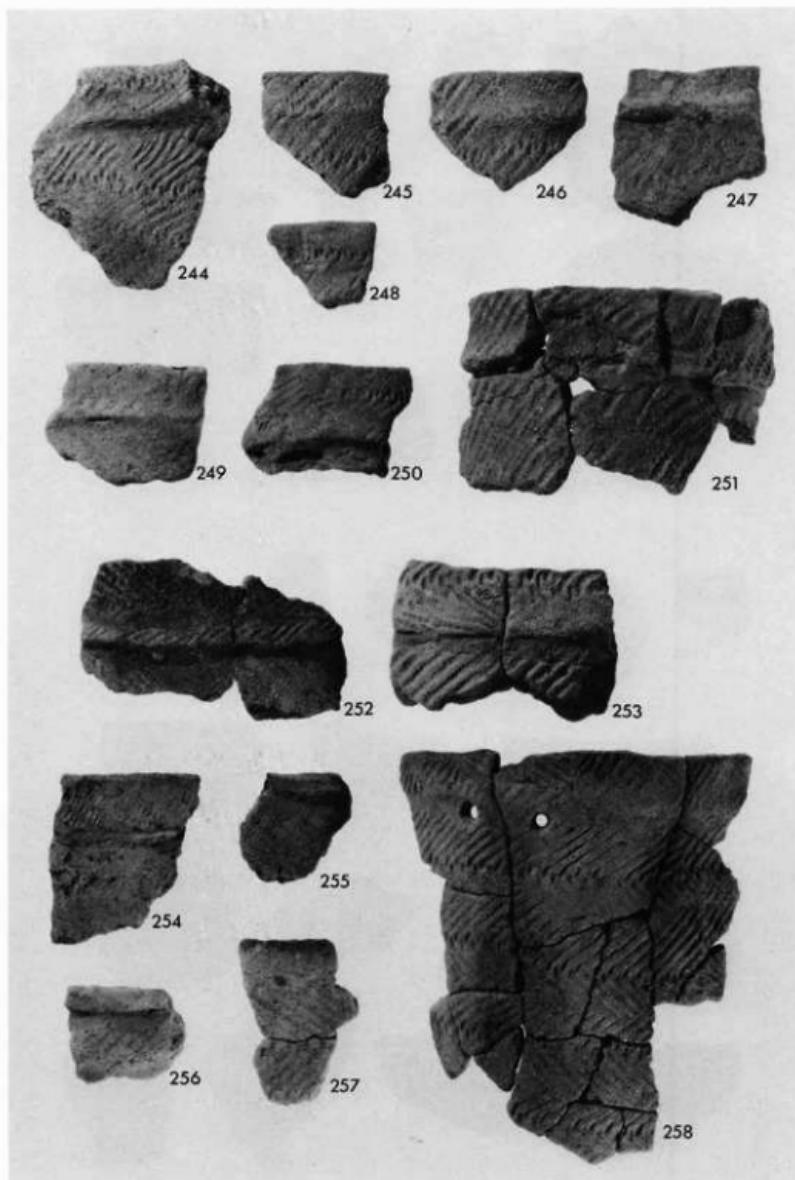
廃棄場跡 土器(171~191)



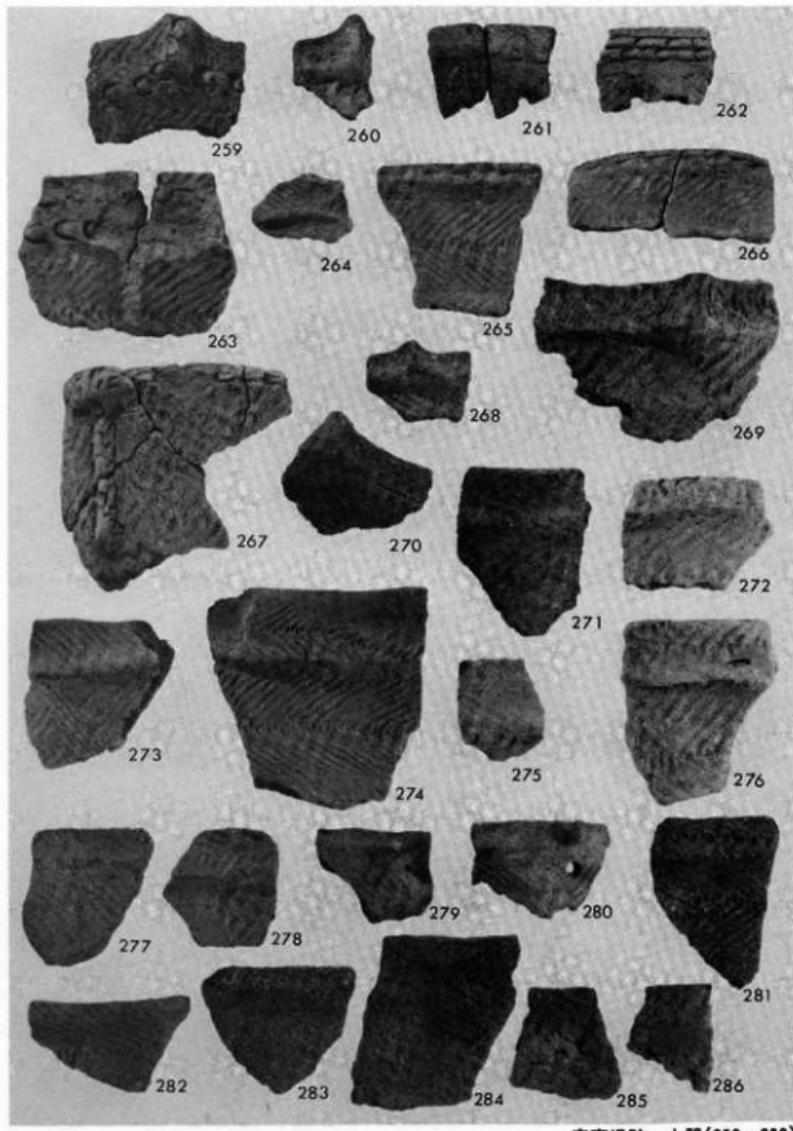
廃棄場跡 土器(192~216)



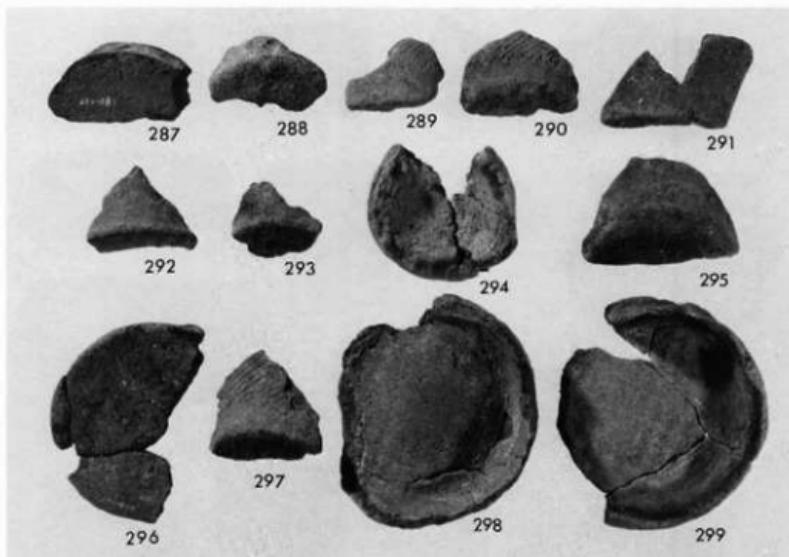
鹿児島跡 土器(217~243)



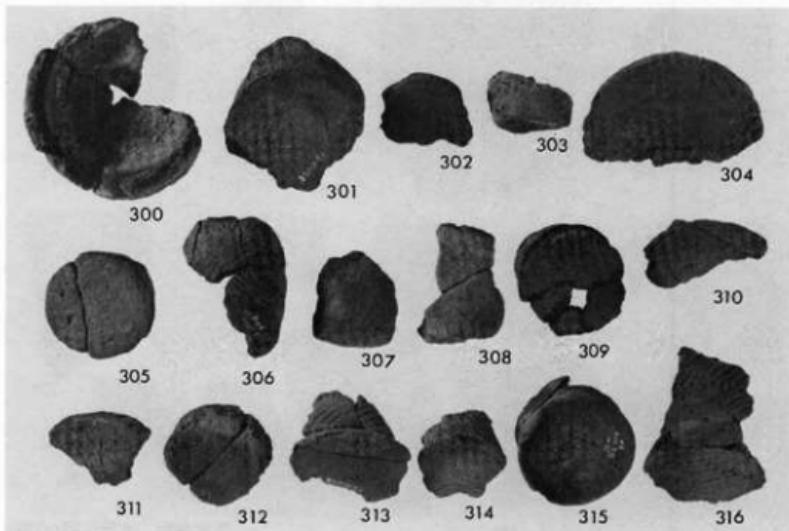
廃棄場跡 土器(244~258)



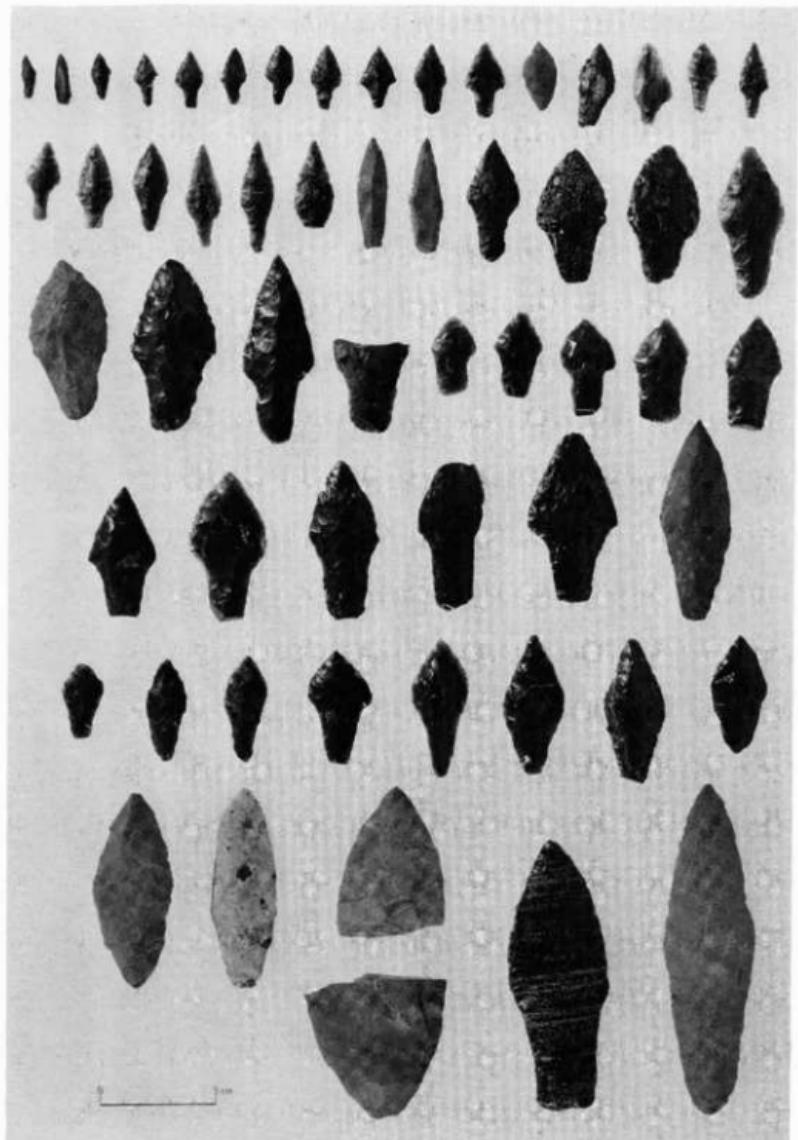
廃棄場跡 土器(259~286)



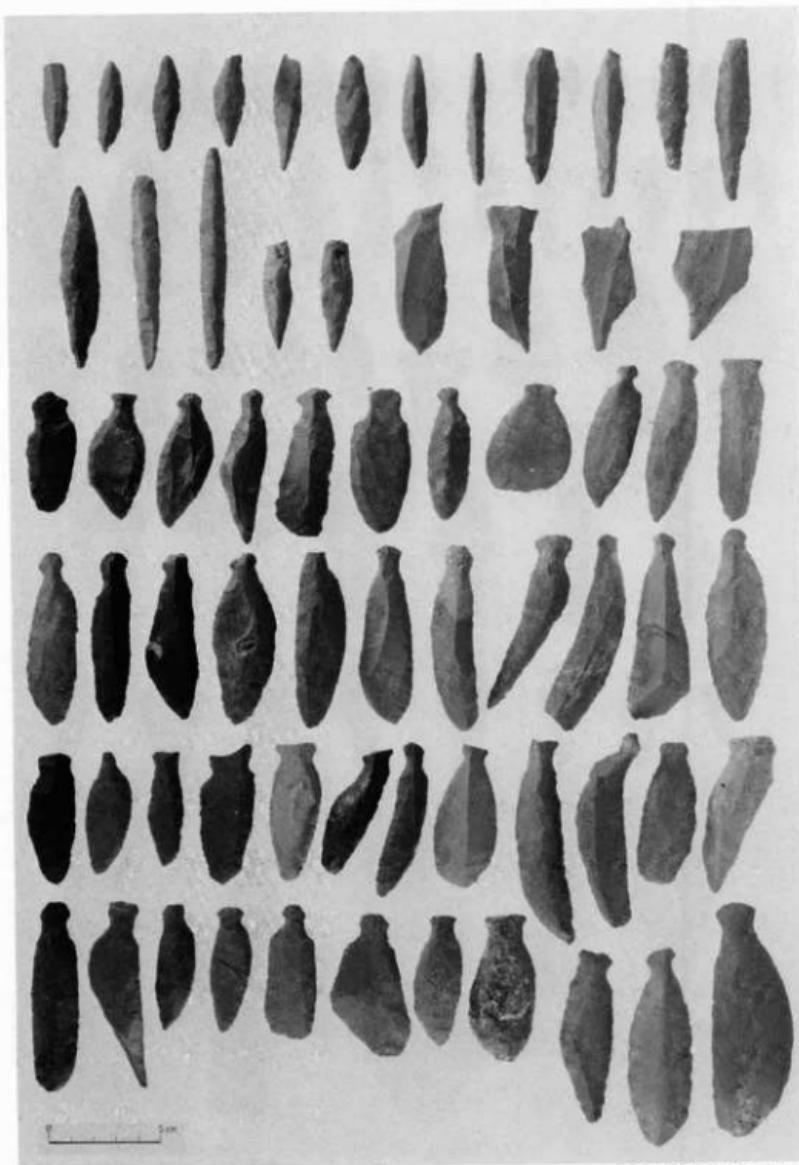
1. 廃棄場跡 土器(287~299)



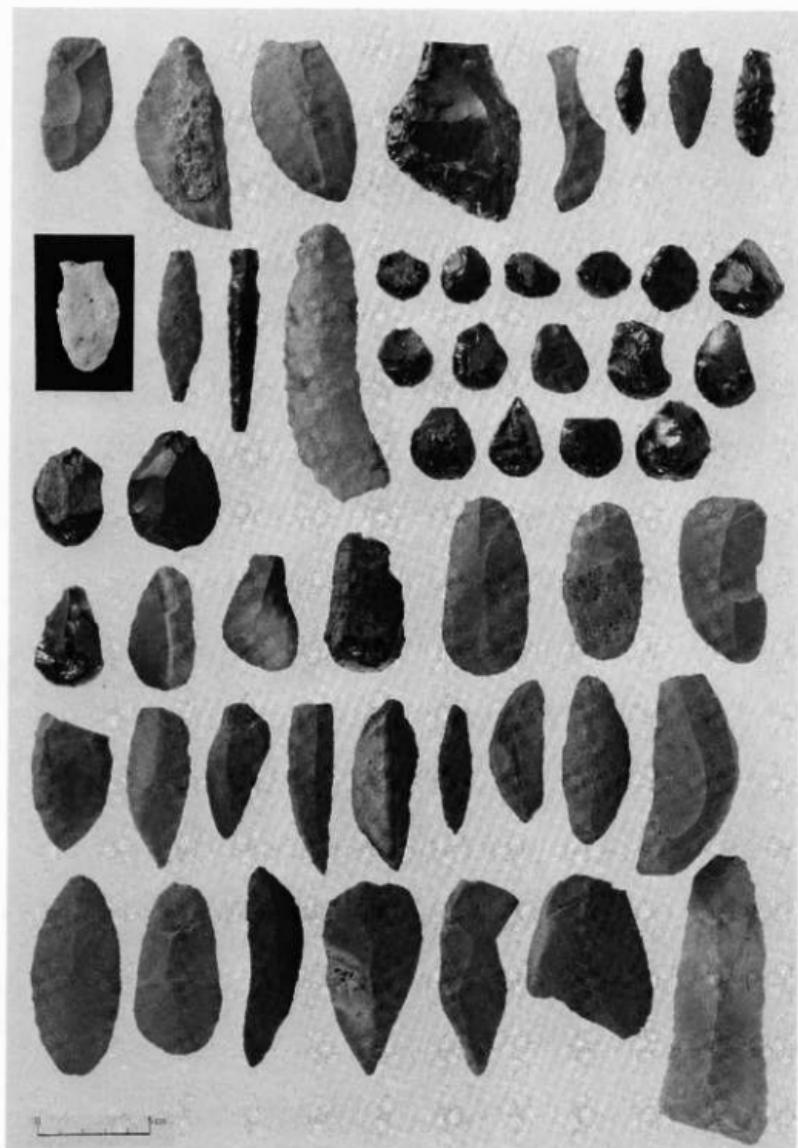
2. 廃棄場跡 土器(300~316)



廃棄場跡 石鏽・石鋸先・石槍



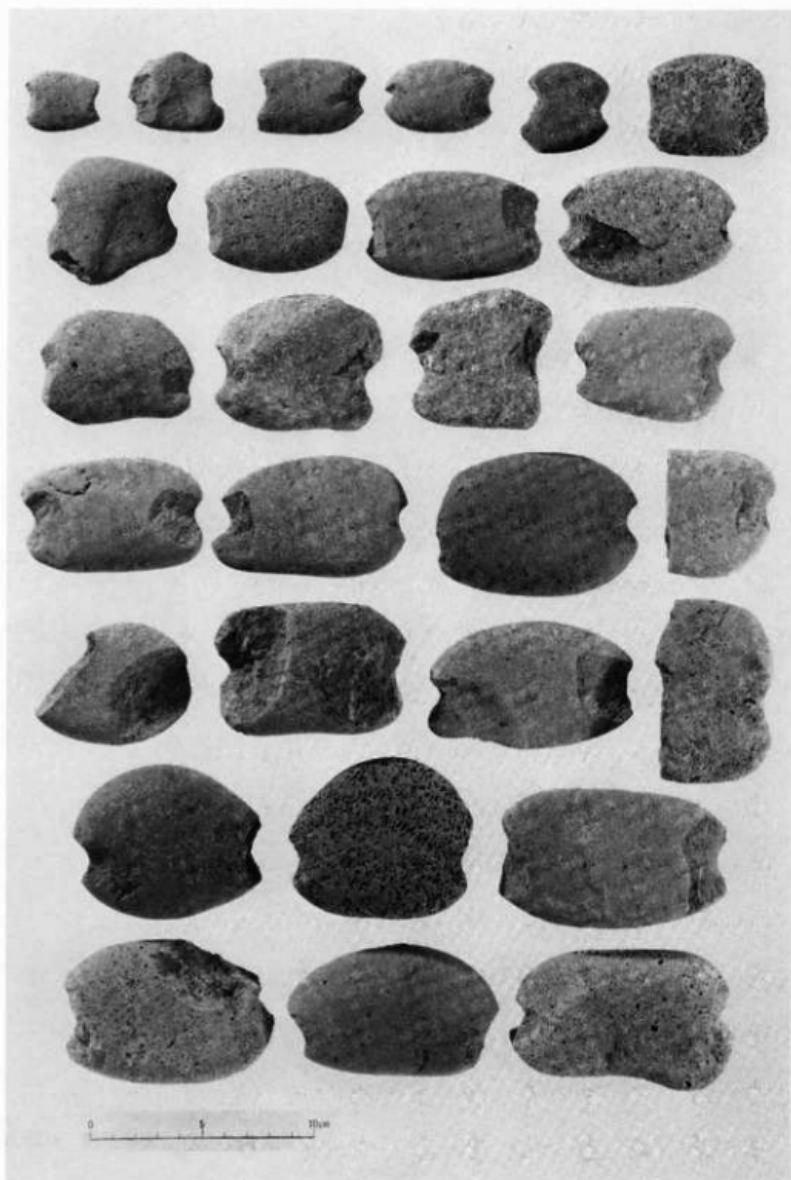
廃棄場跡 石錐・石鎚



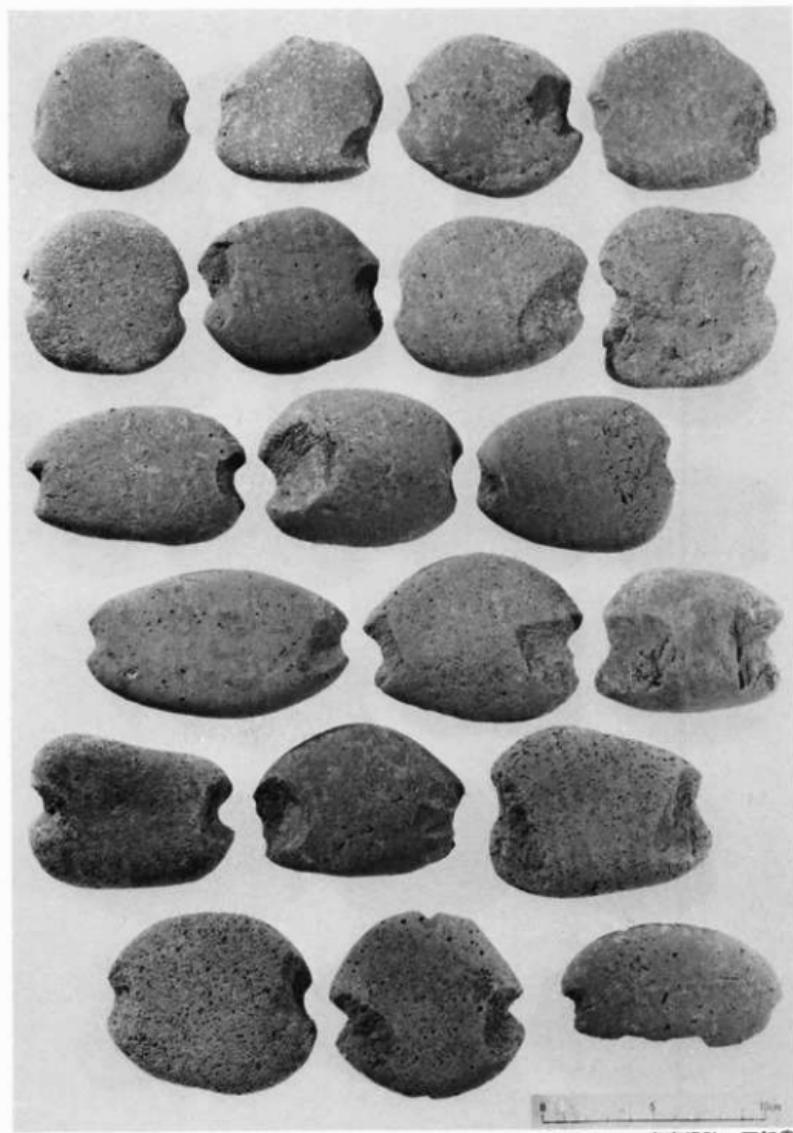
廃棄場跡 ナイフ・撃器・削器



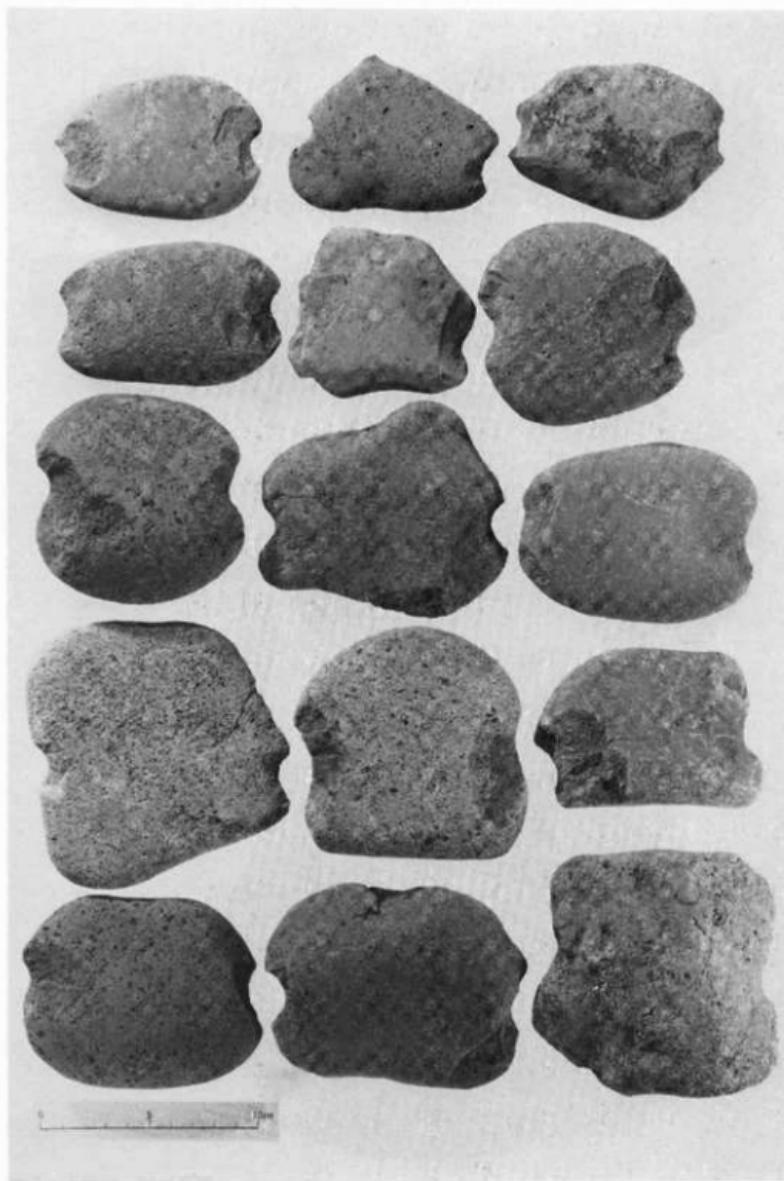
虎裏場跡 石斧・敲石・砥石・石錐



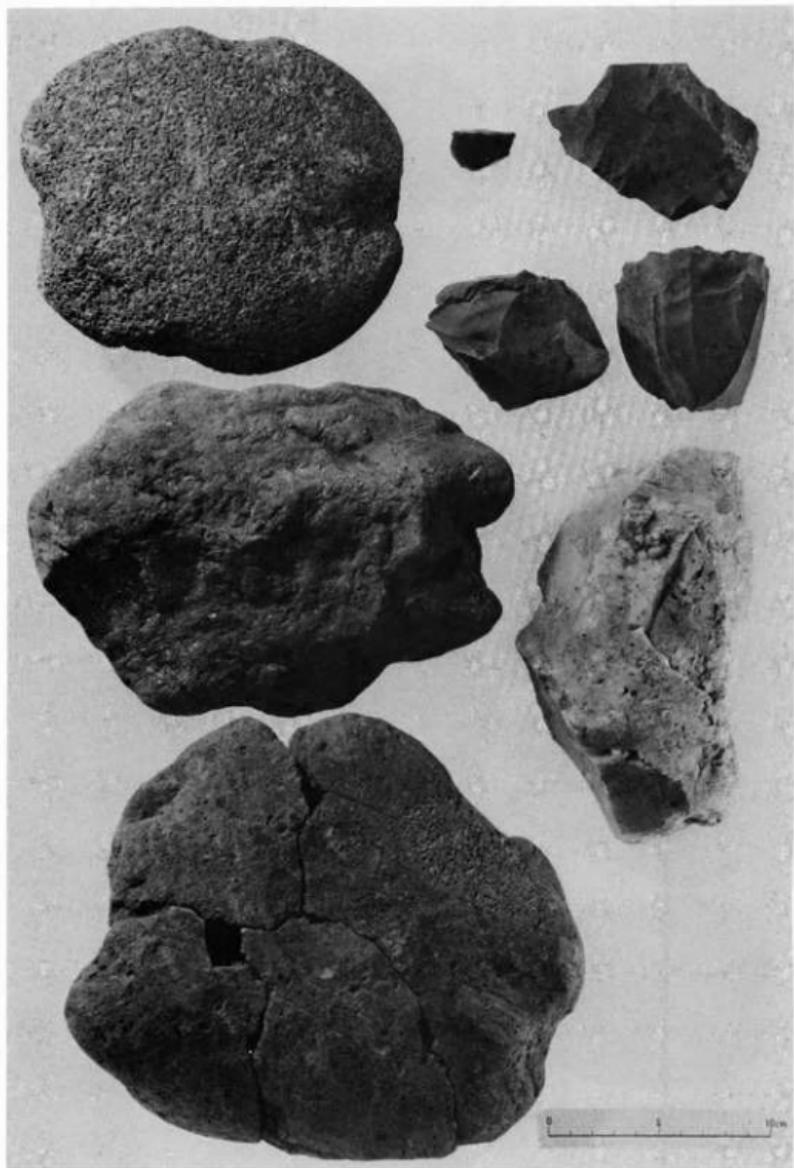
廣東場跡 石錘①



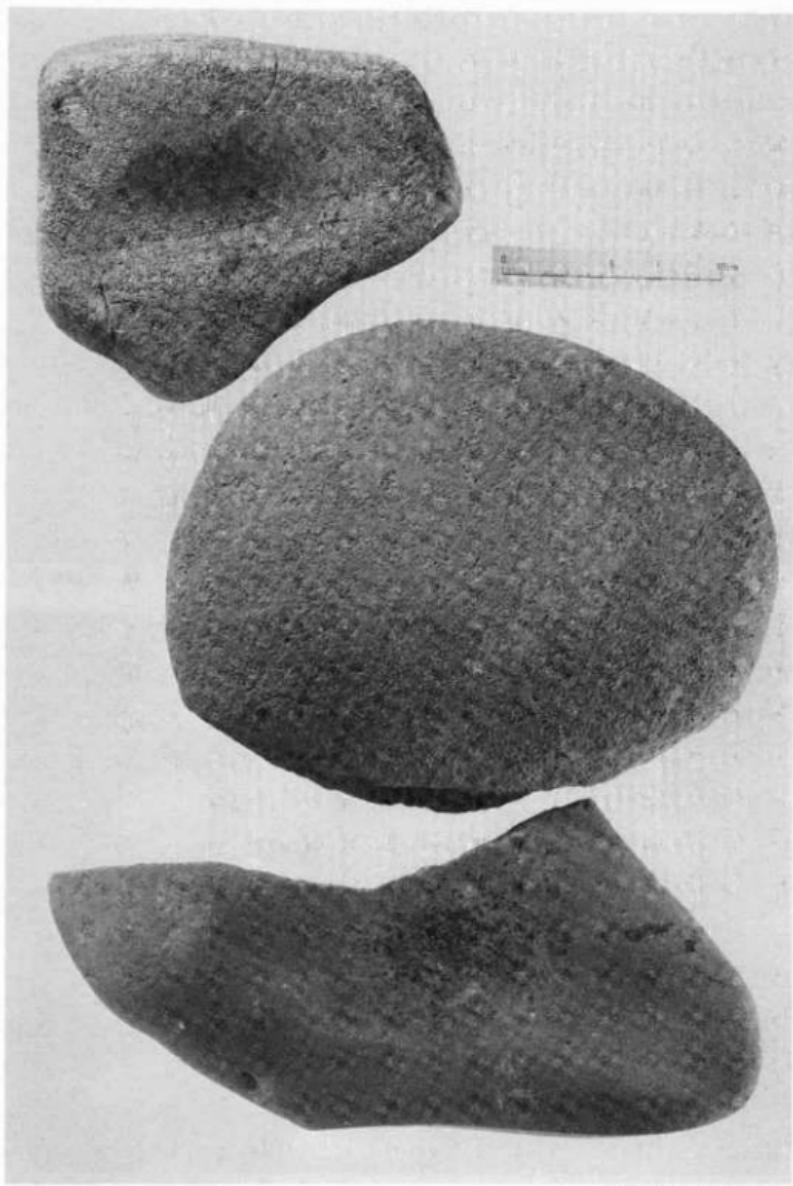
廃棄場跡 石錘②



廃棄場跡 石錘③



廢棄場跡 石錐④・石核



廃棄場跡 砥石・石皿



1. 磨・石錐集中区



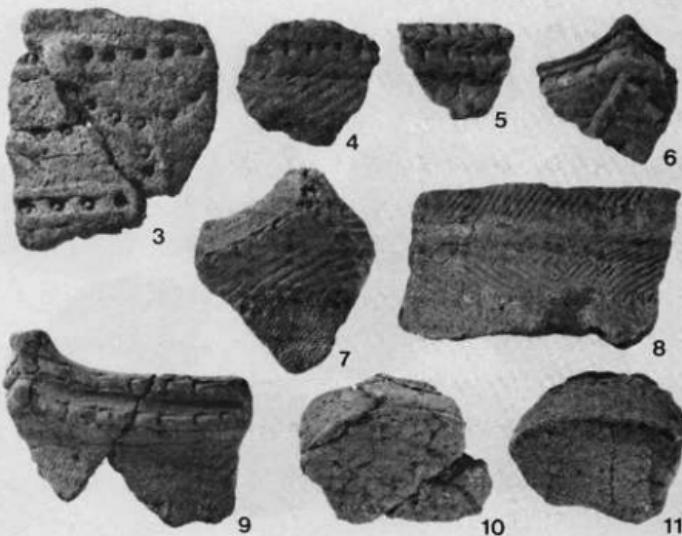
2. 磨・石錐集中区 石錐出土状況



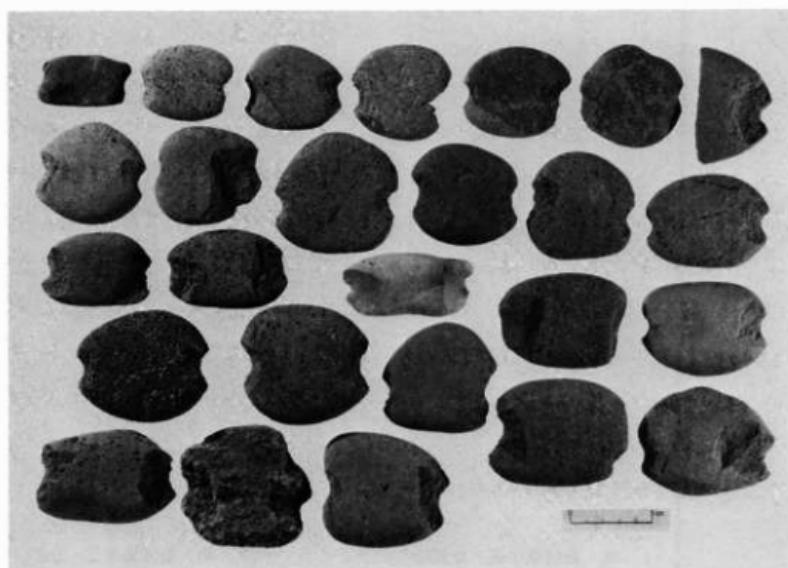
1. 碓・石錘集中区 土器(1)



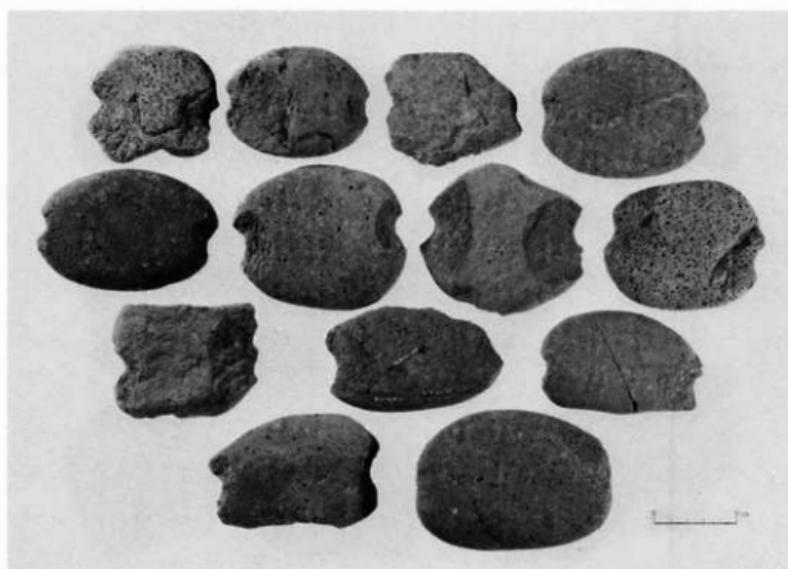
2. 碓・石錘集中区 土器(2)



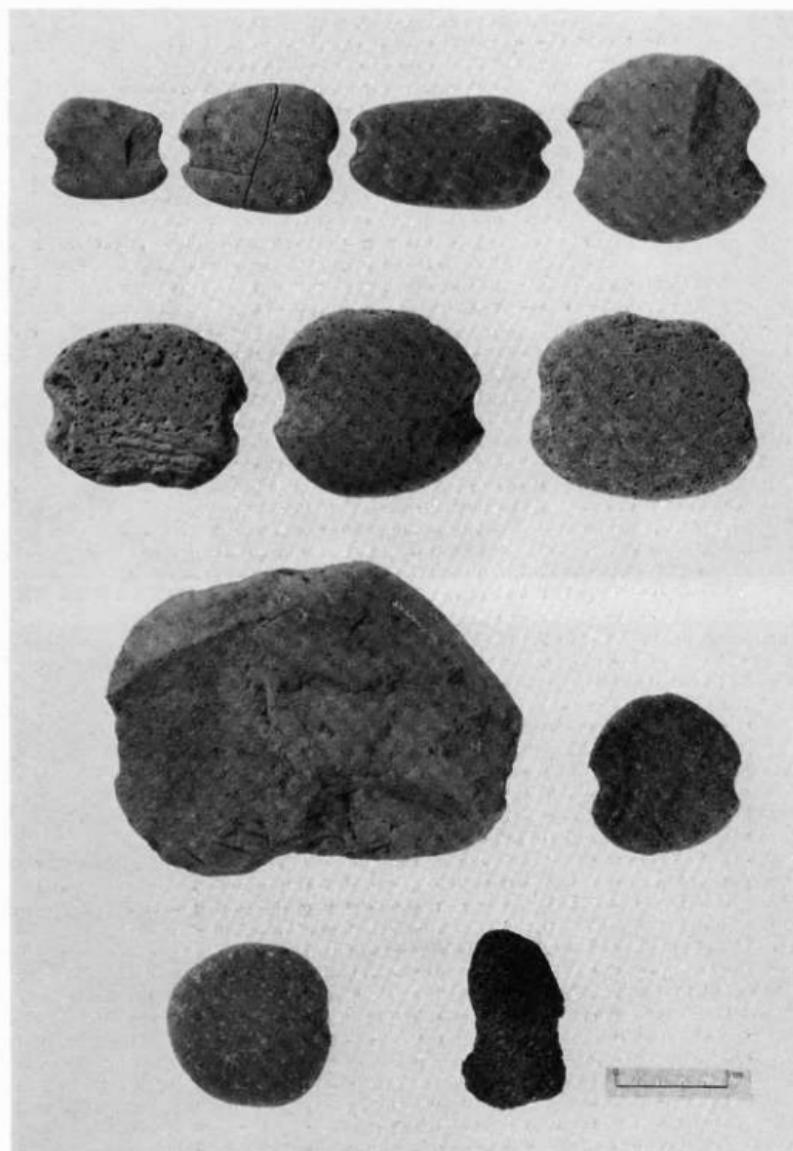
3. 碓・石錘集中区 土器(3~11)



1. 種・石錘集中区 石錘①



2. 種・石錘集中区 石錘②



磯・石錐集中区 各種石錐の比較



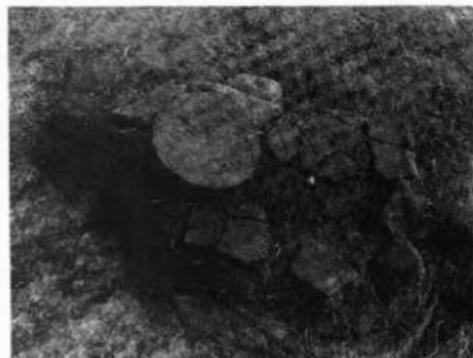
1. 包含層 押型文土器出土狀況



2. 包含層 I 群土器出土狀況



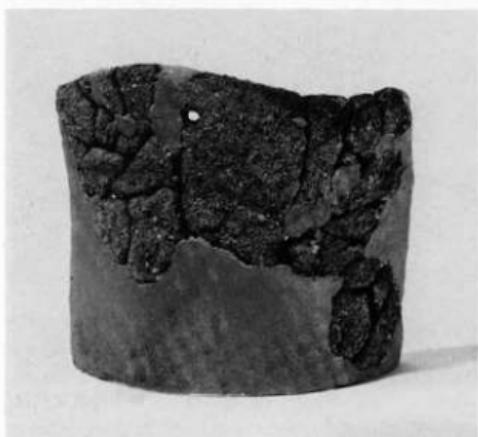
1. 包含层 I 群土器出土状况



2. 包含层 I 群土器出土状况



3. 包含层 II 群土器出土状况



1. 包含層 押型土器(1)



2. 包含層 I群土器(2)



包含層 I群土器(3)



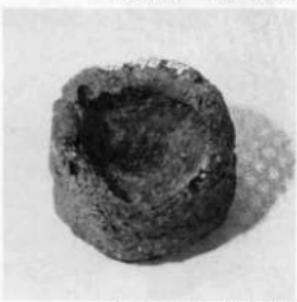
1. 包含層 I 群土器(4)



2. 包含層 I 群土器(5)



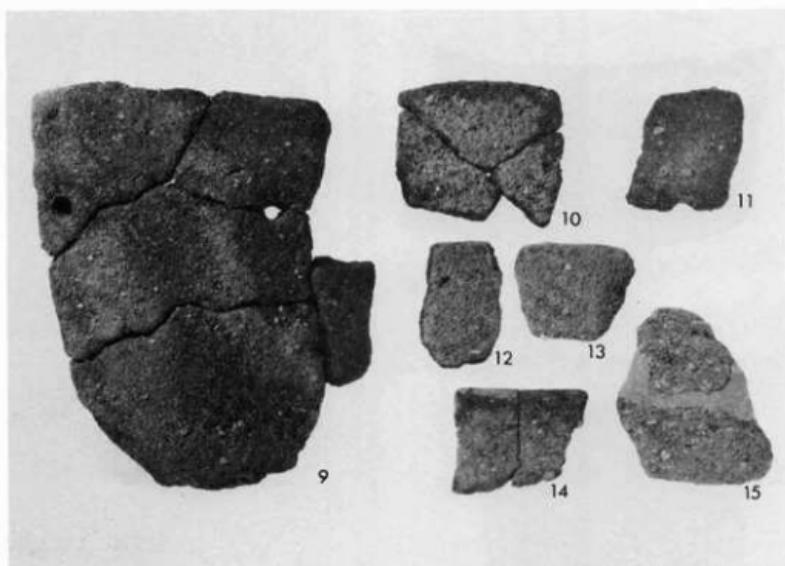
3. 包含層 I 群土器(6)



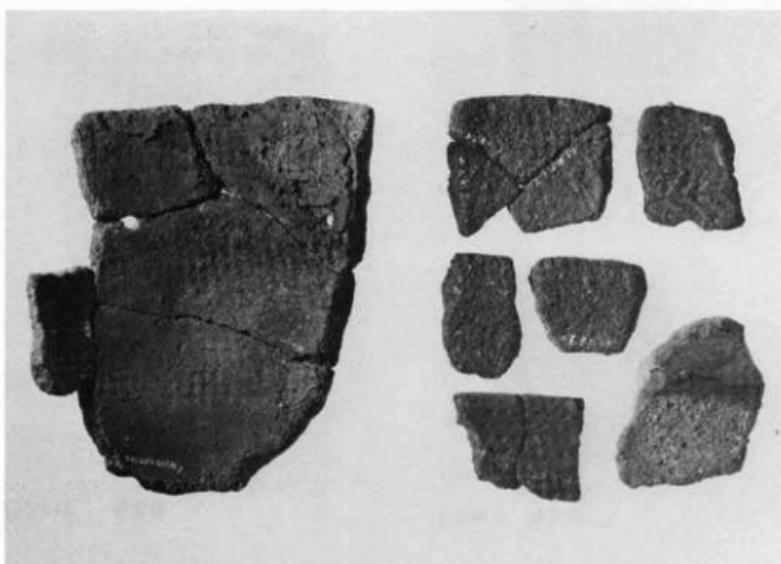
5. 包含層 土製品(8)



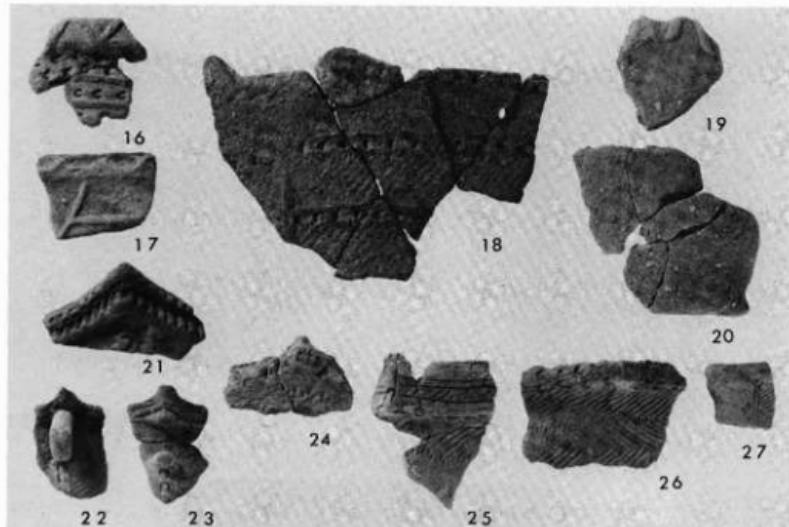
4. 包含層 I 群土器(7)



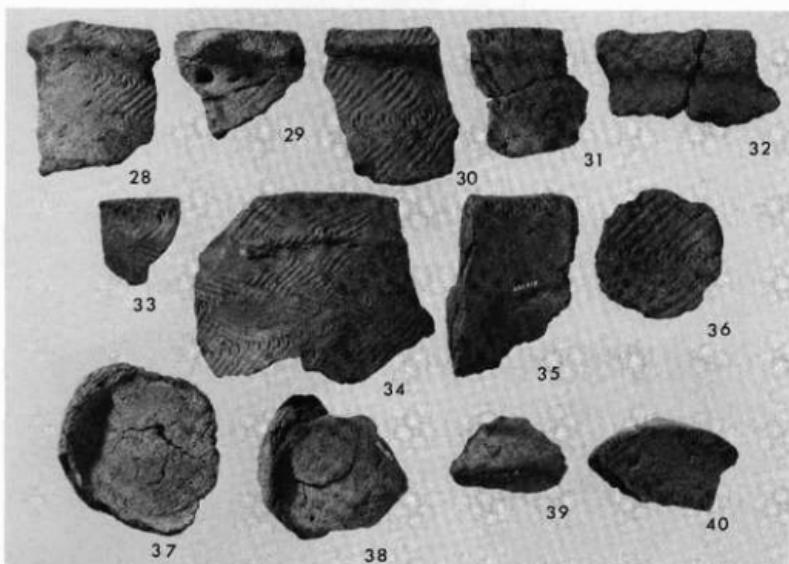
1. 包含層 押型文土器(9~15, 表面)



2. 同上 (裏面)



1. 包含層 I 群土器(16~27)



2. 包含層 I 群土器(28~40)



1. 包含層 II群土器(1)



2. 包含層 II群土器(2)



3. 包含層 II群土器(3)



4. 包含層 II群土器(4)



5. 包含層 II群土器(5)



1. 包含層 II群土器(6)



2. 包含層 II群土器(7)



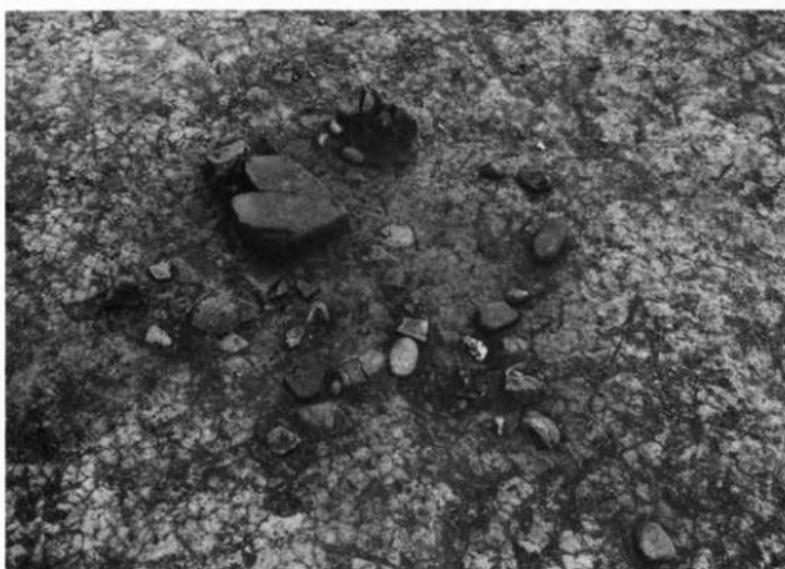
3. 包含層 II群土器(8)



4. 包含層 II群土器(9)



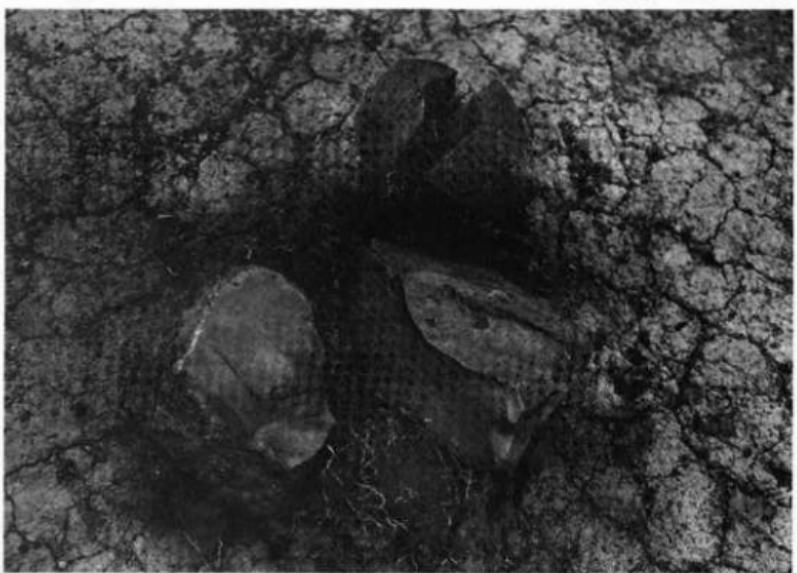
1. 包含層 石器出土狀況



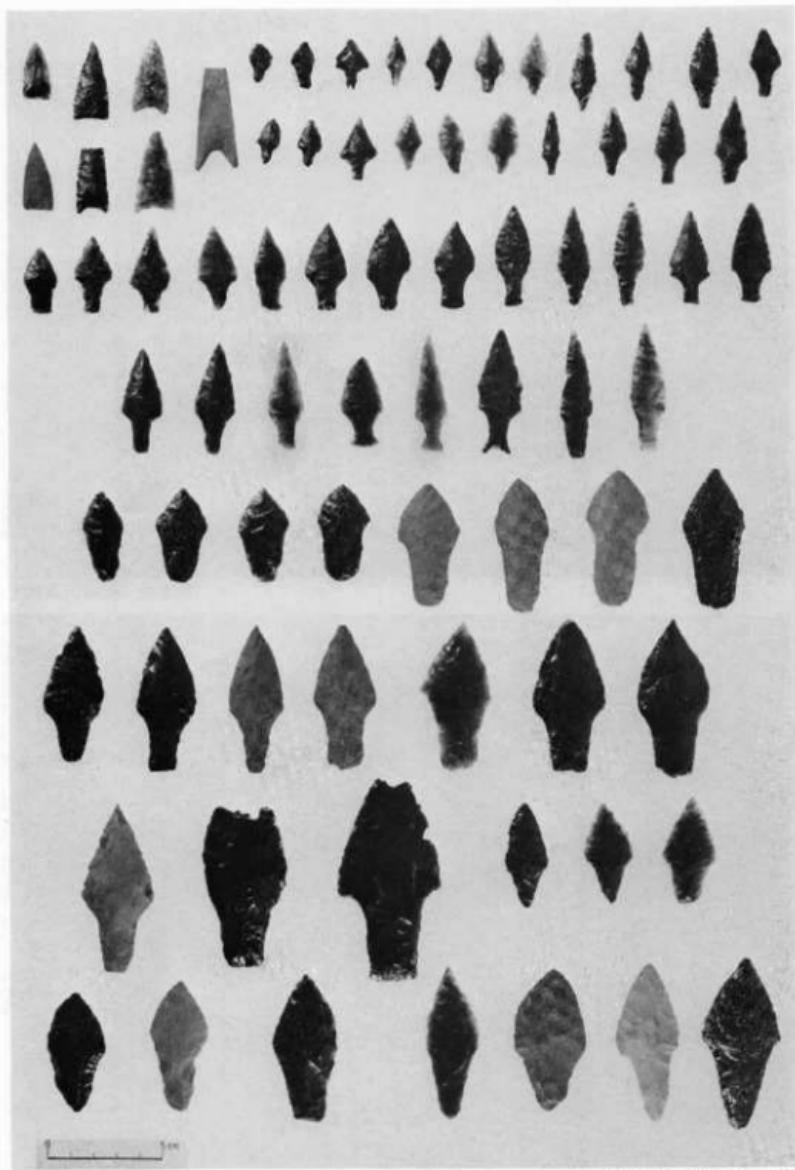
2. 包含層 石器出土狀況



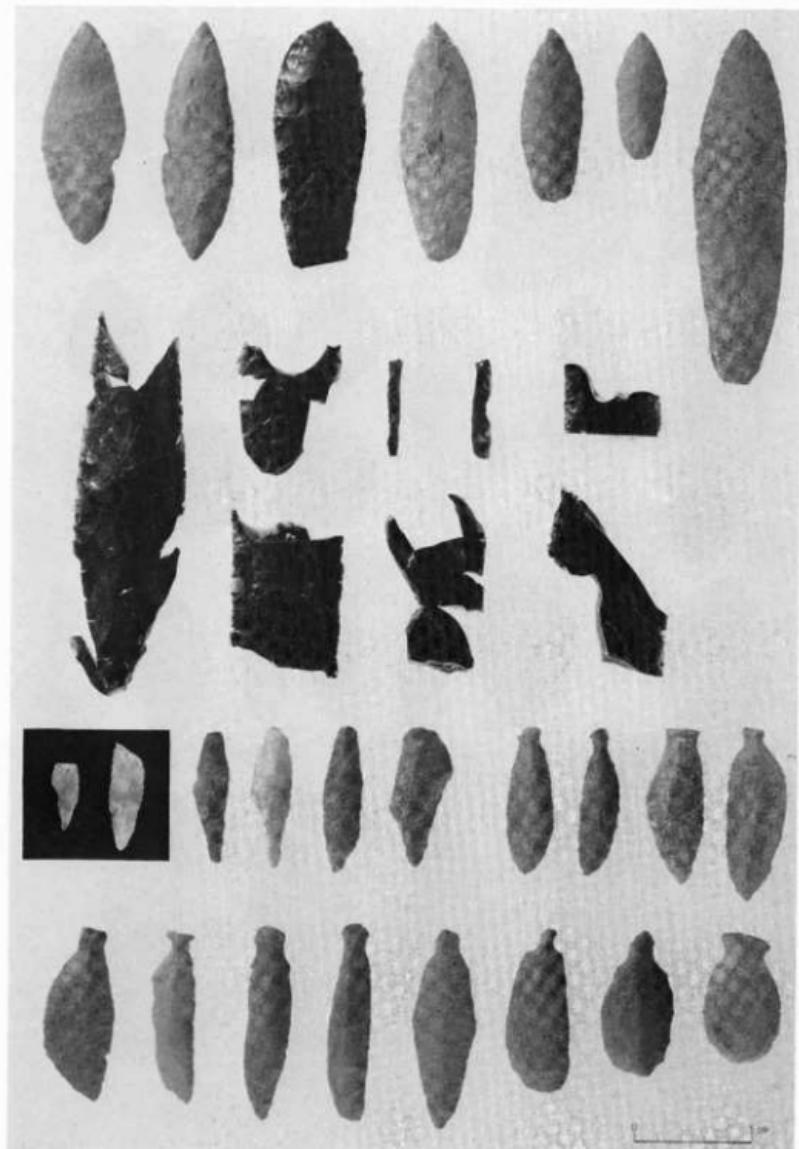
1. 包含層 石器出土状況



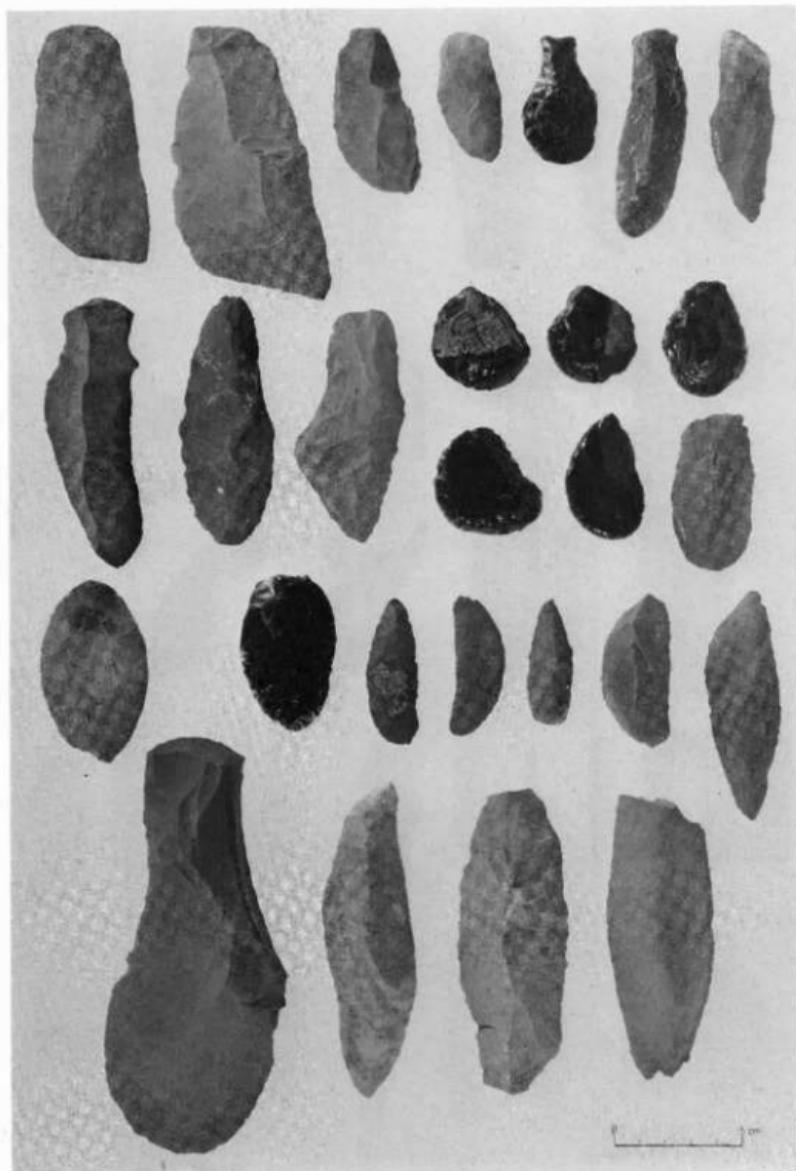
2. 包含層 石核出土状況



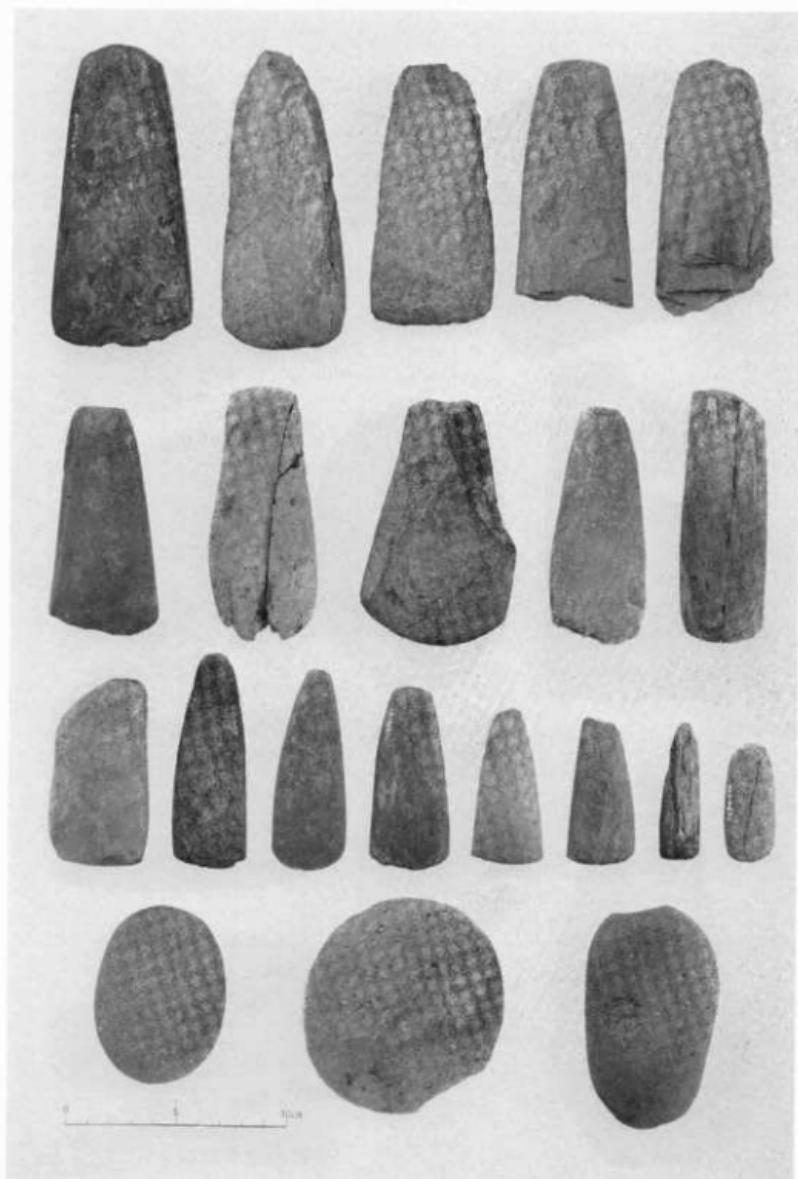
包含層 石鏃・石箭先



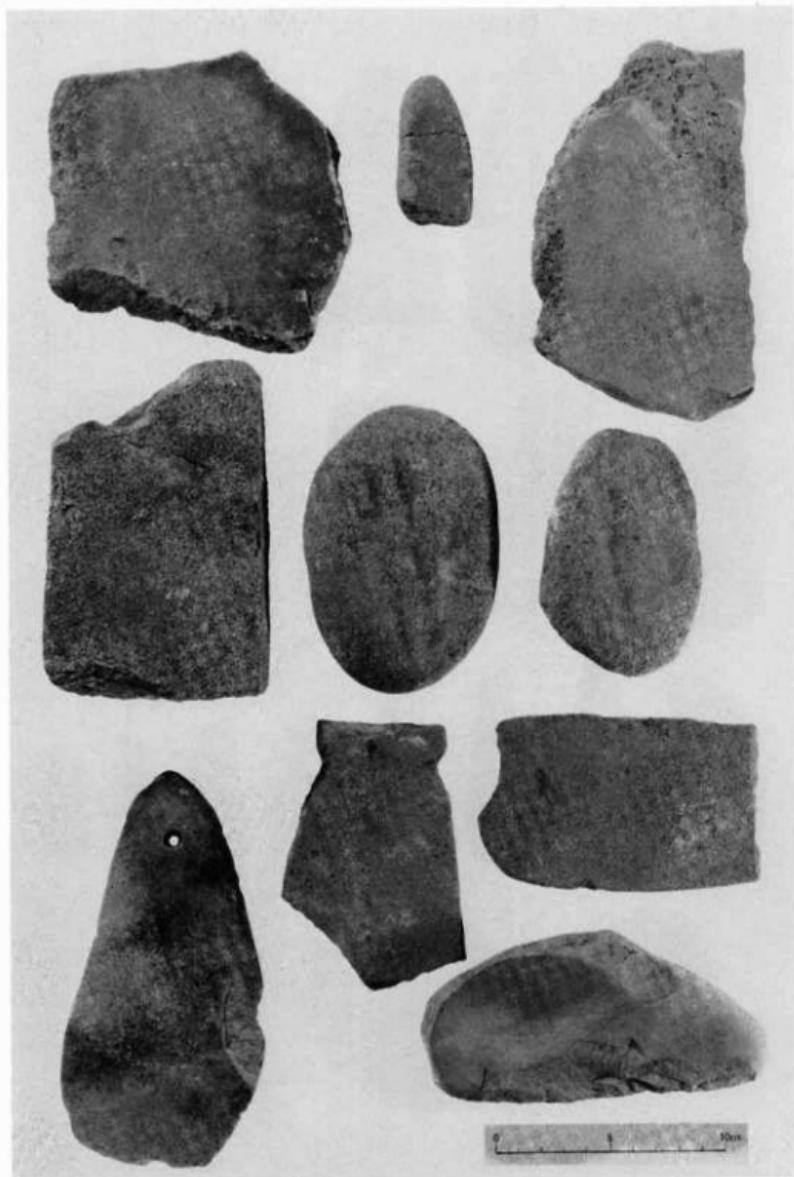
包含層 石槍・石錐・石匙



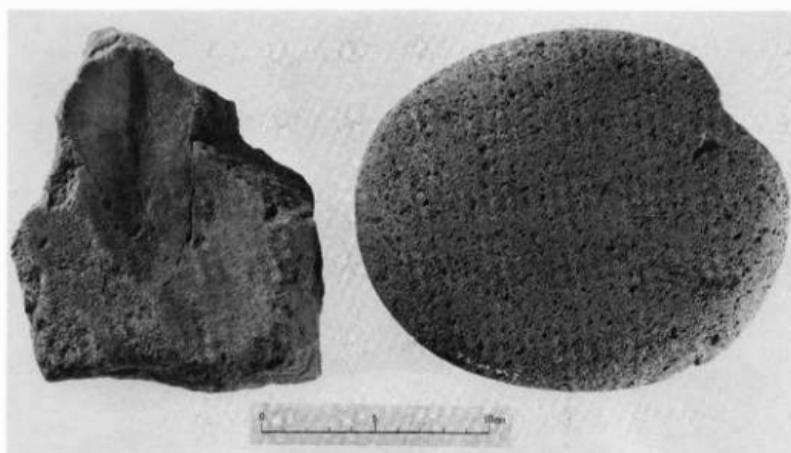
包含層 ナイフ・搔器・刮器



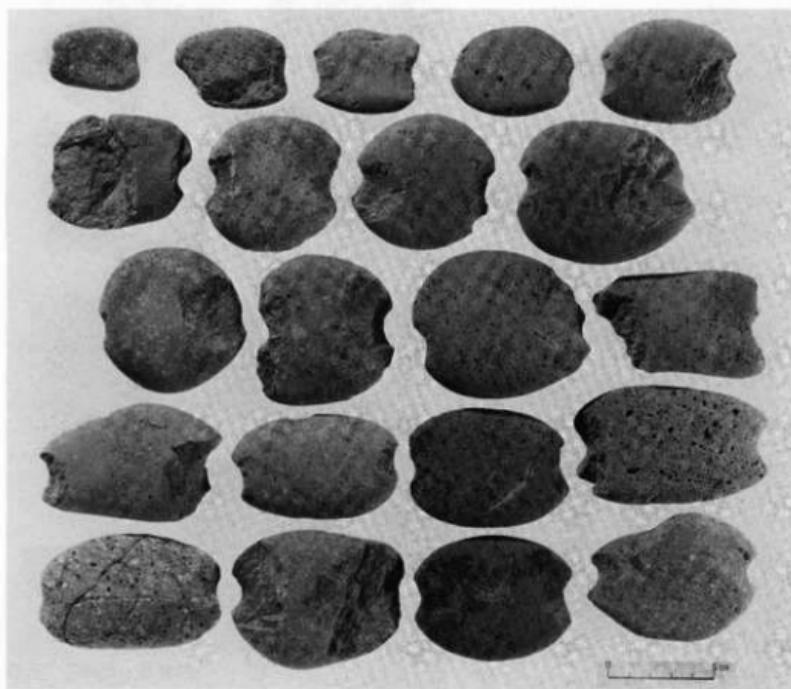
包含層 石斧・擦石・敲石



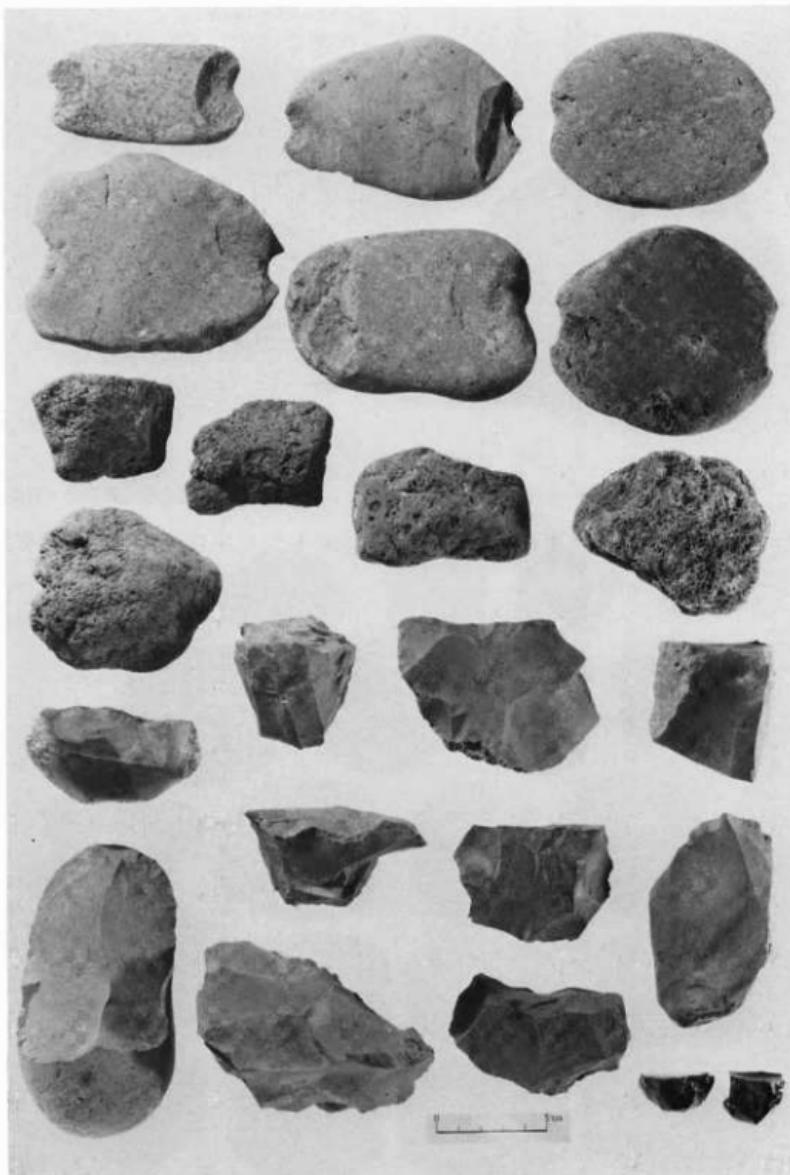
包含層 磚石①



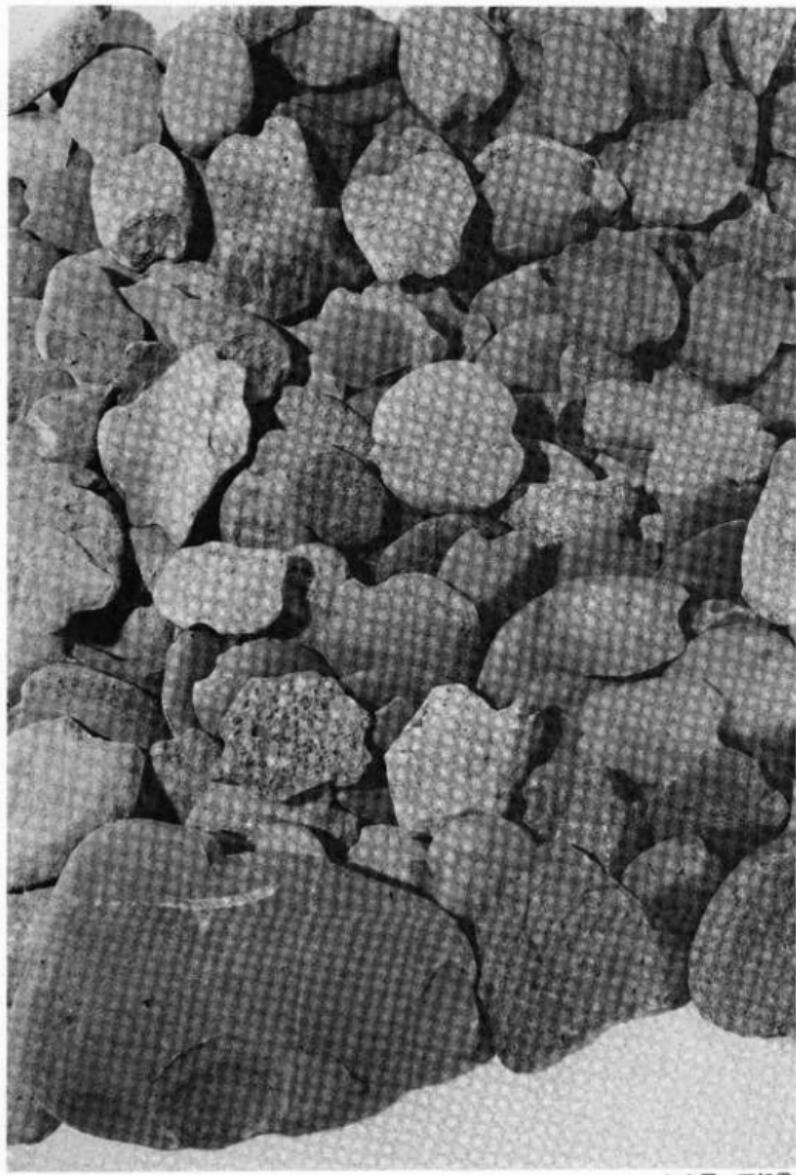
1. 包含層 砕石②・石皿



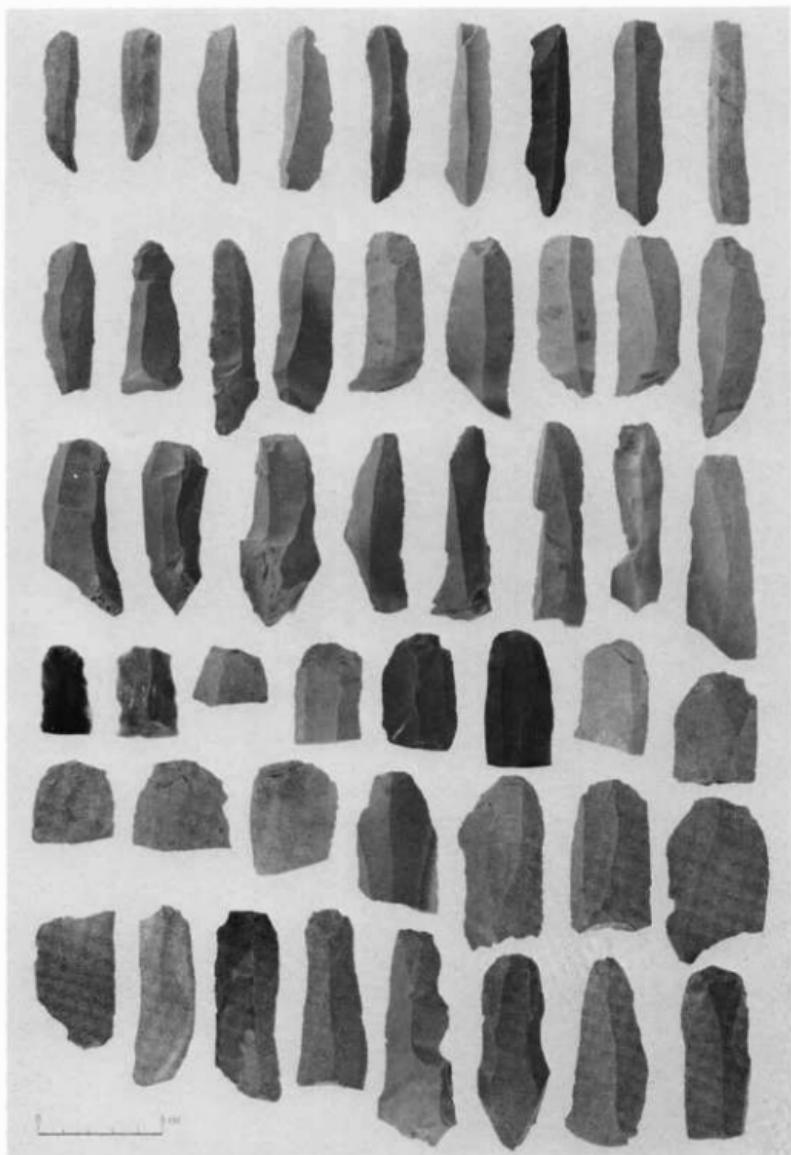
2. 包含層 石錐①



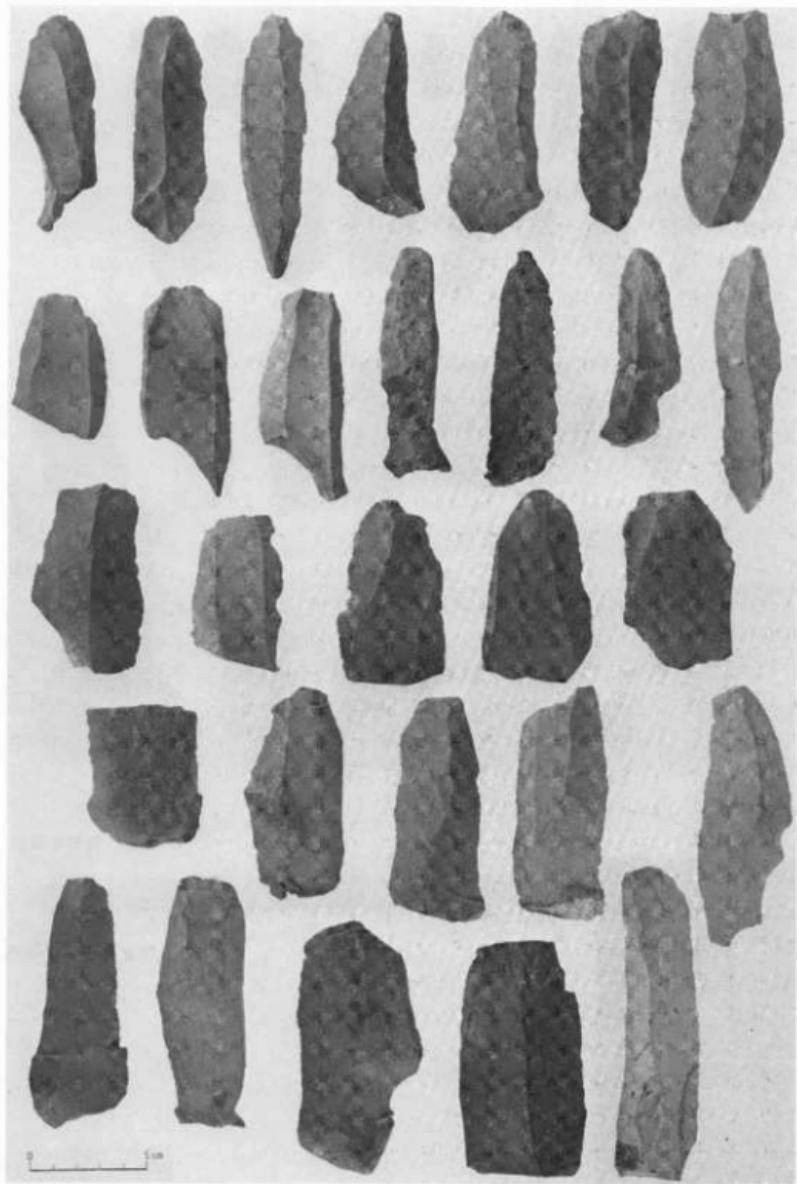
包含層 石錐②・石核



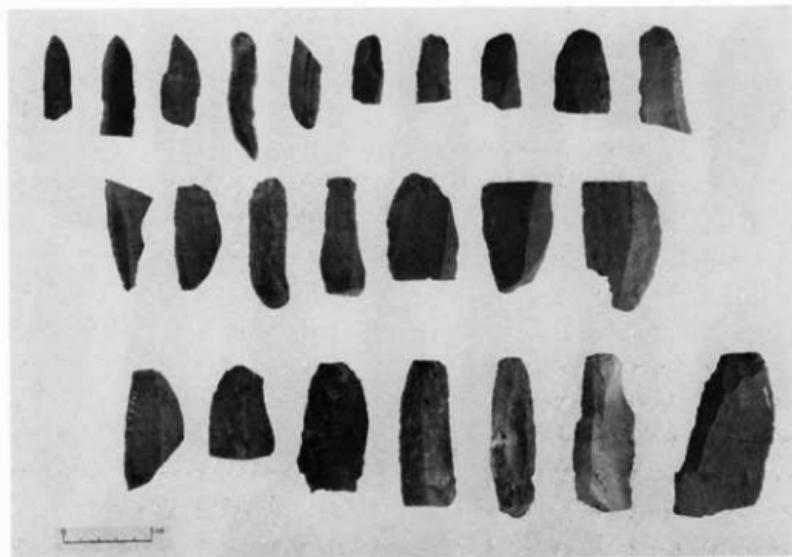
包含層 石錠③



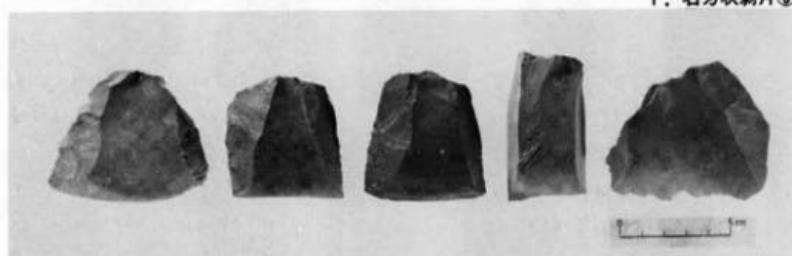
石刃状剥片①



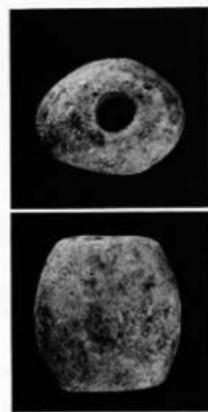
石刃状剥片②



1. 石刃状剥片③

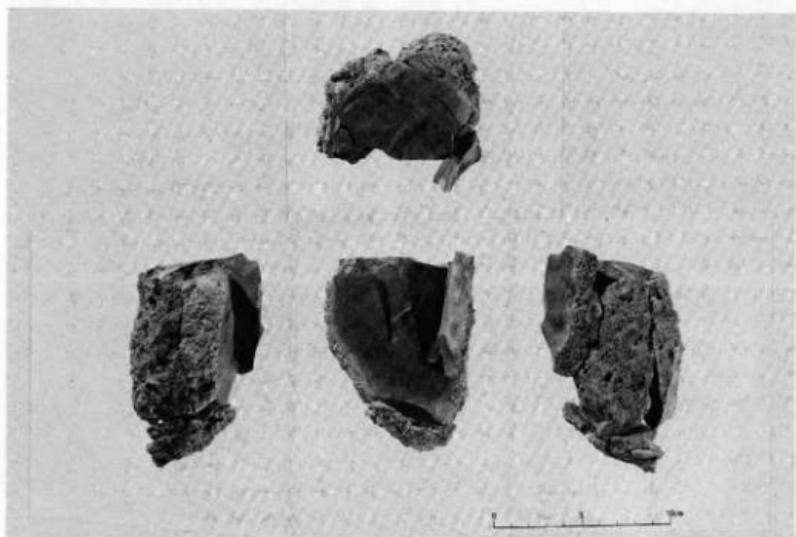


2. 特殊な撲器

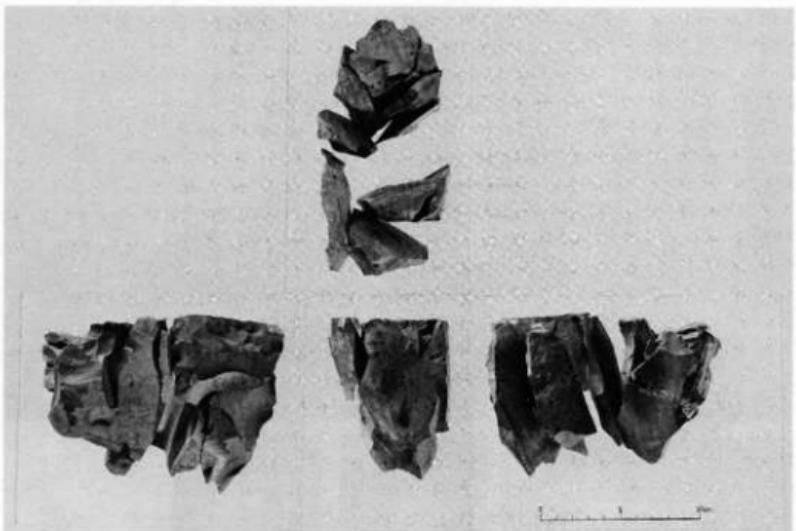


3. 包含層 棒状原石

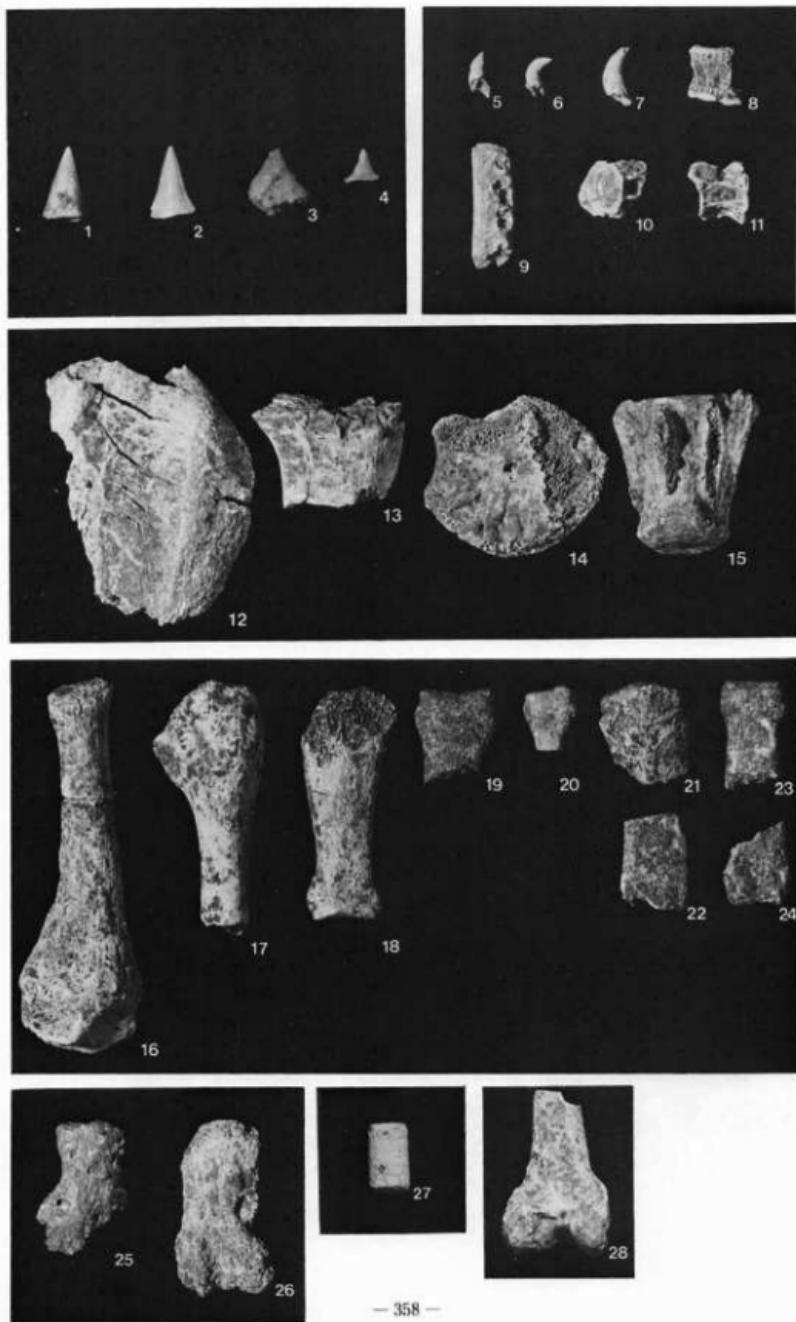
4. 包含層 玉

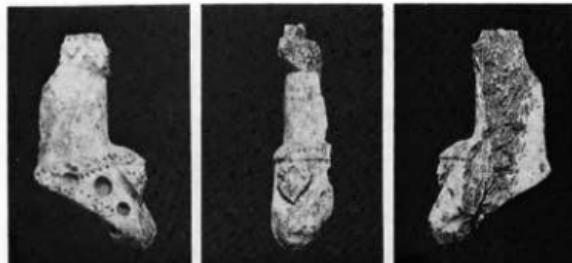


1. 接合資料①

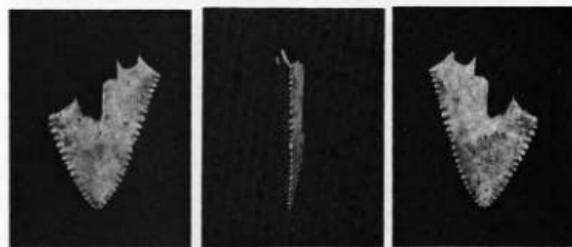


2. 接合資料②

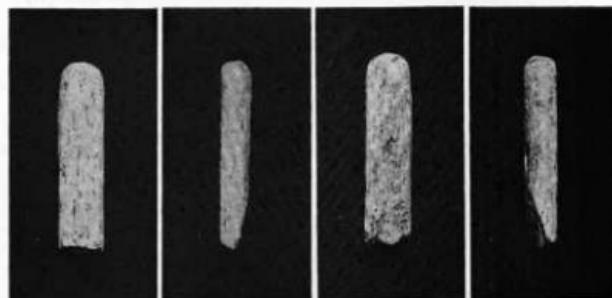




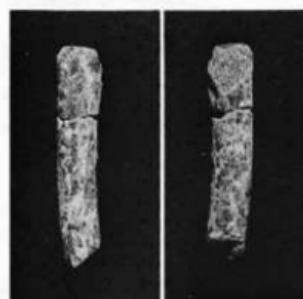
1. 廃棄場跡 骨製品



2. 廃棄場跡 サメ歯の垂飾品



3. H-1 土壌 骨製品



4. 廃棄場跡 骨製品

図版 V-104 動物遺存体

- 1~4 サメ歯 (4はH-4) × 2
 5~11 魚類 (5~8サケ類 9タラ類 10・11アイナメ?) × 2
 12~15 海獣類 上腕骨・胫骨等 × 1
 16~24 " 中手骨・中節骨・中足骨等 × 1
 25・26 " 末節骨 × 1
 27 鳥管骨 × 1
 28 キツネ × 1 (× 1 × 2 は倍率)

詳細は表VI-10・11参照



1. 現場見学風景



2. 整理作業風景



3. 整理作業風景

VI 上泊 4 遺跡

VI 上泊4遺跡

1 まえがき

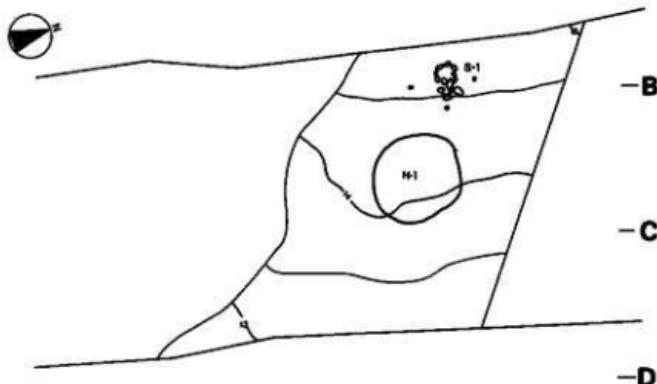
上泊4遺跡は、斧状に突き出た標高12m前後の台地にある。調査区は、先端部から約15m奥に入った沢寄りの地点で、台地の先端より一段高いところにある。調査区およびその周辺は、旧上泊自治会館を建設する時にI・II層が削平されている。また、調査区全域に碎石が2mほど盛られていたため、発掘する前に重機で碎石を取り除くことから始めた。残った碎石を人力で除去すると調査区中央でやや汚れた黄褐色土が露呈してきた。この土は、二次堆積で旧自治会館が建設された時に動かされたものと思われる。この二次堆積物を取り除くと黒褐色土が権円状に広がり、その中心に石組みが検出されてきた。この遺構をさらに掘り下げたところはっきりした掘り込みをもつ住居跡が出土した。この住居跡の西方に大形の石組みが検出されたが掘り込みはなかったので、石組み炉とした。

(植市 幸生)

2 遺構

H-1 (図VI-2~10, 図版VI-2~8, 表VI-1~3)

1号住居跡は調査区のほぼ中央に位置する。まえがきで述べたように二次的に堆積していた



図VI-1 遺構位置図

暗黄褐色土を取り除くと黒褐色土が露呈してきた。この黒褐色土を10cmほど掘り下げるとき茶褐色土の面が検出された。この面をさらに掘り下げるとき明瞭な住居跡が現われてきた。前者を上層面と呼び、後者を1号住居跡とした。

層序について：1号住居跡の床面は、IV層を掘り下げてつくられている。床面はほぼ平坦であるが炉跡の部分はやや浅くくぼむ。ただ、北壁周辺の床は海側に向ってやや傾斜する。この住居跡を埋めている土層の堆積状態は次の通りである。

第4層としての暗黄褐色土が10cmほどの厚さで床を全面覆っている。壁に近くになるにつれ層厚が厚くなる。本層は、IV層と変わらないがフレイク・チップが含まれていたため第IV層と区別することができた。第4層は固くしまっていた。床面と第4層との間には黒褐色土の堆積はない。第3層の茶褐色土はやや黒っぽいざらざらした土で住居跡の中央部の狭い範囲しか分布していない。多分、炉跡に堆積していた焼土と思われる。この層の上に数cmほど暗茶褐色土第2層が均質に堆積する。さらにこの2層の上に黒褐色土第1層が約10cm堆積する。黒褐色土はやわらかく、土器・フレイク等を含む。自然堆積層と思われる。第1層と第2層の境には小砂利が少量含まれる。さらに第2層の上面で生活面を確認できた。この上層面は、図VI-2のように1号住居跡にオーバーラップする。

遺構について：上層面の中央に焼土があり、その西側にやや大形の角礫が並ぶが、東側にはない。石組みの炉跡と思われる。東側の隅には突起窓をもつ土器破片がかたまって分布する。石器・フレイクは、壁の周辺ではなく、炉跡を中心にして分布するようである。

柱穴は、炉跡を中心にしてほぼ同心円状に20穴分布する。そのうち、HP-1・7・8・11・13は2段に掘りこまれたピットで、上段の壁には暗黄褐色土が、中央には黒褐色土が堆積する。それに対して他の柱穴は黒褐色土のみである。前者の柱穴の深さは25cmで、後者のは20cm前後である。この上層面は、炉跡・柱穴等が検出されている。ことから考えると2軒の竪穴が重複していたのかもしれない。

1号住居跡は、径ほぼ6mの不整円をなす。壁は、削平されている。残存する壁の高さは10cmである。床面は、固くほぼ平坦である。焼土は、床中央やや北寄りにある。その西側に偏平な大形礫2個と礫の抜き跡が、さらに南側に円礫があるので石組みをもつ炉跡と思われる。柱穴は不規則に並ぶが、ピットの深さと柱穴の位置等から考えるとHP-6・8・13・21が主柱穴と推測することが可能である。ただ、主柱穴の位置が全体に北壁に片寄っているのでHP-7も含めた5穴が主柱穴という推定も成立つ。壁は、ゆるやかに傾斜する。北西壁と南東壁は若干外に張り出し気味であるが、舌状に張り出した付属施設は検出されなかった。

床の遺物の出土状態は、上層面のそれとは異なってはっきりした密集区が認められる。土器は、HP-21の東側に一括土器が、東壁のそばでふせた状態の底部1個と別個体の胴部破片がかたまって出土した。土器はいずれもⅡ群A類土器である。石器は、炉跡周辺の空間ではなく、それをとりまくようにして分布する。その数は22点で、主に石製ナイフが多い。北壁の張り出したところには、フレイクの集中区が3か所あり、東側に位置するのは黒曜石と頁岩が混在し、

西側の2つのブロックはメノウ質である。石核は、フレイクの密集区とは離れた底部のそばとHP-13のそばの2か所で発見されている。

床面出土の土器について（図VI-4の1~13, 図版VI-4）

II群A類土器しか出土していない。

口縁は、波状口縁のものではなく、平坦な口縁の例がほとんどである。そのなかでも、平坦な口縁に小突起を作出したものが目立つ（3・5・6・7・8）。いずれも、粘土粒を口縁に貼り付けたもので頂部に1つあるいは2つの刻みを設けている。4と9も小突起をもつものと思われる。これらの口唇直下には、指頭のナデによる凹帯が認められ、その部分に突瘤あるいは貫通孔がめぐる。いずれも外側から突いたものである。口縁部は、くの字に屈曲するもの（5・8）、ゆるやかに外反するもの（3・4・9）が圧倒的に多く、内反するもの（7）は少ない。前者の口唇は、切り出し形で先端が外側に張り出すのに対し、後者はやや角形に近いものである。

5と8は、鉢で、3・4・9は深鉢と思われる。これらの底部は、接合できたものがないので不明な点があるが、5の底のように丸底気味になる可能性が強い。これらの地文の繩文はすべてRL繩文原体によって施文されている。ただ7と9は撚糸文の疑いもある。以上のような在地系の土器以外に10のように、鉢形土器でゆるく外反する短い口縁部、外側へやや開く頸部と緩慢なふくらみをもつ肩部によって構成され、頸部とその内面に列点文、肩部と胴部上半にそれぞれ数条の近接した平行沈線を1単位とした文様を2段施文する例もある。器形、文様などは、二枚構式土器に共通する特徴をもっている。

胴部破片の11は、無文で器厚は厚い。2は絡条体による条痕文が施文される稀な例である。

底部破片は、平底（1・13）と上底（12）などがある。1は、底にもRL原体による繩文が施文される。12は、LR原体による撚糸文である。

上層面および覆土出土の土器について（図VI-5：14~48, 6：32~47, 図版VI-5）

II群A類土器しか出土していない。

器種は、深鉢・鉢で占められ、壺・台付鉢などはない。

深鉢・鉢とも口縁は波状をなすものはない。突起をもつ例（37）は少ない。深鉢・鉢とも、39~42を除きすべて口唇直下に突瘤あるいは貫通孔をもっている。それらは、細い棒状の施文具で外から突いている例が多く、内側から突いているもの（17・28・29）は少ない。

突瘤をもつ土器のみをもつ土器（14~29）は、口縁部が内反し、口頸部にくびれをもたないもの（14~17・22）と、胴部上半にかけてゆるやかに内反しつつ口頸部に浅いくびれをもつもの（14・17・19~21, 25~27）、頸部と肩部の分化は明瞭ではないがほぼ直立した頸部と外反した丈の短い口縁部をもつもの（19・23・24）とがある。これらのうちでは、口頸部にくびれをもつ例が頗著に認められる。このタイプは、口唇が丸味をもつ例（14・17）、やや内切する例（20・21）、口唇の外側が先細りになる例（25~27）とがある。口頸部のくびれは、指頭のナデによって作

出されている。特に、27の場合は口頭部に強い屈曲部を作出している。突瘤をもつ土器の地文は、RL斜行縄文が多い。

平行沈線文をもつグループは、4例(29~32)ある。29~31は、いずれも胴部上半から口縁にかけて外反するものに対して、32は胴部からふくらみ口頭部にくびれをもつ。30は、平坦な口唇面にRL原体の縄文が施される。31は、頂部がくぼんだ突起をもちその頂部直下から端縁圧痕が横走沈線に直交して器壁の内と外に施文される。32は、口唇に縄文が施文され、口頭部から胴部にかけて横走沈線が数条平行して施文される。在地系の土器とは文様・胎土等で異なる。

縄文原体の側面圧痕による線状縄文(以後、縄線文と呼ぶ)をもつグループ(33~42)は、次の特徴をもつ。縄線文は、すべて2段撚りの縄文原体によるもので1条ないし2条が普通で多条のものはない。なかには、39~42のように幾何学文様をもつものもある。39以外は、文様帶は無文地をなす。この土器の器形は、口縁部が内反するもの(34~37)、胴部上半から口縁にかけて外反するもの(38~41)が多く、口頭部がくびれる例はわずか1例(33)である。

以上の文様をもつ土器以外、刺突文をもつ例(43)がある。口頭部に浅いくびれを設けさせている。平坦な口唇には縄文が施文される。

底部は、平底が多い。44は、やや上底気味、48は丸底に近いものである。45と46の角はやや張り出す。44と48は、底にもRL原体による縄文が施文される。

(種市 幸生)

石器について(図VI-7~10)

本遺構からは、剥片石器52点、礫石器6点、石核3点および頁岩・メノウの一括剥片、礫が検出された。石器の器種は、石鎌・石鋸先・石錐・石匙・ナイフ・搔器・削器・敲石・砥石・石皿および尖頭状の両面調整石器である。

以下、分類順に記述し、層位・規格・石質等を一覧表に掲載する。

ポイント(図VI-7:1~13、図版VI-6)

I A 1: 1~5・7~12が該当する。形態的には、全例、三角形を基本としているが、4のように両側縁部が直線的になるものもある。また、基底部は7・8の尖頭部を除いて、全例内湾している。3は、三角形鎌の中でもっとも狭長になるタイプで、両面とも入念な二次加工が施されている。5は、背面および腹面の周辺にのみ二次加工が施されたもので、大きく素材面を残している。8・9も同様である。石質は5が頁岩、ほかは全例黒曜石である。

I A 2: 6は、下面の床から検出されたものである。二次加工は、背面と腹面の側縁部に若干施され、素材面を大きく残す。また、基底部は打面となっており、腹面にバルブが見られる。

石鎌(図VI-7:14~16、図版VI-6)

I B 1: 14~16が該当する。14は、上部を欠損した先端部の破片である。二次加工は、入念に施されている。15・16は縦長剥片を素材とし、その先端部に細かな調整剝離が施されている。

ナイフ(図VI-7・8:17~35・37、図版VI-6)

I C 1: 17はHP-1中より1点のみ検出されたものである。二次加工は、背面の刃部に細か

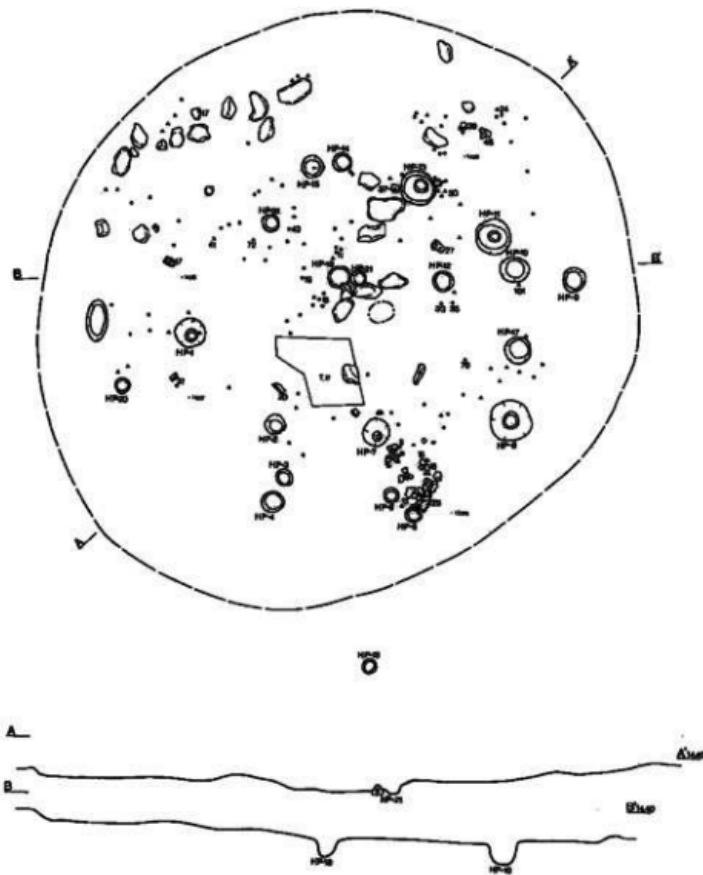
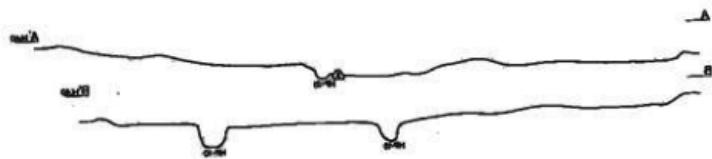
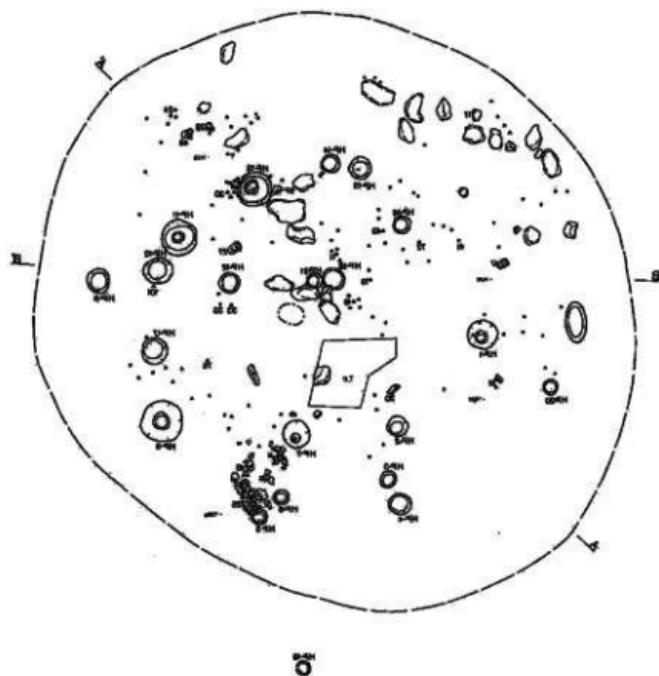
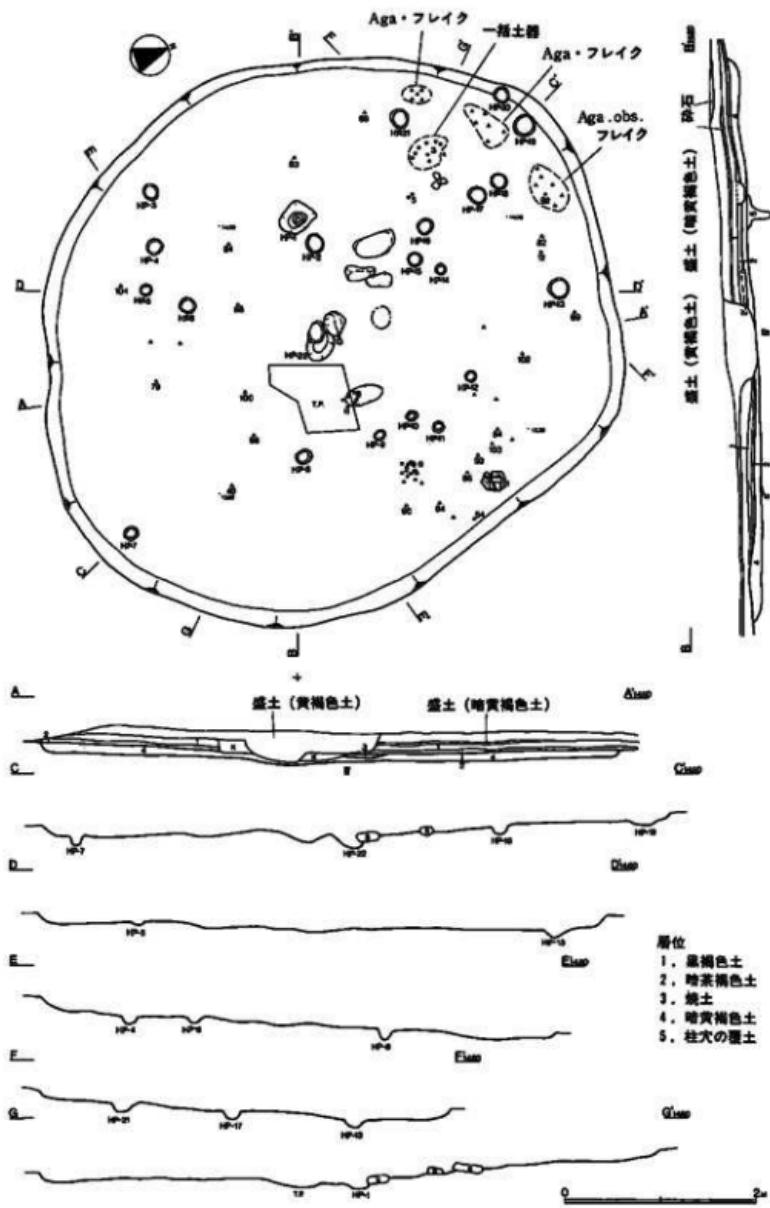


圖 VI-2 H-1 (上層面)



(圖版三 H-1)



圖VI-3 H-1 (下層面)

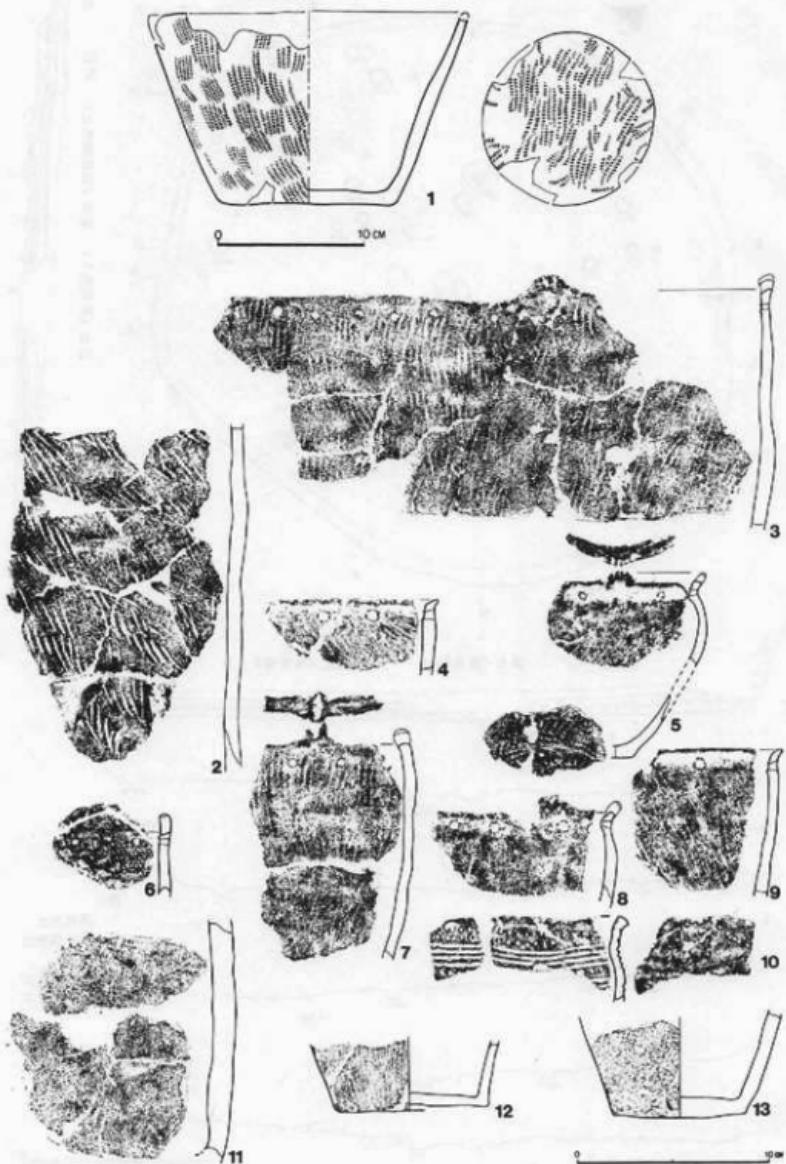
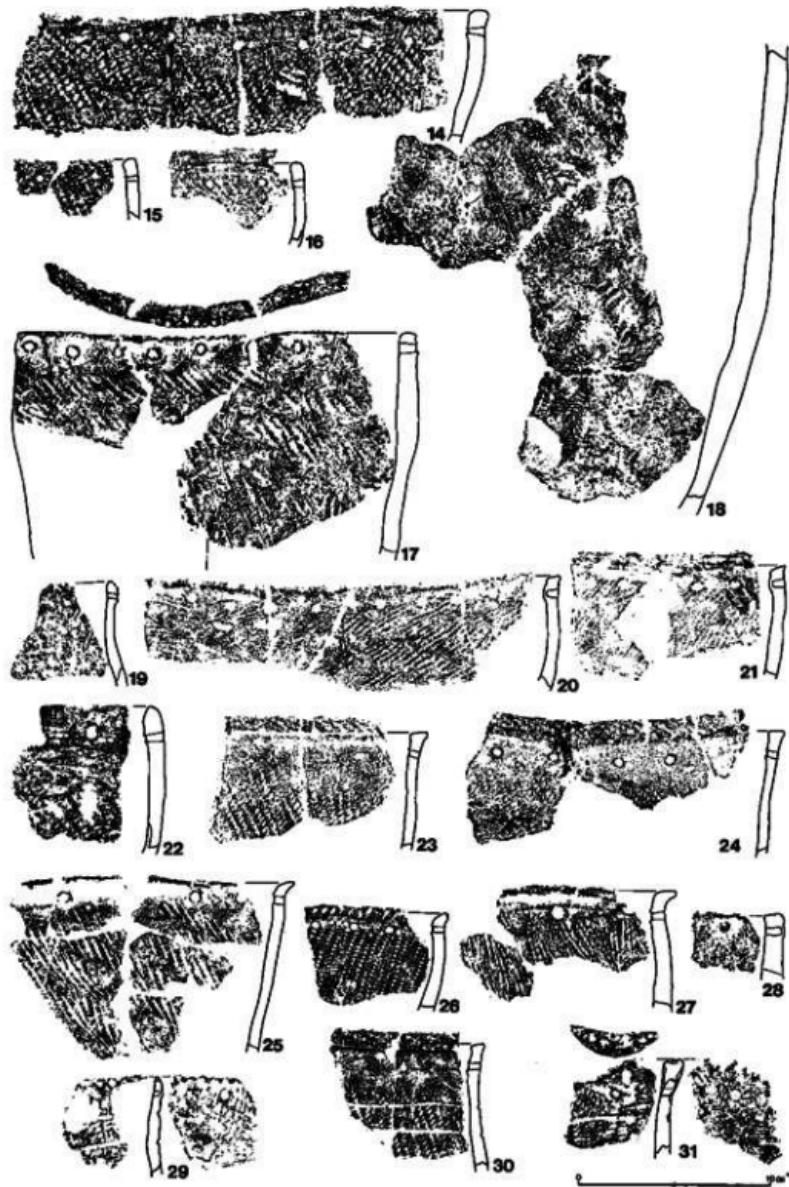
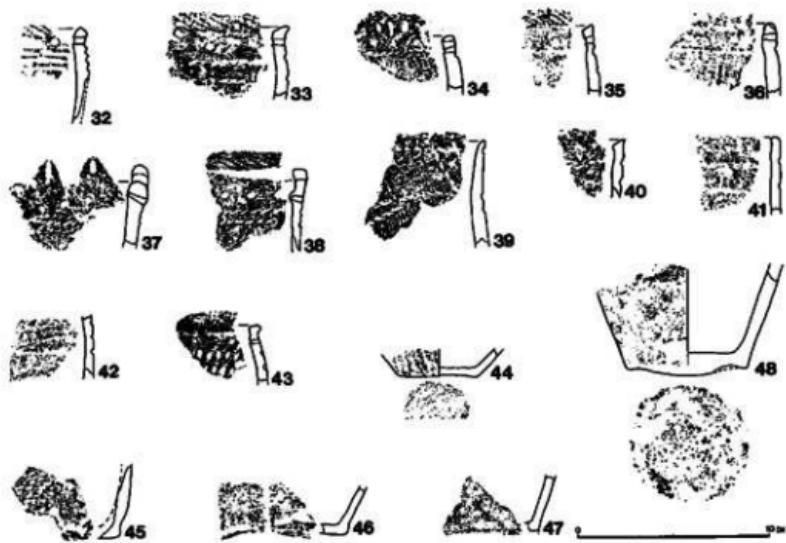


図 VI-4 H-1 床面出土の土器



図VI-5 H-1出土の土器(1)



図VI-6 H-1出土の土器(2)

く施されるほかは明瞭ではない。つまみ部も意図的に作出されたものではなく、剝片の素材をそのまま利用している。

I C 2 : 21は、下面床直上より検出されたもので、刃部は刃角が高く、鋭い切出刃状になっている。側面観は若干カーブする。黒曜石製のナイフである。

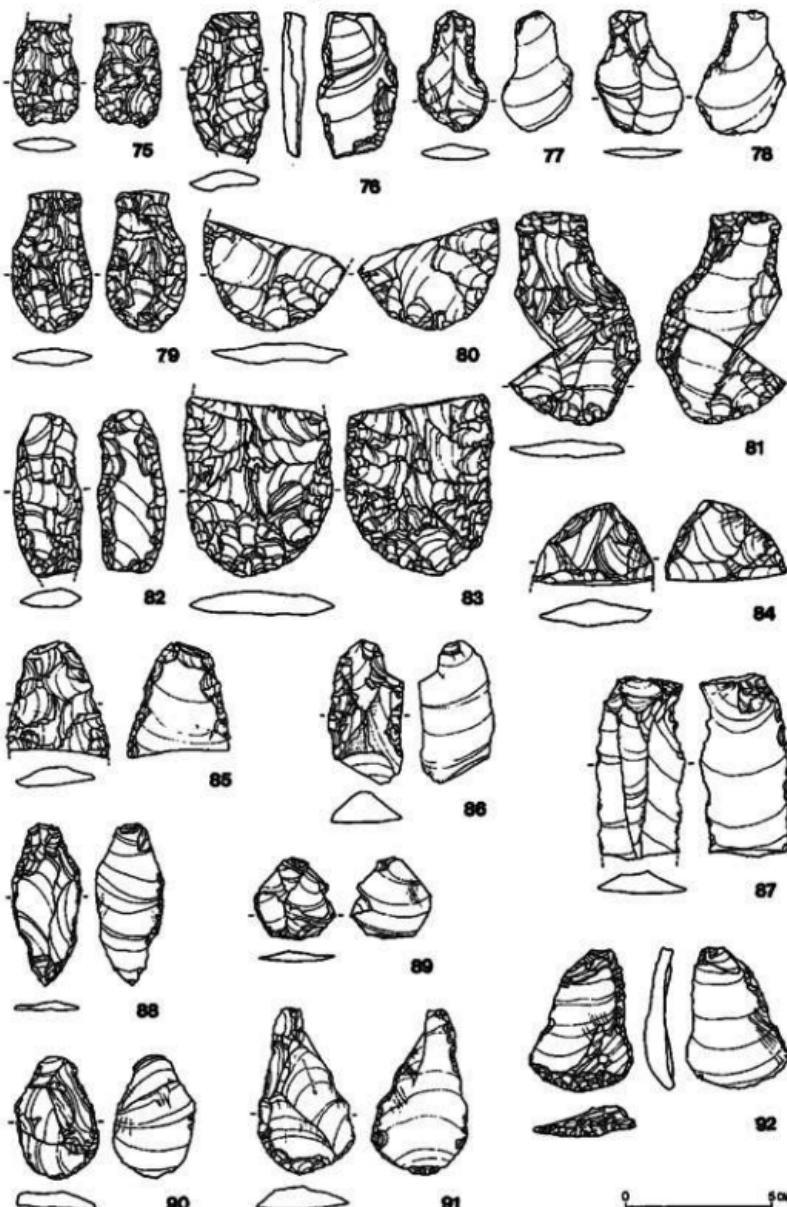
I C 3 : 18~20・22~35・37が該当する。18は、素材面を両面に大きく残したものである。二次加工は、刃部のみに施されている。19は、縦長のナイフで、背面左側縁に刃角の高い刃部が施されており、その先端は右に片寄る。20は、上部が尖頭状となる両面加工のナイフである。刃部は、右側縁部から左側縁部にかけて切出刃状に作られている。24は、縦長剝片を素材とした片面加工のナイフである。刃部は、左側縁から右先端部へと傾斜する。29・30は、有柄のナイフである。どちらも、背面中央に稜を有し、周辺部に細かい二次加工が施されている。31は、柄部を有した両面加工のナイフである。形態は範状となり、刃部は弧状である。32・33・35は、上部や側縁部を欠失したものであるが、刃部の形状は31と同様である。なお、刃角は、I C 2 と比較して低い。石質は、黒曜石と頁岩の2種類がある。

スクレイパー (図VI-8・9 : 36~38~45, 図版VI-6)

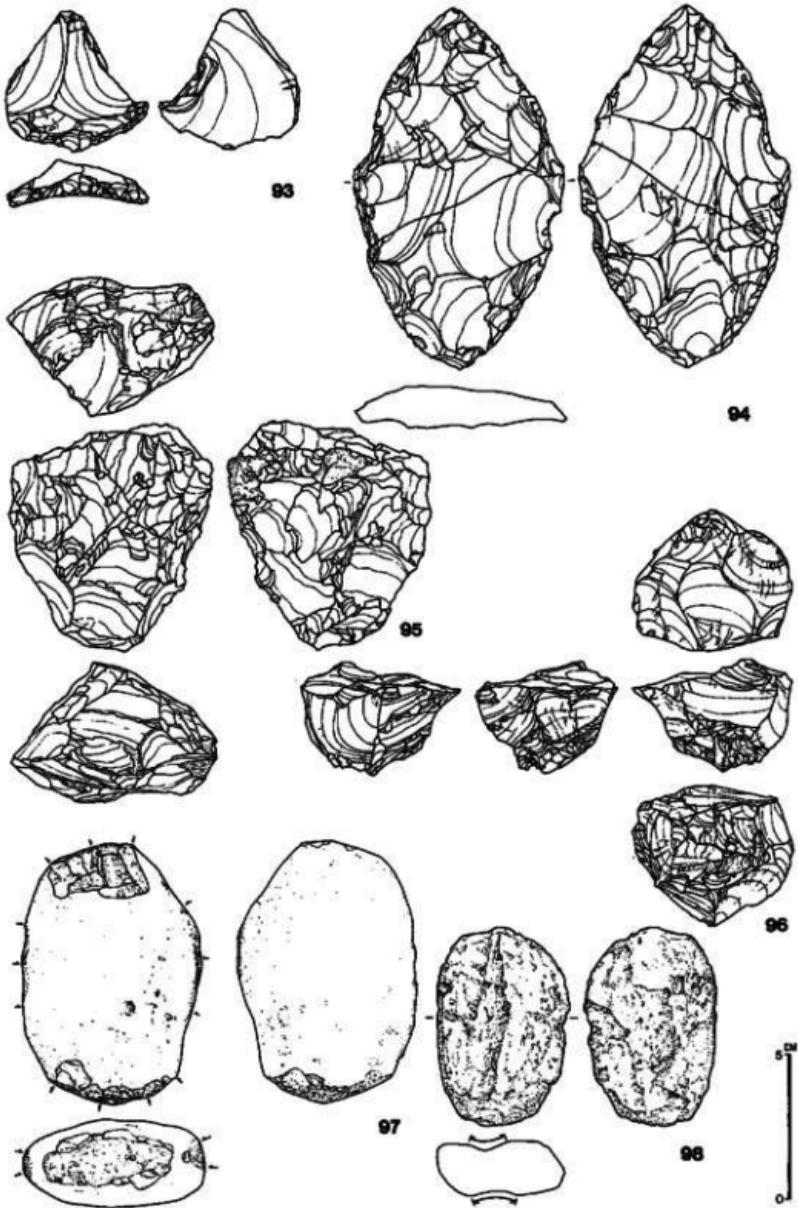
I D 2 : 44・45の2点が出土している。44は、縦長剝片を素材とした搔器である。二次加工は、背面下部に施された刃部と右側縁部のみである。側面観は、カーブする。45は、背面の刃部のみに二次加工が施されており、断面は内湾する。



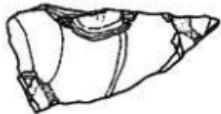
図VI-7 H-1出土の石器(1)



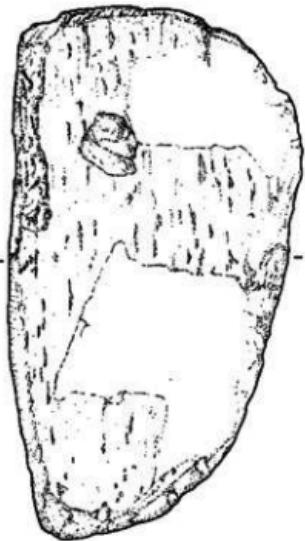
VI-8 H-1 出土の石器(2)



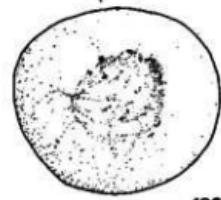
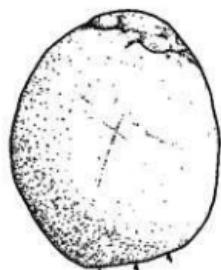
図VI-8 H-1出土の石器(3)・石核(1)



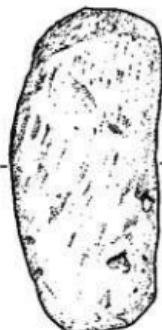
99



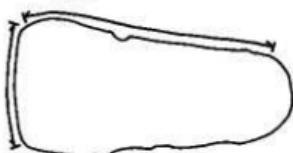
102



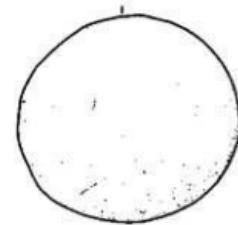
100



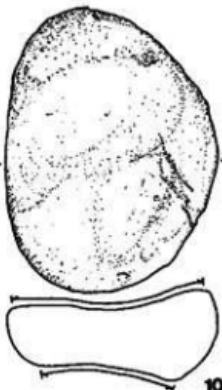
101



103



103



104

図VI-10 H-1 出土の石器(4)・石核(2)

I D 3 : 36-38-43が該当する。40は、縦長剥片を素材とした削器で、形態は尖頭状となる。二次加工は、背面の両側縁部と腹面の右側縁部に見られる。断面は、0.3cmで非常に薄い。41は、HP-15内より検出された削器である。刃部は、背面の左側縁部に施される。

なお、本型式とは別に下面床直上より、ポイント状の両面調整石器（図VI-9:46）が出土している。

敲石（図VI-9:10:49-52、図版VI-7）

II B 1 : 49は、偏平梢円礫を素材としたものである。敲打痕は、上・下端部が顕著に認められるほか、周辺部にも細かく見られる。

II B 2 : 52は、下面床直上より検出されたもので、同礫の一端に敲打痕を残している。

砥石（図VI-9:10:50-53-54-56、図版VI-7）

I D 1 : 54-56が該当する。54は、重量が640gをはかり、破面を上面と片側面にもつ。56は、梢円状の砥石で、砥面は両面に見られる。また、表面は研磨痕が2分割して使用されている。石質は、どちらも軽石である。

II D 2 : 50は、下面床直上から検出された有溝砥石である。溝は、両面とも長軸に沿って見られるが、表面の方が研磨痕が顕著である。重量46.8gの軽石製砥石である。

II D 3 : 53は、四面体の柱状砥石である。砥面は、2面を有する。重量は、189.2gで比較的軽く、手持ち用の砥石と考えられる。

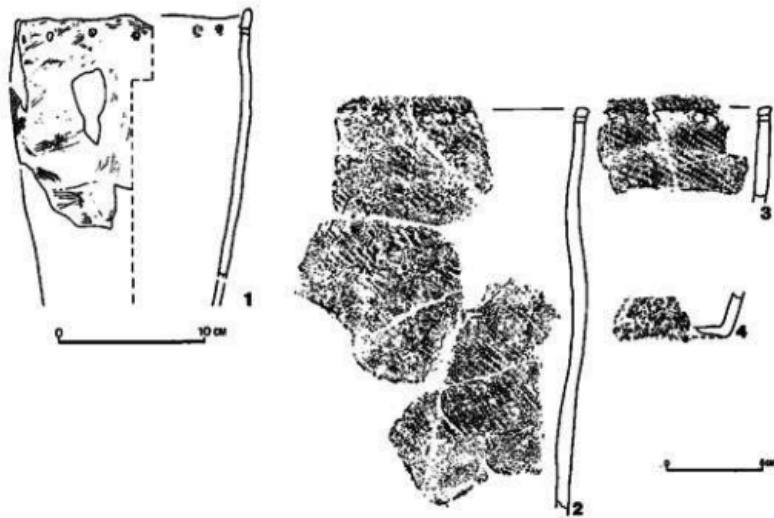
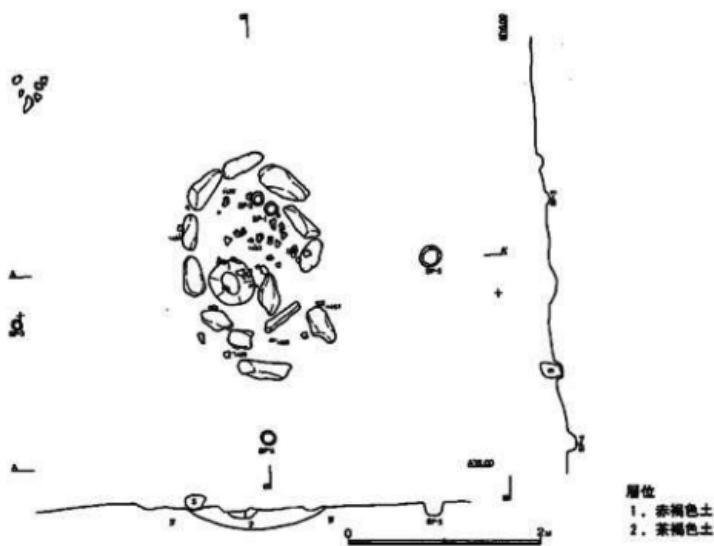
石核（図VI-9:10:47-48-51、図版VI-6）

III：下面床直上より2点（47-51）、C層中より1点（48）が検出されている。47-51は、メノウ質の石核で、これと同質の一括剥片が北壁際より2ブロック確認された。また、48の頁岩質の石核も同質のものか不明であるが、メノウと並んで一括出土している。また、石核ではないのだが、頁岩の原石（55）も下面床直上より出土している。（森岡 健治）

S-1（図VI-11、図版VI-8、表VI-3）

遺構について

石組みの炉跡は、1号住居跡の西壁から約2m西方に行った地点にある。碎石を除去した時点で、すでに礫の頭を見せていた。碎石を取り除き清掃したところ、図VI-11のようにほぼ梢円形をした石組みが姿を現わした。礫は、長径30cm前後の隅丸方形のものを主に選んでいる。隅丸方形の礫の長軸を向い合せに並べ、梢円にしている。西側と北側にある浅いピットは礫の置いた跡で、東側の囲みの中に入っている礫は二次的に動かされたものである。その外側に突き出ている2個の石は袖石に当るものかもしれない。石組みの内部には褐色土（1層）が4~5cm堆積し、その上面には2個体分の土器片がほぼ水平に広範囲に亘って分布する。折り重って出土したものは少ない。上の土器片を接合すると図VI-11:1のような深鉢になった。火を受けたのか色調が赤褐色をなす。石組みの内部の東側寄りに径50cmの浅皿状の掘り込みがある。茶褐色土（1層）が堆積しており、底面は赤褐色（2層）をなす。ピットの向い側に深さ10cm程の柱穴状のピットが2個、および石組みの外側にも柱穴状のピットが3個、図のように並ぶ。



図VI-11 S-1・出土の土器

前者のピットには黒褐色土が、後者には暗黄褐色土が堆積する。これらの柱穴状ピットが石組み炉に伴うものかどうかは不明である。

土器について：Ⅱ群A類土器（図VI-11：1～4、図版VI-9）

石組み炉から出土した土器片は少ない。1は、唯一復元できた土器である。口縁は平坦ではなく凹凸がみられる。4カ所に弧状の小突起が貼り付けられたもので頂部には刻みを作り出している。腹部上半から口縁部にかけてゆるやかに内反しつつ口頸部では浅くくびれる。口唇は丸味をもち、口唇直下に貫通孔がめぐる。貫通孔は、外から突いて作られたものであるが内側には一部瘤状のものも見られるので大部分の瘤は剥落したものと思われる。地文は無文である。横走する整形痕が顕著に認められる。

2は、口縁部と頸部の屈折ははっきりせず、ほぼ直立する口頸部をもち、頸部下半から肩部にかけてはかるくふくらみ、腹部はゆるやかに垂下していく。口唇は、平坦でその上に縄文が施される。口唇直下に貫通孔がめぐるが、いずれも内側の瘤は剥落している。外から突いて内側に突瘤を設けたものと思われる。器面は凹凸が著しい。地文は、RL斜行縄文が施される。

3は、口唇直下に貫通孔がめぐり、口縁部がやや内反気味のものである。4は、平底の底部破片である。

（種市 幸生）

3 包含層出土の遺物

i 土器（図IV-7：1～15）

Ⅱ群土器が大半で、Ⅰ群土器は7点出土した。後者はいずれももB類土器である。事実記載については省略する。（図版VI-11参照）

Ⅱ群A類土器（1～5・8～10）

ほとんどが口唇直下に突瘤あるいは貫通孔をもつ土器で、深鉢あるいは鉢になるものがあるが、8のように浅鉢に近い器形をもつものもある。8は無文で吊り耳状の突起をもち、突瘤あるいは貫通孔はない。口縁部が内反する例（3・5）、外反する例（9）、口頸部にくびれをもつもの（1・2・4）がある。後者のうち、1は口頸部のくびれは明瞭ではないが、口頸部を指頭によってナデに痕跡が認められる。口頸部の地文の縄文は磨り消されている。これらの土器の口唇は、2のように口唇が先細りになるもの（2）、断面観がやや尖がるもの（9）などが見られる。

地文は、無文（5・8）のものと縄文（1～4・9・10）で、撚糸文が施される例はない。8は、肩部破片でRL原体縦走縄文である。原体の縄文は太い。

Ⅱ群B類土器（6・7）

6は、腹部上半から膨みをもちながら口頸部で強く内反する。内傾したところに外から突いた突瘤文が施文される。口唇は内切し、その外縁に端縄压痕が連続してつけられる。地文は、RL斜行縄文が施される。

2は、平坦な口縁に台形状の突起を貼付し、突起の頂部にはV字状の刻みを3個近接させている。口唇は、先細りとなり、その突先に刻みを連続して施している。口頸部は、浅いくびれ

をもち、その湾曲部に内側から突いた突瘤文がつけられる。口縁部は無文地をなす。肩部から頸部上半にかけては斜走する撚糸文が、頸部下半には縱走する撚糸文が施文され、頸部上半と下半の接点では両者が交差する。交差したところでは格子目状をなし、縱走した撚糸文のうえに斜走する撚糸文を施文している。

II群C類土器 (11~14)

11は、RLの綱文を施文した後に磨きを加え、綱文を帶状につぶしている。その地文のうえに縱と横に走る2本を1単位とした平行沈線を組み合せた文様を2段施している。平行沈線の間には短沈線をめぐらせる。やや強く多反した口縁部とほぼ直立した頸部をもつ。頸部と肩部の境は、はっきりしていないままにすばまるようである。口縁部には突瘤文は施文されていない。

12~14は同一個体で、頸部と肩部は明瞭に分化していない。肩部から頸部にかけてはほぼ直立し、口縁部でゆるく外反する。頸部には、4条1単位となった綱線文が頸部の上端と下端に、さらに、その空間を2本1単位となった斜めの綱線を間隔を置いて施文している。綱線間に刺突文が充てんされる。地文は、LR斜行綱文が施されている。綱線は一段挽りのL R原体を用いている。

(種市 幸生)

ii 石器等

本遺跡から出土した石器群は、遺構内より58点、遺構外より65点であった。しかし、遺構外から得られた石器であっても、発掘調査範囲が狭く、しかもH-1がその中央部に所在することから、ほとんどの石器群はH-1と同時期のものといえる。したがって、本遺跡出土の石器群は、II群B類の土器に伴ったものが主体となる。ただし、I群B類の土器片もB-20-dでまとめて出土していることから、石器群の中にも若干、縄文時代中期のものが混在している可能性がある。出土した石器の器種は、石鏃・石鋸先・石錐・石匙・ナイフ・搔器・削器・石斧・石皿である。また、石核も數点検出されている。なお、石器の出土点数に占める、礫石器の割合は極めて低い。これは、石器組成から本遺跡の性格を考える上で、留意すべきことである。

ポイント (図VI-13: 1~15, 図版VI-10)

I A 1 : 1~6が該当する。これらは、基底部の形状より、内湾するもの(1~3·6)と平坦なもの(4·5)に分けられる。1は、両面加工の石鏃である。二次加工は、細かい剥離が施され、基部は左下がりとなる。2~5は、全例先端部を欠損した石鏃である。素材面は、5のみ腹面に残るが、ほかは両面加工である。

I A 5 : 7~9の3点が出土している。いずれも、上泊3遺跡出土のIA 5とは形態を異にし、茎が太いもの(7·8)と狭長なもの(9)に分かれる。石質は全例、黒曜石である。

I A 6 : 11の1点のみ出土した。基底部が若干内湾した砲弾形をなし、両面ともに偏平である。黒曜石製の石鋸先である。

I A 7 : 10·12~15が該当する。10は、メノウ製の石鋸先で両面加工である。逆刺は、背面右側縁部が若干強く、基部が片寄る。12は、先端部が破損した後、再加工されたもので、基部断

面は偏平である。13は、両面ともに素材面を大きく残し、二次加工は先端部と茎部を入念に施している。断面は、0.3cmで非常に薄い。

石錐（図VI-13：16～18、図版VI-10）

I B 1 : 16～17の2点が検出されている。いずれも、刺突部周辺のみを二次加工したもので、石質は頁岩である。

I B 2 : 18は先端部を欠損しているが、刺突部とつまみ部周辺に二次加工が施されており、腹面上部には、バルブが認められる。石質は、頁岩である。

ナイフ（図VI-13・14：19～30・32～40・42、図版VI-10）

I C 1 : 19～21が該当する。いずれも、片面加工のものばかりである。20は、両側縁が直線状となり、先端部は平坦になる。また、腹面はつまみ部のみ二次加工が施されている。

I C 2 : 22～25が該当する。22は、背面の周辺にのみ二次加工が施されており、刃角は高くなる。23・24は、若干刃部が張り出した片面加工ナイフで、断面は厚みを有する。

I C 3 : 26～30・32～40・42が該当する。26・27は、刃部が若干張り出した片面加工のナイフで、先端部は右側に寄る。32は、両面加工のナイフであるが、先端部を欠損している。34・38は、柄部片である。42は、柄を有した両面加工ナイフで、先端部は破損後再加工されている。

スクレイパー（図VI-13・14：31・41・43・44、図版VI-10）

I D 2 : 43の1点のみである。黒曜石製の剥片を素材とし、刃角の高い刃部を作出している。

I D 3 : 31・41・44が該当する。31は、背面の周辺に二次加工を施したもので、断面は薄い。44は、バルブを有した剥片の一辺に刃部のみを作出したものである。腹面は、先端部まで二次加工が施されている。

石斧（図VI-15：48・49、図版VI-11）

II A 3 : 48は、正面の刃部と裏面のみを研磨された小型の石斧で、断面は偏平となる。49は長方形を呈した石斧である。研磨痕は、刃部にだけ見られ、ほかはペッキングによる整形のみである。石質は、どちらも緑色泥岩である。

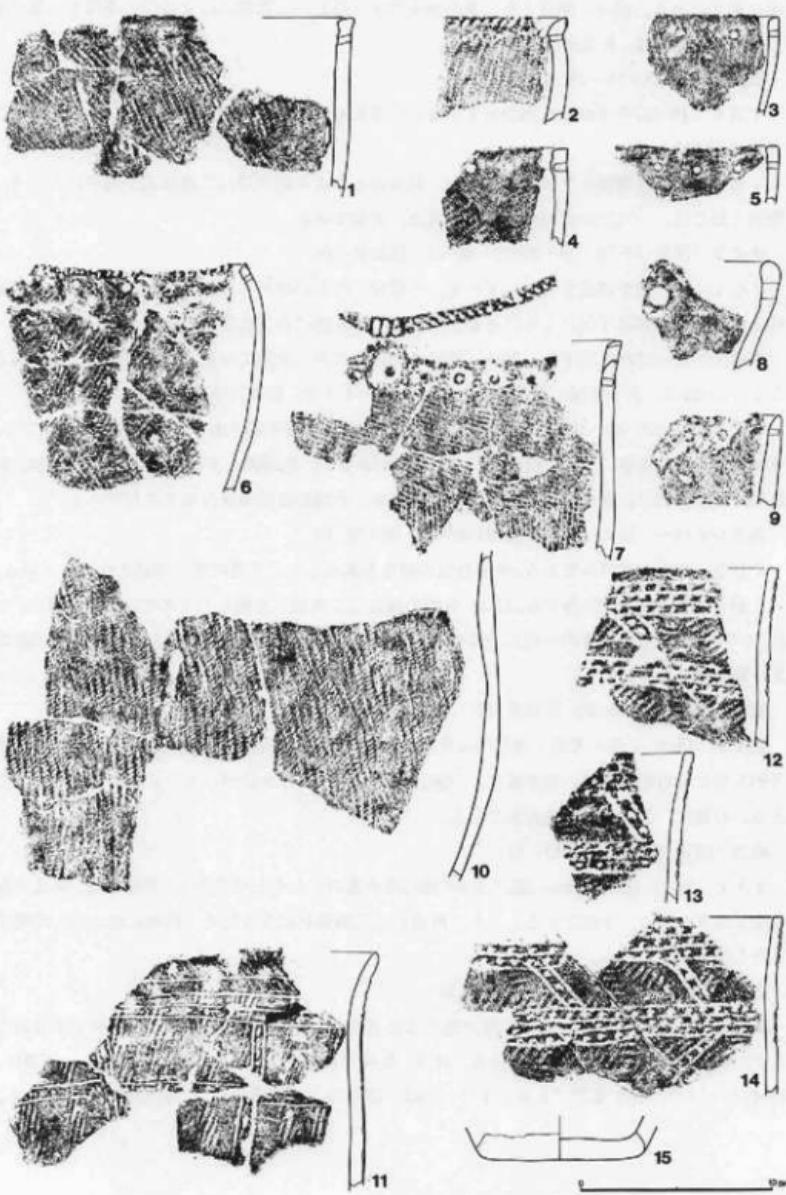
石皿（図VI-15：50、図版VI-11）

II A 1 : 50は、長さ35.5cm、幅22.1cmの楕円碟を素材とした石皿である。使用面は、あまり顕著な使用痕がなく、平坦である。また、断面が逆三角形状になるため、凹地に埋め込んで使用したものと考えられる。

石核（図VI-14・15：45～47、図版VI-10）

III : 45・47は、多面体の一角に刺離が施された石核である。打撃面は、細かな刺離が不規則に入り、47はとりわけ凹凸が顕著である。46は、縦長の石核で、断面は三角形状になる。石質は、45・47がメノウ、46が頁岩である。また、50は、遺構外より検出された、頁岩質の円碟である。

（森岡 健治）



図VI-12 包含層出土の土器

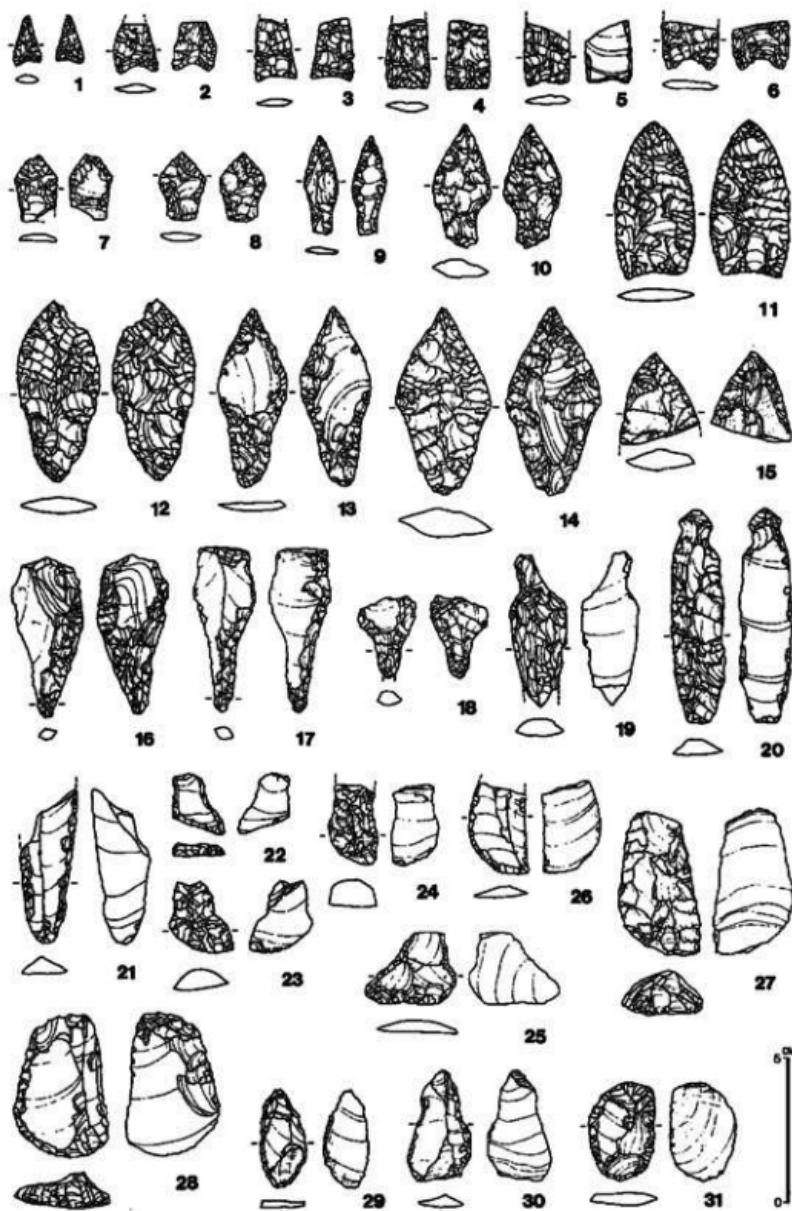


図 VI-13 包含層出土の石器(1)

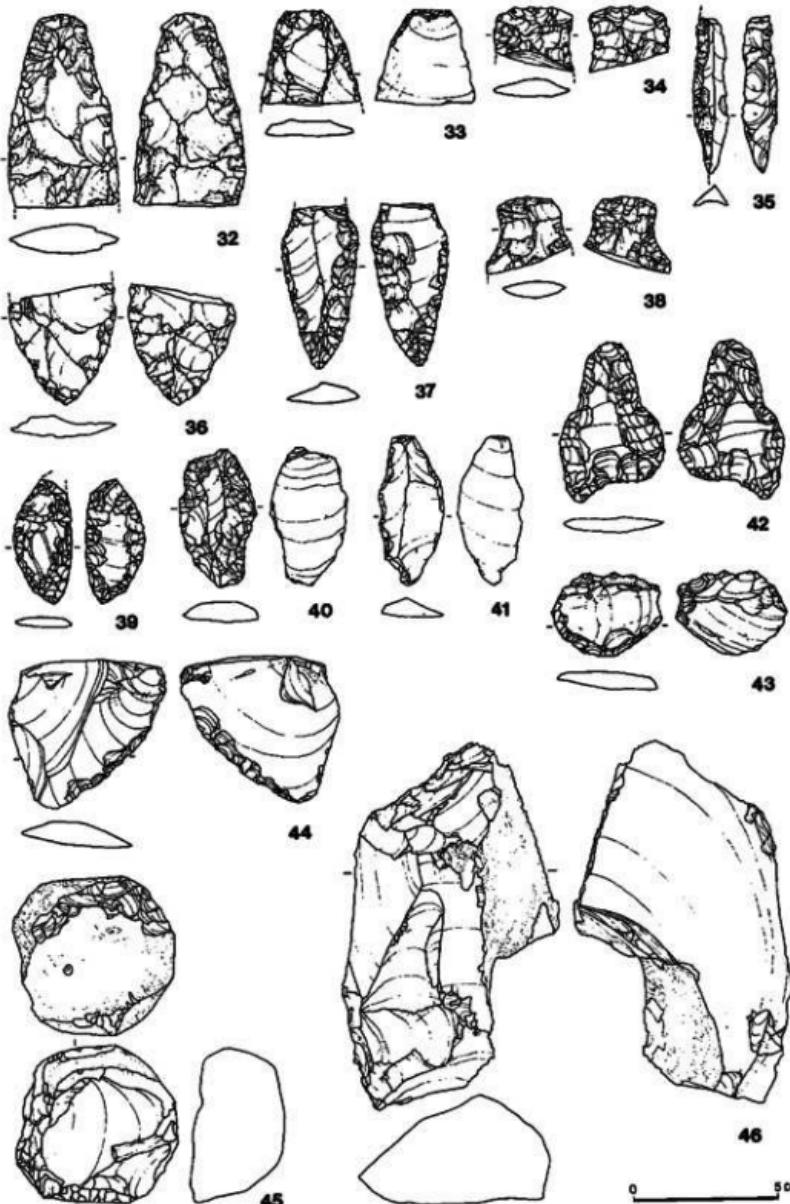
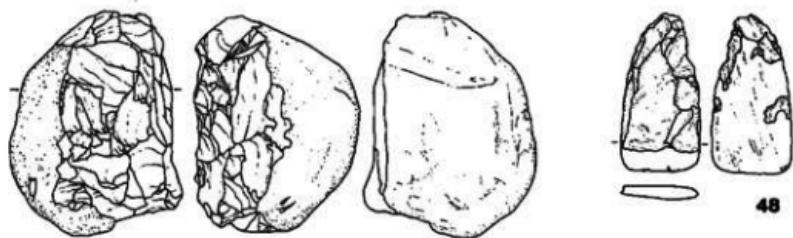
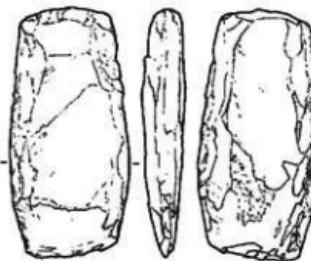


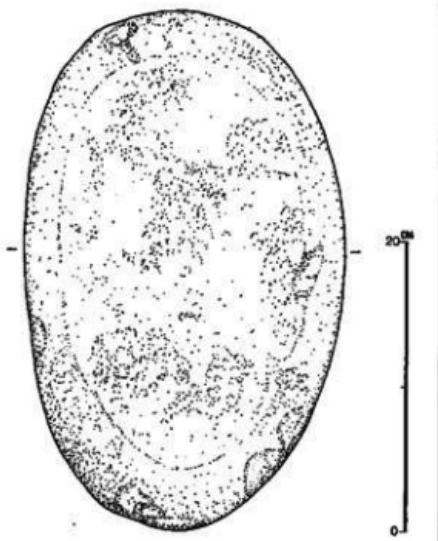
図 VI-14 包含層出土の石器(2)



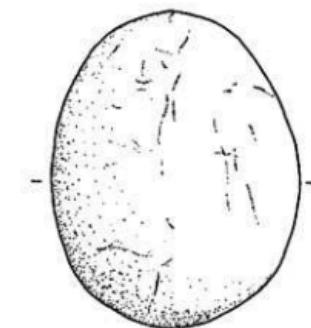
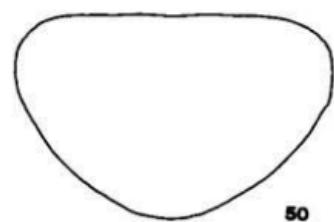
47



49



50



51

0 10 cm

図VI-15 包含層出土の石器(3)

4 小 括

上泊4遺跡は、台地の先端部に広がっているが大部分は旧自治会館建設時に搅乱を受けている。調査区は、そのうちの小範囲にすぎないが、竪穴住居跡1軒、石組み炉1基が検出された。住居跡は、舌状に張り出した付属施設をもたず、ほぼ円形に近いプランで床面中央に石組み炉がある。住居跡の時期は、床面出土の土器から判断すると統繩文時代初頭に属するものである。床面出土の土器は、II群A類土器で次のような特徴をもっている。すなわち、口唇直下に突起あるいは貫通孔があげられ、地文はRL縦走縄文、撚糸文・絡条体による条痕文などが施文される。これらの特徴をもつ土器群は、下田ノ沢遺跡出土の第1群第1類土器にも見い出される。しかし、後者が内側から突いた突起をもつのが圧倒的に多いのに対して、後者は外側からのものが多いこと、さらに弥生時代前半の土器が併出していることを考慮すると本遺跡出土の土器が古いのかもしれない。詳しくは、VII章を参照のこと。

ところで、道北地方でこの時期の竪穴住居跡が発見されたことは次のような意味で重要である。すなわち、斜里地方でこの時期の後になる宇津内Ⅱa・Ⅱb式土器の竪穴住居跡は、舌状の張り出し部をもつのが一般的である。この形態の住居跡の分布は斜里、網走地方に限られ、宗谷周辺では確認されていない。ちなみに、宇津内Ⅱb式土器より新しく位置づけられるオンコロロマナイ遺跡出土の尖底土器の住居跡は隅丸長方形をなす。このように、道北地方における統繩文時代における竪穴住居跡の系統を考えるうえで本遺跡出土の住居跡はわずか1軒といえども貴重な資料である。

1号住居跡は、使用されなくなった後、黄褐色土を竪穴に埋めたうえで踏み固めた痕跡が認められた。その面は4層の上でもあったが明瞭に確認できたのは2層（暗茶褐色土）の最上面であった。この面には、柱穴状の小ピットさらに石組み炉も検出されている。しかし、出土土器はII群A類土器で1号住居跡床面出土の土器と異なるものではない。さらに、1号住居跡の西方にある石組み炉跡も炉内から出土した土器も1号住居跡床面出土の土器と差はない。この事実から判断すると1号住居跡と石組み炉跡は同一時期に構築されたものと思われる。なお、これらの遺構の周辺からII群C類土器が少量出土しているが、この土器に伴う遺構は検出されていない。

石器は、剥片石器が多く、礫石器が少ない。剥片石器は、石製ナイフが主体となる。この石製ナイフは、道東部の縄文晚期的な要素を色濃くもっている。礫石器は、H-1から敲石2点、延石3点、石皿1点と遺構外から石斧2点出土したのみである。石錘は、調査区から1点も出土していない。

(種市 幸生)

遺構別出土・掲載遺土器一覧表

H-1

名 称	分類	數 量			名 称	分類	數 量		
		覆 土	床(上面)	床(下面)			覆 土	床(上面)	床(下面)
土 器	絞繩文	432		47	削 器	I D	9	1	3
石 錐	I A	9	1	3	両面調整石器	I			1
石 錐	I B	2		1	敲 石	II B	1		1
石 錐	I C	1			砥 石	II D	1		3
ナ イ フ	I C	13	1	5	核	III	1		2
搔 器	I D	1		1					

埠番号	分類	層位	特 色
1	II-A	床(下面)	底面に施文。
2	"	"	脇部。内面に炭化物付着。胎土に粗い砂粒を含む。
3	"	"	0→I の刺突文。
4	"	"	0→I。
5	"	"	0→I。小型。
6	"	床(柱穴)	0→I。胎土に小砂利を含む。
7	"	床(下面)	0→I。炭化物付着。
8	"	"	0→I (突瘤)。貼付突起。小型。
9	"	"	0→I。
10	"	"	横位に刺突列と沈線文。裏に不規則な刺突が加えられている。
11	"	"	底部。粗い砂粒が多く輪積痕あり。
12	"	"	底部。
13	"	"	底部。胎土に粗い砂粒を含む。
14	"	覆 土	0→I。
15	"	"	0→I。15と同一個体。
16	"	"	15と同一個体。
17	"	"	1→O。18と同一個体。胎土に粗い砂粒を多く含む。
18	"	"	17と同一個体。
19	"	"	1→O。無文。胎土に粗い砂粒を含む。
20	"	"	1→O (突瘤)。
21	"	"	1→O (突瘤)。地文はLRの繩文。内面炭化物付着。
22	"	"	0→I。地文はLRの繩文。内面炭化物付着。
23	"	"	0→I。口唇部に施文。24と同一個体。
24	"	"	23と同一個体。
25	"	"	0→I。内面炭化物付着。
26	"	"	0→I。口唇に割みあり。
27	"	"	0→I。胎土に粗い砂粒を含む。
28	"	"	1→O (突瘤)。無文。
29	"	"	1→O (突瘤)。横走沈線に縦位の繩線文。内面に施文。口唇に圧痕あり。
30	"	"	0→I。横走沈線。胎土に砂粒を多く含む。
31	"	"	I→O。
32	"	"	0→I。沈線、口唇部に施文。
33	"	"	0→I。繩線文。口唇部に施文。
34	"	"	0→I。繩線文。口唇に割み。
35	"	"	0→I。繩線文。口唇に地文。小砂利を含む。
36	"	"	0→I。繩線文。口唇に割み。

表VI-2

探査番号	分類	用位	特						色	
37	II-A	板 土	O→I。繩文。							
38	"	"	O→I (突端)。繩文。口唇に施文。							
39	"	"	繩文。地文はL Rの施文。内面に炭化物付着。							
40	"	"	口唇部に施文。口縁部に繩文。							
41	"	"	繩文。粗い砂粒を多く含む。							
42	"	"	網織文。							
43	"	"	O→I。網端による刺突。							
44	"	"	底部。							
45	"	"	底部。内面剥離。							
46	"	"	底部。							
47	"	"	底部。無文。							
48	"	"	底部。							
探査番号	器種名	層序	長さ	幅	厚さ	重量(g)	石質	分類	備考	
VI-7 49	石 錠	床(下面)	2.3 (2.6)	1.35 (1.45)	0.25 (0.7)	1.0	Obs.	IA1		
50	"	5	3.6	1.1	0.25	0.9	"	"	基部一部欠損P-10	
51	"	1	3.75	2.6	0.3	1.8	"	"		
52	"	1~5	3.75	2.6	0.3	1.8	"	"	HP8の尖頭部と1層の基部接着	
53	"	床(下面)	3.5	1.7	0.25	1.5	Sha.	"		
54	"	"	3.4	1.4	0.35	1.6	"	IA2		
55	"	1	(2.25)	(1.85)	0.6	(1.9)	"	IA1	基部欠損	
56	"	4	(1.8)	(1.6)	0.2	(0.8)	"	"		
57	"	"	(1.6)	1.5	0.3	(0.8)	Obs.	"	先端部欠損	
58	"	"	(1.4)	1.9	0.3	(0.8)	"	"		
59	"	1	(2.2)	1.5	0.3	(1.3)	"	"		
60	"	4	(2.3)	1.9	0.45	(2.2)	"	"		
61	"	床(上面)	(2.4)	(1.8)	0.35	(2.0)	Aga.	IA	"	
62	石 錠	4	(1.8)	(0.8)	0.4	(0.6)	Sha.	IB1	上部欠損	
63	"	"	4.9	1.8	0.4	5.5	"	"		
64	"	床(下面)	5.8	1.5	0.2	3.6	"	"		
65	石 起	5	4.3	3.6	0.45	4.6	"	IC1	HP-1	
66	ナ イ フ	4	3.65	3.9	0.9	9.0	Obs.	IC3		
67	"	床(下面)	4.6	3.05	0.8	8.0	Sha.	"		
68	"	4	5.9	3.2	0.9	15.0	"	"		
69	"	床(下面)	5.0	4.4	1.35	25.0	Obs.	IC2		
70	"	4	(2.0)	2.2	0.5	(2.1)	"	IC3	上端部欠損	
71	"	4床(下面)	6.7	4.3	0.8	26.5	Sha.	"		
72	"	2	7.8	3.7	0.9	25.0	"	"		
73	"	4	3.45	1.7	0.4	2.9	"	"		
74	"	2	4.6	2.4	0.6	10.0	Obs.	"		
VI-8 75	"	4	(3.55)	2.3	0.5	(5.3)	Sha.	"	上部欠損	
76	"	2	(5.0)	3.8	0.7	(10.5)	"	"	先端部欠損	
77	"	4	4.1	2.4	0.5	5.8	"	"		
78	"	1	4.2	3.0	0.3	5.2	"	"		
79	"	床(下面)	4.8	2.75	0.6	8.2	"	"		
80	"	4	(3.8)	(4.95)	0.7	(10.0)	"	"	上部欠損	
81	"	1~4	7.3	(4.5)	0.6	(22.5)	"	"	破損品接合	
82	"	床(下面)	(5.6)	2.3	0.6	(11.5)	"	"	先端部欠損	
83	"	"	(6.1)	5.1	0.8	(30.0)	Obs.	"	上部欠損	
84	削器	"	2.8	4.2	0.9	9.8	Sha.	ID3	下部 "	
85	ナ イ フ	2	(3.9)	(3.5)	0.7	(9.8)	"	IC3	"	

辨認番号	器種名	層序	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	分類	備考
VI-8	削器	4	4.9	2.6	1.0	13.0	Sha.	ID3	下部欠損
	"	"	(6.3)	3.1	0.8	(25.0)	"	"	
	床(下面)	5.55	2.4	0.3	4.9	"	"	"	
	"	5	2.8	2.7	0.3	3.8	Obs.	"	
	床(下面)	4.2	3.9	0.6	7.0	Sha.	"	"	
	"	4	5.7	3.3	0.8	15.3	"	"	
VI-9	擦器	床(下面)	4.9	3.5	1.0	9.9	Obs.	ID2	H P-15
	"	4	4.8	4.9	1.6	21.5	Sha.	"	
	背面調整石器	床(下面)	12.25	7.2	1.4	132.5	"	"	
	石核	"	7.7	7.0	4.75	210.0	Aga.	III	
	"	4	3.8	5.5	4.8	80.0	Sha.	"	
	敲石	II	8.9	6.2	3.0	230.0	Che.	HB1	
VI-10	延石	床(下面)	6.8	4.5	1.9	46.8	Pum.	HD2	H D1
	石核	床(下面)	4.6	7.3	3.7	100.0	Aga.	III	
	敲石	"	8.6	7.2	6.3	525.0	Cong.	HB2	
	延石	2	11.0	5.3	4.5	189.2	Pum.	HD3	
	"	床(下面)	18.1	10.0	4.7	640.0	"	"	
	砾石	"	7.6	7.1	6.5	460.0	Sha.	"	
104	砾石	"	9.7	7.3	3.1	200.0	Pum.	HD1	

S-1

名 称	分 類	數 量
土 器	統 摘 文	41

辨認番号	分類	層位	特	色
1	II-A		O→I (突端) 無文。	
2	"		O→I。口唇部に刻み。	
3	"		O→I。口唇部に施文。	
4	"		底部。胎土に粗い砂粒を含む。	

包含層掲載遺物一覧

土 器

辨認番号	グリッド	分類	特	色	辨認番号	グリッド	分類	特	色
1	B-20-a	II-A	O→I。		8	B-20	II-A	尖起部に貫通孔。胎土は粗い砂粒を含む。	
2	表 摘	"	O→I。口唇に刻み。		9	B-20	"	I→O。地文は R L。胎土は細い砂粒を含む。	
3	B-20	"	O→I。		10	A-21	II-B	割部。	
4	表 摘	"	O→I (突端)。地文は L R の施文。		11	B-20	II-C	比較的粗い砂粒。	
5	B-20	"	O→I。無文。		12	B-20	"	地文文。半纏青苔状工具による削痕。	
6	B-20	II-B	O→I。地文は R L の施文。口唇に刻み。		13	表 摘	"	12・13と同一個体。	
7	B-20	"	I→O (突端)。粗粒。口唇に刻み。		14	表 摘	"	12・13と同一個体。	
					15	B-20	"	底部。胎土に小砂利を含む。	

石 器

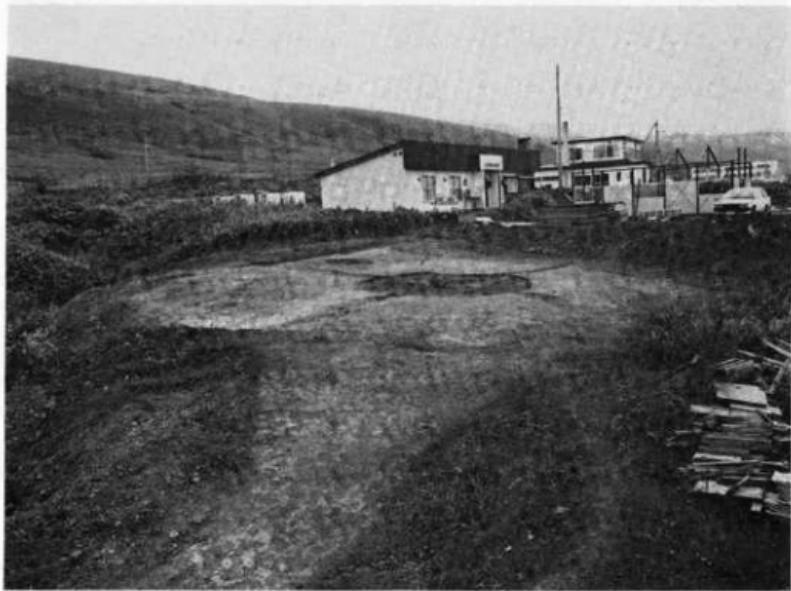
辨認番号	器種名	出土地点	層序	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	分類	備考
VI-13 1	石錐	B-20	I	1.7	1.0	0.3	0.3	Obs.	IA1	
2	"	"	"	(1.7)	1.5	0.3	(0.7)	"	"	先端欠損
3	"	"	"	(2.1)	1.5	0.3	(1.0)	"	"	"
4	"	"	"	(2.4)	1.5	0.4	(1.9)	Aga.	"	"

表VI-4

井図番号	器種名	出土地点	層序	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	分類	備考
VI-13	石錐	B-20	I	(2.2)	1.6	0.3	(1.2)	Sha.	I A 1	先端部欠損
5	"	A-21	"	(1.6)	(1.9)	(0.3)	(1.0)	Obs.	"	"
6	"	"	"	(2.3)	1.5	0.3	(0.9)	"	I A 5	基部右側縁欠損
7	"	B-21	"	2.3	1.6	0.3	1.4	"	"	
8	"	C-2	"	3.4	1.2	0.2	0.8	"	"	
9	石錐先	C-19	"	4.2	2.1	0.6	4.2	Aga.	I A 7	
10	"	B-20	"	5.4	2.7	0.4	17.0	Obs.	I A 6	
11	"	C-19	"	6.2	2.8	0.6	10.0	"	I A 7	
12	"	B-20	"	6.1	2.4	0.3	5.2	"	"	
13	"	"	"	6.4	3.2	1.0	14.9	"	"	
14	"	C-19	"	(3.1)	(2.8)	(0.7)	(4.8)	"	"	下半部欠損
15	石錐	B-20	"	5.4	2.5	0.4	10.8	Sha.	I B 1	
16	"	"	"	5.6	2.1	0.4	8.3	"	"	
17	表採	"	"	(2.8)	2.0	0.5	(2.8)	"	I B 2	先端部欠損
18	石匙	B-20	"	(5.2)	2.0	0.6	(7.0)	Gr. Sch.	I C 1	"
19	"	"	"	7.3	1.9	0.6	9.2	Sha.	"	
20	"	C-19	"	(5.2)	(2.0)	(0.6)	(5.7)	"	"	上半部欠損
21	ナイフ	B-20	"	1.8	2.1	0.4	1.7	Aga.	I C 2	
22	"	C-19	"	2.5	2.2	0.7	4.5	"	"	
23	表採	"	"	(2.7)	2.2	1.0	(4.5)	"	"	上端部欠損
24	"	B-21	"	2.5	1.7	0.5	3.0	Sha.	"	
25	"	A-21	"	(3.1)	3.1	0.4	(2.8)	Obs.	I C 3	上端部欠損
26	"	B-20	"	4.9	2.1	1.6	15.4	Sha.	"	
27	"	"	"	4.9	2.8	1.3	18.7	"	"	
28	"	"	"	3.4	3.3	0.3	2.3	Obs.	"	
29	"	B-21	"	3.8	1.6	0.4	3.5	Aga.	"	
30	削器	表採	"	3.4	2.2	0.5	4.3	Obs.	I D 3	
31	"	B-20	"	(6.6)	2.3	1.0	(26.6)	"	I C 3	下部欠損
VI-14	ナイフ	"	"	(3.2)	(3.8)	(0.6)	(8.0)	Sha.	"	"
32	"	A-21	"	(2.2)	(2.7)	(0.6)	(3.9)	Obs.	"	
33	"	B-20	"	(5.4)	(1.2)	(0.5)	(3.8)	Sha.	"	側縁部片
34	"	"	"	(4.1)	(3.7)	(0.8)	(9.4)	"	"	上部欠損
35	表採	"	"	(5.6)	2.7	0.7	(9.4)	"	"	上端部欠損
36	"	B-20	"	(2.6)	3.0	0.6	4.9	"	"	
37	"	C-19	"	(4.2)	2.0	0.4	(4.2)	Obs.	"	上端部欠損
38	"	A-21	"	4.7	2.7	0.7	9.9	"	"	
39	削器	表採	"	5.6	2.2	0.7	6.5	Sha.	I D 3	
40	ナイフ	C-20	"	5.4	3.6	0.5	10.4	"	I C 3	
41	表採	"	"	2.8	3.8	0.7	8.8	Obs.	I D 1	
42	"	B-20	"	5.0	5.4	0.7	15.1	Sha.	I D	
43	削器	表採	"	5.5	5.4	3.3	120.0	Aga.	III	
44	石核	B-20	"	12.5	7.5	3.7	325.0	Sha.	"	
45	"	"	"	7.6	5.9	5.6	310.0	Aga.	"	
46	石斧	B-21	"	5.3	2.7	0.5	15.1	Gr. Mūd.	II A 3	
47	"	B-21	"	8.5	4.1	1.2	80.5	"	"	
48	石刀	表採	"	35.5	22.1	14.2	16200.0	And.	II E 1	
49	"	"	"	10.75	8.5	7.6	995.0	Sha.		
50	石盤	"	"							
51	環	"	"							



1. 調査前風景



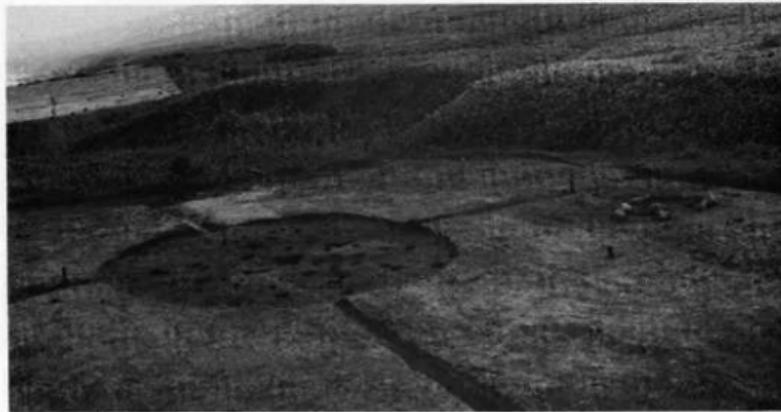
2. 調査後風景



1. H-1 確認状況（右S-1）



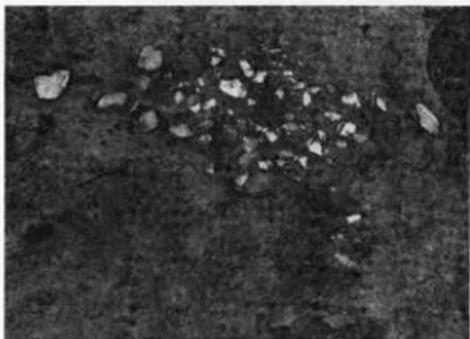
2. H-1 上層面の状況



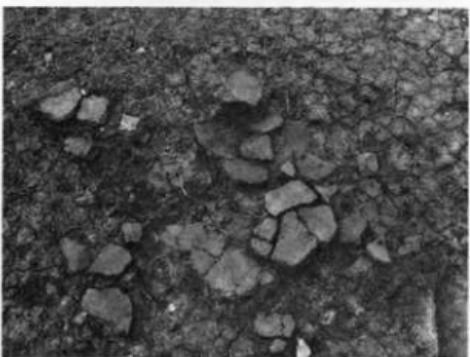
3. H-1 実掘風景



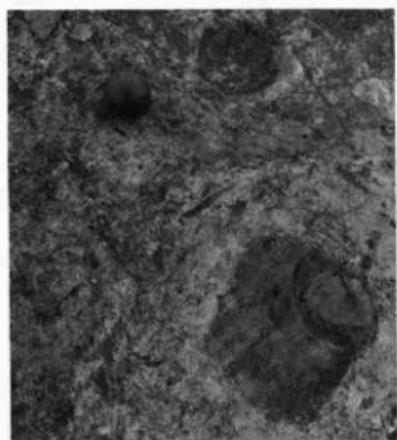
1. H-1 遺物出土状況



2. H-1 メノウフレイク出土状況



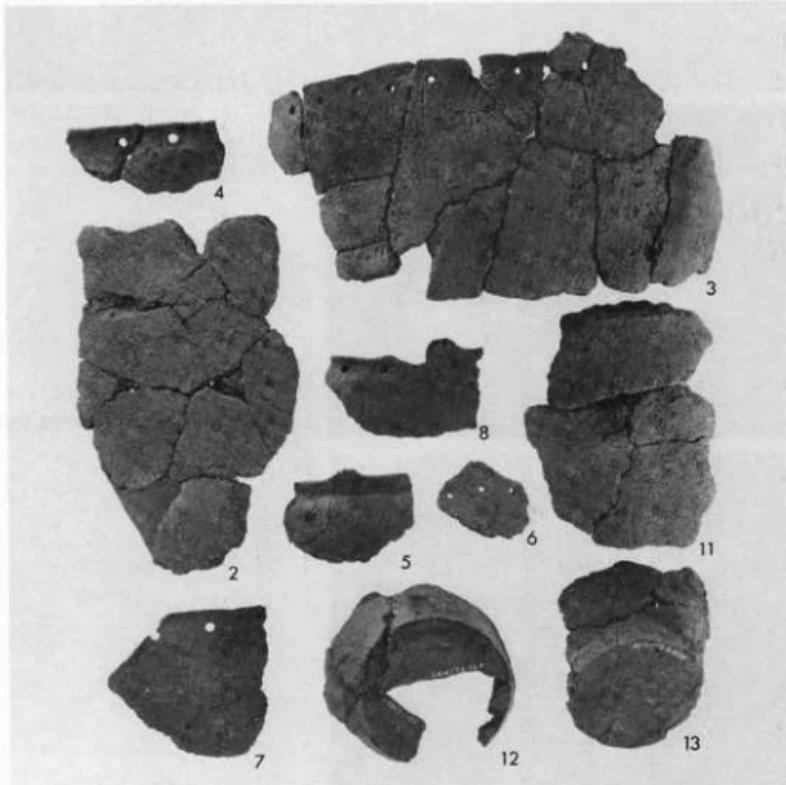
3. H-1 土器出土状況



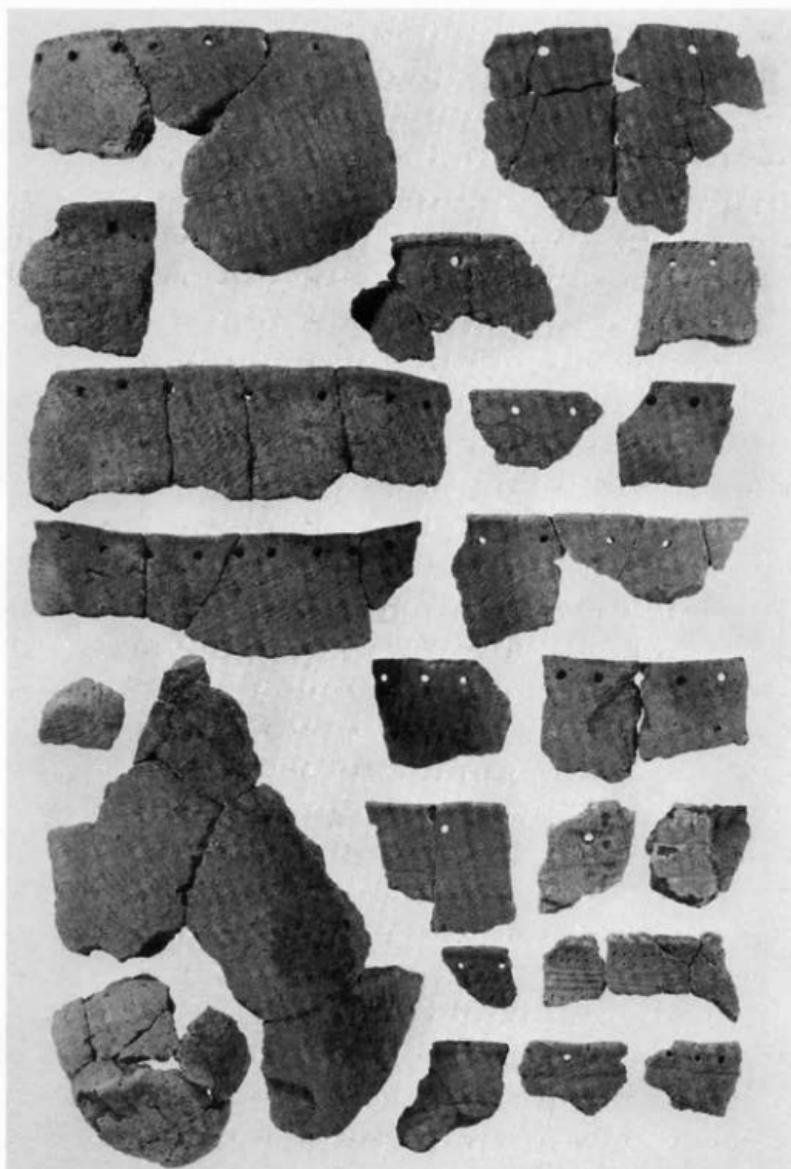
1. H-1 床面土器出土状況



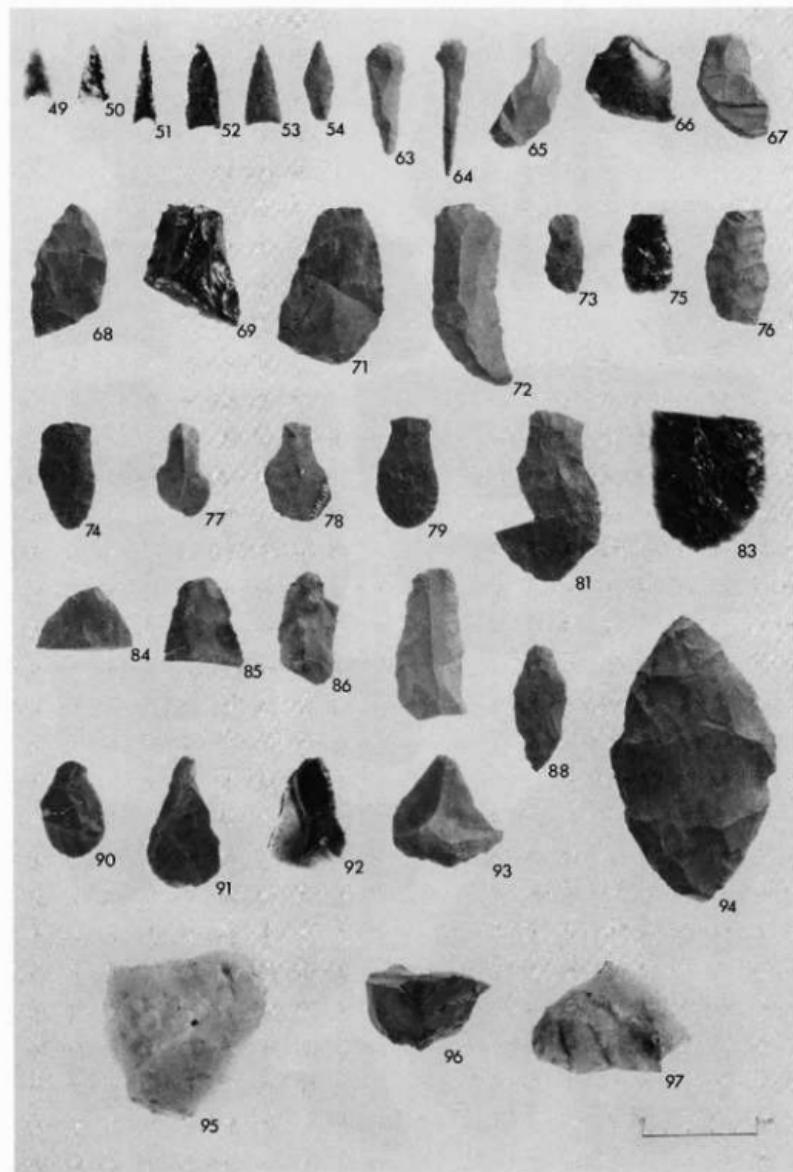
2. H-1 床面出土土器(1) (左の復元)



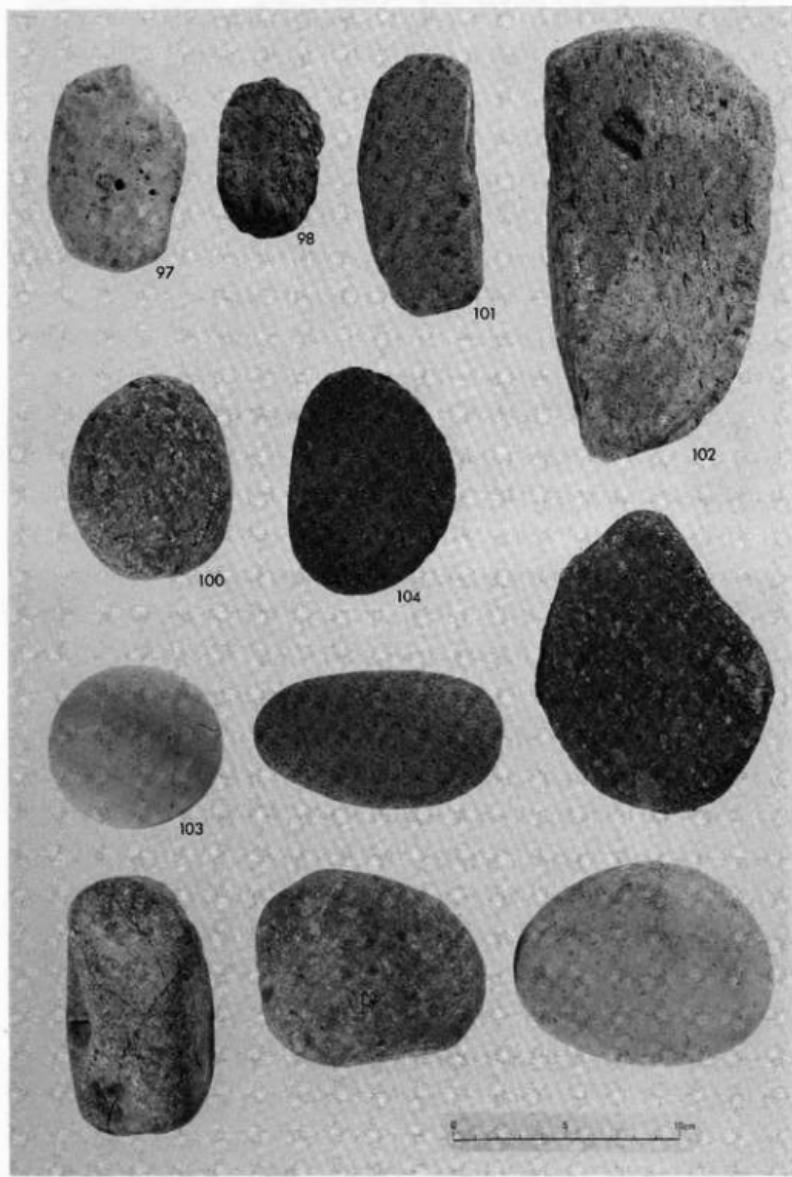
H-1 床面出土土器 (2~8 + 11~13)



H-1 覆土出土の土器



H-1 刺片石器・石核



H-1 磨石器・砾



1. H-1 黒曜石フレイク(上)・メノウフレイク(下)



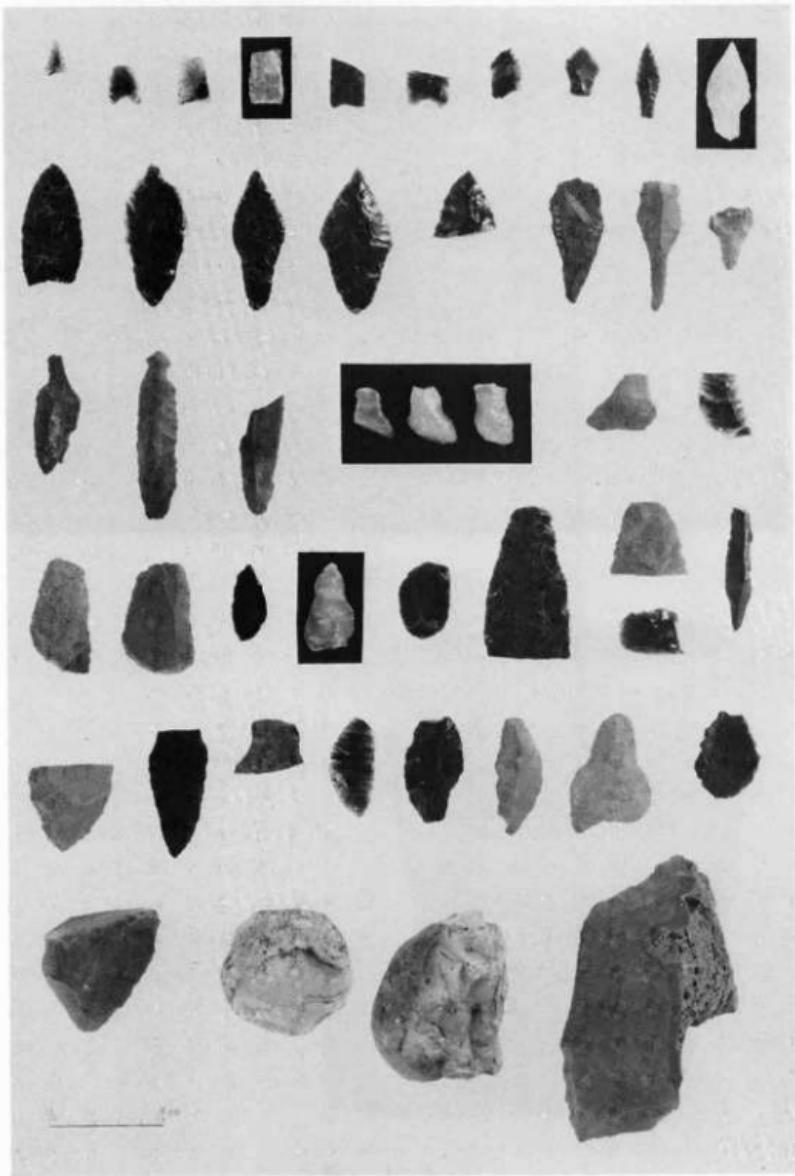
2. H-1 黄岩フレイク



1. S-1



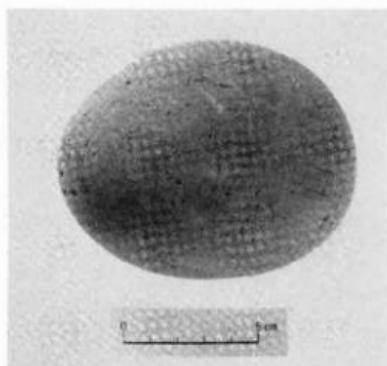
2. S-1 土器



包含層出土の剥片石器・石核



1. 包含層出土の石斧



2. 包含層出土の石皿



3. 包含層出土の石皿



4. 包含層出土の縹文式土器

VII 成果と問題点

1 はじめに

今回、礼文島帆泊段丘上にある3つの遺跡を調査した結果、予想以上の成果を得ることができた。特に上泊3遺跡で縄文時代中期の集落跡が発見されたことは礼文島の先史時代を考えるうえで大きな問題を投げかけたといって過言ではない。

上泊3遺跡で、縄文時代中期の住居跡とともに廃棄場跡が検出されたことは礼文島で当時の人々が通年生活を行なっていたかどうかを考えるうえで重要な意味をもっている。廃棄場跡出土の完形土器が遺跡全体の80%ほどを占めるのに対して、住居跡出土の完形土器はきわめて少ないことは土器を一定の場所に捨てる慣習があったこと、さらに住居跡が台地の縁辺部に分布し、台地の中央にないことを考えると空間的割り振りに社会的な規制が及んでいたことが考えられる。したがって、礼文島に一定の季節に他の地域から「出稼ぎ」にきたという考えには消極的にならざるをえない(▼章第4節を参照のこと)。だが、当時の人々が礼文島で通年生活を行なうには、陸獣の生息条件が限定されるため海に適応した生活様式を生み出さないかぎり不可能である。そこで、彼らが海に適応していたかどうかを探るひとつの手がかりとなったのが、廃棄場跡で検出されたのが動物遺存体から得られた魚骨である。検出例は少ないが、そのなかで注目すべきのはアイナメ・タラ・ニシンである。この魚種構成は、オホーツク文化の生業の基礎をなすといわれるホッケ・タラ・ニシンと基本的に変わらないものと思われる。もちろん、前者は魚骨層を形成しているわけではないこと、さらに検出された動物遺存体も廃棄場跡に推積していたすべての土壤フローテンションを行なって得たわけではないので資料の取り扱いに偏りがあることは疑いえない事実である。しかし、廃棄場跡から多量の石錘が出土していることは網漁の存在をうかがわせるに充分である。けれども、この問題は、漁撈対象と漁撈具との相關関係をどのようにとらえていくのかにかかる事なので、その点の解明は今後に残されている(第3節を参照のこと)。

ところで、廃棄場跡から出土した土器から判断すると、この時期の礼文島は円筒土器文化圏に含まれる可能性が強い。ただ、石器組成などをみると地域的特色をもっているので、この点の追求は円筒土器上層式土器の地方化の解明とともに必要である(第2、4節を参照のこと)。いずれにしても、上泊3遺跡の調査によって本道の日本海沿岸に発達した「円筒土器文化」の実態に一步踏みこむ足がかりを得たといってよいと思う。

もうひとつの成果としては、上泊3・上泊4遺跡で続縄文時代初頭の住居跡が検出されたことにある。礼文島では、香深井B遺跡で鉛谷式土器を出土する住居跡が調査されているが、この時期以外の住居跡は未調査であった。礼文島の続縄文文化の系統を考えるうえでひとつの素材を提供したといえる(第5節を参照のこと)。

(種市 幸生)

2 上泊3遺跡の縄文時代の土器について

本遺跡の縄文時代の土器は、押型文土器・撲糸文土器・円筒土器上層式土器・いわゆる天神山式土器である。この中で円筒土器上層式土器と、いわゆる天神山式土器が主体である。

A類-1の押型文土器はI層・II層から出土している。分布は遺跡の中央でまとまりをもっている。出土状態からB類・C類の土器との明確な分離はできないものの時間差はないようと思われる。

本資料は口縁部が肥厚し、平底である。また波状口縁のものもあることから神居式土器に相当する。神居式土器は、縄文時代前期とする考え方と縄文時代中期に比定する考え方とに分かれている。最近の調査例では、縄文時代中期に比定される資料が出土している（江別市萩ヶ岡遺跡1982・美深町楠遺跡1983・旭川市忠和2遺跡1984）。また縄文時代中期に比定する試みは、後藤秀彦（1976）、宮宏明（1983）によってなされている。本遺跡出土の土器はその形態から縄文時代中期に比定するのが妥当と思われる。いずれにせよ道北地方の押型文土器文化が礼文島まで広がっていたことが重要であろう。

A類-2の撲糸文土器はD層（廃棄場跡）より一括出土したものだけである。D層ではB類・C類の土器が多数一括出土しており、それらの土器と伴出した可能性が高い。他の遺跡ではしばしば押型文土器と混在した形で出土するが、本遺跡では独立した分布を示す。

B類の土器は口縁部の形態で突起のあるものと、平縁のものとがある。このうち平縁のものは復元土器で0.6%と極端に少ない。また補修孔があけられている例が復元土器で56%を占める。

B類-1の土器は円筒土器上層a式～c式土器に相当すると思われる。出土点数は口縁部破片が4点だけで、D層（廃棄場跡）・II層・I層から出土した。上泊4遺跡ではB類-3土器と一括出土している。札幌市T310遺跡（1974）の報告で「形態的にのみ考えるならば縄文時代前期の円筒土器下層式土器の特徴に類似する」との指摘がある。また石狩町花畔E遺跡（1978）の報告では、円筒土器上層a式～円筒土器上層b式に編年されている。だが本遺跡の資料は出土状態から縄文時代前期までは遡りえないと思われる。

B類-2の土器は円筒土器上層c式に相当するものである。D層（廃棄場跡）からは復元個体が9個ある。他の層では出土点数が少ない。このうち写109～111・183は縄文原体による圧痕が施されたものである。この要素は一段落古くなるものである（円筒土器上層b式）。だが口縁部の貼付文の形態あるいは貼付文上にヘラ状工具による刻目がつくなどの要素から、円筒土器上層c式に相当しよう。

B類-3は廃棄場跡での復元土器のうち50%を占めるもので、円筒土器上層c式・d式土器に相当する。廃棄場跡出土の土器のうち復元された個体はD層で28個、C層で3個である。B層・A層では出土点数は少ない。このうち胴部文様が横位の貼付文の間に縦位の貼付文が施されたものは、浜益町川下地区出土の資料に相当する。文様・器形等において道南地方の円筒土器と共通するものはサイベ沢Ⅶa式土器に相当する。図V-52・49、写49・154は見晴町式土器に近い

ものである。だが各形式の土器は混在して出土しており明確な分離はできない。

以上、述べてきたB類の土器は、東北・道南地方の円筒土器に比べると異なる形態をもつ。円筒土器上層式土器一般にみられる舟状突起が山形突起にかわり、また底部は大部分が張り出す。地文は斜縞文がほとんどみられず単節の結束第1種羽状縞文が復元土器の75%を占める。この様な形態をもった円筒土器は道北地方で多くみられる（鷹栖町嵐山・羽幌町天売・同焼尻遺跡等）。

円筒土器上層式土器は道北地方にまで分布が広がっていたと考えてよい。さらにそのいくつかの伝統は本遺跡のI群C類土器・名寄市智東・鷹栖町嵐山遺跡出土の土器に残されている。本遺跡の円筒土器はその文化圏を考える上で意義があろうと思われる。^{註1}

C類の土器はいわゆる天神山式土器と、鷹栖町嵐山遺跡出土のF類に相当するものである。大別すると半截竹管を施文具とするものと、縞文だけのものとに分かれる。復元個体は廃棄場跡出土の土器でD層-11個、C層-5個、II層-5個、I層-4個である。このうち図V-51:35、写35-267は柏木川式土器に近いもの。またC類-3:②としたものの中には口縁部肥厚帯の形態・胎土等から北筒式土器に近いものがある（図V-56:82、写59-210・251・269）。

この類の土器は道央部では、札幌市平岸天神山・江別市萩ヶ岡遺跡等、道北部では、鷹栖町嵐山・名寄市智東・札文町オションナイ遺跡等でそれぞれ出土している。萩ヶ岡遺跡（高橋正勝1982）の報告では、いわゆる天神山式土器は特徴的に明確さに欠けるとし、萩ヶ岡3式土器を設定した。その特徴は「4コの太い棒状の突起をもつ口縁部に肥厚帯をもつ。突起下には三角形の粘土塊を貼付し、垂下する貼付文は鎖状をなすものが多い。地文は斜行縞文が一般的で、複節の縞文が多い」とある。本遺跡出土の土器と比べると突起・地文の形態では異なる要素が多い。突起は小さな山形のものが多く、棒状をなすものは少ない。地文は複節の縞文はみられず単節の結束第一種羽状縞文が復元個体で85%を占める。このような突起・地文の相違は道央部と道北部との時間差に求められる。萩ヶ岡遺跡での土器の共伴関係をみると、サイベ沢Ⅶa式土器と萩ヶ岡1式土器、サイベ沢Ⅶb式土器と萩ヶ岡2式土器がそれぞれ共伴している。萩ヶ岡3式土器は円筒土器上層式土器との共伴はないようである。だが本遺跡出土のものはD層（廃棄場跡）においてサイベ沢VI式土器～Ⅶa式土器と共伴する。このことから道北部のいわゆる天神山式土器は道央部のものに先行すると思われる。

C類-3 ②土器は名寄市智東遺跡B地点・鷹栖町嵐山遺跡で類例がみられる。嵐山遺跡（齊藤傑1968）の報告では、縞文のみが施されたものと、沈線の施された類を一括して見晴町式土器・サイベ沢Ⅸ式土器に比定している。本遺跡の資料の中には北筒式土器に近いものが多いことを考えると、多くは萩ヶ岡3式土器に並存させる方が妥当と思われる。

以上、大まかな本遺跡出土の縞文時代の土器を通観してみた。やはり最北端で多数の円筒土器が一括出土したことが最大の成果であろう。

（佐藤 和雄）

註1 棒太においても出土しているようである。大沼忠春氏の御教示による。

3 上泊3遺跡出土の石錐について

はじめに

本遺跡より出土した石器群は、V章各節で述べたように縄文時代中期の土器群に伴つたものが大半である。石器の器種は、各種のものが見られるがその出土量には差がある。とりわけ礫石器においては、擦石・石皿の量が極めて少なく、逆に石錐が338点も出土していることに注目される。また、出土した石錐の中には、その重量が4,000gを越えるものもある。これは本遺跡の生業形態が立地条件等から見ても漁撈活動を中心としていた可能性が強いためと考えられる。したがって、ここでは本遺跡の性格を明らかにするための手段として、石錐をとりあげ、その属性について考えてみたい。

(1) 上泊3遺跡出土の石錐

i) 形態

偏平な円錐あるいは楕円錐を素材とし、その長軸方向を打ち欠いたものが一般的である。しかし、その大きさには最小のもので長さ3.4cm、幅2.7cm、厚さ0.9cmから最大のものとして長さ21.6cm、幅18.6cm、厚さ8.9cmまである。また、打ち欠きにおいても、V章2節vi項に記したとおり3か所のもの（図V-82：36・図V-83：41・42）や4か所のもの（図V-81：21・図V-82：30・図V-84：49）が若干含まれている。ほかには、打ち欠きが長軸にひとつだけという未製品（図V-81：25）も1点だけだが出土した。石質は、安山岩・砾岩が最も多い。

ii) 分布・出土状況

遺跡全体に広がって分布するが、とりわけ廐棄場跡と礫・石錐集中区からは、まとまって検出されている（図VI-1）。廐棄場跡より出土した石錐は、I群BおよびC類の土器群と共に伴したものが多い。また、A層上面には石錐の素材ともなるべき礫が約2,200点程検出された。礫・石錐集中区では、それらが同レベルで出土している。石錐以外の器種が極めて少ないとより廐棄あるいは製作した場所として考えられる。

iii) 重量分布

漁網用の沈子は、時代と共にその形態や材質が変化してきている。しかし、重量においてはその機能を有する限り不变なものである。このことから、石錐を漁網用の沈子であるとするためには、石錐の重量を比較してみる必要がある。そこで、まず本遺跡から出土した石錐のうち、破損品を除く319点について重量分布図を作成してみた（図VI-2）。

重量の最小は11.2g、最大は4,360.0gでかなりの幅と偏りが見られる。このうちの313個は1,000g以下となっており、全体の98%を占めている。また、逆に1,000g以上となるものは6点あり、重量にバラツキが見られる。したがって、ここで大きく2つに分けられよう。1,000g以下となるものは、10~59.9g (6%), 60~259.9g (79%), 260.0~809.9g (13%) の3グループに分けることができる。これは、何らかの機能的違いを示しているものと考えられるが、現段階においては不確定要素が多いため明言を避けたい。1,000g以上のものは、少数で重量にも差が認め

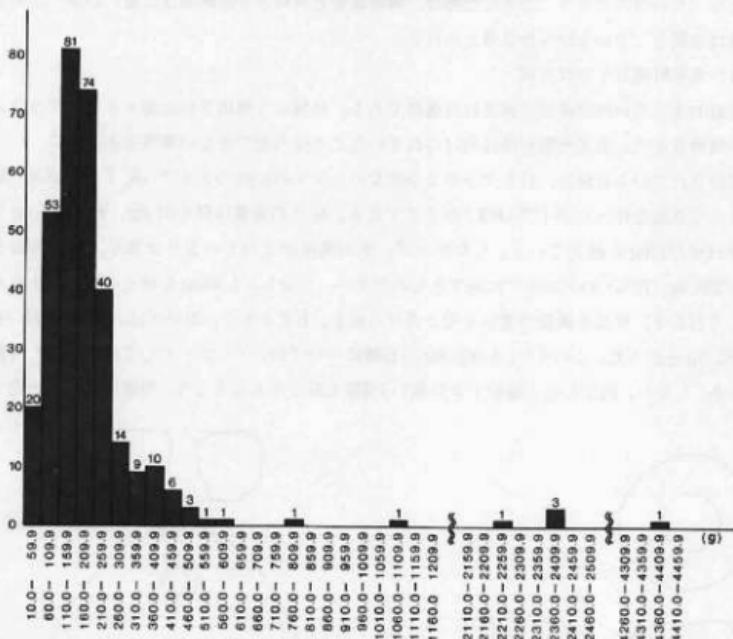
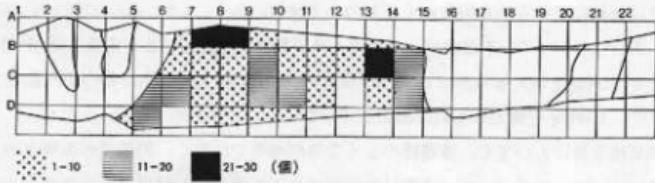


図 VII-2 上泊 3 遺跡石錘重量分布図

られるがアンカーとしての機能を有していた可能性が強い。

iv) 遺存体

II章およびV章2節V項で触れたように、廃棄場跡やH-1の掃土からは、アザラシ・オットセイなどの海獣骨およびアイナメ・クラ・ニシン・サケ・マス・カサゴ類といった遺存体が検出されている。これらは、現在礼文島で漁獲されている魚種別構成と変わらない。

(2) 他遺跡との比較

i) 鷹栖町嵐山遺跡

总数40個の石錘が検出されている。形態は、偏平な椭円錐が一般的な素材となっているが、

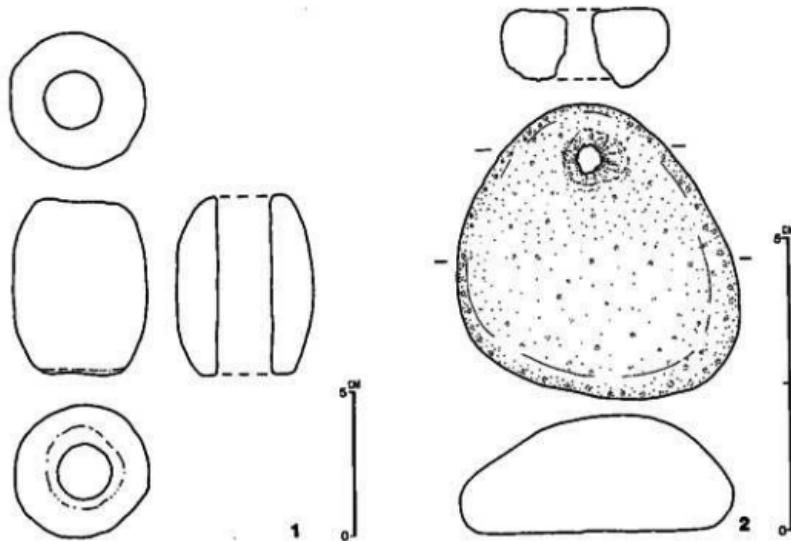
打ち欠きは長軸にくるものと短軸にくるものの2種類がある。また、その比率は31:5で86%が短軸にくる。したがって、本遺跡出土の石錘とは形態を異にしている。重量は38.0~100gの間に38点あり、100gを越えるものは2点しかない。いずれにしても、本分類のⅡF1に含まれるものばかりで、1,000gを越えるものは出土していない。

遺跡の立地条件においても、本遺跡のような海岸地帯ではなく、内陸部の舌状台地上という違いが認められる。したがって、漁撈活動は台地の下を流れる石狩川およびオサラッペ川が対象となっていたのだろう。こうした場合、海岸地帯と河川とでは網漁法に違いがあり、大型の石錘は必要としていなかったと考えられる。

ii) 常呂町朝日トコロ貝塚

比較的海に近い河岸段丘で営まれた遺跡である。貝塚より検出された鰐・トド・アザラシなどの海獣骨から、生業形態が海に向けられていたことは否定できない事実である。

報告されている石錘は、打ち欠きを2か所ないし4か所に持つタイプ(K I)が18点、研磨によって糸掛を作ったタイプ(K II)が2点である。K Iの重量は最小81.0g、最大357.0gで18点中11点が100gを越えている。したがって、嵐山遺跡出土のものよりは重く、本遺跡出土の60~259.9g(79%)のグループに属するものが多い。しかし、1,000gを越えるものは1点も出土しておらず、やはり漁法の違いを考えさせられる。K IIタイプにおいては、重量が135.0gと1,052.0gを計った。このうち、1,052.0gの石錘については、アンカーとして使用された可能性がある。しかし、出土した土器がトコロ第1・3・6類土器であることより、明確な時期は断定でき



図VII-3 現代の沈子

ない。

(3) 現代の網漁法

本遺跡が所在する幌泊段丘は、Ⅱ章でも述べたように低位の海岸段丘である。その眼下では現在でも実際に漁撈活動が行なわれており、タラ・ホッケ・カレイなどを水揚げしている。網の種類は、前浜が岩礁性であるため、刺網・定置網・延縄が主体となっている。地引網は、砂泥性の浜でなければ使用されないため、遺跡周辺では見られない。

網に取り付けられる沈子は、今は既に姿を消してしまい、網の下部に横走するロープが鉛製となって沈子の役割を果たしているものが多い。しかし、10年程前までは、網の下部に一定の間隔を置いて筒形の沈子が付けられていた(図Ⅶ-3:1)。1の重量は140.7gであるが、これは網を海底まで沈めるか、途中で浮かせるかによって重量が異なる。つまり、捕獲する魚類と水深によって重量が左右されるわけである。

刺網や定置網の場合、沈子は網の直下に取り付けられるもの他にアンカー(図Ⅶ-3:2)が必要となる。これは、潮の流れによって網の向きが変わらないようにするためで、前述のものより遙かに重い。2は、実際にアンカーとして使用されていたもので、重量は5,000gを計る。しかし、これも漁場の水深や潮の流れによって重量が異なってくる。

おわりに

以上、本遺跡の石錐について、他遺跡と比較し、あるいは現代の網漁法を通じてその特性を述べてきた。このようなことから、縄文時代中期において、どのような漁撈活動を行なっていたか明記することは困難である。しかし、彼らが営んだ遺跡に立ち、その眼下に広がる豊富な漁場を一望すると、狭い島において海の幸に対する依存度は、極めて高かったといわざるを得ないのでないだろうか。したがって、本遺跡より出土した大型石錐も岩礁性の海に適したアンカーであれば、何も不思議ではないようと思われる。むしろ、これから課題としては、動物遺存体や周辺の地形および環境、海岸部であれば漁場の水深と石錐の重量がどう係わってくるのかということの追求が残されている。

(森岡 健治)

註1 遺跡の位置と環境については、Ⅲ章を参照してもらいたい。

註2 重量は、捕獲する魚種や水深に係わることを船泊漁業組合の方から御教授頂いた。

註3 石錐の機能が今ひとつ明確でないため、分類はこの段階でとどめた。しかし、機能的には、網の直下に取り付けられる沈子と海底まで下げられるアンカーがあることは現代の網漁法からも推測される。

4 上泊3遺跡出土の石刃状剥片について

上泊3遺跡においては、第V章に述べた通り、129点の石刃状剥片が出土した。これらは出土状況より、第I群土器B類及びC類に伴うことが確認されている。ここでは、石刃状剥片の観察を通して、その剥片剥離技術を明らかにし、また、石器群の中においてこれらの剥片がどのような位置を占めていたのかについて、若干の考察を加えてみたい。

(1) 石刃状剥片とその剥片剥離技術

石刃状剥片の背面に残された剥離面を観察すると、

I類 背面のすべての剥離面が、腹面の剥離方向と同一方向のもの………103点 (80%)

II類 背面の一部の剥離面が、腹面の剥離方向と逆の方向をもつもの………4点 (3%)

III類 背面の一部の剥離面に横方向からの剥離面を有するもの ………………11点 (8.5%)

IV類 背面に疊面または節理面を有するもの ………………11点 (8.5%)

となっており、I類が圧倒的に多く、これはある一定の打面をもつ石核における一方向からの剥片剥離作業の結果である。II類の資料から、両設打面の石核の存在が予想され、その証左として、図V-109:207、図V-110:216の末端には下設打面の一部がみられる。しかし、総体からすると極めて稀な存在である。III類の中には、図V-110:211のような、背面稜上からの調整が加えられている例が他に2例あり、これらは縦断面形が「し」の字状に湾曲するという共通性がある。

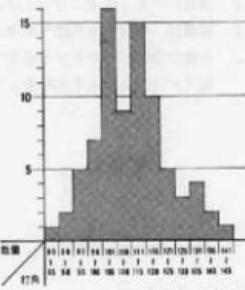
次に、打面の調整の有無を観察すると、表VII-1のような割合になる。調整された打面から剥取されたものが7割を占める。の中でも微細調整を有するものが特徴的であり、これは、背面上端に残る頭部調整に類似した調整痕であり、剥片剥離に先立ち、打撃をより確かにするための調整（済し）であると思われる。点状打面とは、調整の有無の観察が不可能な程、打面が小さいものである。

打角は、100°～120°に約6割が集中する（図VII-4）。130°以上の打角をもつものがあるが、これらは、背面上端と打角の接する角度が鋭角であり、図V-111:224のように背面上縁が丸味を帯び、円盤状、あるいはチョピング・トゥール状の石核から剥離されたものと考えることもできる。

石刃状剥片を剥取したと思われる石核は、2点程しか把握していない。図V-75:218、図V-107:190は、両者とも

非調整打面(16.5%)		調整打面(73.5%)					点状打面(10%)	
自然面	1面	2面	3面	4面	5面	微細調整		
3	10	25	7	4	5	18	8	
4%	12.5%	31%	9%	5%	6%	22.5%	10%	

表VII-1 石刃状剥片の打面形状



図VII-4 石刃状剥片の打角

打面を一端に設定し、その打面からの連続的な剥片剥離作業面を有するものであり、この点は、前述のⅠ類に対応するものである。また打面には入念な調整が施されており、石刃状剥片の打面における複剥離打面、微細剥離打面に対応する。

なお、石刃状剥片の長さは、5.4cmから13.2cmとバラツキがみられる(図VII-6)。2点の石核に残存する作業面からは、図V-75:218においては7cm大、図V-107:190では5.5cm大の剥片が剥離されているが、残核に至る過程においては、9~10cm大の剥片も剥取されたであろうことが推定される。

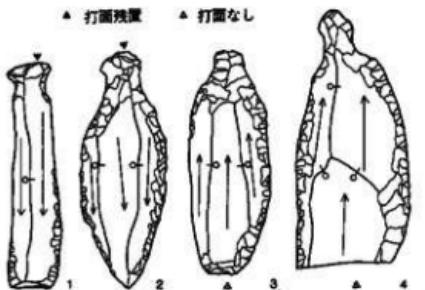
以上、石刃状剥片に残された剥離面、打面及び打角の観察から、剥離面においては、Ⅰ類としたものが大多数を占め、打面には剥片剥離に先立って調整が加えられるという技術的特徴を指摘した。また、その特徴は、量的な制約はあるものの石核においても、一端の調整された打面からの連続的な剥片剥離が想定される。この対応性は、目的剥片を連続的に量産するという組織的かつ体系的な技術基盤の存在を裏付けるものであろう。

(2) 石器群における石刃状剥片の位置

石刃状剥片129点のうち65点の一側縁、または二側縁に使用によると思われる刃こぼれが観察された。また、2次加工を有するもの38点を含めている。石刃状剥片は、それ自体、利器として、あるいは多少の2次加工を加えて使用されていたものであったろう。

また、石刃状剥片は素材剥片として利用されていたことは、各器種の素材のあり方をみれば、明らかである。ここでは、とくに石匙との関連について考えてみたい。

本遺跡の石匙は、すべて縦長のものであり、背面のほぼ全面に面的な加工が施され、断面が山形もしくはカマボコ形を呈するもの、周辺に加工が加えられるもの、つまみ部以外、ほとんど調整の加えられないものの三者に大きく分けられる。三者とも腹面には、第1次剥離面が大きく残されている。ここで問題とするのは後二者である。図V-63:81-84、図V-64:91-94-96-99-102、図V-65:104-108-113-114-117、図V-66:121がそれに該当する。図VII-5の4点も含めて、20点について観察することとする。背面には素材となった剥片の表が1~3条直線的に走り、腹面には第一次剥離面が大きく残されている。つまみ部を上にした場合、打点部が上方にあるもの14例、下方にあるもの6例である。上方にある例では、打面を残置するもの10例、折断によって打面部が欠失するもの3例、打面がつまみ部の調整加工により除去されているものの1例となっている。打点部が下方にある例では、打面を残置するもの1例、折断により打面部が欠失するもの2例、他の3例は調整加工により打面部は除去されているが、打面部付近を残すものである。これらの石匙は打点部を上方・下方どちらに設定したとしても、打面、またはその付近を残しており、素材の長さをあまり減じてはいない。また、二側縁には浅く、平坦な調整が加えられており、図V-65:114のように素材を斬ち切るような急峻な加工は少ない。図V-64:99、図V-65:108、図VII-5:1のように、つまみ部周辺の加工を除いては、ほとんど調整されない例もある。以上のことから、石匙の中でも、つまみ部周辺のみ調整加工が施されるものはもちろんのこと、周辺加工のものも素材の剥片をあまり変形せずに製作されたであろ



図VII-5 石刃状剥片を素材とした石器例

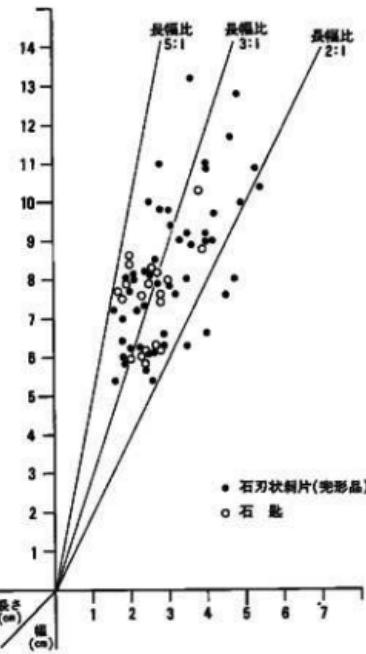
うことが理解される。そしてその素材とは、石刃状剥片であろう。石刃状剥片の長さ・幅と20例の石匙のそれを比べると、石刃状剥片の長幅分布に石匙の長幅分布が含まれることが、その傍証となる（図VII-6）。石匙以外の器種では、図V-63：75～78の石錐、図V-68：157の搔器等は石刃状剥片を素材としていると思われる。

石刃状剥片としたものは、石器群（剥片・碎片を除く）のわずか4%程度であり、きわめて低い割合である。しかし、石刃状剥片はそれ自体、利器として使用され、また素材剥片として、特定の器種との結び付きが認められることから、上泊3遺跡の石器群の理解のためにもつ意味は大きいといえるであろう。

(3) まとめにかえて

以上、本遺跡の石刃状剥片について、観察し得た事項を列記してきた。ここで石刃状剥片に派生する問題点を挙げてみたい。

本遺跡の石刃状剥片は、共伴する土器型式から縄文時代中期中葉～後半、円筒土器上層式土器の末から天神山式期にかけての所産とすることができます。この時期に該当する類似の資料は、名寄市智東遺跡B地点（山崎1967、山崎・長谷川1968）、鷹栖町嵐山遺跡（齊藤1968）が挙げられる。とくに前者では、「剥片石器」とされたものの大部分が石刃状剥片と言えるもので、長さ3～13cmとバラツキがみられ、全例に使用痕または加工痕があるとされる。石核は高さ5cm程度で打面を一端に設定し、作業面が全周にわたる円錐形のもの（報文中第18図9）、鋭角な一側縁を打面とするチョッピング・トゥール状のもの（同第25図21）の二者がある。石刃状剥片が素材と思われる縦形石匙がある（同第25図10、第43図13）。後者にあっては詳細は知り得ないが、石刃状の剥片が素材と思われる石匙（報文中第16図1、2）、搔器（同第17図24、25、28）があ



図VII-6 石刃状剥片長幅分布図

る。

さて、本道における縄文時代中期後半、北筒式土器（トコロ第6類及び第5類）の時期に石刃状の剥片が伴出することは、従来早くから知られていたことであり（加藤1960）、常呂町朝日トコロ貝塚（駒井編1963）、紋別市オンネナイ第2地点遺跡（小柳他1977）、標茶町茅沼遺跡第2地点（豊原他1977、1980）、札幌市T77遺跡（羽賀1974）、江別市東野幌4遺跡（佐藤他1981）と道東北、道央部に普遍的にみられるようである。いずれの遺跡においても、石刃状剥片を剥取したと考えられる石核が出土しており、高さ2~5cmで、円錐形形状を呈するものが多い。打面は礫面、一面打面が多く、調整が顕著に行なわれることは少ないようである。^{註5} 石刃状の剥片は長さ8cmを超える例がなく、本遺跡の石刃状剥片に比し、短小な例が多い。素材としては、石匙、削器等に用いられている例がある。

当別町伊達山遺跡（岩崎他1970）では、余市式土器の一群に伴い、道央部のトコロ第6類土器に伴う石刃状の縦長剥片、及び石核に類似する資料がある。

以上述べてきた一連の縄文時代中期後半の石器群に関しては、上野秀一・土田亜佐子両氏が行なった各器種及び器種組成についての詳細な分析があるのでそれに譲るが（上野・土田1977）。本遺跡の石器群は、擦石・石皿等の一部の器種が欠落するものの、石器群としては、縦長石匙の量的比率等から円筒土器上層式土器の石器群に近いものと思われる。しかし、石刃状剥片に関しては、上述した各遺跡のそれと無関係なものとは考えられず、道東北・道央部における円筒土器上層式、天神山式、北筒式土器という時間的変遷の中で捉えられるものであろう。^{註6} そして、石刃状剥片の石器群における量的比重は、徐々に大きくなっていたと理解することも可能である。

縄文時代の各時期の石器群にあっても、縦長剥片を目的に生産する剥片剥離技術は過時的に存在すると思われるが、それが中期後半に顕著にあらわれるのは、何に起因するのであろうか。今後に残された課題である。

（寺崎 康史）

註1 石刃状剥片のうち、50点は廃棄場跡とされた遺構から出土し、7点がH-1揚土からの出土である。

註2 石刃状剥片において、微細剥離の打面を有しているものには頭部調整が施されておらず、逆に背面上端に微細な頭部調整が施されているものの打面は一面で構成されているという相関関係がある。

註3 本来ならば、前者は「使用痕を有する剥片」、後者は「削器」・「2次加工を有する剥片」に器種分類されるものであろうが、ここでは技術的特徴から便宜的に石刃状剥片に含めた。

註4 両遺跡とも、トコロ第6類土器を出土しており、智東遺跡B地点では下層に智東B式、上層にトコロ第6類土器が層位的に出土しているとされる（山崎・長谷川1968）。しかし、石器の上・下層への帰属は不明である。

註5 大井晴男氏は、朝日トコロ貝塚の例から、剥片剥離技術について言及し、《原石の半割》→《剥片剥離作業》の工程を考えているが（駒井編1963、大井1965）。その妥当性を裏付ける資料としてオンネナイ第2地点出土の石核がある。報文中第20図28・29・30がそれであり、もっとも最初の段階に打面が作出され、その打面から全周にわたり、かなりの量の剥片が生産されていたことがわかる。

註6 朝日トコロ貝塚では、報文中第33図14・16、同第42図12・17、同第48図10等の石匙が、オンネナイ第2地点では、報文中第18図1~35の石匙、同第19図6~10の削器が、茅沼遺跡第2地点では報文中第25図8、

14-16 (豊原他1979), 第35図53-55, 58 (豊原他1980) の石匙がそれぞれ石刀状の剥片を素材としていると思われる。

- 註7 道南部における類例は、菅見の限りでは函館市見晴町B遺跡 (田原1979) が挙げられる。報文中第42図52-58の石匙は明らかに石刀状の剥片を素材としているものである。また、高橋和樹氏によると、昭和57年度、礼文島船泊における道教愛範囲確認調査の結果、船泊上層式土器に伴い石刀状剥片が出土しているとのことであり、上野秀一氏の御厚意により実見させて頂いた。それらは單刃離打面のものがほとんどで、側縁には鋸歯状の調整加工が施されている例もあった。礼文島にあっては、縄文時代後期まで石刀状剥片を剥離する技術的伝統が残存していたことも考えられる。

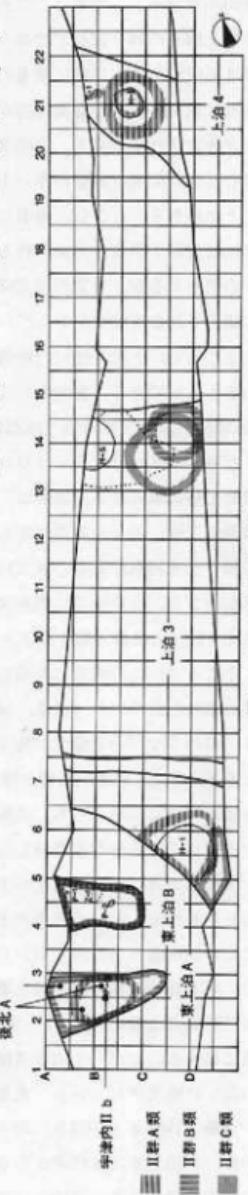
5 道北地方の縄文時代初頭の土器について

東上泊・上泊3・上泊4遺跡で、それぞれ縄文時代初頭から中頃にかけての土器が出土している(図VII-7参照)。器種が深鉢・鉢に限られ共通して口縁部に突瘤文^{ヒダリ}が施文されているため分類しにくい面があったが、これらの土器をA類、B類、C類の3グループに分類した。分類を行なうに当っては、層による区分が不可能であったので次のことを考慮した。

A類土器の分類は、上泊3遺跡H-1上面出土の土器群・上泊4遺跡H-1床面出土の土器群を指標とし、他方メクマ遺跡(大場・菅 1972)出土の土器群と対比させながら行なった。B類土器については、住居跡出土のものはなかったので下田ノ沢遺跡出土の土器群を参考にしながらA類土器との差異を把握することにつとめた。C類土器は、上泊3遺跡の廃棄場跡周辺でまとまって分布していたので他の土器と識別することが可能であった。

A類土器について: 上泊3遺跡では、H-1床面出土土器(図V-8: 1~3)とH-1壁外周で出土した土器(図V-87: 3)が組み合わさって一群になるものと思われる。それらのうち、図V-8の1は、突瘤文と「変形工字文」を合わせもった例で口縁に山形突起が作出される。口唇面に刻みがあり、文様帯の部分は、幅の広い無文地をなす。地文は、R L継走縄文が施文される。これに対して、図V-87の3は、器壁が厚く、文様帯のある口縁部は縄文が磨消されている。口縁は平坦で突起はない。底部は平底である。地文は、L R L複節の縄文が施文される。両者は、いずれも深鉢で胴部上半から口縁部にかけてほぼ直立する。口縁部が大きく内傾する器形のものは伴っていない。図V-8の2のような短頭壺に近い器形はこの時期においては特異なものである。

他方、上泊4遺跡H-1床面出土の土器(図VI-4: 1~13)は、次のような特徴をもっている。土器の器壁が薄いものと厚いものとがある。前者は、胴部上半から口縁部にかけて幾分内反し、口縁部に浅いくびれをもっている例が多い。その縁部に突瘤文が施文される。口縁には頂部が二股にわかれる突起を4コ貼付けられる。地文は、R L斜行縄文の他に撚糸文(12)、絡条体による条痕文(2)などが施文される。底部は、平底と丸



図VII-7 II群土器の分布

底の両者がある。後者は、2例(11・13)しか出土していないので不明瞭な点があるが、それを覆土出土の14・17などで補うと次のようになる。胴部上半から口縁にかけてほぼ直立し、口縁は平坦である。口縁に前者のように突起が作出されていないのは留意すべきことである。口縁部に施文される突瘤文は内から突いたものと外から突いた両者がある。地文は、R L斜行縄文が施文される。以上、上泊3遺跡H-1上面・上泊4遺跡H-1床面出土土器群について概略したが、両者は器壁の厚い土器(以下厚手の土器と呼ぶ)がある点ではお互い共通していることがわかる。しかし、前者には後者のような突起をもった突瘤文の例はないに対して、後者には変形工字文が施文される例がないという違いもある。この違いが何を意味するかは吟味を必要とするが、後者の地文に撚糸文あるいは絹糸条による条痕文などが見られることはさらに細分される可能性をもっているのかもしれない。

ところで、上記で述べた特徴をもっている土器群は、稚内市のメクマ遺跡にその類例をもとめることができる。報告されている資料は、突瘤文と「変形工字文」が組み合わさった例(図23の28)、突瘤文単独例(図22の29)、平行沈線文(図24の12・23)などがあるが突瘤文が施文される例はそれほど多くはない。図24の12・32は突瘤文をもつ土器とは異質である。器種は、深鉢と鉢に限られる、深鉢は、胴部上半から口縁部にかけてほぼ直立する例が多い。口縁には頂部が二股にわかれる突起をもち、口唇面には割みが設けられる。底部は、丸底が多く角がやや張り出す特徴がある。地文は、L R縱走縄文が施文される。しかし、厚手の土器が出土していないこと、また地文に撚糸文、条痕文などが施文されている例は見当らない。このような相異点を除くとⅡ群A類土器とメクマ遺跡出土の土器群はきわめて類似しているといえる。¹¹²

ところで、この両者に共通してみられる突瘤文は、古くから注目され、その系譜が西シベリアに求められていた(八幡、1936)。その系譜を述べることはさしつかえるが図VI-5の17・図V-87の3などの突瘤文が施文される厚手の土器が、口縁に突起をもった土器と識別されることを考えると、前者の土器が棒太あるいは沿海州あたりに分布しているのかもしれない。他方、後者の口縁に突起をもち、底部が丸底になる土器は、縄文晚期終末の舟形土器あるいは舟形鉢とよばれている器形を踏襲しているように考えられる。例えば、稚内市のオンコロマナイ貝塚(大場・大井 1973)出土の土器群(図40の1~3)がメクマ遺跡出土の土器群に先行するものと思われる。そして前者の土器群に突瘤文が施文される厚手の土器が影響を与えて生みだされたのが後者の土器群なのかもしれない。また、この時期には、「変形工字文」にみられるように、東北地方の初期弥生式土器の影響も見逃せない。例えば瀬野遺跡(伊東・須藤 1982)では二枚構式土器に伴って、「突き瘤文土器」(等74図5)が1例であるが出土していることは注目に値する。ただ、上泊3遺跡H-1出土の土器(図V-8)とメクマ遺跡出土の土器(図23の28)に施文されている「変形工字文」は各々異なる。前者のものは、変形工字文C型(須藤 1983a・1983b)のモデルを正確にとらえて描かれた可能性が強いものである。後者のは、胴部上半に文様帯がある特異な例でそこには変形工字文B型を簡略化したようなモチーフが二段描かれる。横円文に狭まれた刻点が、交点あるいは中点に当るのかもしれない。前者

の変形工字文C型は、山王Ⅲ層式土器の重要な文様構成をなし、後者の変形工字文B型は、波状工字文とともに二枚構式土器の基本的な文様構成のひとつであるといわれている。北海道において大洞A'式土器以降についての細分が曖昧な要素が残っているのは、変形工字文の北海道的な変異が仲々とらえられないことにある。^{註3} 今後は、東北地方の研究成果によままで、初期の弥生式土器が在地系の土器にどの程度影響を与えたのかを考える必要がありそうである。

Ⅱ群B類土器について：先に述べた突瘤文をもつ土器は道北地方だけではなく、道東地方にも分布する。その代表的な遺跡として下田ノ沢遺跡がある。この遺跡出土の第1類土器がそれに当る。この土器は、器盤が厚く胴部上半から口縁にかけて大きく内傾する特徴をもっている。口縁に突起をもつものは少ない。底部は平底が多い。地文はR L縱走縄文、L R横走縄文の他に撚糸文もある。突瘤文は、内から外へ突いたものが圧倒的に多い。この土器には、変形工字文等が施文される土器が伴っていないことは注意されるべきである。この下田ノ沢遺跡出土土器を参考しながら、Ⅱ群A類土器のあとに胴部上半から口縁にかけて大きく内傾し、変形工字文が施文されない土器群を想定した。突瘤文も、内から外へ突いたものに偏っていく傾向を示している。^{註4} 地文には、撚糸文が多く用いられる。この土器については、林欽吾が香深井式土器と命名していたものである。なお下田ノ沢遺跡出土の第1類土器には、例えば第40図の13（縦条体による条痕文）・第41図の1（厚手の土器）のように上泊4遺跡H-1床面出土の土器と類似した特徴をもつ土器が出土しているので、この土器群の取扱いについては更に検討を要するものと思われる。

最後に、Ⅱ群C類土器としたものは、上泊3遺跡廃棄場跡周辺で出土した土器を中心にして分類した。この出土土器は、口縁・頸部・肩部の分化がやや明瞭になるなどの特徴をもち、口縁に突瘤文そして縄線文が施文される、Ⅱ群B類土器からC類土器にかけての器形の変化は、南川Ⅲ式土器の影響を受けたものと思われる。南川Ⅲ式土器、これに併行する紅葉山33号式土器などには突瘤文をもつものはないようである。Ⅱ群C類土器は、3つの土器群の中では最も少ない。そして、Ⅱ群C類土器に後続する宇津内Ⅱb式土器に併行する礼文島特有の土器（突瘤文が施文される土器）は今回の調査では発見されていない。

（種市 幸生）

註1 ここでは、貫通孔をもつものも含めて呼ぶことにした。というのは貫通孔の多くは、瘤の裏面が剥落した痕跡が認められ、突瘤との判別がつけにくいためである。

註2 メクマ遺跡出土の資料は、稚内市北方記念館に陳列されているものと稚内市緑町在住の宮内敏毅氏が所蔵しているものがある。前者が昭和46年に調査した時に得た資料なのに対して、後者は土砂採取の際に採集した資料である。後者の資料には、縄文時代中期末の資料が数多く見られる。それに比して統縄文時代初頭の土器は少ない。

註3 ピラカ丘遺跡第Ⅲ地点（金森 1972）出土のI-8区・H-26区出土土器の位置づけについても今後検討を加えていく必要があろう。

註4 萩西智義によると今回調査した3つの遺跡では、宇津内Ⅱa式土器の特徴をもつ土器はきわめて少ないとのことである。

註5 東上泊遺跡出土のⅡ群B類土器は下田ノ沢遺跡出土の土器より内側から突いた例は少ないようである。

引用・参考文献

- 愛下淳ほか 1975「水川遺跡」 新冠町教育委員会
- 朝日新聞社編 1967「北洋水族館」 朝日新聞社
- 伊東信雄 1937「柳太出土の繩文土器」『文化』4-3
- 1942「柳太先史時代土器編年試論」 喜田博士追悼記念国史論集
- 伊東信雄・須藤隆 1982「瀬野遺跡」 東北考古学会
- 泉靖一・曾野秀彦 1957「オソコロマナイ」 東京大学教養部文化人類学研究室
- 石橋孝夫 1984「紅葉山33号遺跡」 石狩町教育委員会
- 市川金九・鈴木克彦ほか 1974「中の平遺跡発掘調査報告書」 青森県教育委員会
- 岩崎隆人・三室俊昭・室田彰則 1970「伊達山遺跡」 当別町教育委員会
- 岩崎卓也・前田端編 1980「北海道東部地区の遺跡研究」 筑波大学歴史・人類学系
- 岩本義雄・天間勝也・三宅徹也ほか 1979「字鉄Ⅱ遺跡発掘調査報告書」 青森県立郷土館
- 宇田川洋 1977「北海道の考古学」1・2 北海道出版企画センター
- 1979「北海道縄文時代中期の住居址」『茅沼遺跡群』 標茶町教育委員会
- 上野秀一 1982「石器」『縄文文化の研究』6 雄山閣
- 上野秀一・高橋和樹編 1975「N309」「札幌市文化財調査報告書」Ⅲ
- 上野秀一・土田ア佐子 1976「石器群について」『瀬棚南川遺跡』 濠別町教育委員会
- 1977「石器群について」『札幌市文化財調査報告書』Ⅰ VI
- 大井晴男 1965「日本の石刀石器群 "Blade Industry" について」『物質文化』5
- 大井晴男編 1982「オホーツク文化の諸問題」 学生社
- 大場利夫・菅正敏 1972「稚内・宗谷の遺跡(続)」 稚内市教育委員会
- 大場利夫・大井晴男編 1973「オソコロマナイ貝塚」 東京大学出版会
- 1976「香深井遺跡」上 東京大学出版会
- 1981「香深井遺跡」下 東京大学出版会
- 大場利夫・岡秀志 1963「羽幌町天充遺跡調査概報」「北海道の文化」北海道文化財保護協会
- 大場利夫・高野助吉 1963「羽幌町焼尻遺跡調査概報」「北海道の文化」北海道文化財保護協会
- 大場利夫・石川徹 1961「浜益遺跡」 浜益群浜益村遺跡調査報告書
- 大場利夫ほか 1955「桧山南部の遺跡」 上ノ国町教育委員会・江差町教育委員会
- 大沼忠春 1980「続縄文文化」「北海道考古学講座」 みやま書房
- 1982「道央地方の土器」『縄文文化の研究』6 雄山閣
- 大沼忠春ほか 1976「元和」 乙郡町教育委員会
- 1982「続縄文」「縄文土器大成」5 講談社
- 加藤晋平・沢四郎編 1982「続縄文」「縄文土器大成」5 講談社
- 金盛典夫 1972「ビラガ丘遺跡」第一地点発掘調査概報 - 斜里町教育委員会
- 1982「北見地方の土器」『縄文文化の研究』6 雄山閣
- 1983「尾河台地遺跡発掘調査報告書」 斜里町教育委員会
- 金盛典夫ほか 「字津内遺跡」 1973 斜里町教育委員会
- 加藤正 1960「北簡式土器文化に含む特殊な要素」「先史時代」10 先史学同好会
- 加藤邦雄ほか 1979「小砂子遺跡」 上ノ国町教育委員会
- 可見通宏 1969「住居址の発掘と土器の発表」「多摩ニュータウン遺跡調査報告」 16
- 金子浩昌 1984「貝塚の獣骨の知識」 東京美術
- 小樽水産学校勝木教諭編「漁具図説(因譜)」 北海道水産試験場
- 菊池透彦 1967「札幌市平岸天神山出土の土器について」『北海道考古学』3
- 1984「オホーツク文化の起源と周辺諸文化との関連」「北海道の研究』2

- 木村英明 1976 「続縄文文化の生産用具」『季刊どるめん』10
- 木村信六 1939 「津太石器時代の遺跡と遺物概観」『津太時報』第23号
- 久保勝範 1978 『北見市中ノ島遺跡調査報告書』 北見市教育委員会
- 兎玉作左衛門・大場利夫・武内収太 1958 「サイベ沢遺跡」市立函館博物館
- 兎玉作左衛門・大場利夫 1952 「礼文島船泊砂丘遺跡について」『北方文化研究報告』第7輯
- 小柳正夫・佐藤和利 1977 「紋別市オンネナイ第2地点遺跡」 紋別市教育委員会
- 駒井和愛編 1963 「朝日トコロ貝塚」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』上
- 佐藤弘基・鈴木邦輝・氏家敏文 1980 「名寄市文化財調査報告書」 名寄市教育委員会
- 齊藤俊ほか 1968 「嵐山遺跡」 嵐山遺跡群調査会
- 1984 「忠和2遺跡」 旭川市教育委員会
- 沢四郎ほか 1972 「厚岸町下田ノ沢遺跡」 厚岸町教育委員会
- 1977 「釧路市興津遺跡発掘報告」 釧路市埋蔵文化財センター
- 1978 「釧路市興津遺跡発掘報告」Ⅱ 釧路市埋蔵文化財センター
- 1979 「釧路市興津遺跡発掘報告」Ⅲ 釧路市埋蔵文化財センター
- 1982 「釧路地方の土器」『縄文文化の研究』6 雄山閣
- 須藤隆 1970 「青森県大畠町二牧遺跡出土の土器・石器について」『考古学雑誌』56巻2号
- 1976 「亀ヶ岡式土器の終末と東北地方における初期弥生式土器の成立」
『考古学研究』23巻2号
- 1983 a 「東北地方の初期弥生土器一山王亘層式一」『考古学雑誌』68巻3号
- 1983 b 「弥生文化の伝播と東山文化の成立」『考古学論叢』
- 芹沢長介先生生涯記念論文集刊行会編
- 鈴木公雄・林雄作 1981 「晚期」『縄文土器大成』4 講談社
- 瀬川秀良 1962 「北海道礼文島の海岸地形」『東北地理』14-2
- 1974 「礼文島」『日本地形誌 北海道地方』朝倉書店
- 岡秀志 1968 「第二編 羽幌地方の先史時代」『羽幌町史』
- 高橋和樹 1975 「豊穴住居址状造縄」『札幌市文化財調査報告書』Ⅲ
- 高橋和樹ほか 1977 「N309」『札幌市文化財調査報告書』Ⅳ
- 高橋正勝 1972 「北海道における縄文時代中期の終末」北海道青年人類科学研究会誌No9-10
1974 「日ノ浜型住居址」『北海道考古学』10
- 高橋正勝・森田知忠 1967 「サイベ沢B遺跡調査報告書」 亀田町教育委員会・市立函館博物館
- 高橋正勝・佐藤調教・野中一宏 1981 「東野幌4」 江別市教育委員会
- 高橋正勝ほか 1982 「萩ヶ岡遺跡」 江別市教育委員会
- 田中熊雄 1963 「北海道に於ける石器の研究」『官崎大学学芸部紀要』第15号
- 田原良信 1978 「見晴町B遺跡発掘調査報告書」 函館市教育委員会
- 千代庵・加藤邦雄ほか 1974 「西桔梗」 函館園開発事業団
- 千代庵・三浦孝一ほか 1981 「尾白内」 露町教育委員会
- 千代庵 1984 「続縄文文化」・「続縄文時代の生活様式」 ニュー・サイエンス社
- 豊原照司・鶴丸俊明 1979 「茅沼遺跡群」 標茶町教育委員会
- 豊原照司ほか 1980 「茅沼遺跡群」 標茶町教育委員会
- 東京大学文学部考古学研究室編 1972 「常呂」 東京大学文学部
- 西本豊弘 1978 「オホーツク文化の経済基礎について」 修士論文
1984 「北海道の縄文・続縄文文化の特徴と後流」『国立歴史民俗博物館研究報告』第4集
- 新岡武彦編 1949~'54 「利尻郷土研究」 第1~9輯
- 羽賀憲二 1974 「T77遺跡」『札幌市文化財調査報告書』Ⅲ
1974 「T310遺跡」『札幌市文化財調査報告書』Ⅳ
1980 「札幌市西区琴似二十四軒出土の土器」『北海道考古学だより』第8号

- 藤本強ほか 1977『岐阜第三遺跡』 常呂町教育委員会
- 北海道教育委員会編 1978『石狩町花畔E遺跡』
- 松田猛 1976「遺構からみた遺跡の性格」他、遺構についての文章 「元和」 乙部町教育委員会
- 松野正彦ほか 1979『礼文島神崎ウエンナイボ遺跡調査概要』「考古学雑誌」第56巻2号
- 布施正直 1983『礼文・利尻の花』 文化出版局
- 峰山嵩・大島直行ほか 1975『森越』 知内町教育委員会
- 峰山嵩・大島直行・佐藤隆広・内田祐治ほか 1977『栄浜遺跡』 乙部町教育委員会
- 村越潔 1974『円筒土器文化』 雄山閣
- 守茂和 1980『縄文時代集落址の住居の廃絶と遺物廃棄の性格』「考古学研究」107号
- 山崎博信・長谷川功 1967・1968『智東遺跡B地点』 図録編・本文編 地方資料集 第9集
1971『智東D地点』 地方資料集 第11集
- 吉崎昌一 1965「縄文文化の発展と地域性—北海道」「日本の考古学」Ⅱ 河出書房
- 四柳嘉章 1978「縄文時代漁獲活動の復元」「石川県立水産高校図書館紀要」第1号
- 矢吹俊男ほか 1982『旭町1遺跡』(朝)北海道埋蔵文化財センター
- 八幡一郎 1936「北海道の突瘤土器」考古学論叢2編
- 礼文町教育委員会編 1972『礼文町史』
- 稚内文庫編集委員会編 1981・1984『北限への招待』・『風雪に向う自然と人々』 稚内文庫

北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第19集

礼文島幌泊段丘の遺跡群

東上泊・上泊3・上泊4遺跡

—道々礼文島線特改1種工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告—

昭和60年3月30日発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒064 札幌市中央区南26条西11丁目

☎011(561)3131

印 刷 横 総 北 海 札幌支店

001 札幌市北区北30条西5丁目菊地ビル2F

この報告書は、北海道稚内土木現業所のご了解を得て増刷したもの。

